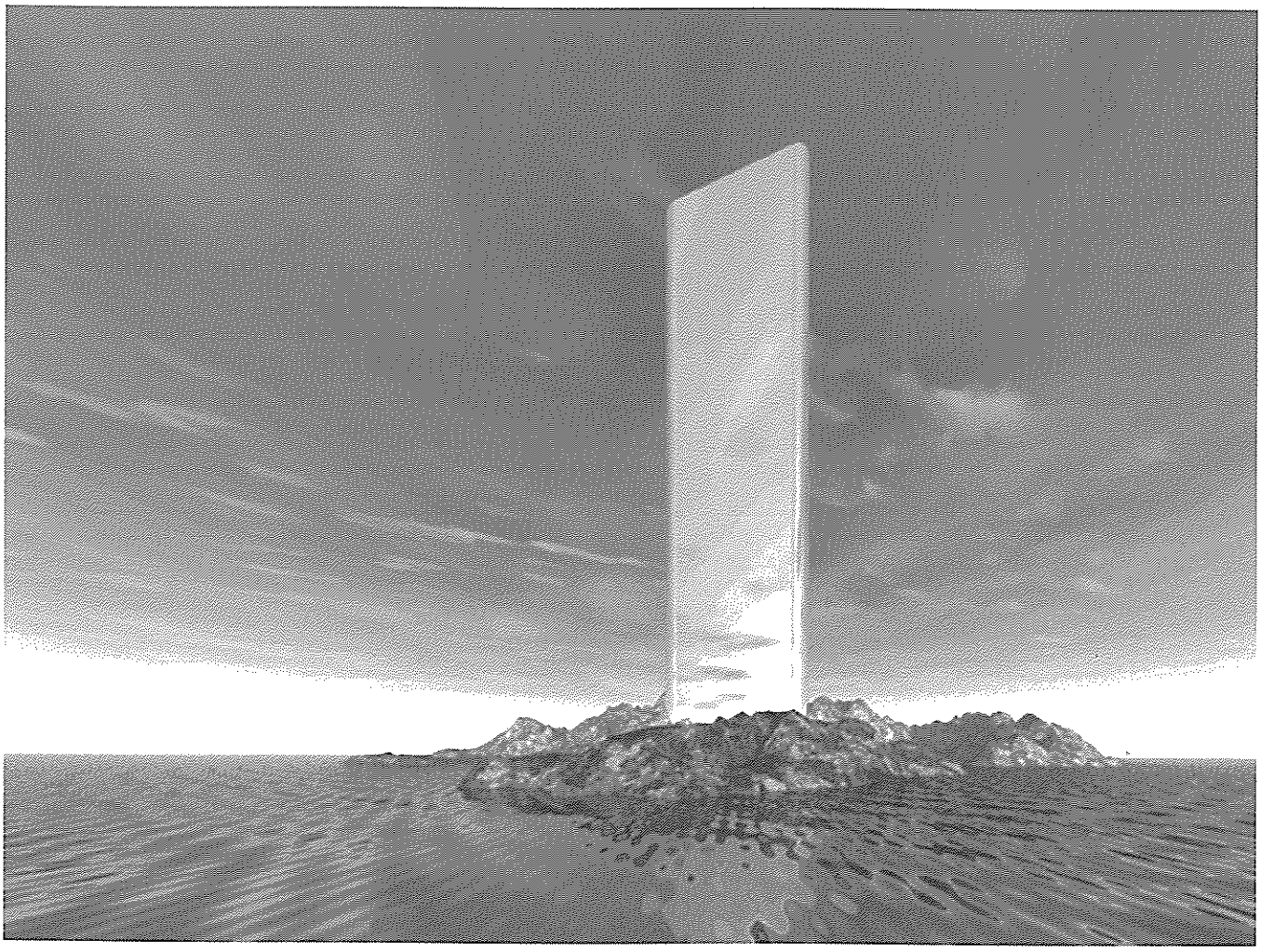
研究紀要 No.30

平成11年６月３・４日
教 育 研 究 会 要 録

豊かな人間の育成をめざす教育の創造

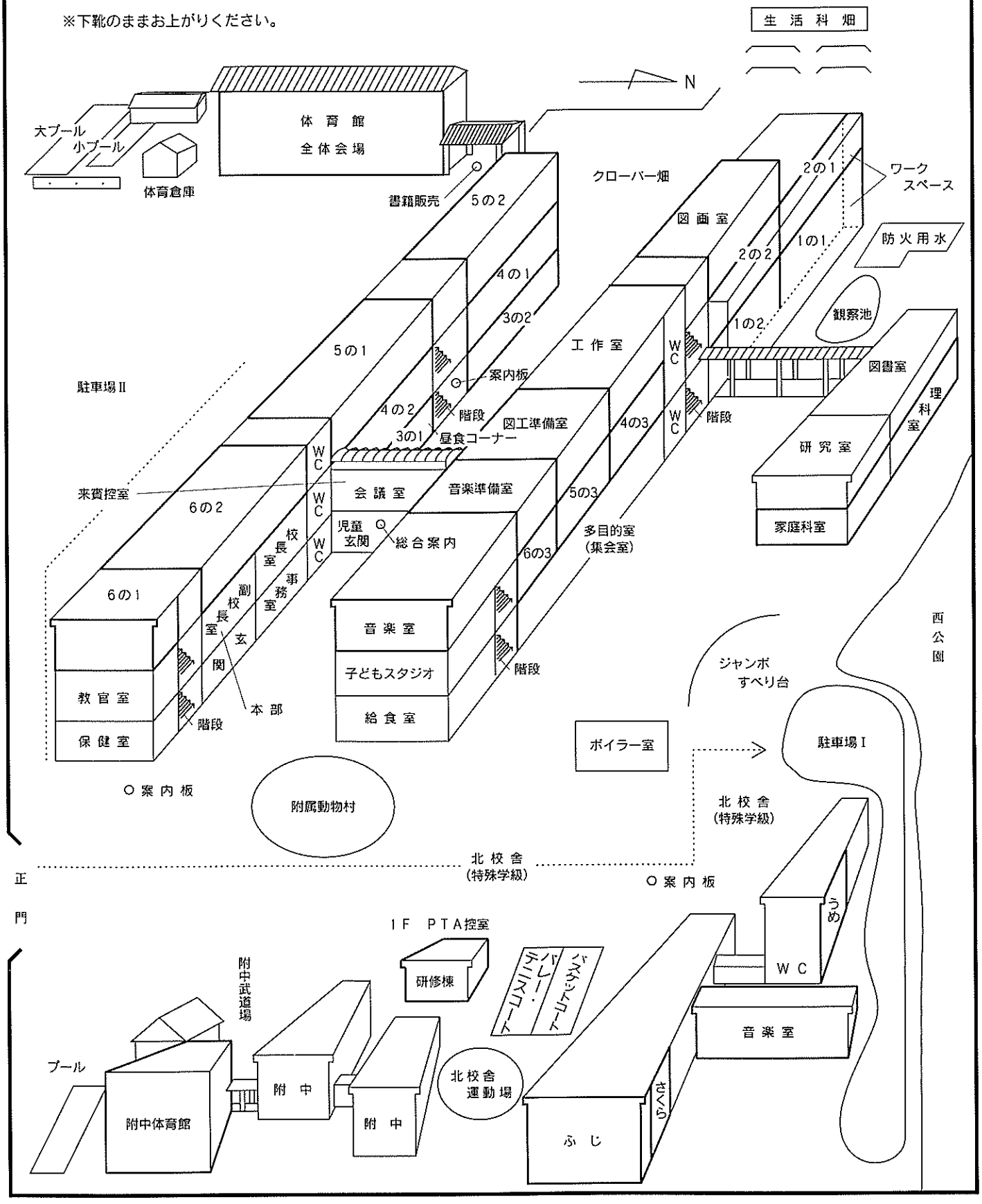
――子供と創る教科・総合的学習の展開――



福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。



ご あ い さ つ

福岡教育大学　学　長　　菰　口　治

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校の平成１１年度研究発表会の開催にあたりまして，ひとことごあいさつを申し上げます。

本年度の研究発表会は主題を「豊かな人間の育成をめざす教育の創造　－子供と創る教科・総合的学習の展開－」と設定し，その研究成果を世に問うものであります。昨年度の副主題「－活動や体験を基盤にした学習の総合化－」を発展的に継続研究してきた成果が発表されるものと期待しています。

現在，各附属学校は，その役割についても，先行研究実験校としての任務を確かに果たしていくことが何よりも大切なことの一つであると考えております。大学と連携した研究開発はますます必要であり，その成果が公立学校に還元されるものであること，それが今，最も求められているのです。

本年度の研究発表会では，公開授業・教科等の発表・総合学習フォーラム・全教科及び総合的学習についての学習指導協議会・全体講演と２日間にわたって，参会される皆様の多様なニーズにお応えできる多彩な内容となっております。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず，わが国の小学校における教育実践の発展に少しでも寄与できれば，これに優る喜びはありません。参会された皆様方のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが，ご多忙の中，ご講演をお引き受けくださいました国立教育研究所の奈須正裕先生に深く感謝申し上げます。また，司会者・指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にもお礼申し上げます。今回の研究発表会を機会に附属学校を中心に，大学と各地域の公立学校及び教育関係機関と一層連携を深めてまいりたいと願っております。関係者の皆様のより一層のご支援をお願い致しまして，ごあいさつと致します。

はじめに

現在，２１世紀を展望した教育改革が，国民的な課題として進められています。昨年末にはこれからの教育の在り方を定めた新しい学習指導要領が告示され，教育内容の厳選や「総合的な学習の時間」の創設などが盛り込まれてきました。

本校でも，これまでに平成６年度から３年間，文部省の研究開発学校の指定を受け，子供たちに「生きる喜びを生み出す」教育課程の創造をめざし，教科の再編，内容の改定を試みて参りました。

この結果，低学年に「表現科」，中学年に「生活環境科」，全学年に領域「人間」を設定して本校独自の教育課程の編成を行い，２１世紀の社会をよりよく生きる自立した子供を育てるべく実践に取り組んで参りました。この成果については，著書「２１世紀の教科・領域への挑戦『新時代の授業を創る』」（明治図書刊）として，現在発刊しているところです。

昨年度はこれらの研究をもとに，人間教育の在り方に目を向け，「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」という主題を掲げて研究に取り組んでまいりました。

本年度はさらにこの研究を発展すべく，副主題を「子供と創る教科・総合的学習の展開」と題し，知識や技能のよりよい使い方としての知恵と，人間としての心情を併せて培う学習の展開を全ての学習の基盤と考えて研究を進めて参りました。特に，総合的な学習の時間を本校では「あらつ学習」として設定し，子供の生活から学習対象を選定し，新課題に対応しながら学習内容を子供自らの主体的な学びによって創造するものとしてきました。「学校とは生き方を創り，夢を育てる場所である！」というスローガンのもと，研究発表会を開催いたします。

また，各教科ごとの著書「学習創造」シリーズも２年目に入り，本年度は，理科，図画工作科，音楽科の３冊を発刊することになりました。

まだ研究は緒に就いたばかりで，皆さまのご批判・ご教示を賜りながら，さらに推進されていかなければなりません。

この研究発表がより多くの方々のご指導・ご支援のもとに展開できていることを深く感謝申し上げますとともに，今後も各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成１１年６月

校長　　藏　源一郎

目　　次

ごあいさつ ---------- 1

はじめに ---------- 2

目　　次 ---------- 3

日程と内容（第１日目） ---------- 4

日程と内容（第２日目） ---------- 6

本校研究のあゆみ ---------- 8

公開授業及び全体会の部

第１日目

学習指導案（午前） ---------- 9

全体会 ---------- 32

学習指導案（午後） ---------- 35

総合フォーラム ---------- 52

第２日目

学習指導案（午前） ---------- 53

保健部実践提案協議会 ---------- 78

学習指導協議会 ---------- 79

全体会 ---------- 80

学習指導案（午後） ---------- 83

総合的学習全体協議会 ---------- 100

全体講演 ---------- 101

研究紀要の部

研究紀要目次 ---------- 104

研究紀要 ---------- 106

おわりに ---------- 184

日程と内容（第１日目）

◇学　習　指　導（9：30～10：15）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
1の2	国　語	がっこうのたのしさ　おしえるよ	松藤秀子	1の2
2の1	体　育	みんなで楽しもう！2の1リズム遊び	稲津一徳	附中体育館
2の2	表　現	みんなでうたおうおどろう「すずめのカーニバル」	津本修一	音楽室
3の2·3	理　科	植物のひみつを調べよう	山下浩徳	クローバー園
4の2	あらつ学習(総合)	おとなりの国　韓国しらべ隊！	高野誠一	3の2
5の1	算　数	単位量あたりの大きさで比べよう	加藤英也	4の1
5の2·3	国　語	使用済みカードや切手を集めるお願いの文書を作ろう	伊藤啓二	5の2
6の1	社　会	遣唐使の幕をひいた菅原道真と日本風の文化	猿楽隆司	6の1
6の2·3	理　科	火を使い生活する私たち	野口信介	理科室

障害児教育

さくら	生　単	スーパーマーケットでかいものをしておこのみやきパーティーをしよう	谷崎和一郎	さくら
うめ	音　楽	たんじょうパーティーにいこう	坂田佳美	北校舎音楽室

◇あ　い　さ　つ（10：30～10：45）　　学　長　菰口　治

学　校　長　藏　源一郎

◇主　題　発　表（10：45～11：10）

● 豊かな人間の育成をめざす教育の創造

―子供と創る教科・総合的学習の展開―　　研究主任　樺島　穣

◇教科等発表（11：10～11：50）

● 国　語　科

心を働かせたことばを生み出す国語科学習

―物語の世界と豊かにかかわる読書活動の構想―　　国語科部　吉田正樹

● 体　育　科

自らの健康をつくりだす体育科学習

―運動への自信が高まる学習の構想―　　体育科部　稲津一徳

◇学　習　指　導（13：00～13：45）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
1の1	体　育	どうぶつらんどでじゃんぷ！じゃんぷ！じゃんぷ！	笠　宏照	附中体育館
3の1	算　数	時間を大切に使う工夫をしよう（時刻と時間）	小　森　晃	3の2
4の1	国　語	韓国と日本の昔話研究をしよう	吉田正樹	4の1
4の2	音　楽	全校のみんなに伝える音楽をつくろう	豊村雅義	音楽室
6の1	理　科	食べ物の行方を探ろう	手島宏樹	理科室
6の2	あらつ学習(総合)	希望と誇りⅡ　～ようこそ先輩！開こう未来への扉を～	石田耕一	子供スタジオ
帰国合同	国際交流タイム	世界のお茶パーティーを開こう	篠原裕子	6の1

障害児教育

ふじ・さくら・うめ	合同生活単元	ろうじんほけんセンターのひとにうたやげきをみせよう	舛元　俊文、坂田　佳美 早川　由洋、谷崎和一郎	北校舎音楽室

◇あらつ学習（総合）児童発表（14：00～14：20）

●合　唱　「希望と誇り」　6年児童　　指導者　津本修一

ビオラ奏者　平野真敏氏（本校OB）の賛助伴奏
（クロアチア大統領が選ぶ12人の音楽家として国際舞台で活躍中）

◇教育フォーラム（14：30～16：30）

●テ　ー　マ　「実践紹介！特色ある総合的学習をどうつくるか！」

コメンテーター　福岡教育大学　教　授　寺尾慎一

●本校実践紹介

―自校の伝統を実感する活動を通して、自分の希望や夢を描き出す実践例―

提案者　石田耕一

●愛媛大学附属小学校実践紹介

―地球規模で「自分（たち）の生き方」を問い続ける環境学習の実践例―

提案者　田頭良博

●熊本大学附属小学校実践紹介

―国際理解「トラベルバディ」の実践例―　　提案者　前田康裕

コーディネーター　教　頭　山下浩徳

◇あ い さ つ　　副校長　倉吉志米男

日程と内容（第２日目）

◇学　習　指　導（9：15～10：00）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
1の2	生　活	あらつのかがやくおじいちゃん・おばあちゃん	石田耕一	1の2ワークスペース
2の1	国　語	おにをさがしてブックトーク！	吉田正樹	3の2
2の2	算　数	まとあてをしてきろくしよう（きろくとせいり）	加藤英也	2の2ワークスペース
3の1	人　間	体の不自由な方とふれ合おう	矢野俊次	4の2
3の2	社　会	楽しい買い物～天神のまち～	高野誠一	4の1
4の1･3	音　楽	日本のふしと韓国のふし	豊村雅義	音楽室
4の2	理　科	自然災害にそなえる私達の知恵～流れる水の働き～	野口信介	理科室
5の1	体　育	自分や自然に挑戦しよう！西公園クロスカントリー	稲津一徳	西公園
5の2･3	家　庭	心の「居間」にリフォームしよう	篠原裕子	5の2
6の1	図画工作	ベニヤドリーム！～卒業製作展に向けて～	樺島穣	工作室

障害児教育

ふじ	算　数	ふじぐみくるまランドであそぼう	坂田佳美	北校舎音楽室
うめ	国　語	ミニタウンへおつかいにいこう	早川由洋	北校舎運動場

◇保健部実践提案協議会（9：40～11：00）

●シンポジウム　「子供の心の健康を考える」

提案者	司会者	指導助言者	会場
志免町立志免南小学校　井上しのぶ 附属福岡中学校　原田美智子 本校保健部　今村由香	福岡市立野多目小学校 白石由美子	福岡教育大学　教授　照屋博行 福岡県立看護専門学校　講師　筑紫咲子	6の2

◇学習指導協議会（10：10～11：00）

会場	教科等	司会者	指導助言者	
3の2	国　語	太宰府市立水城小学校 教頭　古川千年	福岡市立壱岐東小学校 校長　久門隆	福岡教育大学 教授　前田真証
4の1	社　会	福岡教育事務所 指導主事　芋生修一	福岡教育事務所 主任指導主事　家宇治正幸	福岡教育大学 助教授　小川亜弥子
2の2	算　数	太宰府市教育委員会 指導主事　山下英俊	春日市立春日野小学校 校長　吉富修	福岡教育大学 助教授　飯田慎司 講師　清水紀宏
理科室	理　科	福岡教育事務所 指導主事　安永純二	福岡市立飯倉小学校 校長　谷友雄	福岡教育大学 助教授　田中浩朗
1の1	生　活	福岡教育事務所 指導主事　後藤正弘	志免町立志免南小学校 校長　平石信敏	瀬高町立南小学校 校長　堤直樹
音楽室	音　楽	小郡市立のぞみが丘小学校 教頭　大橋鉄雄	須恵町立須恵第二小学校 校長　高橋秀喜	福岡教育大学 教授　岩崎洋一
附中体育館	体　育	福岡市立三苫小学校 教頭　三原英喜	大野城市立大野北小学校 校長　大橋直徳	福岡教育大学 教授　相部保美
図画室	図画工作	大牟田市立笹原小学校 教諭　古賀正広	黒木町立黒木小学校 校長　栗原宏徳	福岡教育大学 教授　吉井宏
5の2	家　庭	福岡市立東花畑小学校 教頭　藤永福子	福岡市立愛宕浜小学校 校長　田中光子	福岡教育大学 助教授　甲斐純子
4の2	人　間	福岡教育事務所 指導主事　植松伸之	柳川市立昭代第一小学校 校長　松石正夫	福岡教育大学 助教授　堺正之
さくら組	障害児教育	粕木町立志波小学校 教頭　江藤肇	福岡市教育センター教育相談室 室長　中村順一	福岡教育大学 教授　山下勲

◇あ　い　さ　つ（11：10～11：20）

初等教育研究部委員長　井上正明

学校長　藏　源一郎

◇主　題　発　表（11：20～11：40）

● 豊かな人間の育成をめざす教育の創造

—子供と創る教科・総合的学習の展開—　　研究副主任　伊　藤　啓　二

◇教科等発表（11：40～12：30）

● 算　　数　　科

自ら数理を生活に活用していく算数科学習

—算数的活動を活性化する学習の構想—　　算数科部　小　森　　晃

● 障害児教育全体（文部省特殊教育　教育課程研究指定）

豊かな生活をめざす教育課程の編成

—主体的な活動を支援する個別の指導計画—　　障害児教育研究部　舛　元　俊　文

◇学　習　指　導（13：00～13：45）

学年組	教科領域等	単元・題材・主題名	授業者	会場
1の1	国　語	心の「どっきん」をことばでつたえよう	伊藤啓二	1の1
3の1	国　語	博多のあそびをつたえよう	松藤秀子	3の2
3の2·3	あらつ学習(総合)	西公園こだわりしらべ隊！	手島宏樹	子供スタジオ
5の1	あらつ学習(総合)	未来に残そう！きらめく博多湾	猿楽隆司	体育館
5の2	算　数	時間を大切に使う工夫をしよう（平均）	小森　晃	5の2
6の2·3	音　楽	音楽めぐりの旅「ぼくのわたしのモーツァルト」	津本修一	音楽室6の1·2

通常の学級と障害児学級の体育科交流授業

4の1·3 さくら	体　育	シュートゲームをしよう	笠　宏照 舛元俊文	運動場

◇あらつ学習（総合）児童発表（14：30～14：45）

● 「カブト虫牧場をつくろう」　４年児童　　指導者　野口信介

◇総合的学習全体協議会（14：50～15：30）

● テ　ー　マ　「生き方を創るあらつ学習！」

—公開授業をもとに具体的支援のあり方を考える—　　提案者　猿楽隆司
手島宏樹
高野誠一
石田耕一

司会者　樺島　穣

◇全　体　講　演（15：30～16：30）

演題「子供と創る教科・総合的学習の展開」

講師　国立教育研究所　主任研究官　奈須正裕　先生

◇あ　い　さ　つ　　副校長　倉吉志米男

本校研究のあゆみ

年度	
23	○学習効果判定の理論と実際
24	○カリキュラムの構成と実際
26	○学習深化の指導
27	○学習深化の指導
28	○学習深化をめざす指導
29	○学習指導における諸問題の再検討
30	○学習指導における新課題の再検討
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明
32	○組織化をめざす学習指導法の究明
33	○組織化をめざす学習指導法の究明
34	○学習指導の系統化
35	○改訂指導要領による学習指導上の諸問題
36	○考える子どもを育てる指導法の究明
37	○考える力をのばす学習指導法の考察 －考えさせるために経験をどのように位置づけるか－
38	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －考える力を伸ばす学習過程の構造化－
39	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －学習過程における「くらべ活動」の検討とその指導－
40	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －学習の「かまえ」を育てる指導法の究明－
41	○考える力を伸ばす学習指導法の考察 －考える力を伸ばす学習過程の評価－ 「授業における思考訓練」（明治図書）
42	○教材の本質に立脚した学習指導法の考察 －教材の価値と指導内容の検討－ 「思考を伸ばす学習過程の評価」（明治図書）
44	○現代化をめざす指導法の究明 －教材の現代的価値と児童の実態と反応にもとづく指導内容の検討－
45	○現代化をめざす指導法の究明 －基本的内容にせまらせる学習の開発－
46	○現代化をめざす指導法の究明 －ひとりひとりを生かす合理的な学習指導のしくみ－
47	○現代化をめざす指導法の究明 －学習の連帯化をはかる指導のしくみ－
48	○現代化をめざす指導法の究明 －連帯性を育てる学習指導のしくみ－
49	○現代化をめざす指導法の究明 －連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる学習指導のしくみ－ 「学習を連帯化する指導法」（明治図書）
50	○現代化をめざす指導法の究明 －学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ－
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 －操作を通した学習の構造化－
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 －操作を通した学習指導の展開－
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 －交流でよりよい操作を身につける学習指導－ 「自由活動の時間」（秀巧社）
54	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 －教材の価値にせまらせる操作学習の評価－
55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 －見直し活動を生かした操作学習の深化－
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －自己を見直し、考えを深める指導のしくみ－
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －自ら見直し活動に取り組み、自己を深める指導のしくみ－ 「学ぶ喜びを生みだす指導」（北大路書房）
58	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －個が生きる課題づくり－
59	○自己実現の喜びを生みだす学習内容の検討 －学習実態の多様性に即応する学習指導－
60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －子どもの個性が生きる指導－
61	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす指導法の開発－ （明治図書）
62	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす学習過程－
63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす授業の改造－ 「『学習の個性化』をめざす授業の開発」 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 （明治図書）
平成元年	○個が生きる授業の創造 －自己理解の学習過程－
2	○個が生きる授業の創造 －考えを確かにする活動構成－
3	○個が生きる授業の創造 －考えを深める自己吟味活動を通して－ 「個が生きる授業の創造」（北大路書房）
4	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －思い・願いをもって問い続ける活動づくり－
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開－
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －自分のよさを実感する表現活動の展開－
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －新しい教育課程における教科領域の学習の具体化－
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －子供主体の活動からみる教育課程の編成－
9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －子供主体の活動からみる教育課程の編成－ 21世紀の教科・領域への挑戦「新時代の授業をつくる」 （明治図書）
10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 －活動や体験を基盤にした学習の総合化－
11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 －子供と創る教科・総合的学習の展開－

公開授業及び全体会の部

第１日目　午前の部

公開授業指導案

第１学年２組　国語科学習指導案

指導者　　松　藤　秀　子

単　　元　　がっこうのたのしさ　おしえるよ

指　導　観

○　本単元は，学校生活で楽しかったことやできるようになったことを幼稚園の先生や祖父母にビデオレターをつくって知らせることをねらいとしている。子供たちが学校生活で体験したことや抱いている思いを音声言語で表現していく本単元には，①小学校に入学して体験したことを幼稚園の先生や祖父母に知らせたいという目的をもち，相手に応じて話す事柄を決めること，②楽しかったことや初めてできるようになったことを進んで話したり，友達の話を興味をもって聞いたりすること，③体験したことを相手に分かりやすく伝えるために，語と語や文と文をつないで簡単な話をすること，などの内容がある。これらは，言語生活のなかで生きて働く実践的な表現力を育てたり，学校生活の楽しさや自分自身の成長に気づき，充実した学校生活を送ったりする上からも価値がある。

○　本学級の子供たちは，自分のことを先生や友達に知らせたいという意欲をもち，自分が体験したことや家庭での生活について１，２文で話すことができるようになってきている。また，話し手の方を見ながら聞くことができるようになってきている。しかし，相手を意識し，相手に応じて話題を選択したり，相手に様子が詳しく伝わるようにことばや文をつけ加えて話したりすることはできていない。また，話を最後まで注意して聞き取り，分からないことを聞き返すことはできていない。そこで，本単元では，学校生活で楽しかったことやできるようになったことを伝えるビデオレターづくりを通して，相手に学校生活の様子が詳しく伝わるようにことばや文をつないで話したり，友達の話を興味をもって聞いて質問したりすることができるようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，幼稚園の先生や祖父母に学校生活の楽しさが伝わるように文と文をつないで詳しく話すことができるようにしたい。そこで，つかむ段階では，幼稚園での生活と学校生活を比較し，学校生活で体験した楽しさやできるようになったことについて話し合う。そして，自分が知らせたい相手や相手に応じて話す事柄を決め，ビデオレターをつくる計画を立てる。つくる段階では，たのしかったカードや写真をもとに学校生活で体験したことを想起させ，楽しかったことやできるようになったことを伝える試しのビデオレターをつくる。そして，ビデオレターを送る相手や家の人からのアドバイスをもとに，自分に必要な観点を選んび文と文をつないで話の内容を詳しくすることができるようにする。生かす段階では，ビデオレターを友達に紹介したり，送った相手からの返事を読んだりして，ことばを通して伝える楽しさを味わうことができるようにする。

目　　標

１．学校生活で体験したことの中から伝えたい相手に応じて話題を決め，相手に分かりやすく伝えるために文と文をつないで話の内容を詳しくしたり，発音に注意したりして話すことができる。

２．学校生活のことを知らせたいという意欲をもち，楽しかったことやできるようになったことなどを進んで話したり，友達の話の内容を興味をもって聞いたりすることができる。

計　　画（約８時間）

階	つかむ段階（２時間）	つくる段階（４時間）	生かす段階（２時間＋課外）
活動と内容	１．学校生活について話し合い，誰にどんなことをビデオレターで伝えるか計画を立てる。 ○　進んで話したり，友達の話の内容を聞き取ったりすること ○　送る相手や話す事柄を決めること	２．学校生活の楽しさを知らせるビデオレターをつくる。 (1) 話す内容を決め，試しのビデオレターをつくる。　② ○　話題を決め，発音に注意して話すこと (2) 学校生活の様子が詳しく伝わるようにをつくりかえる。　②（本時１／２） ○　観点をもって話をつけ加えること ○　話の区切りや発音に注意して話すこと	３．ビデオレターの発表会を行い，知らせたい相手に送る。 (1) 自分のビデオレターを学級の友達に紹介する。　② ○　話の内容を聞き取ること (2) ビデオレターを送り，返事を読む。　（課外） ○　話したいことを伝えることができた喜びを味わうこと
手だて	※　学校生活の様子を写した写真やビデオ ※　ビデオレターの紹介	※　話題づくりのための楽しかったカード ※　家の人からのアドバイスカード ※　話す観点を増やすおしえてねカード	※　聞き取りカード ※　ビデオレターをもらった喜びを伝える返事の提示

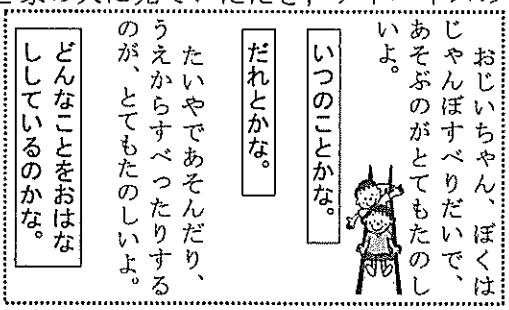
本時の目標

○　学校生活で楽しいことやできるようになったことが相手によく伝わるように，観点（いつ，どこで，誰と，したことや話したこと）を選んで話の内容をつけ加え，詳しく話すことができる。

準　　備　ビデオレターの返事，家の人からのアドバイス，おしえてねカード，写真

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時につくった試しのビデオレターを見て，相手に学校生活のことがよく伝わっているか話し合う。 ○　相手の意識化とビデオレターづくりへの意欲の高まり めあて たのしいこと，できるようになったこと，みつけたものがもっと　くわしく　つたわるように　おはなしを　ふやそう。 ○　話の内容を詳しくする観点の把握 ※　子供が作成したビデオレターに対しての返事を視聴させ，話の内容を詳しくする観点（いつ，どこで，誰と，したことや話したこと）をつかむことができるようにする。 2．伝える内容を詳しくして，話す練習をする。 (1) 試しのビデオレターを振り返り，自分のビデオレターに足りない観点を選び，学校生活について書き加える。 ○　自分のビデオレターに必要な観点を見つけること ○　尋ねられていることに対して，ことばとことばをつないで書き加えること ※　試しのビデオレターを家の人に見ていただき，アドバイスの手紙をもらっておく。 ※　一人一人が話している内容を記述した学習ノートを準備し、話す観点を示した「おしえてねカード」を自分で選択し，学習ノートに貼り，つけ加えて話すことを書かせる。 (2) 学校生活のことが詳しく分かるように，つけ加えて話す。 ○　いつ，どこで，誰と，どんなことをしたり話したりしたのか，文と文をつないで話すこと ○　相手に分かるようにはっきりとした声で話すこと ※　ビデオレターを送る相手の写真を見て話したり，二人組で話したりして練習し，発音や話し方などを注意し合うようにする。 3．作り直したビデオレターを発表し，学校生活の楽しさやできるようになったことが詳しく伝わるようになったか話し合う。 ○　友達のビデオレターの話を聞き取り，詳しくなったところを見つけること ※　試しのビデオレターと比べることができるように，板書で試しのビデオレターの文章を提示する。	〈試しのビデオレター〉 おじいちゃん，小学校であさがおを育てているよ。 はっぱがでてきたから，うれしいよ。毎日，お水をかけているよ。 ○　わたしが誰と遊んでいるか話しているから，幼稚園の先生は，小学校の友達のことがよく分かるんだな。 ○　昼休みにサッカーをしていると話しているから，おじいちゃんはいつ遊んでいるのか分かるんだ。 ○　わたしのビデオレターももっと詳しくするところがあるかもしれないな。おじいちゃんは，どんなことを知りたいのかな。 ○　おじいちゃんに学校のことがよく分かるように，おしえてねカードを選んで，話すことを書こう。そして，もっと　詳しく話そう。 ○　前に作ったビデオレターよりも詳しくお話することができたな。 〈見直し後のビデオレター〉 おじいちゃん，小学校であさがおを育てているよ。１年２組の友達みんなと石田先生といっしょに種を植えたよ。 はっぱがでてきたから，とてもうれしいよ。朝，学校に来たら「おはよう。」と話しているよ。そして，お水をかけているんだよ。いっぱいかけているよ。だんだん大きくなってきたから，花が咲くのが楽しみだよ。



第２学年１組　体育科学習指導案

指導者　　稲　津　一　徳

単　　元　みんなで楽しもう！２の１リズム遊び

指　導　観

○　本単元は，軽快なリズムの音楽に乗って，全身で弾む動きを中心に，自分なりの動きをつくったり，友達と動きをまねし合ったりして，各種運動の基礎となるよりよい動きを高めると共に，仲間との心のつながりを広げることをねらいとしている。具体的には，①リズムに合わせて走ったり，回ったり，スキップしたりなど簡単な動きを広げながら，楽しく踊ることができること，②グループ内で，互いの動きをまねして踊ったり，自分の動きを付加したりしながら，仲間と支え合う喜びや仲間から認められる喜びを広げることができること，この２つが本単元で学習できる内容である。

○　本学級の子供たちは，体育の時間を中心に，身近な仲間と仲良く運動やその他の活動に取り組んできている。特に運動については，意欲的にかかわる子供が多く，動きについても徐々に広がってきている。しかし，仲間の動きの良さに気づいたり，仲間の動きを取り入れて，自己の動きを広げたりするような姿，さらに，自他の動きのよさを認め合うような姿は十分とはいえない。そこで，仲間に対する関心が高まり，仲間とのつながりが広がり始めるこの期に，本単元を設定し，仲間と動きを広げながら，仲間との支え合いや認め合いを実感していくことは意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，軽快なリズムの音楽に合わせて，仲間の動きをまねしたり，仲間の動きに自分の動きを付加したりしながら，弾む動きを多様に広げると共に，仲間との心のつながりを広げていきたい。そのために，見つめる段階では，多様な弾む動きや仲間を意識できるメロディーや歌詞をもった軽快なリズムの音楽を準備し，楽しくリズム遊びを体験させる。うみだす段階では，３～４人のグループで，用具を取り入れ，仲間の動きをまねして踊ったり，仲間の動きに自分の動きを組み合わせて踊ったりして，リズムに合わせた弾む動きと仲間との支え合いや認め合いを広げさせていく。あじわう段階では，２の１リズム遊び発表会を行い，グループの仲間とつくりあげたリズム遊びを交流するなかで，動きの高まりと仲間との支え合いや認め合いを実感させていく。

目　　標

１．軽快なリズムの音楽に合わせて，走ったり，回ったり，スキップしたりなどの弾む動きを中心とした簡単な動きを広げ，楽しく踊ることができる。

２．グループ内で，仲間の動きをまねしたり，自分の動きを付加したりしながら，リズム遊びをつくることを通して，仲間との支え合いや認め合いを広げることができる。

計　　画　（約８時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>見つめる（２時間）</th><th colspan="2">うみだす（５時間）</th><th>あじわう（１時間）</th></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>１．リズム遊びを体験し，軽快なリズムの音楽に合わせ，弾む動きを中心に，簡単な動きで踊る。②
○　軽快なリズムに合わせた多様な弾む動きづくり</td><td colspan="2">２．より楽しくなるように，活動を工夫しながら，動きや仲間との心のつながりを広げる。</td><td rowspan="2">３．２の１リズム遊びの発表会を行い，楽しく踊る。
○　動きの拡大の実感
○　支え合い・認め合いの拡大の実感</td></tr>
<tr><td></td><td>(1) 用具を使い，簡単な弾む動きを広げて踊る。②
○　用具を使った多様な動きづくり</td><td>(2) 弾む動きを模倣，付加して踊る。③（本時２／３）
○　動きと支え合い認め合いの拡大</td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　軽快なリズム音楽の準備
※　動きの財産カード</td><td colspan="2">※　用具を使った踊りづくりの場の設定
※　グループで踊りの動きを模倣・付加する活動の設定</td><td>※　発表会の設定
※　踊りの相互評価の場の設定</td></tr>
</table>

本時の目標

(1) 姿勢，方向，人数をグループで工夫しながら，軽快なリズムに合った弾む動きを広げることができる。

(2) グループ内で，動きをまねして踊ったり，仲間の動きに自分の動きを付加して踊ったりしながら踊りを見合い，仲間との支え合いや認め合いを実感することができる。

準　　備　リズム遊び用音楽，用具，リズム遊びカード，動きの財産カードなど

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習について想起し，本時のめあてについて話し合う。 ○ 前時のグループでのリズム遊びづくりを想起すること ○ 本時課題を把握すること ※ 姿勢，方向，人数などを工夫して，弾む動きを多様に表しているグループのリズム遊びを提示し，めあてをつかませる。 めあて はずむときのしせい，ほうこう，人ずうをグループでくふうして，たのしくリズムあそびをつくろう。	○ 前の時間は，B君のリズム遊びを踊って，楽しかったな。 ○ 今日もまた，いろいろな弾む動きを使って，リズム遊びをつくろう。 ○ Dグループのリズム遊びは，低い姿勢から高く弾んでいるんだな。
2．これまでつくった弾む動きを，グループでさらに広げながら，楽しく踊る。 (1) グループで，踊りと交流を繰り返し，弾む動きを広げる。 ○ 弾む動きの拡大　○ 仲間との支え合い・認め合いの拡大 つくる・踊る：・仲間の弾む動きをまねしたり，自分の動きを付加したりして踊る。 交流：(姿勢) ・低い姿勢から高く弾む (方向) ・前後左右に弾む ・上下に大きく弾む (人数) ・3人でそろえて弾む ※ 動きの財産カードをもとに，つくり上げてきた弾む動きを出し合わせ，姿勢，方向，人数を工夫する視点として，リズム遊びをつくらせる。 (2) ミニ発表会を行い，兄弟グループで，つくったリズム遊びについて相互評価する。 ○ 弾む動きや仲間との支え合い・認め合いの相互評価 ※ リズム遊びカードをもとに，姿勢，方向，人数を視点として，つくったリズム遊びのよさを相互評価させる。	○ ぼくたちも，姿勢や方向などに気をつけて，リズム遊びをつくってみよう。 ○ Fさんの弾む動きは前、後ろに弾んでおもしろいな。みんなでまねしてみよう。 ○ もっと，いろんな方向に弾むとおもしろくなりそうだな。 ○ ずいぶん楽しくなったぞ。 ○ 兄弟グループにも，いろんな方向に弾む動きがよかったと言われて嬉しいな。 ○ Fさんの動きでリズム遊びをつくってよかったな。
3．本時学習について話し合い，まとめる。 ○ 弾む動きや仲間との支え合い・認め合いの広がりを実感すること ※ 兄弟グループの評価をもとに，動きの広がりを振り返らせ，仲間と共にリズム遊びをつくることのよさについて出し合わせる。	○ みんなで動きの工夫を出し合ってとても楽しかったな。発表会に向けて頑張るぞ。

第２学年２組　表現科学習指導案

指導者　　津　本　修　一

題　　材　　みんなでうたおう・おどろう「すずめのカーニバル」

指　導　観

○　本題材は，「すずめのカーニバル」のストーリー，挿入歌，ダンスミュージックなどを通して感じ取ったことをもとに，お面や衣装などをつくって，歌ったり，身体表現したりして体全体で楽しく表現することをねらいとしている。具体的な活動内容としては，①簡単なせりふやカーニバルのプログラムをつくること，②すずめのお面や衣装などをつくること，③「すずめのカーニバル」の挿入歌を楽しく歌ったり，ダンスミュージックのリズムや旋律の特徴を感じ取って動きや踊りなどを工夫して表現すること，④友達のつくった衣装や身体表現をいっしょに楽しむことなどである。これらの活動は，子供の造形感覚，音楽的感覚などといった感覚を伸ばすとともに，多様な方法で体全体を使って伸び伸びと自己表現する喜びを味わわせるうえで大きな価値があると考える。

○　本学級の子供たちは，これまで経験したことや感じたことを，文章表現や音楽的表現，造形的表現，身体的表現など様々な方法を用いて表現する経験をしてきている。特に，第１学年題材「どうぶつえんのショータイム」では，登場物になりきるために，せりふや動きを工夫したり，お面や衣装をつくったりと創造的な自己表現の楽しさを味わってきている。そのなかで，子供たちは，表現活動そのものの楽しさや自分の思いを表現できた成就感，満足感を味わい，表現活動への意欲・関心を高めつつある。また，子供たちは，すずめなどの小動物が好きであり，その姿や動きのかわいらしさに愛着をもっており，なりきり表現の対象として価値があると考える。

○　本題材の指導にあたっては，感じとる段階では，「すずめのカーニバル」の朝，昼，夜といった３場面の情景を表したストーリーや挿入歌を提示することにより，カーニバルへの意欲を喚起するとともに，カーニバルのプログラムづくりをさせる。あらわす段階Ⅰでは，すずめになりきるために，色画用紙，布，毛糸，カラーポリ袋などの材料をもとにお面や衣装などの飾りをつくって表現させる。ここでは，すずめのＶＴＲの映像，図鑑，写真などの視聴覚資料も活用し，その姿や動きなどの特徴に関心をもたせるようにしたい。あらわす段階Ⅱでは，カーニバルの場面の展開にしたがって挿入歌やダンスミュージック（教師自作）を提示し，簡単なせりふ，動きや踊りの様子を想像しながら体全体で表現させていきたい。最後のあじわう段階では，「２の２－すずめのカーニバル」の発表とＶＴＲ録画鑑賞会を行い，表現活動の達成感，成就感を味わわせるようにしたい。

目　　標

○　「すずめのカーニバル」のストーリー，挿入歌，ダンスミュージックなどから感じ取ったことを色，形，せりふ，歌，動き，踊りなどで楽しく表現することができる。

計　　画（約６時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>感じとる（1時間）</th><th colspan="2">あらわす（約４時間）</th><th>あじわう（1時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">活動と内容</td><td>１．「すずめのカーニバル」の様子を楽しく想像する。
○　ストーリーの朗読と挿入歌の歌唱
○　「カーニバル」のプログラムづくり</td><td colspan="2">２．「すずめのカーニバル」の様子を様々な方法で楽しく表現する。（本時４／４）</td><td rowspan="2">３．「２の２－すずめのカーニバル」と題して発表会を行う。
○　「すずめのカーニバル」の表現の発表
○　ＶＴＲ録画による相互鑑賞活動</td></tr>
<tr><td></td><td>【造形的表現＋音楽的表現・身体的表現】
○　すずめのＶＴＲの視聴
○　すずめのお面や衣装づくり</td><td>○　ダンスミュージックの鑑賞と身体表現
○　ストーリーの展開に応じた総合的表現</td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　「カーニバル」のストーリーと挿入歌の作成と提示</td><td>※　すずめのＶＴＲ／図鑑／造形材料の提供と個人的な技能支援</td><td>※　ダンスミュージックの作曲とストーリーの展開に応じた提示</td><td>※　ＶＴＲ撮影による相互鑑賞と感想カードの交流</td></tr>
</table>

本時の目標

○　「すずめのカーニバル」の様子をストーリーの展開に応じて，簡単なせりふ，動き，挿入歌，ダンスミュージックによる踊りなどで楽しく体全体で表現することができる。

準　　備　挿入歌拡大歌詞，ストーリーカード，シンセサイザー，カラーパネル，ダンスミュージックのテープ，ダンスミュージックのイメージカード，カーニバルの場のセット

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し，本時のめあてをつかむ。 (1) 「すずめのカーニバル」挿入歌を歌い，前時を想起する。 ○　挿入歌の歌唱 (2) ダンスミュージックを聴いて，前時工夫した踊りについて発表し，本時の表現活動について話し合う。 ○　ダンスミュージックの拍やリズムに合った動きに対する着眼と感受 ※　モデルとなる個人やグループにダンスの踊りを発表させ，その表現のなかから拍やリズムの特徴をとらえた動きについて話し合わせ，表現意欲を高めるようにする。 めあて ダンスミュージックの踊りを工夫して，「すずめのカーニバル」をもりあげよう。 2．ダンスミュージックの踊りを工夫して，カーニバルの様子を表現する。 (1) ダンスミュージックA～Cの踊りを工夫して表現する。 ○　音楽の曲想や音楽的要素をとらえた身体表現の工夫 ダンスミュージックA ── 6／8拍子，軽やかなリズム ダンスミュージックB ── 3／4拍子，滑らかなリズム ダンスミュージックC ── 2／4拍子，サンバのリズム ※　ダンスミュージックの身体表現の工夫においては，自由相談タイムや交流タイムを適宜とって表現の交流を行い，友達の表現のよさに気付かせたり自分の表現に取り入れたりさせる。 (2) 「すずめのカーニバル」の様子を全体的に表現する。 ○　ストーリーの展開に応じた総合的な表現 プロローグ ➡ 挿入歌① ➡ ダンスミュージックA ➡ 挿入歌② ➡ ダンスミュージックB ➡ 挿入歌③ ➡ ダンスミュージックC ➡ エピローグ ※　ストーリーの場面転換，およびダンスミュージックについては，子供の表現の様子を見ながら，教師が臨機応変にシンセサイザーで対応演奏していくようにする。 3．本時のまとめをし，本時の表現活動について振り返る。 ○　代表児の本時表現活動の感想の発表 ○　次時の表現活動についての話し合い ※　次時では，ＶＴＲ録画，公開発表についても話題に取り上げるようにし，発表会への意欲をもたせる。	○　「すずめのカーニバル」の歌は楽しいな。 ○　この前は，3曲のダンスミュージックで楽しく踊ったね。 ○　A君の踊りは，音楽に合わせて踊っているな。 ○　今日は，よくダンスミュージックを聴いて，それぞれの感じに合う楽しい踊りにしたいな。 ○　ダンスミュージックAの音楽は，軽くはずんだ感じなので，すずめが両足でぴょんぴょんはねているような踊りにしたいな。 ○　ダンスミュージックBの音楽は，なめらかな感じなので，すいすいと空を飛んでいるような踊りにしたいな。 ○　ダンスミュージックCの音楽は，リズムがにぎやかなので元気のいい楽しい踊りにしたいな。 ○　こんどは，カーニバルのストーリーに合わせてつづけて踊ってみたいな。 ○　今日は，「すずめのカーニバル」でこの前よりも楽しく踊れたのでよかった。

第３学年２・３組　理科学習指導案

指導者　　山　下　浩　徳

単　　元　　植物のひみつを調べよう

指　導　観

○　本単元のねらいは，植物の成長や体のつくり，ふえ方をいろいろな植物で比較しながら調べ，植物の育つきまりや体のつくりをとらえるとともに,植物にふれる楽しさや喜びを味わうことである。具体的には，①植物の育ち方は種から芽を出し，茎や葉をつけるなど順序があること，②葉や茎や根の様子は植物によってきまっていること，③挿し木や挿し芽など，種以外の部分からも植物をふやすことができること，が内容である。これらの学習を通して，視点をもって植物の特徴をとらえる観察力，植物の体のつくりやふえ方を比較し関係づける力，たくましく育つ植物の素晴らしさにふれ植物を大切にする態度を育てることができる。

○　本学級の子供たちは，４月単元「植物を育てよう」で，ひまわりとおしろい花の種をまいて，その発芽や成長を観察してきている。その中で，種が発芽することの不思議さや喜びをを味わうとともに，双葉や本葉などの成長に伴う植物のつくりの変化に気づいている。しかし，成長したひまわりなどの葉や茎，根にはあまり意識がない。とくに根に対しては，植物のつくりとしての意識が少ない。また，植物が根や茎から増えていくことの不思議さや素晴らしさには気づいていない。そこで，植物の体のつくりやふえ方などの素晴らしさを実感しながら，成長してきたひまわりやおしろい花といろいろな植物を比較し，植物についての見方を深めさせたい。

○　本単元の指導にあたっては，いろいろな植物の体のつくりやふえ方を比較する活動を通して，植物の不思議さや素晴らしさを実感しながら，植物の見方や考え方を深めていきたい。そのためにつかむ段階では，成長してきたひまわりとおしろい花の様子を観察させ，体の変化をとらえさせるとともに，葉や茎の体の様子の違いから他の植物のつくりに関心をもたせたい。さぐる段階では，いろいろな植物の葉や茎，根を比較し分類させる活動を行い，植物にはきまったつくりがあることをとらえさせたい。また，茎から新しい根が出てくる様子を観察させ，植物の生命力の素晴らしさやふえ方に気づかせる。まとめる段階では，これから自分が植物の観察を続ける視点を話し合う。

目　　標

１．身近な植物の成長や体の様子に関心をもち，いろいろな植物を比較しながら，成長のきまりや体のつくりを調べることができる。

２．たくましく育つ植物の素晴らしさにふれ，植物を大切にしようとすることができる。

計　　画（約５時間）

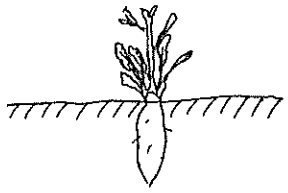
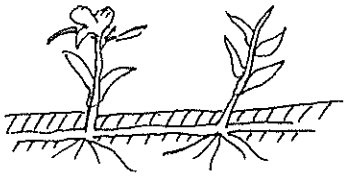
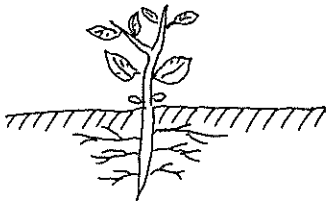
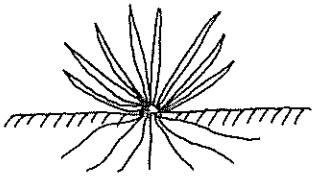
段階	第１次　つかむ段階（1時間）	第２次　さぐる段階（３時間）	第３次　まとめる段階（1時間）
活動と内容	１．育ってきたひまわりやおしろい花を観察する。① ○　成長に伴うからだの変化をとらえること ○　ひまわりとおしろい花の違いから他の植物との違いに目を向けること	２．いろいろな植物のからだのつくりを調べる。 (1) いろいろな植物の葉や茎，根の様子を調べる。(本時2/2)　② ○　植物の体のつくりの理解 (2) いろいろな植物の挿し木をして植物の増え方を調べる。　① ○　茎や根から育つことの理解	３．ひまわりや挿し木した植物を観察し，これからも調べていくことを話し合う。　① ○　成長に伴う植物の変化について調べること ○　根や茎からも植物が育っていくか調べること
手だて	※　これまでの観察記録と現在の様子の比較活動 ※　他の植物の比較・提示	※　葉や茎，根の比較による，植物の分類操作 ※　茎から発根した草花の提示	※　成長記録の見直し ※　観察視点の明確化による継続観察

本時の目標

○　いろいろな植物の根を観察して，草花の葉や茎，根の形は植物によって異なっていることを調べることができる。

準　　備　　移植ごて，バケツ，学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時に，いろいろな植物の茎や葉について学習したことを想起し，本時のめあてについて話し合う。 (1) 植物の茎や葉のようすについてわかったことを確認する。 ○　茎や葉のつき方は，つる状，直立，何本も出るなど，植物によって違いがあったこと (2) 本時のめあてについて話し合う。 ○　いろいろな植物の根について調べること めあて いろいろな草花の根をほりだして，根のようすをしらべよう。	○　植物の茎は，つる状になっているものや，一本の茎がのびているもの，たくさんの茎が葉と一緒になって出ているものがあった。 ○　根はどうなっているのだろうか。
2．植物の根の様子を予想し，根を掘り出して調べる。 (1) 土の中の根の様子を予想し，調べる方法を確認する。 ○　根の様子の予想 ・根が土の中で，横に広がったり，深くのびたりしている。 ・草花によって，様子が違うだろう。 ○　調べる方法の確認 ・根をほりあげて，水で洗い，似た草花に分類すること。 (2) いろいろな植物の根を掘りだして，形で分類する。	○　茎や葉と同じように土の中でも，まっすぐのびたり，広がったりしているのではないかな。 ○　茎や葉を調べた時と同じように，根を掘りだして，似たものに分けてみよう。
 根がふくらんでいるもの  地下茎から根が出ているもの  主根から側根がでているもの  ひげ根が出ているもの	○　根がふくらんでいる植物もあるぞ。これは野菜かな ○　なんだか植物の茎や葉の形と，根の形は似ているようだぞ。
3．わかったことについて話し合い，本時学習のまとめをする。 ○　植物による根の違いについて ・草花の根の出方は，土の上の茎や葉の出方と似ていること。 ・野菜のように，根が太くなっているものもあること。 ※　形態から機能へと，根の見方が広がるように，根のモデルを使い，体を支える根の働きについて目を向ける提示を行う。 ※　観察で根が切れた草花を提示し，これから育つか問うことにより，発根を意識付け，次時の挿し木で育つ植物へのつなぎをする。	○　他の班でも同じことがいえるようだ。 ○　根が広がったり，深くのびたりしているのは，体を支えるためなのかな。 ○　根が切れてはもう育たないだろう。

第４学年２組　あらつ学習指導案

指導者　　髙　野　誠　一

単　　元　おとなりの国　韓国しらべ隊!

指　導　観

○　本学級の子供たちは，第２学年の生活科において，子供の保護者としておられた韓国やパキスタンの人々と遊びを通して接し，遊びの楽しみは国が違っても共通していること。第３学年社会科では，商店の品物を通した外国とのかかわりに気づいてきている。また，韓国については，博多の名物である明太子との関係やワールドカップの共催国としての認識をもっている。そこで，身近な人の渡航経験が多く福岡とのかかわりの深い韓国の生活や文化，福岡との関係にふれ，異文化の違いにふれたり，我が国との類似性に気づいたりして他国の文化を尊重できるようにしたい。

○　本単元は，韓国を調べていく課題を設定し，韓国の生活や文化を体験したり韓国の人とかかわる活動を通して，異文化を理解してそのよさをとらえるとともに，異文化をもつ人々に共感し，ふれ合う楽しさを味わわせることをねらいとしている。本単元での子供が創る内容を予想される追究対象ごとに次のように考える。①「キムチ」の追究では気候的な特色や健康を大切にした考えなど，②「チョゴリ」の追究では和服と同様，礼儀と民族意識を大切にする考えなど，③「建物・名所」では，日本との文化のつながりや建物の違いに見られる気候への適応，家族を大切にする考え方など，である。このような追究を行うことで，日本との違いや韓国と日本とのつながりに気づき，将来にわたって理解し合おうとする異文化理解の基礎を養う上でも意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，韓国のものについて自分なりの課題をもって追究する過程で韓国の方との交流を位置づけ，異文化を理解し，ふれ合うことの楽しさを味わわせたい。そこで，まず見出す段階では，身近な人の韓国とのかかわりや福岡から韓国への旅行者が多いことなどから韓国に関心をもち，その魅力について自分なりに身近なところからの韓国調べをする。そして，韓国のものや人との交流を通して自分が追究していく対象にこだわりをもち，調べる計画を立てる。次に追究する段階では，自分の課題について調べ方を工夫し，韓国の方とふれあったり実際に体験したりしながら韓国の異文化的な側面や日本とのかかわりについて考える。最後に，生かす段階では，お世話になった韓国の方々を招き，お礼の会を開き，親しく交流ができるようにしたい。

目　　標

１．福岡に最も近い外国である民国に興味を持ち，自分が調べたいことを課題として設定し，情報収集や体験を通して調べたり，調べたことを表現したりできる。

２．韓国のキムチやチョゴリ，名所や建物などについて自分の課題で追究して異文化を理解し，そのよさをとらえるとともに異文化をもつ人に共感し，ふれ合う楽しさを味わう。

計　　画(約１３時間)

段階	見出す段階(４時間)	追究する段階(６時間)	生かす段階(３時間)
活動と内容	１．身近な人や福岡の韓国とのつながりから課題を設定する。 (1) 韓国と福岡のつながりを調べる。　② ○　韓国への興味関心 ○　韓国調べ(課外) (2) 韓国の物と出会う。 ②本時 1/2 ○　課題の設定と計画	２．自分の課題で韓国のものについて調べる。 (1) 自分の課題について調べる。　③ ○　日本との異質性と類似性を追究すること 【予想される課題(対象)別グループ】 ・キムチ　・チョゴリ　・名所など (2) 韓国の方に再取材をする。　① ○　異文化理解の深まりと共感 (3) 自分が調べたことを表現物にまとめる。② ○　追究のまとめについての自分が得意な表現を発揮すること	３．調べ活動にかかわっていただいた方を招き，「韓国の魅力報告会」を開く。　③ ○　自分の追究結果を報告することでの成就感の感得 ○　韓国の方との交流での異文化をもつ人々とのかかわりの楽しさの実感
手だて	※　韓国資料・体験コーナーの設置 ※　韓国の方の協力	※　各種の図書資料　※　見学場所の支援 ※　課題に応じた韓国の方の招聘 ※　まとめる方法についての例示	※　報告する相手としての韓国の方の招聘 ※　交流できる場の設定

本時の目標

(1)　韓国の魅力について自分なりに調べたことを出し合ったり，資料・体験コーナーでのもの調べや韓国の方との交流を通して，韓国の魅力をさぐる意欲をもつことができる。

(2)　韓国の魅力について調べてきた結果や資料・体験コーナーでのものやこと，人との出会いから自分がこだわりをもって追究する課題をもつことができる。

準　　備　子供たちの韓国集めに関する資料，韓国の食べ物(キムチ)，チョゴリ，建物の写真

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時のめあてを確認する。 ○　韓国の魅力について話し合うことの確かめること ※　集めたものやこと，発表に関係する資料を教室内に掲示する。 めあて 福岡からたくさんの人が旅行に出かける韓国には，どんなおもしろさがあるのか話し合おう。 2．　韓国の魅力について予想したり調べたりする。 (1) 韓国のおもしろさについて自分で調べたことを話し合う。 ○　自分の生活と韓国とのつながりや韓国の異文化への気づき ※　子供たちが集めた韓国の魅力につながる物や予想したこと(韓国コレクション)を類型し「食べ物」「衣服」「名所」などで分ける。 (2) 自分の観点などから資料・体験コーナーで調べ話し合う。 ○　自分の興味関心からの課題の方向性 ※「食べ物」ではキムチ，「衣服」ではチョゴリ，「名所」では建造物の写真など子供たちのコレクションからコーナーを設置し，必要に応じて質問できる韓国の方を招いておく。 **〈予想されるコーナーの設置及び活動と支援〉** 【食べ物】： 多種のキムチ，献立 ○試食する，材料を尋ねるなどの活動 ※一週間の食事の様子の話などキムチにまつわるエピソード ↓予想される課題 ○　キムチが生活の中で大切にされているのはどうしてだろう。 【着る物】： 多種の服，価格や個人所有の数 ○試着，利用の様子を尋ねるなどの活動 ※和服との比較，チョゴリを着る場面などの話 ↓予想される課題 ○　チョゴリを今も行事の時に着るのはどうしてだろう。 【建物・名所】： 寺や伝統的住宅の写真 ○写真の観察，説明を聞くなどの活動 ※日本の建物との比較(寺，一般住宅)家の座席などの話 ↓予想される課題 ○　寺は日本と似ているが家が違うのはどうしてだろう。 3．　本時学習でお世話になった韓国の方へのお礼の会をする。 ○　韓国の方との交流と追究への意欲をもつこと ※　本時来ていただいた韓国の方から，韓国のことを調べることは，「韓国の人と仲良くなる第一歩である」といった話をしていただき子供たちの追究を価値づけていただく。	○　韓国のものを集めるためにいろいろな店を回ったよ。 ○　ぼくは，本屋さんに行って観光案内を見つけたよ。 ○　店で見つけた本場のキムチ，とても辛そうだな。 ○　似ている物もある。韓国から伝わったものが日本にもありそう。 ○　もっと食べ物のことを調べてみよう。 ○　たくさんの量の唐辛子を食べるんだな。 ○　チョゴリというのはとてもきれいな色をしているな。 ○　建物の様子が似ているところもあるな。韓国にも日本みたいにお寺があるんだ。 ○　食べてみると，とても辛い。どうしてこんなに辛いものを食べるのだろう。 ○　外国だから違うところもたくさんあると思うけれど，日本とも似ている感じがするな。 ○　韓国のことを知って日本と比べたい。韓国の人と仲良くしたい。

第５学年１組　算数科学習指導案

指導者　　加　藤　英　也

単　　元　　単位量当たりの大きさで比べよう

指　導　観

○　本単元は，これまで数量を用いて表すことのできなかった内包量を数量化して比較しながら，数理が生活の中に有益に活用されていることのよさを味わうことができることをねらいとしている。具体的には，①２つの量に依存して決まる速さのような量があることを知ること，②その違いを２量のうちの一方を単位量にそろえて比較すること，③生活のなかで「速い，遅い」「濃い，薄い」「高い，安い」などの言葉で比較する場面を自ら取り出し，単位量当たりの大きさを活用して表したり比較したりできることである。

○　本学級の子供たちは，長さやかさ，面積などの外延量については単位量のいくつ分で測定することができる。また，日常の生活の中で「速い，遅い」「高い，安い」というように程度の大小を比べる言葉を無意識に用いている。しかし，これらの表現は個人によって基準が違うために曖昧であったり，外延量で表せないため，数で大きさを表して比較することはできていない。そこで，生活の中のこのような曖昧な表現を２量を用いて数量化して表すことができるようにすることは，生活に数理を活用する体験を豊かにする上で意義深いと考える。

○　本単元の指導にあたっては，２量に依存する内包量を単位量当たりの大きさで比較する考えのよさを味わうことができるようにしたい。そして，その考えを生活事象に自ら活用する体験をもたせたい。そのために，つかむ段階で「長い，短い」「速い，遅い」など程度を表す言葉を用いる場面を取りだす。「長い，短い」が端をそろえれば直接比較できるのと同様に「速い，遅い」も方向と時間をそろえれば直接比較できる。そこで，方向や時間がそろっていない場合にも，長さが単位のいくつ分で表すことで比較・測定できたことから，「速い，遅い」などの言葉も量を使って表せないかという追究主題を設定する。生み出す段階では，外延量で表せないものにも２量で表せるものがあること，それらの大きさは２量の一方をそろえて残りの量の大きさで比較できることを「歩く速さ」を例にとらえる。生かす段階で，自分たちで条件をきめて他の「速さ」や「濃さ」などを比較する場面を設定して，自他の記録を比較しながら内包量を単位量で表すことのよさを味わう。

目　　標

１．２つの量に依存して決まる量の大きさを一方を単位量にそろえて比較することができる。

２．自分の追究したい「濃い，薄い」などの曖昧な言葉から場面を設定して単位量当たりの大きさを活用して比較する体験を持つことができる。

計　　画（約１２時間）

段階	第１次　つかむ段階（２時間）	第２次　生み出す段階（４時間）	第３次　生かす段階（６時間）
活動と内容	１．程度を表す言葉の比較方法について話し合う。 ○　外延量で比較できるものと比較できないものに分類すること ○　追究主題の設定	２．外延量で表せない「速い，遅い」を例に，２量を取り出し一方を固定する比較方法を生み出す。 ○　単位量にそろえて比較すること ○　言葉から場面を取り出す方法をとらえること ○　速さの表し方を知ること	３．「濃い，薄い」「高い，安い」などを比較する場面に単位量の考え方を活用する。(4/6本時) ○　各自の計画に基づいて，実験しﾃﾞｰﾀを収集すること ○　単位量の考えのよさを味わうこと
手だて	※　物ごとの程度を表す言葉とその使用場面の取り出し ※　外延量で表せるか否かの分類場面の設定	※　場面作りがしやすい「歩く速さ」の例の選択 ※　２量のうちの一方をそろえて比較する必然性のある場の設定	※　計画や実験方法に対する支援 ※　追究内容が同じ子供同士での比較の場の設定 ※　追究内容の交流場面の設定

本時の目標

○　生活の中の「速さ」や「濃さ」などの程度を比べるための実験・実測の場を設定することができるとともに，それらを単位量当たりの大きさを用いて比較する体験をもつことができる。

準　　備　子供が実験・実測するために必要な道具　学習ノート

学習指導の過程

<table>
<tr><th>活　　動　　と　　内　　容</th><th>子供の思考の流れ</th></tr>
<tr><td>
1．自分が比較したいことを出し合い，本時のめあてについて話し合う。
○　程度を表す言葉に単位量の考えを使えるかということ
めあて
割安さ，濃さ，書く速さなども単位量当たりの大きさで比べられるか調べよう。
※　調べたいと思った言葉を生活の問題と結び付けさせる。
2．自分の計画に基づき，実験・実測をして，比較する事象をつくり，データを取り出す。
(1) 程度を表す言葉から２つの事象を作り，それぞれからデータを取り出して比較する。
○　内包量にかかわる２量の取り出し
・予想される活動例
<table>
<tr><th>品物の割安さ</th><th>食塩水の濃さ</th><th>書く速さ</th></tr>
<tr><td>①同じ品物で値段と個数がちがうものをチラシなどから探す。
②値段と個数の一方を単位量にそろえて比べる。</td><td>①異なる体積の水に異なる重さの食塩を溶かし，異なる濃さの２つの食塩水を作る。
②同量の食塩水を取り出し，重さを比べる。</td><td>①数字を１分間と30秒間の２回書いて，書いた文字数を数える。
②時間をそろえて書く速さを比べる。</td></tr>
</table>
(2) 友達のデータと比べる。
○　単位量当たりの大きさで表して比べること
※　同じことを調べている子供同士で比較させ，単位量で表す必然性をもたせる。
<table>
<tr><td>A店…２個で150 円の玉葱
150÷ 2＝75
B店…３個で220 円の玉葱
220÷ 3＝73
（割安さ）＝（値段）÷（個数）</td><td>C児…200 cm³ で40ｇの食塩
200÷ 40＝ 5
D児…150 cm³ で35ｇの食塩
150÷ 35 ＝4.28
（濃さ）＝（重さ）÷（体積）</td><td>E児…20文字を15秒
20÷15＝1.3
F児…１分で70文字
70÷60＝1.1
（書く速さ）＝(文字数）÷(時間)</td></tr>
</table>
3．単位量で表す数理活用体験について振り返り，比べられたものと比べられなかったものについて話し合う。
(1) 分かったことを発表する。
○　単位量で表して比べられたかどうかの確認
※　比べられなかったものは，その原因を取り出させる。
(2) 活動を振り返り感想を出し合う。
○　単位量で表せたことのよさ
※　同じことを調べた別のグループと比較させる交流を行うことで，計算で求められる単位量のよさに気づかせる。
</td><td>
○　歩く速さ以外の「速い」も単位量で比べられるかな。
○　広告に載っている商品の「高い，安い」は，何と何の量に関係するのかな。
○　僕は，書く速さは時間と書いた字数に関係があると思うけど本当か確かめてみよう。
○　２回目に書いた方が速い。書く時間を同じにしたら字数で分かる。やはり書く速さは時間と字数に関係があるな。
○　友達とは測った時間が違うから一目ではどっちが速いか分からない。単位量で表して比べよう。
○　書く速さも単位量で表して比べることができた。
○　でも，友達と比べるとき書く中味をそろえておかないと比べられないんだな。
○　一緒にやっていないグループとも単位量で表すと比べることができるんだな。
</td></tr>
</table>

第５学年２・３組　国語科学習指導案

指導者　伊藤啓二

単　　元　使用済みカードや切手を集めるためのお願い文書を作ろう

指導観

○　本単元は，使用済みの切手やカードを集める願い文書を作成する過程で，依頼文に必要な内容や書き方の特徴をとらえて意図や目的が明確な文章を書くことをねらいとしている。具体的には，①身近にある依頼文書を調べ読み，多くの人に物事をお願いする文書に必要な事柄や形式，表現上の特徴を理解すること，②調べたことや聞いたことを再構成して，国際理解・協力の意義や目的が正しく表現され，依頼内容が明確な文章を書くこと，③アジアの諸国の現状と問題を正しく理解し，自分たちにできる国際協力活動として，古切手回収に意欲的に取り組み，地球市民として社会に貢献していこうとする心を高めること，この３点が，本単元で学習できる内容である。

○　本学級の子供たちは，一つのテーマについて様々な観点から調べ，それを観点ごとに整理して文章に書き表す新聞作りなどには慣れてきている。しかし，本単元の表現物である物事を依頼する文章を自分たちで作った経験はなく，目的や相手にあわせて表現内容の適切性，表現の仕方や構成の分かりやすさを分析的にみた学習はしていない。学習活動の中で，子供たちがいろいろな目的で他の人たちに物事を依頼する機会は多く，相手に目的や意図を正しく伝える手紙文系統の文書を作る経験は必要なことである。本単元の学習活動は，子供の実用作文の能力を広げ高めるとともに，情報処理活用能力をさらに高める上から意義深いと考える。

○　本単元の指導にあたっては，使用済みカードや切手をアジアの国々の支援資金として役立てたいという強い目的意識から，子供の主体的な追求が進み，依頼文書の作成とアジアの国々に対する認識が高められるようにしたい。そのために，「課題把握」段階では，より多くの人から集めるためにＰＲ活動をする必要性を感じ取り，依頼文書の具体像など活動の見通しと学習計画の立案を行う。「情報受信・情報創造」段階では，必要な情報を収集し，試しの依頼文書を作る活動を行う。その依頼文書を実際に国際協力活動にたずさわる方から評価してもらい，内容や表現の仕方の不十分さを補うとともに，国際理解・協力に対する正しい認識を育てていきたい。「情報発信」段階では，作成した文書を印刷し，地域の方にお願いしたりして依頼の方法を具体化して，実際にＰＲ活動を行い，後日古切手の回収を行い，活動の達成感を感じとれるようにしていきたい。

目　　標

１．使用済みカードや切手を集める目的をもち，活動の趣旨や収集の目的，収集方法など，意図を正しく分かりやすく伝える依頼文書を書くことができる。

２．文書を作る過程で，アジア諸国の理解を深め，国際協力の意義や臨む姿勢を高めることができる。

計　　画　（約 10 時間＋課外）

段階	課題把握（２時間）	情報受信・創造の段階（８時間）本時４／８時	情報発信（課外）
活動と内容	１．使用済みカードや切手の利用価値に興味を持ち，多く集めるための学習計画を立てる。 ○　国際協力活動への興味と活動意欲の喚起 ○　依頼文作成活動の見通しと学習計画の立案	２．依頼文書の内容や形式について話し合い，相手にお願いしたい内容が伝わるように，必要な情報を収集して試しの依頼文書を作成する。　５ (1) 国際協力団体の活動報告やモデルの依頼文などから情報を収集する。③ ○　目的や意図にあった文書を作成するための情報収集，調査 (2) 試しの依頼文を評価してもらい，不十分な情報や書きぶりを見直す。　② ○　意図を正確に伝える依頼の仕方と曖昧な表現や構成の見直し ○　アジアの国々に対する正しい理解と国際協力の意味の把握 ３．国際協力の意義やお願いの内容が伝わるように文書を作る。３ ○　目的にあった効果的な構成と意図の明確な文章表現	４．作成した依頼文書を学校の仲間や地域の中で配布して意図を理解してもらい，カードや切手を実際に集める。 ○　国際協力活動を実践した価値の感じ取り
手だて	○　使用済みカードや切手の利用実績の提示	○　国際協力活動団体の活動報告，学校で配布される依頼文書などの提示とモデルとした学習の場の設定 ○　ミャンマーに対して国際ボランティア活動に取組むＧＴの招聘	○　子供の手で依頼文書を配布できる場所の事前の調査と準備

本時の目標

1．国際協力活動に携わっている方々の話から，自分の目的と意図に応じて大切なことがらを聞き取り，依頼文書の表現内容に生かすことができる。

2．ミャンマーをはじめとするアジアの国について理解が不十分なことに気づき，正しく国情や援助協力の必要性を理解した上で，国際協力の意義を考えようとする態度を育てる。

準　　備　教師：ミャンマーの写真資料，モデルの依頼文　児童：活動計画表，試しの依頼文書，ＧＴの話を書き留めるノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．数名の試しの文書を読んで感想を出し合い，本時学習のめあてを確かめる。 ○　不十分な点を改善していこうとする意欲と見通し ※　ＧＴには事前に子供の依頼文書を読んでもらい，学習の進め方を確認しておくようにする。	○　どんな書き方をしたらよいかは分かったが，もっと詳しくどうして古切手を集めることが大切なのか書かなくてよいのだろうか。
国際協力活動を行っている方に，私たちが作ったお願い文書の理由や目的の書き方について見てもらい，見直しのためのアドバイスをいただこう。	
2．依頼文書に書かなければならない事柄をＧＴの方をまじえて意見交換をする。 (1) 試しの依頼文書を作った過程で考えたことやＧＴに尋ねてみたいことなどを出し合う。 ○　見直しの観点と話していただく観点の整理	○　アジアの国に協力が必要なのか詳しく書かれていないのでその部分をＧＴの方々から聞きたい。 ○　正しいことは何も知らないで作っていたのではないだろうか。
・　カードや切手を集めることで学校が建てられるとは聞いたけど，ほんとにできるのか，また，他にどんなことに使われているのかなど詳しく知りたいと思う。（目的・活動の価値の明確化） ・　協力したいと思えるためには，贈ろうとしている国の様子や事情などが分かるようにし　なければならないと思うけど，どのくらい貧しいのか，どのくらい困っているのかもう少　し詳しく書いて知らせたい。（国際理解の必要性）	
(2) 知りたいことの観点を意識しながら国際協力活動を行っている方の話を聞く。 ○　自分にとって必要な事柄を正確に聞き取ること	○　自分の知りたいことが分かるようにきちんとメモしていこう。
九州ミャンマー友好協会の松尾貴久さんの話 ・皆さんの取り組みはとても価値があることだと思います。そのためのお願い文書作りも大切だと思いますが，読ませてもらって感じたことは，集める理由や活動の目的を書いた部分はちょっと違うなということです。 ・ミャンマーという国についても，もっと正しく知ってほしいと思います。自然は豊かだし人々は心が豊かでとても明るいのです。決して暗く，貧しく，悲惨な国ではありません。国のことや人々の願いをよく知った上で，自分たちと同じ目線に立って，同じ世代の子供たちがこんな協力をしたいという思いを文書に書いてほしいと思います。 ※　理解と協力の対象を明確にして活動することや正しい国際理解の必要性を観点として話　していただくようにする。 ※　話については，全体的にメモを取らせるようにする。	
3．自分の書いた依頼文書の具体的な見直しを行う。 ○　新しい情報をもとにした表現内容の見直し ○　アジア諸国に対する国際理解・協力の正しい理解	○　松尾さんの話を聞いて自分がミャンマーのことを全然理解してないことが分かってきた。
・ただ「アジアの国が困っているから協力して下さい」と書いていたけど，いい加減な伝え方だったということが分かった。具体的にミャンマーのことを正しく伝えてお願いしたい。 ・古切手がどういうことに役立っているか大まかには書いていた。でも，もっと項目を整理して読みやすく分かりやすくしたいし，松尾さんのアドバイスを聞いて書き加えたいこともはっきりしてきた。	
※　子供の必要に応じて，ＧＴの方に質問したりアドバイスをいただけるようにしておく。	○　もう一度依頼文書の内容や形式を見直して書き直そう。

第６学年１組　社会科学習指導案

指導者　　猿　樂　隆　司

小　単　元　遣唐使の幕をひいた菅原道真と日本風の文化

指　導　観

○　本小単元のねらいは，遣唐使廃止の理由を道真の立場に立って調べ，当時の国内外の状況をもとにした判断が，結果として大陸文化の基礎に立つ日本風文化の繁栄に寄与した事実とその様子をとらえることである。具体的には次のような内容がある。①宇多天皇に遣唐使廃止を訴える道真の背景を唐の衰退という外交的側面や渡海への莫大な費用や危険性という内政的側面から考えること，②遣唐使の廃止は鴻臚館の迎賓館としての機能を強めたことや国内の鎖国的性格を強め，国風文化の確立に向かったことをとらえること，③道真の遣唐使廃止という業績やその後の我が国への文化の影響から道真の思いに対する価値づけを行ったり，福岡の歴史に対する愛着をもったりすること。

○　本学級の子供たちは，我が国の歴史を博多の交流史という視点で学習し，，時代区分ごとに福博歴史シンポジウムを行い，人物評論図をもとに地域の先人の願いに寄り添った業績の価値付けを重ねている。前小単元「遣唐使時代の幕開け～鴻臚館から唐へ～」では，博多が大陸文化摂取の玄関であり，鴻臚館は貿易の拠点として我が国の文化の発展に大きな役割を果たしたことをとらえている。しかし，道真が遣唐使を廃止した事実やその事実の背景には，唐の治安の乱れや唐の商船の来航，渡海の費用の高騰や命を失う危険性，藤原氏の摂関政治のへ対抗などがあったことには気付いていない。学び方については，人物の立場に立って政策の目的や意図を考えたりする力は十分でない。

○　本小単元の指導にあたっては，道真が遣唐使を廃止した背景を道真の立場で国内外の両面から追究させたい。そのために，つかむ段階では，遣唐使によってもたらされた文化遺産を提示し，天神さまとして親しまれている道真が遣唐使を廃止した事実との比較から，道真の意図を探る課題をつかませる。つくる段階では，遣唐使廃止の理由の根拠を福岡に残る遣唐使と鴻臚館に関する資料をもとにつくらせ，評論図に表し，廃止せざるを得なかった道真の思いや廃止に伴う文化への影響を話し合わせる。生かす段階では，道真の遣唐使廃止への思いや影響をもとに，郷土史家を招き，奈良時代に続いて，福岡・博多の町歴史シンポジウム「平安時代編」を行わせ，成就感をもたせたい。

目　　標

１．道真が遣唐使を廃止した背景を当時の国内外の状況をもとに道真の立場に立って多面的に考えるとともに，福岡・博多の歴史に対する愛着を深めることができる。

２．遣唐使廃止が国風文化繁栄の契機となり，やがて大陸文化を基礎とした国風文化の繁栄の様子をとらえることができる。

計　　画(約９時間)

階	つかむ段階（２時間）		つくる段階（４時間）	生かす段階（３時間）
活動と内容	１．追究課題について話し合う。 (1) 鴻臚館を起点とした遣唐使による文化への影響と道真の廃止の事実から課題を話し合う。 ① ○　道真のエピソードや廃止に向かった願いや国内の政治・文化面への影響による課題把握 (2) 廃止の背景を予想する。 ① ○　国内外の状況に着目した追究内容や方法の見通しをもつこと		２．道真の立場に立って追究課題について調べる。 (1) 遣唐使廃止の背景を調べ，評論図に表し話し合う。(本時2/2) ② ○　廃止を願う背景となる国内外の状況の多面的な分析 (2) 遣唐使廃止の影響を調べ，評論図に表し，話し合う。 ② ○　廃止による大陸文化を基盤とした国風文化の様子の把握	３．福岡・博多の町歴史シンポジウムを行う。 (1) 平安初期を生きた道真の思いを再調査し，評論図に表す。② ○　詩人と政治家の両面をもち，真摯に生きた道真の思いの吟味 (2) 歴史シンポジウムで道真の思いに対する解釈を話し合う。① ○　道真の思いの取り出しによる内面化を図ること
主な手だて	取　材	※　遺物と道真の業績	※　廃止の背景や影響の把握	※　道真の思いの付加・修正
	表　現	※　願いの予想の記入	※　背景や影響の事実の関係づけ	※　道真に対する価値づけの記入
	交　流	※　立場思考による予想	※　評論図による多面的な分析	※　歴史シンポジウムによる年間主題
	再表現	※　廃止の背景にある願いの意識化と道真に対するとらえの見直し	※　背景や影響の見直しや現存する文化が平安期に確立した歴史的なつながりの感受	※　道真の思いの取り出しによる自分のあり方の見直しと福岡の歴史に対する愛着の感じ取り

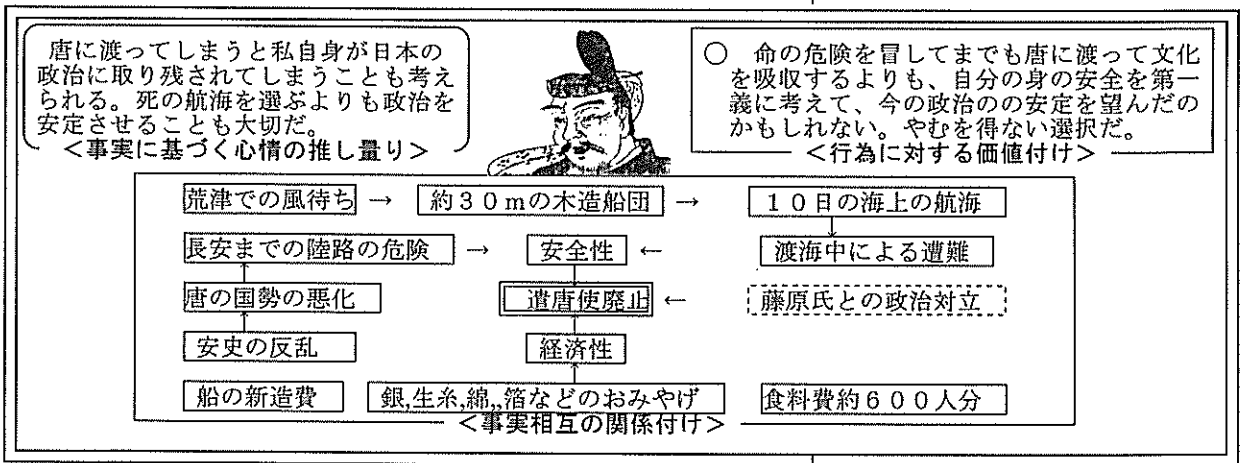
本時の目標

○　菅原道真が遣唐使を廃止した背景を道真の心理的葛藤の様子を推し量りながら，唐の国内情勢や当時の我が国の政治や経済の状況などの面から多面的に考えることができる。

準　　備　平安初期の博多古地図，「遣唐使停止審議誓願状」，根拠を示したカード，ワークシート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し，本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時までの学習内容を出し合う。 ○　道真の遣唐使廃止についての考えを想起すること ※　宇多天皇に出した「遣唐使停止審議誓願状」をもとに前時の学習内容を確認させる。 (2) 本時学習のめあてについて話し合う。 ○　道真の遣唐使廃止の理由について考えを吟味すること めあて なぜ，道真が遣唐使を引き受けなかったのかを評論図をもとに，話し合おう。	○　菅原道真はなぜ，遣唐使を廃止したのかという追究課題をもって調べてきたな。 ○　派遣の費用が莫大にかかっていることも考えられるよ。人件費だけでも今の金額で約７千万円にも登るらしい。高額だから財政が圧迫するよ。 ○　でも，唐は内乱で王朝が衰えたからではないかな。 ○　渡海は荒津で風待ちをして10 日以上もかけていくのだから危険だったに違いないよ。
2．道真が遣唐使を廃止した理由について話し合う。 (1) 代表児による評論図を用いた道真の遣唐使廃止の理由の基調提案をもとに，相互交流を行う。 ○　国内外の状況を調査した評論図をもとに関係づけること ※　交流については，①代表児による基調提案，②根拠の付加，③質疑の順で根拠となる資料を提示して説明させる。 (2) 道真と藤原氏の関係を示す資料を読みとり，宇多天皇に遣唐使廃止を箴言した理由について再度話し合う。 ○　太政官執政部における道真と藤原時平の関係をもとに，対抗勢力としての意識があることの関係付け ※　寛平５年（８９３年）の「執政部」の資料を提示し，遣唐使廃止の根拠を政治の面から付加させる。 (3) 道真の遣唐使廃止についての考えを評論図の中の吹き出しに記入し，発表する。 ○　道真の遣唐使廃止の意図に対する共感的な理解 【予想される人物評論図の例】	【博多荒津拠点の唐への航路】 ○　鴻臚館には唐商人が増えたのでいく価値が減ったのでは。 ○　他の理由はないかな。 ○　資料を見ると，藤原氏が力を持ってきたことがわかるよ。



3．遣唐使の廃止による影響を予想し，次時の学習内容を話し合う。 ○　道真の約６３０年続いた遣唐使を廃止したことで鴻臚館の働きや文化への影響を予想し，次時への意欲をもつこと ※　年表にて鴻臚館や文化への影響を振り返らせる。	○　鴻臚館は，唐の商人を迎えるだけになったが，我が国独自の文化が大陸の文化を基礎として栄えることになったわけだ。

第６学年２・３組　理科学習指導案

指導者　　野　口　信　介

単　　元　火を使い生活する私達

指　導　観

○　本単元は、ものが燃える様子を観察し，ものが燃えた前後による気体の質的な変化についてとらえることをねらいとしている。主な内容としては，①ものが燃えるためには，空気（酸素）が必要であり，植物体（気や紙など）が燃えた後には二酸化炭素が発生すること，②空気の質的な変化について，石灰水や気体検知管を用いながら調べることができること，③ものの燃焼による環境問題に対して自分の考えををもつこと。などである。これらの学習を通して、ものの質的な変化をとらえると共に，ものの燃焼に関わる自分達の生活を見直させたいと考える。

○　本学級の子供たちは、マッチやライターを用いて紙や木に火をつけた経験を持っている。また，火がつきにくい時に風を送ることで炎が強くなることも知っている。しかし，知識としては，ものが燃えるためには空気が必要であることを知っていっても，ものが燃えることと，ものの質的変化を関係づけてとらえている子供は少ない。また，環境問題に対しての関心は高く，自己の生活改善について意欲的な子供が多く見られる学級である。

○　本単元の指導にあたっては、ガスバーナーの使用方法から，ものが燃えるためには空気が必要であることをとらえさせながら，その結果生じてくるものとして二酸化炭素があることを石灰水や気体検知管を用いて調べさせていく。そこで，「見出す」段階では，ガスバーナーを使用させてみて，空気の量と炎の関係をつかませていく。そして，閉じこめられた空気の中で燃焼するろうそくの観察から追究課題を設定する。「調べる段階」では，ものを燃やすためには酸素が必要であることやものを燃やした後には二酸化炭素が生成されることを調べ，燃焼に対する認識を高めていく。「見直す段階」では，身のまわりにある燃えるものを燃やしながら，どのようなものを燃やすと二酸化炭素が生じてくるのか調べ，二酸化炭素が関わっている環境問題をとりあげ，これからの自分の生活について考えていきたいと考える。

目　　標

１．ものが燃えるときには酸素が使われ，二酸化炭素に変わるといった質的な変化についてとらえることができる。

２．生活におけるものの燃焼と環境問題である二酸化炭素の増加とを関連づけることができる。

計　画（約８時間）

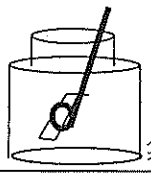
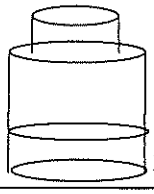
段階	第１次　見出す（２時間）	第２次　調べる（４時間）	第３次　見直す（２時間）
活動と内容	１．ガスバーナーの使い方を体験し，ものを燃やすためには空気が必要であることを追究していく課題をもつ。 (1) ガスバーナーを使う体験を行い，空気の量と炎の様子の関係を観察する。　① ○　空気の量により炎が違うこと (2) 閉じこめられた空気の中でろうそくを燃やし続けるためにはどうしたらよいか考える。　① ○　燃焼と空気の関係への気づき	２．ろうそくを燃やし，燃やす前後の空気の質的な変化について調べる。 (1) ろうそくを燃やすときには空気が必要であることを調べる② ○　燃焼には空気の通り道が必要なこと ○　燃焼には酸素が必要なこと (2) 燃えた後の空気の変化について調べる。　② ○　燃焼後は酸素が二酸化炭素に変わること	３．現在問題になっている環境問題から，身のまわりのものを燃やすとどれも二酸化炭素が発生するのか調べ，今後の自分の生活の改善について話し合う。 (1) 生活場面において，燃えるものがどれも二酸化炭素が生じるのか調べる。　（本時） ○ 植物体の燃焼による二酸化炭素の発生を調べること (2) 環境問題をもとに，今後の生活改善について話し合う。　① ※　身のまわりのものを燃やし，石灰水で調べる実験 ※　環境問題に関する資料提示
手だて	※　ガスバーナーの使い方についての説明 ※　ろうそくの燃焼の様子の観察	※　モデル図を用いた交流活動 ※　石灰水や気体検知管を用いた検証実験	

本時の目標

○　身のまわりにある燃えるものと思われるものを燃やし，どのようなものを燃やすと二酸化炭素が発生するのか調べ，ほとんどのものが二酸化炭素を発生することをとらえることができる。

準　　備　　集気瓶，針金，燃焼さじ，マッチ，各自用意した燃えるもの，石灰水，気体検知管

学習指導の過程

活　　動　　と　　内　　容	子供の思考の流れ
1．これまでの学習を振り返りながら本時のめあてをつかむ。 ○　ものの燃え方に伴う，物質の質的な変化について考えてきたこと ○　ろうそくを燃やすと二酸化炭素が発生したこと めあて 身のまわりにある燃えるものが，どれも二酸化炭素を発生させるのか調べよう。	○　ろうそくを燃やすと酸素が使われて，二酸化炭素がでてくるけれど，いろんなものも同じことが言えるのかな。 ○　どんなものも二酸化炭素が発生するか調べたいな。
2．家庭から持ち寄ってきたものを燃やし，二酸化炭素が発生するか調べ，結果について話し合う。 (1) 家庭からどのようなものを持ち寄ってきたか発表し，簡単に類型化していく。 ○　紙や木，石油製品などによる弁別 (2) 燃焼させていく実験の仕方について知り，各自持ち寄ったものを調べ，学習プリントに結果をまとめる。 ○　石灰水を用いた実験方法の理解 ○　表を用いた結果の処理 ① 持ってきたものを針金に付け，集気瓶の中で燃やす。（液体は燃焼さじを使う） 火をつけて入れる。  集気瓶 ② 集気瓶の中に石灰水を入れ，二酸化炭素の発生を調べる。  石灰水 ※　火を用いるために安全面に対する留意を十分に行う。 (3) 実験結果について交流し，二酸化炭素を発生させるものについてまとめていく。 ○　炭素を含む製品（植物体）について	○　紙でできているものや，木でできているものは二酸化炭素が出てくるのではないかな。 ○　灯油や固形燃料は二酸化炭素はできないのではないかな。 ○　ろうそくの時に実験した石灰水を使うと簡単に調べられるよ。 ○　燃えるもののほとんどが二酸化炭素が発生しているなんて知らなかった。 ○　燃えるものはほとんどが植物からできているから，二酸化炭素が発生するんだ ○　ものを燃やすと出てくる二酸化炭素が環境を壊しているなんて知らなかった。 ○　簡単にものを燃やしてしまうと，自分達の環境を壊すことにつながるな。 ○　これからは，ものを燃やす生活について，さらに考えないといけないな。
3．本時学習を振り返り，次時の学習を確認する。 (1) ものの燃焼に伴う環境問題について話し合う。 ○　二酸化炭素の増加に伴う環境問題について ○　ダイオキシンの発生について ※　燃焼に伴う環境問題の資料を提示する。 (2) 次時の学習について確認する。 ○　これからの自分達の生活の仕方について	

第３・４学年さくら組　生活単元学習指導案

指導者　　谷　崎　和一郎

単　　元　　スーパーマーケットでかいものをして　おこのみやきパーティーをしよう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢３歳程度から７歳程度の３年生３名，４年生３名の計６名で構成されている。子供たちは日常生活においてスーパーマーケットで保護者と一緒に食材やおやつ等を買う経験をしてきている。その中で，指示された商品を取ってきたり，自分でお菓子コーナーに行って好みの物を選んだりすることができている。しかし，その行為は自分が興味・関心のある商品の場合に見られるものであり，料理をするためにいくつかの材料を買う等，目的に応じて必要な物を見つけて買うまでには至っていない。

○　本単元のねらいは，お好み焼きパーティーをしようという目的意識をもって，スーパーマーケットで必要な材料を買いそろえたり，お好み焼きを作ることである。具体的な学習内容は、①スーパーマーケットに関心をもち，その有用性に気付くこと，②買い物のメモや店員さんが教えてくれたこと等の情報を収集・活用して必要な物を見付けること，③品物を買うまでの手順やきまりをとらえること，④代金を支払って品物を受け取ること，⑤店員さんへのかかわり方を身に付けること，⑥安全面や衛生面に気をつけてお好み焼きを作ること，などである。これらの内容を学習することは，課題解決の力や実際生活に必要な知識・技能を身に付けるなど生活力を培うことにつながるとともに，社会体験を豊かにし，子供たちの現在及び将来の豊かな生活を考える上でも意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，スーパーマーケットで目的に応じて必要な物を代金を支払って買いそろえることができるように，目的意識をもって活動に取り組むための活動構成，買い物の課題を解決するための模擬の場の設定や個に応じた学習ノート提示，などの観点から支援を工夫する。具体的には，①スーパーマーケットで買い物をしてお好み焼きを作って食べる活動→買い物の様子をビデオで視聴し品物を並べた模擬の場で材料をお金を払って買いそろえる練習を繰り返す活動→スーパーマーケットで買い物してお好み焼きパーティーをする活動，といった一連の活動を構成する，②情報の提供者に子供たちの必要に応じて品物の場所を教えてもらう場の設定，③品物を買うまでの手順や店内の情報などを，個に応じて写真や絵，文でまとめることのできるノート，などの支援を行う。

目　　標

○　お好み焼きパーティーをするという目的意識をもち，スーパーマーケットの中にある情報を活用しながら必要な物をお金を支払って買ったり，お好み焼きを作ったりすることができる。

計　　画（約 10 時間＋課外）

段階	であう　（３時間）	しらべる　（４時間）	いかす　（３時間，課外）
活動と内容	１．スーパーマーケットに行き，お好み焼きの材料を買ったり，調理をして食べたりする。 ○　スーパーマーケットで買い物をしてお好み焼きパーティーをするという目的意識をもつこと	２．お好み焼きを作るための買い物の課題を意識してその課題を解決する。 (1)　ビデオを見て買い物の様子を振り返る。① ○　材料を見つけにくかったこと (2)　ビデオや本を見たり家の人に尋ねたりして買い物の仕方や必要な材料についてノートにまとめる。① ○　買うまでの手順やきまりの把握 (3)　模擬の場で楽しく買い物をする。①(本時) ○　店内の情報の収集・活用 (4)　作り方についてまとめる。① ○　作り方の手順や安全・衛生面の把握	３．学習したことを生活に生かす。 (1)　スーパーマーケットで買い物をしてお好み焼きパーティーをする。 ○　目的の達成感を味わうこと (2)　自分の家の近くのスーパーマーケットで買い物をしてお好み焼きを作る。 ○　学習してきたことを生活にいかすこと
手だて	※　スーパーマーケットでの直接体験の場の設定	※　買い物の様子を振り返るビデオの提示 ※　個に応じたノートの提示 ※　模擬の場の設置	※　買い物の様子を撮した写真やビデオの提示 ※　家庭との連携

本時の目標

○　情報の提供者や学習ノートから情報を収集・活用して自分のお好み焼きの材料をお金を支払って買いそろえることができる。

Ａグループ：情報の提供者や品物の写真からの情報をもとに，自分が必要とする材料を買いおつりをもらうことができる。

Ｂグループ：情報の提供者や品物の配置図からの情報をもとに，自分が必要とする材料を金種を選んで買うことができる。

Ｃグループ：情報の提供者や品名・値札からの情報をもとに，自分が必要とする材料を金種を組み合わせて買うことができる。

準　　備　個に応じた学習ノート，模擬の場の設定（スーパーマーケット），お金

学習指導の過程

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
１．買い物の紙芝居を見たり，お好み焼きの写真を見たりして本時学習のめあてについて話し合う。 ○　お好み焼きの材料を買おうとする目的意識を明確にもたせること めあて みんなでおこのみやきのざいりょうをかおう。	１．本時学習への目的意識を明確化する支援 ○　スーパーマーケットで買い物をするＡ君の紙芝居の提示 ○　お好み焼きの完成写真の提示
２．スーパーマーケットの模擬活動の場で，お好み焼きの材料の買い物をする。 (1) 情報の提供者から話を聞いたり，モデル演示を見たりする。 ○　模擬活動の手順を把握させること (2) 模擬活動の場で自分の材料を探して買う。 ○　材料の場所や種類，個数等の情報を収集・活用すること ○　材料の場所や種類が分からない場合に情報の提供者に尋ねること ○ 代金を支払って品物を受け取ること Ａグループ ・材料の写真や空き袋などをもとに必要とする材料を見付けること。 ・写真を使って意思を伝え，品物の場所に連れていってもらうこと ・持っているお金を払っておつりを受け取ること Ｂグループ ・材料の写真や配置図をもとに必要とする材料を見付けること。 ・写真や言葉で意思を伝え，指示された方向に自分で行くこと ・金種を選んで支払うこと Ｃグループ ・名前や値札等をも必要とする材料を見付けること。 ・言葉を使って情報の提供者に材料の場所を尋ねること ・値段を読んで金種を組み合わせて支払うこと	２．スーパーマーケットの利用の仕方を身に付けさせる支援 ○　模擬活動の場の設定 ○　個に応じた「スーパーマーケットノート」 Aグループ：品物の情報 Bグループ：品物の配置に関するの情報 Cグループ：品名や値段，個数に関する情報 ○　情報の提供者からの提示 Aグループ：材料の場所まで一緒に行く Bグループ：「お菓子の近く」「牛乳の横」等の位置を示す言葉 Cグループ：「むこう」「奥の方」等の方向を示す言葉 ○　個に応じたお金の提示
３．買いそろえた材料をもとに本時の活動を振り返る。 ○　自分の材料を買うことができた達成感を感じること ○　実際の場での買い物に意欲をもつこと	３．活動への達成感・成就感を味わわせる支援 ○　買いそろえた材料の提示 ○　材料を買えたことへの賞賛

第５・６学年梅組　音楽科学習指導案

指導者　　坂　田　佳　美

題　　材　　たんじょうパーティーにいこう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢４歳から８歳程度の５年生３名，６年生３名で構成されている。子供たちの音楽への興味・関心，歌や動きで表す力，音楽的要素のとらえ方という観点から実態をまとめると次のようなことが言える。①藤見学芸会などの発表会に向けて，友達と一緒に合唱したり，合奏したりすることに意欲を示し，喜んで表現しようとする。②自分たちの生活に身近なもの（動物，乗り物，アニメの登場人物など）が登場し，簡単な筋がある楽曲では，楽曲の登場人物になりきったり情景を思い描いたりしながら，楽しく表現に取り組む。③伴奏や楽曲テープで強調された拍や速度，強弱などの音楽的要素を感じて，表現を変えたり工夫したりしていく。

○　本題材のねらいは，ドラえもんのたんじょうパーティーに行くために，ドラえもんの好きなものをプレゼントに持っていくという音楽劇の活動を通して，楽曲（「おかしをつくろう」「とんでいこう」「ドラえもんの歌」）の歌詞や音楽的要素をとらえて，歌ったり，体を動かしたり，楽器を鳴らしたりして表現することである。音楽劇の活動を行う本題材には，①ストーリーによって構成された複数の楽曲を，歌詞や音楽的要素をとらえて表現すること，②ストーリー展開に沿って，楽曲の情景をとらえて友達と一緒に表現していく楽しさを味わうこと，などの学習内容がある。この学習を通して，子供たちは，楽曲の情景を思い描いて歌唱・身体・器楽表現をする楽しさや友達と共に表現する楽しさを感じることができ，音楽の楽しみ方を身に付ける上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，子供たちが楽しく音楽劇の活動に繰り返し取り組んでいけるようにする。そのためにまず，であう段階では，ドラえもんからの手紙と地図をきっかけに，誕生会をお祝いするためのプレゼントを作り，ドラえもんのたんじょうパーティーに行き演奏を聴かせる，というストーリー提示に沿って楽曲と出会う。次に，あらわす段階では，個に応じて歌詞譜やリズム譜，楽譜を使いながら，表現活動に繰り返し取り組んでいく。ここでは，友達と一緒にそろって歌ったり体を動かしたりしないと空を飛んでいけない，速く歌わないとたくさんつくれない，などストーリーからの必然で表現のねらいを具体化し音楽的要素をとらえられるようにしていく。最後にまとめる段階では，これらの音楽劇を七夕会で発表し活動を振り返るとともに，表現したことの成就感を味わえるようにしていく。

目　　標

○　「たんじょうパーティーにいこう」という音楽劇の活動を通して，歌ったり，体を動かしたり，楽器を鳴らしたりして友達とかかわりながら楽しく表現することができる。

計　　画（約４時間）

段階	であう（1時間）	あらわす（２時間）		まとめる（１時間）
活動と内容	１．音楽劇のストーリーと楽曲に出会う。 ○　活動に興味・関心・見通しをもち，楽曲を全体的に鑑賞すること	２．たんじょうパーティーに行く音楽劇を行う。 (1) 大きなケーキを作り合奏を練習する場面 ○　拍や速度(ゆっくり)を感じて表現すること	(2) どらやきをたくさん作って行く場面(本時) ○　拍や速度(速く)，フレーズを感じて表現すること	３．音楽劇を七夕会で発表する。 ○　活動を振り返り，成就感を味わうこと ○　友達とのかかわりを広げること
手だて	※　地図と手紙の提示 ※　個に応じた歌詞譜・リズム譜・楽譜の提示	※　音楽劇の情景物を配置した場の設定 ※　個に応じた歌詞譜・リズム譜・楽譜の提示 ※　楽曲を構成した伴奏テープ		※　七夕会の場の設定 ※　一人一人の表現を賞賛し合う場の設定

本時の目標

○　どらやきをたくさん作ってたんじょうパーティーに行く場面で，友達と一緒に拍やフレーズ，速度(速さ)を感じて歌ったり，体を動かしたり，楽器を鳴らしたりすることができる。

Aグループ：教師や友達の表現を見ながら，楽曲の特徴的な部分をとらえて，拍やフレーズ，速度(速さ)を感じて歌ったり，体を動かしたり，楽器を鳴らしたりすることができる。

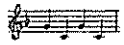
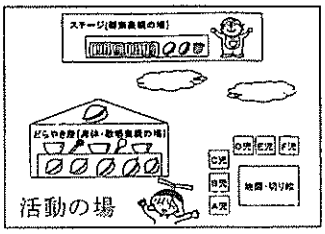
Bグループ：自分から，楽曲を部分的にとらえて，拍やフレーズ，速度(速さ)を意識して歌ったり，体を動かしたり，楽器を鳴らしたりすることができる。

Cグループ：自分なりに工夫して，楽曲を全体的にとらえて，拍やフレーズ，速度(速さ)をとらえて歌ったり，体を動かしたり，楽器を鳴らしたりすることができる。

準　　備　手紙，地図，個に応じた歌詞譜・リズム譜，楽譜，タケコプター，楽器，伴奏テープ

学習指導の過程

<table>
<tr><th>活　動　と　内　容</th><th>個　の　活　動　を　促　す　支　援</th></tr>
<tr><td>1．ドラえもんからの手紙を読み，地図上で切り絵を操作して，本時学習のめあてを知る。
○　活動の見通しをもつこと
めあて
どらやきをたくさんつくって，ドラえもんのたんじょうパーティーにいこう。
2．どらやきをたくさん作ってたんじょうパーティーに行き，お祝いの合奏をする音楽劇を行う。
(1) どらやき屋までタケコプターで飛んでいく場面で歌ったり体を動かしたりする。
○　歌詞や拍をとらえた身体･歌唱表現
(2) どらやきをたくさん作る場面で歌ったり調理の道具で拍を打ったりする。
○　歌詞や拍・フレーズ・速さをとらえた身体･歌唱表現

どらやきつくろう (ドン ドン ドン ドン) おかしをつくろう (ドン ドン ドン ドン)
Aグループ：○　  の部分で歌ったり速さを感じたりすること
Bグループ：○　 や の部分で交互に歌ったり速さを意識したりすること
Cグループ：○　曲をとらえて交互に歌ったり速さに合わせて表現したりすること
(3) ドラえもんのところまでタケコプターで飛んでいく場面で歌ったり体を動かしたりする。
○　歌詞や拍をとらえた身体･歌唱表現
(4) ドラえもんに会う場面で合奏をする。
○　拍をとらえた器楽表現
3．ドラえもんから感想を聞き学習をまとめる。
○　表現したことへの満足感を味わうこと</td><td>1．活動への見通しをもたせる支援
○　手紙，地図，切り絵の提示
 
活動の場
2．表現する楽しさを味わわせる支援
「とんでいこう」の身体・歌唱表現
○　合わせて歌わないとタケコプターが飛ばないというストーリーの提示
Aグループ：歌詞の一部分の強調
Bグループ：拍をそろえて歌うことの声かけ
Cグループ：6／8拍子を強調する伴奏
「おかしをつくろう」の身体・歌唱表現
○　どらやき作りの道具別に2グループに分かれて，急いで作るというストーリーの提示
Aグループ：速さに合わせた手拍子のモデル演示，交互に歌うパートの強調
Bグループ：速さに合わせた拍の取り方・交互に歌うタイミングの声かけ
Cグループ：速さを変化させる伴奏
「ドラえもんのうた」の器楽表現
○　他の楽器での合奏をドラえもんが求めるというストーリーの提示
Aグループ：色分けした階名の楽譜，リズム譜，演奏の補助
Bグループ：色分けした階名の楽譜
Cグループ：階名の楽譜
3．表現の満足感を味わわせる支援
○　ドラえもんからの感想の提示</td></tr>
</table>

全体会（１日目）

○　あいさつ

学　　長　　菰口　治
学　校　長　　藏　源一郎

◇　主題発表

「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」
―子供と創る教科・総合的学習の展開―

研究主任　　樺島　穣

◇　教科等発表

○　国語科

「心を働かせたことばを生み出す国語科学習」

―物語の世界と豊かにかかわる読書活動の構想―

国語科部　　吉田　正樹

○　体育科

「自らの健康をつくりだす体育科学習」

―運動への自信が高まる学習の構想―

体育科部　　稲津　一徳

◇　メ　モ

第１日目　午後の部

公開授業指導案

第１学年１組　体育科学習指導案

指導者　　笠　　宏　照

単　　元　どうぶつらんどで　じゃんぷ！じゃんぷ！じゃんぷ！

指　導　観

○　本単元は，動物のすばらしい動きに対して子供が感動し，それを基に多様な「跳ぶ」運動のイメージを発想しながら，高さ・長さ・リズムをとらえた動きを身につけることをねらいとするものである。具体的な内容は，楽しく遊びながら，①動きへの感動を通して，高く・長く・調子よくなど要素をとらえた跳ぶ運動をイメージする中で，自分の動きを工夫したり、広げたりすること，②運動刺激を基にして自分の発想を広げながら動きを工夫する中で達成感を味わい運動に親しむ態度を培うこと，などである。

○　本学級の子供たちは，幼稚園や保育園における活動の中で，固定施設や遊具を使ったいろいろな「跳ぶ」遊びなどを経験してきている。その中で，友達と一緒に楽しく活動しながら，たくさん動くことやいろいろな動きをすることに目を向けてきている。しかし，自分たちから動きを工夫したり，広げたりしていこうとする姿は十分見られない。以上の点から，子供たちがとらえやすい跳ぶことについて感動的な動物の動きから特性をとらえ，自分の動きをイメージする中で，工夫したり，広げたりして思いきりからだを動かすような学習は有効である。

○　本単元の指導にあたっては，子供たちが「跳ぶ」運動のイメージを持ち，それを広げ深めながら旺盛に活動して達成感を味わうことができるようにする。そのために，つかむ段階では，特徴的な跳ぶ動きをする動物を提示することで，場に応じた跳ぶ動きをして遊ばせながら活動全体をとらえさせる。ふかめる段階では，動物の勢いよく・素早く跳ぶなどの感動的な映像を提示することによって，動きのイメージを広げさせ「跳ぶ」運動に高さ・長さ・リズムなど要素を加えた動きを工夫させたり，広げさせたりして楽しく活動させる。ここでは，子供のイメージに応じて動きの要素を複線的に扱うようにする。あじわう段階では，身につけてきた動きを発揮しながら，楽しくどうぶつらんどで遊ぶことができるようにする。

目　　標

１．動きをイメージしながら，高さ・長さ・リズムなどの動きの要素をとらえたいろいろな「跳ぶ」運動を工夫し，広げながら楽しく活動することができる。

２．運動刺激を感受し、自分の跳ぶ動きのイメージを広げ，深めながら、できるようになった動きにに対する達成感を感得することができる。

計　　画（約５時間）

段階	つかむ（１時間）	ふかめる（３時間）	あじわう（１時間）
活動と内容	１．多様な「跳ぶ」運動をイメージしながら，どうぶつらんどの遊びをとらえる。 ○　「跳ぶ」動きに特徴ある動物を見て運動要素としての課題をとらえること	２．運動のイメージを広げ深めながら追究する要素をとらえて遊ぶ。◎(本時2/3) 高さをとらえて跳ぶ遊びをする。 ↓↑　↓↑　↓↑ 長さをとらえて跳ぶ遊びをする。 ↓↑　↓↑　↓↑ リズムをとらえて跳ぶ遊びをする。	３．３つの場を構成し，高さ・長さ・リズムを工夫した動きを発表する。 ○　自分で工夫し，広げた動きを発表しながら達成感を感得すること
手だて	※　運動要素をとらえイメージが膨らむ特徴的な動物の提示 ※　ためしの動きの場の提示	※　感動的動きの要素を含む映像の提示 ※　高さ・長さ・リズムの多様な動きが出るような場と道具の提示	※　達成できたことを発表しあう活動の設定 ※　動きの達成カードの提示

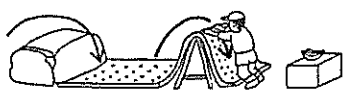
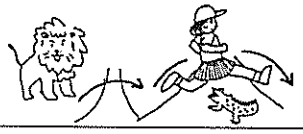
本時の目標

1．「跳ぶ」動きをイメージしながら，高さ・長さ・リズムなど自分の課題に応じた場で多様な跳ぶ運動を楽しむことができる。

2．イメージをもとに自ら場を選んだり，ストーリーを設定したりして，跳ぶ動きを工夫したり，広げたりしながらできた動きの達成感を感得することができる。

準　　備　　動物のビデオ（具体例は「学習指導の過程」を参照），テレビモニター，跳び箱，段ボール箱，鉄棒，マット，動きのカード，ペープサート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習について話し合う。 ○　動きの課題に応じた場の選択と試しの遊び ○　イメージを広げ，跳ぶ動きの課題を深めてを遊ぶことの意識化 ※　動きの課題を明確にし，感動が高まるようなビデオを視聴させる。	○　このまえは，それぞれのばでえさをとるためのいろいろなとぶうごきをしてあそんだな。 ○　あんなにすばやくうごいている。すごいな。
【ビデオ映像例】 猿山における一場面。 高いところにいた猿が，下に置かれた餌を見つけて勢いよく上手に素早く降りて餌をとって食べるところ。	【とらえさせる要素】 ○　餌をとるために一生懸命に速く動くところ ○　高いところから素早くおりてくるところ 〔高さの捉え〕
めあて どうぶつらんどで　ちからいっぱい　じゃんぷをして　たのしくあそぼう。	
2．イメージに応じて課題や場を選び，それぞれ跳ぶ動きをしながら楽しく遊ぶ。 (1) 高さ・長さ・リズムの場で跳ぶ動きをして遊ぶ。 ○　動きの特徴をとらえ動きをイメージしながら，自分で選んだ場で跳ぶ遊びをすること ※　高さ・長さ・リズムに違いの出る場を設けることによっていろいろな跳ぶ動きをすることを捉えさせる。	○　あのようにすばやくうごいてとんでみよう。 ○　えさをとるためにいわばをすばやくとびこえていくぞ。 ○　すこし，たかいいわをとんでみよう。
【高さを課題とする活動例】 「たかいいわばをすばやくこえてえさをとるよ。」  【長さを課題とする活動例】 「つかまらないようにおおきくとびこえるよ」  【リズムを課題とする活動例】 「ひっかからないようにつづけてとびこえてえさをとるよ」 	
(2) 遊び方を交流し，課題を広げたり深めたりする。 ○　高さ・長さ・リズムの場における，動きの深まりや工夫の紹介をして遊び場と動きを決定すること ○　場の操作や課題を変えて活動を再開すること ※　ペープサートを使った交流によって動きを意識させ，課題を深めたり，変えたりして遊ぶことを助言する。	○　ながくとんだり，ちょうしよくとんだりしてえさをとりにいくこともできるな。 ○　でも，もっとたかいところをとんでみよう。
3．本時学習について話し合いまとめる。 ○　跳ぶ動きができたという活動の達成感を感得すること ※　動きの広がり深まりや工夫を出し合わせ，賞賛する。	○　たかいいわばをすばやくとびこえることができた。

第３学年１組　算数科学習指導案

指導者　　小　森　　晃

単　　元　　時間を大切に使う工夫をしよう（時刻と時間）

指　導　観

○　本単元は，子供たちが生活の中で時間をどのように使っていけばよいかを考えて，時刻や時間を求めたり，合理的な時間の使い方を考えたりすることをねらいとしている。子供たちが何気なく見ている時計を，時刻を知ったり時間を求めたりして自ら行動する道具として見直していく本単元には次の内容がある。①目に見えない時間を量としてとらえて，これまでに学習してきた測定の方法や計算の技能，時計をよむ技能などを総合的に発揮しながら時間を測定したり計算したりできる。②時間を決めて，自ら行動を起こすといった計画的に生活する態度を養うことができる。

○　本学級の子供たちは，毎日の生活の中ではチャイムを聞いて５分～数十分程度の時間を意識して行動している。しかし，自分で時間を意識してものごとを急いだり，計画を変えたりといった主体的で積極的な生活までには高まっていない。これは時計を見て時刻をよんでも，それから次の行動までの時間を計算して求めることが十分できていないためである。そこで本単元では時刻と時間の関係をとらえて，時間を計算しながら自分の１日の生活を見直していく。そして何をいつからはじめるか計画を立てたり実践したりして余裕をもって生活していこうとする態度を養う。

○　本単元の指導にあたっては，時間の使い方についての追究主題を設け，その主題に迫る過程で時刻や時間の意味や計算の仕方をとらえ，時間を大切にした生活を心がけようとする態度を養うようにしたい。そのためにまず，つかむ段階では子供たちの時間の使い方の不十分さから追究主題を設定する。次に調べる段階では１日の中で，どんなことをどれくらいの時間をかけているかを詳しく調べていく。そこでは１２時制の繰り上がり，下がりのない計算から繰り上がり，下がりのある計算へ，さらに２４時制の計算へと時間の計算の仕方を高めていく。最後にまとめる段階では，２４時制を越えて２日間にまたがる睡眠時間について，時間の計算の仕方をもとに調べたり保健の先生から睡眠時間のお話をうかがったりして，自分に合った望ましい就寝時刻や起床時刻を決めていく。

目　　標

１．時間の流れを帯図などに表したり時計模型の針の動きに置き換えたりして，その大きさをつかみ比較や測定，計算による処理を行うことができる。

２．自分にあった睡眠時間を調べたり，それを確保するために時間の流れをタイムテーブル化してとらえたりして一日を計画的にすごそうとすることができる。

計　　画（約６時間）

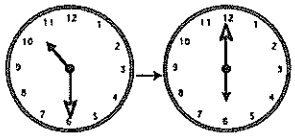
段階	第１次　つかむ段階(1時間)	第２次　調べる段階(3時間)	第３次　まとめる段階(2時間)
活動と内容	１．毎日の生活を振り返り，改善しなければと感じている事柄について話合い追究主題をつかむ。 ○　１日の中で何にどれくらい時間を要しているか調べる追究主題をつかむこと	２．起床，登校，下校，帰宅食事，入浴，学習，就寝などの時間の資料から，それにかかる時間を調べる。 ○　１２時制の時間を計算で求めること ○　24時制の計算をすること	３．自分の睡眠時間を求めて時間の使い方をまとめる。 (1) 睡眠時間を求める。(本時) ○　２日間にまたがる時間を計算で求めること (2) 時間の使い方をまとめる ○　１日の計画を立てること
手だて	※　自分たちが日頃から改善しようと考えていることのアンケート結果の提示	※　１日の時間の流れを表すタイムテーブルや時計模型を使った計算方法の見通し	※　１日～２日と連続できるタイムテーブルを使った計算結果の見直し

本時の目標

○　自分の就寝時刻と起床時刻から睡眠時間を求めたり，望ましい睡眠時間を確保するための就寝時刻を求めることができる。

準　　備　　タイムテーブルの用紙，時計模型，学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．「朝一人で起きる」という点について，一人で起きられない原因を話し合い，睡眠時間を調べていくめあてをもつ。 (1) 睡眠時間が十分かどうか分からないことに気づかせる。 ○　朝，起きられない原因の把握をすること (2) 前日の睡眠時刻と当日の起床時刻から睡眠時間を求めていくめあてをもつ。 ○　日が変わった時の時刻から時間を求める見通しをもつこと ※　日が変わらないときのいろいろな時間を調べた既習の資料から「後の時刻－前の時刻」の計算を使う見通しをもたせる。 めあて すいみん時間はじゅうぶんにとれているかどうか調べよう。	○　朝，一人で起きないといけないけど，なかなか一人で起きられない人がたくさんいるな。 ○　朝，一人で起きられないのは睡眠時間が短いからだろう。 ○　今までの学習と同じように寝た時刻と起きた時刻から計算できそうだ。
2．既習の２４時制や１２時制での時間の求め方をもとに，就寝と起床といった１日を越えた２つの時刻から睡眠時間を求めて，既習の方法をどのように活用したか話し合う。 (1) 前日の就寝時刻と当日の起床時刻から睡眠時間を調べる。 ○　日が変わったときの２つの時刻から時間を求めること ※　時計模型と帯図を使って，自分の睡眠時間を調べさせる。 ・午後１０時半～午前６時の場合 １２時－１０時３０分＝１時間３０分 ６時間－０時＝６時間 ６時間＋１時間３０分＝７時間３０分 午後１０時３０分→２２時３０分 ２２時３０分－６時＝１６時間３０分 ２４時間－１６時間30分＝７時間30分  ※　深夜12を０時と読みかえた既習の資料を提示しておく。 (2) 睡眠時間を調べた結果と調べ方について発表し，既習の方法をどのように使ったかを話し合う。 ○　既習の数理の活用の仕方を話し合うこと	○　前の日には何時に寝たかな。次の日の何時に起きたかを調べないといけないな。 ○　そのままでは計算できないぞ。１２時で分けて計算しないといけない。 ○　僕の場合だと１２時までに１時間半，それから６時までに６時間，合わせて７時間半寝ている。 ○　後の時刻－前の時刻の計算は１２時を０時と見ればつかえるぞ。 ○　１日は24時間だから，起きている時間をひけば寝ている時間がわかる。
3．養護の先生から３年生の望ましい睡眠時間についてのお話を聞き，自分の睡眠時間と比較して，十分に睡眠をとるための就寝時刻をきめて学習をまとめる。 ○　３年生の望ましい睡眠時間について知ること ※　養護の先生から望ましい睡眠時間についてのお話しをうかがう。 ・３年生では１日に９～10時間は睡眠をとりましょう。 	○　小学生は９時間から10時間ぐらいは寝ないといけないのか。それだったら僕は睡眠が足りてないな。夜は９時ぐらいには寝るようにしよう。

第４学年１組　　国語科学習指導案

指導者　　吉　田　正　樹

単　　元　韓国（かんこく）と日本の昔話研究をしよう　－「フンブとノルブ」と「舌切り雀（したきりすずめ）」－

指　導　観

○　本単元は，韓国と日本の類似した昔話を読み比べ，その面白さを追究する読書活動に取り組み，感想や意見をまとめることをねらいとしている。韓国の昔話を教材化することで，①両国の昔話の共通点・相違点から面白さを追究する読書課題をもち，読書の範囲を広げながら目的的に読書活動に取り組むこと，②ことばや構造に着目して，登場するもの・こと・人の違いや話の筋立てに込められた意味を考え確かに読み取ること，②類似した昔話を読み比べ，昔話の背景にある文化の違いや人々の願いを考え，書きまとめたり話し合ったりして広げ深めること，を学習内容として設定する。これは，子供の読書生活に生きて働く読書力と異文化とかかわる心情を高める価値ある内容である。

○　本学級の子供たちは，伝承物語（再話・創作）としては６教材（日本の作品4教材・外国の作品2教材）の学習を行い，独特の語り口による表現と筋の面白さを読み味わっている。また，読者の立場から自分が面白かったところを明らかにしたり思ったこと・考えたことをまとめたりして読みを深める力も育ってきている。しかし，自分で何らかの目的や課題をもって，それを追究するために複数の物語を読み比べたり読み広げたりする読書の力には高まっていない。また，韓国の生活・文化を日本と比べながら追究するあらつ学習（「隣の国・韓国調べ隊！」）に取り組んでいることや，３学年時における「三年とうげ（韓国の昔話）」の学習経験から，韓国の昔話を読むこと・調べることへの興味・関心が高揚している。

○　本単元の指導においては，目的的・創造的な課題追究活動として読書活動が展開できるように単元を構成する。具体的には，つかむ段階で，韓国の代表的な昔話「フンブとノルブ」に出会わせ，類似する「舌切り雀」との読み比べに取り組ませながら，韓日の昔話の比較を通して韓国の文化や人々の願いを考える追究の観点や読み方をつかませ，類似する韓日の昔話を集めて昔話集をつくっていく。しらべる段階では，昔話を選択し読み比べる活動と韓国の人を招聘した読書交流活動を位置づけ，追究の複線化に応じた支援を行う。あらわす段階では，研究成果を報告書に書きまとめ発表発信する活動を位置づけ，感想を表現・交流しながら新たな課題発見と読書の拡充につないでいく。

目　　標

１．韓国と日本の昔話を読み比べ面白さを追究する課題をもち，大事な事柄を書きまとめたり必要なところは細かい点に注意したりしながら，自分の考えを練り上げ相互に比べ話し合うことができる。

２．昔話の読み比べを広げながら，自他国の文化の独自のよさや人々の願いを考えることができる。

計　　画（約12時間）

難	第１次　つかむ（４時間）	第２次　しらべる（４時間）	第３次　あらわす（４時間）
活動と内容	１．教材文（基本教材）を読み比べて，韓国と日本の昔話を読み比べ面白さを追究する計画を立てる。 (1) 韓国の昔話「フンブとノルブ」を「舌切り雀」を読み比べ，研究計画を話し合う。　③ 昔話のことばや構造を考える読み ○　課題と追究の観点・方法把握 (2) 昔話を集め昔話集をつくる。① ○　必要な作品の収集・選択・整理	２．両国の昔話集から自分たちが選んだ昔話を読み比べて面白さの追究をする。 (1) 課題追究の観点をもとに選んだ昔話を読み比べ面白さを書きまとめる。　③ 昔話の共通点や相違点を考える読み ○　大事な事柄をまとめ読み取ること 昔話の独自性を考え追究する読み (2) 韓国の人を招いて中間報告会を開き，昔話を比べ面白さを話し合う。（本時）① ○　考えを比べながら話し合うこと	３．韓国と日本の昔話の面白さを研究報告書としてまとめ，発信する。 (1) 他の昔話を読み比べ，面白さを研究報告書として書きまとめる。　③ 昔話の普遍性を考え追究する読み ○　感想をまとめ読み深めること ○　筋道立てて書きまとめること (2) 韓国の人を招いて研究の成果を報告し合う。（最終報告会）　① ○　中心点を明確にし発表すること
手だて	※　典型的な昔話の基本教材化 ※　追究の観点と方法の焦点化 （表現性・構造性・独自性・普遍性を追究する課題と読書計画）	※　類似する昔話の教材化（韓日昔話集） ※　昔話と韓国文化に詳しいG. T. の招聘 ※　読書追究・読書交流の場の設定と支援	※　研究報告文のモデル提示 ※　最終報告の場の設定とG. T. の招聘 ※　読書を発展させる情報提示（情報コーナー）

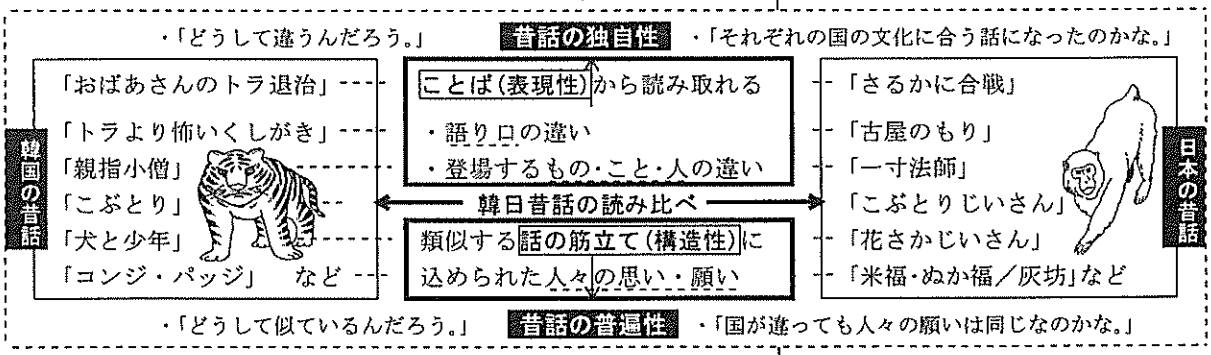
本時の目標

1．自分が選んだ昔話の読み比べ方を根拠に，韓国と日本の昔話の相違に対する考えを話し合い，昔話の独自・普遍なよさに気づくとともに，他の昔話を読み比べる意欲を高めることができる。

2．韓国の人との話し合いを通じて，異文化のもの・こと・人とかかわる調和的な心情を高める。

準　　備　　児童；研究ノート綴，発表に必要な資料　　教師；学習の流れ図，読み比べ一覧表

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの昔話研究の経過をゲストの趙潤奎先生に説明することを通して，本時学習のめあてを確かめ合う。 ○　めあての把握と話し合う観点の明確化 （めあて）　韓日の昔話を読み比べ考えたことをもとに，趙(チョウ)先生と昔話の面白さを話し合おう。 ※　韓国総合教育院の趙潤奎先生をG.T.として招聘する。	○　どうして国は違うのにこんなに似ている話が多いのだろう。昔から交流をしながら昔話も伝え合っていたからかな。
2．趙先生とともに昔話の面白さについて話し合う。 (1) 韓日の昔話を読み比べて，その共通点や相違点について自分なりに考えたことを提案し合う。 ○　中心点が明確になるように筋を通して説明すること ○　友達と自分の考えを比べながら聞き取ること ※　視覚に訴える資料を活用した提案に取り組ませる。	○　話の筋は似ていても登場するものが違うのは韓国と日本の生活の違いに関係がありそうだ。 ○　韓国の昔話にはトラは悪役として登場しているが，日本の昔話には出てこない。
(2) 提案への質疑応答を全体に広げながら，韓国の人ともに，疑問点について話し合う。 ○　昔話のことばと構造に着目しながら，その相違点や共通点を明確にしたり理由を考えたりすること ○　一人一人の読み方・考え方の違いを理解すること	○　トケビは，日本の昔話のおにのような意味や役割をしているみたいだぞ。人物の設定の仕方にもずいぶん違いがあるな。 ○　同じような話が国をこえて時代をこえて語りつがれてきたのは人々の願いと関係がある。
	
※　面白さ追究の観点をもとに読みを整理し考えさせる。 ○　昔話の独自性についての理解と普遍性への気づき ※　G.T.からは，研究への評価と特に昔話の背景につながる韓国文化についての説明をしていただく。 ・昔話の違いにつながる韓日の文化の違い(特にかくれた文化) ・韓国の人も日本の人も願いは同じ(両国に在住しての経験をもとに)	○　韓国の人たちにとって，トラは怖いだけでなく，あこがれたり祭られたりする大切な存在なんだな。見方・考え方も違う。 ○　韓国も日本も人々は同じ願いをもっている。それぞれの国の文化に合う話に変わりながらも同じような筋の話が大切に語りつがれてきたんだ。
3．韓国の人や友達と話し合ったことをもとに，韓日昔話の面白さをさらに追究していくための読書計画を立てる。 ○　目的や課題をもって計画的に読書を広げていくこと ※　感想や疑問と読書計画を立てるノートを活用させる。	

第４学年２組　音楽科学習指導案

指導者　　豊　村　雅　義

題　　材　全校のみんなに伝える音楽をつくろう

指　導　観

○　本題材のねらいは，子供たちが学校生活で全校の友達に伝えたいことをもとに，様々な楽曲を聴いたり，演奏したりする幅広い音楽活動を通して，子供の音楽経験を生かしながら旋律づくりに重点を置いた表現の能力を育てることである。具体的な内容は，①学校の友達に伝えたいことを音楽で意欲的に表現しようとすること，②言葉のもつリズムや抑揚を生かして旋律をつくること，③唱法や奏法を工夫してつくった旋律を表現すること，である。この題材を通して，音楽を通して自分たちの伝えたいことが人に伝わることに気づき，音楽のよさを味わうことができると考える。

○　本学級の子供たちは、歌唱表現において、歌詞内容を理解して唱法を工夫することができるようになってきている。器楽表現では，鍵盤ハーモニカや打楽器の演奏もできるようになってきている。つくって表現する活動では，ふし遊びやリズム遊びなどの経験から，即興的にリズムをつくったりふしをつくったりすることはできるようになってきている。これらのことから，自分たちの伝えたいことを音楽で表すことは初めてであるが，自分なりの音楽をつくってみたいという意欲はもっており，全校のみんなに伝える音楽づくりという目的をもたせることで，今までの音楽経験を生かした活動が期待できる。このことは，音楽にかかわる喜びを味わう子供を育てる上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，子供たちが自分の音楽経験を生かして生き生きと個性的な表現ができるようにしたい。そのために，つかむ段階では，上学年になって委員会活動が始まった感想などから，学校生活をよりよくするために学校放送などで全校に呼び掛けたいことを話し合わせる。そして，生活の中で聴かれるコマーシャルソングなどを提示し，言葉に合わせた旋律づくりの見通しをもたせ，短い歌詞をつくらせる。あらわす段階では，参考曲を鑑賞したり，様々な音楽表現について調べたりして，言葉のリズムや抑揚を図に表しながら歌詞に旋律をつけさせていく。あじわう段階では，できあがった表現を学校放送や全校集会などで発表する機会を設け，達成感・有用感を味わわせるとともに，生活に生きる音楽のよさを感じ取らせていく。

目　　標

１．全校児童に伝えたいことをもとに短い歌詞をつくり音楽で表現することを通して，自分たちの伝えたいことが印象深く伝わる音楽のよさを実感することができる。

２．言葉の抑揚やリズムを生かして，短い旋律をつくって表現することができる。

計　　画　（約５時間）

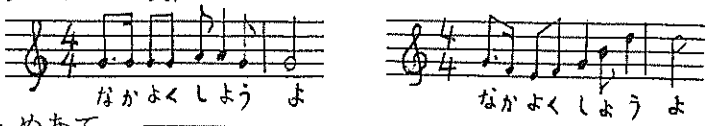
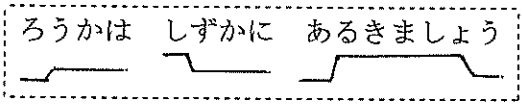
段階	つ か む（２時間）	あ ら わ す（２時間）	あ じ わ う（１時間）
活動と内容	１．学校生活の中から伝えたいことをもとに歌詞をつくり，学習の見通しをもつ。 ○　学校生活の中から伝えたいことを選び，歌詞をつくること ○　旋律づくりの見通し	２．歌詞に合わせた短い旋律をつくり，表現を練り上げる。 ○　参考曲の鑑賞やコマーシャルソングを調べ旋律をつくること ○　つくった旋律を言葉のリズムや抑揚等から見直すこと（本時２／２）	３．つくった音楽表現を全校に発表し，満足感や達成感を味わう。 ○　発表のためのビデオの収録・楽器の選択や奏唱法の工夫 ○　音楽のよさの感受
手だて	※　放送委員会からの呼びかけによる学校生活をよりよくするための標語づくり ※　言葉に合わせた旋律の例示	※　言葉のリズムを生かした旋律の参考曲や資料の提示 ※　音型やリズムのパターンの例示 ※　聴き合い活動の場の設定	※　委員会活動や全校集会などの発表の場の設定 ※　表現の高まりをとらえさせる自己評価・相互評価

本時の目標

○　学校生活の中で全校のみんなに伝えたいことがよりよく伝わるように，歌詞の言葉の抑揚や旋律の感じなどから，つくった旋律を見直すことができる。

準　　備　リコーダー・鍵盤ハーモニカ，学習ノート，五線譜・音階譜，旋律のモデルカード

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの活動を振り返り、本時のめあてを話し合う。 (1) 各自でつくった歌詞を発表し合う。 ○　学校生活をよりよくするために伝えたいことの想起 (2) 音高の異なる旋律のモデルを聴き，本時のめあてを話し合う。 ○　歌詞の言葉の抑揚と旋律のつながりを感じ取ること ※　表現のモデルとして，同じ歌詞で異なる旋律を提示し，言葉の抑揚と旋律の関係や感じの違いをとらえさせる。 （表現モデルの例）  めあて 歌詞の言葉の調子を生かして，全校のみんなに伝える歌のメロディをよりよくしよう。 2．全校のみんなに伝えたいことにつけるメロディをつくる。 (1) 自分のつくった歌詞の言葉の抑揚を捉える。 ○　言葉の抑揚の把握 ※　モデルの歌詞を提示して言葉の抑揚の捉え方を示し，自分の歌詞を音読させて抑揚図をつくらせる。 （例）  (2) 自分の歌詞の言葉の抑揚を生かして，つくった旋律を見直す。 ○　言葉の抑揚を生かした旋律の見直し ※　言葉の抑揚図と旋律線を重ね合わせることで旋律を見直させる。うまくいかない子には，音型を示すなどして，個別の支援を行う。 ○　見直した旋律の記譜 ※　子供の実態に応じて，五線譜・音階譜を選ばせる。 （例）〈音階譜〉 晴れた日は　そとでげんきにあそびましょう ソソミミソ　ラソミラーソミララシシドー 3．つくり変えた旋律を発表し合い，次時への見通しをもつ。 ○　音楽的な高まりの自覚 ※　自己評価カードに，自分の歌について工夫したことや頑張ったことを書かせ，音楽的な高まりを振り返らせる。	○　学校生活をよくするために伝えたいことはたくさんあるんだな。 ○　放送委員会の活動の中で自分がつくった音楽が使われるんだからいい音楽になるようにしたいな。 ○　自然な流れに聞こえるメロディとそうではない感じのメロディがあるぞ。 ○　メロディには終わる感じと続く感じがあるんだね。自分の伝えたい言葉に合わせてもう少し工夫したいな。 ○　言葉の上がり下がりを生かしたメロディをつくって，聴いた人の印象に残るような歌にしたいな。 ○　自分の歌詞の言葉の調子はどうなっているのかな。調べてみたいな。 ○　言葉の調子や続く感じのところ終わる感じのところが分かってきたぞ。 ○　言葉の上がり下がりの調子に合ったメロディになるように工夫してみよう。 ○　言葉の調子に合わせてメロディをつくりかえると聞き易くなったぞ。 ○　よりよくつくり変えたメロディを記録して，いつでも演奏できるようにしよう。 ○　全校のみんなに伝わる歌ができたみたいだ。発表してみたいな。

第６学年１組　理科学習指導案

指導者　　手　島　宏　樹

小　単　元　　食べ物の行方を探ろう

指　導　観

○　本小単元のねらいは，自分が取り入れた食べ物の消化・吸収の働きを，食べた物の変化の面と各消化器官の働きの両面からとらえることである。そして，消化器官の巧みさやすばらしさを実感をもってとらえるとともに，自分の生活を見直し消化・吸収に関わる経験を科学的に考え，認識を高めていくことである。具体的には，①食べ物は，口，胃，腸などを通る間に消化，吸収され，吸収されなかったものは排出されること，②口，胃，腸などの消化器官が巧みに働きあって消化・吸収を繰り返し生命を維持していることが主な内容である。この学習を通して，日常の生活経験と消化・吸収の働きを関係づけて考え自分の生活を見直す態度や生命を尊重する態度，体の内部のつくりや働きを多面的に追究する能力を育てることができると考える。

○　本学級の子供たちは，日常の生活経験において自分の体の内部の働きを漠然ととらえている。例えば，食べ物を食べ，いらなくなったものが糞や尿になって体外に出ること，食べ過ぎすぎると胸やけがすること，といった程度である。消化・吸収に関する現象を日常意識しないで生活しており体の内部で起こる生命現象を科学的に関係づけて考えるまでには至っていない。そこで，子供の認識を各消化器官が関連しあって働くことによって生命が維持されるという認識まで高めたい。

○　本小単元の指導にあたっては，食べ物と自分の体の働きとの関連において，子供の見方・考え方を，より科学的な見方・考え方に構成し直して日常生活に役立てていくことをねらっている。そのためにまず，給食など日常の生活経験や動物のえさと糞の比較等から，自分の体では食べ物がどこでどう変化しているかという意識をもたせる。そして，食べ物の通り道や変化を実感できる食べる・飲むといった活動を位置づけ，食べ物の変化と各消化器官の働きについての根拠と見通しをもたせたい。次に，食べ物の変化と器官の働きの両面からの計画的追究が行われるように動物の内臓や人工胃液，人体模型など教材・教具を準備し子供の求めに応じて提供していくようにする。最後に日常疑問に思っている消化・吸収に関する現象を科学的に説明したり追究したりして，自分の生活を見直せるようにしたい。

目　　標

１．自分なりの見方や考え方を大切にしながら，確かな見通しと計画的・多面的な追究活動を繰り返し，消化・吸収の働きを調べることができる。

２．消化・吸収の働きを実感し，各器官が関連しあって働くことにより生命を維持しているという見方や考え方へと高め，自分の生活を見直すことができる。

計　　画（約８時間）

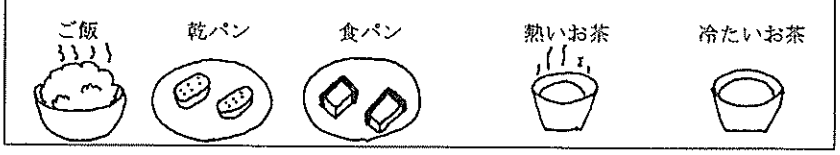
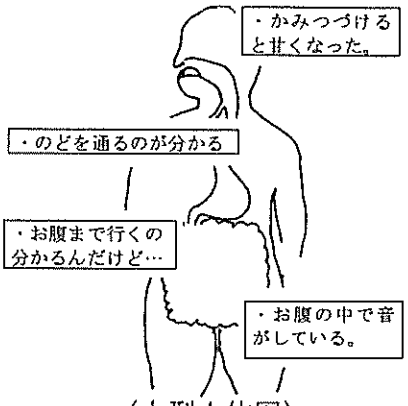
段階	見出す（２時間）	調べる（４時間）	見直す（２時間）
活動と内容	１．食べ物の変化や消化器官の働きについて話し合う。 ○　食べ物と排出物の違い ○　消化器官の概観 ○　食べたり飲んだりしての実感と事実の取りだし（本時２／２） ○　追究課題の焦点化	２．食べ物の行方を変化と器官の働きの両面から調べる。 (1)　自己の見通しを立てる① (2)　見通しにもとづいた計画的多面的追究を行う。③ ○　消化器官の働きと物の変化 ○　消化器官の巧みさの実感 ○　一連の消化・吸収の働き	３．生活上の消化・吸収の疑問を解決する。 ○　疑問の焦点化と追究 ・食べ過ぎた時の消化 ・咀嚼不足の時の消化 ○　生活の見直し ・消化・吸収の科学的考察
手だて	※　動物のえさと糞の比較 ※　食べ比べ・飲み比べ ※　床式人体図での交流	※　でんぷんのり，人工胃液，豚の腸などの準備と提供 ※　ニワトリの内臓の準備提供	※　疑問の掘り起こし ※　消化薬，削り節・鰹節の準備提供

本時の目標

○　食べ物が体の中でどう変化しているのかという意識のもと，食べたり飲んだりしたときの実感を伴った事実から食べ物の変化や各消化器官の働きについて予想することができる。

準　　備　　ご飯，パン，乾パン，お茶，水，聴診器，大型床式人体図

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し，本時学習のめあてを話し合う。 ○　食べ物と排出物の違いの想起と消化器官の位置の確認 ○　本時学習のめあての把握 食べ物を食べたり飲んだりして，食べた物はどこでどうなっているのか予想しよう。	○　ウサギの糞は水分もなくころころしている。 ○　体の中で水分や食べ物の栄養をとっているのだろう ○　食べものは，口・食道・胃・腸を通って行くんだ。
2．実際に食べたり飲んだりして，食べ物の変化や各消化器官の働きを実感し，事実を取り出す。 ○　食べ物を食べたり飲んだりした時の実感 <食べ比べ・飲み比べ>・・・聴診器をお腹やのどにあて  	○　食べた物は，体の中のどこでどうなっているのかな ○　食べてみて，どんなに変化していくか調べてみたい ○　小さくなっている。どろどろになってきたぞ。 ○　本当だ。かんでいるとぱさぱさだった乾パンがだんだん溶けてどろどろになってきた。甘くなってきた。
・小さくなりだ液と混じって形状や味が変化する食べ物 ・食べ物を胃へ送る食道 ・食べると音が出る消化器官 ※　食べ物の形状や味の変化，食べ物の通り道，各消化器官の働きを実感しやすくするために，口にする量やかむ回数などの条件を設定し，上記食材や聴診器を準備する。  （大型人体図）	○　冷たいお茶がお腹まで行くのが分かった。 ○　お腹まではいるのは分かるんだけど，それからどこへ行くのかはっきりしない ○　お腹にはいるとごろごろと音がするのはなぜかな。 ○　だ液が食べ物を甘くするのだろう。
○　食べ物の変化についての事実の取りだし ※　活動後，感じ取った事実を学習ノートに書かせる。	
3．食べたり飲んだりして感じ取った事実を交流し合い，食べ物がどこでどうなっていくのかを予想する。 ○　取りだした事実の交流と食べ物の変化の予想 ・口→食べ物が小さく水分を含み甘くなる→食べ物を甘くするだ液 ・食道→食べ物が通るのが分かる→食べ物を胃に送る食道 ・胃，腸→食べ物がたまる，音の実感→たまったものを変化させる胃や腸 ※　大型人体図を使って取りだした事実をまとめ，体の中での食べ物の変化を予想する交流の場を設定する。	○　胃液という言葉を聞いたことがある。胃液と食べ物が混じってますますどろどろになるのだろう。 ○　便は水気がなくなっているから腸で水分を取ったりするのかもしれない。
○　追究課題の明確化 ・食べ物を甘くするだ液の働き　　・食べ物を送る食道の働き ・食べ物を変化させる胃や腸　　・各器官で変化する食べ物	○　消化器官の働きと食べ物の変化を調べよう。

第６学年２組　あらつ学習指導案

指導者　　石　田　耕　一

単　　元　　希望と誇りⅡ　～ようこそ先輩！　開こう，未来への扉を～

指　導　観

○　本学級の子供たちは，５年あらつ学習「希望と誇りⅠ」において，附属福岡小学校の素晴らしい伝統を実感し，それを受け継ぎながらこれからの附属福岡小学校を自分たちの手で創っていこうとする意欲をもつことができた。そして，あらつ学習「感動表現！藤見学習」では，最上級生として藤見学芸会の運営に携わり，新たな伝統づくりの第一歩を踏み出すことができた。また，「希望と誇りⅠ」における平野真敏さん(音楽家になるという小学校時代の夢を実現された先輩)との出会いにおいては，将来の希望や夢に胸を膨らませる子供たちの姿があった。それらを受けて，本単元では，附属福岡小学校の先輩に学びながら，自己の生き方を考えていく学習を展開する。

○　本単元は，附属福岡小学校の先輩方や身近な人たちの生き方に学びながら，自分自身の将来の希望や夢について考え，自己の生き方を追究していくことをねらいとしている。子供と創る学習の主な内容は，①自分の将来の希望や夢をもち，それを実現したいという願いをもつこと，②附属福岡小学校の先輩方や身近な人たちと共に希望や夢について考え，希望や夢の実現に向けた追究活動を行うこと，③友達や家族に自分の希望や夢を伝える「みんなの『夢』交流会」を開くことである。このような学習は，希望や夢の実現に向けた主体的な調査活動や実践活動の姿が期待できるとともに，自分自身を見つめ，自己実現に向けて前向きに生きていこうとする生き方の探求という意味からも価値がある。

○　本単元の指導にあたっては，自分の希望や夢に向かって前進しようという目的意識のもと，主体的な課題追究を通して自分自身の成長を実感できるように，活動構成とテーマ別追究に応じた教師の働きかけの面から支援を工夫する。活動構成については，①５年「希望と誇りⅠ」の学習を振り返る中で自分たちと同じような希望や夢を実現された先輩方と出会わせ，希望や夢を実現させることの素晴らしさを実感させる場の設定，②先輩方や身近な人たちとの交流を通して，自分の希望や夢について考え実践していく活動の設定，③追究してきた希望や夢について友達や保護者の方々に伝える活動の設定という流れで構成する。テーマ別追究に応じた教師の働きかけについては，それぞれの夢を実現された附属福岡小学校の先輩方の人材バンクづくりの支援を行っていく。

目　　標

１．自分の希望や夢に向かって前進しようという目的意識のもと，同じような夢を実現された先輩方や身近な人たちとの交流を通して，希望や夢について考え実践していくことができる。

２．自分の希望や夢について考える中で，これからの自分自身の生き方について考えを深め，これからの生活への意欲を高めることができる。

計　　画（約１０時間）

	見出す段階（３時間）	追究する段階（５時間）	生かす段階（２時間）
活動と内容	１．５年「希望と誇りⅠ」の学習を振り返り，自分の希望や夢について話し合う。　①	３．先輩たちや身近な人たちと共に夢について考えたり，追体験したりする。	４．「みんなの『希望や夢』交流会」を開く。
	○　希望や夢の具体的な意識化	(1) 調査活動の計画を立てる。　①	(1) 自分たちの交流会ををする。
	２．夢を実現された先輩方の話を聞き，夢について話し合う。②	○　追究していく人を探すこと，調査の見通し	○　希望や夢の実現への思いや考えの深まり　本時　①
	○　先輩方の生き方への共感	(2) 夢について調べたり，追体験したりする。	(2) 保護者との交流会をする。①
	○　夢の実現に向けての見通し	○　夢の実現に向けての見通し　③&課外	○　自分の成長の実感，これからの生活への期待感
		(3) 夢に対する自分なりの思いをまとめる。①	
		○　希望や夢の実現への思いや考え	
支援	※　希望と誇りⅠの活動ＶＴＲ	※　先輩人材バンクの提供	※　追究に対する先輩方や保護者の方々からの肯定的な評価
	※　先輩方との交流の場の設定	※　先輩方との協同活動の場の設定	

本時の目標

(1) 夢について追究してきた自分なりの思いや考えを進んで表現したり，疑問点を友達や先輩方に進んで尋ねたりして，積極的に交流会に取り組むことができる。

(2) 友達や先輩方との交流を通して，希望や夢の実現への思いや考えを深めながら，これからも希望や夢に向かって生き生きと生活していこうとする意欲を高めることができる。

準　　備　　児童 ── 希望や夢についての課題追究における表現物や収集資料
　　教師 ── G．Tの招聘，及びG．Tとの交流の場の設定

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．先輩方や身近な人たちの生き方を追体験したことを振り返り本時学習のめあてについて話し合う。 ○　夢を実現させることの素晴らしさ，実現に向けた願い ○　交流会の目的意識の明確化 めあて 友達や先輩方と希望や夢についての交流会をしよう。 ※　夢を追究するきっかけとなった平野真敏さんに本時に対する期待感を話していただく場の設定。 2．追究してきた夢について交流し合う。 (1) 自分(たち) が追究してきた夢について発表する。 ○　先輩の生き方の追体験や自分なりの追究活動を通して得た課題や問題意識 ※　幾つかの追究を発表させ，質問や先輩方との意見交換を通してポスターセッションにおける交流の視点を具体化する。 (2) お互いの追究をポスターセッション形式で交流する。 ○　友達や先輩との交流を通した希望や夢に対する自分の考えの深まり，希望や夢をもつことの素晴らしさの実感 ○　友達の夢の追究に対する共感 ○　先輩方への積極的なかかわり ※　交流カードに，友達の追究に対する意見や質問を表現させ，相互交流させる。 3．友達や先輩との交流をもとに，希望や夢についての新たな思いを発表し，みんなで話し合う。	○　夢は遠いもののように感じていたけど，今はとても身近で大切なものだと感じています。 ○　夢を実現させること，そのために大切なことについてみんなで考えよう。 ○　なりたいと思っていた職業についての見方も変わりました。今日は，先輩との交流で，疑問点や悩んでいることを解決していきたいです。 ○　先輩方と話をする中で，また少し夢が見えてきました。自分も先輩に一歩ずつ近づけそうな気がしています。 ○　同じような夢でも，友達とは，少しずつ考え方が違うんだなと思いました。 ○　～くんは，自分の夢を真剣に考えていてすごいと思いました。
〈夢を実現するとは，どういうことだろうか。そのためには何が大切なのだろうか。〉 希望や夢はそれぞれ違う ・人の役に立つ仕事がしたい。 ・自分の好きなことを続けたい。 ・～さんのようになりたい。 ※　具体像や根拠を押さえることで，共通点を意識させる。 共通点 夢を実現すること →・自分自身の満足感・喜び ・自分自身の成長 ・ずっと追い続けるもの ◇ 人の役に立つこと 周りの人を幸せにすること 先輩との比較 岡部さん・90歳になっても夢を大切にしています。 芽野さん・野球や喋ることが本当に好きなんです。 平野さん・自分や聴衆が心地よくなることです。	
※　先輩方に子供たちの追究活動の価値を意味付けていただく。 ○　希望や夢に向かって努力していこうとする意欲の高まり	○ 夢をこれからも大切にしていきたいと思います。

第３・４・５・６学年３組　国際交流タイム指導案

指導者　篠原裕子

単　　元　世界のお茶パーティーを開こう

指導観

○　本単元は，日本や自分の住んでいた国のお茶の楽しみ方を知ることを通して，文化の独自性や共通性をとらえるとともに，滞在していた国に対する愛着と誇りをもたさせることをねらいとしている。本単元には次の内容がある。①自分の滞在していた国のお茶についてその種類や作法，楽しみ方の習慣，歴史的背景などを知り，住んでいた国へ一層の愛着と誇りをもつことができる。②各国のお茶についての交流を通して，それぞれの国の食文化の独自性に気づいたり共通性を見いだしたりすることができる。③お茶を楽しむことを通して，他国文化に関心をもつとともに日本や滞在していた国の文化に慣れ親しんでいこうとする態度を養うことができる。

○　本校の帰国子女学級の子供たちは，滞在国であったシンガポール，フィリピン，マレーシア，アメリカ，カナダ，スウェーデン，イギリス，フランス，スペインでの生活を通して各国の食文化に直接ふれる貴重な体験をもっている。そこから，日本の食文化との違いに気づき始めそれぞれの良さに関心をもってきている。しかし，海外での体験は文化の裏にある人々の考え方を十分にとらえるまでにはいたっておらず，国際理解として各国の文化の独自性や共通性を知り，よさを感得していこうとする態度の育成が必要である。そこで本単元では，どこの国にもあるお茶の文化を調べて，その独自性と共通性を見いだしていく。そして，日本や滞在していた国のお茶に関心をもち，生活の中に楽しみとして取り入れていく態度を養う。

○　本単元の指導にあたっては，世界のお茶パーティーを開こうという活動目的を設け，その目的に向かって滞在していた国のお茶の文化を追究し，滞在国への愛着を深めることができるようにしたい。そのためにまず，つかむ段階では日本のお茶文化に触れさせ，お茶を通して国の食文化のすばらしさが見えることに気づかせる。このことから，「滞在していた国のお茶について調べ，パーティーを開こう」というめあてをもたせる。次に深める段階では，滞在していた国のお茶を調べるために留学生の方や保護者の方から情報収集ができるようにする。お茶に関して，習慣・場の雰囲気・入れ方・歴史的背景などを調べ，滞在国文化を再認識させたい。そしてわかったことを表現物にまとめ，交流のためのパーティーの準備をする。最後に広げる段階ではパーティーを開き，場の雰囲気を再現したり試飲をしてもらったりして，お茶や文化を語りその感想を聞く。このパーティーを通して滞在国の文化理解をしてもらったことへ満足感を味わわせたい。

目　　標

１．お茶の楽しみ方を通して各国の文化の共通性や独自性をとらえるとともに，滞在国への愛着と誇りをもつことができる。

２．いろいろな国のお茶について関心をもち，お茶を楽しむことができる。

計　　画　（約９時間）

階	つかむ（３時間）	深める（４時間）	広げる（２時間）
活動と内容	１．自分の滞在していた国のお茶について想起し，学習のめあてをもつ。 (1) 日本のお茶席を体験する。 ○　日本のお茶に関する文化のすばらしさにふれること (2) 滞在国のお茶を想起する。 ○　各国のお茶文化のがあることの気づきと滞在国文化（お茶）を調べる意欲	２．自分の滞在していた国のお茶について調べる。 ○　お茶に関する情報の獲得 ・飲む習慣や場の雰囲気 ・お茶の入れ方（体験を含む） ・歴史的背景 ○　滞在国文化のよさの再認識と愛着の深まり ・お茶文化の独自性への気づき	３．調べたことを交流する。(1) (1) 世界のお茶パーティーを開く。 ○　各国のお茶文化への理解と共通性の感受 ○　滞在国文化への誇りの感得　（本時） (2) 感想をまとめる。 ○　滞在国への愛着や文化に対する誇りを表現すること
手だて	※　日本のお茶席体験活動の場の設定とＧ・Ｔ（茶道の先生）からの文化説明	※　学年発達に沿った追究の仕方をさせること ※　求めに応じたＧ・Ｔの招聘	※　各国のティータイムの場の雰囲気を再現すること ※　試飲の場の設定

本時の目標

○　お茶パーティーを通して他国文化のよさや共通性に気づくとともに，滞在国のお茶文化について伝えることで誇りをもつことができる。

準　　備　調べたことをまとめた表現物，各国のお茶，Ｇ・Ｔ，アンケート用紙

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．これまで各滞在国のお茶について調べてきたことを想起し，本時パーティーのめあてを確かめる。 ○　滞在国のお茶に関する情報と深まった愛着の想起 ○　本時，滞在国文化の紹介と他国文化との比較をすること めあて 世界のお茶パーティーを開き，自分の住んでいた国のお茶を紹介しよう。	○　自分が住んでいた国のお茶のことが詳しくなったのでみんなに紹介をしたいな。みんなに自分の国のことが理解してもらいたいな。 ○　みんなの調べたお茶は，どんなときにどのように飲むのだろう。歴史も知りたいな。
2．調べたことについて紹介したり，ほかのグループのお茶を楽しんだりする。 (1) パーティーの進め方を確かめる。 ○　プログラム確認 ※　情報収集でお世話になった方や保護者の方を招待して，調べたことを紹介することへの意欲を高めさせる。 (2) お互いの調べたお茶について交流し合う。 ○　滞在国のお茶を通した文化への誇りの感得 ○　他の国のお茶を通した文化理解 〔アメリカグループ〕 アメリカ カナダ 〔アジアグループ〕 シンガポール マレーシア フィリピン 〔ヨーロッパグループ〕 イギリス フランス スペイン スウェーデン ※　各国のティータイムの場の雰囲気を再現させたり，試飲の場を設けたりすることで，自分の滞在国について調べたことを意欲的に伝えさせる。 ※　お茶を紹介した相手から感想をもらい，理解してもらったことを確かめることができるようにする。	《パーティープログラム》 1．はじめの言葉 2．ゲストの方の紹介 3．会場説明 4．交流前半 5．交流後半 6．感想発表 7．終わりの言葉 ○　これまでお世話になった留学生の先生やお母さん方，お茶の先生にも調べたことをわかりやすく発表したり，お茶を楽しんでもらったりしよう。 ○　アジアには昔から飲まれているからだにいいお茶があるのだな。 ○　スペインのバナナティーが甘いのは，おやつの時間に飲むからなのだな。 ○　アメリカは，いろんな人種が集まって，歴史もあまり長くないからいろいろな国の文化を取り入れていることがわかった。 ○　味や作り方はずいぶん違うけど，どの国にもお茶を楽しむ文化があるのだな。 ○　世界のお茶パーティをして，各国のティータイムを味わうことができて，楽しかったな。 ○　自分の住んでいた国のお茶や文化のすばらしさがわかってもらえてよかったし，なんだか誇らしく思えてきた。
3．本時で交流した感想を出し合う。 ○　いろいろな国のお茶のついて入れ方や作法，楽しみ方の違いや共通性についてわかったこと ○　友達等に伝え理解してもらったことで滞在国文化への誇りをもつことができたこと	

ふじ・さくら・梅組　合同生活単元学習指導案

指導者　舛元俊文　坂田佳美
早川由洋　谷崎和一郎

単　　元　老人保健センターの人たちにうたやげきをみせよう

指　導　観

○　本校特殊学級の子供たちは，低学年ふじ組５名，中学年さくら組６名，高学年梅組６名の計１７名で構成されている。子供たちは，これまでに１年から６年までの課題単元や行事単元を通して，友達とかかわりながら課題を解決し目的を達成する経験を積み重ねてきている。その中で，同学年や，異学年あるいは中学校のお兄さんお姉さんなどの友達とかかわる力や，目的や課題を意識する力が育ってきている。しかし，ボランティア的立場に立って，学校以外の人たちと接したことはなく，自分たちが生活の主体者としてとして自分たちから働きかけたり，働きかけを受け入れたりしながら，相手に喜んでもらえるようなものを見せるといった経験をするまでには至っていない。

○　本単元のねらいは，「老人保健センター」という病院と家庭の中間的な施設として，家庭復帰をめざす人たちのいる施設を，相手が喜んでもらえるように考えて訪問できるようにすることである。老人保健センターを訪問しようという目的意識をもち，訪問の仕方や自分たちにできる老人保健センターの人たちのことを考えた劇や歌などの課題を解決し，老人保健センターの人たちに喜んでもらえるようにすることである。具体的な学習内容は，①老人保健センターを訪問し，喜んでもらおうという目的を意識し，見通しをもって課題解決に取り組むこと，②施設の訪問の仕方を身につけること③自分たちにできる相手のことを考えた劇や歌をすること，④施設の人たちと関わることなどである。以上のことは，目的達成による自分への自信や，課題解決による関わる力，相手のことを考えた働きかけ方，おじいちゃんおばあちゃんに対するかかわり方などの生活に生きる知識・技能，といった生活力を培うことができ，子供たちの豊かな生活を考える上で意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，子供たちが目的意識をもって訪問し，老人保健センターの人に喜んでもらえるようにするための，活動構成の工夫，げきやうたをつくるための場の設定，見通しをもったり，振り返ったりするための個に応じたノートなどの支援を行う。具体的には，①老人保健センターの人たちからの求めに応じて訪問し，課題を意識する活動，自分たちにできる相手のことを考えた，劇や歌をつくる活動，つくった劇や歌を訪問し見せる活動，といった活動の構成。②老人保健センターの職員の方をゲストティーチャーに招き，老人保健センターの人たちのことを考えたげきやうたをつくる場の設定，③挨拶や話し方など施設訪問の仕方や，かかわり方を個に応じて写真や絵，文でまとめるノート，などの支援を行う。

目　　標

○　老人保健センターの人に喜んでもらえるように，相手のことを考えたげきやうたをつくり，訪問することができる。

計　　画（約17時間）

段階	であう（４時間）	つくる（９時間）	いかす（４時間）
活動と内容	１．老人保健センターを訪問する。 ○ 老人保健センターの人との話し方やかかわり方を意識すること ○ 老人保健センターを訪問し，プレゼントを渡したりして，目的意識をもつこと	２．施設を訪問するための課題を解決する。 (1) 施設の訪問の仕方を知る。　① ○ 行き方，施設での態度など訪問の仕方の把握 (2) 劇や歌，合奏をつくる。　② ○ 自分たちにできる劇や歌，合奏をつくること (3) 劇や歌をつくり直す。　①（本時） ○ 相手のことを考えて工夫すること (4) 継続的にげきやうたづくりを行う。⑤ ○ 課題解決の活動の継続	３．老人保健センターを訪問して劇や歌を見せる。 ○ 楽しくげきをしたり歌ったりすること ○ 施設の訪問の仕方や人とのかかわりを広げること
手だて	※ 施設を訪問する場の設定 ※ 施設の人と交流する場の設定	※ 個に応じた，かかわり方の個別ノート ※ 教えてもらった様子を想起できるビデオ ※ 個に応じた相手を意識できる教師の働きかけ	※ 発表をする場の設定 ※ できるようなったことに対しての賞賛，励まし

本時の目標

○　老人保健センターの職員の人の話を聞きながら，今までつくってきたげきやうたを相手の人のことを考えて声や動作，働きかけなど喜んでもらえるようにつくりかえることができる。

	低学年	中学年	高学年
学年目標	中学年や高学年の友達やセンターの人の働きかけを受けながらみんなと一緒に活動することができる。	低学年やセンターの人に働きかけると共に，高学年の働きかけを受け入れてみんなで仲良く活動することができる。	低学年や中学年の友達やセンターの人に働きかけながらみんなと協力して活動することができる。

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
課題解決	教師や友達に促されて相手を意識し，手をもって歌ったり，握手したりすることができる。	自分で相手を意識し，動きを大きくしたり手をもって拍をとりながら歌ったりすることができる。	相手のことを考えながら動きを大きくしたり，歌詞カードを工夫したりすることができる。

準　　備　　ゲストティーチャーの招聘，げきやうた，合奏をつくる場の設定，など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1．前時までの活動を振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　自分たちで劇や歌をつくったことの想起 ○　喜んでもらえるようにするという課題意識の喚起 めあて げきやうたを　みてもらって，よろこんでもらえるように　つくりなおそう。	1．本時学習の意欲を引き出す支援 ○　今までの活動を想起できるビデオ ○　老人保健センターの人からのもう一度きてほしいといった内容のビデオ 2．相手を意識するための支援 ○　今までつくってきた劇や歌を発表する場の設定 ○　老人保健センターの職員の人にアドバイスを聞く場の設定 ・　相手のことを考えたよく聞こえるような声の大きさや，はっきりとしたしゃべり方分かりやすい動作など ○　よく聞こえるような話し方や大きな動作のモデル演示 Aグループ：相手のことを考えて，手を取りながら歌ったりできるような声かけや動作援助。友達からの働きかけを受け入れることができるような声かけ Bグループ：喜んでもらえるように，手を取って拍を取りながら歌うことが意識できるような声かけや動きを大きく見せるための声かけ。友達に教えたり，働きかけを受け入れるような促しの声かけ Cグループ：相手のことを考えた声の大きさや速さ，歌詞カードを書くことを意識できるような声かけ。友達への働きかけの促し。
2．劇や歌をみてもらい，喜んでもらえるようにつくりなおす。 (1) つくった劇や歌をみてもらう。 ○　相手を意識しながら演奏すること (2)　老人保健センターの人にアドバイスを受けながらつくり直す。 ○　相手のことを考えながらつくり直すこと。	
Aグループ：・　教師や友達に教えてもらったりして相手を意識し手をもったり肩に手を添えながら歌ったりすること。 Bグループ：・　自分で相手を意識し友達の声かけを受けたり教えたりして手をもって拍を取りながら歌ったりすること。 Cグループ：・　相手のことを考えて声の大きさを変えたりゆっくり言ったり歌詞カードを指示しながら歌ったりすること。	
3．本時学習のまとめをする。 ○　自分の活動への満足感・充実感の感得 ○　老人保健センターを訪問することへの期待感をもつこと ○　老人保健センターの職員の人への感謝の気持ちをもつこと	3．活動への満足感・充実感を味わわせる支援 ○　できるようになったことを意識できるような教師の賞賛の声かけ ○　センターの職員の人に感想を聞く場の設定

◇　総合フォーラム

○　テーマ「実践紹介！特色ある総合的学習をどうつくるか！」

本校実践紹介

―自校の伝統を実感する活動を通して，自分の希望や夢を描き出す実践例―

提案者　石田　耕一

愛媛大学附属小学校実践紹介

―地球規模で「自分（たち）の生き方」を問い続ける環境学習の実践例―

提案者　田頭　良博

熊本大学附属小学校実践紹介

―国際理解「トラベルバディ」の実践例―

提案者　前田　康裕

総合フォーラム

コーディネーター　教　頭　山下　浩徳

コメンテーター　福岡教育大学　教　授　寺尾　愼一

第２日目　午前の部

公開授業指導案

第１学年２組　生活科学習指導案

指導者　　石　田　耕　一

単　　元　　あらつのかがやくおじいちゃん・おばあちゃん

指　導　観

○　本学級の子供たちは，学校探検や「ジャンボすべり台で遊ぼう」の学習において，学級の友達や上級生、先生方に進んでかかわり、楽しくふれ合う姿が多く見られた。高齢者のふれ合いについては、核家族化が進み日常的なかかわりは少ないと言えるが、「おじいちゃんは、いろんなことが得意で教えてくれるんだよ。」などの言葉からは、祖父母に対する親しみやふれ合いへの期待感が見取れる。活動づくりについては、一緒に活動する→試す→作り変えるという一連の工夫する活動を経験しているが、つまずきの場面を自分たちの力で解決していく力は十分に育っていない。

○　本単元は，出会ったお年寄りが得意とする活動づくりを通して、地域のお年寄りとふれ合う喜びを味わうことをねらいとしている。ここでの主な学習内容は、①お年寄りが得意とする活動づくりを通して、お年寄りの優しさや知恵の素晴らしさを感じ取ったり、感謝の気持ちをもったりすること、②「お年寄りと一緒に楽しく遊ぼう。ちびっ子名人になろう。」という思いをもって、お年寄りが得意とする活動を一緒に試したり作り変えたりすること，③力を合わせて「ちびっ子名人発表会」を開くことである。このような学習は、高齢者のよさを肌で感じ取り、一緒に活動づくりを繰り返していく中で、高齢者と共に生きようとする心や態度を育てる上から価値がある。

○　本単元の指導にあたっては，地域のお年寄りの方々とふれ合う喜びを十分に味わうことができるように，活動の内容設定と活動構成から次のように支援を工夫する。①お年寄りの知恵や技を大いに発揮できるもの、製作や遊びの難易度が低く親しみのもちやすいもの、製作や活動づくりにおける工夫の高まりや協同活動を含んでいるものを内容設定の条件とする。②お年寄りとふれ合う。→お年寄り一人一人の知恵や技への共感をもとに、ふれ合いコースを決める。→お年寄りと一緒に活動を工夫する。→「ちびっ子名人発表会」を開くという活動構成を行う。そして、「ひたる」段階においては、「(ア)お年寄りと一緒に活動をする。→(イ)活動を試したり、お年寄りやグループの友達と活動を作り変えたりする。」という一連のサイクルを繰り返しながら、活動づくりの工夫の高まりや協同活動の積み上げを実感できるように支援する。

目　　標

１．お年寄りが得意とする活動づくりを通して、お年寄りと一緒に活動する楽しさを味わいながら、お年寄りとふれ合う喜びを味わうことができる。

２．お年寄りが得意とする活動を一緒に工夫しながら、お年寄りの知恵や技を自分のものとしていき、「ちびっ子名人発表会」を開くことができる。

計　　画（約１２時間）

段階	であう段階　（３時間）	ひたる段階　（６時間）	いかす段階　（３時間）
活動と内容	１．荒津のお年寄りの方々と出会い、その方が得意とする活動を一緒に行う。　②	３．ふれ合いコースごとに一緒に活動したり、試しつくり変えたりする。　⑥	４．「ちびっ子名人発表会」を開く。
	○　お年寄りの素晴らしさや一緒に活動する楽しさの感受	○　「おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に楽しく遊ぼう。ちびっ子名人になろう。」という思いからの活動づくりの工夫、協同活動の積み上げ	(1) 名人発表会の準備をする。　②
	２．お年寄りとの出会いを振り返り、ふれ合いコースを決める。①	○　好意の深まりや感謝	○　プログラム作り，役割分担
			(2) 名人発表会を開く。　本時 ①
			○　お年寄りの優しさや知恵の素晴らしさ、感謝や愛着の深まり
			○　知恵や技を身に付けた満足感
支援	※　地域のお年寄りとの出会いの場やその方々が得意とする活動を楽しむ場の設定。	※　一緒に楽しむことのできるという視点からの活動内容の設定。	※　感謝の気持ちを表現したり、継続的なふれ合いを生み出したりする活動の設定
	※　ふれ合いコースの決定の場	※　活動の工夫の高まりや協同活動の積み上げを実感できる場の設定。	・お手紙の交流、「憩いの家」の訪問

本時の目標

1．お年寄りが得意とする活動における技や知恵を自分たちが身に付けてきたことを実感することで、お年寄りへの感謝の気持ちや親しみを深めていくことができる。

2．練習で身に付けてきた知恵や技を友達や保護者、参観の先生方に紹介したり、お年寄りや友達と一緒に活動したりして、ちびっ子名人発表会をすることができる。

準　　備　　児童 ― ちびっ子名人発表会の準備、　教師 ― お年寄りや保護者への依頼

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの活動を振り返り，本時めあてについて話し合う。 ○　お年寄りへの親しみの深まり、一緒に活動する楽しさ ○　ちびっ子名人発表会への期待感や意欲の高まり ※　前時までの流れ図やビデオの提示，お年寄りや保護者の紹介、本時に対する期待感を発表してもらう場の設定。 めあて ちびっこめいじんはっぴょうかいをしよう。	○　今日まで，山本さんからいろいろな折り紙を教えてもらったよ。折り紙が大好きになったよ。 ○　今日は，楽しみにしていたちびっ子名人発表会の日だよ。早くみんなで遊びたいな。
2．ちびっ子名人発表会を行い、プログラムに沿ってみんなで楽しく遊ぶ。 (1) 練習してきた技や製作物、遊び道具を紹介する。 ○　練習における知恵や技の習得、製作物や遊び道具づくりにおける工夫 ※　具体物や実演を交えて知恵や技を紹介する場の設定 (2) ちびっ子名人発表会をする。 ○　お年寄りや保護者に積極的に働きかけること。 ○　習得した技への自信、他者からの承認による満足感	プログラム ①始めの言葉　②先生の話 ③技や作品の発表 ④発表会 ⑤感想、⑥終わりの言葉 ○　これは、本田名人さんに教えてもらって作った竹とんぼです。 ○　遊び方や作り方を紹介します。
【ちびっ子名人発表会の場】 【折り紙】ピョンピョンカエル　・みなさん見て下さい！～君のカエルはても高く跳びます。 虫、動物　・いろいろな虫や動物たちを折れるようになりました。 【お花づくり】 ※　今までの協同製作の積み上げが見える場の設定。 ※　花づくりの実演の場 ※　折り紙の実演の場、山本さんとの協同製作の場の設定。 【昔の遊び】竹とんぼ　・一緒に竹とんぼを作ってみませんか。 竹でっぽう・竹笛　・一緒にあやとりやお手玉で遊びましょう。 あやとり・お手玉 ※　それぞれコーナーにおいて、活動づくりの積み上げの場と技の実演の場を設定する。	
3．ちびっ子名人発表会の感想を発表する。 ○　お年寄りの方々への親しみの深まりや感謝の気持ち ○　練習して身に付けてきた知恵や技への自信 ※　山本さんたちとのかかわりや感謝、活動づくりの楽しさに目を向けた発言のよさを認め価値づけていく。 ※　お年寄りや保護者に感想を発表してもらう場の設定。 ○　お年寄りとの継続的なふれ合いに向けた意欲の高まり	○　～名人さんやお母さんたちから上手になったねって褒められたよ。 ○　始めはできなかったけど、名人さんから教えてもらってできるようになりました。

第２学年１組　　国語科学習指導案

指導者　　吉　田　正　樹

単　　元　おにをさがしてブックトーク！

指　導　観

○　本単元は，課題をもって，鬼の登場する本を読み広げ，自分の思いや考えを付加しながら内容の大体を紹介し合うことをねらいとしている。鬼を追究する読書活動とブックトークを教材化して，①物語に登場する鬼を追究する読書課題をもとに，易しい本に興味をもち楽しんで読書活動に取り組むこと，②時間的な順序や事柄の順序などを考えながら，鬼の言動や姿や力・性格などの大体を読むこと，③場面の様子などについて想像を広げながら，鬼の言動に対する自分の思いや考えをもつこと，④自分が選んだ鬼の話の粗筋を相手に分かるように話したり，話題に沿って話し合ったりすること，を主な学習内容として設定する。これは，子供たちの読書生活に生きて働く読書力と鬼を創った伝承文化に親しんだり図書館の人たちとかかわったりする心情を育む価値ある内容である。

○　本学級の子供たちは，第１学年時より物語教材（伝承物語3教材・創作物語6教材）の学習を積み重ね，場面の様子や人物の気持ちを想像したり内容の大体を読み取ったりする力を高めてきている。また読書にも慣れ，比較的長文の物語も読みこなせるようになりつつある。そこでこうした力を駆使しながら，さらに，自ら進んで読書活動に取り組む読書態度・読書意欲を高めるとともに，読書活動も量・質の面から広げ高めていきたい。具体的には，①自分なりの読書課題をもって本を読み広げること，②自分の思いや考えを付加しながら読書の記録をまとめること，③本を紹介し合ったり自分の思いや考えを相互に交流し楽しんだりすることを通して，読書活動をより活性化できるようにしたい。

○　本単元の指導においては，読書課題として物語に登場する鬼の言動と姿・力・性格などを追究する読書活動として単元を構成し，読書を活性化する交流活動としてブック・トークを位置づける。まず，つかむ段階では，総合図書館の子供図書館司書の方をゲストに招き，鬼をテーマにしたブックトークと基本教材に出会わせることで，本に登場する鬼を追究し自分たちもブックトークに取り組んでいく読書課題をもたせ読書活動への意欲を高める。しらべる段階では，基本教材の読み比べでとらえた鬼を読み比べる観点をもとに，図書室や総合図書館を活用しながら，それぞれが読み取った鬼の姿や力・性格や感想を記録していく。あらわす段階では，読書を通してかかわった総合図書館・県立図書館の方や保護者の方を招いてのブックトーク大会を設定し，読書の達成感・成就感を味わえるようにするとともに，今後の読書への興味・関心が広がり意欲が高まるようにする。

目　　標

１．本の中から鬼をさがし調べる課題をもって，鬼の言動の順序を考えたり鬼の姿や力などについて想像を広げたりしながら読み比べ，自分の思いや考えを付加しながら粗筋を伝え合うことができる。

２．話に登場するもの・こと・人への興味・関心や読書を通して人とかかわる心情を高める。

計　　画（約12時間＋課外）

題	第１次　つかむ（２時間）	第２次　しらべる（６時間＋課外）	第３次　あらわす（４時間）
活動と内容	１．鬼をテーマにしたブックトークと本に出会い，読書課題と読書計画をつかむ。 (1) 鬼をテーマにしたブックトークを聞き，鬼について話し合い，鬼の本を探しブックトークを行っていく計画を立てる　① ○　読書課題と学習の見通しの把握 (2) 紹介してもらった鬼が登場する物語（基本教材）を読み比べ，本に登場する鬼の調べ方・比べ方（読み取り方）を話し合う。① ○　様子を想像する読み・順序を考える読み	２．鬼が登場する本を探して読み広げ，読み取りや感想を記録する。 (1) 図書室で鬼の本を探し読書する。② ○　必要な図書の検索・選択・収集 (2) 総合図書館で鬼が登場する本を探して，読みや感想を記録する。　③ ○　効果的な図書館活用の習得 (3) 地域の図書館で読書する。　（課外） (4) 読書記録を整理しまとめる。　① ○　必要な点を押さえながら書くこと	３．自分たちが探した鬼の本についてのブックトークをする。 (1) 調べた本の鬼を紹介するブックトークの台本づくりをする。　① ○　感想を付加して粗筋を書くこと (2) 友達や総合図書館の方と，ブックトークを試みる。（本時2/2）② (3) 保護者の方を招いてブックトーク大会を開く。　① ○　相手に分かりやすく話すこと
手だて	※　読書への課題意識・目的意識を生み出すブックトークの構成（総合図書館との連携） ※　観点と読み方を明確にする基本教材	※　本を探す観点に気づかせる選択教材 ※　紹介コーナーと読書ノートの工夫 ※　図書館利用についての指導・支援	※　台本づくりと話し方の支援 ※　読書への興味・関心と読書の範囲をさらに広げるブックトーク

本時の目標

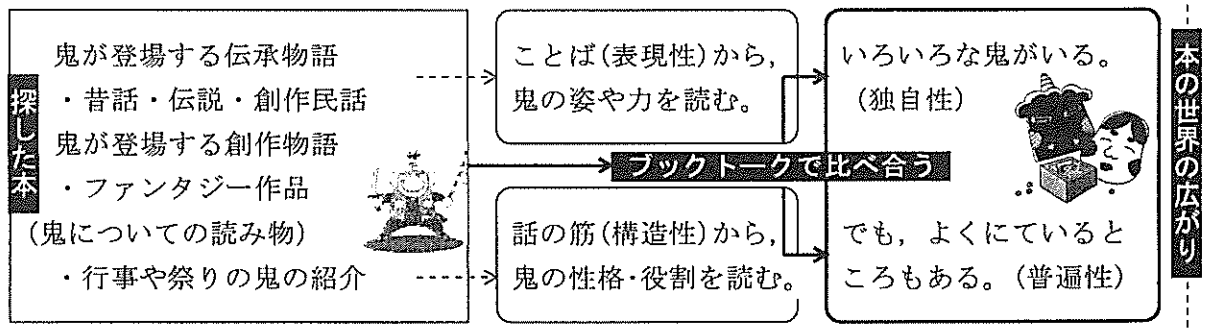
1．自分が探した本のことばや筋を押さえながら，鬼の姿や力・性格などを相手に分かりやすく紹介し合い，それぞれの鬼の違いや重なりについて話し合うことができる。

2．総合図書館の先生方や友達との読書交流を通して，みんなと一緒に読書を楽しむ心情を高める。

準　　備　　児童；読書記録ノート，自分が探した本・資料等　教師；学習の流れ図，視聴機材等

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．鬼の本をどのようにして探してきたかを，福岡市総合図書館の方(司書と図書ボランティアの人たち)に説明する。 ○　本時学習のめあてと学習の進め方を確かめ合うこと (めあて)としょかんの先生やともだちと，ブックトークをして，いろいろなおにをしょうかいし合おう。 ※　G.T.として福岡市総合図書館司書○○さんと図書ボランティアの方々を招聘する。	○　学校の図書室から，総合図書館，そしてお休みの日には，博多市民センターでも鬼の本を探してみました。 ○　今日は，自分たちで探して読み取った鬼のことを，グループのみんなと発表しよう。総合図書館の先生に聞いてもらおう。
2．総合図書館の先生たちと一緒に，自分たちが探した本についてのブックトークを行い，鬼について話し合う。 (1) 鬼の本から読み取ったこと・思ったことをブックトークをしながら伝え合う。 ○　ことばから想像を広げ姿や心を考えること(表現性) ○　順序（筋）をたどり話の大体を発表すること(構造性) ※　事前につくった台本や資料を活用して取り組ませる。 (2) 紹介された鬼の違いや重なりについて，図書館の先生たちと一緒に話し合う。 ○　鬼の言動をもとに，性格や役割を話し合うこと ○　鬼を比べ違いや重なり(独自性や普遍性)に気づくこと	○　図書館の先生に聞きたいことがたくさんあるよ。鬼のことも聞きたいけど，ブックトークの仕方もくわしく教えてほしい。 ○　おそろしい鬼ばかりかと思っていたけど，優しい鬼，かわいい鬼，いたずらをするけどおもしろい鬼など，いろいろな鬼がいることがわかった。
3．図書館の先生からお返しのブックトークをしてもらい，これから探したい本・読みたい本について話し合う。 (1) 図書館の先生のお話とブックトークを聞く。 ○　大事なところに注意して聞き取ること ※　鬼を追究してきた子供たちの読書への興味・関心，読書の範囲が広がるようなブックトークを組み立てる。 (2) さらに読みたい本について考え話し合う。	○　どうしてたくさんの人たちが鬼のお話をつくったり，同じような姿の鬼を館が出したのだろうか。鬼は本当は大切なものじゃないかな。 ○　鬼のことをもっと調べて，今度は家の人たちに教えてあげよう。図書館の先生みたいに上手にブックトークをしたいな。
○　てんぐやかっぱなど鬼の仲間を追究する読書へ（題材の広がり） ○　物語から他の読み物（説明的な文章）への広がり（ジャンルの広がり） ○　伝承物語の読みから創作物語の読書へ（時間的・ジャンル的な広がり） ※　読書計画としてノートに記録させ，読書生活につないでいく。	



第２学年２組　算数科学習指導案

指導者　　加　藤　英　也

単　　元　　まとあてをしてきろくしよう（きろくとせいり）

指　導　観

○　本単元は，的当てを繰り返し行いながら，「いくつ当たったか」「何回目に当たったか」などのことがらについて，記憶による曖昧なとらえ方から，記録をすることによる確かなとらえ方へと高めていくことをねらいとしている。具体的には，次の内容がある。①的当ての結果を○×グラフや表を使って表すこと，②当たり外れの結果を記録し，勝ち負けがわかるように記録を整理すること，③自分たちが知りたいこと（目的）に応じて合計が分かるグラフと過程が分かるグラフを使い分けること，④自他の記録の仕方を比べてそれぞれのよさを味わうことである。このことによって，行為を記録として残すことを生活に活用できる知恵として身に付けることができる。

○　本学級の子供たちは，休み時間にボールで遊ぶことを楽しんでいる。特に何かを目がけて投げたり，けったりすることには意欲的である。また成功や失敗を○×などの記号で表すことも生活のなかで身に付けてきている。しかし，遊びの結果を問われると感覚や不確かな記憶に頼った答えしかできない。そこで，生活のなかのできごとを自分なりの目的をもって記録することができるようにする。このことは，記録の仕方を工夫し活用する体験を豊かにすることにつながると考える。

○　本単元の指導にあたっては，子供たちに記録の必要性を感じさせ，身に付けた記録の仕方をいろいろな的当てに活用しながら，よりよいものにしていく体験をもたせたい。そのためには，つかむ段階で勝ち負けのルールが異なるいろいろな的当てをしながら，選択した的で当たり外れの結果を覚えきれないという不十分さから絵グラフや○×を使って，知りたいことが分かる記録の必要性をとらえる。次に生み出す段階で，他の的当ての勝ち負けのルールにしたがって，いくつ当たったか，何回目に当たったかという知りたいことが分かりやすいように自分の記録の仕方を作り替える。最後に生かす段階で，他のゲームや身の回りの記録の必要なことがらに記録を活用する体験をもつ。

目　　標

１．的に何回目に当たったのかという過程やいくつ当たったのかという合計が一目で分かるように，目的に応じて的当ての結果を記録することができる。

２．記憶ではよく分からないことがらに記録をすることのよさを味わい，記録を生活の中のことがらや行為を確かにとらえるために活用しようとする態度を身に付けることができる。

計　　画（約５時間）

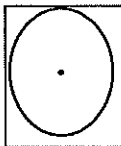
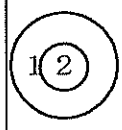
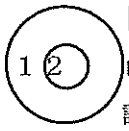
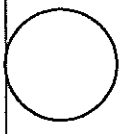
段階	第１次　つかむ段階(2時間)	第２次　生み出す段階(2時間)	第３次　いかす段階(1時間)
活動と内容	１．ルールの異なる的当て遊びを選択し，ゲームの勝ち負けが分かる記録の仕方を作る。 (1) 多様な的当ての場で遊ぶ。 ○　記録の必要性をつかむこと (2) 遊びを選択し，知りたいことが分かる記録をする。 ○　得点や○×を記入すること ○　ボーナスの得点がわかるように回数を記入すること	２．他の的当ての場で，記録の仕方を作り替える。　(本時1/2) (1) 他の的で記録の仕方を工夫する。 ○　横線を入れ，回数をそろえたり，合計が分かるように○×を分けたりすること (2) 的ごとの記録の仕方について話し合う。 ○　記録の仕方のそれぞれのよさの取り出し	３．他のゲームや記録の必要性のあることがらに記録を活用する。 ○　記録をすることが必要な事象の掘り起こし ○　目的に応じて，既習の記録の仕方を使い分けること ○　分かりにくいことがはっきり分かる記録のよさの感得 ○　数の大小を比べる事象が多くあること
手だて	※　ルールの異なる的当ての提示 ※　多様な的で遊ぶ場の設定 ※　記録の必要性をとらえさせる発問	※　多種の記録用台紙の提示 ※　的当てを競う人数の変化 ※　目的にあう記録の仕方の交流	※　数の大小を比べる事例を多く含む多数の事象の提示 ※　目的に応じて記録の仕方を選んだ根拠の交流

本時の目標

○　自分で選んだ的当ての記録の仕方を勝ち負けのルールが異なる他の的当てに活用しながら，自分が知りたいことが分かるように，記録の仕方を工夫することができる。

準　　備　　勝ち負けのルールが異なる的当ての場，多種の記録用紙，球

学習指導の過程

<table>
<tr><th>活　　動　　と　　内　　容</th><th>子供の思考の流れ</th></tr>
<tr><td>
1．前時の的当ての記録の仕方を出し合い学習のめあてをつかむ。
○　自分が作った記録の仕方を使って他の的当て遊びをするということ
めあて
自分のきろくのしかたをほかのまとにもためしてみよう。
2．ルールの異なる的当てをしながら，自分の記録の仕方を試して作り替える。
(1) 自分の記録の仕方を使ってルールが異なる的当てをする。
○　前時の記録を基にして新たな場における記録の仕方の工夫
・A児の記録の工夫
［前時のA児の記録の仕方］

【的当て①のルール】
的に当たった数が多い方が勝ち
A　○○○○○○　6
B　○○○○○　5
C　○○○　3
前時の的当て①での記録の仕方を的当て②で試す。
［本時予想されるA児の記録］

【的当て②のルール】
的に当たった点数の合計が多い方が勝ち
A　①①②①①②①　9
B　①①①①②　6
C　②①②②　7
・E児の記録の工夫
［前時のE児の記録の仕方］

【的当て②のルール】
的に当たった点数の合計が多い方が勝ち
E　1 0 1 1 2 1 2 0 0 0　8
F　2 0 0 0 1 1 2 1 2 0　9
G　2 2 1 1 1 2 0 1 0 0　10
前時の的当て②での記録の仕方を的当て③で試す。
［本時予想されるE児の記録］

【的当て③のルール】
3，6，9回に当たると同じ点数がもらえる
E　1 1 0 1 0 2 1 1 2 0　9
F　1 1 0 0 1 0 1 0 2 0　6
G　0 0 2 1 1 2 0 1 0 0　7
※　合計や過程を知ることが必要な的当て遊びを多様に準備する。
(2) 調べたことについて話し合う。
○　ルールが変わると記録の仕方も変える必要があること
※　記録の仕方を比較交流して，目的に合う記録をとらえさせる。
3．本時学習をまとめる。
○　回数がわかるように線を引いたり，○をそろえたりすること
○　点数がわかるように数字や記号で表すこと
○　合計を書き入れること
</td><td>
○　前の時間は，班の中のだれが一番当たるかを知るために当たったら○，外れたら×をつけて記録した。
○　私たちは何回目に当たったかを記録しておかないとボーナスの点数が増やせないから，回数がわかるように線を引いた。
○　僕たちは，真ん中に当たると２点なので，２点と１点が分かるように数字をかいて記録した。
○　他の的当てでも同じように記録できるのかな。
○　前の時間は，的当て①をしたから今日は的当て②をやってみよう。
○　あれ，遊びのルールが違うから今までの記録の仕方では，何回目かが分からない。
○　今日は，当たった場合でも２点と１点があるから，○だけでは区別が付かない。そうだ，○の中に数字を書くとよい。
○　みんな工夫した記録の仕方をしているな。的当て②の記録は，A君たちの方が分かりやすい。
○　知りたいことによって記録の仕方は変わる。
</td></tr>
</table>

第３学年１組　「人間」学習指導案

指導者　　矢　野　俊　次

題　　材　体の不自由な方とふれ合おう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，あらつ学習（総合）「あらつウォークラリーをしよう」の学習で，地下鉄の駅のエレベーターや階段横のスロープなど車椅子にとっての設備が地域の中にあることを発見し，そのような設備の大切さを感じている。しかし，車椅子を使っている方に接し相手の心情を推しはかりかかわりをもったという子供は少ない。そのため，車椅子を使っている方に対して，「かわいそう」といった同情的な見方である場合が多く，障害があってもそれに負けることなく一生懸命生きていかれている姿まで見ることはできていない。

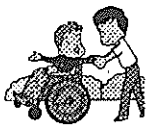
○　本題材のねらいは，末岡さんとのかかわりやももち福祉プラザでのふれ合い活動を通して，体の不自由な方に対する見方を見直し，共によりよく生きようとする態度を培うものである。末岡さんは，学生時代にラグビーの試合中のアクシデントで，両腕さえも満足に動かせないという逆境に会いながらも，昨年のバンコクで行われたフェスピックの車椅子100ｍレースで金メダルを取られている。また，2000年のシドニーで行われるパラリンピックに出場することを目指して，現在も猛練習に励んでおられる。この末岡さんとかかわることやももち福祉プラザの方々とふれ合うことは，①末岡さんの真剣に一生懸命生きておられる姿を実感できる，②子供たちの体の不自由な方に対する同情的な見方を見直すことができる，③自分の心の変容やよさを自覚できるという価値がある。

○　本題材の指導にあたっては，末岡さんの生き方のすばらしさを実感するとともに，体の不自由な方に対する同情的な見方を見直し，共によりよく生きようとする態度を培いたい。そのために，①学校から駅までの車椅子体験を通して，車椅子の大変さや不便さなどを実感する活動，②末岡さんは，どんな気持ちで車椅子レースに取り組まれているのか，末岡さんを支えているものを推しはかる活動，③ももち福祉プラザでの体の不自由な方とのふれ合い活動，④体の不自由な方とのふれ合い活動による学びをまとめる「福祉体験シンポジウム」を行っていく。

目　　標

○　末岡さんとのかかわりやももち福祉プラザでの体の不自由な方とのふれ合いを通して，体の不自由な方に対する同情的な見方を見直し，共によりよく生きようとする態度を培う。

計　　画（約６時間＋課外）

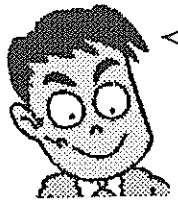
観	感じる（３時間）	考える（２時間）	行う（課外）	見つめる（１時間）
活動と内容	１．車椅子体験活動を行い，車椅子の大変さ不便さを知る。① ○　大変さ不便さの実感 ２．計画を立て，車椅子の末岡さんとふれ合い活動を行う。② ○　末岡さんの理解	３．体の不自由な方とのふれ合い方を考える。 (1) 末岡さんの車椅子レースに対する思いや願いを考える。　①本時 ○　思いの推しはかり (2) ふれ合い活動の計画を立てる。　① ○　活動内容の検討	４．ももち福祉プラザで，体の不自由な方とふれ合い活動を計画に沿って行う。② ○　体の不自由な方との交流 	５．ふれ合い活動で学んだことを話し合う。 (1) ふれ合い活動の感想を出し合う。 ○　ふれ合い活動の想起 (2)「福祉体験シンポジウム」を行う。 ○　今後の在り方の交流 ○　有用感の感得
手だて	※　学校から地下鉄の駅までの車椅子体験 ※　末岡さんとのふれ合い活動の場の設定	※　ふれ合い活動のビデオ ※　末岡さんの練習時のビデオ ※　末岡さんからの話	※　ふれ合い活動の場の設定	※　ふれ合い活動時のビデオ ※　指導員の方からのビデオレター

本時の目標

○　末岡さんの車椅子レースを続ける思いや願いを推しはかることで，末岡さんが自分の生き方を見い出し努力されている姿に共感することができる。

準　　備　ふれ合い活動のビデオ，レース用車椅子，フェスピックでの金メダル
末岡さんの練習時のビデオ，学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．末岡さんとのふれ合い活動の感想を出し合い，本時学習のめあてを設定する。 ○　ふれ合い活動の振り返り ※　ふれ合い活動時のビデオをもとに，活動を振り返らせる。 めあて 末岡さんが生き生きと生活されているひみつをさぐろう。 2．末岡さんの心情を推しはかる。 (1) 末岡さんが，車椅子の生活をしながらも明るく生き生きと生活されている理由について話し合う。 ○　末岡さんの心情の推しはかり (2) 末岡さんが車椅子レースをされていることを知り，車椅子レースを続ける理由について話し合う。 ・せっかく練習してきたのだからここでやめられない ・パラリンピック出場という夢を捨てきれない ・やめると障害にも負けたことになる ○　苦しい練習にも負けず車椅子レースを続ける末岡さんの心情の推しはかり ※　末岡さんがどんな思いで車椅子レースを続けられているのか，練習時のビデオをもとに話し合わせる。 3．末岡さんの話を聞き，これからも体の不自由な方とふれ合っていきたいという思いをもつ。  自分では，車椅子に乗っていることが苦労だとはあまり思わない。障害があるかないかは，たいしたことではない。私の好きな言葉は，「失ったものを数えるな。今ある機能を最大限に生かせ。」という言葉です。 ・パラリンピックでの金メダルを目指してがんばってほしい ・僕に何かできることはないかな ○　末岡さんの生き方への共感 ○　今後の体の不自由な方とのふれ合い活動への意欲	○　末岡さんは，とても生き生きされていたな。 ○　車の乗り降りなど，ほとんど自分でされていたな。 ○　でも，給食を食べる時は不便そうだったよ。 ○　なぜあんなに明るく過ごすことができるのだろう。 ○　たぶん，障害に負けたくないと思っておられるからだろう。 ○　すごいな。金メダルを取られているのか。 ○　どんな練習をされているのかな。たぶん相当な練習をされているのだろうな。 ○　そんなに苦労してまで，とても僕にはできないな。 ○　きっと自分の夢があるから苦しい練習にも耐えられるのだと思うな。 ○　末岡さんは，障害のことで悩むのではなく，夢を追いかけておられるのだな。 ○　できないこともたくさんあるけど，できることでがんばっておられるのだな。 ○　僕も，末岡さんに負けないようがんばっていかないといけないな。 ○　もっと，末岡さんや，体の不自由な方とふれ合ってみたいな。

第３学年２組　社会科学習指導案

指導者　　髙　野　誠　一

単　　元　楽しい買い物～天神のまち～

指　導　観

○　本単元では，福岡市の人々が，品質や価格などを考え購入していること，福岡市を中心とした地域の商店が販売の工夫をしていることを理解するとともに，消費生活を通した他地域とのかかわりに気づくことをねらいとしている。本単元での具体的な内容は，次の３点である。①地域と天神の商店を比べ地域商店と天神の商店の特色があり消費者は使い分けていること②商店は客のニーズに応じて販売を工夫していること③地域は日常生活を支え，天神は大きな商店街として機能し九州の消費を支えていることに誇りをもつことである。そこで，天神の商店（新天町，天神地下街，デパート）と地域の商店，九州の商店を取り上げ，生活を支える地域と九州の消費を支え競争で活性化される天神への誇りをもち，福岡の商業の発展について考える郷土意識を育んでいきたい。

○　本学級の子供たちは，地域や天神での買い物の経験があり地域で日常のおつかい，天神での楽しい買い物を経験している。しかし地域と天神の性格が違うことや天神が九州の消費を支えたり競争をもって営まれたりしている様子には気づいていない。そこでこの期に，地域商店の役割や天神というまちが九州の商業都市として繁栄している様子の理解を深めたい。このことは，自分の住んでいる地域に対する誇りと愛情をもち，その発展を願う郷土意識を育む上で意義深いと考える。

○　本単元の指導にあたっては，天神と地域，九州各県との比較を位置づけて地域商店のよさや天神の九州の消費を支える工夫や商店街としての機能への誇りをもたせたい。そのために，「つかむ」段階では，地域の消費生活を比べ，天神を利用する多さから地域と天神の商店を比較する事象として設定し比べる視点をもつ。「さぐる」段階では，「新天町」「天神地下街」「デパート」から選択して調べ地域と天神の各商店を商品や販売方法，施設，商圏の点から比べ，天神は楽しみとして，地域は日常生活という独自性や消費者のニーズに応じる共通性をとらえる。そして，客の範囲から比較事象を広げ，天神と九州の商店の比較で九州の商業都市としての機能という独自性や天神の店が独自の商品構成や競争で商業を盛んにする共通性をとらえ元気な天神のまちとしての魅力に気づかせる。また，天神の独自性を保つ仕入れの工夫をとらえさせる。「つくる」段階では，川端地区の水都モール協議会を調べ，消費者の立場から福岡全体の商業都市としての発展を考える。

目　　標

１．福岡市を中心とした人々は，品質や価格，家の都合を考えて商店を選択し，商店は客のニーズに応じた工夫をしていることを理解するとともに，消費生活を通した他地域とのかかわりに気づく。

２．地域は日常生活を支え，天神は九州の消費を支える役割を担い競争で活気を生み出す願いがあることに誇りをもち，これからの消費生活や天神の商店を消費者の立場から考えることができる。

計　　画（約１４時間）

	うみだす比較活動	とりだす比較活動		えがきだす比較活動
段階	つかむ段階（３時間）	さぐる段階（８時間）		つくる段階（３時間）
活動と内容	１.友達の家の買い物と比べ追究課題をつくる。 (1) 自分の家の買い物を調べる。①+課外 ○　地域の消費の把握 (2) 友達の家の買い物と比べる。② ○　比較事象（天神と地域）と比較する視点の設定	２　地域と天神の店，天神と九州各地を比べる。 (1) 天神の商店を調べる。　③ ○　販売の工夫の情報収集 (2) 地域の店と天神の店を比べる。①本時 ○　天神と地域の独自性，店としての共通性の理解 ・　生活と楽しみ	(3) 九州各地と天神を比べて調べる。　③ ○　天神の商店と九州各地の商店の比較 (4) 天神と九州各地を比べる。　① ○　天神の独自性（商品構成，遠方の客に対する工夫）と共通性（客のニーズ）	３．水都モール協議会について調べる。 (1) 水都モール協議会について調べる。　② ○　天神との競争を図る新しい商店の工夫 (2) これからの天神や福岡の商業についての思いを表現し交流会を開く。① ○　役割の違いと福岡への思いへの感得
手だて	※　福岡市買い物地図 ※　買い物調べの結果 ※　天神の利用者数	※　商店の選択 ※　視点ごとの類型 ※　商店ごとの発表	※　客や店への聞き取り調査 ※　往復書簡	※　天神利用のパンフレットづくり ※　商店の方の招聘

本時の目標

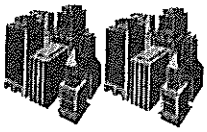
(1) 天神地区の商店における流行や娯楽的な要素を備えた販売の工夫，交通機関と結びついた店の立地，専門的な接客販売などをとらえることができる。

(2) 地域と天神の商店との比較から差異点をとりだし地域と天神の商店の独自性に気づくとともに，天神の商店の共通性をとらえ，地域と天神への誇りをもつ。

準　備　九州各地からの天神の商店の利用者数，交通機関に関する資料

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1　本時のめあてを確認する。 ○　地域の商店と天神の商店とを比べるめあての確認 ※　流れ図をもとに，学習を振り返らせる。 「めあて」 たくさんの人が天神の店を利用するわけを近くの店と天神の店をくらべて話し合おう。	○　天神の店でいろいろな工夫を見つけたよ。 ○　やっぱり，近くの店との違いがあった。 ○　天神にたくさんの人が集まるわけを近くの店と比べて考えよう。
2　地域の商店と天神の商店とを比べ話し合う。 (1) 天神の商店を利用するわけを近くの商店と比べて話し合う。 ○　地域の商店と天神の商店との比較から見つけたちがいを天神の商店の共通点としての把握すること，天神と地域への誇りの感得 ※　天神の商店別のグループごとに地域との違いを発表する。 ※　地域の商店との違いとして，発表してきた事実を商品，売り方，施設，交通やお客さんの範囲といった視点で類型し板書する。	○　○○スーパーでは，食料品は多かったけれど，天神地下街には，洋服だけでも４０軒ほどの店が並んでいた。



〈近くの店との違い〉

近くの店	新天町	天神地下街	デパート	天神の店
・食品が多い。普通の日の買い物の品物。 ・自分で選んで買う。自分でかごに入れる。 ・曜日を決めた安売り	・洋服，電気製品，鞄などの専門店 ・店員さんに聞きながら買う。 ・春，サマー，オータム，クリスマスなどの安売り	・洋服，本，靴などの専門店。 ・店員さんが教えてくれる。 ・春，夏，秋，クリスマスのバーゲン	・洋服，食料品，おもちゃなど。 ・教えてくれたり包んでくれたり ・春と夏に大きなバーゲン	・普段買わない物，ブランドなどの物 ・店員さんが近くで教えてくれる。(品物の知識) ・季節によって安売りをする。(洋服などの流行)
・かごなどを準備 ・たくさんのレジ ・分かりやすい案内板	・アーケードで天気に関係ない。分かりやすい看板。	・地下のいろいろな模様の壁，ゆったりと広い通路	・エレベーターなどでの移動。食事ができる店が集まる。	・買い物がしやすい施設，楽しくなる雰囲気
・近くの人が多い。	・福岡市やまわりの市，県外から	・他の店との連絡のよさ ・福岡県外の人が多い。	・九州や山口県から来る人も。	・九州や山口からたくさんの人
・歩いたり自転車や自家用車で。	・西鉄や地下鉄を中心に。	・地下鉄や西鉄，遠くからバスで。	・県外から自家用車やバス，西鉄，地下鉄で。	・いろいろな交通を利用している。駅やバスセンターなどに近い。

(2) 天神と地域を比べて気づいたことを話し合う。 ○　天神と地域の独自性と共通性からの誇りの感得	○　地域も天神の店もわたしたちにはなくてはならない。
3　天神の商店に共通する商圏の広さについて調べる。 ○　天神の商店に来る客の範囲についての資料の活用 ※　天神の商店に集まる九州各地からの客の数や九州各都市からの天神までの所要時間や費用を提示する。	○　天神の店では，どの店も福岡市以外からお客さんが来ていた。

第４学年１・３組　音楽科学習指導案

指導者　　豊　村　雅　義

題　　材　日本のふしと韓国のふし（教材　日本古謡「さくらさくら」韓国童謡「ウリナラコ」「半月」）

指　導　観

○　本題材は、日本と韓国のふしを比較する歌唱・器楽を合わせた幅広い音楽活動により，日本のふしの特徴をとらえさせるとともに，フレーズ感・強弱感を育て，国の違いを越えて通じ合う音楽のよさを感じ取らせることをねらいとしている。「さくらさくら」「ウリナラコ」は，日韓両国のそれぞれの国花（桜・ムクゲ）を歌った曲で，音階の違いが比較し易い。特に「さくらさくら」では陰音階を生かした器楽表現へと活動を広げることができる。韓国童謡「半月」も美しい旋律をもち，歌唱から器楽へと表現の広がりが味わえる。具体的な学習内容は，①日本のふしの特徴を感じ取り，意欲的に表現しようとすること，②歌詞の内容や旋律の流れに合った奏唱法を工夫すること，③音楽表現の工夫の仕方や楽曲にこめられた思いは，日韓両国に共通することをとらえること，である。

○　本学級の子供たちは，歌唱表現において，歌詞内容を生かして歌おうとすることができるようになってきている。器楽表現では，鍵盤ハーモニカや打楽器の演奏もできるようになってきている。日本のふしに関しては，「うさぎ」の歌唱や日常の遊び歌等で親しんできているが，日本独特の音階があることは気付いてない。そこであらつ学習における韓国への興味・関心の高まりを生かしながら，日韓両国の楽曲を取り上げ幅広い音楽活動を行うことで，両者の差異点・共通点を追究する意欲的な活動が期待できる。このことは，音楽にかかわる喜びを味わう子供を育てる上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，幅広い音楽活動を通して，日韓両国の楽曲にこめられた人々の思いをとらえ，それにふさわしい表現の仕方を考えさせていきたい。出会う段階では「さくらさくら」「ウリナラコ」に出会わせ，日韓両国のふしの感じの違いをとらえ，それぞれに合った歌い方を工夫していく課題を設定させる。深める段階では，ふしの特徴をとらえ表現を深めさせる。そのために両者の音階の構成を調べる活動を行う。そこでは，それぞれのふしの特徴を明らかにするため，既習の日本のふしの曲と韓国童謡「半月」を取り上げ，音階を生かした器楽演奏へと活動を広げる。また，韓国の方をＧ．Ｔ．に迎え，韓国の楽曲の表現を深めるとともに，国の違いを越えて通じ合う音楽のよさをとらえさせる。味わう段階では，両国の楽曲の発表会を行い，満足感を味わわせる。

目　　標

１．日本のふしの特徴を感じ取るとともに，歌詞の内容や旋律の流れを生かして，強弱や奏唱法を工夫して楽曲の美しさを表現することができる。

２．フレーズを感じたり強弱を考えたりして表現することで気持ちが伝わることが，日韓両国の音楽に共通することを感じ取り，国の違いを越えて通じ合う音楽のよさをとらえることができる。

計　　画　（約６時間）

階	出 会 う（１時間）	深 め る（４時間）	味 わ う（１時間）
活動と内容	１．「さくらさくら」「ウリナラコ」と出会い，ふしの特徴を表現する課題を設定する。 ○　ふしの感じと歌詞の把握 ・ふしの感じが異なること ・国花の美しさを表す歌詞	２．日韓両国の楽曲のふしの特徴を調べて，表現の工夫を行う。 ○　既習の日本のふし，「半月」を用いて音階の特徴を調べ，各々の歌い方を工夫すること ○　「さくらさくら」に器楽伴奏をつけること ○　「半月」の器楽合奏　（本時４／４） ・韓国の方に思いが伝わる演奏	３．「さくらさくら」「ウリナラコ」「半月」の歌唱や器楽の発表会を行う。 ○　日韓両国の楽曲の共通点と差異点をふまえた表現の工夫の発表会 ・音楽のよさの感受
手だて	※　桜とムクゲの花の情景画の提示と範唱 ※　国花についてのイメージを話し合う場の設定	※　楽譜から音階を抜き出し演奏する活動 ※　器楽伴奏例の提示と合奏へのアレンジ ※　韓国の方をＧ．Ｔ．に招聘しての，楽曲への思いや表現の仕方の見直し	※　日韓両国の楽曲の特徴を表現する発表の場の設定 ※　自己評価・相互評価のための学習ノート

本時の目標

○　韓国童謡「半月」の歌詞（原語・邦訳）が表す情景や旋律の流れをもとに，フレーズのまとまりをとらえ，強弱や音色を工夫して楽器を演奏し，音楽のよさを味わうことができる。

準　　備　「半月」の拡大楽譜と情景画，書き込み用の楽譜，リード合奏に使用する楽器

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの活動を振り返り、本時のめあてを話し合う。 (1)「半月」の曲想を出し合い，前時の学習を想起する。 ○　「半月」のなめらかで美しい感じを生かした楽器の選択 (2) お互いに聴き合ったり韓国の方に演奏発表をしたりして，不十分さに気付き，本時のめあてを話し合う。 ○　フレーズの取り方や強弱の付け方についての課題の把握 ※　福岡市東区にある韓国総合教育院の先生をG．T．に迎え，演奏を聴いていただいたり，いっしょに演奏したりして，フレージングや強弱・音色の不十分な点に気付かせる。 めあて 「半月」の美しさが韓国の方に伝わるように，楽器の演奏の仕方を考えて，よりよい表現に高めよう。 2．G．T．の範唱や曲にこめられた韓国の人の思いの説明などをもとに，強弱を付けたり音色を考えたりして，楽器の奏法を工夫する。 (1) 歌詞を元にフレーズの取り方を確かめ，楽器の奏法を確かめる。 ○　フレーズを感じ取った楽器の奏法 ・アコーディオンのベローイング ・鍵盤ハーモニカやリコーダーのブレス　など ※　楽器の演奏の仕方について資料の提示や助言を行う。 (2) 曲にこめられた韓国の方の思いを聞き，盛り上げるところを考え，演奏する。 ○　3フレーズ目に気持ちをこめて次第にもりあげること ※　韓国語の歌詞でG．T．に一緒に歌っていただいたり，歌詞の説明をしていただいたりして，気持ちをこめて盛り上がるところを考えさせる。 3．フレーズの取り方と強弱を工夫した合奏を行い，高まった表現によって，韓国の方に気持ちが伝わる演奏になったことを振り返らせる。 ○　国の違いを越えて通じ合う音楽のよさの感受 ※　G．T．の歌に合わせて演奏し，一体感を味わわせる。	○　「半月」は教科書に載ってる韓国の曲で，とってもきれいな曲だったね。 ○　私たちの演奏が，韓国の方に伝わるかな。聴いてもらいたいな。 ○　音楽が切れるところがバラバラだ。 ○　気持ちがこもっていないような感じがするな。 ○　どこで音楽を切ったらいいか考えて，盛り上がるところを考えて演奏すると，韓国の方に伝わるんじゃないかな。 ○　歌詞をもとに音楽の区切りを考えてみよう。 ○　鍵盤ハーモニカやリコーダーは息継ぎをするところが大事だね。 ○　アコーディオンは，左手の動きで音が出ているから，蛇腹の動かし方を工夫して，4小節ごとに返してみよう。 ○　歌詞の雰囲気から，「まいごのうさぎ～」からだんだん大きくするといいね。 ○　慎先生の歌と一緒に合わせて演奏すると，心が一つになったように感じたよ。 ○　慎先生からほめてもらえてうれしいな。 ○　韓国の方と気持ちが一つになったようだ。言葉は通じなくても音楽で気持ちが伝えられるんだな。

第４学年２組　理科学習指導案

指導者　　野　口　信　介

単　　元　自然災害にそなえる私達の知恵　～流れる水の働き～

指　導　観

○　本単元は、地面を流れる水や川の様子を観察し，流れる水の働きと土地の変化の関係についての考えをもつようにすることをねらいとしている。主な内容としては，①流れる水には，浸食，運搬，堆積の３つの働きがあること，②雨の降り方によって，流れる水の速さや水量が変わり，土地の様子が大きく変化する場合があること，③自然は，人が予想しえないほど大きな力をもっていることなどである。これらは自然の偉大さを感じ，今後の自分たちの生活を考える上で価値がある。

○　本学級の子供たちは、水が土にしみこんでいく様子や雨上がりの水たまりの様子を見て，濡れた土と乾いた土の違いについてとらえてきている。しかし，流れる水の働きを意識し，川が土地を変化させている様子に気づいている子供は少ない。また，福岡市は河川の整備も進み，河川の氾濫や土砂崩れといった災害を経験している子供の姿は見ることができない。そのために，自然の力の偉大さに気づいている子供は少なく，その力に適応する人の知恵に気づいている子供もわずかである。

○　本単元の指導にあたっては、自然災害に備える知恵として施工されている護岸工事の理由について考え，流れる水の働きについて調べていく。また，河川の整備が進んでいるにもかかわらず起きている自然災害の様子を調べることにより，自然の力の偉大さを感じ取らせていきたいと考える。そこで，「見出す」段階では，室見川の河原の様子を比較し，「自然をなくしてまでも護岸工事を行うのはどうしてか」という問題意識をもたせていく。「調べる段階」では，室見川モデルを用いて流れる水が土地を変化させる要因を取り出し，実際に室見川で流れる水の働きについて調べていく。そして，護岸工事の意味について，自然災害を取り上げながら室見川モデルや流水実験器を用いて調べさせる。「見直す段階」では，これからの護岸工事の在り方について考えていき，自分たちの考える理想の川づくり（河川の整備）を室見川モデルを使って表現させていきたい。

目　　標

１．護岸工事と流れる水の働きを関連づけてとらえ，流れる水の働きによる土地の変化の様子を調べることができる。

２．自然災害と護岸工事の様子から自然のもつ力の大きさや人の知恵を感じることができる。

計　画（約１２時間）

段階	第１次　見出す（２時間）	第２次　調べる（８時間）	第３次　見直す（2時間）
活動と内容	１．室見川の様子を映したＶＴＲから，場所による川岸の様子の違いについて話し合い，追究課題をもつ。 (1) 室見川の様子をＶＴＲで見て気が付いたことを話し合う。① ○　河原の様子の違い ○　流れる水の様子の違い (2) 護岸工事前後の河原の様子の違いを写した写真をもとに，追究課題をもつ　① ○　護岸工事の理由について	２．室見川モデルや実際の室見川観察から流水の働きを調べ，護岸工事の意味を考える。 (1) 室見川モデルをつくり，流れる水の働きを観察する。　① (2) 室見川に行き，流水の働きを調べる。④ ○　流れる水の３作用を理解すること (3) 流水実験器で，護岸工事を行い工事の意味を考える。　(本時) (4) 流水実験器を用いて水量の増加による流水の働きについて調べる。　② ○　自然災害と護岸工事との関係の把握 ○　水量の増加に伴う流水の働きの増加	３．生活を守る上で必要な護岸工事を環境という視点で見直し，自分たちの理想的な護岸工事を室見川モデルを使って行う。② ○　自然の力の感得 ○　流水の働きや環境保護という視点から護岸工事について考えること
手だて	※　室見川を映したＶＴＲの準備 ※　護岸工事前後の河原の様子が分かる写真の提示	※　室見川モデル（流水実験用のモデル）を用いた観察・実験 ※　流水実験器を用いた比較実験の場の設定	※　室見川モデルに対する護岸工事 ※ 河川課の方の招聘

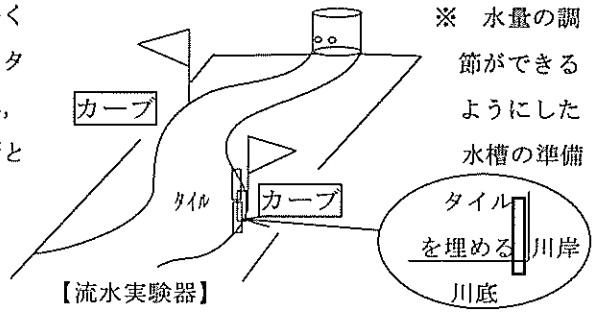
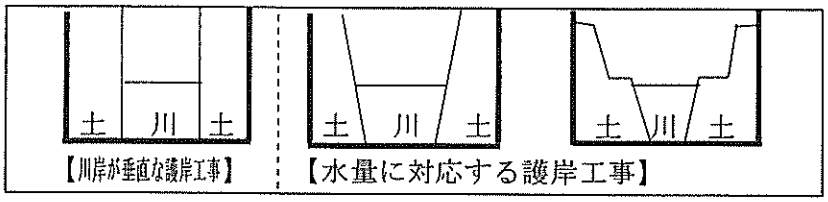
本時の目標

(1) 護岸工事が行われている理由を，流水実験器を用いた比較実験によって確かめることができる。

(2) 護岸工事が，流れる水の働きの浸食作用から川岸を守るために行われていることをとらえることができる。

準　　備　校庭につくった室見川モデル，流水実験器，旗，タイル

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．これまでの学習を振り返り，本時のめあてをつかむ。 ○ 流れる水の働きによって土地の様子が変化すること ○ 人が住む場所には護岸工事が行われていること めあて どうして護岸工事が行われているのか実験を行い確かめよう。	○ 流れる水の働きには，私たちの生活する土地を変化させる働きがあるから，それを防ぐために，護岸工事をする必要があると思う。
2．護岸工事が行われている理由について，流水実験器を用いて比較実験を行い確かめる。 (1) 校庭につくった室見川モデルを使って，流れる水の働きを振り返りながら，護岸工事の理由について話し合う。 ○ 流水の働きにはには浸食・運搬・堆積の作用があること ○ 護岸工事の理由として浸食作用が考えられること (2) 流水実験器を用いて，護岸工事をしている場所とそうでない場所の土地の変化の様子を比較する。 ○ 比較実験を通して護岸工事の役割を調べること	○ カーブの所や川幅が狭い所の土地が削れているよ。 ○ 流水の働きのうち，削る働きが護岸工事と関係しているのではないか。 ○ 削れやすいところにタイルを置いて，タイルを置いていないときとどのように違うかを比較していけば，護岸工事を行っている理由が分かるよ。
※ 浸食作用が多く見られる場所にタイルを埋めこみ，埋めていない所と比較する。  【流水実験器】 ※ 比較していく場所には旗を立てさせておき，比較する場所を明確にさせておく。	○ 比較していく場所に旗を立てておくと比較しやすいよ。 ○ カーブの外側で比較していくとよく分かるよ。
3．本時学習をまとめ，次時の学習の確認をする。 (1) 実験結果の交流を行い，護岸工事を行った場合と行わない場合との川岸の違いから，護岸工事の役割についてまとめる。 ○ 護岸工事は川岸を浸食作用から守るために行っていること (2) 室見川の護岸工事の断面図から，堤防の傾斜の意味について考える。  ○ 増水に配慮している護岸工事の意味を調べることについて ※ 水量調節の仕組みに気づかせ，次時につないでいく。	○ タイルを置いているところはあまり削れないけれどタイルを置いていないところはどんどん削れていく。 ○ 護岸工事は流れる水の削る働きから私たちの住む土地を守るために行っているんだ。 ○ どうして傾斜をつけているんだろう。 ○ 増水から私たちを守るためなのかな。 ○ 水量と護岸工事の関係も調べたいな。

第５学年１組　体育科学習指導案

指導者　　稲　津　一　徳

単　　元　　自分や自然に挑戦しよう！西公園クロスカントリー

指　導　観

○　本単元は，西公園の地形を利用した１０００ｍクロスカントリーをする中で，目標タイムの達成に向け，科学的な運動処方に基づく練習に，自分なりの工夫を加えながら，動きを持続する力を高めると共に，運動への自信を高めることをねらいとしている。具体的には，①西公園の地形を利用した変化のあるコースに応じた走り方を工夫し，動きを持続させる力を高めることができること，②目標達成に向けて，自己決定した解決方法とタイムや全身持久力の向上を結びつけ，クロスカントリーに対する自信を高めることができること，この２つが本単元で学習できる内容である。

○　本学級の子供たちは，日常の学習において，意欲をもって運動に取り組み，目標を立てて自分なりの解決方法で課題を解決する喜びを味わっている。しかし，運動の楽しみとして，勝敗や順位などの相対的な結果を中心に考える傾向が多く，自己の目標を明確にもち，それに対する伸びや変容を見つめる姿は少ない。また，目標達成のための課題解決の方法についても，漠然とした経験をよりどころとしており，向上への明確な根拠をもった課題解決の経験が十分でなく，運動への自信も獲得しにくい状況にある。一方，子供たちの全身持久力（最大酸素摂取量）については，全国平均を下回っており，持久力の発達が顕著になりはじめるこの期に本学習を行うことは意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，目標達成に向けて，練習コースやペース基準を選択して行うペース走づくりと１０００ｍの記録会を繰り返す活動を中心に，動きを持続させる力とクロスカントリーに対する自信を高めさせていきたい。そのために，持久力の指標として最大酸素摂取量を位置づける。また，科学的運動処方に基づく，５分間ペース走を行っていく。具体的には，①個人の最大酸素摂取量を２０ｍシャトルラン（文部省新体力測定）の結果から各学齢の基準に照らして測定していく。②ペース走では，１０００ｍの共通コースから３つの勾配の違う各３００ｍずつの練習コース（ゆる坂・中坂・急坂）を設定し，持久力を高める条件（走時間・５分～１５分，運動の強度・全力走の７０％～９０％）に照らして基準を決定していく。まず，そこで，５分間全力走による最高距離を測定する。次に，その最高距離の７０％～９０％を算出し自己のペース走の基準とする。

目　　標

１．科学的な運動処方に基づいた５分間ペース走を行う中で，西公園の地形を利用した変化のあるコースに応じた走り方（ペース・フォーム）を工夫し，動きを持続する力を高めることができる。

２．自己決定した解決方法と１０００ｍクロスカントリーのタイムや全身持久力の向上を結びつけ，クロスカントリーに対する自信を高めることができる。

計　　画（約１３時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>見つめる（２時間）</th><th colspan="2">うみだす（９時間）</th><th>あじわう（２時間）</th></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>１．１０００ｍの共通コースを楽しく走り，クロスカントリーを体験する。①
○　楽しさの享受
○　クロスカントリー体験
２．２回のタイムの比較から単元の目標を決め，全身持久力や走り方の向上を課題として捉える。①
○　達成目標の決定
○　課題把握
・全身持久力
・走り方</td><td colspan="2">３．課題解決の練習を工夫したり，改善したりしながら地形に合った走り方や持久力を高めると共に，運動に対する自信も高めていく。
(1) 勾配の違う３つの練習コースで，５分間の最高距離から基準を調べる。③
○ ペース走基準づくり
(2) 各コースの基準をもとに，課題達成に向けたペース走をつくる。（本時２／２）②
○ ペース走づくり
(3) ５分間ペース走を行い，地形に応じた走り方を高める。②
○ 走り方，持久力向上
↑繰り返す↓
(4) 共通コースでタイムを計り，ペース走を見直す。②
○ コース・基準見直し
○ 自信の向上</td><td>４．西公園クロスカントリー大会を開き，最後のタイムを計ると共に，西公園クロスカントリーガイドブックをまとめ，自己の高まりを実感する。
○ 走り方（ペース・フォーム）の高まりの実感
○ 全身持久力の高まりの実感
○ 運動に対する自信の高まりの実感</td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　西公園の地形を利用したクロスカントリーの教材化
※　タイムの比較活動と交流活動</td><td colspan="3">※　科学的運動処方に基づく５分間ペース走の基準づくりの活動
① 往復３００ｍの３つの練習コース（ゆる坂・中坂・急坂）で５分間全力で走る。
② 各コースの最高距離×０．７・０．８・０．９を基準とする。
※　ペース走練習と共通コースでの記録会を往復する活動構成</td></tr>
</table>

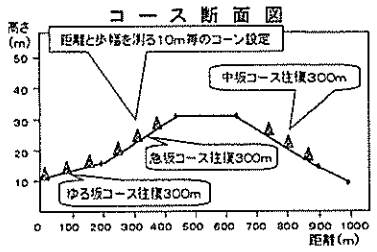
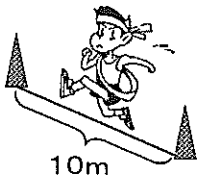
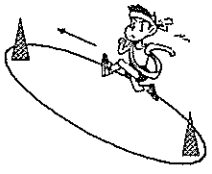
本時の目標

1．勾配の違う３つの練習コースにおいて，１往復のめやす時間をもとに，地形に応じた走り方（ペース・フォーム）を工夫しながら５分間ペース走をつくることができる。

2．コース毎のペース走の基準をもとに，自己決定した５分間ペース走をつくり，ペース基準や１往復のめやす時間達成への自信をもつことができる。

準　　備　５分間ペース走の基準と１往復あたりのめやす時間を書いた学習ノート，学習の流れ図，登りと下りの歩幅を測定する場，コーン

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し，本時のめあてについて話し合う。 ○　自己の課題（ペースやフォーム）について想起すること ○　フォームづくりの視点想起（手の振り・歩幅・呼吸など） ※　本時の課題について出し合わせ，ペース走の基準から設定した１往復のめやす時間を手がかりにして，３つの練習コースにおいて，５分間ペース走をつくることを確認する。 めあて １往復のめやす時間を手がかりに，フォームに気をつけて，５分間ペース走をつくろう。	コース断面図  ○　今日は，中坂コースで，８０％のペース走に挑戦しよう。８０％のスピードだと１往復あたり１分４０秒のペースで走るといいのだな。 ○　なかなかうまくいかないぞ。もっと，登りは，歩幅を小さくして，下りになったら，歩幅を大きくして楽に走れるようにしよう。
2．自分に合ったペースやフォームを工夫し，３人組で確かめ合いながら，５分間ペース走をつくる。 (1) 自分に合ったペースを選び，５分間ペース走をつくる。 ○　課題解決に向けた５分間ペース走づくり ○　ペース・フォームの向上 ※　つくった練習コース毎の７０・８０・９０％のペース基準から算出した１往復あたりの時間をもとに，３人組で時間を計測しながら，自己のペース走をつくらせる。また，フォームについては，特に登り坂と下り坂の歩幅を交替で確かめ比較させると共に，アドバイスさせる。	１往復時間の算出例 ○ペース基準が５分間で９００ｍ走る子供の場合 ①１往復３００ｍのコースだから９００÷３＝３往復 ②５分÷３＝１分４０秒 つまり，１往復１分４０秒
フォームづくりの支援：１０ｍのストライド測定場 B君の例） 登り１２歩 下り１０歩  ペースづくりの支援：練習コースの１往復時間 B君の例）１往復におよそ２分 	○　歩幅に気をつけて走るとうまくいったな。登りや下りのペースもだんだんつかめてきたぞ。 ○　はじめはうまくいかなかったけど，１往復の時間や登りや下りの歩幅に気をつけて８０％のペース走がうまくできるようになった。 ○　次は，中坂コースの９０％のペース走に挑戦してみよう。
(2) つくった５分間ペース走を振り返り，ペースやフォームを視点に相互に評価する。 ○　ペース走の相互評価　○　達成感の享受 ※　各自のペース走の基準や歩幅の比較をもとに，つくったペース走を評価させ，達成感をもたせる。 3．本時学習について話し合いまとめる。 ○　ペース走づくりへの予測や期待感の向上 ※　ペース走づくりの工夫点を出し合い，これからの学習に対する予測や期待感をもたせる。	

第５学年２・３組　家庭科学習指導案

指導者　　篠　原　裕　子

題　　材　心の「居間」にリフォームしよう

指　導　観

○　本題材は，「居間」を心身の健康を維持・増進させる場（心の「居間」）につくりかえることを通して，家族のコミュニケーションを増やしたり，家族が気持ちよく衛生的に生活をおくることができるように住まい方を工夫したりすることに達成感や有用感を味わうことをねらいとしている。ここでの具体的な内容は，①家族の団らんの場としての「居間」の存在価値を理解すること，②家族が楽しく活用するためには，時間の使い方や過ごし方を工夫することが大切であることを理解して自分の家族に合う方法を見いだすこと，③集まった家族が気持ちよく衛生的に生活することを考えて，整理・整とんや掃除について工夫することである。この学習を通して，自分や家族の心身の健康を求める力を育てることができる。

○　本学級の子供たちは，経験から家族がそろうことは楽しいととらえているが，実際にはあまり家の中で団らん時間をとれていない家庭が多い。「居間」についてアンケートを行ったところ，どの家庭にもその空間は存在したが，そこの使われ方や使われる時間は様々であり，家族誰にとっても家の中で一番落ち着く場，家族のコミュニケーションを図ることができる場（心の「居間」）というとらえ方はあまりできていない。また，整理・整とんや掃除へのかかわりは自分の部屋に関してが主である。このような子供たちに主体的に住まい方にかかわる態度を育てることは価値がある。

○　本題材では「居間」を楽しく過ごすことができる場につくりかえるという活動を通して，家族の精神的安らぎを見いだしたり，衛生的に生活したりする知恵や心情を養うようにする。そのために，つかむ段階では，家族へのアンケートや問題場面を取り出したモデル演技をもとに自分の家の楽しく過ごせていない原因と解決の見通しをもたせる。追究し解決する段階では，各自の課題に応じた学習計画で団らん時間のつくり方や楽しい過ごし方を工夫したり，実習で整理・整とんや掃除の技能を身につけるようにする。その際に友達やＧ・Ｔから情報収集活動を行い解決方法を見いださせ，かつ家族から評価をしてもらいながら改善を進めていくこととしたい。広げる段階では，家庭実践発表会を行い，自分の実践や家族からの評価を交流させることで達成感を味わわせたり，実践の発展継続をはかることができるようにしたい。

目　　標

○　家族が「居間」で楽しく過ごすための団らん時間のつくり方や過ごし方を工夫したり，気持ちよく衛生的に住まうために整理・整とんや掃除の仕方を工夫したりすることができる。

計　　画　（約８時間＋課外）

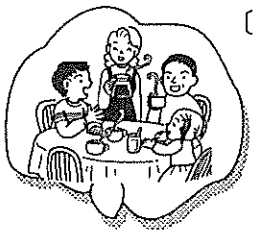
段階	つかむ（３時間）	追究し解決する（４時間＋課外）	広げる（１時間）
活動と内容	１．「居間」の大切さについて話し合い，課題をもつ。 (1)　「居間」で過ごした経験について話し合う。　① ○　団らん機能についての理解 (2)　「居間」活用の現状と理想を話し合う。②（本時１／２） ○　追究内容や方向の見通し	２．「居間」のあり方を追究する。 (1)　自分の「居間」の課題を解決する。 ○　家族が楽しむための団らん時間のつくり方と過ごし方の工夫について ○　家族が楽しく過ごすための整理・整とんと掃除のしかたについて (2)　各自が見出した解決方法で，家庭実践をする。　（課外）	３．家庭での実践報告会を開き，解決方法について交流する。 ○　「居間」での過ごし方や整理・整とん，掃除に関する変化の様子と家族の反応の関する相互評価
手だて	※　「居間」の住まい方に関する事前調査とモデル演技（時間，場所，参加者，過ごし方，気持ち）	※　課題別に家族，友達，文献から知恵を集めた情報コーナーづくり及びＧ・Ｔの招聘 ※　家族への提案書を作成させること	※　ビデオや写真など家庭実践の様子と家族の反応がわかる表現物を準備させること

本時の目標

○　「居間」の理想の在り方を思い描き，そうなるための自分の課題をつかむことができる。

準　　備　　事前の情報収集カード，モデル演技の台本と場面

学習指導の過程

学　習　活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時に各班で考えた「居間」活用の問題を想起し，本時のめあてをつかむ。 ○　自分の班で考えた「居間」の在り方の問題想起 めあて 家族にとって楽しい「居間」にリフォームする方法を考えよう。	○　「居間」の使われ方について班の中で問題だと思う場面を考えたけど，みんなの家はどうだろう。 ○　モデル演技をしてみると，やっぱりこのような過ごし方だと楽しくないな。自分の家は，あまり上手に活用されていない原因はなんだろう。
2．「居間」の活用がうまくできない原因と各自の思い描いている理想の「居間」のあり方について話し合う。 (1) モデル演技をみて，団らんのよさを想起しながら「居間」の活用の問題点とその原因を話し合う。 ○　「居間」での自分の家族の団らんについて，うまくできない原因を明らかにすること ※　実態調査から各班で台本をつくっておく。 ※　モデル演技を見て比較させ，各自の事前調査データと併せて問題の原因に気づかせる。  〔モデル演技の内容例〕 〈時間の確保と過ごし方について〉 ・家族の時間のずれによりそろわない様子 ・居間でそれぞれ別のことをしている様子 ・各部屋で楽しんでいる様子 〈場の様子について〉 ・新聞や小物が散らかっている様子 ・ほこりやカビで不衛生な様子 ・お母さん一人が片づけをしている様子 (2) 各自の「居間」をどのようにリフォームしていくかを話し合う。 ○　各自の問題点と原因にあう課題の明確化 ※　これまでの生活経験をもとに，課題の解決方法を考えさせ，追究の見通しをもたせたい。 〔予想される解決方法〕	○　お父さんは，仕事があるから時間がそろわないけど，お父さんも「居間」に行くとくつろぐことができるようにしたいな。 ○　掃除をしないと家族の健康にも影響があるのだな。 ○　ゲームをみんなでしている過ごし方は楽しそうだ。自分の家にも取り入れることができそうだ。 ○　家族みんなのために楽しく過ごせる「居間」にしたい。時間がそろわないという自分の家にあう方法はなにがあるだろう。
・お母さんだけがしているのでお手伝いをしてお母さんが参加する時間をつくろう。 ・お父さんが忙しいので伝言板をつくろう。 ・ゲームや趣味を調べて取り入れよう。 ・きれいに飾って楽しい場をつくると，みんなも集まる気持ちになるかな。 ・お掃除をして気持ちよい場所にすると，家族の体にいいな。 	
3．本時のまとめと次時の学習の確認をする。. ○　各自の課題に応じた追究をすることの確認 ※　次時は，各自の学習計画を立てることを告げる。	○　ゲームや趣味を調べたり，掃除の仕方を調べたりしていこう。

第６学年１組　図画工作科学習指導案

指導者　　樺　島　　穣

題　　材　　ベニヤドリーム！　～卒業製作展に向けて～

指　導　観

○　本題材は，子供たちが卒業製作展に向けて多様な表現をともにつくりだすことを目的とし，平面材であるベニヤに積極的にかかわり，分解・再構成や描画材料などの材料操作を通して発想し，想像的な夢を表現しながら友達や他学年の人達とよさを共感し合う喜びを味わうことができる。具体的には，①ベニヤを分解・再構成しながら夢を表現することを楽しもうとする関心・意欲・態度，②ベニヤの分解・再構成などの材料操作から夢を表現するための発想や構想の能力，③ベニヤや描画材料などの効果を生かして材料・用具を操作する創造的な技能，④友達や他学年の人達とよさを共感的に交流する鑑賞の能力など，創造活動の基礎的な能力を培うことができる。このことは，造形活動を生活に生かす知恵とともに，向上的な心情や調和的な心情を養うことにつながる。

○　子供たちは，今までに身近な生活体験をもとに，水彩絵の具などの材料活用を通して，想像的な思いを平面的な絵に表す楽しさを味わってきている。また，身近な材料の特徴を生かして多様な発想を行い，創造的な形や色をつくりだす造形遊びの経験もしている。しかし，ベニヤの分解・再構成や描画材料の効果などから発想したり作品の生かし方の構想を練ったりしながら想像的な夢を表現し，作品を通して他学年の人達と共感的に交流する経験は不十分である。

○　本題材の主な支援は，平面材のベニヤの分解から想像的な形を発想するための活動提案，分解した形に描画材料の効果を生かして彩色するための資料提示，分解彩色したベニヤの再構成から形の生かし方などの視点変更を促す資料提示，分解・再構成・再表現のための糸のこぎり，接着剤，カラーペン，付加材料などの提供，想像的な夢の物語づくりの促し，想像的な作品や物語のよさを友達や他学年の人達と交流できる鑑賞の場の設定，などである。

目　　標

○　ベニヤの分解・再構成・再表現などの材料操作を通して，想像的な夢を表現し，友達や他学年の人達と共感的に交流する喜びを味わうことができる。

計　　画　（約９時間）

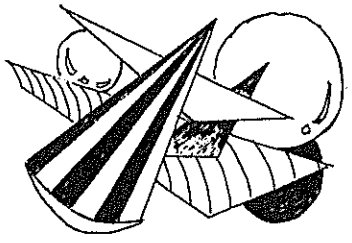
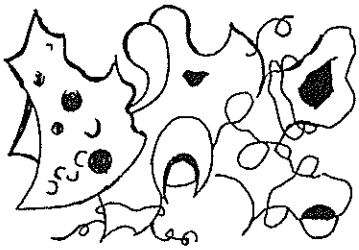
段階	思い付く（２時間）	練る・表す（４時間）	広げる（３時間）
活動と内容	１．ベニヤを想像的な形に分解し，描画材で彩色する。 ○　マーブリングなどから想像的な形取りをすること ○　糸のこぎりで分解した形に描画材料で彩色すること ○　友達と発想を交流し，よさを自覚すること	２．分解彩色したベニヤを想像的に再構成する。 ○　形や色の生かし方を考えて再構成すること ○　部分接着による空間的な重なりや広がりの工夫 ○　友達や他学年と交流しよさを実感すること	３．再構成した作品に，さらに再表現をする。(本時2/3) ○　絵の具，カラーペン，付加材料などで再表現をすること ○　分解・再構成から想像的な夢を表現すること ○　友達や他学年の人達と交流し，よさに共感すること
手だて	※　想像的な形取りの場の準備と分解発想の活動提案 ※　ベニヤ板の提供 ※　友達との交流鑑賞の促し	※　再構成から視点変更を促す資料提示 ※　友達や他学年との作品を通した交流鑑賞の促し	※　再表現を促す活動提案 ※　想像的な夢の表現への促し ※　友達や他学年との作品や物語を通した交流鑑賞の促し

本時の目標

○　分解・再構成したベニヤをもとに，想像的な夢の表現を様々な材料で再表現し，友達と共感し合う楽しさを味わうことができる。

準　　備　再構成したベニヤ，水彩道具，接着剤，カラーペン，付加材料など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの造形活動や交流鑑賞を振り返り，本時のめあてについて話し合う。 (1) 分解・再構成したベニヤの形や色をもとに，友達や他学年の人達と交流したことを振り返る。 ○　ベニヤの形や色の再構成の楽しさの感受 ○　形や色から想像的な見方，感じ方を交流したこと (2) 本時のめあてについて話し合う。 ○　ベニヤの再構成の方法による題名の変化への気付き ○　付加材料などの再表現から夢の物語を明確にすること ※　形や色の生かし方をより明確にする再表現の方法について資料提示を行い想像的な夢の物語がつくれるように促す。	○　前の時間は，ベニヤを分分解・再構成した形に題名を考えたり，他学年の人達の感想を聞いたりして，自分の表現に役に立ったな。 ○　今日は，絵の具や他の材料も使ったりしてもっと想像的な夢の世界や物語を工夫して表していきたいな。
ああて ベニヤを分解・再構成してできた夢の世界を，もっと材料を工夫して表しましょう。	
2．分解・再構成したベニヤの形の生かし方を考えて，さらに想像的な夢の物語になるように再表現する。 ○　夢の世界を明確にするため描画材料で再表現をすること ・水彩絵の具で効果的に重色し，題名をより確かにすること ・カラーペンなどで細やかな表現や発色効果を工夫すること ○　付加材料をもとに想像的な夢の世界を広げること ・和紙や布，金属類などによる質感の表現を工夫すること ・針金などによる浮遊感を生かした表現を取り入れること ・収集した身近な人工材料を補助的に活用すること ※　金属材などの材料活用や接着方法について補助をする。 ○　再表現から想像的な夢の物語を広げること ・偶然的な形と色の組み合わせから思いついた夢の小世界 ・再構成した形や色の視点変更による題名の連続発展 ※　作品を置く，吊す，掛けるなどの生かし方を考えて効果的な再表現ができるように助言をする。 3．本時の活動を振り返り，次時の活動について知る。 ○　自分の再表現した想像的な意味付けのよさを振り返ること ○　友達の想像的な形や色と物語のよさを感じ取ること ○　次時は，再表現の続きを行い，作品を完成させること	○　ベニヤを分解・再構成した夢の世界がもっと想像的になるように材料の活用の仕方を工夫したいな。  ○　身近な材料を付け加えると表すものがもっとはっきりするし楽しくなるな。  ○　想像的な自分だけの夢の物語ができたよ。

第１・２学年ふじ組　算数科学習指導案

指導者　　坂　田　佳　美

題　　材　　ふじぐみくるまランドであそぼう

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢３歳程度から４歳程度の１年生３名，２年生２名の計５名で構成されている。子供たちはこれまでの日常生活の中で，遊びながら数詞を唱える，友達の人数を数える，日付の数字を読むなど，様々な数にかかわってきている。遊びの場面では，ブロックを積み重ねて作った場で遊んだり，砂場で山やトンネルを作って遊んだり，作った場やもので遊ぶ経験を積み重ねてきている。子供たちの学習の段階は，５までの数対象を１つずつ数えている段階の子供，10までの数対象を１つずつ数えている段階の子供，３や５をまとめて数対象をまとまりで数えている段階の子供，と個人差が大きい。また，数操作の過程での正誤への気付き方は，操作のずれを感じて立ち止まる段階・間違いに気付いて自分の活動を振り返る段階，と段階が異なる。

○　本題材のねらいは，数タイルを数えて，数えた数と同じ数字の道路の穴をうめて車を走らせる構成遊びを行いながら，数対象を数えて数字と対応付けることができるようになることである。構成遊びを通して数えることに取り組む本題材には，次の内容がある。①数対象と数詞を対応させながら数唱して数えること，②数えた数を数字と対応付けること，③操作の正誤を確かめること，④構成したくるまランドの場で遊ぶこと。この学習を通して，子供たちは遊びの楽しさを味わいながら，自分の力で数の操作活動に繰り返し取り組むことができる。このことは，生活（遊び）に生きる数としての数の知識・技能を身に付けながら，物事に主体的にかかわる力を培うことにつながり，子供たちの将来の豊かな生活を考える上で意義深い。

○　本題材の指導にあたっては，子供たち自らが，「道路を作って車を走らせよう。」という意識のもとに数の操作活動に繰り返し楽しく取り組んでいけるようにする。そのために，であう段階では，活動の内容をストーリー化した絵話で活動を見通したり穴のあいた道路や数タイル・車に出会ったりして，学習への興味・関心や目的意識をもつ。つくる段階では，個に応じた教材・教具を用いて①数対象を取り出す，②数え箱で数対象を数える，③数字に対応付けて道路を構成し操作の正誤を確かめる，④間違った場合は数え箱での数字の強調や数表箱を使って数え直す，という一連の操作活動に取り組み，数タイルを数えて道路を構成していく。いかす段階では，出来上がった全ての道路をつなぎ，車を走らせて遊び，活動を達成した成就感を味わえるようにする。

目　　標

○　具体物を１つずつ数えたり（A・Bｸﾞﾙｰﾌﾟ），まとまりで数えたり（Cｸﾞﾙｰﾌﾟ）して数字と結びながら，道路を作って車を走らせ楽しく遊ぶことができる。

計　　画（約５時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（1時間）</th><th colspan="3">つくる（３時間）</th><th>いかす（１時間）</th></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>１．ふじぐみくるまランドの絵話を読み，遊びに出会う。
○　活動への目的意識・興味・関心・見通しをもつこと</td><td colspan="3">２．道路を作って車を走らせて遊ぶ。</td><td>３．全ての道路をつないだふじぐみくるまランドで遊ぶ。
○　活動を達成した成就感を味わうこと</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>(1) お花畑までの道路を作って遊ぶ。
○　小さい数範囲
Aｸﾞﾙｰﾌﾟ：１～３
Bｸﾞﾙｰﾌﾟ：１～５
Cｸﾞﾙｰﾌﾟ：５～７</td><td>(2) お魚池までの道路を作って遊ぶ。
○　大きい数範囲
Aｸﾞﾙｰﾌﾟ：３～５
Bｸﾞﾙｰﾌﾟ：６～10
Cｸﾞﾙｰﾌﾟ：８～10</td><td>(3) 動物の森までの道路を作って遊ぶ。（本時）
○　全ての数範囲
Aｸﾞﾙｰﾌﾟ：１～５
Bｸﾞﾙｰﾌﾟ：１～10
Cｸﾞﾙｰﾌﾟ：５～10</td><td></td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　絵話の提示
※　遊びを体験する道路や車の提示</td><td colspan="3">※　ふじぐみくるまランドの遊び場の設定
※　個に応じた教材・教具（数え箱・数表箱・数タイル・数字を示した道路）の準備，個に応じた声かけ・補助</td><td>※　完成した遊びの場の設定
※　賞賛の声かけ</td></tr>
</table>

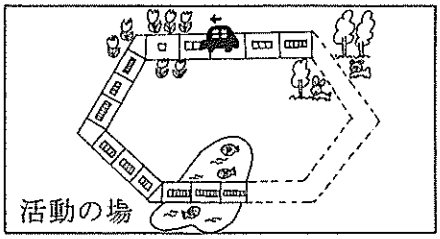
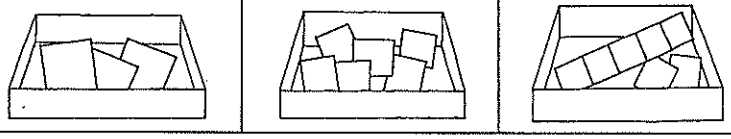
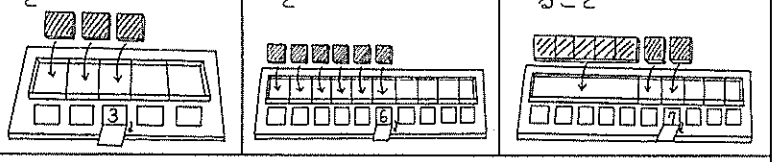
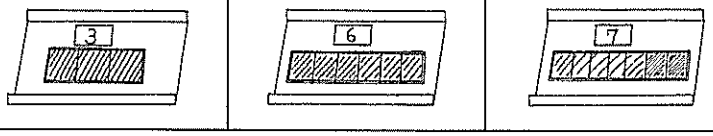
本時の目標

○　小さい数から大きい数までの全ての数範囲で，具体物を１つずつ数えたり（A・Bｸﾞﾙｰﾌﾟ），まとめて数えたり（Cｸﾞﾙｰﾌﾟ）して数字と対応付けながら，動物の森までの道路を作って楽しく遊ぶことができる。

Aｸﾞﾙｰﾌﾟ	Bｸﾞﾙｰﾌﾟ	Cｸﾞﾙｰﾌﾟ
・　１～５の数タイルを１つずつ数えて数字と対応付けることができる。 ・　間違えた場合に，操作のずれを感じて立ち止まり，教師と一緒に再操作することができる。	・　１～ 10 の数タイルを１つずつ数えて数字と対応付けることができる。 ・　間違えた場合に，誤りに気付いて立ち止まり，教師に促されて再操作することができる。	・　５～ 10 の数タイルを５をまとめて数えて数字と対応付けることができる。 ・　間違えた場合に，誤りに気付いて立ち止まり，教師に促されて再操作することができる。

準　　備　手順絵，道路，数対象（数タイル），数え箱，数表箱，車，前時までの道路，情景物

学習指導の過程

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
１．前時までの道路で車を走らせて遊び，動物の森までの道路をつくる活動について話し合う。 ○　遊びの楽しさを想起させ，活動への意欲をもつこと ○　活動の手順や操作方法への見通しをもつこと めあて どうぶつのもりまでのどうろをつくってあそぼう。	１．活動への目的意識や見通しをもたせる支援 ○　手順絵とモデル演示の提示 
２．動物の森までの道路を構成して遊ぶ。 Aｸﾞﾙｰﾌﾟ　Bｸﾞﾙｰﾌﾟ　Cｸﾞﾙｰﾌﾟ (1) 道路を作る数タイルを取り出す。 ○　数える数対象（１～５）の決定　○　数える数対象（１～10）の決定　○　数える数対象（５～10）の決定  (2) 数タイルを数え箱で数える。 ○　１つずつ数えること　○　１つずつ数えること　○　５をまとめて数えること  (3) 数えた数と同じ数字の道路に数タイルを構成する。 ○　数字と対応付けてずれを感じること　○　数字と対応付けて正誤に気付くこと　○　数字と対応付けて正誤に気付くこと  ※（1）～(3)を繰り返し行い，間違えた場合には(2)に戻り再操作を行う。	２．個の操作活動を促す支援 Aｸﾞﾙｰﾌﾟ ・１つずつ５までの数対象を数えていくための数え箱 ・操作の補助，数唱の最後の数を強調する声かけ ・５までの数表箱の用意 Bｸﾞﾙｰﾌﾟ ・１つずつ 10 までの数対象を数えていくための数え箱 ・操作の部分的な補助 ・10 までの数表箱の用意 Cｸﾞﾙｰﾌﾟ ・５をまとめて 10 までの数対象を数えていくための数え箱 ・操作の部分的な補助 ・10 までの数表箱の用意
３．動物の森までの道路で遊び頑張ったことを発表し合う。 ○　数を数えて道路を作った成就感を味わうこと	３．活動を達成した成就感を味わわせる支援 ○　遊びを発表し合う場の設定

第５・６学年梅組　国語科学習指導案

指導者　　早　川　由　洋

単　　元　ミニタウンへおつかいにいこう（読みましょう）

指　導　観

○　本学級の子供たちは，精神年齢４歳程度から８歳程度の５年生３名と６年生３名の計６名で構成されている。子供たちは，読むことに対して興味・関心をもっており，大半のひらがなについては読め，一語文程度の簡単なメモを読んで伝言されたことについては理解できる。しかし，日常生活において触れているにも関わらず，意識して読んでいない語句や文章については，その意味をとらえたり，意味をとらえた上で行動する段階まで至っていない。

○　本単元のねらいは，子供たちが生活の中で出会う「位置や方向を表す語句や文」を読み，内容を読み取って，模擬の場であるミニタウンへおつかいに行くという目的を達成することである。具体的な内容は，①目的を達成するために語句や文章を読むこと②読んだ語句や文章の意味を，ヒントカードや言葉辞書を活用したり音声化や動作化したりして，自ら調べとらえること③語句や文章の意味を行動と結びつけること④目的達成の喜びを味わうことなどである。これらの内容を学習することは，読む楽しさを感じ，生活に生きる言葉を獲得する上で意義深い。

○　本単元の指導にあたっては，子供たち自らが「頼まれた品物を買いに行こう。」という意識のもと，語句や文章を読み，意味をとらえ行動する活動に，繰り返し楽しく取り組んでいけるようにする。そのために，つかむ段階では，絵話を提示したり，保護者から子供たちへのおつかいの依頼を聞かせたりして，学習への興味・関心や目的意識をもたせるようにする。さぐる段階では，一人一人の読みの段階に応じて学習内容を設定し，読んだ語句や文章の意味をとらえ行動する活動に取り組ませていく。その際，新たに出会った語句の意味をヒントカードや言葉辞書などを活用したり，音声化や動作化することを通してとらえさせていく。いかす段階においては，おつかいができたことに対する保護者からの賞賛によって，読むことで自分が行動できた達成感や成就感を味わわせる。

目　　標

○　おつかいに行くためのメッセージカードに記されている、二語文～三語文程度の文章を読み，意味をとらえて行動することができる。

計　　画（約５時間）

段階	第１次つかむ（１）	第２次　さぐる（３時間）	第３次いかす（１時間）
活動と内容	１．絵話「ミニタウンへおつかいに行こう。」を見る。 ○ 保護者からの依頼をうけておつかいへ行こうという活動への目的意識・興味・関心を持つこと	２．ミニタウンへおつかいに行く。 (1)大通りへおつかいに行く。　① ○ 絵図や記号，簡単な標識等を読み，意味をとらえて行動すること (2)商店街へおつかいに行く。　① ○ 位置を表す言葉を加えた文章を読み，意味をとらえて行動すること (3)ミニタウンへおつかいに行く。　(本時) ① ○ 方向を表す言葉を加えた文章を読み，意味をとらえて行動すること	３．メッセージを読んでおつかいができた喜びを，保護者へ伝える。 ○ 活動に対する達成感や成就感を味わうこと
手だて	※　絵話の提示 ※　保護者からのおつかい依頼	※　位置・方向などの学習内容を行動化できるミニタウンの場の設定 ※　ヒントカードなど個に応じた教材，教具	※　保護者からの賞賛メッセージ ※　評価カード

本時の目標

○　ミニタウンへおつかいに行くため，位置・方向を表す言葉を中心に読み，意味をとらえて行動することができる。

Aグループ：具体的に方向・位置を表す文を読み，意味をとらえておつかいに行くことができる。

Bグループ：目標物から方向・位置を表す文を読み，意味をとらえておつかいに行くことができる。

Cグループ：抽象的に方向。位置を表す文を読み，辞書などで調べ意味をとらえておつかいに行くことができる。

準　　備　　手順絵，学習ノート，ヒントカード，メッセージカード，絵図，お店の模型，街の様子をあらわす具体物，ランゲージマスター

学習指導の過程

<table>
<tr><th>活　動　と　内　容</th><th>個の活動を促す支援</th></tr>
<tr><td>
1．本時学習のめあてについて話し合う。
(1) お母さんからのメッセージを聞く。
○　活動の楽しさを想起させ，活動への意欲をもつこと
(2) 学習の手順について話し合う
○　活動の進め方について見通しを持つこと
めあて
めっせーじをよんで，みにたうんへおつかいにいこう。

2．ミニタウンへおつかいに行く。
(1) メッセージを受け取り読む。
○　文章を音声化して意味をとらえる見通しをもつこと
<table>
<tr><th>Aグループ</th><th>Bグループ</th><th>Cグループ</th></tr>
<tr><td>・具体的に位置や方向・順番を表す語句を含む文の意味をとらえること</td><td>・位置や方向などを表す語句を含んだ文の意味をとらえること</td><td>・抽象的に位置や方向などを表す語句を含んだ文の意味をとらえること</td></tr>
</table>
(2) メッセージにそって道を進む。
○　語句や文章を読み，意味をとらえて活動できること
(3) 店について買い物をする。
○　読んだ内容と活動があっていたか確かめ見直すこと
○　買い物に関わる内容を場の中で読み活動できること
※　(1)~(3)の活動を繰り返す。
メッセージカードの例
1試行目：ポストをみぎへまがる。1けんめのやおやさんでとまとをかってきて。
2試行目：ポストをみぎへまがる。3けんめのぱんやさんでぱんをかってきて。
3試行目：でんちゅうをみぎへまがる。3けんめのほんやでほんをかってきて。
3．語句や文を読みとっておつかいに行った活動を振り返り，学習のまとめをする。
○　自分のおつかいのようすを発表し，語句や文を読んでおつかいに行けたことへの達成感・成就感を味わう。
</td><td>
1．活動への目的意識や見通しを持たせる支援
○　各家庭から子供たち一人一人にあてたメッセージの提示
○　ミニタウンの場の設定
○　モデル演示

2．言葉と事物を結びつける支援
○　場の中に，ミニタウン案内所を設け，一人一人のつまずきに応じた支援を行えるような活動の流れを作る。
（グループごとの支援）
Aグループ
・語句の意味がとらえられるような絵図を用いたヒントカードの活用
・語句の意味がとらえるような音声化や動作化等の援助
Bグループ
・文の意味がとらえられるように絵図を用いたヒントカードの活用
・語句の意味がとらえるような音声化や動作化等の援助
Cグループ
・文の意味を自ら調べることができる言葉辞書の活用
3．活動への達成感・成就感を味わわせる支援
○　保護者の賞賛，励まし
</td></tr>
</table>

◇　保体部実践提案協議会

○　シンポジウム「子供の心の健康を考える」

実践提案

提　案　者	志免町立志免南小学校	井　上　しのぶ
	附属福岡中学校	原　田　美智子
	本校保健部	今　村　由　香
司　会　者	福岡市立野多目小学校	白　石　由美子
指導助言者	福岡教育大学教授	照　屋　博　行
	福岡県立看護学校講師	筑　紫　咲　子

◇　学習指導協議会

全体会（２日目）

○　あいさつ

初等教育研究部委員長　　井上　正明
学　校　長　　藏　源一郎

◇　主題発表

「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」
―子供と創る教科・総合的学習の展開―

研究副主任　　伊藤　啓二

◇　教科等発表

○　算数科

「自ら数理を生活に活用していく算数科学習」

―算数的活動を活性化する学習の構想―

算数科部　　小森　晃

○　障害児教育全体（文部省特殊教育　教育課程研究指定）

「豊かな生活をめざす教育課程の編成」

―主体的な活動を支援する個別の指導計画―

障害児教育研究部　　舛元　俊文

◇　メ　モ

第２日目　午後の部

公開授業指導案

第１学年１組　国語科学習指導案

指導者　伊藤啓二

単　　元　こころの「どっきん」をことばでつたえよう

指　導　観

○　本単元は，学校生活や家庭生活のなかで感じた喜びや驚きなどを，聞き手や読み手にその状況や理由，自分の感じ方が分かるように的確に伝えて，お互いの伝えたいことが分かり合えるようになることをねらいとしている。１年生の１学期は，コミュニケーション能力育成の入門期であり，相手意識をもった表現と，相手の言葉を正しく受け取り，反応を返すことを学習する必要がある。具体的には，①自分の体験や発見の中から，相手に伝えたい情報や感情を適切な言葉に置き換えて正しく表現し，共有することができる，②生活の中の喜び，驚き，困惑など心に感じたことを伝え合い，相手との心の通じ合いをあじわうことができる，などが学習内容である。

○　本学級の子供たちは，入学以来の学習を通して，音声言語でその時の状況にあったあいさつや感謝の言葉を伝えるようになってきている。また，自分のしたいことなどを短く，一方的に話すことは日常の中で行っている。しかし，友達同士で言語によるコミュニケーションをはかっている姿は少なく，思いを共有できていないために，トラブルに発展することも多い。したがってこの期の子供たちには，言葉による喜びや驚きなどの情報や感情の伝え合いが，お互いの心を通じ合わせる基盤になることを実際の場で体験させる本単元のような学習が必要である。

○　本単元の指導にあたっては，生活科の学習や日常の学校生活の中から喜びや驚き，不思議さなど心で感じた体験を取りだし，グループで伝え合う遊びの中で，音声と文字言語によるコミュニケーション能力の基礎を育てていきたい。そのためには，「課題把握」段階で，十分活用できていない朝と帰りの会のお話コーナー「こころのどっきん」で何をどのように話したら楽しいか課題を明確にする。「情報受信・創造」段階では，生活科の学習経験や教室壁面の「心のどっきんカード」などをもとに伝える事柄や友達と共有したい思いをカードに絵や文章で表現し，伝え合いの内容を明確にする。「情報発信」段階では，二人組でカードを見せ合い，「こころのどっきん」でぜひ話してほしいことを決めて，その内容を伝え合うようにし，心の通じ合いを味わわせていきたい。

目　　標

１．朝や帰りの会のお話コーナーで話す内容として適切なものを選び，伝えたい事柄や状況，その事柄に対して自分の感じたことを言葉で表現し，質問などに答えることができる。

２．言葉で体験した事柄や感情を表現し，伝え合うことのよさを感じ取り，友達との会話や学校生活の中で生かそうとすることができる。

計　　画（約６時間）

段階	課題把握　（１時間）	情報受信・創造（３時間）	情報発信（２時間）本時１／２時
活動と内容	１．朝の会や帰りの会のお話コーナーでどのようなことを伝えればよいか話し合う。 ○　自分の体験したことや感じたことを正しく伝えようとする意欲をもつこと	２．生活科の学習や日頃の学校生活の中から伝えたい事柄を探し，どっきんカードに絵や文章で書き留める。 ○　喜びや驚きなどを視点として事柄を見て，伝えたい内容を取り出すこと ○　伝える事柄を簡単にメモすること	３．二人組でカードを見せ合い，伝える内容を決めて対話したり，文章に書いて交換したりしてお話コーナーの内容を作る。 ○　伝えたい事柄や感じたことを整理して話し，分かりにくい点を修正すること ○　伝えたいことが共有できた喜びの感受
手だて	○　お話コーナーの様子のビデオ提示と，友達の話した内容の一覧表の提示	○　生活科の学習場面の想起と学習ノートなどの振り返り ○　掲示物「こころのどっきん」の活用	○　伝える事柄を認識するための写真提示や実際の場所での認識活動 ○　話の内容を評価する評価カードの活用

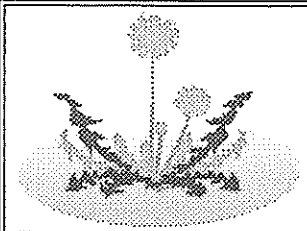
本時の目標

1．カードに書き留めておいた事柄の中から相手の伝えてほしいことに応じて，話す内容を考え，自分が感じたことを伝える言葉を工夫して，的確に話すことができる。

2．二人組で話を伝え合いながら，自分の話し方や相手の話し方を評価し，言葉で心を通じ合うよさを味わうことができる。

準　　備　児童側：話の素材カード，話の評価カード　　教師側：児童の話題をまとめた表と学校地図，話題を認識できる写真

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までに書き留めておいたカードについて，自分が感じたことをどのような言葉で伝えたら心の「どっきん」が伝わるか考え，本時のめあてをつかむ。 ○　カードをもとにして伝えるべき内容を認識すること ○　伝えたいことを表すための言葉の工夫に関心をもつこと	○　ぼくは3枚カードを書いたけど，どうしてそのことに「どっきん」としたのかわけを話さないといけないな。
めあて こころの「どっきん」を　つたえることばをくふうして　おともだちにも　「どっきん」としてもらおう。	
2．二人組で，伝えたい事柄として書き留めておいたカードを見せ合い，相手が知りたいことに対して，自分感じたことを表す言葉を工夫して対話をする。 (1) お互いに伝えてほしい事柄のカードを選び，知りたいことを伝え合う。 ○　相手の伝えたい事柄について知りたいことを質問すること ○　相手の知りたいことを的確に聞き取ること (2) カードをもとにして，伝えたいことを表す言葉を工夫しながら，相手の知りたいことに応じて話をする。 ○　自分の伝えたい事柄から話すための内容（その場の様子，体験の中身，出来事など）を取り出して表現すること ○　感じたことを表す言葉の数や使い方を広げること ※　分からなくなったらカードを見たり，相手に知りたいことをもう一度聞き返したりして話をさせる。	○　Aさんのカードは，花や生き物のことが多いな。どうしてたんぽぽのことを話したいのか知りたいな。 ○　どこにそんなたんぽぽが咲いているの。たんぽぽのどこに「どっきん」としたの。 ○　たんぽぽの花をじっと見たことがなかったけどいっぱい花びらがあるのにびっくりしたからそのことを話そう。 ○　「きれいでした」という言葉を使わないでどうやって分かってもらえるかな。。
 表現する言葉の工夫 ・たんぽぽの絵を描いたカードに対する友達の働きかけ （咲いている場所・たんぽぽをカードにした理由など） ・友達の働きかけと自分の伝えたいことを合わせた音声表現 たんぽぽの花をよく観察して分かったこと（花びらの数がたくさんあること，きれいな黄色だったこと，綿毛への変化の様子など） 「お日さまこんにちはと花をいっぱいに広げていました。」 「黄色いおひさまがふわふわのわたがしに変わっています。」	
3．伝え合ったことを実際の場所や写真などをもとに確認して伝え合った内容の正しさや工夫した言葉のよさ，おもしろさをお互いに認め合う。 ○　表現内容と表現した言葉のよさに対する相互評価 ※　実際に場所を移動して，その場で話し合うようにさせる。	○　たんぽぽが綿毛に変わっていることも聞いたけどほんとにわたがしみたいだね。 ○　朝の会で綿毛の様子もきちんとみんなに話そう。

第３学年１組　国語科学習指導案

指導者　　松　藤　秀　子

単　　元　　博多のあそびをつたえよう

指　導　観

○　本単元は，相手・目的意識をもって博多に伝わる遊びのすばらしさについて伝える紹介文を書くことをねらいとしている。具体的には，①長崎の附属小学校の友達と地域に伝わる遊び道具について交流しようという目的をもち，博多の遊びについて自分で紹介する道具を決め，楽しさや美しさや伝統などの観点で取材すること，②自分が伝えたいことをはっきりさせて事柄のつながりを考えて構成表をつくること，③中心となる段落のまとまりに注意したり，読み手を引きつけるような記述をしたりして文章を書くこと，が主な学習内容である。これらは，実際の生活に欠くことのできない目的的・実践的な文章表現力や地域の文化を大切にする心情を育てる上からも価値がある。

○　本学級の子供たちは，今までの作文学習で体験したことや見聞したことについて順序を表す言葉を使って整理して文章を書いたり，初め・なか・終わりの簡単な構成で文章を書いたりすることができるようになっている。また，接続語や文のつながりに注意して文章を書くことができるようになってきている。しかし，目的をもって取材したり自分が伝えたいことを明確にし，段落のまとまりを考えて書くことは十分にできていない。また，相手に分かりやすく説明するために構成や記述を工夫することはできていない。そこで，本単元では，生活科の学習で博多独楽で遊び，地域の伝統的な遊びに興味をもち始めている子供たちに，地域に伝わる遊び道具のすばらしさを観点をもって取材し，中心に書くことを明確にし，ことばを選んで文章を書くことができるようにしたい。

○　本単元の指導にあたっては，目的をもって取材し分かりやすく相手に伝えることができるように，次の三段階で構成する。つかむ段階では，博多の遊び道具を紹介している「ふるさと館」でどんな遊びがあるか取材し，遊びの楽しさを十分味わい，博多の遊びについて伝えたいという思いをもたせる。そして，自分が紹介する遊び道具と伝える相手を決め，学習計画を立てる。つくる段階では，遊びの楽しさや道具の美しさなどについて遊びを通して取材したり，博多の遊びに詳しい方から伝統や他地域の遊び道具との違いについて取材したりしてカードに書きまとめる。そして，取材カードを操作して構成を見直したり，モデル文と比べ読み手を引きつけるような記述を工夫したりして紹介文を完成する。生かす段階では，友達と紹介文を読み合い，表現のよさを認め合ったり博多の遊びのすばらしさについて認識を深めたりするとともに，長崎の附属小学校の友達と紹介文のやり取りをすることで地域文化のよさを伝え合うことができた喜びを味わうことができるようする。

目　　標

１．博多に伝わる遊び道具について調べ，昔からの遊びのすばらしさが相手に伝わるような構成や相手を引きつけるような記述を工夫して紹介文を書くことができる。

２．博多に伝わる遊びについて調べたり紹介文を書いたりしながら，博多に伝わる遊びのすばらしさについて認識を深め，地域文化に対する見方・考え方・接し方を高めることができる。

計　　画（約１１時間）

段階	つかむ段階（３時間）	つくる段階（６時間）	生かす段階（２時間＋課外）
活動と内容	１．地域の遊び道具を交流する計画を立てる。 (1)「ふるさと館」を見学し，博多に伝わる遊び道具を調べる。　② ○　紹介文を書く目的や紹介する観点の把握 (2) 紹介文を書く相手を決める。　① ○　相手意識を明確にもつこと	２．博多に伝わる遊び道具の紹介文を書く。 (1) 遊び道具について，遊びの楽しさ・道具の美しさなどについて取材する。　③ ○　観点をもって取材すること ○　取材したことをカードに書くこと (2) 構成や記述を工夫して紹介文を書く。　③（本時２／３） ○　中心を明確にして構成を考えること ○　相手からの情報をもとに再取材を行い構成を考えること ○　読み手を引きつける記述をすること	３．紹介文を長崎の附属小学校の友達に送る。 (1) グループで紹介文を読み合い，評価し合う。　② ○　友達の構成や記述のよさに気付くこと ○　博多の遊び道具のよさについて認識を深めること (2) 紹介文を送り，交流を深める。　（課外） ○　交流の喜びを味わうこと
手だて	※　ふるさと館の見学 ※　交流相手を決めるための絵地図	※　遊びながら取材できる場の設定 ※　長崎の友達へのアンケート ※　博多の遊び道具に詳しいG.T.の招聘	※　友達との相互評価活動 ※　長崎の附属小学校の友達からの返事

本時の目標

○　博多の遊び道具のすばらしさが長崎の友達に分かりやすく伝わるように，相手が知りたいことについて再取材を行い，事柄のつながりや段落のまとまりを考えて構成表をつくることができる。

準　　備　取材カード，博多と長崎の遊び道具，交流相手からの情報，学習の流れ図

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．取材カードを見直し，本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 自分が中心に伝えたいことや，紹介文を送る相手が知りたがっていることについて話し合う。 ○　相手が知りたがっていることの把握と相手意識の明確化 ※　長崎の友達が博多の遊び道具についてどんなことを知りたがっているのか，子供たちにアンケートを取らせておく。 (2) 本時学習のめあてについて話し合う。 ○　本時学習のめあての把握 めあて 博多のあそび道具のれきしや長崎のあそび道具とのちがいについて取材して，こうせい表をかんせいさせよう。	〈前時つくった構成の例〉 ・けんかこまのおもしろさ ・けんかこまのあそび方 ・ほかのあそび ・博多こまの色や形 ○　長崎の友達は博多の遊びについてどんなことを知りたがっているのかな。 ○　私が紹介文を送る友達は，博多おはじきが博多でつくられるようになった理由を知りたいんだな。松尾さんに尋ねてみよう。
2．分かりやすく伝えるために再取材を行い，構成表を修正する。 (1) 紹介文を分かりやすくするために再取材を行う。 ○　観点をもって再取材すること ・博多独楽（博多おはじき，博多チャンポン）の歴史 ・長崎の遊び道具との違いやあそび方の違い 博多独楽のおもしろさや遊び方だけでなく博多独楽はぼくたちが遊んでいる独楽とどこがちがうのかもっと知りたいな。 博多の独楽と長崎の独楽を比べて取材をしよう。どこが違うのかな。まず，鉄の芯でできていることが博多独楽の特徴だな。鉄の芯でできているから，博多独楽は他の独楽よりも長く回ということがすばらしいと思うよ。そのことを長崎の友達に伝えよう。 ○　博多の遊び道具に対する認識を深めること ※　長崎大学附属小学校の友達からの情報カードをもとに，友達が知りたいことをはっきりさせて，再取材を行う。 ※　遊び道具のコーナーを設定したり博多の遊びに詳しい方をG.T.として迎えたりして，自由に取材できるようにしておく。 (2) 長崎の友達を意識して，取材カードを並べかえる。 ○　相手意識を明確にもって再取材したことをつけ加えた構成を工夫すること ○　事柄のつながりや段落のまとまりを考えてカードを並べること ※　友達と構成表の取材カードを読み合い，文と文のつながりや段落のまとまりについて確かめさせる。 3．相手を意識して作り変えた紹介文を発表し合う。 ○　再取材したことや構成の工夫をしたことを根拠をはっきりさせて発言すること ○　紹介文を完成させる意欲を高めること ※　相手に応じた紹介文の書き方を認め合い，賞賛する。	○　ぼくが紹介文を送る友達は，博多チャンポンの歴史が知りたいんだな。チャンポンがいつごろから作られたのか調べてつけ加えよう。 ○　ぼくが紹介文を送る友達は，博多と長崎の独楽の違いを知りたいんだな。形やつくりの違いを調べよう。 ○　文と文はきちんとつながっているかな。 ○　長崎の友達が知りたがっていた博多チャンポンと長崎のビードロの違いをつけ加えたので，博多の遊びのすばらしさが伝わりやすくなったな。 〈見直した構成の例〉 ・博多こまの歴史と鉄の芯 ・博多こまの色や形 ・けんかこまのおもしろさ ・けんかこまのあそび方 ・ほかのあそび方

第３学年２・３組　あらつ学習指導案

指導者　　手　島　宏　樹

単　　元　西公園こだわりしらべ隊！

指　導　観

○　本学級の子供たちは，低学年の生活科の時間にたびたび西公園を訪れ，探検したり，基地を作って遊んだり，草花集めをしたりした経験をもっている。このような経験から西公園に愛着をもっている子供が多い。また，第３学年あらつ学習単元「あらつウォークラリー」で，西公園が桜の名所であり多くの人が訪れているという社会事象にも気づいている。しかし，西公園の自然が地域の人に親しまれていたり，西公園の自然保護を願って活動している方がいることなどには気づいていない。また，自分のこだわりを追究していくという学習経験も少ない。そこで，西公園のもの・人・ことを主体的に追究していく中で，西公園のよさや価値を実感できるようにしたい。

○　本単元は，西公園と触れ合うなかで，西公園のよさを見つけようとこだわりをもって対象を選択したり，追究方法を決定したりする西公園調査の活動を通して，西公園とのかかわり方を考え，実践できるようにすることである。西公園には豊かな自然や珍しい植物，素晴らしい景観などが存在し，地域の人たちの憩いの場となっている。しかし，植物伐採やゴミ問題など解決すべき問題もある。西公園を学習対象として取り上げることで，①西公園に愛着をもったり，西公園のよさを実感すること，②西公園に愛着をもっている方との西公園ウォークラリーや西公園調査などからこれからの西公園について考えること，などの内容を創り出すことができる。

○　本単元の指導にあたっては，西公園に対する自分なりのこだわりを発揮しながら主体的に追究していく体験を豊かにしていくことができるように，各段階での支援を次のように行う。まず「見出す」段階では，西公園に愛着をもっている方との西公園ウォークラリーを通して，新たに発見したことや疑問を出し合うなかで，自分がこだわって調べていきたい内容を明らかにする。次に「追究する」段階では，こだわり対象別グループを編成し，しらべ隊を組織する。子供のこだわり追究の体験を豊かにするために，①ＧＴに聞き取り調査の協力や講師としての招聘を依頼する。②西公園の昔の様子を表す資料や生き物図鑑，樹木図鑑などの資料を準備・提供を行う。③西公園調査については，こだわりグループ別ＴＴ指導体制で協力してこれにあたる。さらに，西公園のよさや現状について話し合う場を設ける。最後に「生かす」段階では,西公園新聞やパンフレット作りを通して，西公園のよさを利用者に伝えるなど，子供が主体的に実践することができるようにしたい。

目　　標

１．西公園ウォークラリーや調査活動などを通して，西公園のよさや現状をとらえ，これからの西公園を大事にしていこうと考え，実践を行うことができる。

２．西公園には，珍しい植物があったり，地域の人に好まれているところがあったりなどの西公園のよさと，豊かな自然が減少しつつある現状に気づくことができる。

計　　画（約１１時間）

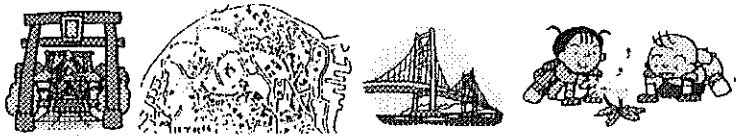
段階	見　出　す（２時間）	追　　究　　す　　る（６時間）	生かす（３時間）
活動と内容	１．多様な観点から西公園に触れ合い，追究していく対象を選択する。 ○　古くから残っている物生き物，植物，景観などのよさの意識付け ○　こだわりの焦点化	２．こだわりグループ別に西公園調査を行う。 (1) グループ別に西公園のよさを調べる。　③ ○　西公園の生き物の種類や生息場所の調査 ○　昔からある物や昔の西公園調査 ○　利用されている方のお気に入りスポット調査 (2) 調査結果を表現物に表し，交流する。　③ ○　西公園のよさや現状の意識化　（本時 3/3）	３．これからの西公園とのかかわりを考え，実践する。 ○　西公園のよさを伝える情報発信 ○　西公園への愛着の深まり
支援	※　西公園に愛着をもっているＧＴとの西公園ウォークラリー ※　西公園床地図での交流	※　人材バンク作りとＧＴへの協力依頼・協同調査 ※　図鑑や古地図，カメラなどの準備 ※　拡大西公園地図など表現方法の例示 ※　ポスターセッション	※　実践方法の自己決定の場 ※　実践へ向けてのＧＴへの協力依頼

本時の目標

○　西公園こだわり調査内容を互いに交流し合うなかで，西公園のよさを感じたり西公園の現状を意識したりして，西公園を大事にしたり，西公園のよさを伝えたりする実践へ向けての意欲や見通しをもつことができる。

準　　備　　こだわり調査の表現物・具体物，記録カード，西公園床図

学習指導の過程

活　　動　　と　　内　　容	子供の思考の流れ
1．前時までの学習を振り返り，本時学習のめあてについて話し合う。 ○　西公園のもの・人・ことについての理解の深まり ○　自分がこだわって調査してきたことを友達や調査を手伝っていただいたゲストの先生方に伝えようとする意欲 ○　友達のこだわり調査についての興味・関心 友達のこだわり調査の発表を聞き，西公園のよさについて話し合おう。	○　西公園の昔の様子がよく分かってきたぞ。 ○　調査したことをみんなに教えてあげよう。 ○　友達はどんな西公園のよさを見つけてきたのか知りたいなあ。
2．西公園についてこだわって調査したことを交流し合い，西公園のよさについて話し合う。 (1) お互いのこだわり調査の内容を交流する。 ○　西公園についての多面的な理解 ・昔から残っている物，昔の様子・利用者に親しまれる場所  ・豊富な動植物と珍しい動植物 ○　友達の調査の仕方や表現の工夫のよさの感受 ※　ポスターセッション形式での交流の場を仕組むことで，友達のこだわり調査を熱心に聞き取ろうとする姿や自分のこだわり調査の内容を懸命に伝えようとする姿を引き出したい。 (2) 西公園のよさについて話し合う。 ○　自然が多く地域の人に愛されている西公園のよさ ○　西公園を大切にしたいという思い ※　西公園のよさと，西公園の草花が折られたりゴミが多くなってきている現状を出し合わせる。	○　自分が調査したことと友達の発表を比べたりして西公園のよさについて話し合おう。 ○　西公園には，地域の人から好かれているところがいっぱいあるんだなあ。 ○　西公園の自然を求めてこられている人がたくさんいるんだなあ。 ○　西公園のよさは自然がたくさんあるところだ。 ○　珍しい植物や昔から変わらない景色があるのも西公園のよいところだよ。 ○　西公園にはたくさんの自然があると思っていたけど，ゲストの先生がおっしゃっていたように，西公園の生き物や植物が少なくなっているのも事実だよ。 ○　ゴミもたくさんあったよ。
3．これからの西公園とのかかわりについて話し合う。 ○　西公園の自然を守っていこうとする意欲と見通し ○　自分たちが発見した西公園のよさを他の人にも伝えていこうとする意欲と見通し ぼくたちで西公園のよさを伝えたり，西公園を守ったりする活動をしよう。 ※　ＧＴにこだわり調査やこれからの西公園へのかかわり方について評価していただく場を設定し，強化する。	○　ぼくたちも何か西公園を守ることにつながる活動ができないかなあ。 ○　西公園のよいところをみんなに伝えていこう。 ○　ゲストの先生方にも協力していただけると言ってもらって心強いなあ。

第５学年１組　あらつ学習指導案

指導者　　猿　樂　隆　司

単　　元　　未来に残そう！きらめく博多湾

指 導 観

○　本学級の子供たちは，これまでに生活環境科の学習において，地域の環境を自分とのかかわりでで追究し，環境を保護・創造する経験をもっている。その結果，室見川における水の循環に着目し，生活雑排水や廃棄物の処理の仕方を工夫するという自分なりの応えを見出してきている。しかし，学習対象である博多湾と自分の生活との関係についてはあまり意識しておらず，愛着も薄い。学び方については，追究対象を選択し，情報収集力や観察・調査力，表現力などを駆使して課題解決に向かうことができるようになってきているが，問題事象に出会った際に多面的・総合的に考え，自分の行為を決定する力は不十分である。

○　本単元は，自分にとっての博多湾の役割を調べ，博多湾の自然や施設と自分の生活との関係に気付き，そこで出会った問題点の解決に向けて，自分の博多湾へのかかわり方を考え，実践できるようにすることである。この博多湾を学習対象とすることで，①博多湾における自然や施設，人とふれあいから生じた課題を調べ，博多湾には住居の場，海の玄関の場，物流の場，自然との触れあいの場などの役割や価値があることをとらえること，②湾内に残る水質汚濁や廃棄物の不法投棄などの問題状況をとらえ，博多湾の保護・創造に向かう意志をもつこと，③博多湾を未来に残す方法を開発や自然保護の面から考え，水の適切な使い方や廃棄物の処理の仕方など具体的なかかわり方を見出し，実践すること，などの内容を創ることができると考える。

○　本単元の指導に当たっては，自分の博多湾に対するかかわり方を考え，実践できるようにさせたい。そのために，見出す段階では，湾内の写真から自然や施設とのかかわりを想起させ，かかわりの薄い地域の役割や機能に着目した観察・調査を行わせる。そして，観察・調査で生じた疑問を類型化し，博多湾と自分たちの生活とのつながりを探る追究課題を見出させる。追究する段階では，課題別グループを編成し，対象別の観察・調査活動を位置づけたり，人物を招聘したりして追究の深化を促す。また，博多湾の役割を表現物にまとめさせ，ワークショップ的な交流を位置づけ，内容の共有化を図る。さらに，湾内の問題点に気付かせ，博多湾のよさを残す新たな課題づくりを行わせる。生かす段階では，湾内の環境問題における解決策を話し合わせ，博多湾へのかかわり方を振り返らせ，自分にできる湾内の浄化の仕方や地域への呼びかけ方などの応えを見つけさせる。

目　　標

１．博多湾は，海の幸や自然との触れあいの場，生活の維持・向上の場を提供してくれる役割があることをとらえ，将来にむかって海を生かした生活を行うことの大切さに気付くことができる。

２．博多湾における環境問題の解決に向けて自然保護団体や港湾局などの工夫や努力に対する共感をもとに，博多湾への望ましいかかわり方を考え，実践することができる。

計　　画（約16時間）

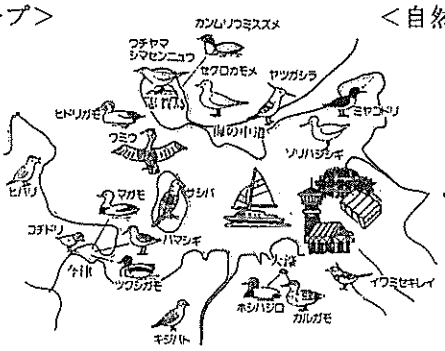
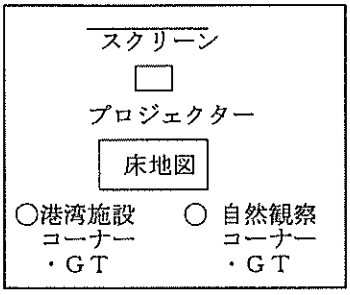
段階	見　出　す（４時間）	追　究　す　る（７時間）	生　か　す（５時間）
活動と内容	１．博多湾の自然等の出会いから追究課題を話し合う。 (1) 写真をもとに博多湾と生活との関係を話し合う。① ○　自然や施設と自分の生活の関係に気付くこと (2) 湾内の自然や施設を概観し，課題を話し合う。　③ ○　追究対象や内容の決定	２．課題解決に向けて追究する。 (1) 課題グループ別に調べる。　④ ○　追究対象に応じた内容の創造 ・港湾施設の機能や役割 ・湾内の生態系やそれらと自分たちの生活との関係等 (2) 調査結果を表現物に表す。③ ○　湾内の施設や自然などの果たす役割と問題の意識化(本時 2/3)	３．これからの博多湾へのかかわり方に向けて話し合い，実践する。 (1) 課題別グループごとに湾内の問題について話し合い，表現し，シンポジウムを行う。　③ ○　望ましいかかわり方の吟味 ・排水処理等の工夫 (2) かかわり方を実践する。　② ○　博多湾への愛着の深まり
手だて	※　湾内の自然事象や港湾施設の写真や地図の提示 ※　湾内での生活経験の想起 ※　湾内の自然や施設の概観 ※　湾内の自然等と自分との関係を意識した表現の促し	※　課題別によるグループ編成 ※　ゲストを招いたリサーチ活動 ※　調査結果の交流をワークショップ形式で行うことの促し ※　湾内の環境問題へ焦点化した新たな課題づくりの場の設定	※　新たな課題に対応したグループ編成 ※　ゲストを招いた博多湾のあり方を考えるシンポジウムの位置づけ ※　実践活動の位置づけ（博多湾開港 100 周年事業への参加）

本時の目標

○　博多湾には，自然とふれあい安らぎを与える場や生活を支える物資を供給する場などの役割があることを多面的にとらえるとともに，環境問題に関する新たな課題を創る意欲をもつことができる。

準　　備　博多湾の床地図，ワークシート，カード，掲示資料，ビデオプロジェクター，パソコン

学習指導の過程

活　　動　　と　　内　　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてについて話し合う。 ○　自分にとって博多湾の役割を相互に明らかにすること めあて 他のグループの発表を聞き合い，自分たちにとっての博多湾の役割について話し合おう。 ※　福岡市港湾局の萩尾さんや和白干潟を守る会の長阿弥さんらを紹介し，めあてを確認させるとともに，活動の意欲づけを行う。 2．自分にとっての博多湾の役割を発表し合う。 (1) 自分にとっての博多湾の役割を相互交流するための準備をそれぞれの場所で行う。 ○　個々の博多湾の役割を相互交流することへの意欲をもつこと ※　予めワークショップ形式で話し合うことを促し，発表内容について，ゲストの方に尋ねるように知らせる。 【予想される追究対象と内容の例】 ＜港湾施設グループ＞ ・福岡に集中する利用客増の背景 ・博多港の物資と生活との関係 ・博多湾の歴史等  ＜自然観察グループ＞ ・干潟に生息する生物種や生態系の意味や価値 ・生物を大切にする人々の思い等 (2) 自分にとっての博多湾の役割を発表し合う。 ○　博多湾と自分の生活とのつながりの多面的・総合的な把握と他のグループの追究内容や方法のよさの感受 ※　発表を前後半の２つに分け，個々の発表内容や方法のよさを知らせるカードを記入し，受け渡しながら，交流させる。 ※　個々の追究内容についてゲストから随時，肯定的な評価を頂く。 (3) 各グループが見出した博多湾の役割について話し合う。 ○　博多湾には，物資供給の場や潤いの場などの役割があること ※　パソコンによるプレゼンテーションを行う。 3．これからの博多湾はどうあればよいかを話し合う。 ○　物資供給を重視した開発優先の考えと生態系を重視した自然保護優先の考えの拮抗による新たな課題意識をもつこと ※　港湾局の萩尾さんや守る会の長阿弥さんに未来の博多湾についての考えを尋ねることにより，これからの博多湾のあり方に対する多面的な視点をもたせる。	○　今日は自分が感じた博多湾の役割を発表し合う時間だ。 ○　干潟には約240種の野鳥が観察できるよ。 ○　博多湾は朝鮮半島や日本海を渡る鳥にとってよい休憩場所だよ。 ○　野鳥を見ているとなんだか心が安らぐな。 ○　友達は博多湾にどんな役割を見つけているのだろう。聞いてみたいな。 【場の図】  ○　港にはたくさんの食料があってどれも生活に欠かせないものなのだ。 ○　これまで博多湾をただ何となく見ていたけど，実は生活を支えてくれている大切な場所なのだ。 ○　でも，物資を置く場所が足りなくなってきているという問題もあるよ。 ○　人間の開発によって動植物の生態系が破壊されている問題もあるね。 ○　これから博多湾にどのようにかかわっていけばよいのか，考えたいな。

第５学年２組　算数科学習指導案

指導者　　小　森　　晃

単　　元　　時間を大切に使う工夫をしよう（平均）

指　導　観

○　本単元は，子供たちが月曜日から土曜日までの１週間のなかで登校するのにどれくらい時間がかかるか平均を調べて，時間に余裕をもって登校できるようにすることをねらいとしている。子供たちが漠然ととらえて行動している登校時間について，１週間や各曜日ごと，雨天の日と晴天の日などの平均を求めていく本単元には次のような内容がある。①１つ１つが異なっている登校時間をならして１日あたりの登校時間を調べていくことができる。②月曜日～土曜日，雨天の日と晴天の日の登校時の渋滞による遅れなどの特徴や傾向を読み取ることができる。③各曜日ごとの渋滞や天候の影響を受ける登校時の様子を考えて，始業時刻に遅れないように行動することができる。

○　本学級の子供たちのほとんどは地下鉄や電車，バスなどの公共交通機関を利用して登校している。そのために，それぞれの発車時刻に合わせて家を出ているが，ややもすると交通機関の遅れなどのために始業時刻ぎりぎりに登校してくることがある。これは自分の登校にどれくらいの時間がかかるのか漠然としたとらえ方をしているために，曜日の違いや雨天時など状況に応じた判断が十分になされていないためであるといえる。そこで本単元では１週間の登校時間を調べて，１つ１つの異なる数値を平均して自分の登校時間を明らかにしたり，曜日ごとや天候の違いによる登校時間のズレを明らかにしたりして状況に応じた判断と行動ができるようにする態度を養う。

○　本単元の指導にあたっては，自分の登校時間を明らかにして始業に遅れないようにする追究主題を設け，その主題に迫る過程で数値の異なる登校時間をならして平均値を求めたり，その方法を曜日や天候といった観点からの資料の整理に活用していくことができるようにしたい。そのためにまず，つかむ段階では始業に遅れたり遅れそうになったりした経験を想起して原因を話し合い，登校時間を明らかにしていく追究主題をつかませる。次に調べる段階では１週間分の登校時間の資料をもとに，それぞれの数値を平均して１日あたりの登校時間を調べていく。最後にまとめる段階では数週間分の資料をもとに，曜日や天候の違いによる登校時間のズレを平均によって明らかにしながら始業に遅れることのない登校の仕方を決めていくようにする。

目　　標

１．月曜日から土曜日まで登校にかかる時間をならして１日あたりの登校時間を求めたり，曜日や天候の違いによる登校時間のズレを明らかにしたりすることができる。

２．自分のライフサイクルに合わせた登校の仕方を決めて，状況の変化に応じた行動ができる。

計　　画（約４時間）

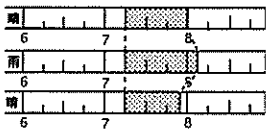
段階	第１次　つかむ段階(1時間)	第２次　調べる段階(2時間)	第３次　まとめる段階(1時間)
活動と内容	１．始業時刻に遅れた経験から登校時間についての追究主題をつかむ。 ○　登校時間を明らかにする追究主題をつかむこと	２．１週間分の登校時間の資料から時間をならして１日あたりの登校時間を調べる。 ○　異なる数値をならして平均を求める工夫をすること	３．曜日や天候の違いによる登校時間のズレを調べ，登校の仕方をまとめる。(本時) ○　曜日や天候の観点で平均の求め方を活用すること
手だて	※　始業時刻に遅れそうになったり遅れたりした経験を想起させる資料提示	※　家を出た時刻と学校に着いた時刻を記録した帯状のタイムテーブル	※　平均を求める方法が想起できる既習の資料と数週間分のタイムテーブル

本時の目標

○　月曜日～土曜日，雨天の日や晴天の日などの観点から取り出した登校時間を平均して比較しながら自分の登校時の様子をつかみ，これからの生活に生かそうとすることができる。

準　　備　数週間分の登校時間にかんする資料，平均の求め方をまとめた流れ図，学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．平均した登校時間を守っても遅れそうになったり余裕がなかったりした経験を出して原因について話し合い，めあてをつかむ。 (1) 平均した登校時間よりも時間がかかってしまうことがある点について，その原因を話し合う。 ○　曜日や天候による時間のズレに気づくこと (2) 曜日や天候などの違いによって登校時間にどれくらいのズレが出てくるのかを明らかにする方法を話し合い，めあてをつかむ。 ○　いくつかの数値をならして平均を求める方法を想起すること ※　数週間分の登校時間の記録を提示して，天候や曜日の違いを書き込んで比較させる。 めあて 曜日や天候によって登校時間がどれくらい変わるか調べよう。	○　１日の平均の登校時間よりも時間がかかってしまうことがあるんだ。 ○　雨の日にはいつもより学校に来るまでに時間がかかっているみたいだ。 ○　月曜日はいつも車が混んでいてバスが遅れてしまうことがある。 ○　曜日ごとや雨の日の登校時間の平均を調べてみると本当に遅くなっているのかどうかがはっきりすると思う。
2．いくつかの数量を合計したものを資料の数値でわり算をするといった平均の求め方を活用して，曜日ごとの登校時間の違いや雨天と晴天よる登校時間の違いを調べる。 (1) 数週間分の登校時間に関する資料から，天候や曜日など観点を決めて数値を取り出して平均しながら，それぞれの登校時間のズレを明らかにする。 ○　観点を決めて取り出した数値を平均すること  晴天（３５分＋３０分＋２５分＋３０分）÷４＝３０分 雨天（４５分＋３９分＋５１分）÷３＝４５分 晴天時と雨天時の違い４５分－３０分＝１５分 ※　数週間分の資料をタイムテーブル化した学習具を使って，観点ごとの数値を取り出しながら登校時間を調べさせる。 (2) 曜日ごとの登校時間の違いと天候による登校時間の違いについて調べた結果から，どれくらいのズレがあったか話し合う。 ○　資料の数が違っていても平均すると比べられること	○　前と違って，今度は曜日ごととか雨の日と晴れの日の平均を出すから資料からその日の時間を調べないといけないんだ。 ○　僕は雨の日が時間がかかっていると思うから，雨の日の登校時間と晴れの日の登校時間を比べてみようと思う。 ○　私はバスだから曜日によって違うと思う。月曜日と他の曜日を比べてみたいな。 ○　平均するとやっぱり雨の日や月曜日は他の日に比べて時間がかかっていることがはっきりした。
3．明らかになった曜日による登校時間のズレや天候による登校時間のズレをもとに，これから登校してくる際に気をつけることをまとめる。 ○　自分のライフサイクルに合わせた登校の仕方を決めること ※　各自の通学距離，通学方法の違いに応じて，それぞれが自分なりの登校の仕方を見直すようにうながす。	○　月曜日や雨の日はいつもよりも早く家を出るようにしよう。

第６学年２・３組　音楽科学習指導案

指導者　　津　本　修　一

題　　材　　音楽めぐりの旅「ぼくのわたしのモーツァルト」

指　導　観

○　本題材は，モーツァルトをテーマ作曲家として，その作品を教材曲として取り上げるとともにモーツァルトの伝記や書簡，音楽事典，音楽ソフト，楽譜などの様々な資料を収集・選択しながら，鑑賞したり表現したりすることにより，自分なりの音楽の楽しみ方を身につけていくことをねらったものである。教材曲としては，ピアノソナタハ長調Ｋ．５４５，ディベルティメントＫ．３３４より第３楽章メヌエット，歌曲「おいで愛しいツィターよ」を中心教材として取り上げる。この題材を通して身につける主な音楽科の内容としては，①主な旋律とその反復，変化及び対照並びに全体の構成に気を付けて聴くこと，②楽器の音色及び人の声の特徴に気を付けて聴くこと，③歌詞の内容及び楽曲の仕組みを理解して，それらを生かした表現の仕方を工夫すること，④拍の流れやフレーズを感じ取って，強弱や速度の変化に応じた演奏をすることなどである。

○　本学級の子供たちは，音楽活動に対して意欲的に取り組むことができる。鑑賞の活動に対しては，楽曲の主題を覚えて口ずさんだり，体を動かしながら楽しく聴く子が多く見られるようになってきた。しかし，主要主題の反復・対照・変化といった楽曲の構成面に留意して聴くことができる子は少ない。また，テーマ作曲家であるモーツァルトについては，ほとんどの子が名前を知っており，いくつかの作品を聴いてきた経験をもっている。しかし，その生涯や人柄，作曲の背景などに関心をもち，それらと関連づけて鑑賞したり表現する活動やそのおもしろさに気付いている子は少ないようで，自分なりの音楽の楽しみ方を身に付けるにはいたっていない。

○　本題材の指導にあたっては，出会う段階では，テーマ作曲家であるモーツァルトについて知っていることや聴いたことのある作品について話し合わせ，題材への関心をもたせる。次に，教材曲に出会わせ，疑問に思ったことや調べてみたいことについての情報収集活動を位置づける。ここでは，作曲者の伝記や書簡，音楽事典，音楽ソフト，楽譜などの様々な資料を子供に収集させたり必要に応じて提供したりしたい。深める段階Ⅰでは，収集した情報をもとに自分の課題に応じた教材曲の鑑賞を行い，鑑賞ノートづくりを行う。深める段階Ⅱでは，教材曲のなかから好きな曲と表現方法を選択し，演奏して楽しむ活動を行う。ここでは，子供の実態に応じて楽曲のアレンジを行ったり，必要な楽譜類を提供していきたい。広げる段階では，モーツァルトの他の作品の楽曲紹介や演奏発表などを交えた「ぼく・わたしのモーツァルト発表会」を行い，音楽活動の生活への広がりを図る。

目　　標

１．モーツァルトの音楽をすすんで聴いたり，演奏したりしようとすることができる。

２．楽曲の主要主題・反復・変化・対照に気をつけて聴いたり演奏したりすることができる。

計　　画（約８時間）

段階	出会う（2時間）	深めるⅠ（3時間）	深めるⅡ（3時間）	広げる（課外）
活動と内容	１．テーマ作曲者について話し合い，教材曲を聴く。 ○　モーツァルトについての話し合い ○　教材曲の全体的な鑑賞	２．モーツァルトや教材曲に関する資料を集めて教材曲を鑑賞する。（本時３／３） ○　モーツァルトや教材曲に関する情報収集 ○　教材曲の鑑賞	３．教材曲の中から選択した楽曲を演奏する。 ○　教材曲と表現方法の選択 ○　楽曲の構成面に留意した表現の工夫	４．「ぼく・わたしのモーツァルト」発表会を行う。 ○　モーツァルトの作品の鑑賞発表 ○　モーツァルトの作品の演奏発表
手だて	※　モーツァルトに関する視覚的資料の提示	※　モーツァルトに関する文献・音楽ソフト・楽曲構想図などの提供	※　楽曲の指導の実態に応じたアレンジと楽譜類の提供	※　発表会の時間・場の設定

本時の目標

○　モーツァルトのメヌエット（ディベルティメント第１７番Ｋ．３３４第３楽章）の演奏楽器・楽曲構成に関する情報を主体的に集め，楽しく鑑賞することができる。

準　　備　モーツァルトに関する掲示資料，関連図書，鑑賞ＣＤ，楽曲構成図，演奏楽器資料
主要主題別モデルテープ，鑑賞ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．前時学習を想起し，本時のめあてをつかむ。 (1) 前時学習について話し合う。 ○　ピアノソナタＫ．５４５について鑑賞した事項 ・演奏楽器　・楽曲構成　・作曲者の生涯 (2) メヌエットを聴いて，本時学習について話し合う。 ○　個人の鑑賞課題を設定すること ・楽曲構成について調べること ・演奏形態について調べること ※　モーツァルトやメヌエットに関する資料について紹介し，課題解決への見通しをもたせるようにする。 めあて モーツァルトや楽曲に関する必要なことを調べて，メヌエットを楽しく鑑賞しよう。	○　この前の時間は，ピアノソナタについて資料を調べて鑑賞したな。 ○　今日は，メヌエットの演奏楽器について調べてみたいな。 ○　メヌエットは，どんな曲のつくりになっているのか調べたいな。 ○　この曲が作曲されたときのモーツァルトはどんな生活をしていたのかな。
２．情報収集活動にもとづいた鑑賞活動を行う。 (1) モーツァルトやメヌエットに関する資料を収集する。 ○　掲示資料・音楽ソフト・関連図書などの選択収集 ※　モーツァルト，ディベルティメント，メヌエットに関する掲示資料や楽曲形式模式図，主要主題別モデルテープなどの資料を準備し，場の構成を工夫する。 ※　必要事項を書き取ることができるように鑑賞メモカードを準備し，活用させる。 (2) 調べたことをもとに，メヌエットを全体で鑑賞する。 ○　楽曲の主要主題・構成・音色などに気をつけて聴くこと 【主題】 【副主題】 ※　鑑賞にあたっては，ＣＤ聴取だけでなく，授業者のピアノ編曲演奏を行うことにより，体感的に音楽をとらえさせる。	○　メヌエットの楽器は，バイオリン２，ビオラ，チェロ，コントラバス，ホルンで演奏されているんだな。 ○　メヌエットの構成は，複合３部形式でできているんだな。 ○　中間部は，弾んだ感じのメロディーがでてきて新鮮な感じがするな。 ○　演奏者の息がぴったり合っていてすごいな。 ○　同じ曲でもピアノできくと，感じがちがっておもしろいな。
３．本時のまとめをし，次時の学習活動について話し合う。 ○　鑑賞活動についての感想の発表 ○　次時の表現活動についての話し合い ※　メヌエットの器楽アンサンブル編曲版の演奏を視聴することにより，次時からの表現活動への意欲をもたせる。	○　音楽は，曲の構成や作曲者について調べて聴くといっそう楽しくなるな。 ○　今度は，自分もアンサンブルしてみたいな。

第４学年１・３組　体育科学習指導案（さくら組との交流学習）

指導者　笠　宏照（T1）舛元俊文（T2）

単　　元　「シュートゲーム」をしよう（ゲーム）

指導観

○　本単元は，２つのチームが自分たちの的を倒して得点するためにパスをしたり，ボールを力強く投げたりすること，相手が投げたボールを止めることによって勝敗を競い合うゲームである。ねらいは，さくら組（本校特殊学級中学年）の友達とゲームをする中で，子供たちが自分たちの力を十分に出し合い，お互いの動きにかかわり合いながら，共にゲームの楽しさを味わうことである。主な内容として，①自分たちの特性を生かして動きや場を工夫し，思いきり活動してゲームを楽しむこと，②チームで協力して攻めたり守ったりする動きを工夫すること，などがある。中学年体育に取り上げる価値は，生涯体育・スポーツの視点から運動を通して障害のある友達とのかかわりを持ち，共に楽しみながら多様なかかわり方を広げ深めることができるという点である。

○　本学級の子供たちは，ドッジボールなどの学習を通して，集団で勝敗を競い合う楽しさやボールを投げて得点する楽しさを味わってきている。特殊学級の友達との交流は，日常的な遊びや様々な行事の中で，お互いの名前を呼び合いながら仲良く遊び回ったりするなどの一緒に活動する姿が見られる。そこで，このような姿をさらに運動を通して実践することによって，さくら組の友達と一緒に運動する楽しさを味わいながら，お互いのかかわりや動きを広げ，深め合おうとする心や態度を育てていきたい。

○　本単元の指導にあたっては，子供たちが動きやかかわりを広げ，深め合いながら勝敗を競い合い楽しく活動できる運動内容の設定と場の構成から支援を行っていくものである。具体的にはつかむ段階では，子供の運動実態に応じたボールや的を提示し，的に向かってボールを投げ倒しながら得点する活動を設定することでゲームの見通しを持たせるようにする。ふかめる段階では，投げる動きや共に活動するかかわりが広がり，深まるような楽しいゲームを展開する。ポジションを決めたり，的の大きさを変えたりすることによって，投げる・止める動きを広げ深めること，友達同士で声をかけ合うことなど多様なかかわりを図っていく。あじわう段階では，広げ深めた動きやかかわりを生かしたゲーム大会を開き，集団で競い合う楽しみをすべての子供に感得させていく。

目　　標

１．さくら組の友達と共に運動する喜びを味わいながら，自分たちの力を十分に出し合い，お互いの動きやかかわりを広げ深め合って楽しくゲームをすることができる。

２．的の大きさや位置に応じて，ボールを遠くに正確に投げてシュートをしたり，守り方を工夫したりなど，チームの特性を生かした動きや作戦を工夫することができる。

計　　画（約７時間）

段階	つかむ（２時間）	ふかめる（３時間）	あじわう（２時間）
活動と内容	１．ゲームと出会い的へ向かってボールを投げる活動を行い，見通しを持つ。 ○　ボールや的に慣れること ○　チームの特性を知ること	２．ボールの投げ方や守り方を工夫して，友達同士のかかわりを深めながら仲良しチームと楽しくゲームをする。 (1) 固定した的がある場でゲームをする。　① ○　パスで攻めながら的へ向かってボールを投げること ○　集団で的を守ること (2) 的の大きさを変え作戦を考えてゲームをする。②（本時1/2） ○　強さや方向を考え的に向かって投げること ○　場に応じた動きにかかわる友達同士の声のかけあい	３．動きやかかわりを生かしてゲーム大会をする。 ○　いろいろなチームとゲームをすること ○　工夫点やがんばりの感得
手だて	※　１・３・さくら組混合のチーム編成 ※　始めのゲーム設定	※　子供の特性が発揮できるできるような場の提示 ※　自分たちで操作可能な的の提示 ※　動きやかかわりの工夫点を示した記録カードの提示	※　総当たり戦によるゲーム大会の設定

本時の目標

1．さくら組の友達と一緒にゲームをしながら，的の大きさや位置に応じてボールを投げることを促す働きかけを行ったり，味方同士で素早いパスをし合ったりすることができる。

2．的の大きさをとらえながら，強さ・方向など多様なボールの投げ方や守り方における作戦などを考えることができる。

準　　備　　ボール，的，得点板，作戦板

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時のめあてについて話し合う。	
(1) 前時学習を想起する。	
○　的の位置を固定してゲームをしたこと	○　この前は，的を固定してゲームをしたな。
※　前時の活動を設定し，投げ方など動きの工夫点やかかわりの広がった姿などの意見を発表させる。	○　～さんにパスして，的を倒していったぞ。
(2) 的の大きさを変えることをとらえ，本時学習のめあてについて話し合う。	○　今日は，的の大きさが変わるぞ。
めあて 的の大きさを考えながら，ボールの投げ方や守り方を工夫して楽しくゲームをしよう。	○　的の大きさに応じて動きや作戦を考えよう。
○　めあてを知り，ポジションをチームで決めること	○　ポジションをうまく使って的に当てたり，的を守ったりするぞ。
※　新しい的を提示し，チームの動きについて考えさせる。	
2．的の大きさや位置を変えた場で，投げ方や守り方を工夫してゲームをする。	○　的が小さくなったので，しっかりねらって投げないといけないな。
(1) ゲーム1をする	○　後ろ側からもねらわれるから，素早く回り込まないといけないな。
○　強く投げたり，コースを考えて投げること	
○　自分のポジションをとらえて，的を守ること	
○　友達へパスしたりシュート援助をしたりすること	
動きの工夫　「守りの少ない方にシュートしたよ」　「的に近い方にパスして倒したよ」 **かかわりの広がり**　「前にいる友達にパスをしたよ」　「守り方を一緒に考えたよ」	
※　動きのカードを提示しながら，距離による投げ方の違いを捉えさせる。	○　パスをうまく生かして，的をねらっていこう。
(2) 作戦を考えて，ゲーム2をする。	○　後ろの方に遠くへボールを投げる～さんにいってもらおう。
○　ボールの投げ方や方向を生かしたパス	○　素早くパスをして，守りを分散させて的を倒そう。
○　場に応じたポジションと動き	○　みんな自分の場所で的を守ることができたよ。
※　作戦板によって攻守の工夫をまとめさせる。	
3．本時について話し合いまとめる。	
○　方向を変えて投げる動きができたこと	
○　アドバイスなどを通してさくら組とのかかわりが深まったことを実感すること	

第３・４学年さくら組　体育科学習指導案（４年１・３組との交流学習）

指導者　舛元俊文(T2)　笠　宏照(T1)

題　　材　「シュートゲーム」をしよう　（ゲーム）

指　導　観

○　本学級の子供たちは精神年齢３歳から７歳程度の３年生(男１名・女２名)，４年生(男２名・女1名)の計６名で構成されている。子供たちはこれまでに，基本の運動を中心に多様な運動経験をしてきており，ゲームについては，「鬼遊び」やボールを投げたりころがしたりしながらの的当てなど簡単な攻守を交替してのゲームを通して，ゲームを楽しむ上で必要なきまりや役割分担などを経験してきている。しかし，投げたりころがしたりといった，ものに働きかけながら楽しむ子供から，勝ち負けのきまりを意識しながら楽しむ子供とその楽しみ方は様々である。友達とかかわり，協力しながら自分たちで楽しく活動するまでには至っていない。

○　本題材「シュートゲーム」は，２つのコートに分かれお互いが向かい合い，相手の所にある的をねらってボールを投げたり，倒されないように飛んでくるボールを止めたりを繰り返し，時間内に的をたくさん倒した方が勝ちという攻守分離型のゲームである。ねらいとしては，４年１・３組とのゲームを通したふれあいを行うことにより，小集団のなかで的を意識できるような動作補助や声かけを受けたりしながら人とのかかわりを広げたり，投げるという動きを広げ必要なきまりを守りながら，友達と一緒に楽しく運動させることである。具体的な学習内容は，①小集団での行動に慣れ親しみ協調的にかかわること，②教師や友達の働きかけを受け入れること，③投げる，受ける，止めるといった多様な運動経験をすること，④手順や方法，勝ち負けのきまりなどを守ってゲームをすることである。以上のことから，ボールを使った運動に対する興味・関心を高め，集団に参加しようとする集団参加能力や，きまりの理解力，指示理解や集団のなかでの役割の意識化など，ゲームにかかわるときの基本的な姿勢やコミュニケーションの基礎を養うことにつながる。このことは，子供たちの日常的な運動経験や，１・３組の友達とのかかわりを広げることになり，生涯体育の基礎を培い人とのかかわりを広げる上で意義深い。

○　本題材の支援としては，①子供たちが分かりやすく意識できるような手順や方法，勝ち負けなどのきまりを提示すること，②ボールを投げて的を倒すという活動を繰り返し，１・３組の友達とふれあう→試しのゲーム・作戦を考える・作戦をもとにゲームを行うという一連の活動を繰り返し一緒にゲームを行う→ゲーム大会を行う，といった活動を構成する。③実態に応じて子供の要求を代弁するなど，教師が媒介となって，一人ひとりの子供のかかわりをつなぐ働きかけをするなどの支援を行う。このように，教材，活動構成，教師の働きかけという３点から支援の工夫を行っていく。

目　　標

１．１・３組の友達と一緒に楽しくゲームをするなかで，人とのかかわりを広げることができる。

２．場が変化していく中で，投げる，受ける，止めるといった動きを広げることができる。

計　　画（約７時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（２時間）</th><th>ひろげる（３時間）</th><th>いかす（２時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">活動と内容</td><td rowspan="2">１．新しいゲームを体験する。
○　手順や方法勝ち負けなどのきまりを知ること
○　一人ひとりの動きを知ること</td><td>２．みんなで楽しくシュートゲームをする。
○　動きを広げ，攻めと守りを工夫してゲームをすること
(1) 固定した的をねらってゲームをする。　①
○　友達と一緒に投げたり止めたりしながらゲームをすること
(2) 的の大きさが変化した場でゲームをする。(本時 1/2)②
○　友達の働きかけを受け入れながら動きを広げること</td><td rowspan="2">３．学習してきたことをいかしてゲーム大会をする。
○　できるようになな動きや人とのかかわり方をそれぞれの場でいかすこと</td></tr>
<tr><td>ためしのゲーム
動きを知る　⇔　作戦
繰り返し　⇔　作戦ゲーム
指示を受け入れる</td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>※　１・３組の友達とゲームをする場の設定
※　動作補助</td><td>※　ねらって投げる，受ける，移動して攻めたり守ったりなどの身につけさせたい動きを引き出せるような変化した場の設定及び声かけ動作補助
※　人とのかかわりが広がるような一人ひとりへの働きかけ</td><td>※　今まで体験してきた場の設定
※　動きへの賞賛励ましなどの声かけ</td></tr>
</table>

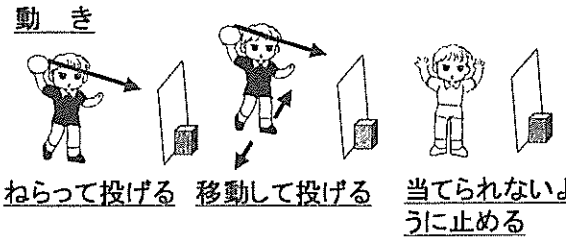
本時の目標

○　守る場所を決めて，友達とかかわったり，的をねらって投げたり，移動して投げたり止めたり受けたりしながら，楽しくシュートゲームをすることができる。

	A児・B児	C児・D児	E児・F児
動き	的を意識しその方向に片手で投げたり指示された場所に移動しようとすることができる。	転がってくるボールを追いかけたり，的をねらって片手で投げたりすることができる。	飛んでくるボールを移動して止めようとしたり，的をねらって投げたりすることができる。
ひととのかかわり	決められた場所に移動したり，ボールを受け取ったりして投げることができる。	守る場所を意識し，方向を示す声かけきを受け入れて移動し，投げたり受けたりすることができる。	声かけを受けて攻めと守りで場所を移動し，ボールを受け取って投げたりすることができる。

準　　備　ボール，的，得点板，作戦板など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1．本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時行ったゲームを想起する。 ○　前時学習の想起 (2) 変化した場に出会い，本時学習のめあてについて話し合う。 めあて まもるばしょをきめて　まとをねらってなげて　みんなでたのしくげーむをしよう。 ○　目的意識をもつこと 2．変化した場で楽しくシュートゲームをする。 (1) 試しのゲームをする。 ○　的ををねらって投げること	1．シュートゲームへの意欲を引き出す支援 ○　前時活動を想起できる場の設定 ○　きまりやゲームのやり方が意識できるモデル演示 ○　変化した場の設定 
A児・B児：・教師の動作補助を受けながら的をねらって，片手で投げようとすること C児・D児：・教師の声かけを受けながら的をねらって片手で投げようとすること E児・F児：・的の近くまで移動し，自分で的をねらって投げること	2．友達とかかわりながらゲームをする個に応じた支援 ○　個に応じた教師の働きかけ A児・B児：教師が子供の働きかけを回りの友達に伝えたり，回りの友達からの働きかけを伝えたりする。手渡しなど，受け方の指示や，動きが広がるように手を引いての動作補助や友達の働きかけを受け入れるような声かけをする。 C児・D児：回りの友達からの働きかけを受け入れるような声かけをする。ころがして渡すようなモデル演示や，動きが広がるようにねらって投げるモデル演示や，動作補助を行う。 E児・F児：攻めと守りを意識したり，回りの友達に働きかけるような促す声かけをする。自分でボールをとめたり，移動して投げるような声かけを行う。 ※　教師が子供の様子を見ながら代弁者となってかかわりが広がるようにする。
(2) 作戦を考えてゲームをする。 ○　集団対集団の意識をもつこと A児・B児：・声かけを受けて指示された守る場所を意識し，移動したり手渡しでボールを受け取ること C児・D児：・決まった守る場所を意識し，転がってくるボールを受け取ったり投げたりすること E児・F児：・攻守を意識し移動しボールを取ったりボールを受けとって投げたりすること	
3．本時学習のまとめをする。 ○　得点板で，ゲームを振り返ること ・　ゲームをして楽しかったことや教えてもらったことを発表する。	3．学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○　得点板や発表の場の設定 ○　友達と一緒にできるようになった動きに対する賞賛

◇　総合的学習全体協議会

○　テーマ「生き方を創るあらつ学習！」

―公開授業をもとに具体的支援のあり方を考える―

提案者　猿樂　隆司
　　手島　宏樹
　　高野　誠一
　　石田　耕一

司会者　樺島　穣

◇　全体講演

演　題「子供と創る教科・総合的学習の展開」

講　師　　国立教育研究所　主任研究官　奈須　正裕　先生

◇　メ　モ

研究紀要の部

豊かな人間の育成をめざす教育の創造

—子供と創る教科・総合的学習の展開—

研究紀要目次

ページ

豊かな人間の育成をめざす教育の創造 ---------- 106
—子供と創る教科・総合的学習の展開—
教　　頭　山下浩徳
研究主任　樺島　穣
研究副主任　伊藤啓二

心を働かせた豊かな言葉を生み出す国語科学習 ---------- 116
—地域文化のよさを確かに伝える文章表現活動—
国語科部　松藤秀子
—物語の世界と豊かにかかわる読書活動の構想—
国語科部　吉田正樹
—思いやりの心と言語活動を結ぶ学習の構想—
国語科部　伊藤啓二

共生社会を創る子供が育つ社会科学習 ---------- 138
—郷土意識を育む比較活動の展開—
社会科部　高野誠一
—社会の形成者としてかかわりを深める国土・産業学習の構想—
社会科部　猿樂隆司

心豊かな生活者が育つ生活科学習 ---------- 153
—人とふれ合う喜びを味わう学習の展開—
生活科部　石田耕一

自ら数理を生活に活用していく算数科学習 ---------- 161
—算数的活動を活性化する学習の構想—
算数科部　小森　晃
—数理活用体験を豊かにする学習の構想—
算数科部　加藤英也

自らの健康をつくりだす体育科学習 ---------- 176
—運動のイメージをもって表出する低学年の学習構想—
体育科部　笠　宏照
—運動への自信が高まる学習の構想—
体育科部　稲津一徳

豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つ家庭科学習 ---------- 191
—家族とかかわりながら健康な家庭生活を求める学習の構想—
家庭科部　篠原裕子

ページ

豊かな生き方・在り方を求め実践する子供が育つ「人間」学習 ---------- 199
—かかわりの原体験を育む学習の構想—
「人間」部　石硯昭雄

生き方を創る「あらつ学習」の展開 ---------- 207
事例「第３学年　西公園こだわり調査隊」
総合学習部　手島宏樹
事例「第５学年　希望と誇りⅠ　～受け継ぐ我ら！附属福岡小学校歴史探訪～」
総合学習部　石田耕一

豊かな生活をめざす教育課程の編成 ---------- 227
—主体的な活動を支援する個別の指導計画—
障害児教育研究部　松本良一
西原敦子
舛元俊文
坂田佳美

子供自らが数とかかわる算数科学習 ---------- 231
—確かめを位置づけた数遊びの活動を通して—
障害児教育研究部(算数科)　坂田佳美

社会体験を豊かにする生活単元学習 ---------- 239
—社会サービスにかかわる情報を収集・活用する活動を通して—
障害児教育研究部(生活単元)　松本良一

みんなで表現する楽しさを味わう音楽科学習 ---------- 247
—音楽劇の活動を通して—
障害児教育研究部(音楽科)　西原敦子

友達と運動する楽しさを味わう体育科学習 ---------- 255
—スポーツレクリエーションにつながるゲームづくりを通して—
障害児教育研究部(体育科)　舛元俊文

※　理科部，図画工作科部，音楽科部については，教科著書「学習創造」No.４，５，６をご参照ください。

研究主題

豊かな人間の育成をめざす教育の創造
―子供と創る教科・総合的学習の展開―

山下　浩徳　樺島　穣
伊藤　啓二

１．主題設定の理由

(1) ２１世紀の社会に望まれること

中央教育審議会や教育課程審議会の指摘を待つまでもなく、今日の社会は国際化、情報化、環境問題、高齢化など社会の様々な面で急速に変化が進んでいる。

実際に本校の子供たちを取り巻く状況を見ても、このような急速な変化が実感できる。例えば、本校の帰国子女学級には、世界の様々な地域や国から帰国し、多様な文化の考え方や言葉を身につけた子供たちが通ってきている。その子供たちと話すことで、他の国の文化や生活を知り、日本にないよさを感じたりすることはできる。

また、教育活動における情報収集でも、電子メールやインターネットなどの情報機器の利用が一般的になりつつある。環境問題については、校内の焼却炉がダイオキシンの発生によって廃止され、学校でもゴミの分別収集が行われている。

このような状況の中で、国際理解や環境問題、福祉の問題などが新たな教育課題として浮かび上がってきた。なぜなら、このような問題は広範囲にわたる社会的な問題でありながら、最終的な解決は子供たち一人一人が環境や高齢者にどのようにかかわっていくかにゆだねられているからである。つまり、２１世紀の社会において中心的な役割を担う今の子供たちは、これらの問題を自らの手で解決していかなければならない。

そこで、学校教育においては、このような社会の抱える大きな問題を、子供たちの身近な問題として学習対象にし、自ら考え、判断し、行動できる資質や能力を育てることがこれまで以上に重視される。特に生活との関連を図りながら、「自ら学び考えること」から、さらに「判断し実践しようとすること」までが求められている。

(2) バランスのとれた人間を求めて

このような社会状況の中、現代の子供たちの姿はどうであろうか。昨今の新聞やテレビの報道を見ると、いじめや犯罪の低年齢化などの悲しい報道が後を絶たない。子供たちは豊富な知識をもち、体格も大きく向上している。しかし、その知識や体を使う心の発達が不十分だと感じられる。他人を思いやる心や生命を尊重する心など社会性の不足や倫理観の発達に問題がある。また、体力についても体格は向上しているものの、実際の筋力や持久力などは低下傾向にある。知識についても豊富ではあるが本当に役立つ知識とはなり得ていないことに問題がある。

しかしながら、子供らしい意欲や積極性は失われていないと感じられる。学習において、興味あることに取り組もうとする時の子供たちのエネルギーには驚かされるものがある。

このような子供たちの現状を考えたとき、学習を通して、知的に磨かれていくとともに、心と体も同じように高まっていくことが不可欠だと考える。

(3) 本校の児童の実態から

本校では、研究の核として、体系化された知識を身に付けるだけではなく、行うことを通して心と体も高めていく子供を育てたいという願いをもち、体験や活動を基盤とした学習を展開してきた。

今までの研究の成果として、子供自身が、物事を理解する際に、実際に体験して考えることを大切にするようになっている。教科・領域の様々な学習の中で、主体的な活動や体験の姿が見られるようになってきた。また、保護者も本校が行ってきた体験や活動を基盤にした学習に対する成果を感じている。例えば、新設教科や領域を設定して、子供が身近な環境に目を向ける学習を展開してきた結果、子供が家庭の中にある小さな環境破壊にこだわるようになったり、自分の家の近くにある福祉施設にボランティア活動に出向いていったりという保護者からの報告も増えてきている。しかし、その一方で、本校の特質として、放課後の余暇時間の少なさ、地域に戻ったときの子供の友達関係の問題などもあり、学校で学んだ見方や考え方が生活に生かせないという報告もある。また、進学・受験に対する保護者の思いも強く、学校を終えた後は塾通いをし、知識・技能獲得を優先した学習を行うなど、子供にとっては二極化した学習を強いられている現状がある。

このようなジレンマのある生活実態の中で、本校の子供たち及び保護者は、学校に対して、体験や活動を大切にした学習、自分なりの考えを表現する学習、目的や課題をもち、その達成感や成就感を味わえる学習を求めている。そして、これからも引き続き、子供の心を掘り起こし、心を育てる学習やいろいろな事象に対する自分なりの見方や考え方を育てる学習を展開してほしいと期待を膨らませている。本研究主題は、このような子供の実態を踏まえ、昨年度までの研究をさらに発展させながら子供たちにとって意味のある豊かな体験や活動をすべての教科・領域で充実し、価値ある体験を通して、知と心と体を調和的に育てていくものである。

(4) 本校研究の歩みから

本校では、平成６年度から平成８年度に文部省開発研究の指定を受けて、「表現科」「生活環境科」領域「人間」の３つの新設教科・領域を設定してきた。これらの新設教科・領域は、総合的学習の様相をもち、子供の主体的な学習や豊かな心の育成を行うことができた。

昨年度は、これらの新設教科のよさを教科に生かすという発想で、教科学習を見直した。

主題「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」、副主題「活動や体験を基盤にした学習の総合化」を設定し、研究に取り組んできたところ、次のことが明らかになった。

① 教科学習において、「学習の総合化」を図ることで、教科本来のねらいを達成しながら、あわせて豊かな心を育てることができること。
② そのために、豊かな心を育てる視点を「自分」「仲間」「生命」「福祉」「国際理解・協力」「環境」などの視点として割り出したこと。
③ 学習においては、これらの視点から追究主題を設定し、教科のねらいと心のあり方のねらいの２つのねらいをもって学習すればよいこと。

しかし、この研究における「学習の総合化」とは、教科学習において、豊かな心のあり方を追究主題として、教科内容と豊かな心を共に育てるものであった。

そこで本年度は、主題「豊かな人間の育成をめざす教育の創造」、副主題「子供と創る教科・総合的学習の展開」を設定し、これまで大切にしてきた、「子供主体の活動や体験を基盤とした学習」を行いながら「教科」と「総合的学習」のあり方を探る。

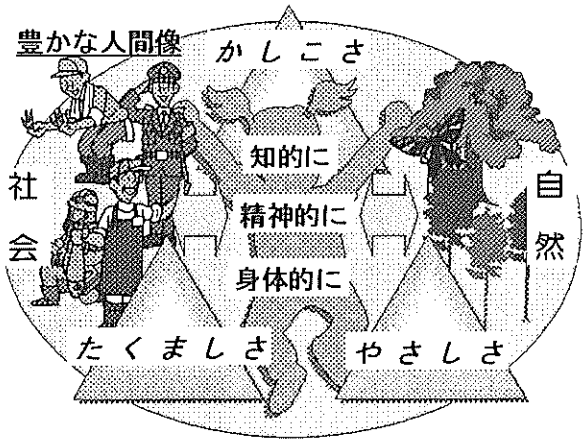
豊かな人間の育成をめざすために、「教科」と「総合的学習」がどうあればよいか、本質的価値や役割、具体的な学習像を明らかにしていく。

2．主題の意味

(1) 「豊かな人間」とは

私たちは、上述した 21 世紀の社会に望まれることや子供の現状から、「21 世紀を豊かに生きる人間」には次のことが必要だと考える。

○　これからの社会に貢献できる能力や社会性をもった人間であること。
○　そのために、知的にも精神的にも身体的にもバランスのとれた人間であること。



つまり、私たちが求める「豊かな人間」とは、バランスのとれた「精神的なやさしさ」「身体的なたくましさ」「知的なかしこさ」をもち、自らの資質や能力を発揮して、社会や自然などの環境にかかわっていく人間のことである。

このような「豊かな人間」は、自分を取り巻くさまざまな環境の中で、どのような生き方をしている人間ととらえればよいだろうか。私たちは、研究を進めるにあたって、社会や自然などの環境に積極的にかかわり、バランスの取れた生き方をしている人間像として、３つの人間存在の原理を考え、子供の姿や学習をとらえていく指標とした。以下がその３つの原理である。

本校が考える人間存在の原理

○　人間は自然と共に生きる存在である
　・　自然と共に生きるということは，自然の恵みを受け，生命のつながりを感じながら，自然と調和して生きることである。
○　人間は社会の中で生きる存在である
　・　社会の中で生きるとは，集団や社会の仕組みの中で，協調し，連帯しながら，人とかかわって生きることである。
○　人間は価値を求めて生きる存在である
　・　価値を求めて生きるということは，真理や心の充足を求めて，創造的に自己実現しながら生きていくことである。

(2) 豊かな人間として育てたい「知恵と心情」

上述のような、知的にも精神的にも身体的にもバランスがとれ、３つの人間存在の原理にかなった豊かに生きる子供を育てるためには、どのような資質や能力を身につけさせていかなければならないのだろうか。私たちは、「知恵と心情」という面から育てたい資質や能力を考えてみた。

①　知　恵

知恵とは、学習の内容としての知識だけでなく、その知識の生み出し方や使い方まで含めて子供の中に獲得された認識の力のことである。

知恵には次のような細分化された能力が含まれているととらえている。

○　生きて働く知識

子供が学習を通して身に付けるべき知識は、生きて働く知識であって、限られた学習の場面だけに通用する知識であってはならない。変化する社会の中で、主体的に判断し問題を解決するために、その知識の使い方について考える必要がある。いつ、どんなときに使える知識なのか。どのくらい確かな知識なのか。そういったことを知っておかないと使える知識として意味がないのである。

また、その知識がうまく使えないときには、その知識を生み出した過程に沿って、もう一度検討する必要もある。生きて働く知識は、現実の状況の中で、必要感から求めていくものであり、活動や体験を通して獲得される知識である。

○　問題解決力

21 世紀を豊かに生きる人間を育てるためには、変化に主体的に対応していく問題解決力を身につけることが大切である。この問題解決力の中でも、特に大切にしたいのは、学習内容を含む学習対象と自分とのかかわりの中から、問題を見いだすことである。これまでの学習においても、導入場面での問題提示の工夫が行われてきた。しかし、教師のどのような仕組みがあっても、最終的に子供自らが自分にとっての問題であると意識しなければ、本当に主体的に追究する問題にならない。そのために、学習対象と自分とのかかわりを意識するような体験を仕組み、子供自らが問題意識を明確にし、解決しようとする意欲を育むことを大切にしていく必要がある。

○　情報活用力

主体的に問題を解決するにあたっては、氾濫する情報の中から自分に必要な情報を適切に選択し、処理していく力を育てることが大切である。またこれからは、新たな情報を創造し伝達していくことも積極的に進めることが必要である。

このような情報活用力は多数の間接的な情報を扱う中から育つものではない。子供にとって意味のある直接的な体験を通して、初めて情報の価値が判断でき、使うことができるのである。

体験を基盤とした情報活用力は、これからの子供たちが、家庭、学校、地域を越えた、第４の領域と呼ばれるような、情報で成り立つ世界で生きるうえでも大切な力となってくる。

○　自己決定力・自己評価力

子供たちの問題解決の過程では、自ら判断したり、評価したりする場面がある。その中でも、特に大切にしたいことは、自己のあり方を決めたり、評価したりすることである。

獲得した知恵や心情を働かせ、「自己のあり方」を決めることを通して、子供たちは主体的に判断し、よりよい生活を生み出していくことができる。また、その結果としての自分の行為を評価することで、自分が他者に役立った喜びや、自己の成長を実感することができる。

○　多面的・総合的な見方や考え方

子供が主体的に追究して見い出した結果はそれぞれ固有のよさがある。しかし、どんなによさがあるものでも、独善的なものであってはならない。そのためには自分の考えをいくつかの角度から検討し、その中で価値づけていくことが必要である。多面的・総合的な見方とは、一つのことをいろいろな角度から検討したり他の事象や考え方と関係づけたりして判断していくことである。そのために、学習においては、友達の考えと比べたり他の学習で身につけた考え方を当てはめたりしていく必要がある。

② 心　情

子供は、獲得した知恵をどのように使ったらよいのだろうか。

知恵が育ってきたとしても、その使い方が自己中心的で、利己的な目的のために活用されていたのでは豊かな人間として自然の中、社会の中で価値を求めて生きることはできない。かといって、自分の信念や意志もなく、人に言われるままに使うものであっては知恵を育む意味がない。豊かな人間であるバランスの取れた人間は、知恵を発揮するときにその内なる心情が育っていることが重要である。逆に言えば、心情がしっかりしていなければ、私たちが知恵と呼んでいるような、知識を生み出し方や使い方までふくめたものとして自分の内外に生かすことはできないものと考える。

したがって、子供が学習対象を認識し、学習対象に働きかける中で、知恵の獲得と共に、豊かな心情を培うことが大切である。

私たちがこれから大切にしたい豊かな心情とは、次の二つである。

○　知識を使い、他者と自分との調和を図る調和的な心情
○　知識を使い、自らの生活の向上を図る向上的な心情

調和的な心情は、自分だけのことを考えるのではなく、相手のことも同じように大切に考えていく心情である。

ここでいう他者とは、自分の周りのすべてを対象とする。例えば、お年寄りや幼児などの周りの人、世界の国々と文化、植物や動物などの自然、これらのすべての対象と調和的にあることを望む。

自らの生活の向上を図る心情は、今の状態に満足しないでよりよい状態を求める心情である。具体的には、自分やみんなの生活を高めるために、身につけた知恵や能力を発揮することである。

3．副主題の意味

(1) 「子供と創る教科・総合的学習の展開」の「子供と創る」が意味するもの

つぎの３つの条件をもった学習を「子供と創る」学習ととらえている。

①　自分が見出した問題を解決するために、頭と心と体を働かせ、主体的に活動や体験を行うこと
②　活動や体験を通して、自分なりの応えを探すこと
③　そのために教師は教科や総合的学習の特性に応じて適切な支援を行うこと

①　子供主体の活動や体験を行うこと

まず、子供は主体的に学習し、生活する存在ととらえることが大切である。この立場に立つことによって、学習においては教師が問題を与え、知識を獲得させるという発想ではなく、子供が自らの求めによって問題を見出し、自分なりの応えを見つけるまで追究する学習へと変わっていく。また、問題の発見だけでなく、調べ方やまとめ方など学ぶ子供の論理に沿った学習が展開できるようになる。

子供が主体的に活動や体験を行う価値は、対象への具体的な働きかけを通して、子供の心に響くような出会いや発見が生まれることである。このことが、深い心情を伴った知恵を生み出していくことになる。つまり、子供が主体的な活動や体験を通して、豊かな自分を創っていくのである。

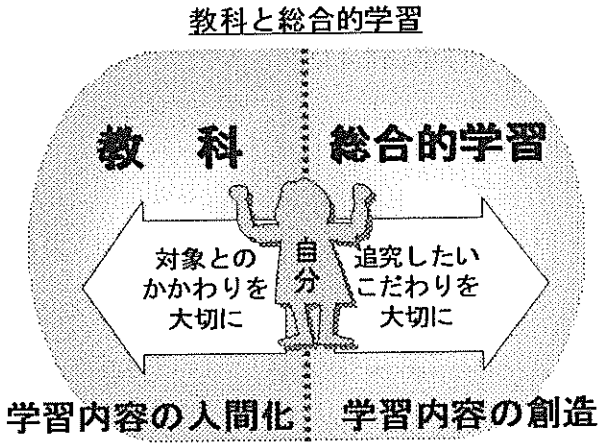
② 自分なりの応えを探すこと

子供が主体的に活動したり体験したりする中で、「こうしたらよい」「こんなことが大切だ」という情感を伴った自分なりの気づきが生まれてくる。この情感を伴った気づきが、問題に対する自分なりの「応え」として意識されるときに、「実用的な知識である知恵」や「大切にしたい心情」として、子供に身に付くのである。

この「応え」とは、明確な解答の定まっていない問題に対して、暫定的に自分なりの対処を見出し、決定していくことである。「答え」ではなく「応え」を求めるところに、子供が創る学習の展開が表れている。単純なひとつの答えを求めるのではなく、子供たちが、個人個人のかかわり方をみつけ、その違いによって、自分なりの対処の仕方を見つけていくからこそ、「応え」と呼ばれるようなものになっていくのである。このように「応え」を見つけ出していく学習を、私たちは「子供と創る学習」ととらえている。このように子供と創る学習を行うことで、知恵や心情をバランスよく身につけた豊かな人間を育てることになる。

③ 教科と総合的学習の特性に応じて支援すること

教科学習と総合的学習は学び方が違う学習ととらえられていないだろうか。しかし、もし実際に、教科と総合的学習で学び方を変えたならば、子供は時間によって進める学習の違いに困惑してしまい、自分の意欲的な学びを見失ってしまうだろう。「子供と創る教科・総合的学習の展開」は、子供が見出した問題をどのように追究していくのか予想し、その活動と内容が、教科学習として位置づけられるものか、教科のもつ内容の垣根を越えた総合的学習の方が追究がしやすく、子供の知恵と心情を育てやすいものかを判断し、教育課程の中に計画的に位置づけることである。そしてその教科や総合的学習の展開に合わせて、適切な教師の支援を行うことである。



教科学習では、子供の主体的な学習対象へのかかわりの中で、教科本来の学習内容が獲得されるもので、これを私たちは、学習内容の人間化と呼んでいる。総合的学習では、自分の生活から端を発し、追究したい対象や事柄へのこだわりを大切にした結果、教科にはない内容、あるいは教科の垣根を越える内容を学習するもので、これを、学習内容の創造と呼んでいる。

(2) 教育課程における教科と総合的学習の位置づけ

教科と総合的学習のねらいや具体的な学習像を説明する前に、まず本校の教科構成を整理しておきたい。本校では、新指導要領と同様な理念のもとに、すでに平成６年度より文部省の研究開発指定を受け、新設教科・領域として、低学年に「表現科」、中学年に「生活環境科」、全学年に領域「人間」を設定した。その結果、子供の姿からこの新設教科・領域の価値を見出すことができた。そして本年度は、総合性をもつこれら新設教科・領域のよさを生かし、低学年の表現特性に応じた「表現科」や、総合的に人の生き方や在り方を考える領域「人間」はそのまま教科構成の中に位置づけることとした。また、中学年「生活環境科」については、第３学年以上に設定した総合的な学習の時間（本校の名称「あらつ学習」）として発展的に解消することとした。ただし今まで「生活環境科」に含まれていた福祉に関する内容は、領域「人間」で取り扱い、社会と理科に含まれる内容は、内容を精選して従来の社会、理科という形で位置づけることとした。

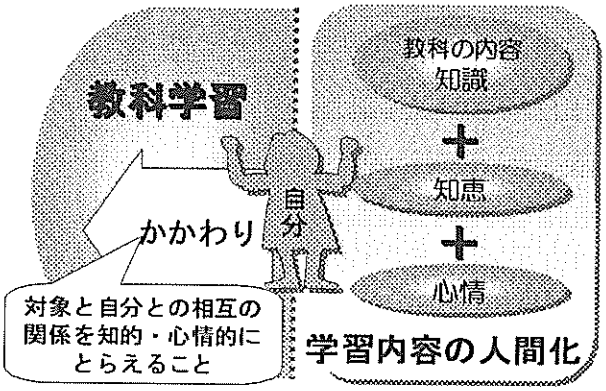
4　学習の具体的構想

(1) 対象とのかかわり方を大切にした教科学習

教科の学習では学習すべき教科の内容が明確にある。これをしっかり身に付かせなければならない。しかし、それを教える学習をしても、豊かな人間を育てることにはつながらない。そこで、教科の学習像として、学習対象と自分との相互の関係を知的、心情的にとらえる過程（対象とのかかわり方）で、教科の内容としての知識と、その知識の生み出し方や使い方までふくめた「知恵」、さらには知識を使う時に発揮される「調和的な心情や向上的な心情」がともに培われる学習を描いてみた。

つまり、教科の学習では従来の学習内容に、知恵や心情まで含めたものを、これからの子供に身につける内容としてとらえていく。これを私たちは「学習内容の人間化」と呼んでいる。

対象とのかかわり方を大切にした教科学習



学習内容の人間化を行うためには、子供と学習内容を含む学習対象との間に、知的、心情的な関係をより強めていく必要がある。そのための教師の支援が、子供と学習対象とのかかわり方をどう方向付けるかがを大切である。教科学習では、子供が主体性を発揮し内容を身につけることができるように、教師の適切な支援が必要である。

(2) 対象とのかかわり方を大切にした教科学習のあり方

まず、子供がかかわる学習対象をどのように選定するのか明らかにしたい。

子供の身近な「もの、ひと、こと」から選定し、その条件を次のように考えている。

○　学習対象とのかかわりの中に、身につける教科の学習内容が含まれていること。
○　子供の発達に応じた、活動や体験ができること。
○　子供にとって身近であり、何度も繰り返しかかわれること。
○　子供の働きかけに対し、応答性があること。

例えば、第５学年国語科「使用済みカードや古切手を集めるためのお願い文書を作ろう」の学習では、学級や学校で取り組む国際協力活動の主旨を伝える依頼文書作成が学習対象である。文書の内容と依頼のための文章表現に国語の内容が含まれている。そして、文書作成は、まさに自分たちにできる国際協力活動であり、カードや古切手が集まることで、働きかけへの応答がえられるのである。

次に、学習対象とのかかわりを深めていく段階を明らかにしたい。

①　自分たちの思いや願いを実現するためには、何を、どのように進めていけばよいかという見通しをもつことで、学習としてかかわりを深めていく対象を意識化する段階
②　学習対象の中から、追究しなければならない問題を見出し、問題を解決する過程で、対象についての知識やよりよいかかわり方として知恵（活動を通して身に付いた確かな学習内容）や大切にしなければならない心情を獲得していく段階
③　追究の過程で見出した知恵や大切な心情を生かしながら、自分なりに実践していく段階

以上のような学習対象選定の条件、学習対象とのかかわりを深める段階をふまえると、どのような教科学習になるのか、その具体的展開を、第４学年音楽科「謝さんを歓迎する歌の表現を工夫しよう」をもとに説明したい。

① はじめに、子供たちは、福岡教育大学の中国からの留学生、謝さんが子供たちとの音楽交流を求めていることを知る。そこで、「謝さんを歓迎する音楽会を開きたい。」という思いや願いをもった。そのために、どんな曲がよいか、どのように表現していけばよいかということを考え、日本を感じ取れる曲や自分たちの思いが表現できる曲を学習対象として意識化していく。

ここでは、留学生である謝さんとの交流が音楽交流であり、交流の仕方を工夫していく活動が音楽表現の工夫として行われるので、音楽科としての学習内容が確かに学習されるのである。

② 次に、子供たちは謝さんが喜んでくれるように、日本らしい曲「さくらさくら」や自分たちの町の様子が伝わる「太陽の町」などを選択し、曲の特徴をつかみ、表現を工夫していく。

ここでは、さらに自分たちと留学生の謝さんとの交流を深めるために、音楽とのかかわりを追究し、曲の特徴を見出したり表現の工夫をしたりしていく。そして、謝さんに喜ばれるように、「さくらさくら」の美しさがより強調される表現へと学習対象へのかかわりは深まっていく。

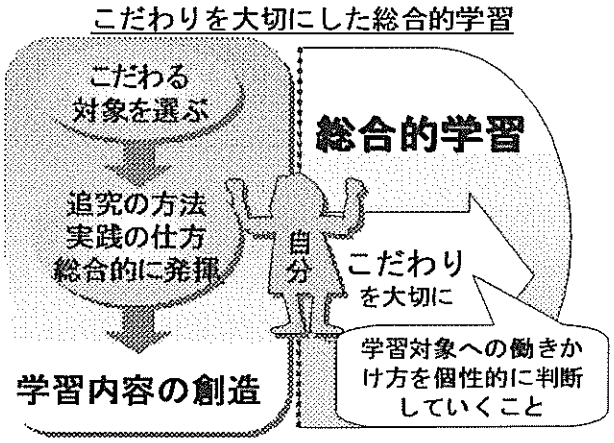
③ 最後に、謝さんを学校に招待して、自分たちの歌を聴いてもらったり、謝さんから中国の遊び歌を教えてもらったりする。その中で、ことばではうまく伝わらないものの、自分たちの歌を喜んでくれる謝さんの様子を見たり、中国の楽しい遊び歌を一緒に歌ったりして、自分たちの音楽表現の高まりと心を通い合わせることのできる音楽の価値を実感していくのである。

(3) 追究へのこだわりを大切にした総合的学習

「こだわり」とは、子供が学習対象への働きかけ方を個性的に判断していくことである。

そして、追究していきたい対象や、追究の方法、実践する上で大切にしたい心情などに子供のこだわりが働く。

総合的学習においては、初めからこれを身につけなければならないという内容はない。



子供たちが、身近な「もの・ひと・こと」の中から自分がこだわる対象を選んだり、教科の学習で身に付けてきた学び方や能力を生かして、追究の方法や実践の仕方を総合的に発揮したりしながら、新たな学習内容を生み出していくのである。

> つまり、総合的学習は、自分がこだわりたい対象の明確化、こだわりをもった追究の仕方、こだわった結果、自分の中に生み出された新たな学習内容（知恵と心情）を重視した学習であり、これを私たちは、「学習内容の創造」と呼んでいる。

学習内容の創造を行うためには、子供が学習対象を選んだり、追究の方法を選択したりする場を大切にする必要がある。そして、子供のこだわりを大切にしていかなければならない。

そのために、総合的学習では、子供が主体性を発揮し、自ら内容を生み出すことを中心においた教師の適切な支援が必要であると考える。

(4) 追究へのこだわりを大切にした総合的学習のあり方

まず、子供が追究していく対象を明らかにしたい。そのためには、子供の生活現実から、追究する楽しさや価値を見出すことができる「もの・ひと・こと」を学習の対象に取り上げる必要がある。

具体的には、次の視点で教材をバランスよく選んでいく。

○　現代の教育課題に対応する視点から、環境、生命、福祉、国際理解などの内容を
○　子供の生活体験の実態の視点から、経験させたい自然体験や社会体験などを
○　子供の活動特性の視点から、自由な選択追究や表現発表などの活動を

例えば、第５学年単元「発見！地球にやさしいエネルギー」は、エネルギー問題という現代の教育課題を正面から追究する課題追究的な総合的学習である。また、「卒業研究発表会」は、今まで学んできたことをまさに総合的に発揮する自由研究的な総合的学習になる。

いずれにしても、学年に応じたふさわしい活動になるように、子供の発達段階やその学年の教科で身に付けた学習内容を考慮して活動を選択していく。

次に追究へのこだわりを発揮していく学習の段階を明らかにしたい。

○　はじめに、子供が追究していく「もの・ひと・こと」を含む生活に根差した対象と出会い、その中から自分が働きかけたい対象を選び、追究していく問題をもつ段階
○　次に、問題を追究する過程において、追究方法を選択し、教科の学習で身に付けた力を総合的に発揮して、多様な方法で課題解決を図っていく段階
○　最後に、自分なりに見いだした知恵や大切な心情を発揮し、生活の中で行動化していく段階

こだわりを大切にした総合的学習を、第５学年「希望と誇り」をもとに説明する。（詳細は総合的学習編、事例２を参照）

①　はじめに、子供たちは学校探検を行い、身近な藤棚や銅像など学校の歴史を伝えるものに出会うとともに、５０年前の附属小の写真を見て、附属小の歴史に興味をもつ。そして、それぞれ自分の興味ある藤棚や学芸会などの対象を決めて、その由来や歴史を調べていった。

ここでは、まず、子供が追究していく「もの・ひと・こと」を含む学習空間と出会う。そしてその中から自分が働きかけたい対象を選び、追究していく問題をもっている。

これが子供の対象へのこだわりの表れである。

②　次に、子供たちはそれぞれの追究したいものについて、写真や先輩への聞き取り、過去の文集などを手がかりに多様な方法で調べている。

ここでは、問題を追究することにおいて、教科の学習で身に付けた力を総合的に発揮して、追究している。

この追究方法を選ぶことも子供のこだわりの表れである。

③　最後に、調べた附属小の歴史を交流し合う中で、伝統ある附属小の出来事や先輩たちが夢を実現していることを知る。そして、それぞれに附属小への誇りと自分の未来への希望の心情を高めていく。さらに自分の夢をもって少しでも実現に近づけようと努力するのである。

ここでは、追究の中で、自分なりに見出したことや希望の心情を発揮し、生活の中で行動化していく。

この大切にしたい知恵や心情、実践的な活動も子供のこだわりの表れである。

(5) 教科と総合的学習の関連

教科と総合的学習のよりよい関連を次のように考える。

① 教科で身に付けた力を総合的学習で生かす

例えば単元「あらつウオークラリー」のように、算数の距離の知識や社会の地図の見方、理科の磁石の使い方、体育で培った運動技能などを総合的に発揮して、総合的学習を行う場合である。

このように各教科で身につけた力を総合的学習の中で使うことで、教科で学習したことの価値を実感することができる。また、実際に応用して使える知識に高まっていく。

逆に、教科で学習した以上の力を過度に要求する総合的学習は子供の主体的な活動にならない。総合的学習のテーマを決定するとき、その学年の子供の発達段階やそれまでの教科学習で身に付けた力に見合うことを検討する必要がある。

② 総合的学習で行った体験を教科学習に取り入れる

教科学習と総合的学習を直接的に関連させることはできる。ただし、総合的学習はそれ自体で完結する学習であり、教科の学習と無制限に関連させていくことは見直すべきだと考える。

例えば、お年寄りの施設を訪問するような総合的学習がある場合、みんなでプレゼントする歌や工作物を作るときに音楽科や図画工作科との関連を図るのである。総合的学習から見たときには、他にも子供たちの発想に基づく多様な取り組みがあり、音楽や図工から見たときには、福祉の心を育てながら歌や工作などの教科の学力を身につけていく機会とする。

５．障害児教育研究部、帰国子女教育研究部の研究の概要

本校は、特殊学級を３学級、帰国子女教育の学級を３学級設置している。全体主題にあげている「豊かな人間の育成」を基盤としながら、それぞれの部の立場で研究を進めている。

(1) 障害児教育研究部

障害児教育研究部では、平成１０年度・１１年度文部省特殊教育教育課程研究指定を受けている。研究主題を「豊かな生活をめざす教育課程の編成」と設定し、子供の主体的な活動を促し、支援する個別の指導計画づくりを通して、生活力を培う研究を進めている。

(2) 帰国子女教育研究部

帰国子女教育研究部では、海外生活で得た語学力、国際感覚を生かし、その特性を伸ばしていく特性伸長の面と、日本の教育課程に照らして、学習状況が不十分である点を補う適応指導の面との２つの柱をもって研究を進めている。特性伸長の面では、「国際交流タイム」を設定し、海外体験を生かした活動を行い、国際理解教育の具現化を進めている。適応指導の面では、個別のカリキュラム作成と個の実態に合わせた指導体制を行い、教科指導を中心として学習の適応が図れるようにしている。

引用・参考文献

奈須正裕著　『学ぶ意欲を育てる』　金子書房　１９９６年
児島邦宏著　『総合的学習』　ぎょうせい　１９９８年
平野朝久編著　『子供の「学ぶ力」が育つ総合学習』　ぎょうせい　平成９年

心を働かせた豊かなことばを生み出す国語科学習

国語科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために国語科に求められていること

社会の変化のなかで，情報活用能力，コミュニケーション能力，自己教育力，そしてその土台として生きて働くことばの力を育成していくことが強く希求されている。しかし現実には，情報の氾濫と人間関係の希薄化のなかで，子供たちの言語生活はますます後退するばかりである。「ださい」「むかつく」「きれる」といった一語によって何もかも短絡的に片づけてしまう言語行動，あるいは，「私語」あるいは「死語」による形式でしか行えない貧しい自己表現，さらには，漫画や映像でなければ文化を享受できない活字離れ現象など，あげればきりがない。こうした社会の要請とそれに相反する子供たちの実態に対し，現実の言語生活（精神生活・社会生活・文化生活）を豊かにしていくために生きて働く目的的・実践的・創造的なことばの力を確実に育成していくことが，国語科における責務であり重要課題である。そのためには，言語活動を生活から抽象して取り上げるのではなく，子供たちの具体的な体験や経験を基盤とした具体的な活動として言語活動を展開していく必要がある。そして，子供たちが精一杯心を働かせ豊かなことばを生み出す国語科学習を構想していかねばならない。

○　心を働かせた豊かなことばを生み出すとは

心を働かせるとは，よりよい言語生活を営んでいくために，自己を高める向上的な心情やもの・こと・人との調和を図ろうとする心情を，次のように発揮しながら言語活動に取り組むことである。

・自己を高める向上的な心情 ・ことばを通して，もの・こと・人とかかわる調和的な心情	→	・自己の言語生活(精神生活)をより高めようとする。（目的的に） ・相互に思いや考えを伝え合い，よりよい言語生活(社会生活)を営もうと，人にかかわり働きかけようとする。（実践的に） ・自分にとって価値ある情報を選び活用しながら，自らの価値ある情報を生成し言語生活(文化生活)を創造しようとする。(創造的に)

豊かなことばを生み出すとは，こうした心を働かせながら目的的・実践的・創造的に言語活動に取り組み，そのなかで，ことばの知識や技能を目的的・実践的・創造的なことばの力（知恵）として身につけ高めていくとともに，ことばの使い手（言語主体）としての心情をも深化・拡充していくことである。具体的には次のような資質や能力を身につけ高めていくことである。

（知識・技能）		（知恵）		（心情）
○適切な表現技能 ○正確な理解技能 ○ことばの知識	→	○ことばで伝え合う能力 ○ことばを媒介とした情報活用能力 （文化を受容し創造する読書力） ○論理的な自己表現力	＋	○自己を高める向上心 ○調和的な心情 ○ことばを大切にする心

○　心を働かせた豊かなことばを生み出す子供とは

心を働かせた豊かなことばを生み出す子供像を，次のように考えている。

○　目的や場面に応じて，自分の考えをもって相手に分かるように話したり相手の話の要点を聞いたりしながら，相手とよりよい関係を築き上げていくことができる子供
○　相手や目的に応じて，必要な事柄を集めたり選択したりして論理的な文章を構成できる子供
○　目的や意図に応じて，自分にとって価値のある言語情報（図書資料）を選択・活用しながら自分のものの見方・考え方・感じ方を広げ深め，自分の情報を創造することができる子供
○　自己を向上させようと進んで言語活動に取り組み，言語文化を享受し創造しようとする子供
○　ことばを媒介に，もの・こと・人とかかわり，言語生活をより豊かにできる子供

地域文化のよさを確かに伝える文章表現活動

国語科部　松藤秀子

1．主題の意味

(1) 地域文化のよさとは

地域文化とは，自分の生活とかかわりのある場所で後天的に学習し，共有し，伝承してきた集団の価値観や衣・食・住等の生活様式や行動様式の複合的なものである。例えば，昔からのしきたり，行事，遊び，芸能，建造物，自然と結びついた生活などである。それらは，地域の人々によって大事に育てられ，世代を通して受け継がれてきたものであるという伝統性と，自分たちの地域にしかないものがあるという独自性をもっている。地域文化のよさとは，子供一人一人が地域文化に触れ合ったとき，地域文化の伝統性・独自性に対して自分なりに捉えた楽しさ・美しさ・大切さに対する自分の思いや考えである。これらは，ことばを通してこそより確かにすることができ，他者に伝えることができる。地域文化のよさを題材として取り上げることの意義は，①主体的にかかわることができ，取材が容易である。②多様な見方・考え方ができ，表現することで自分の見方・考え方を高めることができる。③地域文化への親しみを深め，大事にしていこうとする心情を育てることができるなどである。

(2) 地域文化のよさを確かに伝える文章表現活動とは

地域文化のよさを確かに伝えるとは，地域文化とかかわり楽しさ・美しさ・大切さに対する深まった思いや考えを，相手や目的や状況に応じて情報を整理したり根拠を明らかにしたりして，筋道を立てて相手に分かりやすくことばで表していくことである。地域文化のよさを確かに伝えるためには，観点を明確にした取材，論理的な構成，効果的が記述が大切である。地域文化のよさを確かに伝える文章表現活動とは，相手意識・目的意識・方法意識を明確にして次のような過程で文章を練り上げていくことである。

【地域文化のよさを確かに伝える方法】

①地域文化に接したり体験したりして感動的に出会わせ，伝える内容と見通しをもち，計画を立てる。②調べる観点をもって体験したり地域の人に聞いたり資料で調べたりして取材を行い，自分なりに捉えたよさを伝える文章を書く。③構成や記述を見直し，再取材する観点をもつ。④構成や記述を工夫し，文章を書く。⑤友達と評価し合って文章を推敲し，相手に送ったり相手からの反応を受け取ったりして確かに伝える喜びを味わう。このような活動を展開することで，地域文化のよさを自分なりに深め，心を働かせた豊かなことばを生み出すことができると考える。相手意識とは，誰に対して書くのか自覚することである。目的意識とは，何のために書くのか自覚することである。方法意識とは，既習の表現方法を生かして相手に分かりやすく伝えるために構成や記述を工夫していくことである。

(3) 本研究で期待する子供

地域文化のよさを確かに伝える文章表現活動に取り組んでいる子供の姿を，以下のように考える。

- ○　地域文化のよさを伝える相手や目的や方法を明確に意識し，意欲的に調べより分かりやすい文章にしようとしている子供
- ○　伝えたいことを明確にし，目的や観点をもって調べたり取材したりしている子供
- ○　相手に分かりやすく伝えるために論理的な構成や効果的な記述を工夫している子供
- ○　地域文化のよさに対して広がった見方・深まった考え方・高まった接し方を表現している子供
- ○　取材や文章表現を通して，地域文化への見方・考え方・接し方を高め，これからも大事にしようとする心情や，文章のやりとりを通して人とのかかわりを深める心情を育てる子供

2．学習の具体的構想

(1) 題材と文章表現活動の設定について

自分が捉えた地域文化のよさを確かに伝えることができるように，学年に応じて次のような相手，目的，題材を設定し，それらに応じた取材や構成や記述をしていくようにする。

○　低学年―主に地域に伝わる遊びを取り上げ，体験を通して楽しさやおもしろさについて取材することで，時間的順序や伝えたい順序に気をつけて文章を書くことができるようにする。

○　中学年―主に遊び道具，行事，施設などを取り上げ，楽しさ・美しさ・大切さなどの観点から，調べたいことをはっきりさせて取材することで，中心が明確な文章を書くことができるようにする。

○　高学年―主に芸能，工芸品，建造物を取り上げ，伝統性と独自性の二面から取材することで，自分の考えや意見を明らかにして，目的や意図に応じて組立てを考えたり事象と意見を区別したりして書くことができるようにする。

そこで，子供の興味・関心や発達段階に応じて次のような題材を設定し，地域文化と触れ合い楽しさや美しさを十分に味わうことで伝えたいという思いをもったり，地域文化に接し継承の危機を感じとることで伝える必然性をもったりする。そして，以下の相手・目的意識が生まれるようにする。

学年	題　　材	相　　手	目　的
低	体験を通した地域文化（遊びを中心に）の楽しさやおもしろさを伝える。	学級の友達，家族，いっしょに遊びたい友達	遊び仲間を増やすため
中	地域文化（遊び道具，行事，施設など）について調べて分かったことや感想を伝える。	他校の友達，学校の異学年の友達，情報を知らない人	情報を広げるため
高	地域文化（芸能，工芸品，建造物など）について調べて考えたことや意見を伝える。	説得したい人，行動を促したい人	相手の行動化を図るため

また，このような題材設定をもとに，低学年では地域文化の楽しさを伝える手紙文，中学年では地域文化のよさを的確に伝える説明文，高学年では地域文化の担い手として提言する意見文を中心に文章表現活動を展開していくことで，取材・構成・記述に対する方法意識を明確にもたせるようにする。

学年	文章表現	取　材	構　成	記　　述
低	手紙文を中心に	書くために必要な事柄を	体験した順序を整理して	・楽しさが伝わるような言葉を選んで ・問題提示文や順序を表す言葉を使って
中	説明文を中心に	観点を決めて必要な事柄を	中心を明確に段落関係を考えて	・自分の感想や考えを伝える言葉を選んで ・適切な接続語を使って
高	意見文・報告文を中心に	目的に応じて必要な事柄を観点ごとに整理して	要旨が明確に表れるように文書全体の流れを考えて	・書き出しと結びの対応を考えて ・自分の意見を述べるための事例の書き方を工夫して

(2) 単元構成の工夫について

単元を「つかむ」「つくる」「生かす」の３段階で構成し，各段階に以下のような文章表現活動と手だてを位置づけ，確かに伝える文章表現力を育てることができるようにする。

	つかむ段階	つくる段階	生かす段階
表現活動	１．地域文化に接し，地域文化のよさについて伝える計画を立てる。 ○　題材，表現方法の決定 ○　表現意欲の高まり ○　地域文化のよさへの気付き 内容選択のための取材見通しをもつ取材 書きたいことを明らかにする 相手意識（誰に書くか） 目的意識（何のために書くか）	２．地域文化と関わり，地域文化のよさを取材し，記述や構成を工夫して表現する。 ○　観点をもって取材すること ○　相手や目的に応じて構成や記述を工夫して書くこと ○　地域文化への見方・考え方の高まり よさ発見の取材 再構成のための取材 筋道をもった構成 見直し（友達　相手から） 再構成 自分の思いや考えを伝える記述 相手を意識した記述 方法意識（相手や目的に応じて分かりやすく）	３．文章を推敲し，地域文化のよさを伝える。 ○　相手に伝わり目的達成の喜びを味わうこと ○　地域文化を大事にする心の育ち 相手や目的に合った記述
手だて	○　体験を通した取材，他地域の文化との比較活動の設定 ○　伝えたいという思いや伝える必然性のもたせ方の工夫	○　体験を通した取材，聞く取材，資料で調べる取材ができる場の設定 ○　友達との話し合いや伝える相手の求めによる見直しの視点づくり ○　カード操作による構成表づくり	○　伝える相手や友達からの評価 ○　表現物を発信・受信する場の設定

３．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第３学年　博多こまのすばらしさを伝えるしょうかい文を書こう

(2) 本単元の考え方

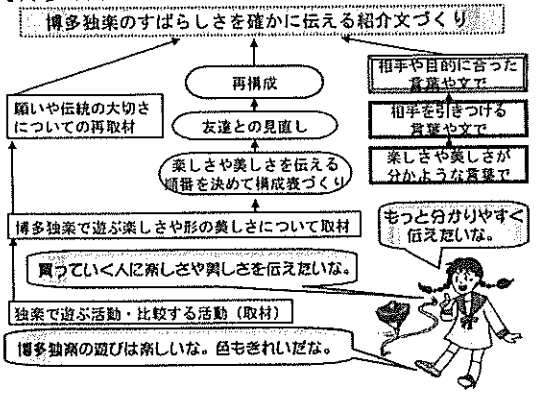
本単元は，福岡県の無形文化財にも指定されている博多独楽のすばらしさについて観点をもって取材し，取材したことの中から最も伝えたいことを明確にして，読み手に分かりやすいように段落のつながりを考えた紹介文を書くことができることをねらいとしている。

本学級の子供たちは，「福岡のよさ　大発見！」で，大濠公園のすばらしさについて他地域に住んでいる友達や親戚の人に知らせる紹介文を書く学習をしている。紹介文を書く相手の年齢や趣味に応じて観点をもって取材を行い，中心をはっきりさせた文章を書くことができるようになってきている。また，地域文化については生活科の学習で博多独楽で遊んだ体験があり，遊びの楽しさについてほとんどの子供が知っている。そこで，博多で初めて作られ全国に広がっていった博多独楽を題材として文章表現活動を展開する本単元は，表現意欲を高めることができるとともに，博多独楽のすばらしさを確かに伝える紹介文を書くことができると考える。具体的には，次のような内容を設定する。

① 博多独楽を買っていく人に対して，博多独楽をこれから先も大事に伝えていってほしいという目的をもって，博多独楽のすばらしさを伝える紹介文を意欲的に書くこと。
② 自分が伝えたいことを観点をもって取材したり，博多独楽のすばらしさが分かりやすく伝わるように中心に書くことや段落のつながりを考えた構成，読み手を引きつけるような記述を工夫したりして文章を書くこと。
③ 地域文化に親しみ，大事にしていこうとする調和的な心情を育てること。

本単元の指導にあたっては，博多独楽のすばらしさを伝えるために，中心に書くことをはっきりさせ，段落のつながりや言葉の使い方を工夫して紹介文を書くことができるようにする。また，子供たちが書いた紹介文を博多独楽といっしょに袋に入れて販売してもらうことによって，文章表現活動に意欲的に取り組み，目的達成に向けて取材したり，構成や記述をよりよくしたりする活動を通して，古くから伝わる地域文化のよさを実感し，見方・考え方・接し方を高めることができるようにする。そのために，「つかむ段階」では，博多独楽のすばらしさについて紹介する目的や相手について話し合い，紹介文を書く計画を立てる。そのために，まず，博多独楽で遊ぶ活動を位置づけ遊びの楽しさを十分味わわせる。そして，他地域の独楽との比較活動を位置づけることにより博多独楽にしかない遊びの楽しさや独楽の形などについて話し合わせ，博多独楽のすばらしさに気付かせる。さらに，博多独楽保存会の筑紫寿楽さんの博多独楽に対する思いや願いをビデオで伝えることによって，博多独楽のすばらしさを独楽を買っていく人に伝えたいという思いが生まれるようにする。「つくる段階」では，自分が伝えたいことを明らかにして博多独楽のすばらしさについて取材してカードにまとめ，中心に書くことや段落のつながりを考えて構成を工夫したり，読み手を引きつけるような表現をしたりして紹介文を書く。そのために，博多独楽で遊んだり家の人や筑紫さんを招いて話を聞いたりして，遊びの楽しさ，色や形の美しさ，古くからの伝統などについて調べ，表現する内容を豊かにする。そして，取材したカードの中から最も伝えたいカードを選んで中心や段落のつながりに気をつけた構成や読み手に分かりやすい記述を工夫させ，紹介文を練り上げていく。「生かす段階」では，互いの紹介文を読み合って構成や表現のよさや不十分さを評価し，推敲して完成させる。そして，博多独楽の袋の中に紹介文を入れて販売し反応を聞き，地域文化を他地域の人に伝える喜びを味わうことができるようにする。

【博多独楽のすばらしさを伝える文章表現活動】



(3) 目　標

① 博多独楽を買っていく人に博多独楽のすばらしさを伝えたいという相手・目的意識をもち，遊んだり尋ねたりして博多独楽の遊びの楽しさや美しさや伝統などを取材することができる。

② 紹介文を読む人に分かりやすく伝えるために，博多独楽のすばらしさについて最も伝えたいことをはっきりさせて段落相互の関係や記述を工夫して文章を書くことができる。

(4) 計　画　（１１時間）

段階	学習活動と内容	主な手だて	配時
つかむ	1．博多独楽について話し合い，学習計画を立てる。 (1) 博多独楽で遊んだり，他地域の独楽と比較したりして，博多独楽のすばらしさについて話し合う。 ○ 博多独楽が廻せるようになった経験や自分ができる技の楽しさについて話すこと (2) 「博多町屋ふるさと館」のビデオを見たり，寿楽さんの思いを聞いたりして，学習課題をつかむ。 ○ 相手意識や目的意識を明確にもつこと 「ふるさと館」で独楽を買っていく人たちに，博多独楽のすばらしさが伝わるようなしょうかい文を書こう。 ○ 学習計画を立てること	○ 博多独楽で遊ぶコーナーを設置したり，他の地域の独楽を集めて比較させたりして，博多独楽のすばらしさについて話し合わせる。 ○ 「ふるさと館」のビデオを見せたり，筑紫寿楽さんの博多独楽に対する思いや願いを知らせたりすることにより，相手意識や目的意識をもたせる。	3 ② ① ②
つくる	2．博多独楽の説明書をつくる。 (1) 博多独楽のすばらしさについて取材を行い，構成表を作る。 ○ 遊びの楽しさやもっと知りたいことを筑紫寿楽さんに尋ねてカードにまとめること ○ 方法意識を明確にもち，書く必要のあることを選び出すこと (2) 構成表を友達と見直し，構成や記述を工夫する。 ○ 中心に書くことをはっきりさせ，段落のつながりを工夫すること ○ 読み手を引きつける言葉や文を書くこと (3) 博多独楽のすばらしさを伝える紹介文を書く。 ○ 読み手や目的を意識した表現を工夫すること ・段落をつなぐ接続語 ・読み手に分かりやすい書き出しの文 ○ 読み手が独楽で遊びたくなるような表現を工夫すること	○ 博多独楽で遊ばせながら，独楽を廻す楽しさ，技のおもしろさ，回転したときの美しさなど気付かせ，カードに簡単に書かせる。 ○ もっと知りたいことについて筑紫寿楽さんから話してもらうようにする。 ○ 自分が感じた博多独楽のすばらしさについて話し合わせ，中心に書くことを決めさせる。 ○ 書いた紹介文を友達と読み合い，分かりにくいところをアドバイスしながら書き進めさせていく。	5 ② ① ②
生かす	3．完成した紹介文や博多独楽のすばらしさについて話し合う。 (1) 違った内容で書いている友達同士で紹介文を読み合って評価し合い，推敲する。 ○ 介文を読み合い，友達の表現のよさや不十分さ，博多独楽のすばらしさについて話し合うこと ○ 友達のアドバイスをもとに，よりよい表現に推敲すること (2) 紹介文を仕上げ，博多独楽保存会に送る。 ○ 紹介文を書き上げた満足感や地域の遊びを多くの人に伝えることができる喜びを味わうこと	○ 自分と友達の紹介文を比較し，互いのよさに気付かせる。 ○ 筑紫珠楽さんから，紹介文の評価を受けたり，紹介文の活用の仕方について話をビデオで見せる。 ○ 紹介文と博多独楽といっしょに袋づめしたものを筑紫さんに渡し，買っていった人の反応を聞く。	3 ② ①

(5) 指導の実際

① つかむ段階（１～３／１１時間）

ねらい　博多独楽で遊んだり筑紫寿楽さんの話を聞いたりすることによって，目的意識や相手意識を明確にし，を博多独楽のすばらしさを伝える紹介文を書く計画を立てることができる。

２年生の生活科の学習で博多独楽で遊んだ体験のある子供たちは，博多独楽を提示するとすぐに関心を示した。そこで，博多独楽で遊ぶ活動（内容選択ための取材）を位置づけ，博多独楽の遊びの楽しさやおもしろさに気づかせた。また，他地域の独楽を集め，遊び方や独楽の姿・形などを比較する活動（内容選択ための取材）を行い，博多独楽独自の遊びの楽しさや遊び方，形や色などについて話し合いを行った（資料１Ｃ１，２，３）。このような取材を通して，博多独楽のすばらしさに気づき始めた子供たちに，博多独楽保存会の筑紫さんの「博多独楽で遊ぶ子供がだんだん少なくなってきて残念だ」という話をビデオで聞くことによって（見通すための取材），子供たちは博多独楽がなくなるという危機感をもち（Ｃ４），自分たちが感じたすばらしさをもっと多くの人に伝えたいという思いを抱いた。そして，博多独楽といっしょに袋に入れて販売してもらうために紹介文を書く計画を立てた。

（博多独楽のすばらしさについて）
Ｃ１：　ぼくは，博多独楽を最初なかなか廻せなかったけど，やっと廻せるようになったとき，とても嬉しかったです。
Ｃ２：博多独楽には，喧嘩独楽や長生きや手のせなどいろいろな遊び方があるから，楽しいです。
Ｃ３：他の独楽と違って，鉄の芯があって，色や模様がとてもきれいです。
（表現の必然性や相手・目的について）
Ｃ４：　博多独楽がなくなったら，さびしい。友達ともいっしょに遊べなくなるので，博多独楽の楽しさを分かって欲しい。
Ｃ５：博多独楽の楽しさや美しさをもっと多くの人に分かってもらい，もっと博多独楽で遊んでほしい。
Ｃ６：紹介文を書いて独楽の袋に入れてもらったら，もっと独楽のすばらしさを知ってもらえる。私たちが書いた紹介文を袋に入れて販売してほしい。
Ｃ７：　もっと博多独楽のすばらしさについて調べ，買っていく人に伝わるような紹介文を書きたいな。

【資料１ 話し合いでの子供の反応】

考察①

資料１のように，子供たちは博多独楽のすばらしさを遊びの楽しさ（Ｃ１，２）と美しさ（Ｃ３）から捉えることができた。このことから，博多独楽で遊んだり他の独楽と比較したりする取材を行ったことは，自分なりに博多独楽のよさを捉え，これから取材する観点を明らかにする（Ｃ５）上で有効であったと考える。また，筑紫さんの話を聞かせたことは，子供たちが博多独楽のすばらしさを伝えたいという思い（Ｃ４）を抱かせたり，紹介文を書く意欲を高め，相手意識（Ｃ７）や目的意識（Ｃ５，６）を明確にする上から効果的だったと考える。また，博多独楽といっしょに袋に詰めてもらえることを知らせたことは，子供の表現意欲を高め（Ｃ７），紹介文を書く目的（Ｃ６）を強くもたせる上で大きな要因となったと考える。資料２のM児の思いから 独楽の遊びの楽しさという観点から取材を行おうとしていることが分かる。これは，つかむ段階で博多独楽で遊び楽しさを十分に味わい博多独楽のよさを自分なりに捉えることができることできたためだと考える。

私はさいしょはまわせなかったけど，友だちにおしえてもらったりしてできるようになったのがうれしかったから遊びのことを中心に書きたいと思います。遊びの楽しさをもっとみつけていきたいです。そして，博多こまの楽しさをこまを買っていく人につたえたいです。

【資料２ M児の思い】

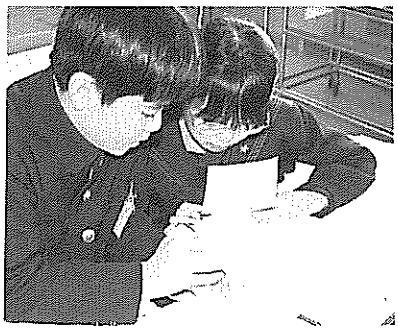
② つくる段階（４～８／１１時間）

ねらい　博多独楽のすばらしさについて伝えたいことを明らかにして観点をもって取材し，段落のつながりや読み手を引きつけるような言葉や文を工夫し，紹介文を書くことができる。

【写真１ 筑紫さんから取材するM児】

M児は，つかむ段階で遊びの楽しさに博多独楽のすばらしさを感じ，楽しさの観点から取材を始めた。さらに，博多独のすば

らしさを見つけ，自分の思いや考えを確かにするために地域の人から取材を行い，よさについて追究していった。家族や近所の人から取材を行ううちに，博多独楽が昔から伝わっていることに気づき，博多独楽はいつ頃からどのようにして伝わって博多でできたのか疑問をいだいた子供たちは，筑紫さんから再取材が必要だと感じた。そこで，筑紫さんを招き，博多独楽の歴史や博多独楽をつくるときの願いなどについて話していただき，取材を行った（写真１）。そして，自分が伝えたい博多独楽のすばらしさを知らせるため取材カードを並べ，構成表（資料３メモの部分は省略）を作った。さらに，友達との構成表を読み合い，博多独楽のすばらしさが本当に伝わるような段落構成になっているのか，読み手に興味をもたせるような記述になっているかについて見直し活動（写真２，資料４）を行った。M児は，友達からＣ２，３のようなアドバイスを受け，遊びの楽しさと関連させて自分の博多独楽の廻し方や筑紫さんから話していただいた鉄の芯とひもについて書き加え，構成表を練り上げた（資料５）。また，Ｃ４のアドバイスをもとに，読み手に問いかけるような文を書いたり，段落がつながりを考えて適切な接続語を使ったりして紹介文（資料６）を書くことができた。



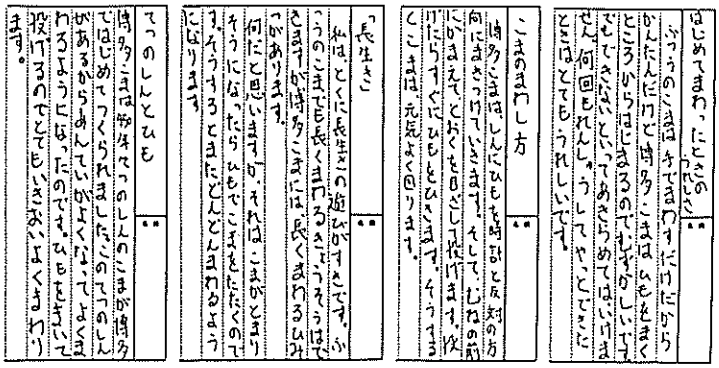
【写真２　友達との見直し】

① はじめてまわったときのうれしさ
② 博多こまのいろいろ
③ 「長生き」
④ けんかこま

【資料３　構成表】

C1：私は，博多独楽にしかない遊びの楽しさについて紹介したいけど，分かるかな。
C2：博多独楽の遊び方を書く前に，買った人が独楽を廻せようにひもの巻き方や独楽の投げ方を書くと，読む人が楽しさを味わえるようになると思うよ。
C3：長く廻せる秘密は，ひもでたたく以外にもあるよ。博多独楽は，鉄の芯でできているから長く廻ることを書いた方が博多独楽のすばらしさが分かるよ。
C4：段落の初めの文を相手に問いかけるように書くと，もっと伝えたいことがはっきりと分かるし，独楽を買った人が読みたくなると思うよ。

【資料４　友達とのM児の話し合い】



【資料５　M児の見直した構成表】

博多こまの遊びの楽しさ

博多こまには，ふつうのこまにない楽しさがいっぱいあります。いったいどんな楽しさでしょうか。

ふつうのこまは，手でまわすだけだから，かんたんだけど，博多こまは，ひもをまくからむずかしいです。でも，できないといってあきらめては，いけません。何回もれんしゅうして，やっとできたときのうれしさをあじわうことができます。

では，どうやったらまわせるようになると思いますか。博多こまは，しんにひもを時計と反対の方向にまき三回強くまきつけます。あとはかるくまきつけます。そして，こまのへこんだ所に親指とものせて小指と薬指でひものはしをはさみかるようにこまをもって，ななめ下に向けて投げます。投げたらすぐにひもをひきます。そうしたら，こまは，いきおいよくまわります。

さあ，まわったらいろいろな遊びがあります。その中で，私がいちばんすきなのは，「長生き」という遊びです。でも，どちらが長くまわるかきそう遊びです。でも，それならふつうのこまでも，できると思うのでしょう博多こまには，ふつうのこまより長くまわるひみつがあるのです。それは，こまがとまりそうになったら，ひもでこまをたたくと，またこまが元気よくまわるということです。

もうひとつひみつがあります。てつのしんです。四百年年前博多ではじめててつのしんのこまがつくられました。このてつのしんのおかげであんていがよくなり，よくまわるようになって，日本中に広がっていきました。

このように博多こまで楽しく遊ぶことができます。私は，こんな博多こまが友だちみたいで大すきです。あなたも博多こまで遊んでみてください。

【資料６　友達のアドバイスを受けて書き直したM児の紹介文】

考察②

博多独楽を買っていく人に博多独楽にしかない遊びの楽しさを伝えるという相手意識と目的意識を

明確にもっていたため（資料２），観点をもって取材（資料３）することができたと考える。そして，筑紫さんからの取材活動を位置づけたことで，遊びの楽しさや独楽の美しさと関係づけて伝統性から見た博多独楽の大切さにも気付いていくことができた（資料５の「てつのしん」の取材カード）。また，友達との見直し活動を位置づけ読み手の立場で構成表の取材カードを読み合いアドバイスし合ったことは，遊びの楽しさを根拠をあげて読み手に伝えようとする論構成を工夫したり（資料５），読み手の興味を喚起したり書いているをことを明確にしたりするために接続語や段落の書き出し文を工夫して記述したり（資料６の実線部）する上で有効であったと考える。

③　生かす段階（９～１１／１１時間）

ねらい　友達の紹介文を読み合い，表現のよさや不十分さについて評価したことをもとに紹介文を推敲し，博多独楽の袋に入れて販売し，反応を聞くことで目的を達成した喜びを味わうことができる。

【写真３　独楽の袋に紹介文を入れる子供】

筑紫さんにできあがった紹介文を読んでいただいたり，友達と読み合ったりして，それぞれの紹介文の構成，言葉の使い方や文の書き方のよいところや不十分なところを評価し合った。子供たちは，読み手への問題提示文の効果や段落をつなぐ接続語の使い方などについて話し合った。そして，評価をもとに紹介文をよりよい文章にするために推敲した。そして，完成した紹介文を筑紫さんに渡し，博多独楽といっしょに袋に詰めて「ふるさと館」で販売してもらい，「ふるさと館」の人から反応を聞き，博多こまのよさを伝えることができた喜び（資料７）を味わった。

考察③

文章を書く相手を意識し，目的をもって紹介文を書くことができたとともに，博多独楽を大切にしていこうとする心情も育てることもできたことが資料７の実線部から分かる。これは，自分の体験や博多独楽を継承している人からの取材活動，方法意識を明確にして構成や記述を見直しより確かな文章表現に練り上げていく（実線部分）活動が有効であったと考える。また，実際に紹介文を袋に入れる活動を位置づけたことは，目的的・実践的な文章を書いて，自分が感じた博多独楽のすばらしさを伝えることができるという喜びを味わうのに有効に働いた（資料７）。

わたしは、博多こまのしょうかい文を書いてよくなったことがあります。一つは、読む人のことを考えて書くことができるようになったことです。読む人によく伝わるように段落の書き出しを工夫しました。わたしのしょうかい文を読んで、こまをまわせない人がまわせるようになって、楽しく遊んでほしいからです。そのために、遊びの楽しさや博多こまのひみつをどんな順序で書いたら分かりやすいか考えて書きました。

もう一つは、博多こまが前よりずっとすきになったことです。前は、ただのこまだと思っていたけど、今はちがいます。博多で初めて作られた伝とうがあり、作る人の願いが込められてきたことを寿楽先生から教えてもらいました。とても長い伝統があることをすごいと思いました。自分のしょうかい文をこまのふくろに入れた時は、とてもうれしかったです。これからも、博多こまを大事にしてすばらしさをもっと伝えていきたいです。

【資料７　学習後のM児の感想】

４．全体考察

自分が捉えた地域文化のよさを観点をもって調べ（資料２，３，５），段落のつながりを考えて構成を工夫したり（資料５），読み手を引きつける記述を工夫したり（資料６）して，心を働かせた豊かなことばを生み出すことができた。また，取材や表現を通して地域文化に対する見方・考え方・接し方を高め，大事にしていこうとする心情を育てることができた（資料７）。これらの成果が生まれたのは，①子供たちの興味・関心のある地域文化を題材として選定し，地域文化を保存している人の思いにふれさせたり文章を送る場を設定したりしたことで，伝える目的や相手を明確にして文章表現活動に取り組んだこと。②見直し活動を位置づけて方法意識を明確にしたことで，取材・構成・記述がそれぞれ高まるような表現活動の過程をとったことが有効に働いたからである。課題としては，相手の求めに応じる文章表現活動，相手のかかわりを深める文章表現活動を展開していくことである。

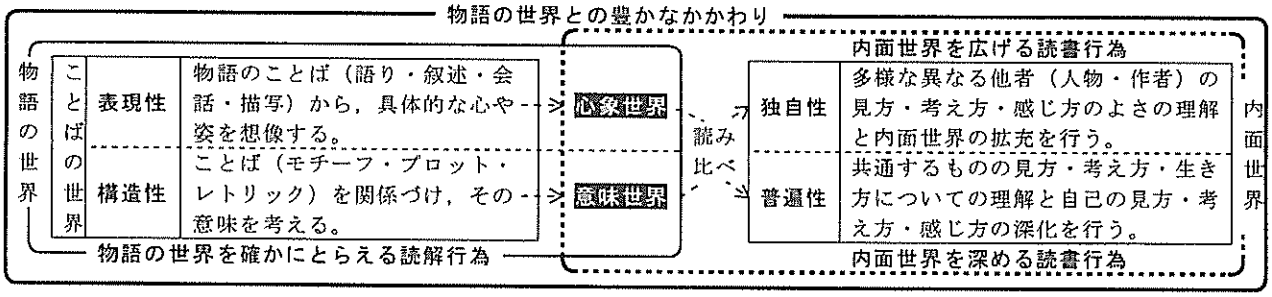
物語の世界と豊かにかかわる読書活動の構想

国語科部　吉田正樹

1．主題の意味

(1) 物語の世界と豊かにかかわる読書活動とは

物語は，昔話・伝説などの伝承物語と，童話・空想物語などの創作物語とに大別できるが，いずれも，時間的・空間的に現実とは異なる世界をことばで描き，人間の本質を語っている作品である。物語の世界とは，ことばで描き出されたもの・こと・人が織りなす具体的な心象世界（不思議な世界・おかしな世界・現実のような世界）であり，人間の願望(「かくありたい」)や必然(「かくあるべき」)などが込められた意味世界である。また，作者が，自分の思想やその背景にある独自の文化（普遍性）と人間にとって普遍的な心の深層（普遍性）とを反映・投影し，ことばで創造した世界であるとともに，読解・読書行為を通して，読者が自分の内面世界に再創造する世界（心象世界・意味世界）でもある。したがって，物語の世界と豊かにかかわる読書活動とは，下図のように，①ことばをたどり結び，その表現性・構造性に着目して，想像したり意味づけたりしながら，心象世界・意味世界を確かに再創造する読解行為，②複数の物語を読み比べ，物語の世界の独自性・普遍性を考えながら，自分の内面世界（見方・考え方・感じ方）を広げたり深めたりしていく読書行為に取り組むことである。



(2) 物語の世界と豊かにかかわる読書活動の構想とは

自分なりの読書目的・読書課題をもって物語の世界を確かに再創造する読解行為・広く深い内面世界を創造していく読書行為として読書活動を展開する学習（目的的・創造的読書活動）を，①読書課題の設定，②教材化，③単元構成と支援の３点から工夫し，物語の読み方・読み比べ方と読書交流における書き方，話し合い方（知識・技能）を，目的的・創造的な読書力（知恵）として育てるとともに，物語と積極的にかかわり自己を高めようとする向上的な心情と読書対象・読書交流におけるもの・こと・人とかかわる調和的な心情をも同時に培っていくことである。

(3) 本研究で期待する子供の姿

物語の世界と豊かにかかわる読書活動に取り組む子供の姿を次のように考える。

○　大事なことばを手がかりに，人物の心情や状況について想像を広げるとともに，場面を比べたり登場するもの・こと・人を関係づけたりして，その意味を考えている子供　（読み方）

○　複数の物語を読み比べて，異なる他者の見方・考え方・生き方のよさを理解したり，共通するよさを考えたりしながら，自分の見方・考え方を広げ深めている子供　（読み比べ方）

○　読み取った内容を書きまとめ，自分の考えに根拠づけをしたり筋を通したりするとともに，互いの考えの相違点や共通点を考えて話し合い，自分の考えを見直す子供（読書交流の仕方）

○　物語のよさを理解するとともに，その効果的な読み方・読み比べ方・読書交流の仕方などを目的的・創造的な読書力として身につけ，自分の読書生活に活用しようとする子供　（知　恵）

○　読書課題をもち追究するために意欲的に読書に取り組む子供　（向上的な心情）

○　読書・読書交流を通してもの・こと・人とかかわる心情を高めている子供（調和的な心情）

2．学習の具体的構想

(1) 読書課題の設定

ことば(物語)を通してこそ追究できる内容（感情，思想や理想，精神的文化（かくれた文化＝Covert Culture）など）から課題設定する（内容条件）とともに，子供の側で必然的に読書活動が発展するように設定する。(方法条件)

○ 人物の特徴や性格（キャラクター）を追究する読書課題を設定することで，同一題材，同類題材，関連題材の物語の読み比べを楽しむことができるようにする。(主に低学年)

○ 地域性・民族性・歴史性にかかわる題材・主材（モチーフ）を追究する読書課題を設定して，読書内容を空間的・時間的に広げたり文種（ジャンル）を広げたりできるようにする。(主に中学年)

○ 価値ある主題（テーマ）を追究する読書課題を設定することで，同一作者による物語を読み比べたり異なる作者の物語を読み比べたりして，自分の考えを広げ深めるようにする。(主に高学年)

学年	読書課題の系統	読書活動の発展方向の系統	
低	題材・主材の追究 人物と筋の追究	伝承物語 創作物語	同じ人物設定の物語の読み比べ 同じ題材の物語の読み比べ
中	地域性の追究 民族性の追究	(昔　話) (説　話)　幻想物語	読み比べの空間的な広がり 文種(ジャンル)の広がり
高	歴史性の追究 主題の追究 作者・作者群追究	(神　話)　英雄物語 伝記物語 (児童向けの小説)	読み比べの時間的な広がり 主題の読み比べ　同じ作者の物語の読み比べ 異なる作者の物語の読み比べ

(2) 教材化の工夫

次のような内容条件・方法条件を踏まえ，教材の選択と活動への配置を工夫する。

○ 学年の指導内容に即した優れた叙述(表現性)作品構造(構造性)をもつとともに，作者の個性や文化の地域性・民族性・歴史性にかかわるよさ(独自性)と，人の心の深層にかかわるよさ(普遍性)を併せもち，かつ子供の興味・関心に即した内容の物語を選択する。（内容条件）

○ 問題発見と読み比べる必然性を内在したものを基本教材に，補完的に関係づけることで物語世界が広がり深まる可能性を内在したものを選択教材に位置づけ物語集にする。(方法条件)

また，課題追究における情報提供機能を有する人を共同研究者に設定し，その情報も教材化する。

(3) 単元構成の仕組み

単元を「つかむ・しらべる・あらわす」の３段階で構成して，各段階に＜問題追究＞活動→＜表現・交流＞活動→＜問題発見＞活動を位置づけ，次のような支援と評価を位置づける。

		つかむ段階	しらべる段階	あらわす段階
学習活動と内容	問題追究	基本教材の読み比べ活動	選択教材の読み比べ活動①	選択教材の読み比べ活動②
		課外の時間を活用した読み比べ活動		継続的な読書活動に
		かかわりの確かさ	(表現性・構造性の追究)	
		(題材についての話合い)	かかわりの広がり (独自性の追究)	
		○ 既習学習・生活経験想起	○ 想像する読み	かかわりの深まり (普遍性の追究)
		○ 叙述に即し想像すること	○ 構造をとらえる読み	○ 共通点を追究する読み
		○ 感想・疑問を抱く読み	○ 相違点を追究する読み	○ 自分と比べる読み
	表現	初発の感想のメモ(研究課題)	研究ノートへの記録(研究経過)	研究報告書の作成(研究成果)
		○ 整理しながら書くこと	○ 書きながら考えを確かにすること (思考を助ける)	○ 書きながら考えを広げ深めること (筋を通す)
	交流	研究課題・計画の話し合い	研究経過の中間報告的話し合い	研究成果の最終報告的話し合い
		○ 読み比べる観点の明確化	○ 相互に考えを比べながら話し合うこと	○ 相手に分かるように効果的に説明すること
	問題発見	読書課題と研究(読書)計画	見直しと再取材的な読書計画	今後の自分の読書計画
		○ 読書課題の明確化	○ 見直しの観点の明確化	○ 発展課題と読書方向の決定
支援		○ 具体的話題や状況の提示 (話題に関するもの・人)	○ 複数化した追究過程と方法 ○ 共同研究者としてのG．T．	○ 報告書のモデル提示 ○ 報告助言者としてG．T．
		○ 読み方を考える基本教材	○ 個に応じた選択教材の設定	○ 発展読書を考える資料
評価		自己評価 (読解行為や読書行為を表現することで自己評価できるようにする)		
		相互評価 読み取りの確かさ	読み比べの広がり	読み比べの広がり
			共同研究・交流の相手による評価	達成感・効力感の感受

３．指導の実際と考察

(1) 単元名　第４学年（単元１）日韓(にっかん)昔話研究会－「フンブとノルブ」と「舌切り雀」－
（単元２）龍の物語研究会－東洋の龍と西洋の龍（ドラゴン）－

(2) 本単元の考え方

単元１は，韓国のことをもっと知りたいという目的をもとに，日韓の類似する昔話を読み比べその面白さを追究する読書活動のなかで，目的的な読書力を育てることをねらいとしている。具体的には，①日韓の昔話の面白さを追究する目的に応じて，大事な事柄をまとめたり必要なところは細かい点に注意しながら，登場するもの・こと・人の違いや話の筋に込められた意味を読み取り伝え合うこと，②類似した昔話を読み比べながら，昔話の背景にある両国の文化の違いを考えたり昔話を伝承してきた人々の願いに気づくことが主な学習内容である。日韓の昔話を教材化する価値は次の２点である。

○　日本と類似した昔話が多く，昔話の面白さや人々の願いなどの普遍性を実感できること
○　類似する話のなかにも，細部において自他国の文化の独自性が読み取れる昔話が多いこと

目的や課題設定においては，あらつ学習「おとなりの国・韓国調べ隊」での興味・関心を生かし，具体的な追究活動として読書活動が展開する学習計画を立てることができるようにする。基本教材には，韓国の代表的な昔話「フンブとノルブ」を取り上げ「舌切り雀」との読み比べを行わせることで，面白さを追究する観点を明確にできるようにする。選択教材としては，日韓の昔話のなかから類似するものを組み合わせ物語集を構成し，昔話を選択し複線化した追究に取り組むことができるようにする。読書の成果については，新聞形式に表現させ，他の研究班や韓国総合教育院の友達に発信できるようにする。

単元２は，東洋・西洋の龍が登場する物語を読み比べ，龍の不思議さを追究する読書活動のなかで，創造的な読書力を育てることをねらいとしている。具体的には，単元１から単元２へと学習を発展させるなかで，次のように学習内容（読み比べ方・育てたい読書力）が高まることをねらっている。

系統性 ＼ 単元		（単元１）日韓昔話研究会（11月）	（単元２）龍の物語研究会（２月）
読書活動		目的に応じて探る **目的的読書活動**	自分なりの応えを創る **創造的読書活動**
	課題設定	日韓昔話の面白さ（題材追究）	→物語に描かれた龍の不思議（主材・主想）
	教材	未読の昔話と既読の昔話との比較	→未読の物語についての相互比較
	読書範囲	昔話の空間的広がり（自国→他国）	→空間的・時間的・ジャンル的な広がり
育てたい読書力	表現性	重要語句や語り口の面白さを考える	→叙事・描写を手がかりに情景を想像する
	構造性	話の筋に込められた意味を考える	→場面や事柄の変化をとらえ意味づける
	独自性	話の違いから文化の違いを考える	→物語から見方・考え方の違いを考える
	普遍性	昔話を伝承した人々の願いに気づく	←→龍の物語を創造した人々の願いを考える

東西の龍の物語を教材化し単元を構成する価値は大きく次の３点である。

○　龍は時空間を超えてさまざまな場面で活躍し，その姿は子供たちにとっても身近な存在であるが，性格や役割については物語でこそ窺い知ることができる対象であること
○　世界各地にさまざまな龍の物語が伝播・伝承・創作されており，特に東西では龍が相反するものとして描かれており，子供が意欲的に読書範囲を広げ発展する可能性を内包していること
○　龍の壮大さ・力強さ・意味づけを描くために表現や構成が工夫されていること

指導にあたっては，基本教材として「大沼池の黒龍」と「クロック・ナ・クロイブ」を取り上げ読み比べさせることで，龍の不思議さを追究する観点と読み方を明確にさせる。さらに選択教材として東西それぞれの龍の物語集を構成し，自分が選んだ物語を読み比べながら東西の龍の違いや重なりに対する自分なりの応えを研究報告文にまとめ相互に報告し合ったり他に発信する活動に取り組ませる。

(3) 目　標

（単元１）日韓昔話研究会－「フンブとノルブ」と「舌切り雀」－

① 韓国のことを調べる目的をもって，大事な事柄をまとめたり必要なところは細かい点に注意しながら昔話を読み比べ，日韓の昔話の面白さを読み取り，書きまとめ伝え合うことができる。

② 空間的に読書範囲を広げながら昔話を読み比べ，相違点や共通点について考えることができる。

（単元２）龍の物語研究会－東洋の龍と西洋の龍（ドラゴン）－

① 物語のことばや構造に着目しながら，龍の姿を想像したり意味を考えたりすることができる。

② 時間的・空間的・ジャンル的に読書範囲を広げながら東西の龍の物語を読み比べ，それぞれの独自のよさや共通する願いを考え，筋の通った文章にまとめたり相互に交流したりできる。

(4) 計　画

（単元１）日韓昔話研究会－「フンブとノルブ」と「舌切り雀」－　（13時間）

ね　ら　い	学　習　活　動　と　内　容	配　時
○ 活動目的と読書課題の明確化	１．教材文「フンブとノルブ」「舌切り雀」を読み比べ，日韓の昔話の面白さを追究する昔話研究の計画を立てる。	４時間
○ 重要語句や筋に込められた意味を考えて読むこと	(1) 類似した日韓の昔話に出会い昔話研究について話し合う。	①
	(2) 「フンブとノルブ」「舌切り雀」を読み比べ話し合う。	②
	基本教材の読み比べ→昔話との確かなかかわり	
	(3) 韓国の昔話集をつくり，自分が追究する昔話を決める。	①
○ 昔話の違いや重なりから文化の違いや人々の願いを考えること	２．日韓昔話集から選んだ昔話を読み比べ，面白さを追究する。	５時間
	(1) 追究の観点をもとに読み比べ面白さを書きまとめる。	③
	選択教材の読み比べ→昔話とのかかわりの広がり	
	(2) 韓国の人を招いて中間報告会を開き面白さを話し合う。	②
○ 読みや考えが伝わるように工夫して表現すること	３．日韓の昔話の面白さを新聞形式でまとめ発信する。	４時間
	(1) さらに昔話を読み比べ，面白さを新聞に書きまとめる。	③
	選択教材の読み比べ→昔話とのかかわりの深まり	
	(2) 友達や韓国の人たちに研究発表・研究発信をする。	①

（単元２）龍の物語研究会－東洋の龍と西洋の龍（ドラゴン）－　（12時間）

○ 課題の明確化	１．教材文を読み比べ，龍の不思議さを追究する計画を立てる。	４時間
○ 叙事・描写や場面の相互関係を考えながら龍の姿や意味を確かに読み取ること	(1) 龍に関するもの・ことを集め，龍の不思議さを話し合う。	①
	(2) 「大沼池の黒龍」から龍の不思議さを読み取る。	①
	(3) 「大沼池の黒龍（日本の伝説）」と「クロック・ナ・クロイブ（イギリスの伝説）」を読み比べ，その共通点や相違点から，追究の観点と方法を話し合う。	②
	基本教材の読み比べ→物語の世界との確かなかかわり	
○ 読書範囲を広げながら物語を読み比べ，見方・考え方の違いや重なりを考えること	２．東西の龍の物語集から物語を選び龍の不思議さを追究する。	４時間
	(1) 追究の観点をもとに選んだ物語を読み比べる。	③
	選択教材の読み比べ→物語の世界とのかかわりの広がり	
	(2) 中間報告会を開き，自分なりの応えを報告し合う。	①
○ 情報を付加し筋の通った文章を構成し表現すること	３．読み比べ考えたことを研究報告にまとめ発信する。	４時間
	(1) 不足する情報を補いながら研究報告書を書きまとめる。	②
	選択教材の読み比べ→物語の世界とのかかわりの深まり	
	(2) 最終報告会を開き，研究成果を相互に発表し合う。	②

(5) 指導の実際

① (単元1)日韓昔話研究会　学習計画を立てる段階 (1～4／13時間＋あらつ学習)

ねらい 韓国の文化を調べる目的による昔話研究について話し合い，読書課題をつかむとともに，韓国と日本の代表的な昔話の共通点や相違点を読み比べ，その面白さを追究するための観点を考えること

韓国の文化を調べる活動(あらつ学習)のなかでかかわっていた韓国総合教育院の人たちが昔話を教材に母国語学習を行っていることを知った子供たちは，両国の昔話研究への関心・意欲を高めていった。

＜資料①　話し合いにおける子供の反応＞
C1　3年生の教科書にのっていた「三年とうげ」はとても面白かったけど，他にも面白い話があるのかな。トルトリのような人物は，日本の昔話でいえば，吉四六さんとか彦一さんだね。
C2　韓国の人たちは日本の昔話を知っているのかな。日本の面白い昔話を紹介したいな。
C4　私たちも，教育院の人たちから韓国の昔話を紹介してほしい。

＜写真①総合教育院の子供たち＞

教育院の趙潤奎先生から韓国の代表的な昔話「フンブとノルブ」を紹介してもらった子供たちは，日本の昔話「舌切り雀」と非常に類似していることに驚き，２つの昔話を読み比べてその共通点や相違点を明らかにした(資料②)。そして，他の昔話を読み比べていくための観点について話し合い整理していった(資料③→④)。

(資料②　K児の読み取りノートから　抜粋)

(相違点) 登場するもの・こと・人がちがう。
・生き物（つばめとすずめ）
・兄弟と老夫婦
・トケビとおばけ
・仕事の違い・山や川での仕事と田畑での仕事
話の筋はよくにているが，ところどころ違うところがある。

(共通点) 話の筋がよくにている。
・やさしい人は，最後には幸福になって，意地悪な人は，最後は不幸せになっているところが同じ。
・欲の深い人が幸せになった人のまねをして失敗しているところ
・生き物を大切にしたりいじめたりしている人が出てくるところ
くり返しやおもしろい歌が出てくる。

(資料③　話し合いで整理した読み比べる観点)

A　人物のちがい・動物のちがい
B　おばけなどふしぎなもののちがい
C　生活のようすのちがいなど
D　話のあらすじ，話のつくり（はじめ・なか・おわり）
E　話にこめられた人々の心や考え
F　ことばのおもしろさ（くり返し，歌，音を表すことば）

(資料④　話し合い後のK児の感想)
最初は「ああそっくりだな。」で終わっていたけど，調べていくうちにどこがにていて，どこがちがうのかがはっきりしてきました。それをみつけるのが楽しくなってきて，「どうしてこんなににているのだろう。」とその理由を調べたいと思うようになってきました。それに，まだ他にもにた話があるかもしれないので他の昔話も読み比べてみたいです。

考察①　資料①④の下線部のように，K児は昔話の面白さを韓国と日本の昔話を読むこと→共通点・相違点を読み取ること→その理由や背景を考えることと具体化しながら追究意欲を高めている。また，資料②のように，昔話の叙述や筋に着目しながら，相違点と共通点を明確にした上で，資料③のような日韓の昔話の面白さを追究する観点を構造性(BE)・表現性(G)・独自性(ACD)・普遍性(F)の４つの点から整理することができた。このことは，子供たちが，大事な箇所や話の筋をまとめながら，教材文を読み比べ，読書課題を明確化したことを意味している。このことから，有名な韓国の昔話「フンブとノルブ」を中心教材として位置づけ「舌切り雀」と読み比べたことが有効であったと考える。

② 自分が選んだ昔話を読み比べ，その面白さを追究する段階 (5～9／13時間)

ねらい 大事な事柄をまとめたり，必要なところは細かい点に注意したりしながら昔話を読み比べるとともに，読書の範囲を広げながら面白さを追究し，自分の感想や意見を書きまとめることができる。

面白さを追究する観点をもとに，子供たちは昔話集から類似する日韓の昔話集を選択し読み比べに取り組んだ。さらに，趙先生を招聘した中間報告会を開いて，各自が追究した面白さを話し合った。

K児は韓国の昔話「おばあさんのトラ退治」とそれに類似する日本の昔話「さるかに合戦」を読み比べ，昔話の面白さを追究している。そして韓国の昔話にトラが悪役として多く登場することに疑問を抱き趙先生に質問をした。

資料⑤　K児の読み比べノートから

ちがうところ
C道具のちがい　(記号は資料④に対応)
チゲ・むしろ　↔　いろり・うす
A動物（人物）のちがい
トラ　↑　↓　さる・かに
Fことばのちがい（音や歌のちがい）

日本と韓国の文化がちがうから
韓国はトラをトラを大事にしていた

にているところ
D話のすじ…ほとんど同じ

	はじめ	なか	おわり
おばあさんのトラたいじ（韓国）	おばあさんをこまらせるトラをたいじする計画をチゲとむしろが考える。	とらをまちかまえる。	トラをたいじする。安心して働ける。
さるかに合戦（日本）	かにの母親がさるに殺されてしまい、なかまがさるをこらしめる計画を立てる。	作戦を考え、さるをまちかまえる。	さるがつぶされてたいじされる。

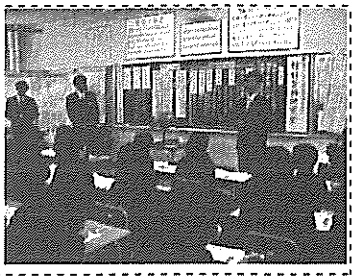
韓国と日本が交流をしていたから

「フンブとノルブ」だけでなく私が調べた「おばあさんのトラたいじ」も、日本の昔話「さるかに合戦」にそっくりでした。どうしてこんなににているのかふしぎだけど、登場する道具や動物が違う理由についても知りたいです。

E人々の願いもほとんど同じ
・悪いことばかりしていると、ばちがあたる。
・弱いものでも、知恵を出して力を合わせれば、大きくて悪いものでもたおせる。困ったことも解決できる。

＜資料⑥　趙先生との学習についてのK児の感想（一部抜粋）＞

趙先生が私たちの質問に詳しく答えてくれたおかげで，いろいろなことがはっきり分かりました。韓国の昔話にはトラがたくさん出てきますが，どの話も「にくまれ役」や「悪役」になっていました。趙先生の話によると，一番強くて勇気がある動物だから，私たち人間もその強さと勇気を学びたいというところから韓国の昔話にトラが多く出てくるということだそうです。（中略）　私は，人々の願いが込められた昔話はどんどん伝わっていって，その伝わった国の生活の様子などによってその国にあった昔話になるんじゃないかなあと思います。昔話を読むときには，これからも，人々の願いをよく読み取っていきたいと思います。



＜写真②　趙先生との学習の様子＞

考察②　資料⑤からは，K児が面白さを追究するうえで大事な箇所をまとめ，表や箇条形式で書きまとめていること，追究の観点に基づいて，相違点(AC)や共通する願い(E)を読み取っていることがわかる。これは目的をもち，昔話の構造性・表現性(DE)をとらえ，その独自性・共通性を考えた姿である。基本教材から複数教材へ発展する読み比べの活動構成と，基本教材からとらえた観点や読み方を応用・活用できる昔話集の教材化が有効であったと考える。さらに趙先生を招聘した報告会の設定によって，子供たちは資料⑥のように自他国の昔話に込められた独自性を深くとらえることができた。

③　昔話の面白さをまとめ，友達や韓国の人たちに伝えていく段階（10～13／13時間）

ねらい　調べた昔話の面白さを韓国の人たちに伝える価値ある情報としてまとめることができる。

中間報告会を受けて，子供たちはさらに読み比べに取り組み，自分がつかんだ昔話の面白さを書きまとめた。K児は，韓国の昔話「コンジ・パッジ」を選び考えを書きまとめていった。

＜写真③総合教育院での発表会＞

資料⑦　K児が書きまとめた新聞から（一部抜粋）

人々の思いや願いは時代や国をこえて

韓国の昔話「コンジ・パッジ」と日本の昔話「ぬか福・米福」もそっくりな話でした。それだけではありません。ペロー童話の「シンデレラ姫」にもそっくりなのです。調べていくと、話に込められた人々の願いや思いが似ていることがわかりました。私は、それをいくつかまとめてみました。

①まずしくても、よくを出さずに生きていればいつかきっと幸せになれる。

②優しい心を大切にし続ければいつか幸せになれる。

③力を合わせれば、知恵を出し合えば強い悪者も必ずやっつけることができる。

こんなふうに、にている願いがあるからこそ、昔話もにているのではないかと思います。また、生活や文化は国によってちがうけれど、人々の考えや願いは同じだと思います。このように、人々の願い、思いは、長い間、今までずっと昔話を通じて人々に知れわたっていたのです。昔話を読む人は、どの話からも、そのなかにかくされている人々の願い、思い、考えを読み取ってそのことについて考えてほしいと思います。

考察③　資料⑦から，K児が昔話の伝播を韓国と日本から西洋にも目を向け，昔話の読みを空間的に広げようとしていることがわかる。また昔話を伝播・伝承してきた人々の思いや願いの普遍性に気づいている点も読み取れる。これは，日韓の昔話の面白さを追究しそれを韓国の人たちに情報発信していく具体的な活動として読書活動を位置づけた単元構成が有効であったと考える。

④　（単元２）龍の物語研究会　龍の不思議さを追究する計画を立てる段階（１～４／12時間）

ねらい　描写や叙事，場面の相互関係に着目しながら，東西の龍の姿や意味を確かに読み取るとともに，その相違点や共通点について考え，龍の不思議さを追究する課題と見通しを明確化すること

導入として身近にある龍に関係あるもの・ことを集め，龍がどんな生き物であるかを話し合った。

資料⑧
- C　東洋の龍と西洋のドラゴンとではずいぶん違うと思いました。絵などから龍の姿はよくわかるけど，どんな力があるのか，どんな役割しているのか，もっと調べていきたいと思います。
- C　物語にはストーリーがあるから，龍の性格と役割とかがよくわかるはずです。
- C　日韓昔話研究でやったように，龍が出てくる物語をみんなで調べたらいいと思います。

＜写真④　龍のことを調べる様子＞

そこでまず，基本教材①「大沼池の黒龍」から龍の不思議さを読み取り，「姿」「力」「性格」「役割」の４つの観点から比べ追究していくことを確かめ合った。そして，この観点から基本教材②「クロック・ナ・クロイブ」と読み比べ，東西の物語において龍が相反して描かれている点をとらえた。

考察④　龍を話題にしたことと日韓昔話研究での学習経験とによって，龍の不思議さを物語で追究する意欲を子供の側から生み出すことができた。また資料⑧から，K児が物語の描写や構造に着目して龍の性格や役割を考え，東西の龍の描かれ方の違いを読み取っていることがわかる。これは，東西の龍の物語の基本教

資料⑨　K児の研究ノートより抜粋

黒龍の様子や姫との会話からやさしい心をもった人間みたいな龍だとわかります。それに、人々への影響を考えると、神のような龍であることもわかります。それに対して、西洋の龍は、気味が悪く人々に害や不幸だけを与えるものとして描かれていることがよくわかります。

材化とその読み比べ活動が，読書課題と追究の観点の設定に有効につながったからである。

⑤　東西の龍の物語を読み比べて，龍の不思議さを追究しまとめる段階（６～９／12時間）

ねらい　時間的・空間的・ジャンル的に読書の範囲を広げながら，東西の龍の物語を読み比べ，その相違点や共通点から，東西の人々の見方・考え方の違いや物語を想像した人々の願いを考えること

龍の物語集から教材を選択した子供たちは，龍４つの観点（姿・力・性格・役割）から読み比べ，龍の不思議を追究した。そして，龍について詳しいムガールさんを招き，中間報告会を行った。

考察⑤　「天龍」・「青龍と黄龍」・「騎士ハンスの龍退治」を選び読み比べたＫ児は，資料⑩のように，物語から読み取った龍の役割を根拠に，東西の龍の違いを東洋と西洋の人々の考え方の違いとして考えている。また読書範囲も伝承物語（日本・イギリス）から創作物語（韓国・ドイツ）へと空間的・ジャンル的に広げている。また「エルマーのりゅう」を選んだＯ児は，読書範囲を空想物語（ファンタジー）へ時間的・ジャンル的に広げ読み比べている。そしてムガールさんへの質問を手がかりに，西洋の人々の見方・考え方へ関心を高めていることがわかる。このように読書活動が高まったのは，昔話集の構成（選択教材化）と基本教材から選択教材の読み比べへ発展する活動構成，ムガールさんを招いての読書交流活動の設定が有効であったからだと考える。

資料⑩　Ｋ児の研究ノートから

東洋の龍は水に関係のあることが多いようです。これは昔の東洋の人たちが、おそろしいものを龍にたとえたからだと思います。日本の伝説「天龍」や、韓国の「青龍と黄龍」からよくわかります。お米を主食にしていた東洋の人たちは、水がとてもおそろしく思えたのだと思います。でも、東洋の人たちは、そのおそろしい龍と仲良くつきあっていこうとしたり、青龍が天龍が荒れ地を水田に変えていることからも、東洋の人たちは龍に願いを込めてきたんだと思います。

（中略）

私が読んだ物語の西洋の龍は、海に関係のあるものがほとんどです。これは西洋の人たちが、水よりも病気などをおそれていたからだと思います。伝染病などを龍のしわざだと考えていたのではないでしょうか。そして、東洋の人間と違い、龍を何とか人間の力でやっつけてしまおうと考えたのだと思います。西洋の龍の物語がほとんど龍退治の話になっていることからわかると思います。龍の姿や力も悪魔や怪物のように、人からきらわれるように書かれていることからもよくわかります。

資料⑪　Ｏ児の感想

私は西洋の昔の物語と今の物語とを比べました。すると「エルマーとりゅう」のように今の西洋の龍の話は、退治されたりせず人間と仲良くしてることが多いのです。私はどうしてもこのことが知りたくて、ムガールさんに質問しました。ムガールさんは、東洋の人たちの考え方を取り入れているすばらしいものは取り入れ合っていると言われました。私もその通りだと思いました。

＜写真⑤　ムガールさんとの話し合い＞

⑥　龍の物語についての研究成果を報告書にまとめる段階（10～12／12時間）

ねらい　龍の不思議に対する自分なりの応えを，筋の通った研究報告文に書きまとめることができる。

ここでは，さらに読み比べを続けながら龍の不思議さについての自分なりの応えを研究報告文に書きまとめていった。

考察⑥　Ｋ児は，東西の龍が象徴しているものの共通性に気づき，人々が恐ろしいものを龍に表し願いを込めてきたという普遍性を考えている。これは読書を通して自分なりの応えを創造している姿でもある。このことから，龍の不思議さを追究する具体的な活動として読書活動を位置づけた単元構成によって，読書活動が創造的に展開されたことがわかる。

資料⑫　Ｋ児が書きまとめた研究報告から

私は、東洋の龍と西洋の龍は、もとは同じだったと思います。そして、語りつがれていくうちに、自分たちの願いに合った龍を生み出していったのだと思います。それは、物語をよく読み比べていくと、人々にとっておそろしいものを龍にたとえ、願いを込め、語っていくという面が、東西で同じだからです。そう考えると、姿や力性格などが違う龍がいることも説明がつくように思います。東洋の人々は水が大切で、龍を大切にして、ともに仲良く生きようとしたから神様みたいな人間みたいな龍になったのだと思います。そして西洋の人々は病気などがおそろしかったから悪魔のようなドラゴンになったのだとわかりました。私は龍の物語から、このように国をこえて時代をこえて、人々が大切にしてきた願いが読み取れるなんて、とてもすごいことだなと思いました。

４．全体考察

考察①②→④のように，物語の表現性や構造性に着目して物語世界と確かにかかわる読書（解）力が高まっていること，考察②③→⑤⑥のように，複数の物語を読み比べながらその独自性や普遍性を考え物語世界とのかかわりを広げ深めていく読書力が高まっていること，さらに考察⑤のように，読書範囲も課題追究の必然性のなかで，空間的・時間的・ジャンル的に広がり，そのなかで異文化への理解と調和的な心情も高まりつつあることが成果である。このことから，単元１から単元２へ発展する課題設定と単元構成，基本教材から選択教材（物語集）へ読み比べを広げる教材化と活動構成の工夫が，目的的・創造的読書活動を展開し高めていく上で有効であったと考える。課題としては，他の読み物，特に科学的読み物を対象とした読書活動との関連や具体的指導のあり方を究明していきたい。

○　参考文献　マックス＝リュティ「昔話の本質と解釈」1969　福音館書店　森省三他「物語と心の深層」創元社　1996
河合隼雄「昔話と日本人の心」1982，「生と死の接点」1986，ともに岩波書店

思いやりの心と言語活動を結ぶ学習の構想

国語科部　伊藤啓二

1．主題の意味

(1) 思いやりの心と言語活動を結ぶとは

「思いやり」とは，人間関係をつくる基盤となる，他者を理解しようとする心の働きだと考えている。それは，単に人の気持ちを想像するだけではない。思いやりの心を発揮しているとき，人間は，人の置かれている状況をとらえ，そこに身を置いてものを見る，あるいは，その状況に直面する人の立場に立ってものを考えるといった行動を取っているのである。また，そのような思いやりの心をもった行動と人間の内言及び外言は，密接に結び付いている。相手への思いやりは，心の中で言葉となり，自分への問いかけとなったり，相手への優しい言葉となって言語表現に表れてくる。

主題に示した思いやりの心と言語活動を結ぶとは，具体的な対象に対して，思いやりの心を発揮し自分にできる何かをしたいという意識が，子供の中に生まれてくるような具体的な体験活動の中に，言葉で感じ，考え，表現するといった言語活動を位置付けることによって，思いやりの心と，国語科の理解・表現・言語事項の内容が身に付いていくようにすることである。

思いやりの心は，子供の生活の中で出会う様々な対象に向けて発揮されるものであるが，本研究では思いやりの心を働かせてかかわる対象と，全体テーマに示した視点である「自分」「仲間」「福祉」「生命」「国際理解・協力」「環境」とを結びながら，教材化を図っていくようにする。具体的には

視点	思いやりの心を発揮する対象	具体的な言語活動の例
自分	自分自身・家族など	自分自身を見つめる作文・手紙など
仲間	友達・学校の上級生・下級生など	友人への手紙，上級生への感謝の言葉など
福祉	障害をもった方々・お年寄りなど	視覚障害者への録音図書，劇や本作りなど
生命	病気と闘う方々・動植物など	手紙，日記，相手を元気づける劇や紙芝居
国際理解・協力	世界の小学生，外国の方など	討論会，国際協力を促すパンフレット作りなど
環境	環境保護に努力する方々など	討論会，環境保護を促す新聞や作文など

以上のような視点，対象，言語活動の関連を考えて国語科学習を具体化していきたいと考える。

(2) 「思いやりの心と言語活動を結ぶ学習の構想」とは

主題の意味で述べたように，本研究では，心の教育と言語の教育が結びついた学習を構想することにより，心を働かせた豊かな言葉を大切にする心豊かな人間を育てたいと考えている。そこで，現代教育の課題とも言える，「思いやりの心」を育てる学習活動と言葉が密接に結びついた国語科学習を展開するために，本研究主題を設定した。

「思いやりの心と言語活動を結ぶ学習」とは，

> 他者の立場や情況に心を寄せ，自分にできることを行動化して役立ちたいという子供の意識が生まれてくるような具体的な体験活動の中に，言葉の大切さと価値を感じ，考え，表現するといった国語科の内容に関わる具体的な言語活動を位置付けることによって，思いやりの心を高めると同時に，言葉への見識を深めるように単元構成を図った学習のことである。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- ○　言葉を通して，思いやりの心を広げ，学習対象に対する認識を深めている子供
- ○　自分にとって価値のある言語情報を処理活用し，自分の生活や生き方に役立てている子供
- ○　思いや考えを言葉を通して伝え合い，心の温かさを共有することができる子供
- ○　言葉に積極的にかかわり，豊かに感じ取り，思考・判断し，自分なりの行動化ができる子供

２．学習の具体的構想

(1) 教材化における留意点

思いやりの心を発揮する対象及び人物に，役立とうとする具体的活動と国語科の指導内容（基礎・基本）が必然的に結び付くように教材化を図ること。

（右表は５年生の例）

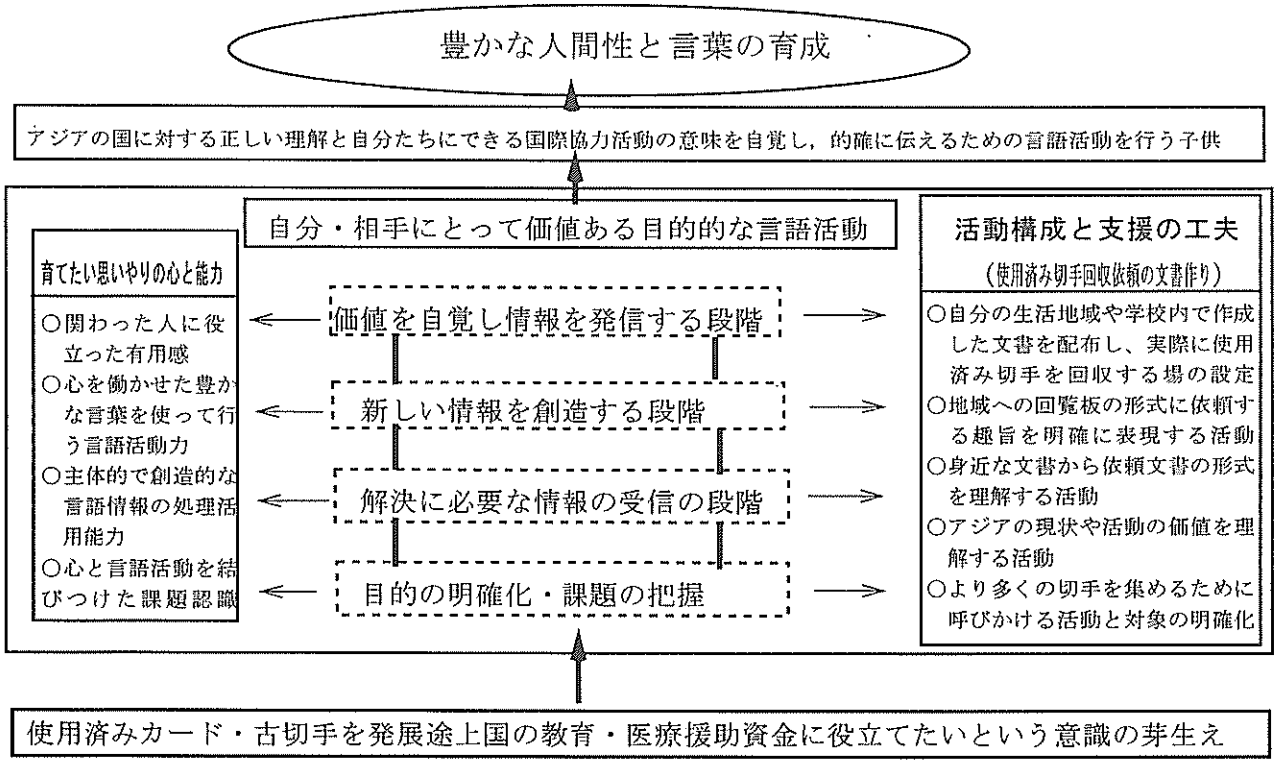
思いやりの心を発揮する対象	具体的活動	主な指導内容
視覚に障害をもつ同年代の子供	録音図書作り	内容を正確に読み取る 分かりやすく朗読する
アジアやアフリカで生活する同年代の子供	使用済み切手回収をお願いする文書作り	目的や意図に応じて必要な事柄を整理する 依頼の趣旨を明確にして文章を書く
お世話になった６年生	卒業式までの日めくりカレンダー作り	感謝の意を手紙に表す 主題に合った詩や本を選んで読み，紹介する

(2) 単元の学習過程について

活動の段階	主の学習活動と内容	主な手だて
課題把握の段階	・思いやりを発揮したい人や対象の様子・状況や思い願いを理解し，活動目的と追究課題を把握する。 ○言語活動を中心とした学習の見通しを把握すること	・子供の心を揺さぶる人物・対象との出会いの場の設定
情報受信の段階 情報創造の段階	・目的・課題達成に向けて言葉に関わり，言語情報を受け取る。○目的や意図に応じた情報の収集 ・受け取った情報をもとに目的とする言語表現物を創り出す。　○必要な情報の選択と再構成による表現	・目的にあった言語情報資料の準備・提示 ・ＧＴによる情報提供 ・表現物のモデル提示
情報発信の段階	・活動の成果を伝え，言語生活の充実と心の温まりを味わう。　○豊かな心と言葉の高まりの自覚	・活動達成の具体的な場の設定 ・対象・人物の反応

本年度の研究においては，特に「国際理解・協力」の視点に立った思いやりの心を深めることと読む・書くを中心にした言語活動が結びつくようにした単元を設定していきたい。

(3) 国際理解・協力の視点に立った単元における主題構想図



3．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第５学年　使用済みカードや切手を集めるためのお願い文書を作ろう

(2) 本単元の考え方

本単元は，アジアの国の教育，医療，植林などの援助資金となる使用済みカードや切手を集めるための協力お願い文書を作成していく活動の中で，物事を依頼する文書に必要な内容や書き方の特徴をとらえて，相手に意図や目的が分かりやすい文章を書く力を育てるとともに，アジア諸国に対する正しい理解の上に立った国際協力活動に，意欲をもって関わる心を培うことをねらいとしている。

本学級の子供たちは，今までに物事を依頼する文章を自分たちで作った経験はほとんどない。しかし，学習活動の中で，子供たちがいろいろな目的で他の人たちに物事を依頼する機会は多く，自分たちの考えやお願いを伝える文書を書く必要性は感じている。また，国際協力活動やボランティア活動に対する参加意欲は高く，そのような学習には特に積極的に取り組んできている。そこで，この２つのことを結び付けた本単元は，子供の意欲を高め，子供自らが求めながら，国際協力に対する思いを的確に伝えた依頼文を書く国語科学習が展開できるものと考えた。具体的には，

① 身近にあるパンフレットやお願いの文書を読み，多くの人に物事をお願いする文書に必要な事柄や書き方の特徴を理解すること

② 調べたことや聞いたことを再構成して，国際理解・協力の意義や目的が正しく，明確な依頼の文章を書くこと

③ アジアの諸国の現状と問題を正しく理解し，自分たちにできる国際協力活動として，古切手回収に意欲的に取り組み，地球市民として社会に貢献していこうとする心を高めること

この３点が，本単元での活動を通して子供たちと創り出していく主な学習内容である。

本単元の指導にあたっては，より多くのカードや古切手を回収する方法として，依頼文書作成を子供自ら計画し，計画に従って意欲的に取り組むように単元を構成する。そして，目的を達成するための必要感から，依頼する文章に書くべき内容や形式，文章表現の特徴などを検討し，具体的な文章表現を高めていくように仕組んでいく。また，その過程で，アジアに対する正しい認識と国際協力活動に取り組む自分の心のあり様を見直していけるように支援を行っていく。具体的には，

「課題把握」段階・・・自分たちの力で，より多くのカードや切手を収集するためにはどのようなことが必要かを話し合わせ，主体的に活動を進めていく意識をもたせる。その中で，より多くの人から集めるためにＰＲ活動をする必要性を感じ取らせて，収集のための依頼文書を書く活動を目的として，見通しと学習計画の立案を行う。

「情報受信・情報創造」段階・・・立案した計画に従って，何をどのように書くか話し合い，協力活動をする団体の資料や様々な依頼や案内の文書（イベントの案内，学校からでる依頼の文書，地域に回る各種の回覧板など）から必要な情報を収集して，試しの依頼文書を作成する。次に，書いたものを見直す活動を設定し，書きにくかったところ，もっと詳しくしたいところなどを意識させ，実際に国際協力活動を行っている団体の方から話を聞く活動を行い，不十分だった情報を収集するとともに，国際理解・協力に対する正しい認識を育てていくようにする。そして，アジアに対する正しい認識と国際協力に対する考え方などの面から文書内容の検討を行い，依頼文書の構成や順序，表現技法などについて話し合いながら，各自で依頼文書を作るようにする。

「情報発信」段階・・・作成した文書を印刷したり，回覧板などの文書の場合には，地域の方にお願いしたりして依頼の方法を具体化して，実際にＰＲ活動を行い，後日古切手の回収を行い，活動の達成感を感じ取れるようにする。

(3) 目　標

① 使用済みカードや切手を集める活動に向けて，必要な情報を収集し，趣旨や収集の目的，収集方法など必要な事柄を分かりやすく説明した依頼文書を作ることができる。

② 文書を作る過程で，自分たちの活動の意味を振り返り，アジアの国や人々の生活について理解を深めるとともに，国際協力に対する見方や考え方を高めることができる。

(4) 計　画　(10時間＋課外)

段階	学習活動と内容	主な手だて	配時
課題把握	1．使用済みカードや切手の利用価値について興味をもち，より多く集めるための学習の計画を立てる。 ○ 古切手を集める活動について興味と価値を感じ取ること ○ 依頼文書作成活動の見通しと学習計画の立案 ※ より多くの古切手を集めるためには，ＰＲ活動が必要なことをとらえさせるようにする。	○ 学校のカード回収活動についての想起 ○ 使用済み切手やカードの活用事例の資料提示 ○ ＰＲ活動の具体的な例と実現できそうな活動を決める話し合い活動	2
	(追究主題の設定) アジアの国に学校を建てる資金や植林活動のための資金を贈るため，使い終わったカードや切手回収に協力をお願いする呼びかけ文書を作ろう。		
情報受信・情報創造	2．必要な情報を収集して試しの依頼文書を作成する。 (1) できるだけ多くの人から協力してもらうための文書の形式や内容を話し合い，試しの作成をする。 ○ 目的にあった情報を見つけ出すこと	○ 国際協力活動団体のパンフレット，呼びかけの文書広告などＰＲのための文書の提示	5 ③
	・私たちがどんな目的のために古切手集めをしようとしているのかを明確に伝える。 ・古切手がどうやってお金になっているのか。 ・どのくらい集めることが必要なのか。回収の方法をどうするのか。　など		
	(2) 試しに作った文書を内容の面と書きぶりの面から見直し，ＧＴの話から不十分な情報を補う。 ○ お願いの目的に照らして文書を見直し，修正・補充の観点を明確にすること ○ 話の内容から自分に必要な情報を聞き取ること ※ 国際協力活動団体の方を招聘し，子供たちの必要な情報が提供できるようにする。	○ 使い捨て古切手を活用している団体の資料の提示 ○ アジアの諸国の現状に関わる資料の提示 ○ ボランティア団体の方の具体的な話	②
	3．お願いの文書に必要な情報を選択・整理し，正しく伝えなければならない内容，分かりやすく伝える書き方や表現の仕方などを工夫して文書を作る。 ○ お願いの趣旨が伝わる文章表現を行うこと ○ 目的にあった効果的な表現を見つけ出すこと	○ 作成に必要な資料や写真，図など関連する資料の準備 ○ 文書の書き方や効果的な見出しに関する資料提示	3
情報発信	4．作成した呼びかけ文書を学校で配布したり，地域の中で配布したりしてＰＲを行い，カードや切手を実際に集める。 ○ 国際協力について自分たちのできることを行ってきた活動の価値を感じ取ること ○ 国際協力を意識した実践を行うこと	○ 子供の手で具体的にＰＲできる場所への事前の調査とコンタクト	課外

(5) 指導の実際

① 使用済みカードや切手をより多く集めるための依頼文書を作る計画を立てる段階（1～2／10時間）

ねらい　アジアの国の援助資金に役立てるため，使用済みカードや切手をより多く集めるための具体的な方法を話し合い，学習の見通しをもち，計画を立案することができる。

この学級の子供たちは，社会科の学習を通して，植林活動の支援のために使用済みカードや切手を集めた経験があるため，アジア諸国の困っている人々のためにも役立てられるなら役立てたいという思いは強かった。しかし，使用済みカードや切手を集めるにも学級だけでは限界があるため，できるだけたくさん集めるための良い方法を話し合い，学習活動の方向と計画を具体化していった。

できるだけ多く集めるための具体的方法を話題とした話し合いにおける子供の反応

c1：社会の学習でも作ってきたからポスターや新聞の形にして貼ったらいいと思います。
c2：ポスターや新聞は学校の中ならいいけど，学校だけでは多く集められないから，もっと地域の人に呼びかける方法を考えたらいいと思います。

子供の意見の中からでてきた地域の人に呼びかける具体的な方法
駅でのポスター掲示，回覧板，市政だより，街頭での呼びかけ，ビラ配り，ビデオ作り

c3：駅とかで呼びかけてもほとんど聞いていないからあまり効果がないと思うよ。
c4：ポスターだけではなんのことか分からないと思う。なぜ集めようとしているのか，集め方はどうするのかなど説明を書かないと協力してくれないと思う。だからビラがいい。
c5：ビラを配っても多くの人がすぐに捨てているので効果がないと思う。そればかりか，植林活動にも役立てようとしているのに，紙を無駄にするのはおかしい。
c6：回覧板は，家の近所の人がみんな見るし，紙も無駄にならないから「家に持ってきてください」とかお願いを書いておけば，確実に集まると思う。

話し合いの結果，回覧板と市政だよりが候補として決められ，お願い文書作成が計画された。

考察①

話し合いの中のc1のように，まず，今までの学習経験をもとにして活動を具体化しようとした。しかし，c2は，より多くのカードや切手を集めるという目的から考えて，相手意識と方法の改善の必要性を感じていることが分かる。c3，c4，c5，c6の反応からは，効果の期待がもてるか，きちんと意図が伝えられるかという観点から子供たちが検討を加え，依頼文書作成の活動へと具体化していく姿が見とれる。これは，より多く集めるという目的とＰＲの必要性が結びついたこの単元の活動構成が有効に働いたからだと考察できる。しかし，資料①の活動計画から分かるように，文書の内容と形式については最初に話し合うものの，時間も1時間を考えており，具体的に調べなければ書けないと言う意識はあまりないと考察できる。

子供が立案した活動の計画　（資料①）

①お願い文書の形式をどうするか話し合う。
②話し合ったことをもとに試しに作ってみる。
③試しに作ったものを見直し，修正して清書する。
④地域のお世話の方に回覧板に載せてもらうお願いをし，回してもらう
⑤集めて送る。

② お願い文書の形式を話し合い，試しの文書を作成する段階（3～5／10時間）

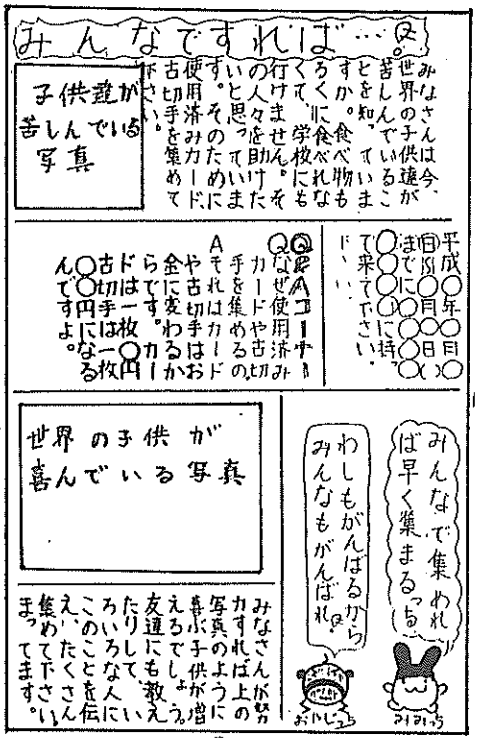
ねらい　立案した計画に従ってお願い文書に書く内容と書き方を話し合い，必要な情報を収集して試しの文書を書くことができる。

まず，個人で文書にどのようなことを書いたらよいか考え，次に班で出し合って深めていった。

書く内容について		書き方について	
呼びかけ・お願いを書く。	４９％	詳しくして分かりやすく	8％
集める理由を書く。	５９％	絵やイラスト，写真を入れて	３２％
集める具体物を書く。	２７％	見出しや題名をつけて	２１％
今の学習のことを書く。	２７％	短い文で分かりやすく	２％
集め方のことを書く。	４６％	ふりがなをうって読みやすく	５％
集めたものの利用方法を書く。	１９％		
集めたものの価値を書く（金額）	２％		
小学校名・氏名を書く。	２２％		

考察②

書く内容については，集める理由，呼びかけやお願い，集め方を書かなくてはならないと考えている子供が半数程度いる。このことから，依頼文書には，お願いの理由と具体的な呼びかけ，集め方が明確に分かる必要があると感じていることが分かる。しかし，その具体的な内容を試しの文書で見てみると（資料②参照）「世界の子供たちが苦しんでいる」「食べ物もろくになくて，学校にもいけません」「その人々を助けたい」など，表現が抽象的で，具体的な理由に欠ける面が考察できる。資料②のN児の試しの文書の自己評価は，おおむねよく書けているという評価だった。　書き方については，分かりやすくしたいという意識はあるが，文章のことばをどのように使うか，構成をどうするか，順序をどうするか，項だてをどうするかなどの細かなところをあまり意識していないことが分かる。【資料②話し合い後に作ったN児の試しの文書】



③　試しの文書を評価してもらい，見直して修正する段階（6～10／10時間）

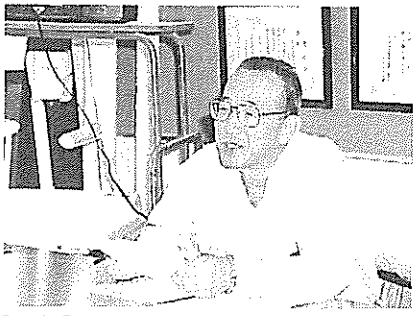
ねらい　国際協力活動に携わっている方々の話から，自分の目的と意図に応じて大切なことがらを聞き取り，依頼文書の表現内容に生かし，修正することができる。
　ミャンマーをはじめとするアジアの国について理解が不十分なことに気づき，正しく国情や援助協力の必要性を理解した上で，国際協力の意義を考えようとする態度を育てる。

自分たちで調べたことをもとに使用済みカードと古切手回収の依頼文書を作成し，よく書けていると思う点や情報不足で不十分な点があることを感じ始めている子供たちに，集める理由や活動の目的を書いた部分について，国際協力活動を実際に進めているゲストティーチャー（以下ＧＴ）九州ミャンマー友好協会の松尾貴久さんから評価をしてもらう場を設定した。

N児の試しの文書に対する評価とＧＴから聞きたいと考えている事柄
・集める理由や目的については大体書けているし，全体的にお願いしたことは伝わると思う。 ・松尾さんからは，どういうことでミャンマーの人が苦しんでいるのか聞いて，もう少し詳しく書きたい。

資料③↑　　資料④↓

九州ミャンマー友好協会の松尾貴久さんの話（要約）
皆さんの書いた文章を読ませてもらいました。とてもいい勉強ですね。皆さんの文章に薬がない，食べ物がない，だから助けてあげたい，と書いてありました。確かにミャンマーは世界の中でも貧しい国です。でも人々が苦しんでばかりかというとちょっと違うと思います。人々は明るく笑顔を絶やさず，とても心が豊かな国民です。今確かに日本は豊かです。でも，戦争が終わったとき日本は食べ物がなく困りました。その時ミャンマーも，戦争に勝った世界の国々も私たちを助けてくれたのです。今は，私たちがその時の恩返しとして助ける番です。お金がない，貧乏だからしてあげるのではなく，ミャンマー人も日本人も同じです。同じ目の高さでものを考えてほしいと思います。上も下もないみんな同じ人間なのです。


【写真①文書を読んだ感想を話す松尾さん】

【写真②話を聞きながらメモを取る子供】

松尾さんの話を聞いて，様々な感想をもった子供たちは，試しの文書の集める理由のところの表現の不十分さを感じ，松尾さんが持ってこられた写真や資料，松尾さんへの質問を通して情報を収集しなおして，文章の表現内容を修正を行った。

【資料⑤　松尾さんの話を聞いた後のN児の反応や感想】

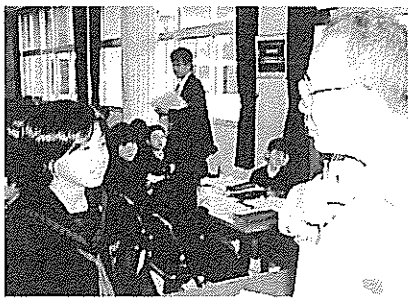
・松尾さんの言う「同じ目の高さで」という意識で，自分の文章は書けていないと思う。
・自分はかわいそうと思っていたからこの文書を読む人は，みんなかわいそうと思うだろう。みんなが勘違いをしないように変えなければいけない。
・自分が思っていた（アジアの）ことと全部違っていた。新しい発見ができた。日本人も助けてもらったのだということを頭に入れて文書を書きたい。文書だけでなく，いつも頭に入れて行動したい。アジアの人のことをかわいそうという目で見るのはもうやめよう。

試しのお願い文書（抜粋）　資料⑥　N児のお願い文書の変容

みなさんは今，世界の子供たちが苦しんでいることを知っていますか。食べ物もろくに食べれなくて，学校にも行けません。その人々を助けたいと思っています。そのために使用済みカード，古切手を集めて下さい。

修正後のお願い文書（抜粋）

私は附属福岡小学校に通っている（N児の名前）です。今，学校の学習でミャンマーという国について勉強しています。みなさんはミャンマーという国を知っていますか。（中略）ミャンマーは野菜も豊富でお米もたくさんあります。子供も100%笑顔が返ってくる明るく元気な子供たちです。しかし，病気でも病院に薬がなく，きれいな水を飲むことはあまりできません。日本の子供たちは，昔戦争の時東南アジアの人々から助けてもらいました。だからその「お返し」を今したいと思います。「お返し」を行うには，私たちだけでは不十分です。ですからみなさんも一緒にやって下さいませんか。簡単なことです。そう，いらなくなった使用済みカードや古切手を集めるだけでいいのです。（後略）



【写真③　松尾さんに質問する子供】

【写真④情報コーナーを活用して書き換える子供】

考察③

N児は自分の文書に対して資料③のようにあまり不十分さを感じていない。情報の補充についても悲惨な状況を書き加えようと考えている。これは，N児のアジアに対する理解が薄く，マイナスイメージがほとんどであるからだと考察できる。しかし，ＧＴの具体的な話はN児にとって大きな衝撃だったと考えられる。資料⑤の反応や感想には，今までのアジアに対する見方があまりに間違いが多く，具体的でなかったことやその状態で文書を書いていたことへの反省が表れている。資料⑥の文章からは目的にあった表現で新たな情報を再構成し，依頼文書の意図が伝わるようになっていると考察できる。このことから，試しの文書について，国際協力活動に携わる人の評価を位置付けたことが子供の文書の表現内容の見直しに有効に働くとともに，正しい国際理解の必要性と，国際協力の意味を問い直すことに有効だったと考える。

同じ目の高さで…

こんにちは。私は附属福岡小学校5年1組の水引　幸子です。今，学校で，ミャンマーなどの国に，使用済みカードや古切手を送ろうというような取り組みを行っています。

ミャンマーという国は，人口が４２３万人で，首都はヤンゴンという場所です。お金は，チャットという単位で表されています。１円が，１チャットから２チャットぐらいで，アメ玉は１コ五チャットです。日本人にとっては，たった5円でも，ミャンマーなどの国の子供たちにとっては，とても高いねだんなのです。そんなミャンマーなどの国の子供に私達，日本人の子供は，見習わなければならないことがあります。それは，心についてです。ミャンマーなどの国の子供たちは，いつでもニコニコしていて，楽しかったら，100%笑顔が，返ってくるそうです。日本では，物もたくさんあるから，なやみが少ないけれど，ミャンマーなどの国では，何もないけれど，なやみなんかもないそうです。野菜も日本にあるものはたいてい全部あります。しかし，たんぱく質が少なくふくまれる，卵や肉や牛乳がありません。水も，日本のようにきれいな水ではないし，お金がないので，病気でも薬が買えません。

でも，その人々を「かわいそうだ」というのは，まちがっています。それは，昔の日本の子供達は，戦争が終わったときに日本の子供達は，苦しんでいました。そんな時に，東南アジアの人々が，栄養のあるものを下さった，助けている事なのです。お金がある，ないは関係なく，同じ人間で，同じ目の高さでいるということを心がけて，協力していただきたいと思います。

よろしくお願いします。

日時…３月15日から４月７日までに水引の事まで，持ってきて下さい。４月７日には，取りに行きます。

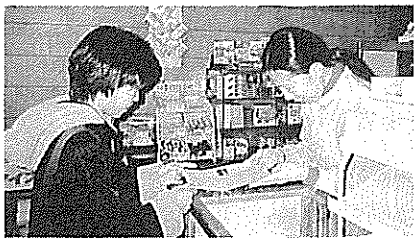
テレホンカード…なるべくたくさん集めて下さい。めずらしい絵が書いてある程，ねだんは高くなります。

切手…はんこがおしてあれはそれが入るぐらいで切って下さい。あまりにも大きくなる場合は，入っていなくてもいいです。

×近所の方にも，集めてもらって，なるべくたくさん集めて下さい。切手は，年賀はがきなどの切手もいいです。

ご協力，よろしくお願いします。

【資料⑦　N児が実際に配ったお願い文書】



【写真⑤　地域にお願い文書を渡す子供】

４．全体考察

カードや切手を集めるお願い文書作りという間接的な国際協力活動だったが，この活動構成が，目的に応じて事実や根拠を伝えながら物事を依頼する文書を子供自ら見直し，書き上げていく学習につながっていた。その過程で国際理解の曖昧さへの反省，国際協力の際にもつべき思いやりの心を深めることができた。課題としては，相手に応じた依頼文の表現の仕方が引き出せなかったことである。

参考・引用文献　「教育の流れを変える総合的学習」児島邦宏著（ぎょうせい），「国語科教育の方法」田近洵一著（国土社）

共生社会を創る子供が育つ社会科学習

社会科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために社会科に求められていること

急激に変化し続ける現代社会。そこには，国家間の紛争の多発，高齢者や障害者の軽視，地球規模の自然破壊など，解決すべき問題が山積している。この原因は，人間が利潤追求に価値を置くがあまり，他の人間や自然，文化などとかかわり合って生きていることを忘れ，自己中心的な生き方を求めすぎた結果と考える。したがって，これからの社会科においては，次のような視点を重視した学習を行う必要がある。①自分が他の人間や自然，文化などとかかわり合って生きていることに気付き，それらと共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにすること，②社会的事象と自分とのかかわりにおける課題をとらえ，事象の意味や働き，特色などを進んで考える力を育てること。

○　共生社会を創る子供が育つ社会科学習とは

自分が人間や自然，文化と相互にかかわりをもちながら生活を営んでいることに気付き，社会生活に適応し，地域社会や国家の発展に貢献する主体的な活動を展開することである。

共生社会とは，自分と他の人間や自然，文化など相互のかかわりを大切にする生き方が求められる社会の総称である。具体的には，高齢者や障害者と相互に協調し合う福祉社会，健全な生態系や自然の循環を維持・回復する循環型社会や多元的な価値観を尊重し合う多文化社会，あるいは地域と地域が相互にかかわり合う地方分権型社会などが挙げられる。

共生社会を創るとは，自分が他の人間や自然，文化などとの相互にかかわりをもちながら生活を営んでいることに気付き，社会生活に適応し，地域社会や国家の発展に貢献する主体的な活動を行うことである。この活動の中心となる力が，①地域社会や我が国における社会生活をよりよくしようという意志（向上心）を中核とし，自分を取り巻く人間や自然，文化などと共に生きようとする調和的な心情，②自分が，地域の地理的環境や組織的な諸活動，さらには我が国の産業や国土などと様々なかかわりをもちながら生活を営んでいることをとらえる力，である。

○　共生社会を創る子供とは

○　社会における人間の社会的営みから追究課題をつかみ，解決の見通しをもつ子供
○　人間の社会的営みを支える願いに共感したり，願いを推し量ったりすることができる子供
○　自分と人間や自然，文化との関係におけるよさを見出したり，問題点の解決を考えたりする際に，必要な情報を選択・収集・活用することができる子供
○　社会的事象に対するかかわり方を見直したり，学習で得た見方・考え方・感じ方・行い方を生活に生かしたりする子供

上記の姿は一人一人が地域社会，国家，国際社会の一員として，すなわち公民として，地球規模の問題の解決に向かう人間の姿であり，社会科の究極の目標である公民的資質の基礎を培うことと軸を同じくするものである。さらに，本校がねらう豊かな人間像を社会科で具現化した姿である。

共生社会を創る子供を育てる社会科学習の具体的な展開としては，地域学習を主題とした中学年では，地域社会の創造をめざす人間の営みや願いに着目し，その共通性や独自性の理解をもとに郷土への愛着や誇りの高まりを重視した構想を設ける。また，国土・産業学習を主題とした第５学年や歴史，政治・国際学習を主題とした第６学年では，人間の社会的な営みへの共感的な理解をもとに，当事者の意識をもって社会問題の解決を図る判断力の育成を重視した学習を構想する。これらの展開により，人間や自然，文化との相互のかかわりを実感をもってとらえる子供が育つと考える。

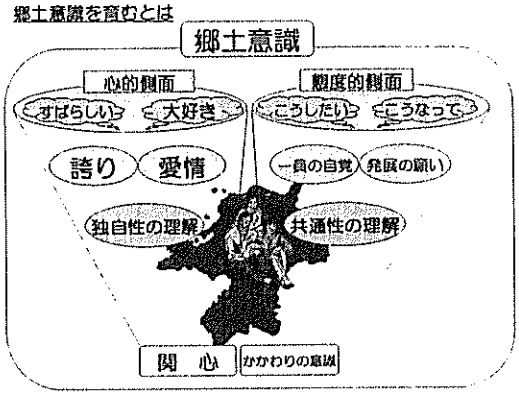
郷土意識を育む比較活動の展開

社会科部　　高　野　誠　一

1．　主題の意味

(1) 郷土意識を育むとは

郷土意識を育むとは，地域の人物や事象に対しての愛情を深め，誇りをもち，地域が自分の基盤であることが内面化される心的側面と地域の発展を願い積極的なかかわりを求める一員としての自覚という態度的な側面の両面が高められていくことである。具体的には，①地域のもの・ひとに込められた人々の願いや地域固有のよさを自分とのかかわりでとらえ，自分の生活舞台である地域に対して，「住んでいて良かった，大好きだ」という愛情や「自分のまちはここがいい。」というよさを受容して誇りをもつこと。②「こうなってほしい。自分はこうしたい」という発展への願いに支えられた一員としての自覚を高めることであると考える。このような郷土意識は，①地域事象への関心，自分とのかかわりの意識化②地域事象の独自性の理解③地域事象の共通性の理解④地域への誇り⑤一員としての自覚という過程で高まっていく。以上のような郷土意識を育むためには，自分と地域とのかかわりを心情的に揺さぶられるような強い感動をもって意識し，地域の独自性や人間・社会としての共通性をとらえるような活動が展開される必要がある。この郷土意識を育むことは，地域のよさを実感し，地域の一員として貢献できる「地域と共生できる子供」の育成につながり共生社会を創る子供を育てる上でも意義深い。



(2) 郷土意識を育む比較活動の展開とは

郷土意識を育む比較活動の展開とは，地域の事象の独自性を明らかにしたり，人々の願いや社会の仕組みの共通性を明らかにするために，時期や立場，対象，場所の異なる物を比べていく活動を①比較する事象をうみだす②視点をもって事象を比べる③地域の未来像を話し合うという一連の活動として学習過程に位置づけることである。比較活動には，２つの様相がある。１つ目は，独自性の理解である。具体的には，「この地域にしかない。」「この工場にしかない。」といった地域や事象がもつ地理的，歴史的，社会的な条件を利用，克服する人々の営みをとらえることである。２つ目は，比較する事象や人間同士に言える共通性を見いだすことである。具体的には，「どの地域にも」「この工場も」「いつの時代も」といった社会の仕組みやよりよい生活への願いを明らかにすることである。以上の比較活動によって明らかになる独自性の理解は，地域固有のよさを自覚し，郷土への誇りをもつ心的な側面を育むことにつながり，共通性の理解は，社会的事象の特色や意味を明らかにし社会の一員として生きていこうとする態度的側面につながるものと考える。

(3) 本研究で期待する子供の姿

- ○　地域の事象に対して自分とのかかわりから関心をもっている子供(郷土への関心)
- ○　地域の事象の固有のよさについて理解している子供(独自性の理解)
- ○　地域の人々の共通する願いに共感したり仕組みをとらえたりしている子供(共通性の理解)
- ○　地域の固有のよさや願いを感じ取り，それらを大切に思う子供(誇り)
- ○　地域の一員として地域の発展への願いをもち，進んでかかわろうとする子供(一員としての自覚)

2．　郷土意識を育む比較活動の具体的構想

(1) 郷土意識を育む教材選定

【地域の独自性がとらえやすいもの】

○　社会の仕組みや働き，人々の願いといったものが，その地域の自然条件や社会条件，歴史条件などから形成されたものであること。

【願い・仕組みや機能としての共通性がとらえやすいもの】

○　人々の願いが受け継がれたり守り育てられたりして，現在もなお営みが続けられているものであること。また，社会の仕組みや機能として普遍的な一致が見られるもの。

(2) 比較する事象を取り出す観点

比較する事象は，単元や段階のねらいに応じて，次のような観点から取り出す。

事象を取り出す観点	取り出した事象を比べることによって明らかになる郷土意識
時　期	今と昔，あるいは，何かのきっかけがある前後などの時間軸での比較で，歴史的な条件による違いや今も昔も変わらない地域の人々の願いをとらえることができる。
対　象	工場と工場，店と店などの対象となる事象の比較で，工場同士の地理条件や社会条件などの違いや共通する社会における意味や仕組みなどをとらえることができる。
立　場	為政者と民衆，消費者と商店などの立場の異なるものの比較で，社会における分割された役割や両者に共通する願いが明らかになる。
場　所	地域と地域の比較で，地域独自の条件に応じた仕組みや働きやどの地域にも共通するまちや生活の発展といった人間としての願いに気づくことができる。

(3) 比較活動を位置づけた活動構成の在り方

学習過程を「つかむ」「さぐる」「つくる」の３段階で構成し，それぞれに比較活動を位置づける。

【比較活動を位置づけた学習活動】

段階	つ　か　む	さ　ぐ　る	つ　く　る
活動と内容	1．学習対象となる社会的事象と出会い，学習問題をつかむ。 うみだす比較活動 (1) 対象に関する自分の生活経験や学習経験を想起する。 ○　対象と自分の生活とのかかわりの把握 ○　比較の観点をもつ事象との出合い (2) 他や自分の考えとの違いから問題を設定する。 ○　問題の設定と追究の計画づくり ○　比較対象の設定 ・時期　・対象 ・立場　・場所 ○　比較の視点の設定	2．事象について追究し，社会的事象の特色や意味をとらえる。 とりだす比較活動 (1) 自分が調べる対象を設定し，見学や聞き取りを通して調べる。 ○　具体的な観察や情報収集 ○　観点別，視点の見通し (2) 調べてきたことをもとに交流し，社会的事象の特色や意味について考える。 ○　交流による独自性，共通性の把握 ・違いの取り出し ・違いの理由 （地理的，歴史的，社会的条件からの人々の営み） ・共通点の取り出し （特色，意味，仕組み） ・共通する理由 （人々の願い） ○　比較する観点の変更 ・対象，時期，立場，場所	3．地域の未来の姿について自分の考えをつくり，社会的な営みを続けている人物や地域の人々と話し合う。 えがきだす比較活動 (1) 未来の地域への関心をもつ。 ○　地域の課題の把握 (2) 地域の未来の姿について自分のイメージをつくる。（立場の把握） ○　地域への自分の願いの表出 (3)　人物や地域の人と話し合う。（立場の比較） ○　立場による独自性と共通性の把握 ・　違いの取り出し （地域での役割の自覚） ・　共通性の取り出し （地域への愛情と発展への願いの共有）
郷土意識	郷土への関心	固有のよさ　願いの共通性　誇り	地域の一員としての自覚

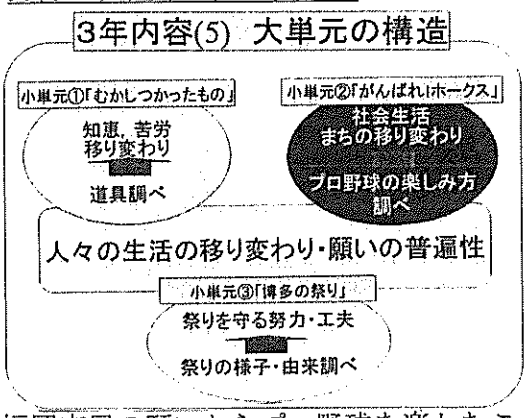
3．指導の実際と考察

(1) 小単元名　第３学年　がんばれ！　ホークス～プロ野球から見る福岡市の移り変わり～

(2) 本小単元の考え方

本小単元のねらいは，福岡でのプロ野球の移り変わりを通して見ることができる交通や施設の様子，食べ物などについて調べ，福岡市に住む人々の生活が交通，施設の変化や戦争などの大きな事象を契機として，およそ 50 年の間に大きく変わってきていることを理解できるようにすることである。本小単元では，次の４点の具体的内容を設定する。①プロ野球という子供たちにとって関心の高い事象から福岡市の人々の生活とのつながりに着目し学習問題を設定する。②福岡でのプロ野球の変遷の時期をきっかけに福岡市や人々のくらしの移り変わりを調べる。③自分の願いや福岡市民の願いからプロ野球を楽しむことや福岡の発展といった今も昔も変わらない願いをとらえる。④プロ野球に対する思いをホークスに伝え，地域の人々に役立つという実感を味わう。

大単元における本小単元の位置づけ



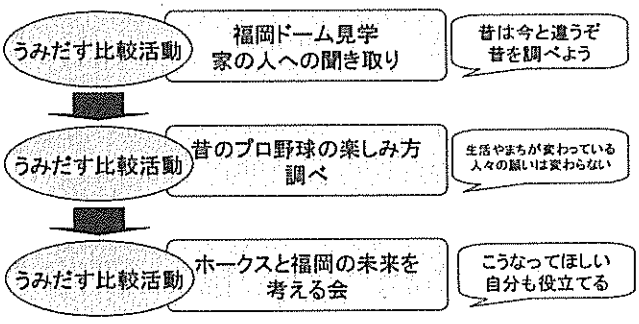
以上のような内容を設定することで，次のような郷土意識が育まれると考える。

○　プロ野球の変化の時期に見られる福岡の人々の生活の様子，福岡にしかないプロ野球の存在という独自性からの地域固有のよさへの愛情や誇り
○　時代が変わっても地元球団を応援し，プロ野球による，まちの活性化と楽しみの享受を願う共通性からの福岡のまちの発展を願う地域の一員として地域に役立つことの自覚。

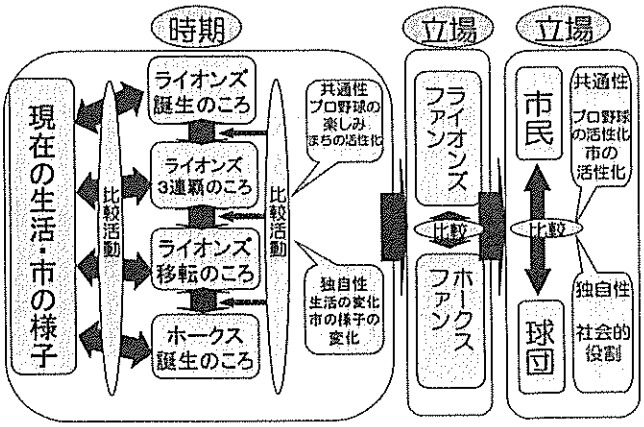
このような郷土意識を育むために，比較活動を次のように位置づける。

「つかむ」段階では，①ライオンズ誕生②ライオンズ３連覇③ライオンズ移転④ホークス誕生の比較する時期を設定。「さぐる」段階では，比べる視点「交通」「まちの様子」「応援」「球場での行動」で時期ごとの比較。「つくる」段階では，ホークスと福岡の未来を市民と球団の立場での比較を位置づける。

本小単元における比較活動



本小単元の比較の観点



(3) 目　標

① 福岡市の人々の生活は，交通条件の変化，戦争などの大きな出来事，公共施設等の建設などによって大きく変わってきていることをとらえる。

② 福岡に本拠を置いたプロ野球をきっかけとしながら，福岡市の移り変わりを調べ，福岡に日本に１２しかない球団のうちの１つがあることに誇りをもち，その活躍とともに福岡に球団があることで，まちの産業や市民の気持ちの活性化を図りたいという願いを共有し，福岡に住む一人としての福岡に対する愛着を深めることができる。

(4) 計画(１３時間)

段階	学習活動と内容	主な手だて	配時
つかむ	1　自分と福岡のプロ野球とのかかわりに気づき，福岡の移り変わりを追究する学習問題を設定する。 (1) 福岡ドームでの野球観戦や観客の様子を話し合う。 ○　福岡ドームへの観客数の多さや交通機関との関係 (2) 福岡ドームに見学に行く。 ○　施設設備や新しい町並みの観察 (3) 福岡ドームより前の楽しみ方と比べる。 ○　追究し比較する時期，視点の設定 ・ライオンズ誕生の頃 ・３連覇の頃 ・ライオンズ移転の頃 ・ホークス誕生の頃 時期 ・球場への交通 ・球場のまわりの様子 ・応援の様子 ・球場での行動 視点 福岡市民のプロ野球の楽しみ方はどのようにかわってきたのだろう。	○　自分のプロ野球とのかかわりの体験を想起できるようにする。 ○　福岡ドームで，福岡ドームの人への聞き取りや見学で，福岡ドームに訪れる人の様子やまわりのまちの様子を観察できる ○　家の人が子供の頃の様子を聞き取る。 **うみだす比較活動** **(関心)(時期)** ・家の人と自分の比較 (追究の視点) ・違いの類型化 **とりだす比較活動** ○　時期に応じて，詳しい方をゲストとして，招聘 ・　戦争体験者 ・　当時のライオンズファン ・　ホークスのファン ・　ホークスの球団関係者 ・　一般市民 ○　昔から現在までの比較 独自性の理解(時期) ・現在と昔，契機と変化 ○　ライオンズのファンとホークスのファンの比較 共通性の理解(立場) ・プロ野球を楽しむ願い ○　ホークス応援作戦 **えがきだす比較活動** **(立場)** ・市民と球団のホークスへの思い (福岡への願い) ・球団を通した福岡への思い	4 ① ② ① 6 ② ① ① ① ① 3 ② ① ① ① ①

(5) 指導の実際

① つかむ段階(1～4時/13) うみだす比較活動

福岡のプロ野球に関心を持ちプロ野球を通した福岡市や人々の生活の移り変わりを追究する学習問題を設定し，比較していく時期や視点をうみだす。

まず福岡ドームでのプロ野球観戦の様子を想起させた。子供たちは，一生懸命応援した様子や家の人も試合の経過に一喜一憂していたことなどを発表しプロ野球を家族みんなで楽しんでいる様子に気づいた。そして，福岡ドームに観戦に来る人数と福岡市の人口を比較して提示した。子供たちは，人数の多さに驚き，観客がどこから来ているのか疑問をもっていった。(資料1)そこで，子供たちは，交通方法や来る目的を調べるため，福岡ドームに見学に行った。(写真1)子供たちは，大きさを再認識したり球場内の施設に目を向けてたくさんの人が集まる魅力を施設的な面やプロ野球の人気といった面から気づいていった。交通方法についても球場外の施設から気づくことができた。(資料2)さらに福岡ドームができた年について知った子供たちに，ホークス誕生の年と福岡ドームができた年を書き込んだ年表を提示した。子供たちは，「福岡ドームの前はどこで野球をしたのか。」「平和台球場があったらしいよ。」と福岡ドームができる前のプロ野球の様子や楽しんでいる様子に関心をもち始めた。そこで，家の人に，福岡ドームの前のプロ野球の様子や人々の楽しみの様子について聞き取り現在の子供たちのプロ野球の楽しみ方と比べた。その違いを時期に関するものと野球の楽しみ方に関するものとに分けて類型させていった。(表1)子供たちは，球場に行くための方法(交通)など現在との違いに気づき驚きをもつとともに，昔のプロ野球に関心をもち，今と昔を4つの時期について交通などの視点で比べようと考えた。(資料3)

考察①

福岡のプロ野球の様子に関心をもたせるとともに，時期という観点からの比較対象を設定し，比べていく視点をもたせることができた。このことから，①プロ野球観戦という経験想起や福岡ドーム見学という体験的活動を位置づけたことで自分と地域の事象とのかかわりを意識化できたこと②年表を提示したことで時期に目を向けさせたこと③家の人のむかしのプロ野球の楽しみ方を比べて現在と昔の様子を比較しようという方向性をもたせ，違いを類型したことが比較する視点をもたせることにつながったことが有効であったと考える。

1年間に福岡ドームに来るお客さんの数が福岡市に住んでいる人よりも80万人も多いなんてびっくりしました。ホークスは人気があるんだな。みんなぼくたちと同じようにホークスを応援したり野球を楽しんだりしに行くのかな。でも，こんなにたくさんの人だから，きっと福岡市以外の人もたくさんドームに野球を見に来ているにちがいないと思います。

資料1 観客数を調べたS児

写真1 福岡ドーム見学

福岡ドームに見学に行きました。人がいないドームの中は，とても広くて大きいという感じがしました。フィールドにたたみをしくと，8000まいもしけるそうです。トラック何台分もの重さがある屋根が動くことにもおどろきました。球場には，ぼくたちがよく利用するハンバーガーやフライドチキンの店があったり野球を見るときに便利なものもありました。球場全体がゆめのまちのようでした。外に出ると，大きなバスのロータリーがあって車や地下鉄だけじゃなくてバスでもたくさんの人が来ることが分かりました。この新しいドームがいつできたか聞いてみると，今から6年前だということが分かりました。その前は，ここは海だったそうです。ドームの前は，プロ野球はあったのかな。

資料2 福岡ドームを見学して

N=40

視点	比べた違い	人数
交通	市内電車で通った。	32
施設	平和台球場で行われた。	30
応援	メガホンはなかった。	12
行動	うどんや弁当を食べた	11

時期	時期に関すること	人数
50年前	ライオンズがあった。	34
40年前	日本一にもなったことがある	21
15年前	プロ野球がなかった頃もある	14
10年前	ホークスがやってきた。	38

表1 福岡ドームの前と比べて

家の人に福岡ドームの前のプロ野球のことを聞いてみると，球場もちがうし，食べている物もちがうし，なんと言っても日本一になったことなどびっくりした。今と日本一のころやライオンズができた頃などの昔の様子を比べてみたいです。

資料3 家の人と比べて(S児)

② さぐる段階(5 ～ 10 時/13) とりだす比較活動

福岡のプロ野球の様子について，現在とむかし，むかしとむかしとを交通方法や施設，応援の様子，球場での行動の視点で比べ，人々の生活やまちの様子の変化(独自性)と時期が変わっても変わらない地元球団の活躍を応援し楽しみたいという気持ち産業を活気づけたいという願い(共通性)をとりだす。

まず，時期として設定された①ライオンズができた頃②ライオンズ３連覇の頃③ライオンズがなくなった頃④ホークスが誕生した頃の時期について交通，施設，応援，球場での行動の４つの視点で今と比べて追究していった。子供たちは，福岡市総合図書館で古い新聞や図書，ライオンズファンの原昭夫さん，ホークスを誘致した加地邦雄さん，福岡市営地下鉄の方などへの聞き取り，昔と今の地図比べを通して，時期ごとのプロ野球の様子からくらしやまちの様子の変化について調べていった。(資料４)それぞれの時期と今との違いを話し合わせて明らかにした後，時期による変化を見つけることができるように，横軸に視点，縦軸に時期をとったノートにまとめさせた。(資料５)すると交通の変化などによって人々の生活や市の様子が変わってきていることをとらえた〈独自性〉(資料６)

そこで，「平和台球場物語」の VTR(TNC 制作)を提示した。始めは野球から離れ，楽しみの多様化のみを感じていた子供たちもプラカードをもってライオンズを戻す運動の姿に気づき，このころの人々も野球を楽しみにしていた願いをとらえていった。しかし，ホークスが来ると，ライオンズファンは喜ばなかったのではないかと考えた。そこで，原さんや加地さんを招いて話し合う立場の比較活動を位置づけた。(資料７)そのなかで，チームの違いはあるけれど，どちらも福岡に球団があることに対して誇りを感じていることをとらえた。〈共通性〉(資料８)

考察②

人々の生活やまちの様子の変化という独自性とプロ野球を楽しむ願いや福岡にチームがあることへの誇りという共通性をとらえた。このことから，①プロ野球チームの移り変わりの時期(昔)と今を比べたことで交通の方法や施設などに見られるくらしや生活の変化を順に追わせることにつながり交通機関やまちの様子の変化と人々のくらしを関係づけてとらえさせることにつながったこと②ライオンズファンとホークスファンという立場の比較によって両者に共通するプロ野球やまちへの願いを感じ取らせることができたことが言える。

ライオンズがたんじょうする前には戦争がありました。福岡に大きな空しゅうがあって家やお店が焼けたり食べ物が少なくてこまったり今では考えられないくらい大変だったと思います。そこへライオンズが来て，みんなが楽しめるようになったと思いました。日本一の頃の様子を原さんに聞くと，今みたいに球場にたくさんのメニューがなかったり平和台球場の周りも今とちがって，家が建ち並んでいたことや市内電車が多く，車が少なかったことにびっくりしました。でも，日本一が三年も続いたなんてうらやましいです。そのあと，みんながプロ野球からはなれていったことも分かりました。天神地下街や福岡市動植物園など他の楽しみができたこともかんけいあると思います。ホークスが来てからは，ももちにも図書館やドームなどの施設ができくらしが楽しくなったと思います。

資料４ 今と比べたノート(S児)

時代順に比べてみよう

いつごろ (プロ野球の様子)	球場への行き方(交通)	まちのようす	おうえん	球場での
①ライオンズ誕生	歩いたり自転車で行く。(自分の力)	国体の日寺平和台球場ができる。	始めての[illegible]野球[illegible]だのしみ#!	なの人[illegible]さん[illegible]ラジオ[illegible]
②ライオンズ3連覇(日本一)	5両電車で行く。	球場へのおけ[illegible]なは木。	行をうしな[illegible]人までで[illegible]	おべんと物って木[illegible]

資料５ 時期を比べたノート(S児)

交通の様子でライオンズが来た頃とライオンズ３連覇のころを比べると，電車の本数が増えて，ライオンズがなくなる頃には地下鉄の工事や都市高速道路などができて早く球場まで行けそうです。まちの様子でも，平和台球場の回りやももちなどしせつやビルが増えています。会社やお店やみんなのしせつが増えてにぎやかになったし，買い物も便利になったと思います。

資料６ 時期を比べて(S児)

ホークスが来たことをライオンズファンは

【喜んだ】

C1 ホークスが来ることはうれしかったと思います。プロ野球を楽しみにしていた人はやっとチームができたから。

C3 野球ができたからももちのとこなど施設ができてにぎやかに。

【喜んでいない】

C2 プラカードを持ってライオンズが帰ってくることを待っていたから意味がない。

C4 違うチームがあってもしょうがないと思います。

C5 所沢にホークスを持っていけばよかった。

ホークス後援会 加地邦雄さんの話

実は，私もはじめはライオンズを戻すための運動をしていました。でも，全国に１２しかないチームが１つでも福岡に。

ライオンズファン 原 昭夫さんの話

確かになくなったときは片腕をもがれる思いでした。でも，福岡にチームがあることでみんなで応援できるのです。

資料７ 立場での話し合い

③　つくる段階(11 ～ 13 時/13)えがきだす比較活動

ホークスと福岡の未来について自分なりの考えをつくり，福岡市民の方や異なる立場であるホークス球団の方と交流し合い，それぞれの役割の違いとともにホークスや福岡の発展を願いをえがきだす。

まず，今まで調べてきたホークスについて，ホークスの球団自体の福岡での取り組みについて調べさせた。ホークスが福岡移転１０周年となることや「ホークス１０年計画」について調べた子供たちは，ホークスが福岡になじんでいくために女性無料サービスや各種のイベント，優勝するためのチーム補強の工夫などを考えてきたことに気づいた。そこで，これまで調べた福岡市民のプロ野球(ホークス)に対する地元意識や応援の様子，ホークスに期待することなどを伝えたいということになった。

ぼくは，ライオンズファンの人は，ホークスが来ても喜ばなかったと思っていました。でも，ライオンズファンの人もただライオンズを応援しているのではなくて，福岡にプロ野球チームがあることが大切だということが分かりました。この気持ちは，ライオンズファンの人もホークスファンの人もいっしょでした。福岡市民もきっとそうだと思います。全国でたった 12 の野球チームのうちの１つが福岡にある。宝物だと思います。プロ野球があると，福岡のみんなで気持ちを１つにして応援できて楽しめていいんだと思いました。

資料８　立場での比較を終えて(S児)

写真２　ホークスと福岡の未来を語る会

そこでまず，ホークスに対して，市民はどんな思いをもっているのか，ホークスがあることの福岡市にとっての意味などについて表したり，福岡の移り変わりをプロ野球と結んで紙芝居にまとめたり，プロ野球と福岡市をもっと元気にするアイデアを考えたりしていった。(資料９)子供たちは，自分の役割を考えたり他の人々と同じ願いをもっていることに気づき，ホークスや福岡の未来や自分自身の未来の福岡に対する期待感，福岡の一員としての所属感をもっていった。(資料１０)

考察③

自分や他の人々の地域における役割の違い(独自性)や発展を考える願い(共通性)をとらえることができた。このことは，資料１０から言える。これは，自分が考える地域の未来像を考え地域での役割が異なる人との交流をしたことが，これまでのプロ野球の意味と生活や市の移り変わりの学習を生かして，プロ野球を通じて福岡の発展への願いをもつことができたことによる。

今まで福岡のプロ野球のことを調べてきて，福岡のみんなが福岡にあるプロ野球を応援している気持ちやプロ野球があることで，交通を盛んに利用したりももちなどの新しいまちをつくるのに役立っていったことが分かりました。ホークスがもっと活躍すると，みんなの応援や福岡のまちが元気になっていくと思います。そのためにも，ぼくは，ホークスを応援したいし，福岡がよくなることを考えたいです。例えば，地下鉄には，アビスパのマークがはってあります。西鉄バスにはホークス号があります。まちにたくさんホークスの目印をつけて，福岡のみんなで応援してにぎやかなまちにしたいです。

資料９　ホークスや市民の方へ(S児)

４．全体考察

資料１０にも見られるように，自分の地域に住んでいてよかったという愛情やまちの活性化という発展への願い，ホークスを応援して福岡市民のくらしを盛り上げるアイデアを考えたことが地域の一員としての自覚を生んだ。このような成果が生まれたのは，プロ野球という市民の関心の高い事象を教材化したことで，地域の人々や子供自身の心的なつながりを生み出すことにつながったこと。また，時期や立場での比較活動が時代によっても人によっても変わらない願いに帰着することができたからであると考える。今後，自分の役割を実感できるような実践化を視野に郷土への貢献を考えたい。

福岡市の人やホークス球団の佐々木さんと話して，それぞれ仕事は違うしアイデアも違うけど，ホークスが好きだし強くなって欲しいとか，福岡をホークスで盛り上げようとすることは似ていると思いました。ぼくは，これからも野球を楽しみたいし，福岡のみんなと応援したいと思いました。今日，ぼくは，今までより，福岡のみんなと一緒だなと思ったし福岡にいてよかったと思いました。

資料１０　未来を語る会で(S児)

社会の形成者としてかかわりを深める国土・産業学習の構想

社会科部　猿　樂　隆　司

1．主題の意味

(1) 社会の形成者としてかかわりを深めるとは

社会の形成者とは，社会的営みを行う人間の願いをもとに当事者意識をもって望ましい社会の在り方を考え，実践する生活者のことである。かかわりを深めるとは，社会的事象の意味を自分との生活とのかかわりでとらえ（事実認識），事象にひそむ問題点の原因や解決の仕方を追究し（関係認識），望ましい社会のあり方を多面的に考え（価値判断），社会に働きかけることである。

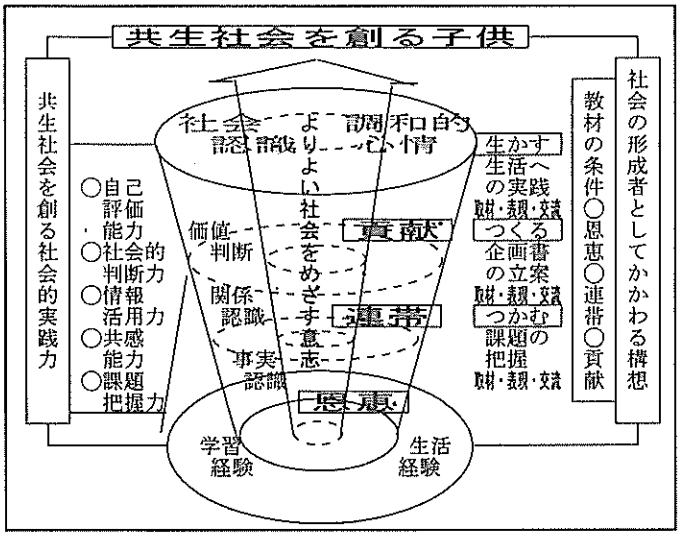
この当事者意識を伴う課題解決には，社会をよりよくしようという目的をもつた意志が必要と考える。この意志は，自分の生活は人間の営みによって支えられていることを実感し（恩恵感），そのつながりを阻害する問題点をとらえたときに生まれる。そして，人間の願いに基づいて問題点の解決に協力する大切さを実感し（連帯感），解決策に対する応答を得たり，社会的事象のよさを広めたりする喜びを感じ取る（貢献感）という調和的な心情を伴いながら，高まると考える。

(2) 社会の形成者としてかかわりを深める国土・産業学習の構想とは

社会的事象の意味を自分の生活とのかかわりでとらえた子供たちが，社会的営みを行う人間の願いをもとに，当事者意識をもって国土・産業における問題点の解決の方途を考え，その方途を地域に働きかけることができる地域教材の開発と活動の構成を行うことである。

これらの構想の中心的な活動が，国土・産業と国民生活のかかわりにおける問題点の把握とそれについての当事者の願いを聞き，当事者の立場に寄り添いながらつかんだ課題をもとに，当事者の立場に立ったと仮定して解決を図るための企画書を「つくる」活動である。これは，事象と自分とのかかわりを見直す過程でもある。この活動の価値は，当事者意識をもった課題追究を行うことで，社会的営みを行う人間への共感能力を高めることや 調和的心情を伴った社会認識を高めることである。

【主題の構想】



(3) 本研究で期待する子供の姿

学習過程での子供像を次のように考える。

① 社会を構成する人間の社会的営みを共感的にとらえるとともに，事象における問題点や人物の願いから追究課題をつかむことができる子供　（恩恵感）

② 社会的営みを行う人間の願いから，協力する大切さを感じ，人間や自然，文化と共に生きる望ましい社会の保護や創造のあり方の考えを多面的につくることができる子供　（連帯感）

③ 共に生きる社会の実現に向けた判断をもとに，自らも社会的行為を行ったり，自分の考えを生活に生かしたりして学習の喜びを味わう子供　（貢献感）

これらの姿を支えるのが，共生社会を創るための社会的実践力である。この力は，我が国の国土・産業への興味・関心，国土・産業と国民生活との関係における問題から生じた課題把握力，望ましい国土・産業の在り方を考えるための情報活用力やかかわりをつくるための社会的判断力，国土・産業とのかかわりを見直すための自己評価力によって構成される。特に重要なのが当事者の立場に立つための，人間の営みに共感したり，願いを感じ取ったりして自分のできることを考える共感能力である。

2．学習の具体的構想

(1) 国土・産業学習における教材の開発

第５学年における国土・産業学習の学習対象の選定の条件を以下のように設定する。

○　事象におけるもの・ひと・ことが子供にとって空間的，精神的に身近でありながら，その機能や働きに対するとらえが一面的なものであること
○　社会的機能や働きを生み出す人間の願いや工夫や努力に対して共感的にとらえやすいこと
○　地域の事象にひそむ問題点と我が国のかかえる問題点に重なりが見られ，当事者から子供に対して解決の求めがあること
○　問題点に対する解決の内容や方法に対して提言する場や当事者からの応答の場があること

(2) 社会の形成者としてかかわりを深める学習過程の工夫

当事者意識をもつて課題解決を行うことができる活動を構成する。そのために，学習過程を「つかむ」「つくる」「生かす」の３段階で構成する。①「つかむ」段階とは，国土・産業を保護・創造したりする人間の社会的営みへの共感をもとに，国土・産業がかかえる問題点の把握と人間の解決への求めから追究課題をつかむことをねらう段階である。②「つくる」段階とは，国土・産業の保護・創造に努める人間や組織体に寄り添いながら，課題解決を目指して自分の考えをつくることをねらう段階である。③「生かす」段階とは，つくった考えをもとに地域への働きかけを行ったり，事象に対するかかわり方を見直したりして，学習で得た考えを生活に生かすことをねらう段階である。

そして，それぞれの段階に「取材」「表現」「交流」「再表現」の一連の活動を位置づける。取材活動とは，考えをつくるための情報を観察・調査によって収集する活動である。表現活動とは，考えの根拠を絵図によって表す活動である。交流活動とは，考えを比較・検討する活動である。再表現活動とは，考えを強化したり，事象と自分とのかかわり方を見直したりする活動である。

(3) 考えの根拠を書き表す企画書の工夫

「つくる」段階以降に表現活動としての企画書づくりを次のように構成する。

＜内容条件＞	＜方法条件＞
○　事実と事実の関係が表されていること	○　要素を工夫した言葉や符号で記すこと
○　追究の立場や対象が表されていること	○　根拠となる事実や資料を具備すること
○　必要性,実現性,有効性の分析があること	○　事象と自分の関係の見直しを記すこと

【基本的な指導の仕組み】

段階	つかむ段階		つくる段階	生かす段階
	事実認識（恩恵感）		関係認識（連帯感）	価値判断（貢献感）
活動と内容	１．事象と自分の生活との関係について調べる。 (1) 事象の仕組みや働きについての観察・調査の視点を話し合う。 ○ 地域の事象への関心・意欲 (2) 事象を観察・調査する。 ○ 事象の仕組みの疑問点の解決 (3) 事象のよさや問題点から追究課題をつくる。 ○ 営みへの共感と問題点の把握		２．事象を構成する人物の立場に立った問題解決をする。 (1) 問題の原因を調べる。 ○ 状況の把握と連帯感の感受 (2) 企画書へ考えを書き，必要性実現性，有効性から話し合う。 ○ 当事者の努力や消費者の吟味 (3) 企画書の見直しをする。 ○ 先進事例による多面的な吟味 ※ 必要に応じて(1)~(3)を繰り返す。	３．地域の発展を願う望ましい解決策を話し合う。 (1) 地域の人物を招いて望ましい解決策を話し合う。 ○ 社会への貢献感の感受 (2) 自分にできる生活改善案を考え，実践する。 ○ 地域に働きかける実践意欲の感じ取り
場の構成	取　材	○ 仕組みの観察・調査	○ 先進事例や消費者の意識調査	○ 決定のための聞き取り
	表　現	○ 仕組みのよさの表現	○ 企画書への根拠の表現	○ 最終企画書への記入
	交　流	○ 事実相互の関係づけ	○ 企画書に対する比較・検討	○ ポスターセッションによる体系化
	再表現	○ 事象と生活との関係の振り返りや人物の願いの意識化	○ 問題点の解決に向かう考えの見直しや生活と事象の関係についての振り返り	○ 学習成果の振り返りと生活への生かし方の見直しと今後の行い方の決定

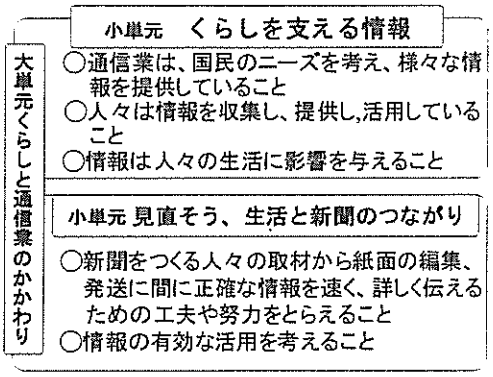
３．指導の実際と考察

(1) 小単元名　　第５学年　見直そう，生活と新聞のつながり　～編集局　溝越さんとの出会いから～

(2) 本小単元の考え方

①　本小単元の位置づけについて

本小単元のねらいは，編集企画に携わる溝越さんの営みを調べ，新聞産業の売上高の伸び悩みの問題から，我が国の新聞産業のあり方を当事者意識をもって多面的に考え，社会に貢献する喜びを味わうことである。



【本小単元と大単元の関係】

そこで，本小単元では，Ｎ新聞社を学習対象として取り上げる。Ｎ新聞社を取り扱う価値としては，①日常生活とかかわりが深いこと，②読者が求める読みやすさを支える新聞社の取材・編集・印刷・配送の仕組みや紙面構成や最新の技術，幅広いネットワークなどの工夫をとらえることができること，③売上数の伸び悩みという全国的な問題点から，情報を伝達する新聞から読者参加型の新聞への転換を図る努力を行っており，当事者の立場で読者のニーズに応じた編集の企画書の作成が容易なことである。また，本小単元における学習内容は以下のとおりである。

①　Ｎ新聞社の購読率が高い背景を，取材・編集・印刷・配送という仕組みと読みやすさを生み出す最新の技術や幅広い情報網などの工夫とを関係付けるとともに福岡を発展させるために価値ある情報を詳しく，正確に提供したいという記者の願いを共感的にとらえること　（恩恵感）
②　全国的に販売部数が伸び悩んでいるという問題に対して編集企画委員会の溝越さんらと協力して，地域の情報量が豊富で読者も参加できる新聞を読みたいという読者のニーズや他の新聞のよさをもとに，望ましい解決策を考える必要を感じ取ること　（連帯感）
③　溝越さんらとともにこれからの編集や記事のあり方を考え，新聞のもつ機能や役割を広めたり，自分にとっての新聞の新たな活用の仕方を見直したりする喜びを味わうこと　（貢献感）

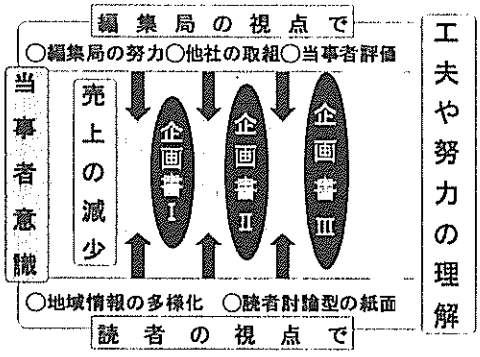
こうした内容を身に付ける過程において，編集企画に携わる溝越さんの営みへの観察・調査をもとにした課題把握力，溝越さんの営みに対する共感能力，課題解決に向けた情報活用能力，望ましい通信業のあり方を考えるための社会的判断力などの力を育てることができると考える。

本学級の子供たちは，前小単元「くらしを支える情報」において，必要とする情報の種類と伝達手段の関係や新聞のもつ機能のよさを他のメディアとの比較から情報の取り出しやすさ，保存しやすさ，情報の詳しさなどととらえている（右上図参照）。

②　「企画書」づくりについて

本小単元の指導に当たっては，Ｎ新聞社を追究の窓口として，新聞のこれからのあり方を企画書づくりを通して，考えさせるものである。「つくる」段階では，読者調査や他社の紙面構成を取り入れた企画書Ⅰ，Ⅱ，Ⅲを作成する。

そして，それぞれに編集企画会議を行う。また，「生かす」段階では記者の方を招聘し，企画書の評価をして頂く（右図参照）。



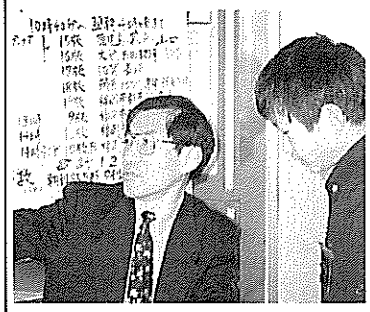
【企画書の内容が高まる過程】

(3) 目　標

①　読者のニーズに対応するために新聞社では取材，編集，印刷，発送と仕組みを整えながらコンピュータ化や情報網の多様化などの工夫や努力を行っていることをとらえることができる。

②　新聞に対する関心をもち，これからの新聞産業のあり方を考えるとともに，新聞を通じた情報の収集や活用，伝達の仕方を生活に生かそうとする態度を培うことができる。

(4) 計　画（１５時間）

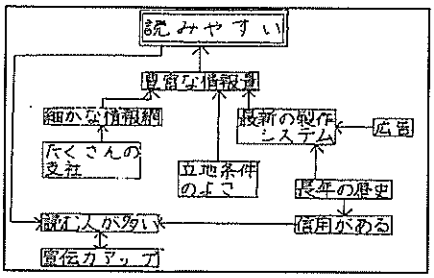
段階	学習活動と内容	主な手だて	配時
つかむ	1．新聞と自分との生活とのかかわりを調べ，追究課題について話し合う。 (1) 新聞と自分の生活との関係について話し合う。 ○　新聞の種類，新聞を取る目的，新聞の役割についての把握と新聞に対する関心の高まり (2) Ｎ新聞の九州や全国の購読率のグラフを見て，購買率の高さを予想し，観察・調査する。 ○　新聞製作の仕組みによる購読率の高さの関係付け (3) 購読率の高さと全国の新聞売上高の伸び悩みの問題から追究課題について話し合う。 ○　購読率の高さの関係付けとそれを支える溝越さんの地域情報の促進という願いの感受と問題意識 追究課題 新聞の問題点の原因や編集局の対策を調べ，これからの新聞のあり方を考えよう。	※　家庭で購読する新聞の種類や目的の交流 ※　全国の購読率(シェア)の提示と見学活動 ※　購読率の高さを関係づける図の促し ※　売上高のグラフ提示	5 ① ② ② 6
つくる	2．新聞業界の抱える問題点の原因を調べ，これからの新聞づくりのあり方を話し合う。 (1) 問題点の原因を予想し，新聞社の対策や読者の意識を調べ，企画書Ⅰを書き表す。 ○　問題の原因を若者層や単身者の活字離れ，情報の質の画一化や多メディア化にあることの予想と新聞社の努力や読者の意識の把握と対策の構造化 (2) 企画書Ⅰをもとに第１回編集企画会議を行う。 ○　新聞社の対策と地域情報の多様化と読者参加型の紙面構成の面という読者の要望からの企画書の吟味 (3) 全国紙や地方紙の記事や紙面構成における工夫を調査し，よさを取り入れた総合的な企画書Ⅱを書き表す。 ○　メディア面における地域情報の読者への提供と読者からの情報の双方向性に基づく紙面構成の吟味 (4) 企画書Ⅱをもとに第２回編集企画会議を行う。 ○　地域の環境・福祉問題等に関する討論による市民ネットワーク化と双方向による情報交流への焦点化	※　新聞社の努力や読者の新聞に対する意識調査の位置づけ ※　企画書Ⅰの提示と記入方法の説明の位置づけ  ※　全国紙や地方紙による情報収集活動の位置づけ ※　他社の独自性を取り入れた編集会議Ⅱの設定	② ① ② ① 4
生かす	3．これからの新聞のあり方やかかわり方を話し合う。 (1) 溝越さんらを招いた第３回編集企画会議を行う。 ○　他のメディアとの共存をめざす試案への肯定的な評価による貢献感の感じ取り (2) 新聞と自分の生活の関係を振り返り，これからの情報の生かし方を書き表す。 ○　新聞の役割を生活に生かすことの自覚 (3) 新聞のよさを広める発表会を行う。 ○　啓発や自分の高まりによる貢献感の感受	※　溝越さんら記者の招聘 ※　新聞と生活との関係を見直す場の設定 ※　ポスターセッションによる表現と地域への啓発の場の位置づけ	② ① ①

(5) 指導の実際

① つかむ段階（１～５時間）

この段階は，新聞の生活への役割をとらえ，新聞産業の問題点から追究課題をつかむことをねらう。

子供たちは提示された新聞から，新聞を取る理由を話し合った。そして，新聞にはテレビ番組，天気予報，など様々な情報があること，環境や福祉などの社会問題の情報は社会のあり方を考える契機になることをとらえた。また，新聞の種類の問いかけから，九州においてＮ新聞の購読率が高いことに疑問をもち，調査を開始した。Ｎ児は，購読率の高さを見出しの工夫などの読みやすさにあると予想した。そこで，購読理由を尋ねたり，全国の新聞の内容や構成を比べたりした。さらに，新聞社に出かけ，編集企画委員会の溝越さんと出会い，購読率の高さの理由やそれを支える取材・編集などの新聞製作の仕組み，記者の仕事を調べた。また，製作センターでは，機械化による印刷・配送の仕組みを明らかにした。Ｎ児は見学後，購読率の高さを関係図に表し（資料１），話し合いや溝越さんからの評価の場を求めた。そこで，購読率が高い理由を関係図をもとに話し合ったり，読みやすさを生み出す工夫を溝越さんに尋ねたりした（資料２）。



資料１ 交流後のＮ児の関係図

C1：福岡の豊富な情報量と読みやすさはどうつながるのですか。
C2：福岡の新鮮な情報が多く載っているから、多くの人に読まれるのです。
C3：情報網と最新のシステムの関係はどうですか。
C4：支局からの記事と印刷をつなぐのは光ファイバーだからです。
溝越さん：みなさんの考えはよくつながっています。読みやすさを支えるのは情報量、その情報量には、情報網が必要です。福岡をよくするために多くの情報を提供したり、博物館の誘致活動を行ったりしてます。
Ｔ：溝越さんの話の感想は。
C5：私たち読者のために紙面構成だけでなく、九州をよりよくしようと企画される溝越さんの気持ちを大事にして新聞を読みたいと思います。

資料２ 溝越さんを交えた交流

Ｎ児らは価値ある地域の情報を正確に提供し，福岡をよりよくしたいという溝越さん願いを共感的にとらえた（資料２ C5）。しかし，ここで悩みも耳にした。それは，全国的な売上高の伸び悩みの問題である。提示されたグラフや溝越さんからの解決への求めから，原因は何か，対策は何か，共に解決策を考えたいなど溝越さんの願いに基づく発言を出し合った。そして「これからの新聞づくりのあり方を考えよう」という追究課題をつかんだ（資料３）。

人々が新聞をどう思っているのかを聞いて、この問題の原因を調べたいです。また、溝越さんたちがどんな対策を立てているのか知りたいです。また、他の新聞の工夫を取り入れてはどうかと思います。そして、溝越さんと話し合いたいです。新聞のよさも呼びかけたいです。

資料３ 課題をつかむＮ児のノート

考察①

資料１から，読みやすさを支えるＮ新聞社の購読率の高さの理由を，取材をもとにした事実から関係づけていることがわかる。また，資料２のＣ５では，気持ちを大切にしたいと新聞と生活のつながりを感じ取っている。これは，記者の営みに恩恵を感じている姿と考える。さらに，資料３の記者さんがどんな対策を立てているのか知りたいという発言から，Ｎ児が溝越さんに寄り添いながら追究課題をとらえたことが窺える。これは新聞編集に携わる記者とともに問題を解決したいという当事者の立場に立った連帯感の芽生えと考える。このようなＮ児らの姿が見られたのは，読みやすさを生み出す仕組みを支える溝越さんの営みを通して共感的にとらえさせ，全国の新聞の売上げの伸び悩みという問題を示す資料を提示し，記者の切実な願いを聞く場を設定したことが有効に働いたと考える。

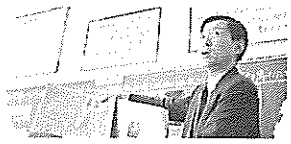
② つくる段階Ⅰ「編集局の対策などを調べ，第１回編集企画会議を行う活動」（６～８時間）

この段階は溝越さんの願いをもとに，これからの新聞のあり方に対する考えをつくることをねらう。

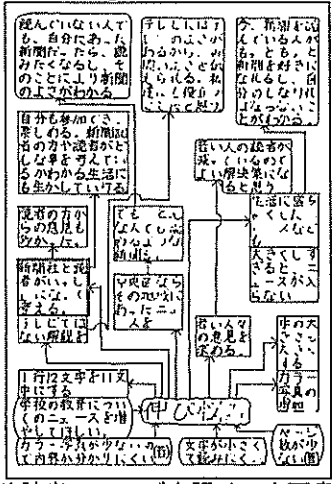
子供は読者へ新聞の意識調査を行い，問題点の原因を文字情報の多さや画一的な紙面による文字離れにあると考えた。そこで，教師は，問題の対策を考える企画書づくりを促し，作成の基準として，その企画がなぜ必要か（必要性），本当に実現するのか（実現性），その企画の良さは何か（有効性）の観点をそれぞれ与えた。子供は，問題点を克服する編集企画委員会の溝越さんらの努力を取材し，読者の意識調査や新聞製作の工夫を根拠とし，対策を企画書Ⅰに表し会議Ⅰに臨んだ（資料４）。

＜取材活動Ⅰ＞

C1:溝越さんたちは，どんな対策を立てていますか。
溝越さん:私たちが今後考えている対策は次の点です。
① カラーページの増加
② 版の細分化
③ ニュースの詳しい解説
④ 地方版の増加
⑤ 読者参加型の紙面構成
⑥ ワイド紙面の充実
⑦ 文字の拡大



＜表現活動Ⅰ＞



＜交流活動Ⅰ＞

司会:なぜその企画が必要か，本当に実現できるか，どんなよさが期待できるか，をもとに話し合って下さい。
C1:カラー化がよいと思います。なぜ必要かということは，読者は見やすさを求めているからです。
C2:新聞のよさはニュースの解説ではないですか。
C3:カラー化の費用の面ではどうですか。
C4:カラー化は現在最大12面まで可能です。読者参加の紙面構成では本当に実現するのですか。
C5:アンケートによると，読者も紙面に参加したいという結果が出ています。(中略)
C6:インターネットやファックスなどはがき以外の方法で情報を提供すればいいという調査結果もあります。これで自分も新聞に加わることができます
C7:地域の情報も増やしてほしいという結果もあります。これは現在の支局の数から見ても対応が可能です。(中略)
司会:今出た意見の中から，企画をしぼります。(中略)

資料４　新聞社の対策や読者のニーズを調べ，企画書Ⅰに表し，第１回編集企画会議を行う活動

考察②

N児は，企画書Ⅰに「中央区ならではのニュース」と読者のニーズの調査結果から地域に関する情報の多様化を掲げ，実現性の面から現在の支局の数で対応できることを表している。そして，交流Ⅰで読者のニーズと結びつけながら発言した（C7)。また，全体でも企画を読者のニーズと結びつけた発言(C1,C5)やカラー化の推進を実際の新聞社の印刷技術から見て実現可能なことを示す発言(C4)が見られた。これらの姿は問題点の解決をめざす記者の努力や読者の意識調査に基づく企画書の作成と交流活動の位置づけが有効に働いたと考える。

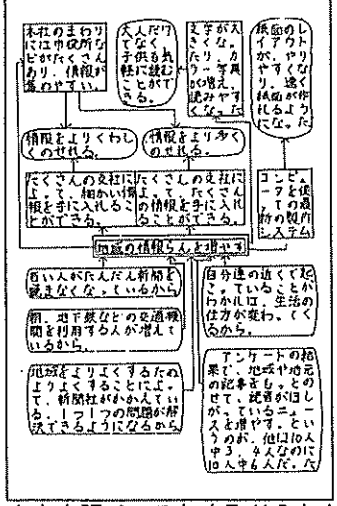
② つくる段階Ⅱ「全国紙などのよさを調べ，第２回編集企画会議を行う活動」（８～11時間）

子供は，新聞社の仕組みを実現性の基準として，地域の情報の多様化をめざす紙面構成や読者参加の紙面構成に焦点化した。そこで，さらに内容を具体化するために，北海道から沖縄までの計１３社の新聞を取り寄せ，各社のよさを取り入れた総合的な企画書Ⅱを作成し，会議Ⅱに臨んだ（資料５)。

＜取材活動Ⅱ＞

C1:全国紙と地方紙を比べると圧倒的に地方紙の方が地方記事の量が多い。また，地方では一面に地方に関するトップ記事を載せることが多い。
C2:T新聞では，細かく地域ごとに区切って地方記事を載せている。
C3:A 新聞には読者同士で討論するコーナーが載っている。

＜表現活動Ⅱ＞



＜交流活動Ⅱ＞

司会:どちらの対策を伸ばすべきか発表して下さい。
C1:読者参加型の中に，子供新聞ニュース質問コーナーがあればいいと思います。
C2:読者が求めているのは，もっと地域の情報を載せてほしいということだから月曜日だけでも福岡市の区別に情報を変えるとか，鉄道沿線の情報を詳しく載せるという方法があると思います。
C3:しかし，今の新聞の問題では，情報が受け身になっているということもあります。だから，地域の情報をこちらの読者の方から出して読者の討論の場を出していけばよいと思います。(中略)
C4:地域の情報は版の増設によって可能です。
C5:版を増やすと印刷時間が増えませんか。討論はどうやって同時に討論するのですか。(中略)
C6:地域の情報欄に地域の問題になっているテーマを取り上げて，ホームページなどで情報を集め，読者も新聞に参加すると地域にもっとかかわれるというよさが生まれてくると思います。(中略)

資料５　全国紙や地方紙のよさを調べ，それを取り入れた企画図Ⅱに表し，第２回編集企画会議を行う活動

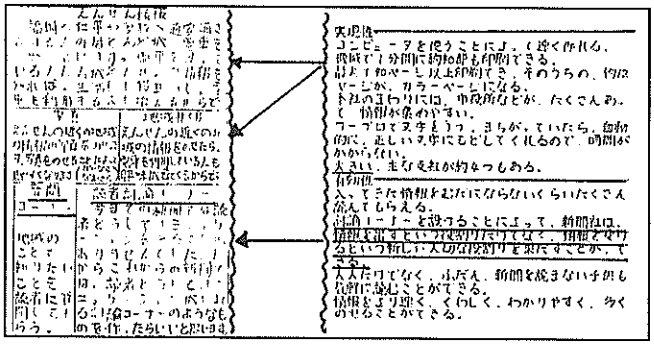
考察③

N児は，企画図Ⅱに取材Ⅱで得たT新聞の「細かい情報」に区分けされた紙面構成を取り入れ，実現性の面から印刷の版の増加によってこの企画が可能なことを表している。さらに，交流Ⅱで地域地域の情報を載せる紙面構成の在り方を例示したC3 の発言に付け加える形で，読者が従来の情報を享受する型の新聞から情報を提供する型の新聞への展開と伝達手段の多様化を述べた（C6)。これは，読者のニーズに応じた紙面づくりをめざす新聞記者という立場に立った追究の姿であると考える。このようにN児が他社のよさや友達の考えを取り入れながら企画を高めた背景には，他社の紙面構成のよさを取り入れた総合的な新聞づくりをめざす企画書づくりの活動が有効に働いたためと考える。

④　生かす段階（１２～１５時間）

この段階では，新聞のかかえる問題の解決に対する企画書を溝越さんから価値づけて頂いたり，新聞のよさや新聞の情報の生活への生かし方を広めたりして，貢献する喜びを味わうことをねらう。

子供は地域情報の充実を目指した紙面構成を考え，鉄道沿線を中心にした情報の多様化，子供向けのニュース解説，読者討論コーナーを記した企画書Ⅲを作成し（資料６），再度溝越さんに評価を求めた。そこで，溝越さんらをお招きし，紙面改革の時期に検討事項に入れるという応答を得た。そして，数日後。資料７のように実際に質問コーナーなどが取り入れられたことを知り，貢献感を得た。



資料６　溝越さんら記者の方に提示した企画書

資料７　実際に掲載された新聞の一部

考察④

資料６の紙面構成には，地方版に沿線や区別の情報を盛り込むことや地域の問題をテーマにした討論コーナーがある。そして，実現性の面から取材・編集における支局の数や印刷の版の増加，現行の販売店で可能と判断している。また，企画の右の説明では，有効性として読者による情報の相互交流の価値を述べている。これは，編集局の立場で問題点の解決の努力を根拠としたＮ児の価値判断の姿と考える。資料８では新聞のもつ情報を今後の生活に生かす大切さに気付いている。こうしたＮ児らに見られる姿は，読者のニーズや編集局の努力を根拠とした企画書Ⅲを記者から評価して頂いたことが有効に働いたと考える。

新聞のたくさんの情報によって、安心して生活できるということがわかりました。新聞社の人たちは情報を集め、公平な立場で記事を書いています。しかし、情報を集め、紙面を考えることは私が考えていた以上に大変な仕事でした。こんな気持ちになったのは、新聞のかかえる問題点の解決を企画書で考えることがきっかけでした。溝越さんたちの何か役に立ちたいと思って企画書づくりを始めたけど、一つの紙面を考えるだけでも、むずかしさを感じました。そして、自分の受け持った仕事をやり通す新聞記者さんの仕事に「すごいな。そんなふうになりたいな。」と思いました。溝越さんたち記者さんに企画書を見せ、それが実際に取り入れられたとと知ったときは、何だか自分たちも社会の役に立った気がして本当にうれしかったです。溝越さんたちと出会ってから今までほとんど読んでいなかった新聞を読むようになりました。そして、よりいっそう生活に役立つ情報を増やしていきたいです。

資料８　新聞の情報を生かすＮ児の感想

４．全体考察

成果として，子供が当事者意識をもって新聞社のかかえる問題の解決に向かう姿が見られた。資料３での課題意識の表出，資料４，５，６での主体的な交流に見られる姿は，まさに社会の形成者として新聞という通信業にかかわりを深めている姿と考える。さらに，資料１に見られる事実相互の把握，資料４，５に見られる新聞社の努力を根拠とした企画書における関係的な判断，そして，資料６の企画における価値付けは，社会認識を高めている姿である。この認識は，資料２に見られる新聞情報に対する恩恵や資料３に見られる溝越さんとの連帯，そして，資料８に見られる貢献という調和的心情の感受も伴ったことがわかる。こうした姿を生み出したのは，わが国の産業の問題に目がいく地域素材を教材化し，新聞の情報の意味を自分の生活の関係で共感的にとらえさせ，問題状況を提示することで，当事者の立場に立った問題解決を行う必要感を感じ取らせたこと，さらに，企画書づくりを中心とした取材・表現・交流・再表現の活動構成を行ったことが有効に働いたと考える。課題としては，つかむ段階での事象と自分とのかかわりをさらに深めさせる手だての工夫である。

心豊かな生活者が育つ生活科学習

生活科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために生活科に求められていること

現代社会においては，少子化，核家族化，情報化，地域社会の喪失などの状況が子供たちを取り巻いている。さらには，自然体験や勤労体験，人とふれ合う体験など様々な体験不足が指摘されている。子供たちの元来在るべき「生活」そのものが失われつつある今こそ，自分の生活を切り拓き，やる気をもってたくましく生きていく生活者としての子供の育成が求められていると言える。しかし，人間はひとりでは生きられるものではない。生きることは生かされることだと言うが，自然を含めたあらゆる他者への畏敬，他者と共に生きようとするよりよい感性が，その中核になければならない。ただがむしゃらに生活を切り拓いていくのではなく，身近な環境に心をくばりながら他者とのかかわりにおいて自分自身や自分の生活を見直していくようなやさしさとやる気を兼ね備えた生活者の育成が必要なのである。また，生活科は３年生以降の総合的な学習の礎となる教科として，体験的な活動をより重視しながら問題解決的な学びの力を育んでいくとともに，環境，国際理解・協力，福祉といった現代社会の課題を視野に入れた活動内容を考慮していくことで，より豊かな生活科学習を実現していくことができると考える。

○　心豊かな生活者が育つとは

心豊かとは，「やさしい感性」と「やる気」に満ち溢れた心の状態のことである。

豊かな心	やさしい感性	自然を含めた全ての他者への畏敬。他者と共に生きようとする心
	やる気	環境との出会いにおけるよさの感じ取りをもとにした内発性の発動

生活者とは，思いの実現に向け，試行錯誤しながら課題解決していく力を備えた子供のことである。

ここでは，学校や地域の特長や子供の実態を十分に踏まえ，子供の生活現実における切実な課題を取り上げ，生活に始まり生活にかえるという子供たちにとって必然性のある学習を展開していく。

心豊かな生活者が育つとは，子供たちが自分の生活において環境(身近な人々，社会及び自然)に適応するのではなく，自他の思いを尊重し合い，環境に心をくばりながら，自ら環境をつくりかえるという主体的な活動を展開する生活者としての個を確立することである。具体的には，子供たち自身が自らの生活を見つめ，それをつくりかえていく段階を次のように考える。

①　環境を感じる段階	生活の楽しさや素晴らしさを感じ取り，自分の思いをもつ段階
②　環境について考え働きかける段階	他者の思いも尊重しながら，思いの実現に向けて考え試す段階
③　環境をつくりかえる段階	新しい生活をつくり出す段階。

このような段階を経て自ら生活をつくり出すことにより，子供たちは生きる力を伸ばし，豊かな人間育成の基盤となる経験を積み重ねていくことができる。またその経験を通して，３年生以降の「あらつ学習」（総合的な学習の時間）における学びの素地を培うことができる。

○　心豊かな生活者としての子供とは

心豊かな生活者としての子供像を次のように考える。

○　諸感覚を通して対象に敏感に反応し，自分の感じ取りをもとに働きかけの意欲をもつ子供
○　新たな気付きや問いをもち，自他の思いを尊重しながら思いの実現に向け追究していく子供
○　対象に働きかけ，達成感・成就感を他者と共有し，よりよい生活を創り出していく子供

心豊かな生活者としての子供を育成するためには，①受容的，共感的に環境を受け入れようとする心や態度（受容性，共感性），②環境とのかかわりにおける自分の思いの実現に向け，粘り強く探り続ける態度（探求性），③お互いに心を合わせて行動する心や態度（協同性）を高める必要がある。

人とふれ合う喜びを味わう学習の展開

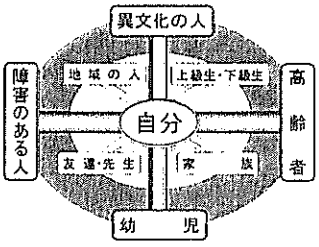
生活科部　石田耕一

１．主題の意味

(1) 人とふれ合う喜びを味わうとは

今日，高齢化社会の到来は必至であり，障害のある人たちとの共存やいろいろな国々の人たちとの交流・共生も日常化しつつある。また，豊かな人間の育成の面からは，あらゆる他者への畏敬や他者と共に生きるという感性が重要となる。新学習指導要領生活科編においても，身近な幼児や高齢者，障害のある児童生徒など多様な人々とふれ合いが重視されている。そこで，本研究における人とはこれまでの生活科で取り上げられてきた人（家族，友達，上級生・下級生，先生，地域の人）に加え，幼児，高齢者，障害のある人，異文化の人にまで範囲を広げて考えている。人とふれ合う喜びを味わうとは，出会った人と一緒に活動する中で，自他のよさを互いに感じ合う快の感情をもつことである。具体的には，飼育・栽培などの生産的体験や勤労体験，遊び，製作などを通して，他者への親しみや理解を深め，他者との隔たりを埋めていくことである。

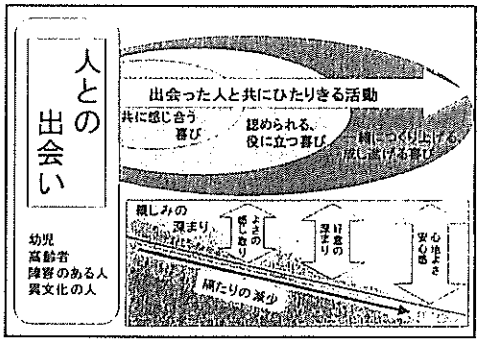
【人の範囲の広がり】



幼稚園児とふれ合う喜び→ 幼さへの共感や相手の役に立つ喜び。できる自分を感じる喜び	高齢者とふれ合う喜び → 高齢者のやさしさや知恵にふれ，そのよさを受け入れていく喜び
障害のある人とふれ合う喜び→障害をのあるなしにかかわらず，よさを受け入れていく喜び	異文化の人とふれ合う喜び → 文化の違いを越えてよさを感じ合い，分かり合う喜び

人とふれ合う喜びを味わう過程については，「共に感じ合うことができた。」「相手に認められた。相手の役に立つことができた。」「ひとつのものをつくり上げたり，成し遂げたりすることができた。」といった段階を踏まえ，出会った人と共にひたりきる活動で通すものとする。この過程において相手との隔たりは減少していき，人とふれ合う喜びが深まり，他者とのかかわりのなかで生きていく力も培うことができるのである。具体的には，人とふれ合う喜びを味わう学習の展開を次のように考える。

【人とふれ合う喜びを味わう過程】



(2) 人とふれ合う喜びを味わう学習の展開とは

人とふれ合う喜びを味わう学習の展開とは，「①様々な人々との感動的な出会いをもとに他者とのかかわりに意欲をもち，②他者とのかかわりにおける思いや願いの実現に向けて，課題追究していく活動や，③他者との学びを生活に生かしたり，他者と共に新しい生活をつくり出したりする活動を位置づけることによって，自他のよさを認め合い，人とのかかわりの中で生きていく力を高めていく。」というサイクルを２年間を通して繰り返し経験していくことで，人への自立人を介した社会事象や自然事象に対する自立の基礎を養うことである。

このような学習は，①人とふれ合うという視点からの体験的活動の充実を図ることができる，②共に楽しむ活動づくりにおける問題解決的な学びを豊かに経験することができる，③取り上げる人の範囲の広がりにより，結果として現代社会の課題についてふれることができるという価値がある。

(3) 本研究で期待する子供の姿

○　人への親しみや理解を深め，共感の心をもって人と共に生きていこうとする子供
- 出会った人のよさを素直な心で受け止め，人とのかかわりに意欲をもつ子供　(受容性，共感性)
- 人とのかかわりにおける思いや願いの実現に向けて，課題追究していく子供　(探求性)
- 人との学びを生活に生かしたり，人と共に新しい生活をつくり出す子供　(協同性)

２．学習の具体的構想

(1) 教材化について

① 共に楽しむ活動づくりに視点をあてた教材化の工夫

人とのふれ合いにおいて自他のよさを互いに感じ合う快の感情を共有するために，共に楽しむ活動づくりの視点から教材化を行っていく。活動内容としては，年齢や性別，生活習慣，文化など様々な違いを越えて人と人とが共に楽しむことがきる遊びや飼育・栽培，製作などであるが，具体的には，次のように考える。

【ふじ組の友達と共に楽しむ活動づくり】	【幼児と共に楽しむ活動づくり】
○ 偶然性や活動性の高い遊び ○ 協同飼育や協同栽培活動	○ 集団遊びや可変性に富む手作りおもちゃ遊び ○ 協同製作や協同栽培
【高齢者と共に楽しむ活動づくり】	【異文化の人と共に楽しむ活動づくり】
○ 高齢者がもつ知恵や技を内容とした活動 ○ 高齢者が子供時代に親しんだ伝承遊び	○ 異文化の遊びや日本の伝承遊び ○ 異文化の伝統行事，料理など

② 共に楽しむ活動づくりからの人的環境の価値吟味

○ 活動づくりの楽しさや素晴らしさなど，子供の感情を揺さぶる内面的価値を備えていること
○ 継続的なかかわりができ，受容的・応答的なふれ合いができること。
○ 人とのかかわりが生活に結び付いたり，さらにかかわりを広げたりすることができること。

(2) 人とふれ合う喜びを豊かにしていく出会う対象の配列

〈１年〉［友達(障害のある友達)，先生］→（上級生）→［高齢者］→（家族）→［幼稚園児］
〈２年〉　→　（下級生）→（地域の人々）→［異文化の人］

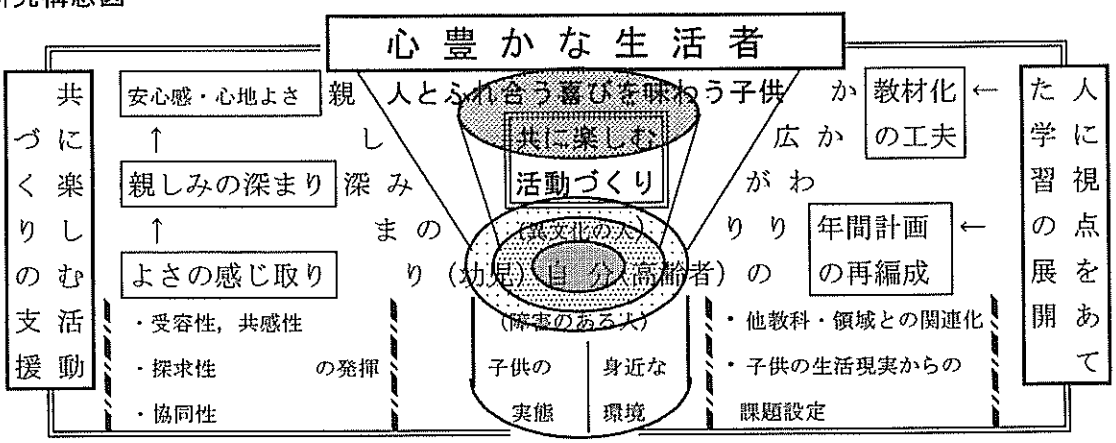
子供にとって精神的・物理的に身近な人（隔たりの少ない人）からより隔たりの大きい人へという流れを基盤にし，自分とのかかわりの視点を大切にしながら，２年間の配列を行っていく。

(3) ふれ合う人の知恵や技に応じた共に楽しむ活動づくりの単元構想

出会った人たちの知恵や技に応じた活動を楽しみ，もっと親しくなりたいという思いをもってふれ合いコース決定し，コース別活動を工夫したり協同活動の積み上げを行ったりしていく。

「であう」段階	「ひたる」段階	「いかす」段階
１．身近な人との感動的な出会い 【よさの感じ取り】 → ◇ 出会った人の知恵や技への共感をもとに，ふれ合いコースを決定する場の設定。	２．出会った人との継続的なかかわり 【親しみの深まり】 → ◇ ふれ合い活動における活動コース別学習の設定。	３．生活に結び付ける活動の促しや励まし　【安心感，心地良さ】 → ◇ 人とのかかわりを振り返る活動や協同製作，協同表現の設定。

３．研究構想図



3．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第１学年　あらつのかがやくおじいちゃん・おばあちゃん

(2) 本単元の考え方

本単元は，出会ったお年寄りが得意とする活動づくりを通して，地域のお年寄りとふれ合う喜びを味わうことをねらいとしている。ここでの主な学習内容は，①お年寄りが得意とする活動づくりを通して，お年寄りのやさしさや知恵の素晴らしさを感じ取ったり，感謝の気持ちをもったりすること，②「お年寄りと一緒に楽しく遊ぼう。ちびっ子名人になろう。」という思いをもって，お年寄りが得意とする活動を一緒に試したり作り変えたりすること，③力を合わせて「ちびっ子名人発表会」を開くことである。このような学習は，高齢者のよさを肌で感じ取り，一緒に活動づくりを繰り返していく中で，高齢者と共に生きようとする心や態度を育てる上から価値がある。

本学級の子供たちは，学校探検や「仲良しおもちゃ図書館を開こう」の学習において，ふじ組や学級の友達，上級生に進んでかかわり，楽しくふれ合う姿が多く見られた。高齢者のふれ合いについては，核家族化が進み日常的なかかわりは少ないと言えるが，「おじいちゃんは，いろんなことが得意で教えてくれるんだよ。」などの言葉からは，祖父母に対する親しみやふれ合いへの期待感が見取れる。そこで，お年寄りの個性に応じた活動づくりを通して，人とふれ合う喜びを十分に味わわせたい。具体的に，お年寄りとふれ合う喜びを味わう活動づくりの構想を次のように考えている。

◇　お年寄りが得意とする活動づくりを通して，お年寄りとふれ合う喜びを味わう単元構想

	であう段階	ひたる段階	いかす段階
共に楽しむ活動づくり	１．出会ったお年寄りが得意とする活動を一緒に行う。 （受容性・共感性の発揮）	２．ふれ合いコースごとに一緒に活動したり，作り変えたりする。 （探求性の発揮）	３．「ちびっ子名人発表会」を開く。 （協同性の発揮）
◇ 出会うお年寄りの条件 ・子供の感情を揺さぶる内面的価値を備えていらっしゃる。 ・荒津地域のお住まいで，継続的なふれ合いが可能である。			山本さん（折り紙名人）中村さん（こま名人） 本田さん（竹とんぼ名人）中原さん（お手玉名人） 柴田さんたち（お花づくり名人）
支援	○ 感動的な出会いの場 ○ ふれ合いコースの決定	○ 活動の工夫の高まりや協同活動の積み上げを実感できる場の設定	○ 身に付けた知恵や技を表現する場の設定
隔たりの減少	出会ったお年寄りへの親しみをもつ。	お年寄りへの理解や親しみを深める。	共に在ることに心地よさを感じる。

以上のような単元構想をもとに，具体的には，活動内容の設定と活動構成の工夫から次のような支援を行う。活動内容については，○お年寄りの知恵や技を大いに発揮できるもの，○製作や遊びの難易度が低く親しみのもちやすいもの，○製作や活動づくりにおける工夫の高まりや協同活動を含んでいるものを条件とし設定する。活動構成については，①お年寄り一人一人とふれ合う→②お年寄り一人一人の知恵や技への共感をもとに，ちびっ子名人になるためのふれ合いコースを決定する→③継続的にふれ合うお年寄り別に活動コースを設定し，『(ア)活動コースの友達と一緒に作品や遊び道具を作って遊ぶ。→（イ）お年寄りと一緒に工夫して作品を作り変えたり遊び方を工夫したりする。』という一連のサイクルを繰り返しながら，活動づくりの工夫の高まりや協同活動の積み上げを実感できるように支援する→③「ちびっ子名人発表会」を開くという展開を考える。

(3) 目　標

１．お年寄りが得意とする活動を通して，お年寄りと一緒に活動する楽しさを味わいながら，お年寄りとふれ合う喜びを味わうことができる。

２．お年寄りが得意とする活動を一緒に工夫しながら，お年寄りの知恵や技を自分のものとしていき，「ちびっ子名人発表会」を開くことができる。

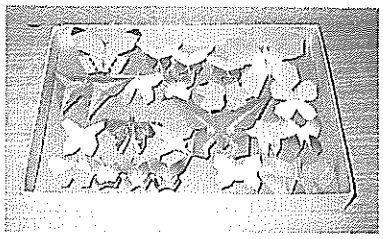
(4) 計　画（約１３時間）

段階	活　動　と　内　容	支　　援	配時
で あ う	1，荒津のお年寄りの方々と出会い，その方が得意とする活動を一緒に行う。 (1) お年寄りと一緒に話をしたり遊んだりした経験について話し合う。 ○ お年寄りの優しさや一緒に遊ぶ楽しさの想起 (2) 山本さんや本田さん，中村さん，中原さん，柴田さんと出会い，その方々が得意とする活動を一緒に行う。 ○ 出会ったお年寄りの素晴らしさやその活動の楽しさの実感，お年寄りへの親しみ 2．出会いを振り返り，弟子入り修業先を決定する。 ○ お年寄りとの継続的なふれ合いへの意欲 ・山本名人さんみたいに折り紙が上手になりたいな。	お年寄りとのふれ合いへの関心・意欲を高める支援 ※　自分の祖父母とのふれ合いを想起する話し合いの設定。 ※　生き甲斐をもち瑞々しく生活しておられる地域のお年寄りとの感動的な出会いの場やその方々が得意とする活動を一緒に楽しむ場の設定。 ※　お年寄りの知恵や技への共感をもとに，ふれ合いコースを決定する場の設定。	5 ① ③ ① 課外
ひ た る	3．ふれ合いコースごとに一緒に活動したり，試して作り変えたりする。 (1) お年寄りから教えていただいた活動づくりをする。 ○ 親しみをもった人との活動づくり ・さあ，できたぞ。みんなで一緒に遊ぼうよ。 (2) 互いの活動づくりを紹介し合い，試し遊びをする。 ○ 友達が作った活動の楽しさの感受 ○ 遊びの交流を通して，自分たちの活動づくりの見直しの視点の把握，活動の見通し ・もっと楽しくしよう。・～を作り変えるといいんじゃないかな。 ・名人さんにまた来てもらって尋ねてみよう。 (3) 自分たちの活動をお年寄りと一緒に作り変える。 ○「名人さんみたいになりたいな。」という思いからの活動づくりの見直しや工夫の高まり ・やっぱり名人さんは，すごいよ。分からないところをやさしく教えてくれたよ。ちびっ子名人だねってほめられたよ。	「お年寄りと一緒に楽しく遊ぼう。」という思いのもと，子供たちが進んで活づくりをすることのできる支援。 ※　一緒に楽しむことのできるという視点からの活動内容の設定。 ※『ふれ合いコースの友達と一緒に作品や遊び道具を作って遊ぶ。→お年寄りと一緒に作り方を工夫して作品を作り変えたり遊び方を工夫したりする。』という一連のサイクルを繰り返し活動づくりの工夫の高まりや協同活動の積み上げを実感できるようにする。	4
い か す	4．「ちびっ子名人発表会」を開く。 (1) ちびっ子名人発表会の準備をする。 ○　プログラムの作成，ちびっ子名人発表会の場の設定 (2)「ちびっ子名人発表会」を開く。 ○　地域のお年寄りへの親しみの深まり，感謝の気持ち ○　お年寄りの知恵や技を自分も身に付けてきたことへの満足感，発表会をやり遂げた満足感 5．親しくなったお年寄りに感謝のお手紙を書く。 ○　お年寄りへの親しみやお世話になった感謝の気持ち 6．お手紙を届けに，当仁公民館憩いの家を訪問する。	お年寄りへの親しみの深まりや感謝，お年寄りの知恵や技を身に付けてきたことを実感することのできる支援。 ※　知恵や技を身に付けたことへの満足感を十分に味わうことのできる発表会の設定。 ※　感謝の気持ちを表したり継続的なふれ合いにつながる活動の設定。	4 ② ① ① 課外

(5) 指導の実際

① お年寄りの知恵や技の素晴らしさを感じ取り，親しみをもつ段階（1～5/13時間）

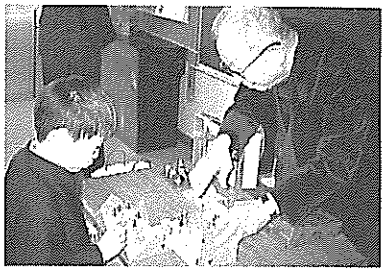
この段階は，荒津のお年寄りと出会い，お年寄り一人一人の知恵や技の素晴らしさを肌で感じ取る中で，継続的なふれ合いへの意欲をもつことをねらいとしている。そのために，出会わせるお年寄りの方々については，○活動づくりの楽しさや素晴らしさなど，子供の感情を揺さぶる内面的価値を備えていること，○荒津地域にお住まいで，継続的なかかわりや応答的なふれ合いが期待できることを考慮しながら，感動的な出会いとなるようにした。例えば，折り紙名人の山本隆敏さんは，日本折り紙協会福岡支部長を長年務められてきた方で，現在も折り紙の普及や作品づくりに取り組まれている。そこで，山本さんとの出会いを次のように行っていった。



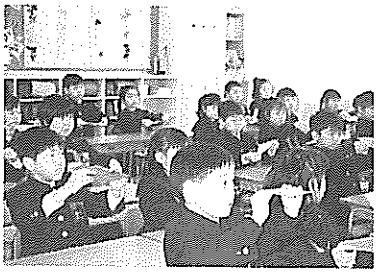
［山本さんの折り紙作品］

○ 第２時　折り紙名人の山本隆敏さんと出会い，折り紙を教えてもらい，一緒に遊ぶ。 2/5時

【感動的な出会い】 → 【一緒に折り紙を折る】 → 【作った折り紙で一緒に遊ぶ】



［写真① 山本さんの折り紙作品に触れる子供］



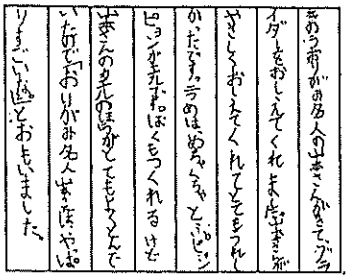
［写真② 山本さんの折り紙教室］

［写真③ 山本さんと一緒に遊ぶ子供たち］

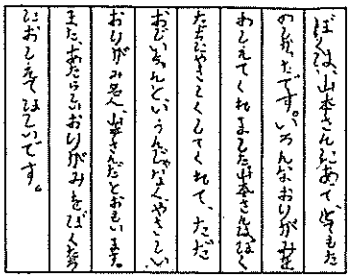
・ピョンピョン　・手裏剣
カエル
・飛行機　・グライダー

◇ 一年生の手の巧緻性に則したもの
◇ 活動づくりの工夫の高まりのあるもの

［資料① 取り上げた４つの折り紙作品］



［資料② 山本さんの知恵や技への感動］



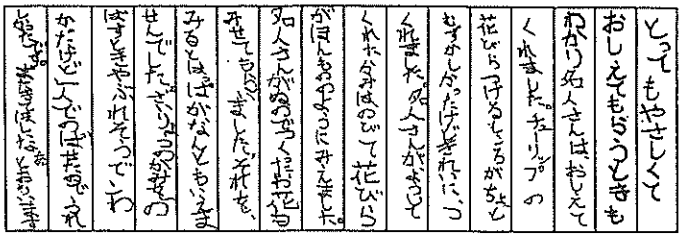
［資料③ 山本さんのやさしさの感受］

○ 第５時　出会ったお年寄りの知恵や技への共感をもとに，ふれ合いコースを決める。5/5時

お年寄り一人一人とふれ合った後に，お年寄りへの思いを出し合っていった。

その中で，お年寄り一人一人の知恵や技への共感をもとに，これからもふれ合っていきたいお年寄りを決定する場を設けた。

考察①



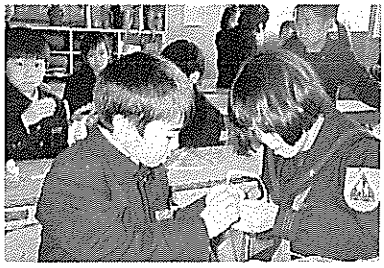
［資料④K児：ふれ合っていきたいお年寄りへ思い］

活動づくりの楽しさや素晴らしさなど内面的な価値を備えていらっしゃるお年寄りの方々一人一人と十分にふれ合う場を設けた後に，ふれ合いコースを決定する場を設けたことにより，資料④に見られるような相手意識や活動の見通しを明確にもち，ふれ合いへの意欲をもつ子供の姿を引き出すことができた。それぞれのお年寄りとの出会いにおいては，山本さんの例にあるように，取り上げる作品や遊び道具の内容設定の工夫（資料①）と「お年寄りが得意とする技や知恵にふれる」→「お年寄りが得意とする活動の作品や遊び道具づくりをする」→「作った作品や遊び道具で一緒に遊ぶ」という過程（写真①～③）を踏まえることで，お年寄りの知恵や技に感動（資料②）したり，お年寄りのやさしさを感じ取ったり（資料③）する姿が見られた。

② 教えてもらった活動を工夫してつくり変える中で，親しみを深める段階（6～9/13時間）

この段階は，「おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に楽しく遊びたいな。名人さんみたいになりたいな。」という思いをもって，活動づくりを繰り返していく中で，お年寄りへの親しみを深めていくことをねらいとしている。そのために，子供たちの求めに応じたモデル提示や遊び方の工夫についての支援をお年寄りに依頼したり教師が行ったりすることで，活動づくりの工夫が高まるとともにお年寄りへの愛着や感謝の気持ちが深まるようにしていった。

［写真④ 飛行機飛ばし競争］



［写真⑤ 竹とんぼの作り変え］

［写真⑥ けんかごまの練習］

・もっと遠くまで飛ばしたいな。 ・本田名人さんのように高くとばしたいな。 ・中村名人さんに挑戦するんだ。

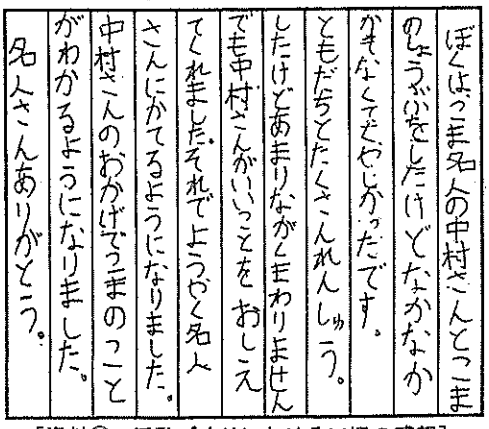
↓ ↓ ↓

［写真⑦ よく飛ぶヤリ飛行機の提示］

［写真⑧ 重心の取り方の説明］

［写真⑨ 名人さんに挑戦コーナー］

上の３つの活動づくりの例にあるように，子供一人一人の求めに応じたモデル提示や遊びの工夫についての支援を行っていった。資料⑤のM児は，「名人さんに勝ちたい。」という強い思いをもつ一方で，「なかなかうまく廻らない。」という問題にぶちあたっていた。そこで，中村名人には廻し方のアドバイスをしていただくよう事前にお願いしておいた。「中村名人さんがいいことを教えてくれました。」という表現からは中村名人のおかげでできるようになった喜びと，中村名人への親しみや感謝の気持ちが表れている。



ぼくはっま名人の中村さんとこまのようぶをとったけどなかなかまなくてやしかったです。ともだちとたくさんれんしゅう。したけどあまりながくまわりません。でも中村さんがいいことをおしえてくれました。それでようやく名人さんにかてるようになりました。中村さんのおかげでまのつことがわかるようになりました。名人さんありがとう。

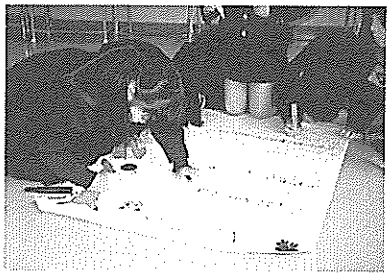
［資料⑤ 活動づくりにおけるM児の感想］

考察②

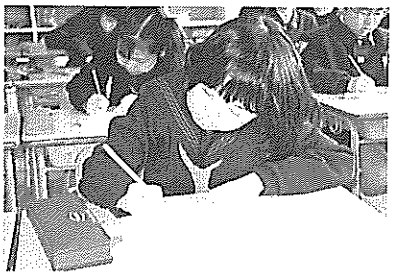
「出会う」段階において，お年寄りとの継続的なふれ合いへの意欲をもった子供たちは，お年寄りから教えてもらった活動を「お年寄りともっと楽しく遊ぼう。名人さんのようになりたいな。」という思いから積極的に作り変えていった(写真④～⑥)。その中で，「また来て欲しいな。」，「名人さんみたいにうまくいかないぞ。」といった思いが膨らんできたときに，お年寄りへの支援をお願いした。具体的には，それぞれの活動づくりにおける子供たちの思いを事前に伝え，それに応じたモデル提示や遊び方の工夫などの支援をお願いした(写真⑦～⑨)。それにより，活動づくりの工夫の高まりとともにお年寄りへの親しみや感謝の気持ちが深まっていく子供の姿を引き出せた。(資料⑤)。これは，「自分たちで活動を工夫する（作る・試す）→つまずきや課題を克服するためにお年寄りと一緒に工夫し直す（見直す）」という活動構成が有効であったためと考える。

③「ちびっ子名人発表会」を開き，ふれ合いに心地よさを感じる段階（10～13/13時間）

○　第１，２時　「ちびっ子名人発表会」の準備をする。



［写真⑩ 準備をする子供たち］



［写真⑪ 感謝の手紙を書く子供たち］

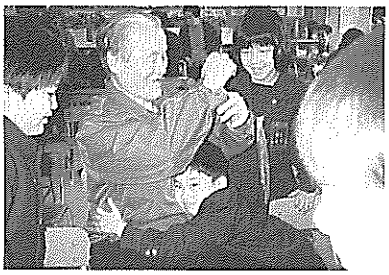
わたしは、中はらさん、おて玉きょうそうを、したいです。そして、どっちがながくつづくかきょうそうを、したいです。わたしがかったら、おとまりとかをようだいに、おしえたいです。

［資料⑥ フェスタへの思い］

○　第３時　「ちびっ子名人発表会」を開く。　3/4時

ここでは，山本さんや本田さん，中村さん，中原さん，柴田さんたちと一緒に「ちびっ子名人発表会」を開き，共に活動する楽しさや共に在ることの心地よさを味わうことをねらいとしている。

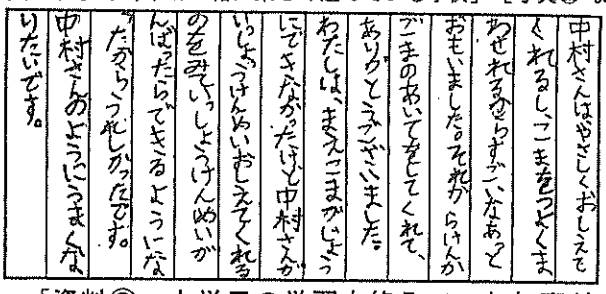
［写真⑫ お年寄りと一緒に楽しく遊んでいる子供］



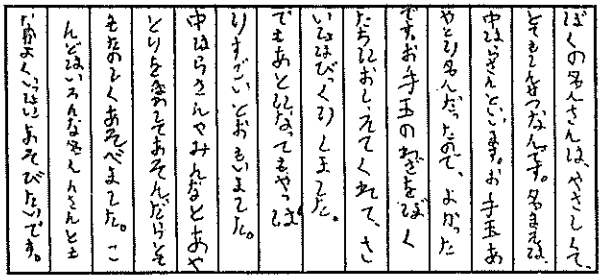
［写真⑬ お年寄りに自然に働きかける子供］

・始めは，お花づくりができるかなあと心配していましたが，とても上手になりましたね。かわいらしいみなさんと会えてとても楽しかったです。伊崎に住んでいますので，会ったらお話しましょう。

［資料⑦ お年寄りの感想］



中村さんはやさしくおしえてくれるしごまをつくるのもおもいました。それがらけんかがわせれるようずかいなあ。ごまのわいてをしてくれて、ありがとうございました。わたしは、まえごまがじょうにできなかったけど中村さんがいっしょうけんめいおしえてくれるのをみていっしょうけんめいがんばったらできるようになったからうれしかったです。中村さんのようにうまくなりたいです。



ぼくの名さんは、やさしくて、とてもしんせつなんです。名まえは、中はらさんとこまです。お手玉あやとりなんだったので、よかったです。お手玉のおきをぼくたちにおしえてくれて、さいごまでとおもいました。あとしんぱいしてくれてありがとうございました。

［資料⑧　本単元の学習を終えて，お年寄りとのふれ合いに心地よさを感じている子供の表現］

考察③

子供たちは，「荒津のおじいちゃんやおばあちゃんと楽しく遊ぼう。教えてもらった知恵や技を発表しよう。」という思いのもと，プログラムづくりやお礼の手紙書きなど進んで発表会の準備を行い（写真⑩，⑪），発表会への期待感を膨らませていった（資料⑥）。そして，発表会当日は，一緒に遊ぶ楽しさを共有する姿（写真⑫）やお年寄りと自然にふれ合い親しみを深めた姿（写真⑬）が見られた。これは，お年寄りと継続的にふれ合う過程において，ふれ合う喜びを味わうための３段階の活動づくりを構成したことが有効に働いたためであると考える。

４．全体考察

共に楽しむ活動づくりを通してお年寄りとふれ合う喜びを味わう中で，資料⑧にあるようなお年寄りのよさを感じ取り，共に生きていこうとする心や態度を育むことができた。そして，本研究を通して，①お年寄りとのふれ合いにおいては，「お年寄り一人一人の知恵や技にふれる活動を通して，ふれ合いコースを決定する」→「お年寄りと一緒に活動づくりを繰り返し工夫する」→「一緒に『ちびっ子名人発表会』を開く」という３段階の活動づくりが有効であること，②本学習は，お年寄りにとっても自分の得意とする技や知恵を思いっきり発揮する場や孫のような子供たちといきいきとふれ合う場（資料⑦）をもつことになり，子供たちだけでなくお年寄りの側にとっても価値があることの２点が明らかになった。

自ら数理を生活に活用していく算数科学習

算数科部主題についての説明

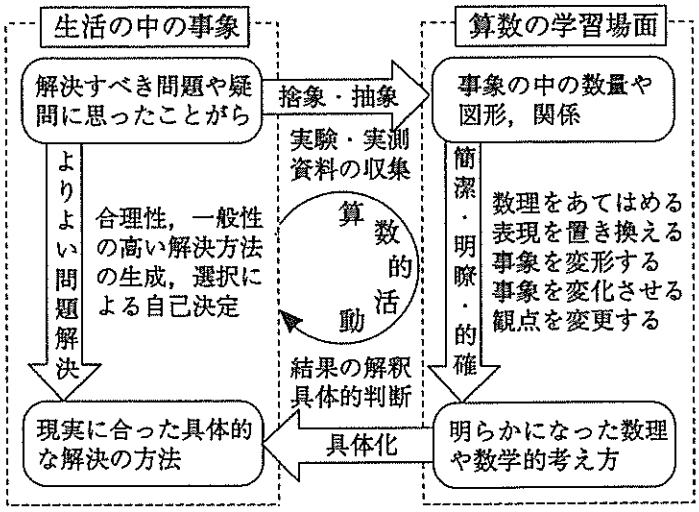
○　豊かな人間の育成のために算数科に求められていること

算数科の目標にはこれまでも学んだことを進んで生活に生かすことができるようにすることが掲げられてきた。今回の改訂においても実生活における事象との関連をはかることが強調されている。たしかに従来の指導でも，この点については様々な工夫がなされ子供たちの生活と関連づけた教材が開発されてきた。しかし今回の改訂の趣旨を見ると，進んで数理を生活に生かす面では未だ十分な成果が得られていないことが窺える。そこで，これからの算数科では子供たち一人一人が日常生活で出会う問題に対して数理を活用して解決していく能力をより一層伸ばしていくことを大切にしなければならないと考える。そのためには算数のための算数から自分のための算数へと学習をかえていくことで，子供一人一人が自分のためのもの，自分がよりよく生きるためのものとして数理を身につけていくようにしなければならない。このことによって数理を活用して生活上の問題を解決する機会が増え，数理のよさを感じ取ると同時に問題解決力も伸ばすことができる。

○　自ら数理を生活に活用する算数科学習とは

算数のための算数から自分のための算数に学習をかえていくことは，子供たちの学習していく際の意識をかえていくことである。つまり自ら数理を生活に活用する算数科学習とは，何のために自分は学んでいるのかという目的を一人一人の子供がしっかりともって活動し，学習することの意義を感じていく学習である。そこでは右の図にあるように子供一人一人の疑問から学習が始まる。まず一人一人が自分の疑問や問題を解決するために必要な数量や図形，関係を捨象，抽象して取り出す。次にそれらを簡潔，明瞭，的確な方法を工夫しながら処理を繰り返していく。さらにそこで明らかになったことを現実の場面に置いて解釈するといった一連の算数的活動を行う。この解決方法は合理性や一般性が高く，よりよい生活を生み出していく。このような算数的活動による学習を展開するために次の点から子供の生活を教材化する。

【数理を生活に活用していく学習の過程】



①	子供たちが日常的に改善しようと考えたり不便さを感じたりしていることがら	（日常性）
②	子供たち自身の具体的な行為として働きかけたり変化させたりできることがら	（具体性）
③	数量化して比較したり関係づけたりすることに実生活上の意味のあることがら	（数理性）

○　自ら数理を生活に活用する子供とは

自ら数理を生活に活用していく具体的な子供の姿については次の４点と考えている。

- ○　既習の数理を変形したり，対象を変化させたりして問題を解決する方法を工夫する子供
- ○　一つの解決方法を他の事象の解決に生かしながら，いつでもつかえる方法へ高める子供
- ○　自分の納得のいく解決に至るまで，対象に具体的な働きかけを何度でも行い続ける子供
- ○　よりよい生活を求めて数理を活用し，さまざまな身近な問題に積極的に働きかける子供

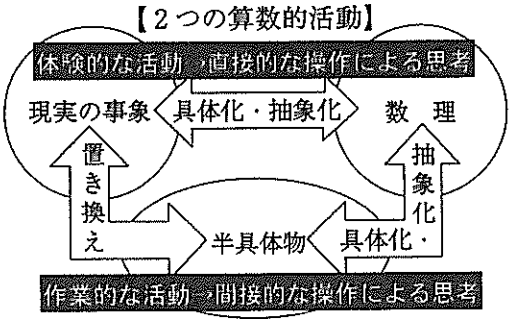
算数的活動を活性化する学習の構想

算数科部　　小　森　　晃

１．主題の意味

(1) 算数的活動とは

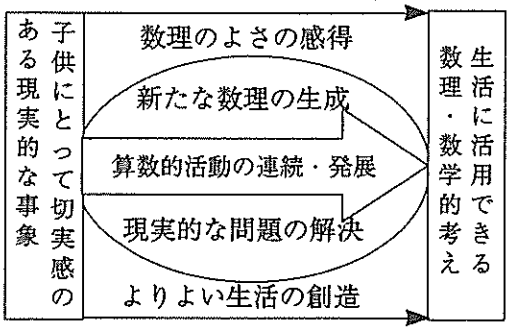
【２つの算数的活動】



算数的活動とは現実の事象から数量や図形を取り出す抽象化の活動と，数量や図形の処理を現実の事象に反映させる具体化の活動から成り立っている。この現実の事象と数理の間をつなぐ算数的活動には体験的なものと作業的なものの２つがある。１つ目の体験的な活動とは現実的な事象そのものを操作しながら思考していく場合であり，活動の結果をすぐに具体的な解決方法に反映させることができる。しかし，いつも現実的な事象そのものを直接に操作できるとは限らない。例えば校舎の高さを測定する場合，直接に巻き尺でその高さを測定することはできない。そこで校舎の高さと影の長さを，校庭に立てた棒の高さと影の長さの関係に置き換えていく。最後に棒の高さは校舎の高さに再び置き換えられることによって具体的な解決となる。このようにいったん操作がしやすい別のものに置き換えて思考していく場合が作業的な活動である。直接的な操作によって思考する体験的な活動も，何かに置き換えて間接的な操作によって思考する作業的な活動も現実の事象にまで戻されることによって，その目的が達成されるといえる。つまり算数的活動は常に現実的な問題の解決と結びついていることが大切である。

(2) 算数的活動を活性化するとは

【算数的活動の活性化】



算数科の学習では子供たちは多かれ少なかれ算数的活動を行っている。買い物ごっこや都市の人口調査などは具体的な事象から抽象化によって取り出した数量を操作する算数的活動である。これらの事象は具体的ではあるが子供にとって現実的なものばかりではない。数量の操作をした結果が現実的な解決にまで戻らずに学習が終わってしまうことが多いのはそのためである。そこでは形式的な操作だけが意識され，子供たちは算数的活動のよさを感じることは少ないといえる。本研究でいう算数的活動を活性化するとは，単に具体的であるだけでなく切実感のある現実的な問題から出発することによって，子供自らが現実的な解決方法に至るまで算数的活動を連続・発展させることである。算数的活動を活性化することによって数理や数学的考え方は，より現実的で子供の生活に即した問題解決に活用できる豊かなものとして身につけることができると考えている。

(3) 本研究で期待する子供の姿

○　自分の生活の中にあることがらを数量化して，その中から問題を取り出したり解決への見通しを生み出したりする子供

○　これまでに身につけてきた数理をそのままあてはめたり，かたちを変えてあてはめたりしながら対象に働きかけて問題を解決し数理を生成・発展させる子供

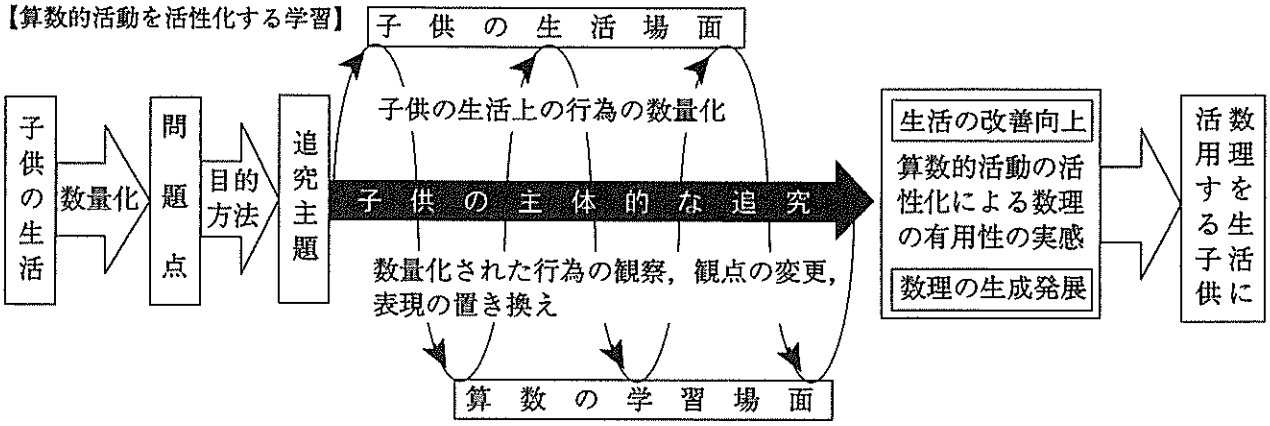
○　数理を生活の中に活用することのよさを感じ取って，積極的に数理を生活の中に活用していこうとする子供

２．学習の具体的構想

子供たちの生活には，今よりももっとよくできる部分が多く含まれている。子供たち自身も自分の不十分さを自覚すると，それらを改善しようといった工夫をしていく。このように子供が生まれながらにもっているよさを求める意識を発揮させ，生活を高めていくためには生活の不十分さを自覚することからはじめなければならない。そのために算数科では生活の中の行為を数量化する方法をとる。これは数量化することによって生活上の問題の所在が明らかになったり，統計的な処理によって自分の行為を自己評価できたりするためである。具体的には以下のような方途で学習を構成していく。

(1) 子供の生活を対象とした追究主題を設定する。

子供たちの生活の中の行為を数量化して問題点を明らかにしながら追究主題を設定する。子供たちは身のまわりの人々とかかわる中で自分の行為に問題を感じている場合や問題としての意識をもっていない場合など様々である。それらは子供に明確な目的や改善の方向としては意識されにくいことがらである。これらを数量化することで明確に意識させ，追究主題を設定していく。



追究主題の設定から追究し，まとめていくまでは大きく次の段階を経ていく。

つかむ段階	子供の生活を数量化して問題点を取り出したり，その問題点の起こる原因はどのようにすれば明らかになるのかを話し合って追究主題をつかむ。
しらべる段階	追究主題に沿って数量化された自分たちの行為を観点を変えてみたり，表現方法を変えてみたりしながら，生活の様子を明らかにする。
まとめる段階	これまでに調べてきたことがらをもとに，さらに対象を広げて調べたり観点を変えて調べたりして生活をよりよくする方法を自己決定する。

(2) 数量の大小，構造の複雑さ，子供が接する機会の多少の３つの視点から対象を配列する。

子供がかかわる対象の配列は，数量の大小や構造の複雑さだけでなく子供が接する機会の多少，子供との心理的な隔たりの大小といった視点から見てより子供がかかわりやすいものから配列する。

(3) 継続的な取り組みのできる追究主題にもとづいて単元の配列をする。

子供の生活の改善向上のためには継続的な取り組みが必要である。そこで同一追究主題に基づく単元を適当な期間をおいて配列する。このことで子供たちは生活の改善の方法を繰り返したり，工夫したりしていきながら，よりよい方向へ高まっていく自分や数理のよさを実感する。

○　単元配列の例

＜３年　時刻と時間＞	生活の中での実践的追究	＜３年　棒グラフ＞
自分の時間の使い方を見直して，工夫や改善する方法の見通しをもつ。	生活の中で実践し資料を集める。 ↑↓ 生活を向上させる工夫を継続する。	これまでの実践を振りかえり，自己評価しながら改善への意欲をもつ。

３．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第３学年　時間を大切に使う工夫をしよう（時刻と時間）

(2) 本単元の考え方

本単元は，自分の生活を時間といった視点から見つめて，自分がやりたいことややらなければならないことのための時間にかかわることで，視覚的にとらえにくい時間を量としてとらえていく見方を高めながら，時間を大切にしたよりよい生活をおくろうとする心を育てることをねらいとしている。

ここでの具体的な内容は次の３点である。１つ目は「時間を量としてとらえること」である。時間は長さやかさ，広さと異なって目に見えず，その実体を感じ取ることができないが，一方向に流れていくといった特徴がある。この一方向性を利用することで，時間は線分の長さや円盤の角度に置き換えることができる。置き換えられた時間は，単位のいくつ分による測定や時間どうしの比較，計算といった処理ができるようになる。本単元では目に見えるものを量として取り扱ってきた学習から，目に見えないものをも量としてとらえていくようにする。２つ目は「既習の数理を一般化すること」である。子供たちはこれまでの学習において，十進法による計算の処理を中心に位取り記数法の数理を身につけてきている。しかし時間については十進法による計算では処理できない。本単元においては，分，時間，日などの単位を使って時間を測定していくなかで次第に十進法とは違う位取りの数理を生み出したり，既習の十進法の計算を生かして十二進法，二十四進法，六十進法の計算を行い時刻や時間を求めたりする。３つ目の内容は「自分の生活を改善する実感をもつこと」である。子供たちは日頃の生活ではチャイムやまわりの人からの促しによって行動していることが多い。つまり時計を読み時刻を知る数理を身につけているにもかかわらず，その数理が十分に活用されているとは言い難い。その時，その時の時刻を知ることは，次の自分の行動を起こす指標であるが，それをさらに進めて，自分が何をいつやるかをタイムテーブルに刻み，それに沿って行動することはより積極的で主体的に生きることである。本単元の活動を通して，時間を無駄にしない規則正しい生活をおくることのよさを体験をすることができる。

本単元の指導にあたっては，日頃子供たちが生活する中で問題と感じていることがらを取り上げ，その問題の解決にせまる中で時刻や時間の意味をとらえ，時間を大切にして生活していこうとする態度を育てることを考えた。そのために，子供たちが生活上問題と感じている早起きができないことの原因を探っていきながら，自分たちの一日を時間といった視点から数量化していく。具体的には，はじめは起床から登校までと帰宅から就寝までにする行為について，六十進法や午前と午後の十二進法で処理できるものを数量化する。次に午前から午後にわたる学校での時間を二十四進法によって数量化していく。さらに就寝時刻から翌日の起床時刻までの睡眠時間のように二十四進法を越える場合を数量化していく。このように小さな量（時間）の比較，測定，計算から次第に大きな量（時間）の比較，測定，計算へと処理の対象を配列することによって，子供自らが既習の数理を一般化しながら新たな処理を生み出していくことができるようにしている。

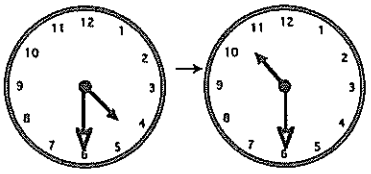
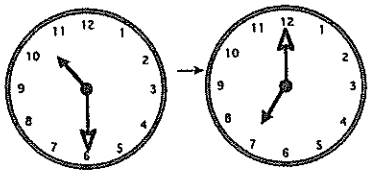
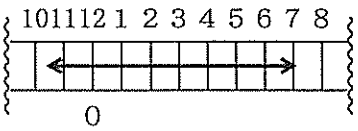
(3) 目　標

① 時間の流れをタイムテーブルの長さや時計模型の針の角度に置き換えたりして，その大きさをつかみ比較や測定，計算による処理を行うことができる。

② 時刻と時間の違いをとらえて正確な時刻や時間を求めたり，表したい時間に応じて適切な単位を選択したりすることができる。

③ 自分にあった生活時間を調べたり，それをタイムテーブル化して表したりして一日を規則正しく計画的にすごそうと心がけることができる。

(4) 計　画（６時間）

段階	活　動　と　内　容	手　だ　て
つかむ／しらべる／まとめる	１．毎日の生活を振り返り，改善しなければならないと感じている事柄について話し合い本単元の追究主題をつかむ。――――１ ○　日頃，帰宅してから何を行い，それにどれくらいの時間がかかっているのかを調べる追究主題をもつこと ※　子供たちの生活に対するアンケート結果を提示して，その多くが「朝，一人で起きられない」ことを取り上げ，その原因について話し合わせる。 ２．実際に調べてきた自分の起床から就寝するまでの時間の使い方に関する資料をもとに時間の使い方をしらべる。 ――――３ (1) 起床～登校，下校～就寝まで何をどれくらいの時間をかけてやっているか調べる。----------① ○　午前や午後の中でものごとをはじめた時刻と終わった時刻からそれぞれにかかった時間をひき算で求めること  ※　時計模型をもとにかかった時間の計算の仕方を調べタイムテーブルに記録させる。 (2) 毎日やらなければならないことにかかる時間を調べる。-① ○　時間と時間のたし算をすること ※　前時に調べた朝食，登校，下校，学習の時間の資料をもとに自分に必要な時間がどれだけか調べる。 (3) 学校での時間と自分に必要な時間を加えたり，それを起きている時間から引いたりしてあいた時間を調べる。------① ○　午前から午後にわたる時間を計算で求めること ※　就寝と起床の時刻からタイムテーブルや時計模型を使って時間を求め，資料から計算させる。 ３．３年生にとって望ましい睡眠時間を実現するために，自分の睡眠時間を調べながら，望ましい睡眠時間と比較して，睡眠を十分にとるための生活の仕方を工夫しまとめる。――――――２ ○　日が変わる場合の時間を１２時を０時として求めること ○　ある時間から，それをはじめる時刻を求めること ○　３年生にとって望ましい睡眠時間について知り，自分のこれからの行動予定を記したタイムテーブルを作成し，時間を大切にする意欲を高めること  １０時半→７時  	※　事前に調査した生活アンケート調査の結果を絵図化した資料の提示 ※　朝の起床が一人でできない原因について話し合う場の設定 ※　自分たちが生活の中で問題と感じていることの原因を話し合う場 ※　時計模型やタイムテーブルを使って，時間を数量化する活動 ※　時計模型やタイムテーブルの時間から計算の仕方を調べる活動 後の時刻－前の時刻 ※　公式化した時間の求め方をあてはめる範囲を広げて調べる活動の場の設定 ※　１２時間制では処理できない場面に既習の計算の方法を広げて調べていく活動の場の設定 ※　時計模型と帯図を選択して自分の睡眠時間を求める活動 ※　３年生にとって望ましい睡眠時間についてのお話を伺う場 ※　タイムテーブルに行動予定を書き込み，今後の計画を立てる活動

(5) 指導の実際

① 生活を見直す追究主題をつかむ段階（1／6時間）

ここでは，本単元で子供たちが追究する主題をつくることをねらいとしていた。そのために，以前に調査しておいた子供たちのアンケート結果を絵図化して提示した（資料1）。そしてアンケート結果の中で特に多かった早起きができない原因について話し合わせた。子供たちからは「ゲームを遅くまでやっているから」「ベットに入ってからも遅くまで本を読んだりしているから」「テレビを遅くまで見ていて勉強がおそくなるからいるから」などが出てきた。

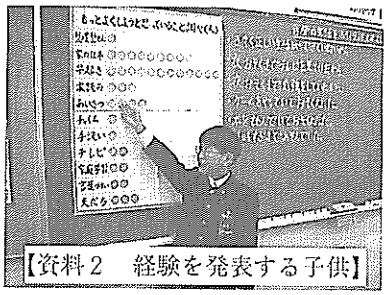
—今，自分が変えなければと考えていること—

身の回りの整理整頓	○
自分の役割分担を守る	○○○○○○○○○
早くねる，早く起きる	○○○○○○○○○○○○
本をたくさん読む	○○○
自分から挨拶をする	○○○○
チャイムを守って動く	○
進んで手洗いをする	○
テレビを見る時間が長い	○○
自分から学習する	○○
言葉遣いをよくする	○○
友達と仲良くする	○○○

【資料1　問題と感じている事柄】

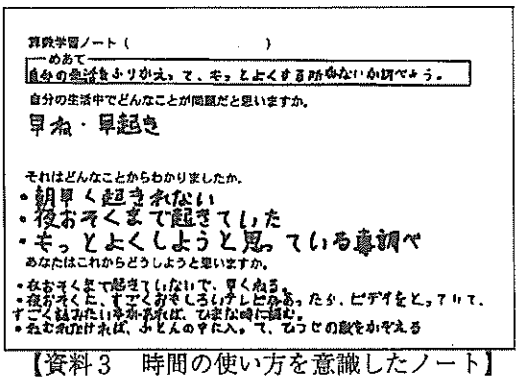
考察①

本単元を子供たちが追究していくための主題を設定する本時では，日頃子供自身が問題を感じていることがらについての話合いを行っていった。アンケート結果を絵図化した資料を提示すると，子供たちは早起きができないことやテレビを遅くまで見ていると答えた人数の多さから自分の経験を想起して一人一人が時間の使い方を自分の問題としてとらえていくことができた（資料2）。



【資料2　経験を発表する子供】

さらに，この時間の使い方に関して「勉強ややらないといけないことを先にやる」「時間の計画を立てて，こまめに時計を見て時間を大切にする」「見たい番組はビデオにとって遅くまでテレビを見ないようにする」などの考えがだされた（資料3）。このことから子供たちが日頃問題だと感じている時間の使い方を対象として取り上げ，数量化して提示したことは自分の時間の使い方を追究する意識を高める上で有効であったと考える。


算数学習ノート（　　）

めあて
自分の生活をふりかえって、もっとよくする方法を調べよう。

自分の生活中でどんなことが問題だと思いますか。

早寝・早起き

それはどんなことからわかりましたか。

- 朝早く起きれない
- 夜おそくまで起きていた
- もっとよくしようと思っている事調べ

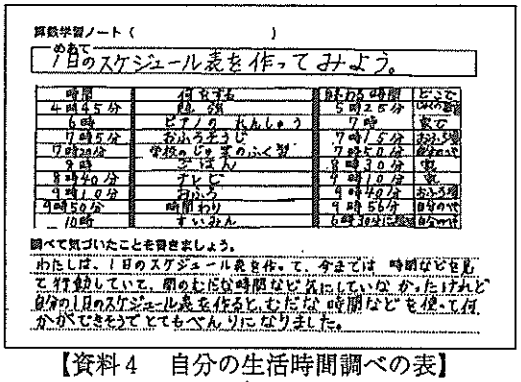
あなたはこれからどうしようと思いますか。

- 夜おそくまで起きていないで、早くねる。
- 夜がそくて、すごくおもしろいテレビがある、たか、ビデオをとって、て、すごく観みたい事が有れば、ひまな時に観む。
- 私も寝なければ、ふとんのすた人、て、ひつじの数をかぞえる

【資料3　時間の使い方を意識したノート】

② 自分たちの毎日の時間の使い方をしらべる段階（2～4／6時間）

しらべる段階の第2時では，自分の一日の時間の使い方を見直すために一日の時間の使い方を調べて記録したり，スケジュール表に整理したりしながら（資料4），ひとつひとつの事柄に要する時間を計算によって求める活動を行っていった。ここでは帰宅した後や登校する前など12時間を越えない場面について「9時～10時」→「7時～7時50分」→「7時50分～8時20分」といったように，繰り下がりのない場合の時間や分を求めることから繰り下がりのある場合の時間や分を求めることへと活動を順序づけて，十進位取り記数法がそのまま使える計算からそのままでは使えない計算へと高めていった。資料5のノートからも分かるように，繰り上がりのない計算からはじめたことによって，子供たちは既習の数理（十進法によるひき算の計算）をもとに，時間を求める「後の時刻－前の時刻」という数理を生み出していった。また，これらの計算の方法を見通すために時計模型と帯状と円形の2つのタイムテーブルを提示した。子供たちはこれらの時計模型やタイムテーブルを使って自分の生活時間を直接測定したり時刻と時刻の関係を読みとったりして計算方法を生み出すことができていった。


算数学習ノート（　　）

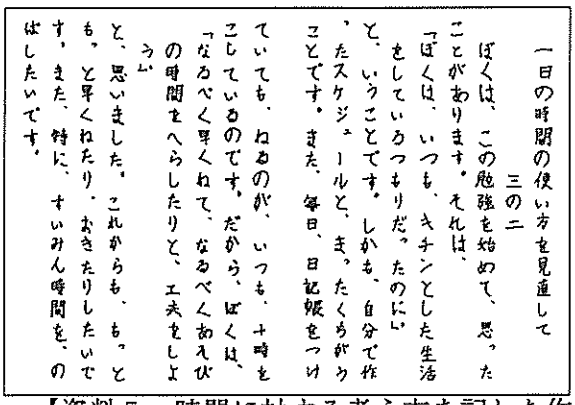
めあて
1日のスケジュール表を作ってみよう。

時間	何をする	終わる時間	どこで
4時45分	起き、食	5時25分	洗面所
6時	ピアノのれんしゅう	7時	家の
7時5分	おふろそうじ	7時15分	お風呂
7時20分	学校のじゅんびふく装	7時50分	部屋と
8時	学校へ	8時30分	学
3時40分	テレビ	4時10分	家
4時10分	おふろ	4時40分	お風呂
4時50分	時間わり	4時56分	自分の
10時	すいみん	6時30分	自分の

調べて気づいたことを書きましょう。

わたしは、1日のスケジュール表を作って、今までは 時間などを見て行動していて、前のむだな時間などがにていなかったけれど自分の1日のスケジュール表を作ると、むだな時間などを使って何かができそうでとてもべんりになりました。

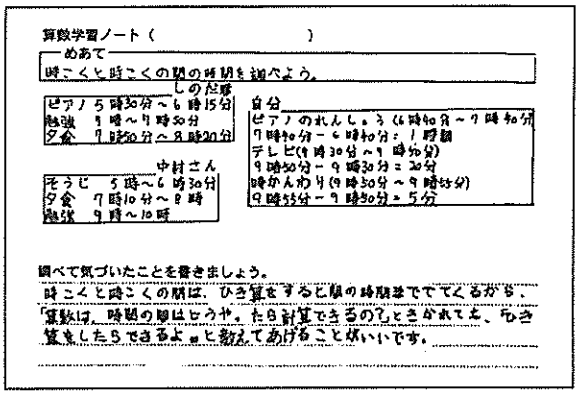
【資料4　自分の生活時間調べの表】



一日の時間の使い方を見直して

三の二

ぼくは、この勉強を始めて、思ったことがあります。それは、「ぼくは、いつも、キチンとした生活をしているつもりだったのに」て、いうことです。しかも、自分で作ったスケジュールと、まったくちがうことです。また、毎日、日記帳をつけていても、ねるのが、いつも、十時をこしているのです。だから、ぼくは、「なるべく早くねて、なるべくあれびの時間をへらしたりと、工夫をしようと、思いました。これからも、もっとも、と早くねたり、おきたりしたいです。また、特に、すいみん時間を、のばしたいです。



算数学習ノート（　　）

めあて

時こくと時こくの間の時間を調べよう。

しの記録

ピアノ　5時30分～6時15分
勉強　7時～7時30分
夕食　7時30分～8時30分

中村さん

そうじ　5時～6時30分
夕食　7時10分～8時
勉強　9時～10時

自分

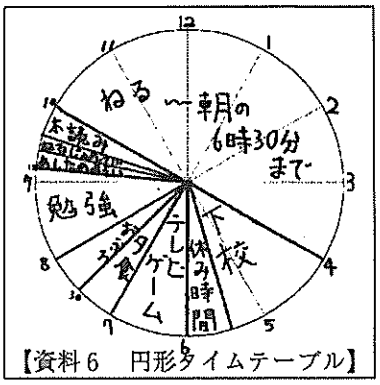
ピアノのれんしゅう　6時40分～7時40分
7時40分～6時40分：1時間
テレビ(8時30分～9時30分)
9時30分－9時30分＝30分
時かんわり(8時30分～9時45分)
9時45分－9時30分＝15分

調べて気づいたことを書きましょう。

時こくと時こくの間は、ひき算をすると間の時間までてくるから、算数は、時間の時はどうや、たら計算できるのてしときかれても、ひき算をしたらできるよ。と教えてあげることがいいです。

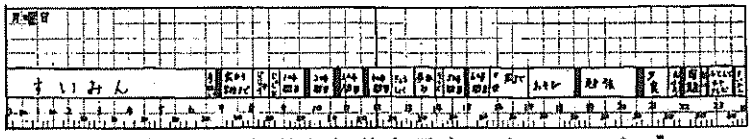
【資料５　時間に対する考え方を記した作文と時刻のひき算で時間を求めたノート】

第３時では自分がやらなければならない事柄に必要な時間を調べていった。ここでは資料４のような時刻の表から計算で求めた時間どうしをたし算で計算して処理していった。さらに資料６のようなタイムテーブルを使った直接測定の方法で必要な事柄の時間を測定し，計算結果を確かめさせた。ここでは午前と午後に分かれた家庭での時間を対象にして調べさせたが，子供たちはタイムテーブルを使って時間を角度や長さに置き換えながら測定したり，計算したりして量としての処理をしていくことができていた。



【資料６　円形タイムテーブル】

第４時では学校にいる間の時間を調べていった。ここでは午前中から午後までにわたる時間を対象としているために，既習の「後の時刻－前の時刻」をあてはめても「３時１５分－７時３０分」では計算できないことから，タイムテーブルを使った直接測定をしながら計算の方法を調べていった。その過程で円形のタイムテーブルは午前と午後の両方を示すことができないため帯状のタイムテーブル（資料７）にかえて時間を測定していった。

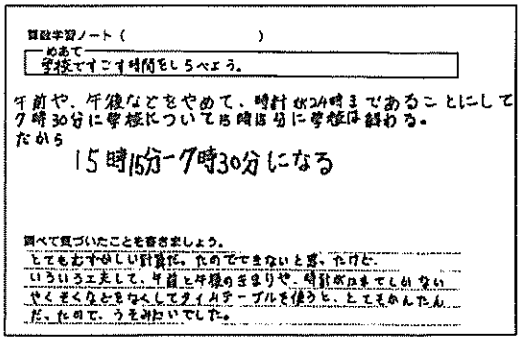


【資料７　午前と午後を示すタイムテーブル】

計算の方法は，資料８のノートのように１２時間の午前と午後をつないだことから二十四進法の考え方を活用し３時１５分を１５時１５分と読み替え「１５時１５分－７時３０分」で計算していった。

考察②

しらべる段階では，子供が自分の生活時間の実態を明らかにしていく問題解決の活動を行いながら，時間を角度や長さに置き換えて直接測定したり，既習の数理（十進法）を一般化して六十進法や十二進法，二十四進法など目的に応じた記数法を使いこなしたりできるようにしていた。子供たちの反応は，資料５や資料８のノートの記述に見られるように，既習のひき算の計算を一般化しながら時間の計算をしたり六十進法や十二進法，二十四進法を活用して計算したりしていった。また資料６や資料７のように目的に応じてタイムテーブルを使い分け，時間を数量化することもできていた。このことから繰り上がり繰り下がりのない少ない時間を処理する活動から，繰り上がり繰り下がりが必要な時間を処理する活動，さらに二十四進法による処理が必要な活動へとしらべていく対象を配列し，時間を直接測定できるタイムテーブルを使って数量化させたことは子供が問題解決を行いながら，次第に自分の数理を一般化していく上で有効であったと考える。



算数学習ノート（　　）

めあて

学校ですごす時間をしらべよう。

午前や、午後などをやめて、時計が24時までであることにして
7時30分に学校についてら時は分に学校は終わる。
だから
15時15分－7時30分になる

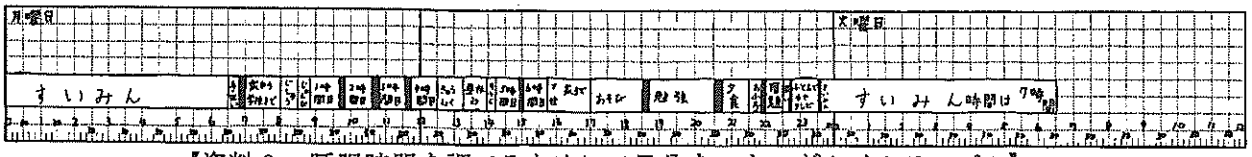
調べて気づいたことを書きましょう。

とてもむずかしい計算だ、たのでてきないと思、たけど、
いろいろ工夫して、午前と午後のままりや、時計が24までしかない
やくそくなどもなくしてタイムテーブルを使うと、とてもかんたん
だ、たので、うそ満いでした。

【資料８　二十四進法を使った計算のノート】

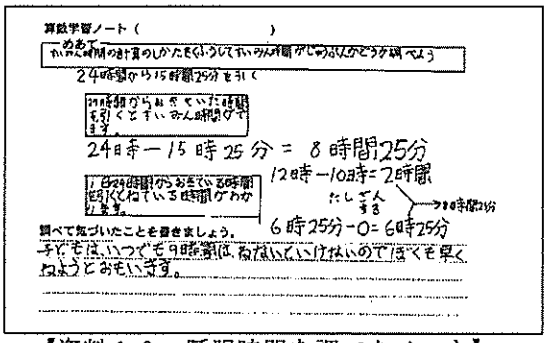
③　規則正しい生活時間の計画をまとめる段階（５～６／６時間）

まとめる段階では睡眠時間を求めていった。子供たちはこれまでの二十四進法による計算が使えないことから，再びタイムテーブルで睡眠時間を直接測定しながら計算の方法を考えていった。

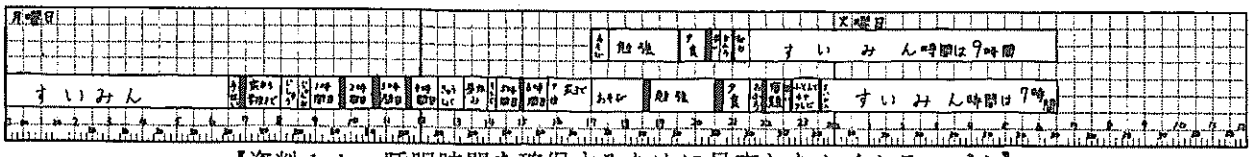


【資料９　睡眠時間を調べるために二日分をつないだタイムテーブル】

子供たちは時間を連続する量として見て資料９に示すように「午前＋午後＋翌日の午前」として測定していた。そして睡眠時間を２日に分けて｛（深夜１２時－就寝時刻）＋（起床時刻－０時）｝とする処理の仕方を生み出していった。また資料10のように二十四進法をもとに「２４時間－起きている時間」の方法を生み出す子供も見られた。その後，養護の先生から望ましい睡眠時間のお話を伺い，計画を立て直していった（資料１１）。



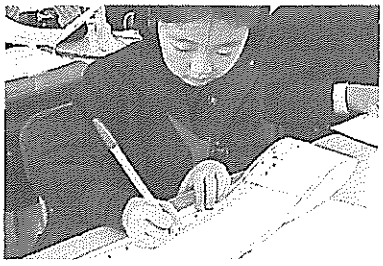
【資料１０　睡眠時間を調べたノート】



【資料１１　睡眠時間を確保するために見直したタイムテーブル】

考察③

まとめる段階では，求めたい時間が前日の夜から翌日の朝までの二日間にわたっていて，二十四進法がそのまま使えない場合の計算をしながら睡眠時間を求め，３年生の望ましい睡眠時間と比較して時間の使い方を見直すことができるようにしていた。子供たちは資料１０のように計算方法をさらに一般化し，資料１１，１２のようにタイムテーブルをつないで見直しながら自分の時間の使い方を改善していった。



【資料１２　タイムテーブルを見直す子供】

このことからタイムテーブルをつないで時間を連続量として処理することは時間を直接測定するだけでなく，既習の計算を一般化してあてはめる見通しを生み出す上で有効だったと考える。

４．全体考察

本単元の学習を通して子供たちは自ら時間の計算を一般化する姿がみられ，さらに時間を大切にすることへの気づきから資料１３のように自分の生活の見直しもできていった。このことから生活を時間の面から数量化して，既習の数理を活用しながら時間を求め続けさせたことは，時間を求めるための数理をもとにして算数的活動を活性化させていく上で有効であったと思われる。さらに日頃の生活を計画的におくるためのタイムテーブルをつくり，数理を生活上の問題解決に活用してよりよい生活へと改善していくことにもつながっていった。

自分の生活の中の時間もなぜ算数で勉強するのだろうとさいしょは思っていましたが、時間を計算しながら、自分の生活を調べるということで分かりました。みじかな大切な時間という物を算数で勉強するのは楽しいです。自分の生活もよく分かり、すいみん時間が足りないということが分かりました。そのほかに時間の計算というのも分かったからよかったです。これから時間を大切に使いたいです。そのくふうはしないといけないことを先にして、自由時間を少しみじかめにして、するとことがわり、て時間のゆとりがあ、たらテレビを見たり、本を読んだり、遊んだりするのです。するとすいみん時間もふえ、さそく正しい生活ができ、二年生のすいみん時間の九時間から十時間というかべものりこえられると思います。だから算数で作、た計画どおりにだいたいでもいいからあつて思います。むだな時間を作らないでさばきて行動したいと思います。わたしの時間の使い方を見直してみるとテレビをだらだら見るむだな時間があ、たり、何もしない時間もあるから、今度からこの「時間」を大切にしたいです。

【資料１３　時間の使い方を工夫し生活をよくしようと決意した作文】

○　参考文献　佐伯　胖他著「すぐれた授業とはなにか」1995　東京大学出版会

数理活用体験を豊かにする学習の構想

算数科部　加藤英也

１．主題の意味

(1) 数理活用体験を豊かにするとは

子供たちが生み出した数理を他の事象にも当てはまらないかという問題意識をもって，自分で活用するために取り出したり，選択したりした事象を用いて，算数的活動を行いながら数理の活用の仕方を知恵として身に付けるとともに，数理的処理の有用性と適用範囲をとらえることである。ここでいう数理活用体験とは，何のために（目的），何を（内容），どのようにして（方法），明らかにするのかを実際に子供一人一人が実験や実測などを行いながら生み出した数理が使えるか使えないかを体験的に取り出していくことである。算数的活動とは，生活のなかの問題となる事象や行為に含まれている数，量，図形，数量の関係に対して数学的思考を働かせた処理の仕方であり，数理を生成する上で必要不可欠な具体的な作業や体験をさしている。具体的には『数える』,『計算する』,『測定する』などの数理と直結した行為と『きまりを探す』『関係をつかむ』ために行う実験や実測などの活動をさす。この学習は，１つの特殊な事象で生成した数理が日常生活のどんなことがらに活用できてどんなものに活用できないのかという活用の範囲をとらえることで，より確かな数理を身に付けることができるということから意義がある。また，日常事象を算数の舞台に載せて解決するための手続きなどの工夫を体験を通して身に付けることができることからも意義がある。

(2) 数理活用体験を豊かにする学習の構想とは

日常生活と算数の結び付きを強めるために，①追究する事象も教師が手を加えていない状態から，抽象化や数量化，理想化などの処理を行って，算数で取り扱える場面を作り出していくこと，②各自が自分の計画に基づいて，必要な情報や体験に用いる用具などを準備し活動の場を設定することなどが子供一人一人の考えに基づいて行われる学習である。また，③生み出した数理が活用できないものも可能性として含まれているため，これまで味わうことが少なかった失敗体験を踏まえることも重要であると考える。これらは，高学年での最終的な学習像であり，低学年でいきなり行うには無理がある。そこで，次のように発達段階を踏まえた構想をする。

	追究事象の選定	活動の場の設定
低学年	教師が加工した複数の具体例の提示 身の回りや遊びから教師と共に取り出す	教師が設定した場で，繰り返し体験する
中学年	教師が一部加工した複数の具体例の提示 生活の活用できる対象の視点の提示	教師が一部設定し，不足した部分を子供が補う
高学年	子供の手による事象の取り出し 数量化の手順の提示	子供が設定した場の不十分な部分を教師が補う

(3) 本研究で期待する子供の姿

数理活用体験を豊かにする子供の姿とは，以下のようなものであるととらえている。

① 生活のなかの曖昧で複雑な事象に対して，数理が活用できないかという問題意識をもって自分で活動の場を設定し意欲をもって問題解決のための算数的活動を繰り返す子供

② 事象を数量化し，これまで身に付けてきた数理を用いて解決できない時に，処理の仕方を工夫できる子供

③ 数理が適用できるものとできないものを判別し，数理の活用範囲を明らかにする子供

２．数理活用体験を豊かにする学習の具体的構想

これまでのように，ある事象で数理を生成した後で，他の事象を探してその数理を活用するという学習では，①具体的事象と抽象的な数理の間のギャップがあるため活用できる事象を探しにくい，②活用の仕方が分からない，③活用できるかという問題意識が生まれにくいという問題点があった。

そこで，子供が自分の力で事象を探し，追究場面を設定できるような手だてと数理を主体的に活用することが必然的に生じる単元構成を行うことが必要である。

(1) 子供が自分の力で活用させる事象を探し，追究場面を設定できるような手だて

追究する事象を自分の力で探すことができるようにするためには単元を計画する際に次の条件から，学習材を設定して，子供が多様に取り出せる範囲まで具体化する。

① 生活場面で子供が曖昧さ，複雑さを感じていることがら

生活で目にしたり，耳にしたり，行ったりしていることで数理を活用すれば，よりよく行動できたり，新たな気付きを生み出したりすることができるもの

② 単元でねらう内容に関連していることがら

既習の内容で解決できるもの，単元でねらう内容を使って解決できるもの（場合によってはどちらでも解決できないもの）を含み，数理活用の範囲が明確になるもの

③ 事象から具体的追究場面を作り出す手続きが容易なことがら

理想化，抽象化，数量化を行う際の条件設定が実際に子供の力でできるもの

(2) 生み出した数理を主体的に活用できるような単元構成の工夫

かかわる素材を生活から多数拾い出し，その１つを取り上げて，単元でねらう内容にせまる追究主題①を設定して新しい数理を生み出す。その際に取り上げた素材から追究するため事象を数量化して算数の舞台に載せて，追究場面を作り出す方法を身に付ける。そして，生み出した数理が他の事象にも活用できるかという追究主題②を生み出し，主体的に追究場面を作り出して算数的活動を繰り返して数理を活用し一般化を図るという単元構成が必要である。そこで以下のような単元構成を仕組む。

［数理活用体験を生み出す単元構成］

段　階	子　供　の　学　習　活　動　と　内　容	お　も　な　手　だ　て
つかむ	日常生活の中からある観点に基づいた対象を拾い上げ既習の数理で解決できるものと解決できないものに分類し，単元で学習する数理についての追究主題①を設定する。	○単元で身に付けさせたい数理に関する話題の提示 ○追究主題①を生み出すための分類活動と交流
生み出す	追究主題①に基づいて，複数の事象群から１つを選び出して，事象や行為を数量化し，問題解決を通して新しい数理を生成すると共に，生の事象の数量化の仕方や問題解決のための場や条件の設定の仕方（学び方）を身に付ける。	○数量化や数理の生成が行いやすい典型的事象の選択 ○数量化の手順の明確化 ○問題解決の場の設定の仕方や条件整備の意識化
生かす	生み出す段階で身に付けた数理を基に，新たな追究主題②を生み出し，残りの事象群から選択して主体的に数理を活用し続ける問題解決活動を行い，活用できた喜びを味わうとともに活用できないものもあるということをとらえ，算数の有力さと自分の活動を振り返って評価する。	○追究主題②を生み出させる複数事象群の選択の場 ○主体的な追究ができるようにするための学習計画表の提示 ○数量化を促す個別的な支援

３．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第５学年　単位量当たりの大きさで比べよう

(2) 本単元の考え方

本単元は，内包量を用いて，これまで数量を用いて表すことのできなかった大きさの程度を数量化して比較することができるようにし，数理が生活に有益に活用されていることのよさを味わい，算数を生活に進んで活用しようとする体験を豊かにすることをねらいとしている。

子供と創る具体的な内容は，次の３点である。①単価のように個数と価格の２つの量に依存して決まる量があることをとらえることができること。子供たちは，これまで，長さやかさ，重さなどのように，単位を決めて，そのいくつ分で大きさを比べたり測定したり，計算によって求めたりすることができるようになっている。そこで２量に依存して決まる大きさがあることをとらえ，その表し方を取り出していく。②濃度，速さ，密度などの内包量について依存する量を取り出し，その大きさを２量のうちの一方を（単位量に）そろえて比べること。子供たちは，日常の生活で「速い」「遅い」というようにものごとの程度の大小を表す言葉を無意識に用いている。しかし，速さを直観的に比べることはできても，数で大きさを表したりすることはできないのが現状である。そこで，２量のうちの一方を単位量にそろえることによって，内包量を比べる活動を行っていく。③生活で「速い，遅い」「濃い，薄い」「高い，安い」などの言葉が用いられる場面を算数の学習で取り出した内包量を活用して表すことに挑戦することができることである。単価で生成した単位量で表すという数理を濃さのように味覚によって曖昧にしか判断できないことに子供自らが活用し，「食塩の重さ」÷「水の体積」のように数量化してきちんと表すことができないかと新たな課題に挑戦しようとする向上心を育てることである。

本単元の指導にあたっては，２量に依存する量を単位量当たりの大きさで比べる考えを生活のなかの事象に自ら用いることができるようにし，数理が生活に役に立つということが実感でき，自分で生活に数理を活用できたという実感を味わえるようにする。そのためには，まず，日常生活で，「速い，遅い」「濃い，薄い」「長い，短い」などものごとの程度を表す言葉を取り出し，既習の外延量を使って表せるものとそうでないものを分類することで，外延量で表せないものも量を使って表せないかという問題意識（追究主題①）をもつ。そこで，外延量で表せないもののなかから品物の値段の割安さを取り出して，具体的に①どんな場面を設定して比べるか，②比べるためにそろえておかなければならない条件は何かなど，生の生活事象の加工の仕方を身に付けさせながら，比べる場面を作る。そして，２量に依存する内包量の大きさを比べる際に３つ以上の品物の割安さを比べる場を設定することで，２量のうちの一方を１や10などの単位量にそろえて比べる考えのよさをとらえる。つぎに，割安さで身に付けた単位量あたりの大きさで比べるという数理とそのために用いた学び方を，他の事象に当てはまるものはないかという問題意識（追究主題②）をもたせ，数理活用体験を仕組む。そこでは，自分の追究したい事象を選択し，①どんな比べる場面を設定するか，②どんな条件が必要か，③実験などに必要な準備物などをきめて「速さ」や「濃さ」を比べる場面を自分たちで計画をつくる。そして，計画に基づいて，「速さ」や「濃さ」の比べ方を調べる。その結果をグループごとに交流して「速さ」や「濃さ」の表し方をまとめるという活動を仕組み，身に付けた数理の活用ができたという喜びを味わえるようにする。

(3) 目　標

① ２つの量に依存して決まる量の大きさを一方を単位量にそろえて比べることができる。

② 曖昧な「速さ」「濃さ」などの生活の言葉を算数を使って明らかにしようと自ら追究することができるとともに，単位量の考えが生活に生かされることによさを感じることができる。

(4) 計　画（１４時間）

段階	学　習　活　動　と　内　容	おもな手だて
つかむ／生み出す／生かす	１．程度を表す言葉の比べ方について話し合い，本単元の追究主題①をつくる。 ―――――――― 2 ○　身の回りでものごとの程度を表す言葉を取り出すこと ○　既習の外延量で比べられるものと比べられないものに分類すること ○　外延量で表せないものも量で表せそうだという見通しをもつこと 追究主題① 「高い，安い」などの言葉も比べることはできないか。 ２．既習の量で比べられない言葉から『割安さ』を取り出して程度を表す場面をつくり，程度を規定している２量を取り出して，そのうちの一方を単位量に固定して比べる調べ方を生み出す。 ―――――――― 4 (1) 商品の割安さを比べる場面をつくり，割安さを比べる方法について話し合う。…… ② ○　場面作りの条件の設定方法の把握 ・　同じ商品，値段，内容量 ○　割安さは値段と個数の両方に関係していること (2) ２量のうちの一方を揃えて比べる。…… ② ○　単位量にそろえる方法のよさをとらえること ３．速さや濃さなどの事象を選択し，自分たちで場面を設定して，単位量当たりの大きさで比べようという追究主題②をつくり，割安さでとらえた単位量での比べ方を活用する －８ 追究主題② 他のものも単位量あたりの大きさで比べられないか。 (1) 自分が調べてみたいと思う事象を選択し，グループに分かれ，それを確かめるための実験方法や場面設定などの計画を立てる。…… ② ○　３～４人のグループで実験の条件を決めること ○　必要な場や道具などの準備するもの (2) 各グループで実際に場面を設定し，実験などを行って，速さや濃さなどについて比べる。…… ④ ○　関係する２量の取り出し ○　単位量で比べる方法を用いること (3) 調べたことについて発表し，単位量の考えが使えそうなことに当てはめる。…… ② ○　各グループの実験の仕方と比べ方の交流 ○　単位量あたりの考えが活用できたよさの感得	※　ものごとの程度を表す言葉とそれが用いられる場面を出させ，大小の違いが曖昧であることについて話し合う場の設定 ※　既習の量を使って比べられるものとそうでないものの分類 ※　場面作りがしやすく，異なる２量が取り出しやすい割安さの例の選択 ※　値段が同じ事象と個数が同じ事象の提示 ※　同じ種類で値段や個数が異なる商品を比較する場の設定 ※　３つ以上の商品の割安さを比較させる場の設定 ※　つかむ段階で比べられないとしたものが，単位量当たりの大きさで表せるかという追究主題をもたせること ※　実験実測などによって比較が可能な場面に限定 ※　選択学習の時間の設定 ※　計画の立て方，必要な条件設定など各グループの活動計画に対して留意事項や準備するものについての支援 ※　比べ方が分かるような発表の場

(5) 指導の実際と考察

① つかむ段階（１～２／１４時間）

この段階は，日常生活で用いているものごとの程度を表す「長い，短い」「高い，安い」などの言葉のうち，既習の外延量は数量化することで比べられることを基に，外延量で表せないものも量で表すことができないかという追究主題①をつかむことをねらいとしている。

そのために，子供たちに自由に「長い，短い」などの対義語を出させ，それらを全てカードに書き込み，外延量で表せるものと表せないものに分類して，量で表すことについて話し合う場を設定した。子供たちは資料１に示すように，大小の程度を表す言葉を多数取り出し，既習の外延量である長さ，重さ，面積，角度，体積温度，時間，金額などの量で表せるものと表せないものとに分類しながら，表せないと考えた理由を話し合った。

既習の量で表せるもの	既習の量で表せないもの
長さ…「長い，短い」「厚い，薄い」	「高い，安い」「よい，悪い」「強い，弱い」
「深い，浅い」「太い，細い」「高い，低い」	「速い，遅い」「甘い，辛い」「濃い，薄い」
重さ…「重い，軽い」	「美しい，汚い」「うまい，まずい」
面積…「広い，狭い」	「嬉しい，悲しい」「白い，黒い」
温度…「暑い，寒い」「暖かい，涼しい」	「難しい，易しい」「おもしろい，つまらない」
時間…「新しい，古い」　など	「危ない，安全」「厳しい，優しい」

［資料１　子供たちが取り出し，分類した言葉］

T児：「僕は，『高い，安い』は表せないと思います。それは，人によって，同じものを高いと感じたり，安いと感じたりするから一概に決められないと思います。」

H児：「僕は予想なんだけどできると思います。よく，お母さんたちは広告でこっちの店が安いとか言っているので，何か比べる方法があると思う。」

I児：「T君は人によって違うといったけど，それなら，『暑い，寒い』も人によって違うから表せない方に入るんじゃないですか。」

そこで，「高い」の使い方にはものの価値を表す質的なものとものごとの相対的な程度を表す量的な違いがあることをはっきりさせ，後者の方に絞り込んでいく発問を行った。子供たちは，H児の考えにそって，２つ以上の対象があれば，既習の外延量で表せないものも，量で表して比べることができるのではないかという追究主題①を生み出していった。

考察①

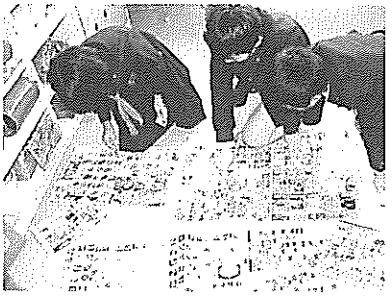
２量に依存する内包量に追究の視点を向けさせるために，日常で用いられている「長い，短い」などの程度を表す言葉を取り出し，外延量で表せるか否かで分類する活動を仕組んだ。このことで，H児の発言にみられるように生活からこれらの言葉が用いられる具体的な場面を取り出して、比較することができるという見通しをもつことができた。また，一見曖昧な「暑い，寒い」のような言葉も，温度という量で測れば比べられるように，（今はまだ表し方を知らないけれど，表し方が分かれば比べられるものが隠れているのではないか）という類推的思考が働いたことがＩ児の発言から窺える。そういう点で，既習の外延量で表せるものと表せないものに分類する活動を行わせたことは，追究主題①をとらえさせる上で有効であったと考える。

② 生み出す段階（３～６／１４時間）

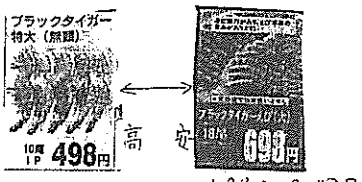
この段階では，①内包量の表し方・比べ方として，２量のうちの一方の大きさを単位量にそろえれば，比較ができるようになること，②抽象的な「高い，安い」のような言葉から程度を比べる場面を作り出す方法やそれを基にしたデータを取り出す数量化の方法をとらえることができるようにすることをねらっている。そのために，つかむ段階で既習の外延量では表せないものに分類した中から「高い，安い」を取り出して，比較する場面の作りだし方，数量化の仕方，比較の仕方という手順で学習を展開した。まず，比較する場面の作り出し方として，何の「高い，安い」を比べるかという発問を行った。子供たちは，商品のお買い得さを比べるという考えを出し，具体的な商品の値段についての

情報を手にいれるため，広告で調べる，実際に店で買うという方法を取り出した。広告を使って，２つの店の肉の安さを比べたＫ児は，１つの店でもいろんな部位の肉によって値段が異なることから，同じ部位でないとどちらが安いか判断できないことに気付いた。次に２つの店から，国産の牛モモ肉と輸入牛のモモ肉を取り出したが，値段の大きな違いに疑問を抱き，質が違うから比べられないと気付き，比べることができるための条件を以下のように設定していった。

- ○　同じメーカー（産地）の同じ製品であること
- ○　内容量や数は違っていてもよいこと
- ○　玉子のようなものは同じサイズであること



［写真1　広告を使って2つの商品を取り出しているD児］



［資料2　取り出した2つの商品］

そして，いくつかの広告からこの条件に合うものを探す中で，自然と次の２つの事例のようなものを取り出してきた。

例１

Ｋ社のティッシュ
Ａ店　５箱……１９８円
Ｂ店　５箱……２９８円

例２

スウィーティー
Ｃ店　３玉…３９８円
Ｄ店　４玉…４８０円

大きい方	1にそろえる	最小公倍数	最大公約数	
180÷4=45 45×6=270円	180÷4=45	180×3=540	180÷2=90	A
230円	230÷6=38.3	230×2=460	230÷3=76.6	B
270円	45円	180×15 =2700	180÷4	A
230円	38.3円	230×10 =2300	1にそろえると同じ	B
210÷5×6 =252円	210÷5=42 42円	210×12 =2520		C

［資料3　2量の一方をそろえる方法を比べたノート］

割安さは，数（重さ）と値段に関係があるということをとらえた上で，例１の場合は数が同じなので，値段だけで比べられるが例２の場合は，数も値段も違うのですぐには分からないということを話し合った。そこで，例２も数を同じにすれば比べられるという見通しをもって，個数を同じにする方法をとらえた。そのなかで，①どちらか一方の数にそろえる，②両方の公倍数にそろえる，③１にそろえる，④公約数にそろえるなどの方法が出された。どの方法でも比較できることを確かめた上で，１にそろえる方法のよさをとらえさせるために，３つ以上の商品を比べる場面を設定した。１にそろえる方法は，困難であることが話し合われた。そして，いろいろな商品の「高い，安い」を単位量にそろえて比べることができた。（資料３）

> 単位量の考えはとても分かりやすく比べられ，とても便利だからこれからの生活などに使いたいと思いました。
>
> Ｏ児の感想

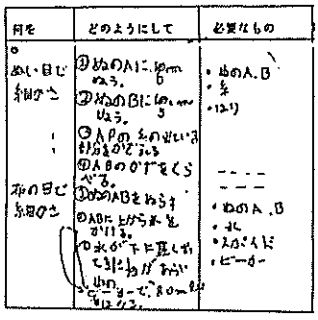
考察②

「高い，安い」という言葉から比較する場面を作り出す活動を行っていったことで，Ｋ児のように広告のたくさんの商品から，比べるのに適した商品を選び出す際に，品質などの条件をそろえなければならないことに自ら気付くことができた。そして，例１や例２のような情報が同時に含まれている広告を学習素材として選んだことが，２量の一方をそろえるという考えを子供が自然と取り出すことにつながった。また，広告は比較する商品の数を増やすことが容易にできることから，本単元の中核となる『２量の一方を単位量あたりの大きさにそろえて比べる』方法のよさを味わうことができた。（資料３，Ｏ児の感想）

③　生かす段階（７～１４／１４時間）

ここでは，生み出す段階で身に付けた調べ方を基に，その他のものも２つの量を組み合わせて，単位量で比べることはできないかという新たな追究主題②をもって，自分の選択した言葉をもとに実験や実測を行ってデータを取り出し，他にも２量の関係で表せるものがあること，それらが単位量あたりの大きさで比べられることを実感し，生活に単位量の考えを活用する体験をもち，その喜びを感じることをねらっている。そのために，つかむ段階で取り出した言葉から選択して，自分で計画を立てて調べる活動を仕組んだ。

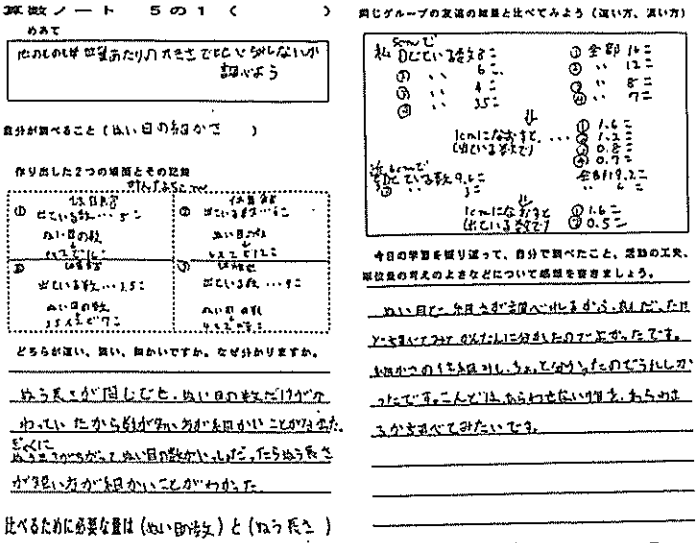
K児は，家庭科の時間に友達から指摘された縫い目の粗さを問題として，何が「細かい，粗い」を決めるのかを調べるために，資料４の計画を作り，自分で必要な材料などを揃えた。K児は，５ｃｍの長さを縫い目の細かさが異なる２つの縫い方で縫ってみて，その縫い目の数が多い方が細かく，少ない方が粗いのではないかと予想した。（資料５）



［資料4 K児の学習計画表］

その考えが正しいことを確かめると，同じ活動をしていたA児（縫う長さを６ｃｍにしている）と比べるために，１ｃｍ当たりの縫い目の個数を計算し，どちらの縫い方が細かいかを比較することができた。

休み時間にハンドベースボールで遊んでいるH児は，投げたボールの速さを比べようと意図的に速い球と遅い球を投げ分けたり，距離を変えて投げたりしながら，時間と距離が速さに関係があることをとらえると友達と速さ比べを行った。



［資料５　縫い目の細かさを比べたK児の学習ノート］

	投げた距離	かかった時間	速　さ
H児	20m	0.96秒	20÷0.96＝20.8
O児	15m	0.7 秒	15÷0.7 ＝21.4
M児	10m	0.58秒	10÷0.58＝17.2

投げた距離が違う友達とも１秒あたりの速さを求めることで比べることができたことに満足し，次の感想を述べた。

「投げたときの計測がむずかしくてちょっと困ったけど，単位量の考えは比べにくい数を分かりやすく表現するのにとても便利なのでとても使いやすいと思った」

さらに交流において，色の濃さを調べた友達が数量化できなかったということを明らかにしたことで，「表せないものもあるんだな」と単位量の考えが適用できない例もあることをとらえた。

［写真2　投げるボールの速さを調べるH児］

考察③

自分の計画に基づいて実験や実測を行いながら，数理を活用する体験をもたせたことで子供たちは意欲的に追究しながら，資料５のK児の感想で見られるように２量を使って表せるものが他にもあることやH児のように単位量の考えが活用できたことを自らとらえていくことができた。さらに２量では表せないと考えているものについても追究してみたいという意欲をもつことができた。このことは，生活のことがらに生み出す段階で身に付けた比較場面の作り方，数量化の仕方などの学び方を生かしながら単位量の考えが活用できるかを自ら体験している姿の現われであると考える。

４．全体考察

本単元の学習を通して，身に付けた数理を他の事象にも活用できないかという追究課題をもちながら，日常の生活事象に数理が活用できた喜びを味わっている姿（資料５）が見られた。これは，①子供が自分で活用させる事象を探し，条件を決めて数量化し，追究場面を設定できるようにした学習材の工夫と②生み出した数理を主体的に活用できるような学習の流れをもった単元構成が有効に働いたからであると考える。

自らの健康をつくりだす体育科学習

体育科部主題についての説明

○　豊かな人間育成のために体育科に求められていること

現在，様々な生活環境の変化により，子供たちの健康には，大きな２つの問題が指摘されている。一つは，生活習慣病の低年齢化，体力・運動能力の低下など遊びを中心とする運動生活の縮小や食生活の乱れを要因とした体の健康に関わる問題。今一つは，いじめや不登校など生活の様々なストレスや感情の不安定な状態を要因とした心の健康に関わる問題である。以上のような現状を踏まえ，豊かな人間の育成における体育科の役割として，たくましく生きるための健康や体力の獲得に向けて，自らの心と体の状態に目を向けながら，生涯にわたって運動を主体的に実践し，自己の健康に働きかける力を育むことが大切である。また，このような力を育む学習は，全体テーマで述べている学習へのかかわりを重視することで具体化できる。体育科においては，子供が健康という視点から自己の運動生活を見つめ，課題を見出したときに，かかわりが生まれる。そして，その課題解決の過程において，自分なりの働きかける力（知恵）を発揮しながら，教科内容を獲得していくのである。

○　自らの健康をつくりだす体育科学習とは

健康とは，身体的，精神的，社会的側面から，自己の運動生活が良好な状態ととらえる。健康をとらえる３つの側面における要素や良好な状態については，以下のようにとらえる。

健康の側面	要　素	目標とする良好な状態
身体的側面	運動技能 行動体力	・単一な動きの享受から多様で巧みな動きの創造 ・感覚的で一面的な捉えから科学的根拠に基づく多面的な捉えの獲得
精神的側面	肯定的感	・運動に対する自己効力感の享受から創造
社会的側面	仲間関係	・自己中心的で特定な仲間とのつながりの享受から他者志向的で多様な仲間とのつながりの創造

ここでいう運動生活とは，単に移動のために歩くなどの身体運動が手段的に行われるものではなく，子供の生活の中で，遊びや体育の学習など身体運動が目的的に行われる生活のことである。

自らの健康をつくりだす体育科学習とは，身体的，精神的，社会的に良好な運動生活に向けて，自己の運動生活に対する自分なりの働きかけ方を見直し，工夫していく子供主体の学習である。健康の３側面の構造については，個人が運動による達成感を味わうなかで身体的・精神的側面からの健康が充実すると共に，仲間と楽しく運動を共有するなかで，社会的側面からの健康も充実していくと考える。さらに，互いに影響しあうことで，より高まっていくものである。

子供が自らの健康をつくりだす学習を具体化するためには，達成したい目標に向けた課題を身体的側面からとらえ，その解決方法を自己決定し，工夫していく過程において，目標達成の成功体験を積み重ねることが大切である。このようにして高められた精神的健康としての自己効力感は，主体的に運動を継続する態度につながり，さらなる身体的健康の向上も期待できるのである。

○　自らの健康をつくりだす子供とは

○　自己の運動生活を身体的・精神的側面からとらえ，その向上に向けて働きかけ方を自己決定し，工夫している子供
○　自己の運動生活の向上を働きかけ方の工夫と関連させてとらえ，自信をもっている子供
○　より高い健康の実現を目指して新たな意欲をもっている子供

これらの姿は，次のような資質・能力に支えられている。○自己の身体的・精神的側面から課題をとらえる課題把握力，○運動生活の向上に向けて働きかけ方を工夫し，決定する判断力・自己決定力，○自己の働きかけ方を振り返り，高まりをとらえる自己評価力。

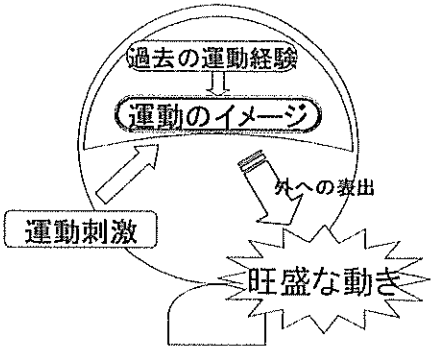
運動のイメージをもって表出する低学年の学習構想

体育科部　笠　宏照

１．主題の意味

(1) 運動のイメージをもって表出するとは

【運動のイメージをもって表出すること】

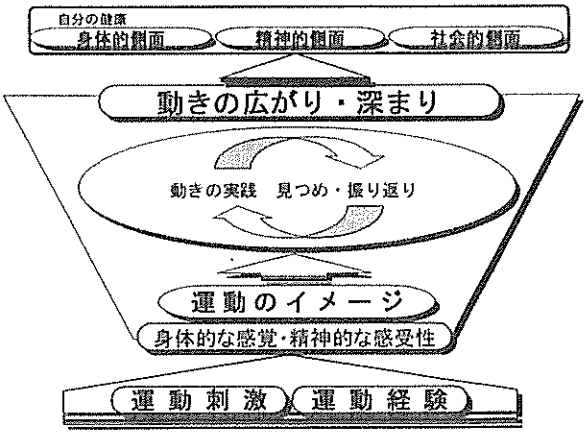


子供が外部からの運動刺激を受け止め，身体的な感覚や精神的な感受性を働かせ，「やってみたい」「こうありたい」というイメージを基にして旺盛に自分のからだを動かすことである。ここでいう運動のイメージとは，運動刺激と過去の運動経験を自分の中で結び合わせながら創り出すものであり，それが外に向かって表出されるとき旺盛な動きになるととらえる。子供が受け止める運動刺激は，走る・跳ぶ・回るなど動きの内容と速さ・高さ・長さなどの動きの要素が含まれたものである。このように運動のイメージをもって活動することによって，動きの工夫や広がりなどの身体的側面や感受性を働かせるという精神的側面などの発達が期待でき，自分の健康をつくることにつながるものである。このような本研究には，以下のような価値があると考える。

○　子供の感受性を働かせた運動を展開することで精神的側面を安定できる。
○　自分がイメージした多様な動きを実践し運動技能が広がることで身体的側面を高める。
○　動きを通して自分を表出することを積み重ねることで，心身を解放しながら健康にかかわる身体的・精神的側面を充足できる。
○　相互交流による動きを通したかかわりによって，社会的側面を高めることができる。

(2) 運動のイメージを持って表出する低学年の学習構想とは

【運動のイメージを持って表現する学習】



低学年において，子供が創りだしたイメージを基にした，運動の実践とそれを見つめ・振り返る活動を繰り返し行いながら，自分の動きを広めたり深めたりするような学習を展開することである。低学年の子供は，運動刺激に応じて様々な運動のイメージをもつことができる。運動のイメージが豊かであれば，それを基にして身体で表出される動きも広がりと深まりをもったものとなる。よって，過去の運動経験と運動刺激を十分にとらえさせることによって，子供が創り出す運動のイメージを豊かにし，動きに広がりや深まりが見られるような学習を展開していくものである。

(3) 本研究で期待する子供の姿

運動へのイメージを持って表出する子供の姿とは，具体的には以下のようにとらえることができる。

○　いろいろな刺激を受け止める感覚や感受性を十分にもつ子供
○　感覚や感受性を働かせ，イメージをもって自ら運動をつくる子供
○　イメージする動きに向かって心身を解放してのびのび運動することができる子供
○　動きを表出できた自分を振り返り，達成感を味わうことができる子供

２．学習の具体的構想

(1) 運動のイメージをもって表出する低学年の学習の教材化について

教材は，子供の運動のイメージが豊かになるように，子供が経験した運動の内容をとらえるとともに，動きに結びつくような多様な運動刺激を連続的に付加することができるような内容を選定する。付加する運動刺激の条件としては，子供が身体的な感覚や精神的な感受性を働かせながらとらえることができるような，基礎的・基本的な運動内容と速く・高く・遠くなどの運動要素が含まれたものである。低学年では，特に動物や乗り物など具体的なものを運動刺激として提示しながら運動内容と運動要素をとらえさせる必要がある。また，子供たちの過去の運動経験については，内容，関心・意欲などを十分に把握する。運動内容は，子供の発達特性も踏まえて低学年では十分に活動することを主体としながら，子供が発想する運動のイメージと結びつく跳ぶ・走る・回るなどの動きを重視する。

以上のようなことから，下記の教材の要件のいずれかを満たすものとする。

○　イメージとして結びつくような基礎的・基本的な運動内容と運動要素をもつこと
○　自分で動きをつくり楽しく活動しながら，運動を見つめ，振り返る過程で，動きの変化を数的・質的な広がりや深まりとしてとらえ，運動の喜びを味わうこと
○　様々な刺激に応じて，子供のイメージやアイディアが豊富に動きへと生かされること

(2) 運動のイメージをもって表出する学習活動について

子供たちが運動刺激と運動経験を組み合わせて運動のイメージをもち，それを基に動きを広げたり，深めたりできるように，運動刺激を連続的に設定していくようにする。低学年の子供の発達段階からはじめの運動刺激は，イメージを広げながら動きをとらえやすい具体的なものとする。そして，運動内容を広げたり，運動要素を深めたりできる運動刺激を付加していくようにする。また，イメージを持って身体活動を追究する中で，動きを見つめ，振り返りながら達成感を感得できるようにする。そのために，学習過程を「つかむ」「ふかめる」「味わう」の３段階で構成し，以下のような活動を設定する。

①　つかむ段階：運動刺激を受け止め，自分の運動経験と合わせながら，運動のイメージを基にどんな活動をしていくか，方向性をとらえる活動である。

②　ふかめる段階：運動のイメージを深め広げながら，旺盛に活動して動きの課題を解決する過程で，動きをつくったり，工夫したりして，数的・質的な変化を評価する。そこで，「できた」「やった」という達成感を積み上げていく活動である。

③　味わう段階：動きの課題を解決し旺盛に活動を行う中で，数的な広がりや質的な高まりのある動きを発表し，達成感を味わい実感していく活動である。

(3) 基本的な学習の仕組み

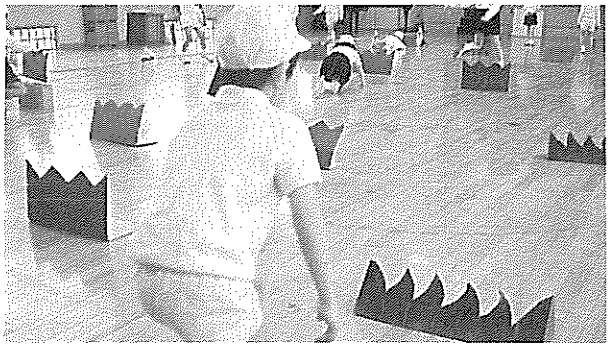
段　階	つ　か　む	深　め　る	味　わ　う
活　動 と 内　容	１．活動の方向性と動きの課題をもつ。 ○　運動との出会い ○　活動の方向性と追究する課題をとらえること ○　刺激を受け止め，運動イメージをもつこと	２．運動のイメージを広げ，動きをつくったり，工夫したりして達成感を積み上げる。 ○　動きの課題に応じて，場やルールへ働きかけること ○　課題に応じた動きの創造工夫	３．活動を振り返り，追究してきた動きを発表しあいながら達成感を味わう。 ○　動きを発表し合い，達成感を実感すること ○　日常生活での実践意欲を持つこと
手だて	○　運動のイメージをもつ活動の設定 ○　動きの課題を明確にする運動との出会い	○　動きの高まり・心の爽快さを表現する場の設定 ○　動きを変化させる映像刺激の提示 ○　動きを振り返り評価する活動	○　動きの工夫点・創造点の取り出しと発表による交流の場の設定

３．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第１学年　どうぶつになって　たのしくとびまわろう

(2) 本単元の考え方

本単元は，心身ともに解放しながら楽しく活動するなかで，いろいろな「跳ぶ」運きを獲得して，基礎・基本となる運動技能を身につけることと，イメージする動物になったり，特徴的な動きをとらえたりしながら動きを見つめ振り返る中で動きの広がりや深まりを感得することをねらいとする。具体的な内容は，①楽しく遊びながら空間（距離・高さ・方向）・リズムを変化させて跳ぶ動きを工夫したり広げたりすることができること，②自分が選んだり考えたりした跳ぶ動きに応じて用具を用いたり場を工夫したりすることができること（写真１），③動きの課題をもとにした活動の中で達成感を味わいながら心身を解放し思い切った活動を通して，自分の心の安定について実感すること，④子供たち同士お互いに協力し合って動きや場を考えながら交流すること，などである。このような本単元には以下のような価値がある。



【写真１：とびまわってあそぶ姿の例】

① 動物になって楽しく遊ぶ中で「こんな跳び方をしよう」という意識から課題をもって跳ぶ動きにかかわることができる（課題把握力）

② それぞれ自分の「跳ぶ」動きを考える中で，空間（距離・高さ・方向）・リズムを変化させながら動きを工夫したり，その動きに応じた場を選んだり，工夫したりしながら活動することができる（課題解決力・自己決定力）

③ 達成課題をもってそれを解決する過程で達成感を感得したり，思い切り活動して心身を解放したり心の安定を図ることができる

④ 動物になって楽しく活動するなかで動きについて子供たち同士お互いの活動や心のふれあいを評価し合うことができる（自己評価力）

本単元の指導にあたっては，子供が心身ともに解放しながらイメージする動物になって楽しく遊びながら運動の基礎的・基本的となる多様な跳ぶ動きを身につけたり，運動課題を解決する過程で達成感を感得することができたりするようにしたい。そのために，子供が動物の動きによる刺激を通して「こんな跳ぶ動きをしたい」という運動のイメージを基に活動し，さらに，動きを工夫していくことができるような場を構成しながら，「跳ぶ」動きを広げ課題に対して評価する活動を通して，達成感を感得していく学習を構成する。まず，つかむ段階では，子供たちに動物になることを通して「跳ぶ」動きに対するイメージをもたせるようにする。そのために，動物が跳ぶ動きのビデオを視聴させることで「跳ぶ」ことについて刺激を与え，具体的な「跳ぶ」動きのイメージや課題をとらえさせる。次にふかめる段階では，自分がイメージする動物になって楽しく活動しながら，自分が考える跳ぶ動きを課題としながら，空間（高さ・距離・方向）・リズムなど運動要素に変化のあるいろいろな「跳ぶ」動きを身につけることができるようにする。そのために，空間（高さ・距離・方向）・リズムに変化のある多様な場を構成する。この場については，すべての子供たちが動きを経験することできるように，各学習時間に運動要点を付加することによって動きに広がりをもたせ，子供たちが活動する中で動きを獲得していくようにする。また，子供たちがやってみたい動きを課題として評価するように，自分の動きを記録できる学習カードを準備し，小さな達成感を感得できるようにしていく。あじわう段階では，自ら選び工夫してきた動きを生かすことができるように，自分たちで場を構成しながら，思い切り跳ぶ活動を楽しく行っていくようにする。

(3) 目　標

1．動物になって，空間（高さ・距離・方向）やリズムを変えながら跳ぶ動きを創造したり，工夫したりして楽しく遊ぶことができる。

2．活動の見通しをもち，動きを見つけたり，場をつくったりして，活動を工夫することができる。

3．のびのびと活動をするなかで，体や心を解放しながら，課題に対して跳ぶ動きを広げ，深めた達成感を感得することができる。

(4) 計　画（4時間）

段階	学習活動と内容	主な手だて	
つかむ	1．単元「どうぶつになってたのしくとびまわろう」と出会い，跳ぶ動きについて課題を設定する。 (1) 「跳ぶ」動きに特徴ある動物のビデオを視聴して，動きについての関心を持つ。 ○ 跳ぶ動きの楽しさや特徴をとらえること (2) 跳ぶ動きについて課題をとらえ，学習の見通しを持つ。 追究主題 いろいろなどうぶつになって，たのしくとびまわってあそぼう ○ 空間（距離・高さ・方向）・リズムに違いのある場で試しの動きをすること	○ 子供にとって刺激のある動物の跳ぶビデオを準備し，視聴させる。 ○ 運動要素をとらえる場を準備し，ためしの活動を行わせ，跳び動きの広がりや深まりをとらえさせる。	1
ふかめる	2．空間（距離・高さ・方向）・リズムを変化させながら，動物になって様々な跳ぶ動きをつくって楽しくとびまわることができる。 (1) 距離や高さをいろいろ変えた跳ぶ動き楽しくする。 カエルやバッタになって，たのしくとびまわってあそぼう。 ○ 高さの変化に応じた動きのイメージをつかむこと ○ 場に応じて，距離・高さ・方向などの動きの課題に応じた活動を動物になって楽しむこと ○ 距離や高さを変化させて跳ぶ動きを楽しむこと (2) 方向やリズムに変化がある場で，動きを工夫しながら跳ぶ動きを楽しくする。 カンガルーやうさぎになって，たのしくとびまわってあそぼう ○ 連続したリズムのある動きをつかむこと ○ 自分がなった動物の動きのリズムをとらえること ○ 方向を変化する動きをつかむこと	○ 子供に応じた多様な動きを実践できる場の設定 ○ 距離や高さの課題をとらえさせる動きのビデオ提示 ・高さ：跳び越えるための教具 ・距離：長さの異なる教具の配列 ○ 教具の操作させることによる動きの広がりや深まりの感得 ○ 学習カードへの動きの記録 ○ リズムの課題をとらえさせる動物の動きのビデオの視聴 ・リズム：間隔を変化させた教具の配置 ○ 教具の操作させることによる動きの広がりや深まりの感得 ○ 学習カードへの動きの記録	2 ① ① 1
あじわう	3．創造した動きができる場を構成し，課題に対する「できた」「やれた」動きをのびのびと発表し合う。 ○ 広がった，深まった動きの表出 ○ 心身共に解放した活動の感得	○ 広がりや工夫点を確かめる活動の設定 ○ 一般化へ向けた遊び方の提示や活動の設定	1

(5) 指導の実際

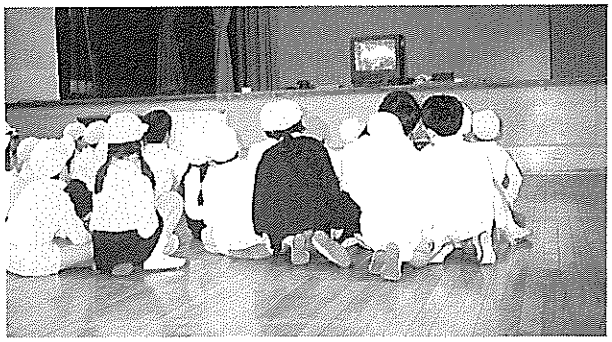
① つかむ段階（１／４時間）

この段階のねらいは，いろいろな跳ぶ動きをする動物のビデオを視聴し，試しの活動を行いながら，どんな跳び方を楽しむことができるかという活動の方向をとらえさせることである。

子供たちに跳ぶ動きをする動物についてどのようなイメージをもつか質問を行った。そこでは，（資料１）のように，それぞれの特徴ある動きをする動物とその動きのイメージをもっていた。そこで，それぞれの動物と具体的な動きを結びつけてとらえることができるように動物の動きのビデオを視聴するような場（写真２）を設定した。さらに，自分がなりたい動物の動きをはっきりとらえるようにするために，ためしの「跳ぶ」活動を行わせていった。（写真３）視聴させたビデオの動物は，空間（高さ・距離・方向）やリズムに特徴あるものを映像化したが，画面を見る中で，子供たちは，例えば「カンガルーは，調子よくおもしろい跳び方をしている」など，カンガルーの動きの特徴をとらえながら，リズムに対する興味をもつことができている。その他にも資料１に上げているような動物とその動きのイメージをもつ子供が多くいる。そのような活動の結果，動物になりながら動いてみたいという意欲や動きの課題をもつことができるようになってきている。（資料２）

～跳ぶ動物と具体的な動きのイメージ～
カエル：リズム・遠く・高く
カンガルー：リズム・高く・遠く
バッタ：高く・遠く
うさぎ：リズム

【資料１：「跳ぶ」動きについての考え方】



【写真２：動物の映像を見る子供】

【写真３：ためしの活動の様子】

考察①

子供たちは，（資料２）に見られるように，動物になって動くことに対して関心をもつことができた。これは，感動的に跳ぶような動物の動きを収録したビデオを視聴させたことが有効であったと考える。さらに，それぞれの動物になって動きの課題を捉えようとすることができた。これは，ビデオの視聴に続けて具体的な動きのイメージをもとに試しの動きを行わせたこと，課題をとらえる場を用意したことが有効であったと考える。

きょうは、たくさんびでおをみました。どうぶつがいろいろなとぶところです。とってもかっこよかったです。あまりきにしていなかったけど、なんだかどうぶつさんになってとんでみたくなりました。ぼくがすきなのは、バッタです。きょうのビデオで、バッタは、じぶんのしんちょうよりももっとたかくとぶことがわかりました。くさのあるばでとんでみて、たかくとんでみたいなとおもいました。あしたからは、どうぶつさんになってしっかりとぶあそびをしていきたいです。

【資料２：つかむ段階の子供の作文】

② ふかめる段階１（２／４時間）

この段階のねらいは，空間（距離・高さ・方向）・リズムに変化のある場で，子供たちが動物になって跳ぶ動きをつくっていきながら，楽しくとびまわることができるようにすることである。ここでは，大きく２つの場と活動を設定した。すなわち，第２時は主に距離や高さについて，第３時はリズムや方向についてそれぞれ運動のイメージをつかみ，変化を見出す動きの特性をとらえるような場を設定しながら跳ぶ動きを楽しくすることである。

第２時では，まず，子供が遠く・高く跳ぶイメージをとらえやすくするために，距離や高さを意識したバッタとカエルが跳ぶビデオを視聴させた。また，活動する場は主に距離を課題とする川とびコース，主に高さを課題とする草越えコースを設定した。

【写真４：川跳びコースを跳ぶＫ児】

その中で，Ｋ児は，力づよく遠くへ跳ぶ動きに関心をもった。ビデオ視聴後は，距離を課題にする川跳びコースを使いながら遠くへと跳ぶ動きを工夫した。（写真４）また，Ｏ児は，力強く高高く跳ぶ動きに関心をもった。ビデオ視聴後は，高さを課題にする草越えコースを選び高く跳ぶ動きを工夫しながら活動をした。（写真５）また，ここでは草の高さを操作できるようにしたが，Ｏ児はブロックを草の下において高さを変える操作を行い高い場をつくった。（写真６）その後，高くなった場で跳ぶ活動を行ったが，はじめの跳び方では草に足がかかり，片足で跳び越すような動きを自分で創っていった。（写真７）それぞれの動きについては学習カードに絵や文でまとめていった。

【写真５：草越えコースを跳ぶＯ児】

【写真６：教具の操作を行うＯ児】

【写真７：操作後のＯ児の活動】

考察②

子供たちは，距離や高さに特徴をもたせた場の中で，動物になりながら自分のイメージした動きで，長く跳んだり，高く跳んだりしながら楽しく跳び回ることができた。それは，Ｋ児やＯ児のように，それぞれの場において，自分がイメージした動物の動きで旺盛に活動していることからもわかる。このことは，ビデオによって子供が跳んでみたい動物をイメージさせたことが有効であった。また，同じ高さを課題にする動きの中でも跳び方に広がりをもたせることができた。（写真５・７の比較より）これは，道具を操作することによる場の変化が有効に働いたためであると考える。また，子供たちに学習カードを書かせたことによって子供たちは自分の動きの様子を捉え，達成感を感得しているといえる。（資料３）これは，自分の動きを学習カードに書かせる評価をさせたことが有効であると考える。

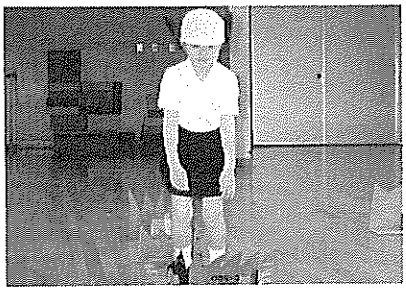
【資料３：第２時の学習カード】

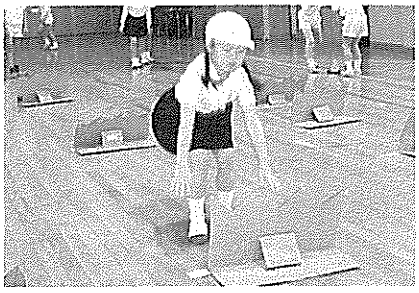
③　ふかめる段階２（３／４時間）

第３時のねらいは，リズムや方向に変化のある場の中で子供たちが動物になりきっていろいろなリズムで跳ぶ動きを楽しむことができることである。まず，子供がリズムを意識しながら動物と動きのイメージをとらえやすくするために，リズムを意識した動物の跳ぶビデオを視聴させた。また，場は主にリズムを課題とする連続的に教具を配置した物である。

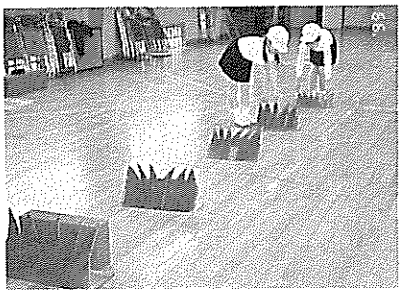
Ｍ児は，ビデオ視聴後，うさぎのように調子よく跳ぶような動きの課題をもった。そして，連続的に教具が配置された場で，うさぎのように手を前に向けて，いろいろな間隔に配置してある場の中で

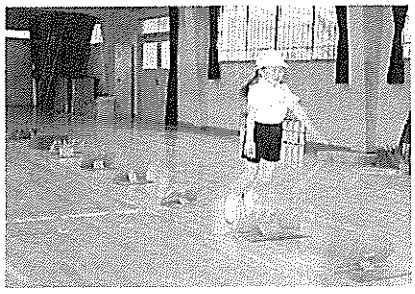
調子よく跳び越す活動を行った。(写真８・９) M児は，写真８の間隔は狭くて跳びにくく，写真９の間隔をもっと跳んでみたいと考え，場を操作しながら，さらに長い場をつくった。(写真１０) 自分がつくった長さのある草を跳ぶ場で調子よく跳ぶ活動を行った。(写真１１)

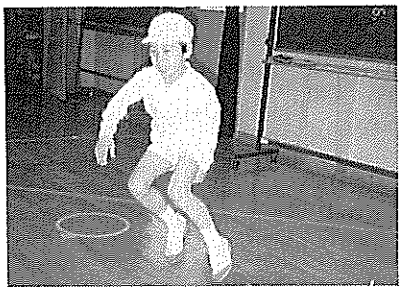

【写真８:間隔が狭い場を跳ぶM児】

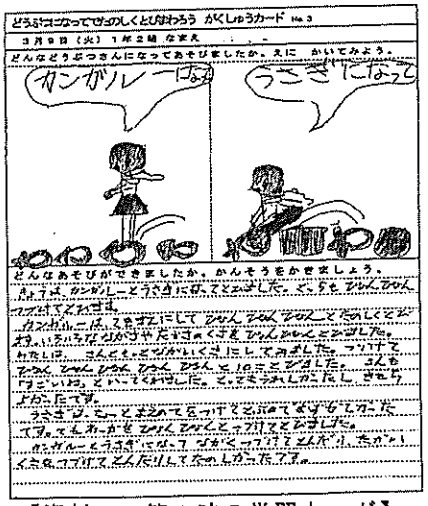

【写真９:間隔が広い場を跳ぶM児】

方向については，K児のようにいろいろな足の動きが出てくるように場をつくりかえて，跳ぶ方向を工夫して跳ぶ活動を行った。(写真１２) 子供たちは，学習カードにそれぞれの活動についてまとめながら，自分たちの動きの達成感を感得していった。


【写真１０:教具をつなげるM児】


【写真１１:長くなった場を跳ぶM児】


【写真１２:方向を工夫して跳ぶK児】



【資料４：第３時の学習カード】

考察③

子供たちは，リズムや方向に特徴を持たせた場の中で，動物になりながら自分のイメージした動きで，調子よく跳んだり，方向を工夫して跳んだり楽しく活動することができた。M児やK児のようにそれぞれの動きに対して場を工夫しながら動きを広げる姿が多く見られた。これは，動きの要素に多様な場を設け，それを操作することができる場や活動を設定したことが有効であった。また，子供たちは，自分の動きを学習カードにまとめる中で動きの広がりや深まりをとらえ課題の達成感を感得できた。(資料４)

④ まとめる段階 (４／４時間)

「できた」「やれた」動きを発表し合うことができる段階である。子供たちは，動きの要素をとらえながら，工夫した動きを全身を使って表出し合う姿を見せ合うことができた。

どうぶつになってとびまわろう

どうぶつになってあそびながら、いろいろなとびかたができるようになりました。たかくとんだり、とおくにとんだり、リズムよくとんだりしました。せまいところをピョンピョンすばやくうごいたり、ちいさくとんだりするところはとてもおもしろかったです。わたしは。うさぎのところでもっとたくさんとんでみたいとおもって、くさをたくさんならべてとんでみました。そしたらとってもながくなったところをとんですっきりしました。ほかにもたくさんできるようになってとてもたのしかったです。

【資料５：学習後の感想】

４．全体考察

本単元を通して，子供たちが動物を通した運動のイメージをもって思いきり活動する姿を具現化することができた。それは，跳ぶ動きに高さ・長さ・方向・リズムなどの運動要素をとらえる動物のビデオや運動の場などの運動刺激を連続的に設定したことが有効に働いたものと考える。

課題としては，他の運動内容においてどのようにして運動イメージを持たせるか，その方法を検討していくことが必要である。

運動への自信が高まる学習の構想

体育科部　稲津一徳

１．主題の意味

(1) 運動への自信が高まるとは

運動への自信とは，自己がある身体運動を行う状況において，適切な行動をとり，成功させることができるという予測のことである。

> 運動への自信が高まるとは，ある身体運動を成功させることができるという予測が，それまでの経験や感覚的な根拠に基づく予測に加え，科学的な根拠（運動処方）に基づくより明確な予測へと変容し，高い目標設定ができるようになることである。

この運動への自信を高めることには，次のような価値があると考える。

○　運動を成功させることができるという自信は，運動への働きかけを主体的にし，より質の高い学習内容の獲得ができる。

○　運動で味わった自信は，さらなる運動への意欲を高め，運動技能や体力の向上につながる。

(2) 運動への自信が高まる学習の構想とは

> 子供たちの運動生活の中から，自己の向上を実感できるような身体運動と出会わせ，運動技能や行動体力からその目標達成に向けた課題を捉えることができる具体的な体験活動を通して，課題や課題解決の見通しをもつ。さらに，自己の課題に合った解決方法を科学的運動処方を基に自己決定し，工夫しながら目標達成の成功体験を積み重ねていく学習を展開することである。
> ここでいう成功体験は，目標達成に向けた課題解決過程で味わえる小さな成功体験から，目標達成によって味わえる大きな成功体験へとふくらんでいくものである。

子供たちが，成功体験を積み重ね，楽しく学習を行うためには，上のような学習の過程において，次の２点に留意しながら学習を進めていく。

①　科学的運動処方に基づく課題解決方法の設定

子供たちが，目標達成への明確な見通しと根拠をもって課題解決ができることが，運動への自信を高める上で大切である。そこで，科学的な運動処方を取り入れた課題解決を行わせる。具体的には，運動処方の３つの条件である運動の強度，時間，頻度から課題解決の方法を決定していく。クロスカントリーの学習においては，タイムを縮めるという目標を達成するには，持久力と走り方を高めることが課題となる。この課題を解決するために，登りや下りのあるコースで，走り方を高めながら，確実に持久力も高まる強度（全力の７０％～９０％のスピード）・時間（５分～１５分）・頻度（週３回以上）の条件を満たす練習方法を設定していく。

②　スモールステップの目標の設定

子供たちが目標達成までの過程において，自己の向上を実感できることが運動への自信を高める上で大切である。そこで，最終目標までに小さな下位目標を設定し，１つ１つ達成しながら目標に近づいていることを実感させる。具体的には，クロスカントリーの学習において，上のような練習を行い，自分が決定した運動強度・時間・頻度を少しずつ高めながら達成していく。

(3) 本研究で期待する子供像

○　自己の運動生活の中から，自己の向上を実感できるような明確な達成目標をもつ子供
○　目標達成に向けて，運動技能や行動体力の向上を課題として捉える子供
○　科学的な運動処方を基に，課題解決のための働きかけ方を自己決定し，目標達成に向けて，工夫しながら繰り返し働きかけている子供
○　自己の課題追究を振り返り，成功体験を味わい，運動への自信を高めている子供

２．学習の具体的構想

(1) 運動への自信が高まる教材化について

運動への自信の高まりを具体化する運動領域は，運動への自信が個人のパフォーマンス（運動成績）の伸びによる成功体験を基盤とすることから，低・中学年の基本の運動・水泳・器械運動領域，高学年の体つくり運動・水泳・器械運動・陸上運動領域を重視する。その上で，運動への自信が高まる教材の条件を以下のように考える。

○　自己のパフォーマンスの向上が明確に評価できる目標設定ができること
○　自己のパフォーマンスの向上が運動技能や行動体力の向上と直接的な関連があること
○　個人の能力に応じて課題設定ができ，課題解決への働きかけ方に科学的根拠がもてること
○　目標達成に向けた自己の働きかけの過程において，成功感が実感できること

(2) 運動への自信が高まる基本的な学習過程について

自己の運動に対する働きかけが運動への自信を高めるように，課題解決の過程に科学的な運動処方を位置づけ，目標達成に向けて見通しや根拠をもって，働きかけ方を工夫できるようにしていく。そのために学習過程を次の３段階で構成し，以下のようなねらいを位置づける。

（見つめる段階）

運動生活の中から，自己の向上を実感できるような身体運動をかかわる対象として意識し，達成目標と目標達成に向けた自己の運動技能や行動体力の向上を課題として見通すことをねらう。

（うみだす段階）

自己の身体状況や科学的な運動処方を基に，課題解決のための働きかけ方を自己決定し，課題解決を行う過程において，自分なりの働きかけ方を工夫し，成功体験を積み上げながら運動への自信を高めることをねらう。

（あじわう段階）

工夫した働きかけの結果，高められた運動技能や行動体力を発揮する発表の場において成功体験を味わい，運動への自信を実感することをねらう。

【運動への自信を高める基本的な指導の仕組み】

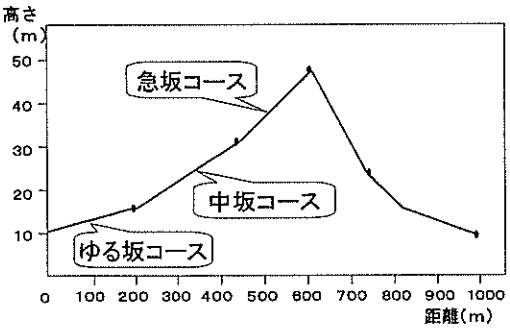
段階	見つめる	うみだす	あじわう
活動と内容	１．自己の向上を実感できるような身体運動と出会い，達成目標と課題をつかむ。 (1) 身体運動と出会い，自己の達成目標を捉える。 ○　達成目標の設定 (2) 追究課題を身体機能とのかかわりで捉える。 ○　課題（運動技能・行動体力の向上）把握	２．課題解決のための働きかけ方を自己決定し工夫する。 (1) 課題解決のための働きかけ方を科学的根拠を基に自己決定する。 ○　働きかけ方の自己決定 ↑↓繰り返し (2) 働きかけ方を試行し，課題解決に向けて付加・修正する。 ○　働きかけ方の工夫・創造 ○　運動への自信の向上	３．大会や学習のガイドづくりを行い，運動技能や行動体力の高まりを実感する。 ○　働きかけ方の高まりの実感 ○　運動への自信の高まりの実感
手だて	・明確な目標設定ができる身体運動との出会いの場の設定 ・目標達成に必要な身体機能に対する情報提示と測定の場の設定	・科学的な運動処方（時間・強度・頻度）の情報提示 ・個の働きかけ方に応じる場の設定 ・自己の働きかけ方のパフォーマンスの向上からみた客観的評価の場の設定	・行事などを利用した挑戦の場の設定（持久走大会・運動会など） ・追究を振り返り，自分なりの運動処方をまとめる表現の場の設定

3．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第５学年　自分や自然に挑戦しよう！西公園クロスカントリー

(2) 本単元の考え方

本単元は，右図のような西公園の地形を利用したコースでクロスカントリーをする中で，目標タイムを達成するために全身持久力や地形に応じた走り方を課題として，自分なりの働きかけ方を工夫し解決しながら，自分や西公園の自然を利用したコースに挑戦していくものである。

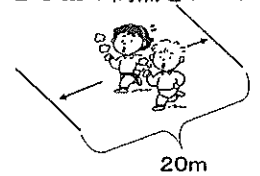


西公園クロスカントリーコース断面図

具体的な内容は次の３点である。①西公園の地形を利用した変化のあるコースに応じた走り方を工夫し，動きを持続する能力を高めることができる。②目標達成に向けて，自己の身体の状況と科学的な運動処方に基づく課題解決の方法を工夫することができる。③自己決定した課題解決の方法とタイムや全身持久力の向上を結びつけ，自己の身体運動に対する自信を高めることができる。

本単元の指導にあたっては，１０００ｍクロスカントリーのタイムを縮めるという目標達成に向けて，科学的な運動処方に基づいた解決方法を選択させたり，工夫させたりして課題追究を行わせ，動きを持続する力を高めさせると共に，運動に対する自信を高めさせていきたい。そのために，①自然の地形を利用したコース設定をすることで，タイムの伸びを比較的容易に味わうことができる西公園クロスカントリーを教材化する。②１０００ｍクロスカントリーの目標達成に向けて，科学的な運動処方に基づいた課題解決の方法を選択したり，工夫したりしながら，課題追究を行い，課題追究の過程とクロスカントリー大会での成功体験を積み重ねることができるような学習過程によって支援していく。まず，見つめる段階では，１０００ｍのクロスカントリー共通コースを走り，単元のまとめにクロスカントリー大会をすることを知らせる。そして，目標タイムを決めさせると共に，目標達成に向けた解決方法を出し合わせ，クロスカントリーのタイムを向上させる上で，全身持久力（最大酸素摂取量）と登り坂や下り坂の走り方の向上が必要なことを課題として把握させる。全身持久力については，単元のはじめと終わりだけではなく，実践の継続に合わせて行い，高まりを実感させる。具体的には，右図にある文部省の新体力測定の２０ｍシャトルランを行う。

図のように、２０ｍの間隔をテープのリズムに合わせて往復し、自己の最大酸素摂取量を測定するものである。



【２０ｍシャトルラン】

次に，うみだす段階では，全身持久力と登り坂や下り坂の走り方（ペース・フォーム）を向上させるための運動処方を時間・強度の２点から提示し，科学的運動処方に基づく練習方法として５分間ペース走を位置づける。そして，練習コースにおける運動強度を自己決定しながら，５分間走のペースやフォームを工夫させる。さらに，共通コース・練習コースでの学習を繰り返しながら，自己のパフォーマンスの向上と自己決定した解決方法のよさを結びつけて評価させ，成功体験を積み上げていく。最後に，あじわう段階では，工夫した課題追究の結果，向上したパフォーマンスを発揮するクロスカントリー大会で成功体験を味わうと共に，科学的運動処方に基づいたクロスカントリー体験を西公園クロスカントリーガイドブックとしてまとめ，運動に対する自信の高まりを実感させる。

(3) 目　標

① 目標タイム達成に向けて，科学的な運動処方に基づいたペース走を行うなかで，西公園の地形を利用した変化のあるコースに応じた走り方（ペース・フォーム）を工夫し，動きを持続する能力を高めることができる。

② 自己決定した解決方法とタイムや全身持久力の向上を結びつけ，自己の身体運動に対する自信を高めることができる。

(4) 計　画（約１３時間）

段階	学習活動と内容	主な手だて	配時
見つめる	１．運動生活の中から，クロスカントリーをかかわる対象として意識し，達成目標や目標達成のための課題をつかむ。 (1)　１０００ｍの共通コースを楽しく走り，始めのタイムを知る。 ○クロスカントリーの体験　○楽しさの享受 (2)　２回目のタイムを基に，クロスカントリー大会に向けて達成目標を決め，全身持久力や走り方を課題として捉える。 ○目的意識の喚起　○達成目標決定　○課題把握 例）・全身持久力を高めよう。 ・ペースや登り坂の走り方を工夫しよう。 追究課題 持久力や走り方を高めて，１０００ｍクロスカントリーのタイムをちぢめよう。	※　共通コースでのクロスカントリー体験による目標設定の活動 ※　クロスカントリー大会の提示 ※　２回のクロスカントリーのタイム（前半・後半）の比較活動と課題設定のための交流活動 ※　全身持久力についての情報提示と測定（２０ｍシャトルラン） ※　課題設定のための交流活動	２ ① ① １
うみだす	２．課題解決のための方法を工夫したり，改善したりしながら，コースに合った走り方や持久力を高め，運動に対する自信も高めていく。 (1)　勾配の違う３つの練習コースで５分間クロスカントリーを楽しみ，コース毎の最高距離から，自分に合ったペース走の基準を調べる。 ○コース毎のペース走の基準づくり (2)　各コースのペース走の基準をもとに，課題達成にむけた自分なりの５分間ペース走をつくる。 ○科学的根拠を取り入れたペース走づくり ・最高スピードの７０～９０％で走る５分間ペース走づくり (3)　自己決定した練習方法（５分間ペース走）でパフォーマンスを高める。 ○持久力の向上　○地形に応じた走り方の向上 ○自信の向上 ↑↓繰り返し (4)　共通コースでタイムを計り，練習コースや５分間走のスピードを見直す。 ○練習コースや選択するペース走基準の見直し ○持久力・自信の向上	※　３つの練習コースでの５分間ペース走の基準づくり ①　３つの勾配の違うコース（ゆる坂・中坂・急坂，各往復３００ｍ）を５分間全力で走り，距離を測定する。 ②　各コースの最高距離に，０．７，０．８，０．９を掛け最高スピードの７０％，８０％，９０％をペース走の基準とする。 ※　科学的運動処方の条件提示 ・走る時間とスピード・心拍数の関係図 ※　個に応じた練習方法設定のための支援 ・ストップウォッチ ・５分間走の基準 ・ペアによる相互評価 ※　タイムの向上による練習方法の評価と見直し活動の設定	９ ③ ② ② ② １
あじわう	３．西公園クロスカントリー大会を開くと共に，西公園クロスカントリーガイドブックをまとめ，自己の高まりを実感する。 ○全身持久力，走り方の高まりの実感 ○自信の高まりの実感	※　西公園クロスカントリー大会の設定 ※　西公園クロスカントリーガイドブックに自分の練習方法を表現する活動	２ 課外

(5) 指導の実際

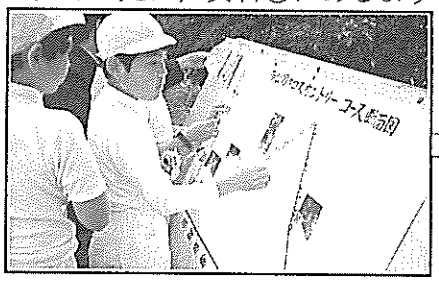
① 見つめる段階（１～２／１３時間）

この段階のねらいは，子供たちの運動生活の中から，自己の向上を実感できるような身体運動をかかわる対象として意識し，達成目標と目標達成に向けた自己の運動技能や行動体力の向上を課題として見通すことである。そのために，①西公園の地形を利用した（前半６００ｍを登り坂・後半４００ｍを下り坂）の共通コースの設定，②２回の１０００ｍ共通コースでのクロスカントリーを行い，前半の登りコースと後半の下りコースのタイムをそれぞれ比較し，課題を把握する活動の設定，③全身持久力の向上に関する情報の提示を行った。

子供たちは，１回目のクロスカントリー体験（写真①）において，資料①のＮ児の感想にあるように，西公園の自然の中を走る心地よさとほどよい抵抗感を感じていった。そして，２回目のクロスカントリーに向けて，「１回目よりタイムを縮めたい。」といった目標をもつことができた。２回目のクロスカントリーでは，前半の登りのタイムと下りのタイムを１回目と比較して走り，共通コースの中において課題となる場所を探る活動（写真②）を行った。Ｎ児やＭ児は，クロスカントリーのタイムを縮める上で課題となる場所を前半の登りのコースと後半の下りのコースからそれぞれ１箇所ずつ決定した。その後，課題となる場所を効率よく走り，タイムを縮めていく上で必要なことを交流する中で，走り方の工夫として，ペースを考えて走ることや登り坂・下り坂に応じたフォームを工夫することなどが課題として意識された。さらに，全身持久力を高めることで，１０００ｍクロスカントリーのタイムが縮まることを情報提示していった。その中で，Ｎ児やＭ児は，資料③にあるような単元の課題を設定した。

運動場で走ると平らな地面で走りやすいけれど、西公園で走ると登りや下りがたくさんありすぐにばててきつかったです。けれど、クロスカントリーは、自然の景色を楽しみながら走れとても楽しかったです。今度も景色を楽しみながら走りたいと思います。

写真① クロスカントリー体験　資料① Ｎ児の感想



写真② 課題となる場を探る

１番の課題は、１番急な登り坂で、最初走ってみたらきつくてあまりスピードが出せなかったからです。２番目の課題は、１番急な下り坂です。登りでとてもきつかったのに、急な下りで足ががくがくしたり、こけそうになったりしたからです。１回目に計ったタイムは、登りも下りもよかったけど、２回目は登りが４秒ほど遅くなっていたので、体力をつけたいです。下りは、１回目より２回目の方がタイムが３秒くらい速くなっていたので、登りも下りのようにタイムを伸ばしていきたいです。(Ｎ児)

資料② Ｎ児の課題意識

バランスを整え、その場に応じてペースを変えて走る。（Ｍ児）

登りや下りのペース、歩幅、持久力に注意し高める。（Ｎ児）

資料③ Ｍ・Ｎ児単元の課題

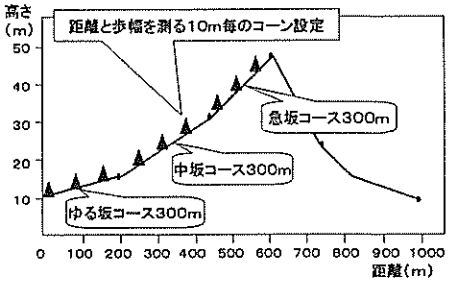
考察①

子供たちは，資料①・②（下線部）にあるように，クロスカントリーの体験を通して，楽しさを味わうと共に，平地では意識できない走り方の工夫について意識し，１０００ｍクロスカントリーのタイムを縮めることを目標とすることができた。また，資料②・③のＮ児・Ｍ児の反応（下線部）にも見られるように２回のクロスカントリーを通して，コースの中で課題となる場所を把握し，地形に応じたペースやフォームさらには，持久力を課題として捉えることができた。これは，登り坂と下り坂を組み合わせた西公園クロスカントリーを教材化し，登り坂や下り坂のタイムを比較させながら，コース上の課題となる場所を意識させたこと，さらには，タイムを縮めるために，その場所をどのように走ることが必要であるか交流させたことが有効であったと考える。しかし，持久力については，強い課題意識を持たせることはできなかった。

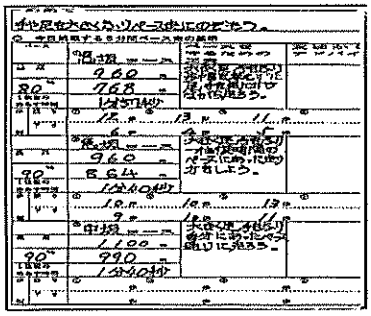
② うみだす段階１（３～７／１３時間）

この段階のねらいは，時間や運動強度といった科学的な運動処方を基に，課題解決のための５分間

ペース走を工夫したり，改善したりしながら，地形に応じた自分なりの走り方や持久力を高めると共に，クロスカントリーに対する自信も高めていくことである。そのために，①持久力を高めるために必要な運動処方（走る時間・スピード）の提示，②５分間ペース走における個に応じたスモールステップの目標基準の設定（ペース走の基準と１往復のめやす時間），③１０ｍごとにコーンを配置した勾配の違う３つの練習コース（資料④）における５分間ペース走づくりを行った。子供たちは，見つめる段階のクロスカントリー体験，走り方（ペース・フォーム）について意識することができていた。そこで，課題意識の薄い持久力についても，効果が期待できる運動処方として，走る時間（５～１５分）と運動強度（最高スピードの７０％～９０％）の関係について提示した。そして，５分間，持久力を高めながら自分なりのペースやフォームを工夫する５分間ペース走づくりを決定した。子供たちは，共通コース上の勾配の違う３つの練習コースをそれぞれ５分間ずつ全力で走り，その７０％～９０％で走る距離を５分間ペース走の個人基準とした。（資料⑤）その後，挑戦する基準を選択しながら，３つの練習コースで以下のように５分間ペース走づくりを行っていった。



資料④　３つの練習コース


資料⑤　Ｎ児のペース基準

M児のペアのペース走づくり	N児のペアのペース走づくり
①　急坂コースの９０％（５分間で１３５０ｍ）を目標として挑戦した。１往復のめやす時間（１分１８秒）を測定しながらペース走を行うが、全くペースを守ることができず、登りで歩幅を大きくすることを意識した。 ②　急坂の８０％（５分間で１２１５ｍ）を目標として挑戦した。１往復のめやす時間（１分２８秒）を計りながら、途中ペアの友達から歩幅が大きくなっていることを知らされ、ペースを落とす。今度は、３０ｍ～４０ｍ程度のオーバーで終えることができた。しかし、ペース走のできばえについては、あまりうまくできなかったと評価した。 ③　急坂の８０％に再挑戦した。めやす時間をほぼ守ることができ、まあまあうまくできたと評価した。しかし、歩幅が１往復毎にばらつきがあったことから、歩幅を均等にすることを新たな課題としてつかんでいった。また、ペアのアドバイスにより、めやす時間を登りと下りで細かく設定するとよいことに気付き工夫として取り入れていった。	①　急坂コースの７０％（５分間で６５８ｍ）を目標として挑戦した。１往復のめやす時間（２分１６秒）より速く走ってしまいペースを守ることはできなかった。歩幅の測定結果をペアから聞き、歩幅を一定にすることを意識した。ペース走のできばえについては、あまりうまくできなかったと評価した。 ②　急坂の７０％に再挑戦した。前回課題となった歩幅をそろえてスムーズに走ることを意識して走る。めやす時間をほぼ守ることができた。ペース走のできばえについては、まあまあうまくできたと評価が上がった。 ③　中坂の９０％（５分間で９９０ｍ）に挑戦した。めやす時間（１分３１秒）は守れていたが、課題としていた腕の振り方が少ないというペアのアドバイスにより、腕の振り方を意識していった。 ④　急坂の９０％（５分間で８４６ｍ）に挑戦した。めやす時間（１分４０秒）より少し遅れてしまった。歩幅を一定にし、登りより下りを少なくすることを課題としながら、腕の振りについても気をつけて取り組んでいた。

考察②

Ｎ児は，１回目の挑戦でうまくいかなかった急坂の７０％のペースに再挑戦し，めやす時間に合わせたペースをつくりだすことができた。さらに，中坂の９０％～急坂の９０％と学習を進める中で，

写真③　登りで腕を振り，ももを上げて走る

写真④　下りで腕を下げ，大きな歩幅で走る

一定のペースをつくりだすために，登りと下りの歩幅を一定にすることや腕の振りを課題とし，自分なりのフォームをつくりだす姿（写真③・④）が見られた。このような姿は，他の子供たちにも見ら

れ，ペースとフォームを結びつけてペース走に働きかけている姿であると考える。また，M児（下線部）のように，ペース走の達成に向けて自分なりの工夫を生み出す姿も見られた。そして，自己決定したペースを達成できたことから，波線部のように少しずつペース走に対する自信を高めている姿が窺える。これは，自分の課題とするコースにおいて，歩幅の測定や科学的運動処方に基づいたペース走を行うことで，達成への見通しやペース達成による成功感を味わうことができたためだと考える。さらに，ペース走の基準が個別に，しかもスモールステップで設定されていたことや，それぞれに1往復のめやす時間が設定され，ペース走の過程でも小さな成功感を味わえたためだと考える。

③うみだす段階２（８～１１／１３時間）

この段階のねらいは，つくりだした５分間ペース走を行いながら，さらに走り方や持久力を向上させると共に，クロスカントリーへの自信を高めていくことである。そのために，５分間ペース走による練習と１０００mクロスカントリーのタイムの測定を往復的に行う活動構成を行った。子供たちは，ペアによるアドバイスや全体での交流を通して，ペース走における工夫の観点を広げることができた。

M児のペアのペース走の様子	M児の記録会での伸び
急坂コースの８０％を選択し、ペースをつかむ工夫として、 ・往復のめやす時間の設定 ・歩幅を１０m毎に測定 ・手の振り方の工夫を行った。 めやす時間、歩幅については、ペアからアドバイスをもらった。 M児の気付き 歩幅が小さかったので、もう少し大きくしていきたい。それと手の振りはよかったけど、足（歩幅）とあいにくかったので、そこが課題となりました。	○ペース走での学習を生かして、手の振りと歩幅のリズムに気を付けて走る。 単元の目標　４分００秒 単元最初の記録　４分２５秒↓伸び２６秒 ２回目の記録会　３分５９秒 持久力の伸び　４４．２→５５．２

考察③

M児の練習後の気付き（下線部）にもあるように，ペース走での工夫を組み合わせ，登りや下りに応じたフォームやペースをつくりだしながら，単元目標を達成することができた。N児の学習後の感想（資料⑥下線部）にも見られるように，結果としての成功体験を味わうことだけでなく，これまでのペース走への取り組みとつないで達成感を味わっている姿が窺える。これは，ペース走での工夫のよさを確かめられる往復的な活動構成が有効であったと考える。

単元の目標タイムは、４分を切ることで、今日は３分５９秒でした。４分を切れたのは、まず、手の振りを大きくしました。自分の鼻の頭のあたりまで大きく両手を振るようにしたことや足を手の振りのように、その場その場で大幅、小幅にしたことがよかったと思います。また、今まで中坂コースや急坂コースの８０％９０％で何度もペース走の練習をしたからだと思います。これからもまだ記録を伸ばしたいです。

資料⑥　M児２回目の記録会後の感想

④　あじわう段階（１２～１３／１３時間）

この段階のねらいは，大会やガイドブックづくりを通して，高まった走り方や持久力を発揮し，クロスカントリーでの自信の高まりを実感することである。

考察④

資料⑦に見られるように，単元を通して子供たちのタイム，全身持久力を共に伸ばすことができた。そして，タイムや持久力の高まりに大きな達成感を味わい，これからの運動学習への意欲と自信を高める姿が見られた。（資料⑥の波線部）これは，成功への見通しのもてる学習により，課題解決の過程においても多くの成功体験を積み上げることができたからだと考える。

	単元始め	終わり	単元の伸び
１０００m タイムの平均	５分２８ 秒	５分０６ 秒	－２２ 秒
全身持久力の 平均	３４．１ ml／kg／分	３９．６ ml／kg／分	＋５．５ ml／ kg／分

資料⑦　学級のタイム・持久力の高まり

４．全体考察

クロスカントリーに対しても自信や好感を高めている姿や課題解決の過程で，走り方や持久力を高めている姿が具体化できた。これは，目標達成に向けて行われる課題解決が自己の向上とつながっていたことや目標をスモールステップで設定し，成功体験を課題解決の過程でも味わえるようにしたことが有効であったと考える。

豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つ家庭科学習

家庭科部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために家庭科に求められていること

自分にとって一番身近な家族との心のふれあいを大切にし，自己形成の基盤である家庭を中核に据える家族・家庭観をもって，家庭生活を主体的・創造的に形成する姿こそ，家庭科がめざす豊かな人間の姿である。この家族・家庭観があってこそ，子供たちは学校や地域などあらゆる場でいつでも安心して力を発揮し，自己実現ができるのである。家庭には，このような心の基礎を育て，生活者としての能力を育成する機能がある。しかしながら，近年，少子化の進行や核家族化，女性の社会進出に応じた育児と仕事を両立するための条件整備の遅れなどにより，家庭の教育機能が低下し，子供の生活自立能力への影響が指摘されている。また，家族のふれあいが薄れ，子供たちは自己の存在感を感じることができずにいる。その結果，常にイライラする，対人関係がうまくいかずにむかつく，キレるといった子供が増えてきている。このような子供を取り巻く家庭の現状において，家庭科に求められているものは，子供自身に家族の一員としての自分を実感させ，有用感をもたせることである。さらに，その過程で子供自らが生活の創造者となりうるための知恵（家庭生活をよりよくするための知識と技能）と，家族間のふれあいを生み出していく調和的心情を育てることである。

○　豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つ家庭科学習とは

豊かさとは，物質的（経済的，社会的）に満たされることだけではなく，心が満たされることである。家庭生活において子供たちの心が満たされるとは，自分のことが自分でできるようになること（自立の喜び），そして自分が家族のために何かできるようになること，その自分がしたことに対して家族が喜んでくれること（自己の有用感）であると考える。家庭生活をつくりだすとは，自分や家族の生活をしっかりみつめて，家族がよりよく家庭生活をおくるための課題を把握し，自ら現在の家庭生活を改善していこうとする意欲が高まることである。また，生活をつくりかえたり新しいものを生み出そうとしたりしていくなかで，家庭生活を営む上での基礎的・基本的な知識や技能を習得し，活用していくことである。つまり，豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つ家庭科学習とは，子供一人一人が自分の家庭生活において家族とのかかわりのなかで自己存在の意味を感得し，さらに家族への思いを深めながら，主体的・創造的によりよい家庭生活へと改善していく力を身につけるための活動を展開することである。

○　豊かな家庭生活をつくりだす子供とは

家族の一員としての自覚を持ち，家族への思いを深めながら，生活をよりよく改善していく子供である。具体的には，子供像を次のように考える。

○　家族の思い・願いを見つめることができる子供（家庭生活への関心）
○　家族の思い・願いを理解することができる子供（家庭生活の理解）
○　家族の思い・願いをもとに自分でできるようになる子供（家庭生活を創造する技能）
○　家族の思い・願いを実現できることに喜びを感じる子供（家庭生活における有用感の感受）

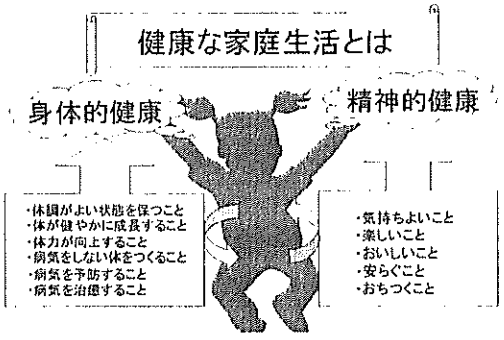
上記のような豊かな家庭生活をつくりだす子供が育つには，次のような能力を重視することが必要である。①家族の思い・願いを感受する力。②家庭生活内の課題を把握する力。③生活課題を改善するために必要な情報を収集する力。④主体的・創造的に生活実践する力。⑤家族とのかかわりの中で自分のあり方を見直しつづける力。

家族とかかわりながら健康な家庭生活を求める学習の構想

家庭科部　篠原裕子

1．主題の意味

【健康な家庭生活の捉え方】

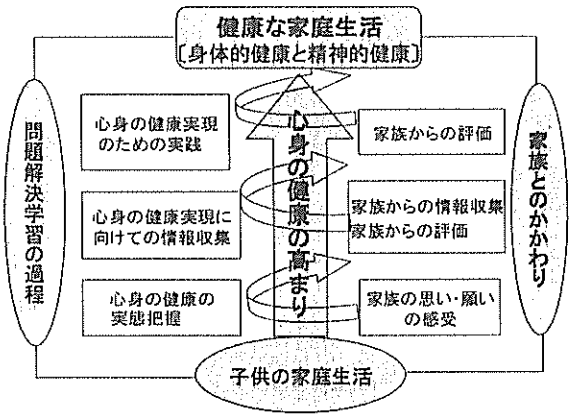


(1) 家族とかかわりながら健康な家庭生活を求めるとは

心の豊かさを求める家庭生活をおくる上で，健康は欠かせない。豊川裕之氏は『食生活論』（光文社）のなかで，「心の時代の健康は，一生懸命生きるその生き方が健康である」として，精神的安定と向上心こそが重要であると述べている。一方，身体の健康を損なっては精神的健康な状態も維持しにくい。このことを受け，家庭生活における健康は「身体的健康」「精神的健康」の２つの側面で成り立つととらえる。身体的健康とは，自分や家族一人一人が体にとってよい衣食住などの家庭生活を営むこと，精神的健康とは，自分や家族一人一人が快の感情がもてるよう衣食住などの家庭生活を営むことと考える。つまり健康な家庭生活を求めるとは，家族の一人一人が身体的に病気でない状態または病気を予防したり改善したりできるような家庭生活における知識や技能を身につけることであり，同時に精神的にも心地よくくらすことができる知識や技能を身につけようとすることである。また，そうなりたいと願う心情をもつことである。家族とかかわりながらとは，家族に対して深い愛情をもち，家族と幸せな生活をしていくために家族の考えや行動を見つめること，そして家族の一員として自分はどうあるべきか自分にできることはないかを考えることである。さらに家族への思いとその表現としての行動力をあわせて深め，それが日常生活の中で繰り返し取り組まれていくことである。

(2) 家族とかかわりながら健康な家庭生活を求める学習の構想とは

【学習の構想図】



健康な家庭生活を求めるためには，まず自分や家族の健康を身体的・精神的両面から見つめさせる活動のなかで，現在の問題点や家族の思い・願いに気づかせることが大切である。現実と自分や家族の思い・願いのずれが課題意識をもたせ，解決意欲を喚起する。自分の明確な課題意識があるからこそ必要な情報を収集する力や技能を習得し，実践しようとする力を伸ばすことができる。このことは，問題解決学習の過程にも通じる。なお課題意識が精神的・身体的健康のどちらか一方だけでも，追究が進むにつれもう一方も解決していく必要が生まれるように家族から情報を集めたり追究を評価されるなど，家族とかかわりながら追究を進める。この学習で家族の一員としての自覚を育み、有用感をもたせることができると考える。

(3) 本研究で期待する子供の姿

○　家族の身体的・精神的健康の状態，及び家族の思い・願いを受け止め，課題意識をもつ子供
○　家庭実践・家族への提案を行い，家族の評価をもとに追究を深める子供
○　身体的・精神的健康な家庭生活のあり方を考え，実践する子供
○　家族の健康のために自分ができるようになったことに自己有用感をもつことができる子供

2．学習の具体的構想

(1) 題材選定のよりどころとなる視点

題材の選定にあたっては，身体的・精神的健康の両面から家庭生活を見つめ直し，課題追究を進めることができるものとする。具体的には，次のような視点で題材を選定する。

① 身体的健康を見つめて追究できること

ア 衣食住などの生活が体に与える影響と家族の生活スタイル及び体調を実験及びデータから分析して，課題意識がもてるもの

イ 改善の見通しをもつことができ，改善結果が検証できるもの

② 精神的健康を見つめて追究できること

ア 家庭生活にかかわる活動自体が，心地よいと感じることができるもの

イ 家庭生活にかかわって家族からの思い・願いがあり，そのことが実現可能で，活動の結果家族が心地よいと感じることができるもの

③ 家族とかかわりながら追究できること

ア 子どもが日常的にかかわりがもてるもの

イ 家族の共有空間または共通時間で活動でき，家族と相互にかかわりをもてるもの

ウ 子供のはたらきかけによって，変化できるもの

エ 子供の活動を通して，子ども自身にも喜びや感動を得ることができるもの

(2) 学習の仕組みについて

心身の健康な家庭生活を求める学習を「つかむ，追究し解決する，広げる」という３段階の問題解決学習の過程で構成し，各段階に次のように活動と手だてを以下のようにしていきたい。また，各段階において家族とかかわる手だてを位置づける。

	つかむ段階	追究し，解決する段階	広げる段階
活動・内容	１．学習対象に関する事前調査と自分の生活上の問題に気づかせる話し合いを行う。 (1) 家族からの聞き取りや実態調査を行う。 (2) 課題把握の話し合いをする。 ○ 自分の問題把握と理想の思い描きから追究課題を設定すること	２．自分の課題に沿って情報収集を行い，解決する。 (1) 解決のために情報を収集する。 ○ 具体的な情報収集 (2) 確かめるための実験・実習などをする。 ○ 課題解決方法の明確化（技能修得）	３．家庭実践発表会で交流を行う。 (1) 家庭実践をする。 (2) 家庭実践発表会をする。 ○ 相互評価による達成感，自己有用感の確認 ○ 友達の実践報告を聞き，よさを取り入れることで今後の活動への意欲付け
手だて（◎家族とのかかわり）	◎ 家庭生活の実態をつかむの取材活動（題材に応じた心身の健康状態，家族の思い・願い） ○ 心身の健康に気づかせる問題場面を再現すること ・モデル演技 ・ロールプレイ　など （アンケートから問題を洗い出し，再現をもとに，自分の家庭について想起させる）	◎ 情報収集を行うこと（家族が実践している解決方法家族の思い・願い） ○ 友達やＧ・Ｔなどからの情報収集活動と情報に基づく実習を含む個別追究の場づくり ○ 追究の視点を広げたり，深めたりする中間報告会の場づくり ◎ 追究していく過程で，随時家族に評価を受けさせること	◎ 心身の健康の変化を意識した家族の感想をもらうこと ○ 実践の様子が分かる表現物づくりをさせること（新聞，論文） ○ 家庭実践発表会の場を設けること ・ポスターセッション形式 ・レポート報告会形式 など

３．指導の実際と考察

(1) 題材名　　第５学年　楽しい「居間」をつくろう

(2) 本題材の考え方

本題材は，自分や家族が共に過ごす場としての「居間」をつくることを通して，住まい方の心や体の健康に対する影響を理解していく。そして家族のコミュニケーションを増やしたり，家族が気持ちよく衛生的に生活をおくることができるように住まい方を工夫したりする力や心情を養うことをねらいとしている。ここでの具体的な内容は，次の①から③である。

① 家族の団らんの場として住居空間の中の「居間」の存在価値を理解すること
②「居間」を家族が楽しく活用するためには，家族の時間の使い方や「居間」での過ごし方を工夫することが大切であることを理解して自分の家族に合う方法を見いだすこと
③集まった家族が気持ちよく衛生的に生活することを考えて，「居間」の整理・整とんや掃除について工夫すること

住まいは，家庭生活を営む基盤となる器であり，中でも家族が共に過ごす時間の多い「居間」は，家族の人間関係を育てる上でも重要な場である。その「居間」が衛生的で快適な状態に保たれ，十分に活用されているか否かは，家族の心身に大きな影響を及ぼすことになる。

本学級の子供たちは，家族がそろうことが楽しいととらえている。しかし，現実は塾やお稽古ごとなどで忙しい子供が多く，家族それぞれも生活スタイルのすれ違いから，あまり団らんをとれていない家庭が多い。アンケートによると，家族が集まる場はどの家庭にも存在しいていることが分かったが，そこの使われ方，使われる時間は様々であり，「家族誰にとっても家の中で一番落ち着く場，家族のコミュニケーションを図ることができる場」というとらえ方はあまりできていない。また，整理・整とんや掃除については自分の部屋だけが主で，家族が共通に利用する場にはあまりかかわっておらず，住まい方と心身の健康の関係に気づいている子供は少ない。このような子供たちに「居間」の在り方を追究させることは，家族とかかわり，心と体の健康を両面追究する態度を育む上で価値がある。

ある（居間）	ある（食堂）
（７８%）	（２２%）

【資料１　家族が集まる場所はあるｏｒない。】

〈平日の場合〉

０～１時間	１～２時間	２～３時間	３～
・テレビを見る ・本や新聞を読む ・食事をする ・おやつを食べる	・ゲームをする ・話をする ・ねる ・趣味をしている		

【資料２　居間の使われてる時間と使われ方】

十分	不十分	なっていない
１３%	６９%	１８%

【資料３　居間が団らんの場になっているか。】

本題材の指導にあたっては，まず「つかむ段階」で事前に「居間」で過ごす時間や過ごし方について実態調査活動をさせる。その各自が持ち寄った「居間」の利用状況や家族の気持ちと，「居間」の様子を再現したモデル演技をもとに「居間」の大切さについて気付かせ，「楽しく過ごす方法を工夫しよう」という共通課題のもと，家族の時間の調整や楽しく過ごすための話題づくりなど個別の課題をもたせる。「追究し解決する段階」では，家族の「居間」での団らんに対する思いや願いに即しながら，個別に追究をさせる。この個別追究が意欲的に効果的に行われる支援として，友達の家族・教師・文献資料などから必要な情報を得られるように，「知恵袋」という情報コーナーを設置する。ここでは技能を修得させるためにも体験的な実習を取り入れ，家庭実践に向かわせたい。そして「広げる段階」では，家庭実践報告会を設け，家族からのコメントもいただく。ビデオや写真などの表現物でその実践の様子を伝えるようにする。このことで友達や家族から認められた喜びに自信をもたせ，楽しい「居間」づくりをさらに継続していく態度を育てたい。

(3) 目　標

① 家族が「居間」で楽しく過ごすための団らん時間のもち方や過ごし方を工夫したり，気持ちよく衛生的に住まうために整理・整とんや掃除の仕方を工夫したりすることができる。

② 家族が集まる「居間」のあり方に関心をもち，自分や家族が楽しく健康にくらすための利用の仕方や住まい方を工夫したことに自己有用感を味わうことができる。

(4) 計　画　（8時間＋課外）

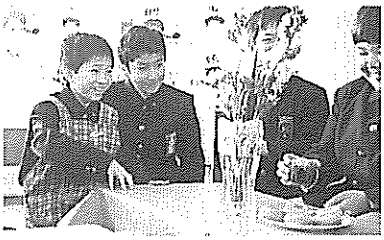
段階	活動と内容	主な手だて	配時
つかむ	1．「居間」の大切さについて話し合う。 (1) これまでの「居間」の使い方について振り返り，そのあり方について話し合う。 ○ 「居間」の重要性の認識 (2) 自分の理想の「居間」について絵や文でまとめ，「居間」の活用が十分できていない原因を話し合う。 ○ 「居間」のあり方の理想と現実とのずれから改善するべき課題を気づくこと 課題 家族が楽しむ「居間」をつくろう。 ○ 原因把握と解決の見通しをもつこと	※ 「居間」の住まい方に関する事前調査とそれをもとにしたデータの提示（団らん時間，場所，参加者，会話や過ごし方，そのときの気持ち） ※ アンケートから，居間の在り方の問題点を想起できる3つのモデル演技の提示 ※ 理想像（課題）としての絵を描かせること ※ 事前調査データの中から，家族の思い，生活時間，過ごし方，場の様子についてを分析させること	2 ① ① ①
追究し解決する	2．団らん時間のつくり方と過ごし方について追究する。 (1) 家族の生活時間や団らんについての思い・願いから過ごし方の工夫を考え，家族への提案書をつくる。 ○ 団らん時間のつくり方と家族が楽しむ過ごし方を見直すこと	※ 解決方法について自分の家の団らんが不十分である原因を取り除くことになっているかどうかで自己評価をさせること ※ 家族から，友達の家族から，教師から，文献資料から情報を集め，資料コーナーをつくること	5 ①
	※ 課外　家族への提案書にそって家庭実践を行う。 (2) 実践結果を持ち寄り，成果と新たに気づいた課題について話し合う。 ○ 時間のつくり方や過ごし方について改善した成果を認め合うこと ○ 新たに場の整え方として整理・整とんや掃除を見直すとよいことの確認	※ 1週間実践し，結果と家族の反応・感想をまとめさせておくこと ※ 理想の「居間」の絵で改善の成果と課題を話し合わせること ※ 整理・整とんや掃除が心と体に与える影響について経験と資料をもとに考えさせること	課外 ＋ ①
	(3) 整理・整とんと掃除についての情報を収集し，実習し，家庭実践を行う。 ○ 自分の課題に応じて整理・整とんと掃除の工夫ができること ○ 場所や材質にあった用具や洗剤を工夫して掃除をすること	※ 家族から，友達の家族から，教師から，文献資料から情報を集めさせ，資料コーナーをつくること ※ 実物や実際の場所で実習させること	③ ＋ 課外
広げる	3．家庭での実践報告会を開く。 ○ 家での変化の様子と家族の反応を報告し相互評価をすること	※ ビデオや写真など家庭実践のまとめと，家族の反応を報告するための表現物を作成させること	1

(5) 指導の実際

① つかむ段階（１～２／８時間）

この段階のねらいは、自分の「居間」での過ごし方を想起して、「居間」が家族のコミュニケーションをとったり、心身の健康を培う重要な場であることを理解するとともに，「居間」の活用が十分できていない原因に気づき各自が課題をもつことである。

まず，各自の調べた「居間」の使い方についてのデータを提示し，「居間」での過ごし方や場の様子を想起させるための３パターンのモデル演技を見せた。それをもとに自分の家でも，「居間」で十分に団らんできていない原因や体にとっても健康な住まい方ができていない状況を話し合い，「家族が居間で楽しく過ごすことができる工夫をしよう。」という課題をもった。そして，理想の居間について絵をかき，追究内容の見通しをもった。



① 家族の時間がそろわない様子

② 家族が好きなことをしている様子

③ 家族が各部屋で楽しんでいる様子

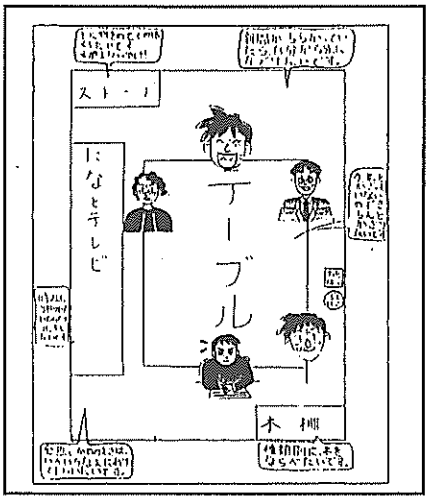
【資料１ モデル演技をしている様子】

私の家では，モデル演技の家の様子とにていると思います。お父さんは帰りが 遅いことが多いし，お兄ちゃんも部活でおそくて，あまりみんながそろいません。みんないるときでも，それぞれが部屋にいて，好きなことをしていています。友達の話を聞くと，家族でおやつを食べたり，話をしたりして，楽しそうに感じました。わたしの家でももっと楽しく過ごせるように，居間でどんな過ごし方をしたらよいかを調べていきたいと思いました。

【資料２ N児がもった課題】

考察①

資料２から，N児は自分の家族が「居間」で楽しく過ごすことができない実態とその原因（時間のすれ違い，楽しい過ごし方の工夫がないこと）をつかんでいることが分かる。また理想の居間を，みんながそろってゲームやおしゃべりができ，花をきれいに飾っている場所ととらえていることが絵（資料３）からわかる。このように課題を心の健康に関してもつことができたのは，自分の「居間」の過ごし方に関するデータと「居間」が十分活用されない原因と場の様子に気づかせるモデル演技が，団らんの楽しさを想起させ，理想像を具体化させたからだと考える。



【資料３ N児の理想の居間】

② 追究し解決する段階（３～７／８時間）

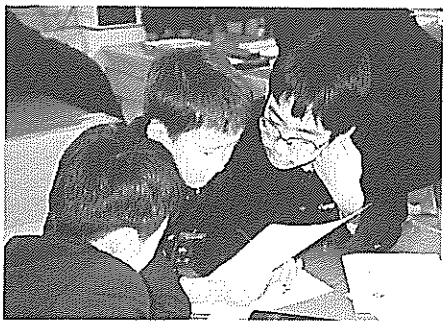
この段階のねらいは，追究課題の解決のために情報を集めて自分の家族の思い・願いと合わせながら「居間」で楽しく過ごすことができる工夫を見いだしていくことである。このとき，まず各自が課題であるととらえた団らん時間の作り方と過ごし方を追究した。その実践結果の話合いから，さらに家族が集まるようになった場所を，気持ちよくする方法を工夫したいという新たな課題がうまれ，整理・整とんや掃除の技能を身につけることとした。

〈楽しく過ごす工夫を見つける活動〉まず，団らんの時間や過ごし方について，家族の思い・願いを聞き取らせた（資料４）。その願いを叶えるために，友達の知恵袋から情報を収集した。N児の場合は，団らん時間を見いだす工夫や団らんの時間を楽しく過ごすための話題の工夫

団らんへの満足度はどうですか。

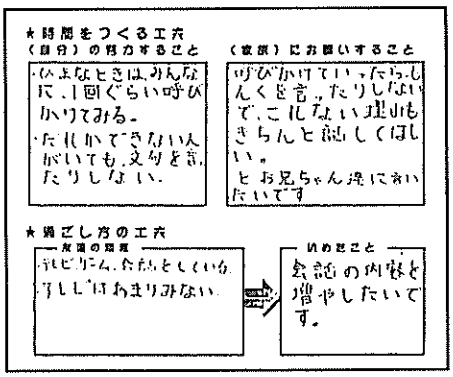
家族	思い・願い
母	共通の楽しみがほしい
父	子供の話を聞きたい
祖父	みんなと一緒にいたい
兄	部活で忙しい
自分	みんな願いは同じ

【資料４ N児の家族の思い・願い】

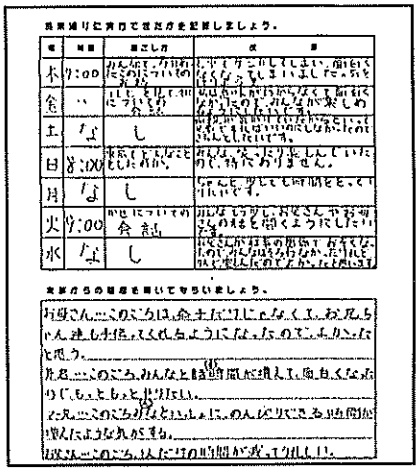


【写真１ 知恵袋や文献から情報収集している様子】

・一緒にすることの工夫に関する情報を収集した。そして自分の努力する点と，家族へのお願いを書いた提案書を作成し（資料５），家庭実践を行うこととした。



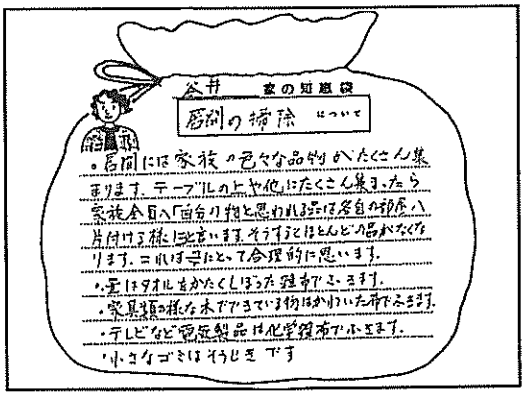
【資料５　N児の家族への提案書】



【資料６　N児の家庭実践の結果】

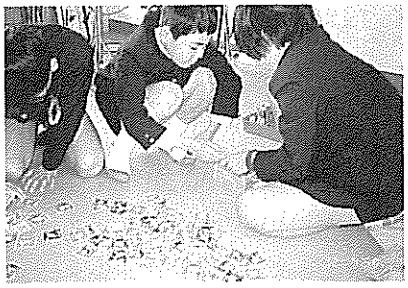
〈家庭実践結果を話し合い新たな課題をつかむ活動〉１週間の家庭実践後，結果と家族の感想をもち寄った（資料６）。そして「居間」の活用状況は向上してきたことと新たな課題をもったことを出し合った。この話し合いから「家族が集まるようになったが，その居間が散らかっているので，きれいにしたらもっと楽しく（気持ちよく）なる」という意見が出され，さらに掃除や片づけを追究していくこととした。

〈整理・整とんや掃除の工夫を身につける活動〉「居間」の整理・整とんや掃除について各自でもった課題にそって，技能修得のために情報収集を行い，さらに実習を行った。まず，どこにどんなものが散らかっていたり汚れていたりして気持ちよくないか，家族の思い・願いも含めて詳しく実態を明らかにさせた。その結果，新聞紙，雑誌，広告などの紙類や，おもちゃ（ゲーム），文房具，お菓子，くしや耳掻きなどの雑貨，衣類など，使いっぱなしにおいているものや，収納先が明確でないために片づいていないことが多いことが分かった。また，家具の上やじゅうたん・フローリングにはほこりがすぐにたまることなども見つけてきた。そのことからほこりやカビが体に及ぼす影響についても話し合い，気持ちよく住まうための必要な情報を情報収集コーナーから「知恵袋」としてもらわせた（資料７）。「知恵袋」に載せた情報は各家庭からの情報と文献からの抜粋資料である。これをもとに物や場所に合わせて整理・整とんや掃除の実習を行った。



【資料７　友達の家庭の知恵袋（掃除の仕方）】

Ｎ児を含むじゅうたんのほこりとりを追究している子供たちは，校内のじゅうたんのある場所で，ガムテープでほこりを取ったり，ローラーを使ったり掃除機をかけたりした。その中で，広さに応じた道具の使い方に気づいていった。また，汚れのひどいところを洗剤を使ってとる方法も知恵袋をもとに実習していた。整理・整とんを課題としているグループでは，実際に家に散らかっている新聞や雑誌を収納するためにひもや箱を準備したり，小物を整理する箱には見出しを付けるなどの工夫が見られた。（写真２，３）



【写真２　整理・整とんを道具を使って工夫している様子】

【写真３　掃除の実習をしている様子】

考察②

楽しく過ごす工夫を見つける活動で家族の思い・願いを聞き取らせたことは，提案書をつくる際に生かされ有効であった。その実践後，課題をつかむ話合いでは，「もっと楽しくする」という意識が継続し，整理・整とんや掃除という体の健康まで追究できる課題を持たせることができた。そして，情報コーナーを設け知恵袋を紹介しあったことで，各家庭で実際に行われている効率の良い方法，経済的に工夫している方法などを知ることができた。この中から自分の家に当てはめる内容を取捨選択でき，有効であったと考える。また，自分なりの方法で実習を行ったことは，資料８の感想にあるように技能修得に自信を持たせ，家庭実践の意欲につながったと考える。

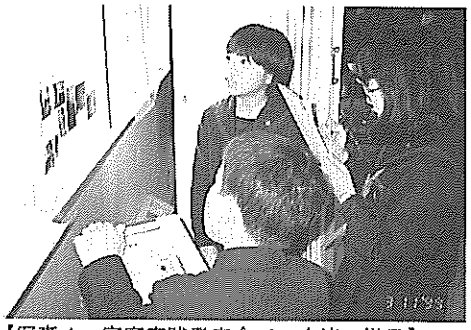
〈掃除の実習を終えて〉

お母さんは花粉症で，原因は家の中のほこりや花粉だということでした。お母さんはいつもくしゃみや鼻水で困っていたので，わたしはどうやれば家の中がきれいになるかを考えました。そして，居間のじゅうたんのほこり取りを追究することにしました。T君の知恵袋で，ガムテープでやるとよくとれたけど，中まではとれにくくて掃除機を先にかけるとよいことがわかりました。掃除で心もすっきりなりました。これからお母さんのためにがんばります。

【資料８　実習を終えてのN児の感想】

③　広げる段階（８／８時間）

この段階のねらいは，家庭実践した結果を報告しあうことにより，相互評価させ，達成感を味わわせることである。また，友達の実践を聞くことによりさらに健康を求める工夫を広げさせることである。



【写真４　家庭実践発表会での交流の様子】

家庭実践の結果，「居間」での過ごし方が楽しくなった様子を写真や家族からの感想（資料９）を入れて報告した（写真４）。また，報告を聞いて「いいと思った工夫」「とれ入れたい工夫」を発表しあった。

あなたが，塾から帰ってきて，夕食までの間にじゅうたんの掃除をしはじめたのには驚きました。掃除は，お母さんが休みの日にしようと思っていて，気になっているところでした。掃除などほとんどしていなかったのに，上手にできるようになったのですね。これで居間が気持ちよくなって，お母さんもくしゃみが減って，うれしいですよ。ありがとう。これからも協力して，気持ちよく暮らしましょう。

【資料９　家庭実践に対する家族の感想】

考察③

子供たちは写真４のように自分の家庭実践の様子や家族の感想を誇らしげに発表し，そのことを友達に認められたことに喜びを感じていた。また，家族からの感想をもらうことで，さらに自己有用感をもつことができたと考える（資料１０）。このことから，家庭実践報告会を設けることは，この追究に対する達成感を味わわせることができ，実践意欲の継続につながると思われる。

家庭実践の発表会をして，友達からじゅうたんの掃除の仕方を教えてほしいと言われた。わたしがやった方法を写真で説明すると，「いい工夫だね」と言ってくれたのでうれしかった。H君は，ペットボトルを使ったほこり取りの方法を工夫していてすごいと思った。みんな家の人から喜ばれたり，ほめられたりしていて，うれしそうだった。わたしも，家族にもっと喜ばれるように居間の過ごし方を工夫していこうと思った。

【資料１０　N児の学習後の感想】

４．全体考察

「居間」に視点を当て，家族の心身の健康が育まれているかという問題に気づかせる話し合いをしたり，家族の思い・願いを調べたりしたことで，子供たちは，家族にはたらきかけ団らんを創り出す工夫を行いその楽しみを味わうことができた（心の健康）。さらに整理・整とんや掃除をしてもっと気持ちよく住まいたいという体の健康への課題も生まれ，実習を通して技能修得を行い生活自立に向かう態度も育った。つまり「居間」のあり方を考えることで，家族の心身の健康を育くもうという姿をみることができた。今後，家族から家族を取り巻く近隣の人とのかかわりへと広げ，その中で自分や家族の心と体の健康を追究していく題材の開発を進めていきたい。

豊かな生き方・在り方を求め実践する子供が育つ「人間」学習

「人間」部主題についての説明

○　豊かな人間の育成のために「人間」に求められること

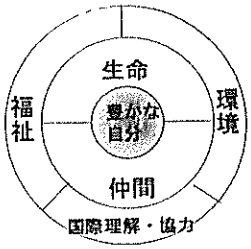
物質優先の社会の中で，ともすれば人々は自分の利益を追究することのみに追われ，他者とのかかわりの中で生かし生かされている自分の存在を見失いがちである。このような風潮の中で，現代人はよりよく生きることの意味を見いだせず，虚しさや無力感を感じ，生きる力を保つことが困難になっている。「人間」の学習では，子供がこころ揺さぶられる「もの・人・こと」に出会い，かかわる体験を通して，他者とともに生きる喜びを味わい，より価値高い生き方や在り方を求める自分づくりに取り組んでいくことをめざしている。そこでは，「自他の生命を大切にしようとする」「自他のかかわりのなかでともに高め合い向上しようとする」「お互いに心地よく生活できるようにする」といったことを大切にする生き方を育てることが求められている。

○　豊かな生き方・在り方を求め実践する子供が育つ「人間」学習とは

豊かな生き方・在り方とは，かけがえのない自分とかけがえのない他者の存在を深く感じ，共によりよく生きていくことを求めて相手とのかかわり方を考え，実践し，そのことに喜びを感じる人間の姿である。また，そのようなかかわりの中で，自己の達成感や有用感，心の安定感を得られることが，豊かな生き方・在り方を求め続けるエネルギーの源となる。このような姿を目標として，「人間」の学習は，自らの生きる意味や目的を求め追究する学びとして，全教科・領域の基盤として位置づく。

そこでは右記のように豊かな自分を中核とし，仲間づくりを重視する６内容に基づき，体験とその振り返りによる往復的な学びによって，豊かに生きる実践的な態度を育てることをめざしている。

【６つの内容】



	内　　容
自分	共生の生き方を志向する自分のよさへの気づき
仲間	仲間との連帯感や学び合う喜びの実感，ふれあい
生命	生命の尊さを実感する栽培・飼育，命を輝かせる人との対話
福祉	老人や障害を持つ人に真心を持って接するふれあい
国際理解・協力	異文化の素晴らしさの実感，自立を支援するふれあい
環境	生命の共生，環境を保全しようとする人とのふれあい

○　豊かな生き方・在り方を求め実践する子供とは

育てたい資質や能力と，それを発揮している子供の姿を以下のように考える。

○　人間の営みを支える価値への豊かな感性

真摯に誠実に生きる人や，自分を支えるもの・人・ことに出会ったとき，その素晴らしさを感じ取り，自分も共生の精神を発揮して生きたいという思いや願いを持っている子供。

○　共感性を基盤とした役割取得能力

自分の体験をもとにして対象となる相手の心情を推しはかったり，相手の求めに応じたりして自分はどうすべきか考え，判断し，意志決定していくことができる子供。

○　対象にかかわり，活動をやりとげる実践力・行動力

自分の決定をもとに自分なりの方法で，あるいは他者と協力して思いや願いを実現していくためのはたらきかけができる子供。また，そのための技能を身に付けている子供。

○　活動からの学びを自覚し，自分に取り入れていく自己評価力

自分の生活や体験を振り返り，他者とのかかわりや考え方を見つめ，これから大切にしていきたい心や行動を見いだし，内面的に自覚している子供。

かかわりの原体験を育む学習の構想

「人間」部　石　硯　昭　雄

1．主題の意味

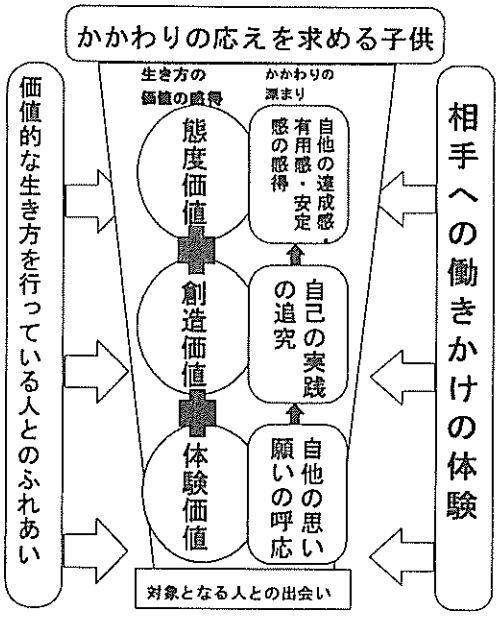
(1) かかわりの原体験とは

「人間」の学習におけるかかわりとは，自分の生活を支えてくれたり，逆に自分が支えてあげることができたりする人がいることに気づき，つながりを深める実践を通して，相手と支え合いながら生きていることに喜びを感じることである。原体験とは，記憶の底にいつまでも残り，こだわり続けることになる人格形成に深く関与する体験のことであり，かかわりの原体験とは，子供の心の中に深く刻み込まれることによって，人と支え合っていきることの温もりや心地よさを求める心の基盤となる体験のことである。これは，支え合って生きているという人間存在の原理につながっており，子供にとって，これ以後の人生における，かかわりの素地となる感性や認識を高めるとともに，自分もまた，相手を喜ばせることのできる存在であるという喜びを持たせる上で重要である。

(2) かかわりの原体験を育む学習の構想とは

直接的なふれあいの中で，子供が相手と支え合って生きている自分の役割や立場に気づき，誰か（何か）に支えられている自分，誰か（何か）に必要とされている自分，誰か（何か）の役に立てる自分に対して喜びを感じるように学習を構想することである。

【かかわりの原体験を育む学習の構想】



このような学習を具現化するために以下の３点から学習を構想する。第一に，その人の生きる姿に感じ，学び，自らの生活に取り入れたくなるような価値的な生き方を行っている人とのふれあいを設定する。第二に，単元の学習の中で，子供自らが感じた価値を実現できるような，相手への働きかけの体験を設定する。第三に，学習過程においては，①相手とふれあい，自分の生活にとってのその価値を感じる活動，②相手と自分との願いを呼応させ，ともに喜びを感じることのできる協同的な関係を考えたりつくったりする，製作・労働・奉仕・模倣・伝達などの活動的な実践活動，③対象と自分との心的な距離や関係を見つめ，対象の生き方から価値を取り込み，自らの実践を双方の喜びに結びつけて見つめ直す活動を位置づける。

(3) 本研究で期待する子供の姿

単元の学習レベルにおける，目指す子供の姿は以下の通りである。

① 人と出会ったとき，相手の存在に対して，興味や驚き，親しみを感じることができる子供
② 相手に対して，自分はどうしたいのかを明らかにするとともに，相手は自分に何を求めているのか，自分は相手に何ができるのかを考えようとしている子供
③ 自分が相手のためにできること，すべきことをふれあいの中から見つけることができる子供
④ ふれあいのなかでの相手の喜びを感じ，自分にとっての相手の意味を見つめ直すことができる子供
⑤ ふれあいを振り返って，達成感や有用感を感じ，自らの実践に自信を深めると同時に，ともに生きることの喜び（心の安定感）を味わっている子供

2．学習の具体的構想

(1)　価値的な生き方を行っている人とのふれあいについて

その人とふれあうことで，子供が人間の生き方の価値に気づいたり，感動したり，その価値を自分にも取り入れたいと感じることができるような人物とのふれあいを設定する。ここでいう価値的な生き方とは，人間の生きる意味につながる以下の３つの価値領域につながる姿のことである。

○　自分を必要としている「もの・人・こと」との交わりを大切にしている人
「自分のことを必要としてくれる相手がいる」「自分でも役に立てる」　**体験価値**

○　自分になされるのを待っている仕事を実現しようとしている人
「わたしがしなければならない」「わたしにしかできないものだ」　**創造価値**

○　変えようのない状況を前にして，取りうる態度で自らの生を実現しようとしている人
「こう考えてやってみよう」「自分にとってこんなことが大切なんだ」　**態度価値**

(2)　価値を実感する相手への働きかけの体験について

子供自身が，自らもまた価値的な生き方を行うことに喜びを見出し，自己肯定感を高めていくことができるよう，以下のような体験の場を設定する。

○　相手との対話やふれあいの中での相手の様子から，自分が相手に支えられている，あるいは必要とされている，役に立つことができるということを実感する体験

○　いっしょに作る，手紙を書く，遊ぶなどの実践活動を通して，自分と相手がともに求め，一緒に行うことで心から喜ぶべることを実行する体験

○　ふれあいの実践から学んだことをもとに，今後，自分が取りうる相手へのかかわり方について，実践の継続や広がりを通して考える体験

(3) かかわりを深め，自分の生き方・在り方を問う学習過程

	感じる	考える　・　行う		見つめる
ねらい	出会いによる心情の耕しと意欲の喚起	相手とよりよくかかわるための思考・交流・意志決定	相手とよりよくかかわる実践と相手とのかかわりの自覚の深まり	活動のみつめと自己の達成感・有用感，安定感の感得
学習活動	・相手への興味を抱く 面白そうだな，すごいな ・相手への求めをもつ ○○をしてほしいな ・相手からの求めを知る △△がしてほしいんだな ・自他の求めを呼応させる ○○がいっしょにしたいな	・相手を理解する ○○をしてあげるとうれしいんだな ・行為を検討する わたしは○○がしてあげられそうだ ・かかわり方を判断する ・ふれあい実践を行う ・かかわりを実感する ○○をとおしてつながっているんだな ・自分のかかわり方を知る こんなことが自分にはできるんだな 作る，手紙を書く，遊ぶなどの活動を通して ※　「考える」と「つくる」は絶えず往復的		・かかわりの喜びを感じる 相手は自分にとってこんな人だ 自分は相手にとってこんなふうに大事なんだ この人といっしょにいると楽しいな，安心できるな
支援	※相手を特徴づける情報提示 ※双方向の伝達 ※出会いや対話場の設定	※相手についての詳細な情報提示 ※先行・類似体験の想起 ※協同実践についての話し合いの場の設定	※ふれあいの場の設定 ※ふれあいを円滑にするG（ゲストティーチャー）・Tの導入 ※実践を継続・改善する場や方法への助言	※ふれあいの様子のビデオ・写真の提示 ※相手からの感想の提示

1．指導の実際と考察

(1) 単元名　　第１学年　まんがのおじいさんと　なかよくなろう（福祉）

(2) 本単元の考え方

本単元は，自分の夢を大切にしながらいまを精一杯生きていらっしゃるお年寄りとのふれあいをもつことを通して，子供に，お年寄りのあたたかさや素晴らしさを感じさせながら，相手とのかかわりを自らの意志でよりよいものにしていこうとする態度を育てることをねらいとしている。

福祉の観点からとらえた内容としては，①老いによる身体の不自由さや衰えを，直接見聞きし理解すること，②そのような身体の機能の低下とは逆に，やさしさや知恵を熟化していく人間の素晴らしさについて感覚的に理解すること，③年を取っても自分の夢を大切にして生きる姿に触れることにより，その素晴らしさに感じ，かかわりに喜びを見出していくことである。

本単元でのかかわりの対象である二川正近さんは，特別養護老人ホームで生活しておられる78歳のお年寄りであり，「まんがのおじいちゃん」として地域の人に親しまれている。その生き方には，子供に感じさせたい次のような価値がある。

○　自分のまんがを見てくれる人の笑顔を願い，また自分にできることで多くの人との交流をもち続けたいと願い，施設の中で描いたまんがを人に贈る実践をしてある。
○　子供の頃実現できなかった漫画家になるという夢をもち続け，あこがれの漫画家に近づけるよう毎日描き続け，いまも勉強を重ねてある。
○　たとえ障害があっても，自分にできることで社会に対して何かしら貢献したいという願いをもち，相手を喜ばせるために特技であるまんがを生かしてその願いを実現しようとしてある。

このような二川さんに対して，子供の側からは次のような働きかけが期待できる。

○　多くの人との交流を求める二川さんの願いに応えて，直接的なふれあいをもつ体験
○　まんがを習い描いたり，自分のまんがや手作りの贈り物を贈ったりして，ともに楽しむ体験
○　二川さんとのふれあいを生かして，身の回りのお年寄りに目を広げていこうとする体験

そこで本単元の指導にあたっては，二川さんの趣味であり，子供たちにとっても親しみやすく楽しい，まんがを描く活動を中核としてふれあいをつくる連続的な活動を行うようにする。「感じる」段階では，二川さんの作品の面白さに触れさせ，それを描いた人への想像を膨らませながら「まんがのおじいさん」として地域に親しまれている人物像を把握し，直接的な出会いへの興味や関心を抱かせる。また，自分たちのまんがを二川さんに送ることにより，かかわりを求める意志を明らかにさせる。さらに，二川さんを招き，いっしょにまんがを描いたり，お話を聞いたりすることで，二川さんのおかれている状況や身体の様子について知るとともに，二川さんがまんがを通して，他の人や社会とのふれあいを求めていることを感じ，かかわりをつくっていきたいという課題意識を持つことができるようにする。「考える」段階では，二川さんとの継続的なかかわりづくりに向けての実践の方法について話し合う。個人でできる実践として，手紙やまんがをやりとりすること，自分の趣味を生かして二川さんの喜びそうな贈り物をすること等，協同で行う実践として，ビデオレターによる交流や二川さんを招いてのまんが教室や作品紹介を考える。「行う」段階では，自らの決定に従って個人や集団で実践を行い，作品のやりとりや，二川さんの２度目の招待を行う。なお，考える段階と行う段階は柔軟的に考え，行いつつ，自分の実践のあり方について，随時，自己評価と見直しを行わせるように考えた。「見つめる」段階では，実践を振り返り，相手の願いに応え，喜ばせることが出来た自分のよさや，これまで出会ったことのない対象とのかかわりの楽しさに対する実感の深めを促し，二川さんに対する思いの深まりを味わわせるようにした。

(3) 目標

○　二川さんとのまんがを通した交流を通して，身体の不自由なお年寄りとのかかわりを持ち，老いについての気づきをもとに，相手とのかかわりを喜び，求める態度を持つことができる。

(4) 計画（５時間）

段階	活動と内容	主な手だて	配時
感じる	1　二川さんと出会い，かかわりへの意欲と見通しを持つ。		2
	(1) 二川さんのまんがを知り，かかわりへの興味や関心を持つ。	※　二川さんの作品，人物像との出会い	①
	○　かかわりの対象の把握と興味・関心の喚起		
	○　かかわりの対象への疑問の把握		
	(2) 二川さんへのまんが便りを書き，かかわりを求める。	※　共通の手段による対話	課外
	○　かかわりを求める意思の伝達と活動への意欲化		
	(3) 二川さんと直接出会い，継続的なかかわりへの見通しを持つ。	※　二川さんの招待と，二川さんの思い・願いの聞き取り	①
	○　相手に対するかかわりの意欲の伝達		
	○　二川さんの置かれている状況や思いに対する理解の広がり		
	○　相手の，自分に対する求めの理解		
	○　二川さんとのかかわりを継続していく課題の明確化	※　二川さんからのかかわりの要請	
	まんがのおじいさんに　まんがのかきかたをならったり まんがをみせてもらったり　おくったりして　なかよくなろう		
考える	2　二川さんとのかかわりの持ち方について考え，話し合う。		1
	(1) 手紙等，間接的な方法でのかかわりと，直接招待の際の方法や準備について話し合う。	※　二川さんの作品集についての情報提示	①
	○　個人実践（まんがづくり等）についての計画と実践準備		
	○　共通実践（２度目の招待）についての吟味・判断		
行う	3　二川さんとのかかわりを持ち，相手に対する理解を深める	※　まんが，手紙ビデオでの往復的なやりとり	1 課外
	(1) まんがづくりを行い，二川さんとの交流を深める。		
	○　お年寄りの素晴らしさへのあこがれと尊敬の感受		
	○　趣味をもとにしたかかわりの実践による相手の喜びの感受		
	(2) 二川さんを招待し，自分が描いたまんがを見せたり，二川さんを喜ばせるプレゼントをしたりする。	※　子供たちの側からの働きかけを行う場の設定	①
	○　意志決定に基づく実践による行動力の高まり		
	○　仲間との実践による相手の喜びの感受と達成感の感得	※　情報提供者としての指導員の方の活用	
	※　考える段階と感じる段階は，行きつ戻りつし，行いながら考えを付加・修正していく。		
見つめる	4　自己の実践のよさを振り返り，かかわりを深めたり，広げたりしていこうとする意欲を持つ。		1
	(1) 二川さんの喜びを知り，自分たちの実践の有効性やかかわりの楽しさについて話し合う。	※　二川さんや周囲の人による評価と自己評価	①
	○　有用感・達成感の感得と，実践の継続・拡大への意識化		

(5) 指導の実際

① 感じる段階（1～2/5時間）

ここでは，二川さんとの出会いを持ち，かかわりへの意欲と，かかわりの仕方の見通しを持つことをねらいとした。第1時では，二川さんが描く4コマまんがを提示した。子供たちはその面白さに浸り，プロの漫画家が描いたに違いないと予想した。そこで二川さんの人物像の概略を知らせたところ子供は資料1のような疑問をもとにかかわりへの関心を持った。

二川政近さん
・78歳のお年寄り。老人ホームで暮らしている
・ 漫画家ではない。

写真1 二川政近さん

・なぜそんなに手になれるのか（37人）
・どうすれば漫画が上手になれるのか（35人）
・仕事でないのに漫画をたくさん描くのは（29人）
・一日にどれくらいの漫画を描くか（21人）

資料1 子供の疑問

ふたがわまさちかさんへ
ふたがわせんせい，いつかがっこうにきてください。きたいことがあります。ふたがわせんせいはいつからまんがをかきはじめているのですか。いくつぐらいからまんがをかけるんですか。どうしたら，ふたがわせんせいみたいにじょうずにかけるんですか。きておしえてください。わたしにはりょういちゃんというおとうとがいます。だからわたしのまんががのしゅじんこうは，いもうとのさやちゃんがいもうとのさやにしました。

資料2 R児が二川さんへ宛てた手紙

第2時では，子供たちからの依頼をもとに，二川さんを教室に招いた。ここでは，①お互いのまんがを紹介し合ったり，二川さんといっしょにまんがを描く活動，②二川さんへの質問を通して，二川さんがまんがを描き続けることで，自分の夢を大切にしたり，他の人を喜ばせたいと思っていることに気づく活動，③1の2の子供たちとのかかわりを求める二川さんの願いを聞く活動を設定した。

写真2 まんがの描き方を習う

問 おじいさんと一緒にまんがを描いてみてどう思いましたか。
K 簡単と思っていたけれどやったら難しかった。おじいさんはおしゃべりもせず，描いているからすごい。
A 自分ではまだまだかなって思っていたけれど，教えてもらったら上手になれた。空に届くくらいうれしい。
Y いっしょに描いてみて二川さんがとても上手なのが分かりました。最初は，自分がかわいいと思ったらいいと思ったけど，工夫したらいい絵になるんだなと思いました。
R 途中で間違って，難しいところが描けなくて，下手だと思って いたけれど，二川さんに上手だねって言われてうれしかった。わたしはうまく描けました。二川さんはすごいなと思いました。

資料3 一緒にまんがを描いてみての感想

C1 おじいさんはいつ頃から漫画を描いているんですか。
F 子供の頃から漫画家になるのが夢でした。でも，足が悪くてなれなかったから，いまもずっと描いています。
C2 一日にどれくらい描いているんですか。
F 多い日は1日に10枚描くこともあります。（わあーっという歓声が上がる）
C3 どうしたら漫画が上手になれますか。
F こつというのはありません。好きなことを続けることです。
C4 どうして漫画家じゃないのに，そんなにたくさん・毎日かくんですか。
F わたしの漫画を見て皆さんが喜んでくれるので，皆さんのにこにこ顔が見たいし，まんがを通してお友達がたくさんできるからです。附属小の1年2組の皆さんとも仲良くなりたいです。

資料4 二川さんの願いを聞く活動の内容

考察①

資料1・2から，子供が二川さんへの興味を持ち，かかわりへの意欲を持っていることが伺える。ここでのかかわりへの意欲の根底にあるものは，「二川さんという人を見てみたい，会ってまんがの描き方を習い，自分もうまくなりたい。」という自分からの求めである。これは，まんがという子供たちの生活に身近

ふたがわさんはすごいなふたがわさんかっこいいなとおもいました。すぐにてがのらくがきをしてすごいなとおもいました。そはくろをかくときにたことでしょうずだったらくろもうしのほうもひとつひとつかいたらいいとおもいました。やさしいにんげんだなとおもいました。

資料5 出会い後のR児の感想文

な事象から出会わせたことと，面白いまんがを描いたのが車椅子に乗った78歳のお年寄りであるという驚きのある出会いを持たせたことが有効であったからだと考える。また，第２時の直接的な出会いの中で，資料５のＲ児のように，老いや障害といった二川さんの身体への気づきや，その人間的な素晴らしさに触れ，かかわりへの意欲を高めている姿が見られた。これは，ともにまんがを描く活動や二川さんへの質問により，その願いを聴取する活動が有効であったからだと考える。

② 考える段階（３／５）

この段階でのねらいは，二川さんが普段どんなくらしをしているのかや，その身体的な状況に関する情報を知り，かかわりの方法について個人で行うものと，協同で行っていくものとを決定することである。支援として，二川さんの生い立ちや身体的な状況については，二川さん自身が語られたものをビデオで提示し，補足説明した。また，老人ホームでのくらしについては，１日のタイムスケジュールや面会者数，趣味の音楽クラブ活動の様子を写真提示し，二川さんが，人とのかかわりを求めていた言葉を想起させた。協同で行う実践として，二川さんを再度招待する際に何をするのかを考えさせたとき，二川さんに関する情報を提示する前と提示した後で，資料６・７のような変容が得られた。

第１時終了後
「二川さんに会ったら，どうしたら絵が上手に描けるのか教えてもらいたいです。こつを，教えてもらいたいです。」
↓
第３時終了後
「Ｋさんや Ｙさんといっしょに手袋で人形劇をしてあげようと思います。題名は，『はじめてまんがをかくぞ』っていうので，まんがをがんばるうさぎが主人公です。」

資料６　Ｒ児の計画の変容

Ｒ　わたしは，紙芝居で「のらくろサンタのクリスマス」というのと，手袋の人形劇で「始めまんがをかくぞ」というのをします。わけは，のらくろは二川さんが好きだし，二川さんにまんがをおしえてもらってうれしかったし，「おかげで，こんなにじょうずになったよ。」というところを見てもらいたいからです。この前は，「二川さんが，わたしたちをにこにこ顔にしてくれたから，今度はわたしたちの番で，二川さんのにこにこ顔が見たいです。
Ｔ　どうしてのらくろのサンタがでてくるのかな？
Ｒ　のらくろは，二川さんが好きなもので，サンタは人にプレゼントなどをして夢をあげるから。もうすぐクリスマスで，老人ホームではクリスマスはあんまりにぎやかじゃないと（二川さんが）いっていたので二川さんにも楽しいクリスマスをして欲しいから。

資料７　Ｒ児の計画変更の根拠（聞き取りから）

考察②

資料６・７の計画の変容をみると，プレゼントがのらくろに因んだものになったことや，「今度は私たちの番で」という言葉から明らかなように，Ｒ児の中に，二川さんの喜びを願い，相手のために自分に何ができるかと考える姿が生まれていることがわかる。学級全体においても，「二川さんにしてもらうこと」を計画した子供が（のべ50人→27人）減り，代わって「自分たちが二川さんにしてあげること」を計画した子供が大きく（のべ52人→ 101人）増えた。二川さんのために自分から何かをしたい，せずにいられないという思いへと高まり，自分の求めからばかりでなく，二川さんの求めや状況を考えながら，相手にとっても楽しいかかわりをつくろうと実践のあり方を見直してきているといえる。これは，外部の人とのふれあいに乏しい二川さんの老人ホームでの生活や，生い立ちについての情報を提示したことが，相手の心情に目を向けさせる上で有効であったからと考える。さらに，「相手のにこにこ顔が見たいから」という二川さんの言葉を自分のものとして取り込んでいることからも，創造価値・態度価値を取り込んだ生き方をしている二川さんとのかかわりが，自分と他者とのかかわり方を見なおす上で有効であったと考えられる。

③ 行う段階（課外　＋４／５ ）

写真３　絵手紙を受け取る二川さん

ここでは，前段階での決定をもとに，二川さんとのかかわりを深める実践を，個々の実践と協同での実践に分けて行った。個人実践としては，二川さんとの手紙や絵手紙でのやりとり，協同実践としては，「にこにこ顔と声のお便りをビデオレターにして送ろう」を実践し，さらに，二川さんを再度招待して，ふれあいの実践を行った。

【協同実践としての２回めの直接的なふれあいのなかで】

写真４　紙芝居をするＲ児たち

Ｔきわ　たのとよすするんしかったくはきたふまよれたきたどがふいさ。

（中略）

資料10　交流後のＲ児の感想文

考察③

資料10のＲ児の姿から，二川さんとのかかわりを自らの意志で，あるいは友達と協力してつくろうとする姿が見られる。「相手のにこにこ顔がみたくて」という願いに基づく働きかけが生まれたのは繰り返しふれあえる場を設定し，自分の求めと相手の求めを呼応させながら実践をつくっていく，双方向での交流活動が有効であったからだと考える。また，自分を必要としてくれる二川さんの願いに応えようとする生き方を，体験価値を実現している二川さんとの出会いから学び，自らの態度に生かそうとしていることがわかる。

④　見つめる段階（５/５）

ここでは，実践を振り返って，自らの達成感や有用感，かかわりの中での安定感を感得させることをねらいとした。てだてとして，これまでのかかわりの様子の変化をビデオや作文で提示するとともに，併せて二川さんのふれあいに対する感想をビデオで提示した。そして，実践を重ねる中で，自分たちの思いがどのように変容してきたのか話し合わせ，実践の中で感じた「自分の心のぴかぴか探し」を行った。

ふれあうときの気持ちはどうかわりましたか。

はじめは，「まんがをならいたい」から二川さんに会いたいと思っていたんだけれど，会ってみて，二川さんがわたしたちをにこにこ顔にしてくれて，今度は自分たちの番だと思うようになりました。先生の助けとかも借りずに自分たちで協力してできるようになりました。

自分の心にどんなぴかぴかが生まれたと思いますか。

資料11 実践の変容についてのＲ児の発言

資料12Ｒ児の学習後の感想文

考察④

資料11･12から，Ｒ児は相手を喜ばせることができる自分，一生懸命努力できる自分，二川さんとの出会いからお年寄りへと視点を広げることができた自分に対して価値を感じていることが分かる。相手のためになにができるかを問い，実践してきた自分自身に対して達成感を感じ，自己の有用感を高めているといえる。これは，自分の求めから始まり，次第に相手の願いを感じながらかかわりをつくっていく中で自らの生き方をつくっていった学習の過程を振り返る，ビデオや写真の提示が有効であったからだと考える。

４．全体考察

生き方の価値を実現している二川さんとのかかわりを設定し，自他の願いを共に実現しようとする実践を位置づけた学習過程を取ることによって，相手の素晴らしさに感じ，その生き方を取り入れた実践を行い，自らも相手を喜ばせることができる存在であることへの自信を深める姿が見られた。課題として，子供が自発的に相手とのかかわりを深めたり継続したりしやすいように，対象の設定や順序性を考慮する必要がある。

生き方を創る「あらつ学習」の展開

総合学習委員会　石　田　耕　一

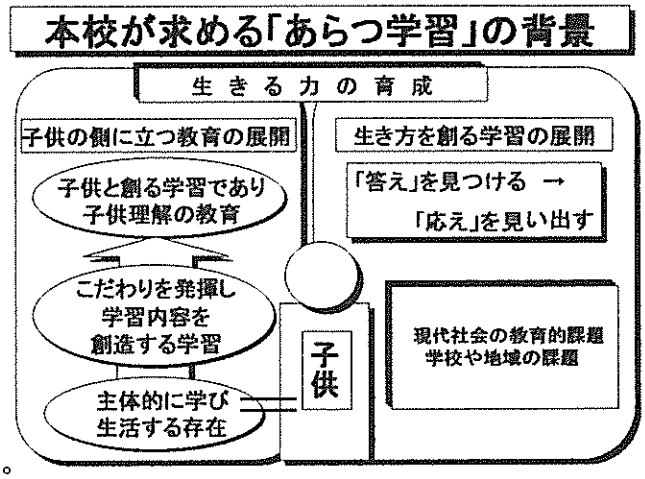
本校における「あらつ学習」は，子供一人一人が対象とのかかわりにおけるこだわりを発揮しながら，かかわる対象を選択したり，追究方法や実践の仕方を決定したりして，子供自らが学習内容を創造する総合的な学習である。

1．本校が求める「あらつ学習」の背景

本校が求める「あらつ学習」は，「子供の側に立つ教育の展開」と「生き方を創る学習の展開」という２つの柱によって構成する。

(1) 子供の側に立つ教育の展開

元来子供は，主体的に学び生活する存在である。子供が自ら求め，課題追究を行っていく学習においては，一人一人の子供の学びは個性的になる。ここでの対象とのかかわり方を支える子供一人一人の個性的な思いや願いを「こだわり」と考える。子供一人一人が自分の「こだわり」を発揮し，自分がかかわる対象を選定したり，追究の方法や実践の仕方を決定したりする学習は，まさに子供と創る学習であり，子供理解を基盤とした教育の原点に立ち戻ることになるのである。



(2) 生き方を創る学習の展開

現代社会においては，国際化や情報化，地球環境問題，高齢化，少子化など緊急な対応を迫られている問題が山積している。それに加えて，子供の生活の場としての家庭や学校，地域の特色を生かした教育が重視されている。これらのことは，まさに今を生きる子供たちにとって避けて通ることのできない現実の生活課題であると同時に，たどり着かなければならない絶対的な「答え」がないという難しさを含んでいる。子供たちがこのような社会の変化に主体的に対応して生きていく力を身に付けるためには，「答え」のない問題について考え，主体的な追究活動を通して，一人一人が自分なりの「応え」を見い出していく学習が求められている。

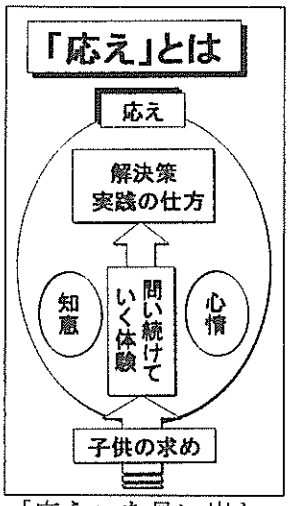
2．「あらつ学習」のねらい

生活現実の中で直面する様々な問題について主体的に追究していく体験を通して，自ら学習内容を生み出していく実践的な態度を育てる。

生活現実の中で直面する様々な問題について主体的に追究していく体験を通すとは，「あらつ学習」の学習内容と方法を示す。具体的には，○追究していく「もの・人・こと」を含む学習空間と出会い，自分なりの課題を発見し，追究課題をもつこと，○答えがないにもかかわらず，一人ひとりが暫定的な決着をつけるために様々な体験や調査，実験など教科で身に付けた力を総合的に発揮しながら，多様な追究をしていくこと，○自分なりに見い出した「応え」を生活の中で生かし実践することである。そして，自ら学習内容を生み出していくとは，子供一人一人が対象に対してこだわりを発揮しながら，こだわる学習対象を選択したり，追究方法や実践の仕方を決定したりすること，つまり学習内容の創造である。

３．主題の意味

(1) 生き方を創る「あらつ学習」の展開とは



生き方を創るとは，子供たちが生活の中で直面する様々な問題から自分にとっての課題を見つけ，一人一人が対象へのこだわりを発揮しながら追究していく中で，自分なりの「応え」を見い出していくことである。ここにおける「応え」とは，自分にとって価値ある知恵や心情，それらに支えられた解決策や行動の仕方のことである。

自分にとって価値ある知恵 →	子供が学習対象とのかかわりの中から見い出した実用的な知識やその使い方。
大切にしたい心情 →	多面的な見方を通して，自分が学習対象とどのように接していくかという心の在り方。
解決策や行動の仕方 →	向上心に支えられた暫定的な決着，調和的な心に支えられたひとりよがりでない決着。

生き方を創る「あらつ学習」の展開とは，こだわりを発揮して，自分なりの「応え」を見い出し，新しい学習内容を生み出していく総合的な学習を，３年生以降の教育課程上に「あらつ学習」として位置付け，豊かな人間の育成をめざす年間指導計画の作成と実践を行うことである。

(2) めざす子供の具体的な姿

① 自分にとって学ぶ価値のある内容を見極め，自分の課題を見つけることのできる子供。
② 課題に対して主体的に追究し，自分なりの「応え」を見い出すことのできる子供。
③ 他者とのかかわりの中で，自分の「応え」を見直したり，他者と共に新しい生活を創り出したりすることができる子供。

(3) 育てたい資質や能力

生き方を創る「あらつ学習」においては，「自ら求め，主体的に追究していく力」を育てたい。この力は，○生活の中から自分にとっての課題を見い出す問題発見力，○情報の収集の仕方や調べ方，まとめ方，報告や発表，討論の仕方などの学び方，○協調性や思いやりなど互いのよさを認め合いながら，共に伸びていこうとする心や態度によって支えられている。

４．生き方を創る「あらつ学習」の年間指導計画の作成

(1) あらつ学習の内容

「あらつ学習」の内容は，子供一人一人がこだわりを発揮しながら，より納得のいく「応え」を求めて学び続ける体験そのものが内容である。

そこで，学習していく対象の条件として次の３つの視点を大切にする。

① 子供の生活体験の実態から，経験させたい自然体験や社会体験などを大切にする。
② 現代社会の教育的課題に対応するという面からの内容を大切にする。
③ 学校や家庭，地域の特色を生かした教育課題を大切にする。

この３つの条件をもとに，具体的には，「自分(成長，希望，夢など)」「生命」「環境」「国際理解・協力」「郷土，歴史，伝統文化」などを学習対象を選定する視点として設定する。

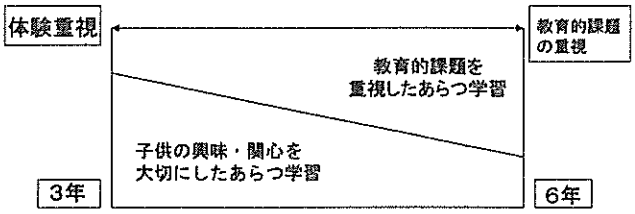
子供の興味・関心を大切にした「あらつ学習」では，子供の自由性を大いに認め，子供自らが学習対象を設定していくことになる。ここでは，学習過程や学習結果として，子供たちが教育的課題に触れることができるよう配慮する。また，教育的課題の比重が大きいときは，「自分（成長，希望，夢など）」「生命」「環境」「国際理解・協力」「郷土，歴史，伝統文化」などが学習対象を規定する視点として色濃く反映される。

(2)　内容の配列

① ねらいや学習対象，追究方法などの活動様相から配列を工夫する。

３年生では，生活科との関連を考慮し，自然体験や社会体験などを重視し，子供の興味・関心を重視した「あらつ学習」の単元を配置し，対象とのかかわりの過程や学習の結果として，教育的課題に触れるようにする。そして，６年生に向かうにつれて，教育的課題を重視した「あらつ学習」の単元を多く配置する。

【活動様相からの単元配列の工夫】



また，この流れの中に，表現発表や自由課題選択に重点を置いた単元を計画的に組み込んでいく。表現発表に重点を置いた「あらつ学習」については，４月に「藤見学習」，９月に「月見学習」を位置づけ，音楽表現や劇的表現を高めるとともに，学級や学年の共同的な学びの力も育んでいく。自由課題選択に重点を置いた「あらつ学習」については，７月～９月に「自由研究発表会」を各学年に設定し，自ら課題選択を行い，調査・研究・発表という一連の学びの過程を積み重ねていくことができるようにする。また，６年生においては，自由課題選択により重点を置き，10，11月に「長崎フリータイム(修学旅行)」，３月に「卒業研究発表会」を位置付けている。

② 学習対象を取り上げる視点とその学年発達に応じた単元配列を工夫する。

対象の広がりについては，３年生から６年生までの発達段階による課題意識の実態に即した系統性のある配列を考慮する。大切なことは，子供にとって身近な生活の場や地域としての「あらつ」から学習が始まり，「あらつ」を通して見えてくる対象やかかわっていく対象が深まり広がっていくという単元配列を工夫していることである。単なる同心円的な対象の広がりでない「あらつ学習」としての価値がそこにある。

③ 教科学習との関連を考慮した単元配列をする。

ア　教科学習の内容との関連化

教科学習において取り扱った，及び取り扱っている対象を関連付けて配列する。

イ　教科学習で培われた力との関連化

教科学習において培われた力を発揮できるよう関連付けて配列する。

４．生き方を探る「あらつ学習」の指導

(1) 教材化の視点

① 子供の主体的な追究の保障から

○ 生活との結び付き

・子供の生活から始まり生活にかえるという視点を重視することで，主体的な学習を保障できる。

○ 実体験との結び付き

・具体的な活動や体験を通すことで，生きて働く知恵を獲得させることができる。

○ 心的なかかわり

・感動や実感を重視することで，調和的なかかわりが生まれ，豊かな心を育むことができる。

○ 追究の多様性，発展性

・追究の多様性や発展性を保障することで，一人ひとりの子供の学びを成立させることができる。

②　現代の教育的課題の追究から

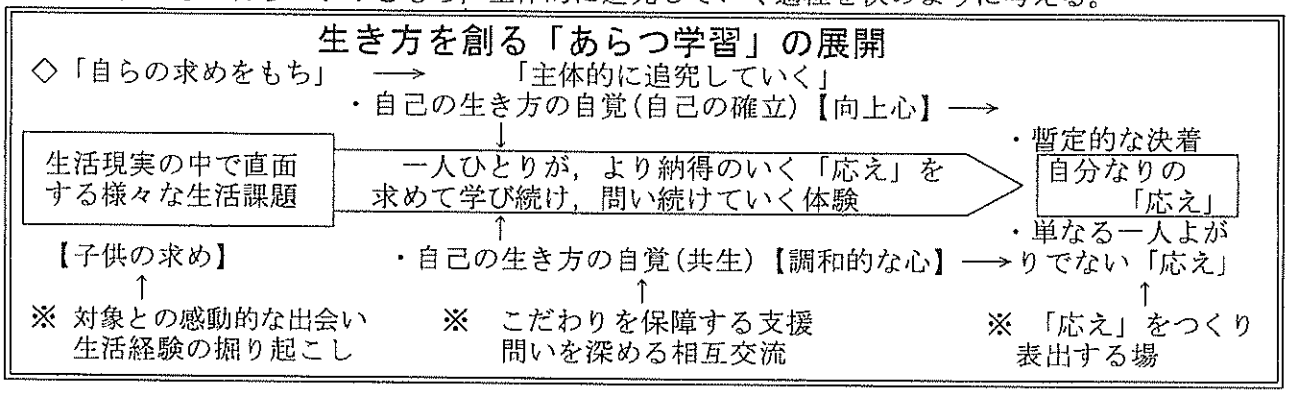
○ 環境・国際理解などの視点を内容として含み込んでおり，教育的課題にふれることができる。

◇　追究課題の条件

○　子供の生活体験等の実態に密着し，解決への意欲や必要感につながるものであること。 ○　意識化から実践化まで，子供の意識の流れに沿った問題解決の過程を構成できること。 ○　発達段階による課題意識の実態に即したものであること。

(2)　あらつ学習の基本的な学習展開

子供たちが自らの求めをもち，主体的に追究していく過程を次のように考える。



(3)　「あらつ学習」の年間標準時数とその運用の仕方

①　「あらつ学習」の標準時数

「あらつ学習」の年間標準時数は，３・４年生で１０５時間，５・６年生で１１０時間とする。

１週につき，３時間を配当することを原則とし，各学期に分配する。但し，教科学習や学校行事との関連においては，月単位，週単位で配当時数を運用し柔軟に対応していく。

②　時間割の弾力化について

授業の１単位時間については，４５分を原則とする。ただし，年間の総授業時数を確保しつつ，適切な計画のもとに授業の１単位時間を弾力的に運用する。そして，月あたり１２時間配当を基本とし，学校行事との関連においては時間のまとめ取りも考慮する。そして，本年度は移行措置として，木曜日の５校時に１時間(45分)，木曜日の６校時に0.7時間(60分授業で，クラブ活動との隔週設定)の1.7時間を設定し，年間約60時間の実施を計画している。また，まとめ取りについては，藤見学習や月見学習において，藤見学芸会や月見学芸会の前週に６時間をまとめ取りする。自由研究発表会については，７月下旬に課題設定のための時間と９月第１週に発表会のための時間設定を行う。また，６年「長崎フリータイム学習」では，修学旅行の前後に配当時数を集中させる。

(4)　教師の支援

①　情報提供や学習環境づくり

ア，地域人材バンク，情報機関マップ

イ，総合学習スペースの設置

②　ティーム・ティーチング

ア，学級，学年，教科から見たＴＴ　→　学級チーム，同学年・異学年チーム，教科チーム等

イ，人の構成・関係から見たＴＴ　→　複数担任型，主・副協力型，ボランティア参加型等

ここでは，学級，同学年交流型，異学年交流型，全校交流型，他団体交流型などの学習形態を適宜実施していくことになる。（例）「藤見学習」「月見学習」「自由研究発表会」(全校交流)

(5)　評価

①　課題追究的な活動における育てたい資質や能力の面から評価する。

②　今ある自分をスタートラインとしたプラスの自己評価を重視する。

③　カルテやポートフォリオ的な個人データの収集による過程評価を行う。

第３学年　あらつ学習年間計画

単元名（時間・学習対象設定の視点）		活動の概要
4月	みんなで表そう！藤見学習 （６時間）	○　藤の花を祝っての藤見学芸会で，春をテーマに発表内容や表現方法を考え，工夫して実践する活動を通して，新しい学年としての希望や学級・学年の凝集性を高める。
5月	あらつウォークラリー （１０時間・郷土）	○　学校周辺にある自然や社会施設，催しなどを探索したり，発見したことや地域の様子をあらつマップに表したりする活動を通して，地域の環境の概観をとらえていく。
6月	西公園こだわり調べたい （１１時間・環境）	○　西公園の自然や施設など自分が興味を抱いたことの調査・聞き取りを行い，西公園の自然や利用する人々の様子を感じ取り，地域にある公園のよさを感じたり，西公園の価値を考えたりする。
7月	カブト虫牧場をつくろう （８時間・生命）	○　カブトムシなどの昆虫について卵のふ化や幼虫からの飼育を体験し，生命の不思議さやすばらしさをを感じ取り，生命を大切にしようとする心情や態度を培う。
9月	楽しさいっぱい！夏休み自由研究 （９時間）	○　自由研究のテーマ設定や進め方について知り，自分のテーマについての内容や方法を見通し，自由研究を進めていき，一つのことをやり遂げる成就感・満足感を味わう。
	月までとどけ！みんなの月見学習 （６時間）	○　学校や学年，学級で決めたテーマをもとに，表現内容や方法を話し合い，内容を歌や劇で表現していく活動を通して，自分たちが伝えたいことを豊かに表現する。
10月	育てよう！附小産 博多とよのかいちご （１０時間・郷土・環境）	○　博多名物の博多とよのかいちごを農家の方を招いて一緒に栽培し，土を整えていく大切さや福岡の特産としてのとよのかいちごを作る人の工夫や努力を感じ取る。
11月 12月	おもしろたんけん福岡 （１７時間・郷土）	○　福岡にあるおもしろいもの・ことを探す目的で街に出かけ，地域の中のおもしろいもの・ことを取材してまとめたことを発表し，福岡の街に愛着をもったり，よさを実感したりする。
1月 2月	なるほど，なっとく 博多の正月・世界の正月 （１２時間・国際理解）	○　福岡の正月行事や正月の食べ物，世界の正月などを紹介してくれる人，留学生などと一緒に，福岡ならではの正月の様子を体験したり，世界の正月を体験したりして，地域から世界に目を広げる。
2月 3月	伝えよう！ 私たちのまち福岡 （１６時間・郷土・情報）	○　１年間のあらつ学習をもとに，あらつや福岡のよさを他の地域の友達に伝えたり，友達の地域と比べたりして，情報活用力を高めこれからの福岡のことを考えていく。

第４学年　あらつ学習年間計画

単元名（時間・学習対象設定の視点）		活動の概要
4月	みんなで表そう！藤見学習 （６時間）	○　藤見学芸会で「春」をキーワードにした表現内容を考え，合唱や合奏，劇などの表現方法を工夫していく活動を通して，新しい学年としての希望や学級の凝集性を高める。
5月 6月	おとなりの国　韓国しらべ隊! （13 時間・国際理解）	○　福岡の隣国，大韓民国について，キムチや衣服、建物など自分なりの課題で調べたり体験したりしながら，韓国の人と交流することで，異文化を理解し，異文化の人と交流する楽しさを味わう。
6月 7月	守ろう！みんなの室見川 （12 時間・生命・郷土・環境）	○　室見川の生き物や自分たちの生活とのかかわりを調べたり，川を守る取り組みを体験したりして，自分たちにできる河川保護について考え実践し，身近な環境の大切さや生命の尊さを感じる。
7月 9月	楽しさいっぱい！夏休み自由研究 （９時間）	○　夏休みの自由研究に向けて，テーマ設定や追究の方法，表現の方法について計画を立て，見通しをもって研究に取り組み，その成果を相互評価していくなかで，自分の研究に挑戦する楽しさを味わう。
9月	月までとどけ！みんなの月見学習 （６時間）	○　学校や学年で決めたテーマについて，どんな内容や方法で表していくか，自主的な話合いを通して考え，計画，実行，評価していくなかで，自分たちが伝えたいことを相手意識をもって豊かに表現する。
10月	なんでもリサイクル ～ぼくもわたしも発明博士～ （８時間・環境）	○　不要物を集め，その生かし方を考え，芸術作品を作ったり生活用品を作ったりする活動を行うなかで環境の大切さを理解し，環境を守ろうとする心情を高めていく。
11月 12月	長浜ラーメン紀行 （19 時間・郷土・国際理解）	○　長浜ラーメンをきっかけに，おいしいラーメンの作り方や人気の秘密，おすすめの店，ラーメンの起源，全国ラーメン探訪などと自分のテーマを決めて調べながら，郷土の味のすばらしさを感じ取る。
1月	芸の道をきわめよう （16 時間・郷土）	○　博多のものづくりや大道芸などに長けている名人の方々と出会い，一緒にものづくりや芸の習得に挑戦するなかで，身近な郷土に伝わるもの・こと・人のよさを理解する。
2月 3月	福岡よかもんネットワーク （16 時間・郷土・情報）	○　これまでに追究してきた，地域のもの・こと・人のすばらしさや，自分なりの思いや考えを，方法を工夫しながら他の地域に発信するなかで，郷土への愛着を深めるとともに，情報活用力を高める。

第５学年　あらつ学習年間計画

単元名（時間・学習対象設定の視点）		活動の概要
4月	感動表現！藤見学習 （６時間）	○　藤見学芸会の歴史や願いを調べ，それらをもとに，高学年としてふさわしい内容を話し合い，実践する活動を通して、学級の成員や高学年としての自覚を高める。
5月	未来に残そう！ きらめく博多湾 （14時間・環境）	○　博多湾と自分の生活とのつながりを調べ，博多湾の生態系や施設についての課題追究を行うことを通して，博多湾への愛着を深めたり，かかわり方を見直したりする。
6月	発見！地球にやさしいエネルギー （12時間・環境）	○　学校に設置された太陽熱発電の仕組みや二酸化炭素の排出が少ない自然環境に優しいエネルギー資源を調べ，これからの望ましいエネルギー利用のあり方を考える。
7月	個性輝く！夏休み自由研究 （９時間）	○　夏休みの自由研究に向けて，研究の対象や課題の設定の仕方を知り，自分の課題に応じた追究内容や方法の見通しを持ち，課題解決に取り組むとともに相互評価することで，研究の成就感を味わう。
9月	創造発信！月見学習 （６時間）	○　高学年にふさわしい月見学芸会での表現内容を話し合い，計画から立案・実践までの役割分担を決め，自主的に運営することを通して，みんなで表現する喜びを味わう。
10月	感じよう!アジアの風 ～福岡とアジアのつながり～ （15時間・国際理解，協力）	○　アジアマンス会場での福岡市と韓国，中国を始めとするアジア諸国との文化的，経済的なかかわりを調べ，国際都市としての福岡市の役割に気付き，今後の望ましい関係を考える。
11月	探ろう！日本の国技 ～福岡場所ではっけよい～ （15時間・国際理解，協力）	○　相撲部屋への訪問体験をもとに，相撲を始めとする日本の国技のルーツを調べ，スポーツにおける伝統文化に関心を深めるとともに，校内の伝統行事である相撲大会への意欲を高める。
12月 1月	守ろう！これからの福岡の水と緑 （16時間・環境）	○　福岡における環境問題の原因を自分の生活との関係で調べ，これからの水資源や森林資源を保護するキャンペーンを行うことを通して，地域の環境問題に関心をもち，自分の生活を見直す。
2月 3月	希望と誇りⅠ （17時間・伝統）	○　附属福岡小学校の施設や人などにおける歴史を調べ，附属小学校の歴史と伝統の重みを実感するとともに，これからの時代を担う最上級生への意識をもつ。

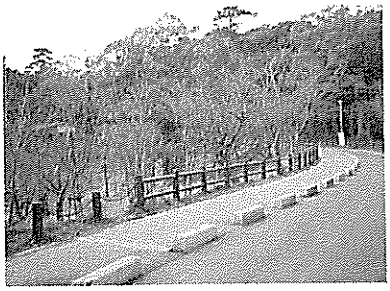
第６学年　あらつ学習年間計画

単元名（時間・学習対象設定の視点）		活動の概要
4月	感動表現！藤見学習 （６時間）	○　藤見学芸会の表現内容や幕間の出し物の企画・運営について話し合い，自分たちの手で藤見学芸会を創り上げていく活動を通して，最上級生としての意識を高める。
5月 6月	希望と誇りⅡ ようこそ先輩！開こう、未来の扉を （13時間・自分）	○　自分の夢を実現された附属福岡小学校の先輩たちと共に、自分の希望や夢について語り合い，先輩の生き方を追体験することで，自分の生き方について考えることができる。
6月 7月	地球環境会議を開こう （15時間・環境，国際理解）	○　福岡市における身近な環境問題をもとに，地球規模の環境問題について考え，自分にできることを実践したり，福岡市の将来の環境のあり方について市に提案したりする。
7月 9月	個性輝く！夏休み自由研究 （９時間）	○　夏休み自由研究に向けて，テーマ設定や追究の方法、表現の方法について自分なりの計画を立て、研究を積み重ね、互いの成果を認め合うことで，達成感を味わう。
9月	創造発信！月見学習 （６時間）	○　最上級生としてのラストメッセージを劇や歌などを通して全校に伝えることで，小学校生活最後の学芸会を思い出深いものにする。
10月 11月	長崎フリータイム学習 （18時間）	○　修学旅行における追究課題や行動日程などの計画立案を自分たちの手で行い，その計画に沿って長崎見学をすることで、主体的に追究する楽しさや大きな行事を自分たちの手でやり遂げる喜びを味わう。
11月 12月	世界はひとつ! ～夢は国境を越えて～ （15時間・国際理解）	○　海外協力に携わっている方々と一緒に物資支援などのボランティア活動をしたり，フォスタープランに参加したりすることで，海外の小学生との交流を深めていく。
1月 2月	わびさびの世界 （12時間・伝統文化）	○　茶道や生け花，書道などの一芸名人になることをめざし，その道の達人とともに取り組むことで、日本の伝統文化に親しみ，その知恵や技を自分のものとして獲得していく。
2月 3月	卒業研究発表会 （16時間）	○　あらつ学習の中で特にこだわりをもった課題についてさらに追究を深め，卒業研究としてまとめ相互交流することで、研究をやり遂げた達成感や満足感を味わい，中学校生活へ期待をふくらませる。

5．指導の実際と考察【事例１】

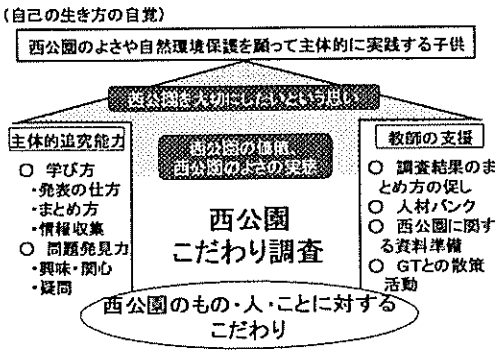
(1) 単元名　　第３学年　　西公園こだわり調査隊

(2) 本単元の考え方


自然が多く地域の方に親しまれている西公園

本単元は，西公園と触れ合うなかで興味をもったことを調べる西公園のこだわり調査（西公園の草花や樹木などの生き物，昔の西公園の様子，西公園の利用者のお気に入りの場所など）を通して，西公園に愛着を感じたり西公園の価値を考えたりして，西公園の自然環境保護を願う活動を考え，実践することができるようになることをねらいとしている。具体的な内容は次の４点である。①西公園にある学習対象に触れ，自分が調べたいもの・人・ことにこだわりをもち，その価値を実感すること，②聞き取り調査や，観察の仕方などを工夫して調査を行うこと，③調査の結果や成果を表現物にまとめること，④西公園のよさや西公園の自然環境保護を願っての主体的活動を実践することである。

本学級の子供たちは，生活科の学習で西公園で遊んだ経験から西公園に対して親しみを感じている。しかし，多様な観点から西公園のすばらしさに触れたり，自然の豊かさを意識している子供は少ない。また，その自然の豊かさを求めて利用されている方がいることに気づいている子供も少ない。このような子供の実態を踏まえ，本単元における「あらつ学習」の構想を右図のように考える。



本単元における「あらつ学習」の構想

本単元の指導にあたっては，西公園に関する自分なりのこだわりを主体的に追究していく体験を豊かにしていくことができるように，３段階の単元構成の工夫を次のように行う。

まず，「見出す」段階では，多様な観点から西公園に愛着をもっている方を招聘・紹介し，その方たちとの西公園散策活動を子供たちが選択し行う場を設定する。以下がその活動内容である。

ＧＴ	ＧＴとの西公園散策活動
江口さん	西公園に毎日通って，西公園の植物を中心に調査されている環境庁自然公園指導員の中村さんと西公園の植物を中心に観察をする活動。
今崎さん	２４年間西公園でホットドックを売り，西公園の虫や年間を通した西公園利用者の動向に詳しい今崎さんと西公園の生き物を散策活動。
中村さん	附属小学校のＯＢで，昭和初期の小学校時代西公園で遊んで遊んでいた中村さんと自然物を利用した遊びの紹介や昔の西公園の様子を聞く活動。
池田さん	うぐみ亭を経営し，西公園から見える景観に愛着をもっている池田さんと展望台から見える博多湾の景観を楽しむ活動。

ＧＴとの西公園散策活動を通して，新たに気づいた西公園のもの・人・ことを床図を使って話し合い，自分のこだわりや追究したい内容を明確にする。

次に，「追究する」段階では，追究内容別グループを編成し，こだわり調査隊を組織する。子供の主体的な追究活動を豊かにするために，次のような支援を行う。○西公園に詳しく愛着を持っていらっしゃる地域の方や西公園管理事務所の方などの人材バンク作りを行い，子供たちの聞き取り調査の協力や講師としての招聘を依頼する。○西公園の昔の様子を表す写真や資料，生き物図鑑や樹木図鑑などを収集し，資料提供を行う。そして，追究した内容についての交流の場を設け，西公園のよさや自然環境保護の観点から西公園の現状を総合的にとらえさせ，西公園の価値を考えたり西公園のすばらしさを感じ取れるようにする。

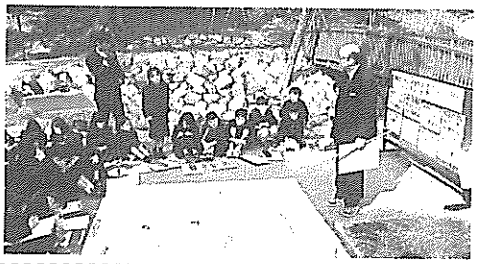
最後に，「生かす」段階では，自分たちも西公園のすばらしさや自然環境保護を願って行える活動を考えさせ，実践化を図る。

(3) 目　標

① 西公園でのＧＴとの散策活動を通して，自分が興味・関心を抱きこだわりをもった西公園のもの・人・ことに積極的に働きかけたり，追究結果を表現物に表したりして，西公園のすばらしさの伝達や自然環境保護を願っての活動を行うことができる。

② 自分がこだわりをもった西公園での学習対象を追究していく中で，西公園に愛着を抱いたり，西公園の価値を考えたりして，西公園のよさを実感することができる。

(4) 計　画（１４時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>活　動　と　内　容</th><th>支　援</th><th>時</th></tr>
<tr><td>見出す</td><td>1．多様な観点から西公園に愛着を感じている方々と触れ合いや西公園清掃を通して，自分のこだわりをもつ。
(1) 多様な観点から西公園に愛着を感じている方々と西公園のもの・人・ことに触れ合う。
○ 昔の西公園の様子と遊び，西公園の草花や樹木，西公園の虫，展望台からの景観
(2) 西公園に対する新たな気づきを出し合ったり，疑問やこだわりを話し合ったりする。
○ 西公園での新たな気づきの表出
○ 疑問やこだわりの表出
３年２・３組，西公園こだわり調査隊を作って西公園のことを調べよう。</td><td>○ 西公園に毎日来られ花の写真を撮られている江口さん，２４年間西公園でホットドックを売っている虫に詳しい今崎さん，うぐみ亭を経営している池田さん，附属小ＯＢで小学校時代西公園で遊んでいた中村さんの招聘・紹介と西公園に触れ合う活動の場の設定
○ 西公園床地図をもとにしての話し合いの場の設定
  </td><td>2
①
①</td></tr>
<tr><td>追究する</td><td>2．こだわり対象別グループによって，取材や観察などを行い，調査結果をまとめ話し合う。
(1) こだわりグループ別の調査を行う。
<table><tr><th>西公園の生き物調べ</th><th>昔の西公園調べ</th><th>利用者お気に入りスポット調べ</th></tr><tr><td>○ 西公園の草花のカメラ撮影，スケッチ
○ 植物図鑑での草花や虫木の実の種類と場所調べ

【西公園に棲むモグラの穴探し】</td><td>○ 昔の西公園の資料収集
○ 昔の西公園の様子の聞き取り調査

【昭和初期の西公園の古地図】</td><td>○ 西公園に来られている方への聞き取り調査
○ 西公園から見える景色のスケッチ・撮影

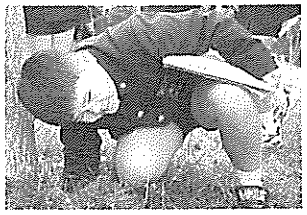
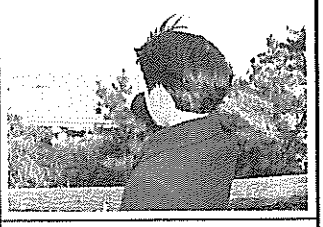
【西公園から見える博多湾の鵜来島】</td></tr></table>(2) 調査結果を表現物に表し，交流を行う。
○ 冬の間も息づいている草花・虫
○ 自然が多くあった昔の西公園
○ 西公園の自然を求め訪れる利用者
○ 西公園を大切にしたいという思い</td><td>○ こだわりグループの編成
○ 西公園での実地調査
○ ＧＴの招聘と協同調査，取材
○ こだわり調査の内容表現の時間の確保と交流の場の設定
○ 西公園への思いの表出の促し</td><td>9
⑥
③</td></tr>
<tr><td>生かす</td><td>3．西公園を大切にする実践や呼びかけを行う。
○ 西公園パンフレットの作成と配布
○ 西公園ゴミ拾い運動とその呼びかけ</td><td>○ 西公園パンフレット作成時間の確保
○ 西公園での配布，呼びかけ，ゴミ拾いなどの実践活動の場の設定</td><td>3</td></tr>
</table>

(5) 指導の実際

① 見出す段階 ・・・多様な観点から西公園に愛着をもっている方との西公園散策活動を通して，西公園のもの・人・ことにこだわりをもつ（１・２／１４時間）

この段階は，今まで自分が気づいていなかった西公園のもの・人・ことに触れるとともに，それらに興味・関心を抱き，自分が追究したい内容を明らかにすることをねらっている。そのための支援として，西公園の近くに住まわれ西公園の植物や動物，西公園から見える景観や昔の西公園に愛着をもたれ，西公園を大切に思っている方と西公園を散策する活動を主な活動として位置づける。

【西公園に愛着を持たれている方との西公園散策活動】

西公園に毎日来られ西公園の花の写真を撮影し続けている江口さんとの西公園散策	附属小学校のＯＢで小学校の頃西公園で遊んでいた中村さんとの西公園での触れ合い	西公園で２４年間ホットドック屋を経営し利用者や生き物に詳しい今崎さんとの西公園散策	うぐみ亭を経営している池田さんと展望所から見える博多湾の景観を楽しむ活動
			
写真１（オドリコソウを熱心に観察している子供）	写真２（昔の西公園の話を熱心に聞いている子供）	写真３（モグラの穴に手を入れその深さを実感している子供）	写真４（西展望所から見える鵜来島を指さしている子供）

【散策活動を通しての子供のこだわりの表れ】

（Ａ児の作文）わたしは，江口さんと西公園をまわったとき，もうなくなりそうな植物やなくなった植物があると聞いて，西公園にどれくらいの植物があるのか興味を持ちました。そして，キランソウ，別名，医者いらずやオドリコソウなど薬になる大事な花や珍しい花が西公園にあるこに驚きました。・・（中略）・・わたしは，西公園にある珍しい花や草を調べたいと思いました。

（Ｂ児の作文）中村さんは，附属小学校の時よく西公園で遊んでいたと話してくれました。むかしの西公園は，竹やしいの実がたくさんあって，竹を切って笛を作ったり，木を切ってゴムじゅうを作ったりして遊んだそうです。それから，今の高速道路の所は海だったと聞いてびっくりしました。私は，昔の西公園のことが知りたくなりました。

（Ｃ児の作文）ぼくは，今崎さんにモグラの穴のありかを教えてもらいました。穴に手を入れてみるととても深くて底まで届きませんでした。モグラはミミズを食べていると聞いたので，それをえさにしてモグラをおびき寄せてみたくなりました。

（Ｄ児の作文）私は，池田さんと西てんぼう所に行きました。池田さんはここから見えるけしきが大すきだそうです。・・（中略）・・西公園にはてんぼう所が他にもあることを聞きました。私は西公園に来る人は，西公園のどこが好きなのかを聞きたいなあと思いました。

考察①

写真１～４の子供の姿やＡ児～Ｄ児の作文からも分かるように，子供たちは，今まで自分たちが気づかないでいた西公園の姿（西公園の珍しい植物，昔の西公園，西公園の生き物，西公園から見える景観など）に触れ，西公園の魅力を感じ取っていった。また，４人の児童の作文の実線部分から分かるように，多様な観点から西公園についてのこだわりが生まれていることもうかがえる。このことは，自分なりの視点で西公園に愛着を持っている４人のゲストを交えての散策活動が有効に働いたためであると考える。

② 追究する段階・・・主体的に西公園こだわり調査を続け，西公園のよさを実感したり価値を考えたりする（３～１１／１４時間）

この段階は，子供がもったこだわりの追究に向けて，調査・聞き取り，資料収集・整理といった具体的な活動を行い，自分の追究結果を表現物に表し交流する中で，西公園のよさや公園としての価値を考えたり，西公園の自然環境を守ろうとする心情を高めることをねらっている。そのための支援として，こだわり別グループを編成すること，子供の追究が可能になるように人材バンクを作成し提供すること，西公園の古地図や写真・動植物図鑑などを準備することである。（ここでは，Ａ児，Ｂ児，Ｄ児の主体的追究の姿を中心に述べる。）

【Ａ児の調査活動・・・こだわり…西公園の植物】

Ａ児は，５人で西公園の植物グループ（「スズラングループ」）をつくり，西公園の植物調査を行っていった。そして，写真に撮ったりスケッチしては，植物図鑑を使って植物の名前と生息場所を調べていった。図鑑でも分からないものについては，写真をもとにインターネットを使って植物の名前を検索していった。Ａ児が調査して見つけた植物は次の２８種である。

【Ａ児が見つけた西公園の植物】

①キカラスウリ，②シロツメクサ，③オドリコソウ，④オナモミ，⑤ジュズダマ，⑥ヘビイチゴ⑦タチツボスミレ，⑧しいたけ⑨よもぎ，⑩シダ，⑪ススキ，⑫つくし，⑬ツユクサ，⑭松ぼっくり，⑮モンキーバナナ，⑯オオイヌノフグリ，⑰ジンチョウゲ，⑱オランダミミナグサ，⑲つばき，⑳ふき，○スイバ，○キクラゲ，○ちどめぐさ，○ホトケノザ，○枝垂れ桜，○梅，○ハコベ，○オオシマ桜

Ａ児は，みんなに西公園にはたくさんの植物があることを知らせるために，写真入りのカードをつくり気づいたことや特徴を図鑑として，また，生息場所を拡大西公園マップに示していった。

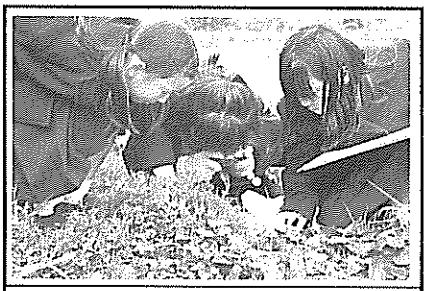


写真５（植物の写真を撮るＡ児）

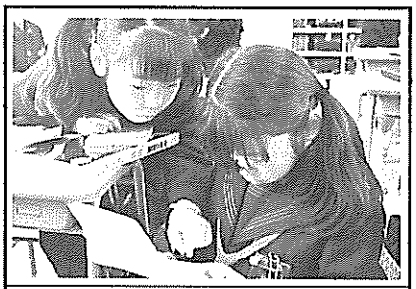


写真６（図鑑で調べるＡ児）

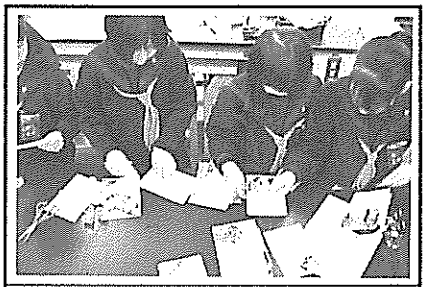


写真７（植物図鑑をつくるＡ児）

（Ａ児の作文）西公園でたくさんの植物を見つけました。植物調査をする前は，小さな植物は，ただの植物だと思っていたけど，よく見ればとてもおもしろくきれいで，わたしは植物が大好きになりました。図鑑の名前を「しぜんいっぱいの西公園」にしました。これからも西公園の植物を調べていきたいです。西公園の植物がなくならないように守っていきたいと思いました。

【Ｂ児の調査活動・・・こだわり…昔の西公園の様子】

Ｂ児は，昔の西公園の様子を知るために中村さんへの取材活動を行った。中村さんに学校に来ていただき昭和初期の西公園の古地図と現代の地図を見せてもらった。そして，２枚の地図を比較し，本当に西公園の下が海だったことや昔，西公園に鹿を飼っていたことに驚きをもった。そして，何とかその当時の様子の写真を手に入れるために西公園近くのお宅を訪問し始めた。清力茶屋のおばあちゃんに尋ねると，うぐみ亭の池田さんがもってあるのではないかという情報を得たＢ児は，うぐみ亭に行き池田さんに取材を行った。そして，昭和３０年代の西公園の航空写真や昭和４４年の荒津山万葉歌碑除幕式の万葉時代風俗ページェントなどの写真を見せていただき，昔の西公園の様子や西公園の

自然の豊富さを認識していった。そして，分かったことを模造紙にまとめていった。

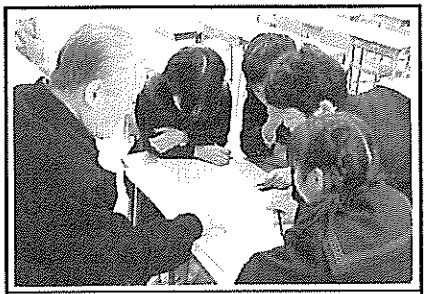


写真８（中村さんと昔の地図を見ているＢ児）

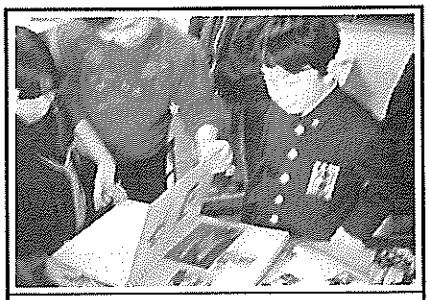


写真９（池田さんと昔の写真を見ているＢ児）

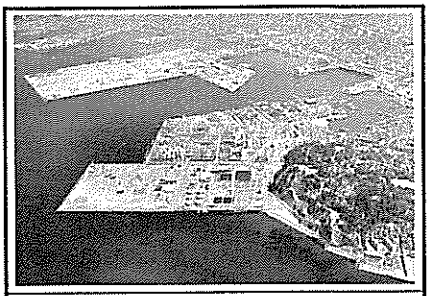


写真10（Ｂ児が見つけた昭和３０年代の航空写真）

（Ｂ児の作文）中村さんに持ってきてもらった地図を見ると，今は高速道路ができているけど，昔はそこが海だったことにはびっくりしました。また，鹿を飼っていたことにも驚きました。池田さんから借りた航空写真を見ると，はっきりしました。昔の西公園は木がとても多く道も舗装されていません。わたしは昔の西公園が好きだなあと思いました。

【Ｄ児の調査活動・・・こだわり…西公園を訪れる方のお気に入りスポット】

西公園のどこが好きで来られるのかにこだわりをもったＤ児は，西公園に来られている方にインタビューをし，好きな場所とその理由をノートに書き，西公園に来られている方のお気に入りスポットを写真に撮っていった。お気に入りのスポットを棒グラフにしたり好きな理由を項目ごとに整理したりしながら，写真を貼り，取材したことを模造紙にまとめていった。そして，調査した結果を「西公園の自然が大好きで西公園にきているんだ」と感想にまとめた。

写真11（利用者にお気に入りの場所を聞き取っているＤ児）

（Ｄ児の作文）私は，今日も西公園に行って西公園に来ている人にインタビューをしました。今日は雨で西公園に来ている人は少なかったけどやっとの事で１人目の人を発見しました。それから２人３人とインタビューの人数もふえてきました。インタビューをして分かってきたことなんだけど，「木がいっぱいあるところ」「花がきれいなところ」「海を見るにはてんぼう所が一番」など，やっぱり西公園のしぜんが大すきでみんな西公園に来ているんだなあと思いました。最後に，２年生の時，お手玉を教わった小林のおばあちゃんに会いました。おばあちゃんに聞くと，「空気がおいしいところだねえ」と話してくれました。私はとかいの中で空気のおいしい西公園なんだとうれしくなりました。

【追究してきたことを発表し交流していく場面】

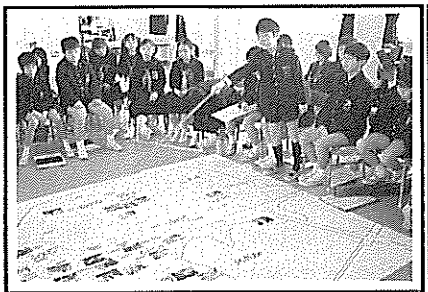


写真12（交流する子供たち）

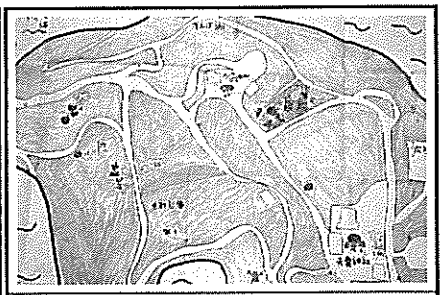


写真13（Ａ児がかいた西公園マップ）

子供たちがそれぞれこだわりをもって追究調査したことを模造紙にまとめたり拡大西公園マップに表したりしたことを交流するポスターセッションを行った。そして，どんな西公園が好きかを話し合った。

以下が，交流におけるＡ児，Ｂ児，Ｄ児の西公園に対する思いの表出である。

Ｂ児　わたしは，今のようにゴミが落ちていなく自然がいっぱいの西公園が好きです。だから，

ゴミ拾いをしたり立て札を立てたりしたいと思います。

D児　西公園に来ている人は，西公園の花や木，西公園から見える海などが大好きで来ていました。私も西公園の自然が好きです。だから，私たちが調べた西公園の自然のすばらしさを来ている人に知らせていきたいです。

A児　西公園にはなくなっている花もあるので，私たちが調べた西公園の植物を利用者に知らせ大事にしていきたいです。

考察②

A児，B児，D児は，中村さんや池田さん，利用者の方への取材や植物図鑑などでの調査を行い自分のこだわりを主体的に追究していった。また，抽出児の作文の実線部分にみられるように主体的な調査追究の結果から自分なりの応えを見出した姿，交流部分の実線のように西公園を大切にしようとする姿や今後のかかわり方を見出す姿を引き出すことができた。このことは，子供の主体的追究が豊かになるために，人材バンクをつくり聞き取り調査の協力や講師としての招聘を依頼したことと，西公園調査に必要な図鑑や資料を準備・提供したことが有効に働いたためであると考える。

③　生かす段階・・・西公園のよさや西公園の自然環境保護を願って主体的な活動を行う

（１２～１４／１４時間）

「西公園を大事にしたい」「そのためにはこんなことをしていくといいのではないか」という思いや今後のかかわり方に気づき始めている子供たちに，これから自分たちにできる活動を考えさせた。自分たちが調べた植物や昔の西公園のことなどを新聞やパンフレットにまとめ，西公園に来られている方に配布したり，西公園の清掃活動を行ったりした。そして，自分たちが配ったパンフレットに対する利用者からの返事を頂き，お礼の手紙を書いていった。

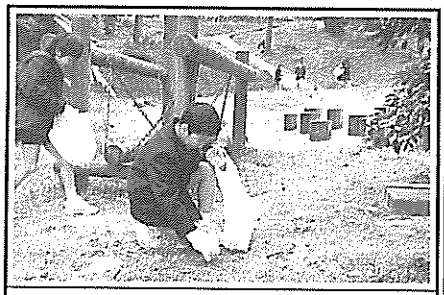
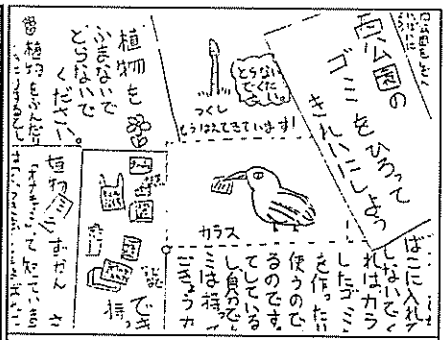


写真14（西公園の自然を守ろうと西公園清掃をしている子供たち）



資料１（A児がつくったパンフレット）

お手紙ありがとうございました。私たちは，西公園をきれいにし自然を守るためにパンフレットをつくり配りました。わたしは「植物を取らない，ふまない」と書きました。私たちの活動を分かってもらってとてもうれしいです。ありがとうございました。（略）

資料２（A児のお礼の手紙）

考察③

西公園を大事にしたいという思いや西公園の自然の豊かさに気づき始めている子供たちに，西公園を大切にする実践活動を考え行わせたことは，写真のゴミ拾いをしている姿やパンフレットの内容などからも分かるように，西公園の価値やよさを考えたり，西公園を大切にしようとする心情や態度を育てる上で有効であったと考える。また，資料２の下線部分からも分かるように利用者から返事を頂き，自分たちの実践活動にも価値を見出し，西公園のよさを再認識できたと考える。

６．全体考察

以上のことから，次のような成果が考えられる。①子供の主体的な追究の過程での触れ合い・調査などの体験とそこで感じ取った西公園のよさや自然環境保護の大切さが総合的にとらえられ，西公園を大切にしようとする自己の生き方を生み出すことにつながった。②自分がこだわりをもったことを追究していく中で，西公園の価値を考えたり，よさを実感したりする姿と情報収集力，情報活用力，まとめ方などの学び方が身に付いた。このことは，子供の求めに応じた資料の提示や人材マップの活用，西公園調査隊という活動目的が明確な組織編成が有効に働いたものであると考える。

7．指導の実際と考察　［事例２］

(1) 単元名　　第５学年　希望と誇りⅠ　～受け継ぐ我ら！附属福岡小学校歴史探訪～

(2) 本単元の考え方

本単元は，１２２年間の附属福岡小学校の歴史について調べる活動を通して，附属福岡小学校への愛着を深めながら附属福岡小学校の一員であることの誇りをもつとともに，これからの附属福岡小学校を自分たちの手で創り上げていこうとする意欲やこれからの生活への夢や希望をもつことをねらいとしている。ここでの主な内容は，①現在の附属福岡小学校に残る石碑や銅像，古木，文献資料など歴史を伝えるものについて調べ，自分の疑問をもとにした追究課題をもつこと，②文献資料や写真などの収集や，歴代の先生方や卒業生・地域の方々などへの聞き取り調査など，自分の課題解決に向けた追究活動を自ら工夫して行うこと，③互いの追究活動を交流し合い，附属福岡小学校の新しい歴史づくりに向けた新たな課題をもつことである。

【伝統行事，相撲大会】
（大正１５年当時）

◇　本学級の子供たちは，藤見学芸会などの行事や藤棚，校舎の移り変わりなどに素朴な疑問をもっているが，日常生活の中で附属福岡小学校の歴史や伝統を意識することは少ない。この５年間，福岡小に居ることは子供たちにとってごく自然なことであり，身近すぎるが故に気付かずに見過ごしてしまっていることが多いと言える。最上級生に向かう子供たちにとって，自分の足元を見つめ直す学習は価値高い。

このような子供たちの実態を踏まえ，**生き方を創る「あらつ学習」**を次のように構想する。

◇「自らの求めをもち」　→　「主体的に追究していく」

附属福岡小学校の歴史についての素朴な疑問や，今の生活とのかかわりからの問い
【子供の求め】

一人ひとりが，附属福岡小学校の歴史について問い続けていく体験

○自己の生き方の自覚【向上心】　→　◇ 福岡小の一員であることに誇りをもち，これからの附属小を創っていこうとする意志
・暫定的な決着

○自己の生き方の自覚【調和的な心】　→　◇ 福岡小に愛着をもち，福岡小の先輩や友達，後輩と共に生きていこうとする心
・単なる一人よがりでない「応え」

自分なりの「応え」

まず，「見出す」段階では，深固の額や藤棚，石碑，銅像など附属福岡小学校の歴史を伝えるものを探す学校探検や，様々な時代の附属福岡小学校にタイムスリップし，その当時と現在の附属福岡小学校とを比較する活動を設定することにより，附属福岡小学校の歴史についての素朴な疑問や今の生活とのかかわりからの問いを生み出したい。ここでの追究課題の内容については，子供の素朴な疑問を最大限尊重するものの，○その課題を追究することで，附属福岡小学校の歴史の重みや伝統を実感できる，○現在の附属福岡小学校との比較や時代の移り変わりをとらえることができる，○課題追究にあたって情報収集や聞き取り調査などの体験が保障できる，○単なるもの調べ・こと調べに終わることなく，当時の人々の生活や思い・エピソードなどに触れることができるなどの条件を考慮するものである。次に，「追究する」段階では，子供たちが自分の課題について問い続ける体験を豊かにするための支援を工夫する。具体的には，○附属福岡小学校の歴史について詳しい先生方や卒業生，地域の方々などの人材バンクづくりを行い，子供たちの聞き取り調査の協力や講師としての招聘を依頼する，○附属福岡小学校の歴史に関する手作り資料集の作成及び提供を行う，○課外における調査活動についての保護者への協力依頼や調査活動の支援を行うことである。そして，自分の追究した課題についてポスターセッション形式で交流し合う場を設け，附属福岡小学校の伝統の重みを実感させたい。最後に，「生かす」段階では，相互交流を通して新しく生まれてきた課題を追究していく活動や，伝統の素晴らしさを全校に伝える活動を設定する。その後，「先輩調べ」の追究につなげて平野真敏さん（昭和54年度卒業生で，卒業時の藤棚文集に将来音楽家になるという夢を表し，それを実現された方）との出会いの場を設けることにより，これからの福岡小学校を自分たちの手で創っていこうとする思いを膨らませ，「ようこそ先輩！～開こう，未来への扉を～」（６年）へつなげていきたい。

(3) 目　標

① 附属福岡小学校１２２年の歴史についての疑問を解決するために，進んで資料を収集したり，先輩や深交会の先生方への聞き取り調査を行ったりしながら，問い続けることができる。

② 附属福岡小学校への愛着を深めながら附属福岡小学校の一員であることの誇りをもつとともに，これからの附属福岡小学校を自分たちの手で創っていこうとする意欲やこれからの生活への希望をもつことができる。

(4) 計　画（12時間）

段階	活　動　と　内　容	支　援	配時
見出す	1．歴史を伝えるものを探す学校探検を行い，それについて調べる。 ○ 深固の額や藤棚，石碑，銅像などの由来 2．いろいろな時代の附属福岡小学校にタイムスリップし，その当時と現在の附属福岡小との比較をする。 ○ 附属福岡小学校の歴史への興味・関心 ○ 当時と現在の福岡小との共通点や相違点，疑問点 ・私たちの福岡小学校には，どのような歴史があるのだろうか。 3．自分の追究したい課題について考え，話し合う。 ○ 附属福岡小のもの・人・ことについての追究意欲 ○ 個人テーマの明確化，追究方法の見通し	○ 深固の額や藤棚，石碑，銅像などについての資料提供。 ○ いろいろな時代の附属福岡小学校の様子が分かる写真や資料の提示。 ○ 122年間の歴史も概観させる。 ○ 附属福岡小学校の歴史に詳しい深交会の先生や永くこの地域に住んでおられる方の招聘。 ○ 個人の追究課題を決定した後グループ化を行う。	① ① ① ①
追究する	4．課題について同じテーマの友達と一緒に調べる。 ○ 福岡小学校のもの・人・ことへの理解の深まり 「もの」→校舎等の施設，古木，藤棚，石碑，銅像 「人」　→附属福岡小学校の教師，卒業生，地域の方々。師範学校の卒業生。 「こと」→節目の出来事，学校行事，文集「藤棚」日常の学校生活。地域の様子。社会情勢。 ○ 附属福岡小学校１２０年の伝統の重みの実感と附属福岡小への愛着の深まり，一員であることの誇り ○ 附属福岡小の歴史についての情報収集の仕方（資料収集，聞き取り調査）や調査結果のまとめ方 5．課題追究の成果を互いに交流し合う。 ○ 福岡小の歴史や伝統の実感，愛着の深まり ○ 素晴らしい伝統を守り続けようという心	○ 附属福岡小学校の歴史について詳しい方々（深交会の先生方や卒業生，地域の方々など）の人材バンクづくりを行い，子供たちの聞き取り調査の協力や講師としての招聘を依頼する。 ○ 福岡小学校の歴史に関する手作り資料集の作成及び提供。 ○ 文献資料等，情報収集に関する助言。 ○ 課外における調査活動についての保護者の協力依頼。 ○ ポスターセッション形式による相互交流の場の設定。	④ ② 課外
生かす	6．相互交流における新たな課題について調べ，追究グループごとにまとめる。 ○ 歴史や伝統についての資料の充実 7．調べたことを全校に向け情報発信する。 ○ これからの附属福岡小学校を自分たちの手で創っていこうとする意欲， ○ 福岡小の伝統の素晴らしさを伝えようとい思い ・新しい附属福岡小学校の歴史を自分たちの手で創っていこう。 →「希望と誇りⅡ」（６年生１学期）へ継続・発展	○ 新たな課題に対応して追究グループの再編成を行う。 ○「先輩調べ」の追究につなげて平野真敏さん（音楽家になる夢を実現された先輩）との出会いの場の設定。 ・１２０周年記念歌「希望と誇り」の共演。　・５の２藤棚文集「希望と誇り」の作成。	① 課外 ② 課外

(5) 指導の実際

① 見出す段階 ・・・ 附属福岡小学校の歴史や伝統についての問いをもつ。 (1~3/12)

この段階は、自分たちの学校であるにもかかわらず、あまりに身近過ぎるが故に気付かず見過ごしがちになっている子供たちに、学校の歴史を伝えるものを探したり、今と昔を比べたりする活動を通して、一人一人が附属福岡小学校の歴史や伝統についての追究課題をもつことをねらいとしている。

そのために、歴史を伝えるものを探す学校探検や様々な時代の福岡小にタイムスリップする活動といった自分たちの学校に対する疑問や問いを掘り起こす支援を行った。

【歴史を伝えるものを探す学校探検】　【様々な時代の福岡小にタイムスリップする活動】

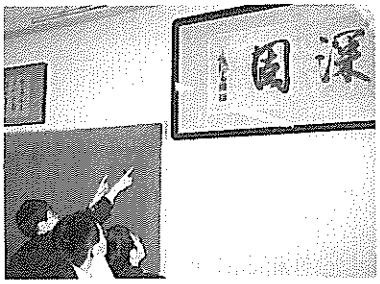


写真１(「深固」の額との出会い)

写真２(石碑を調べるH児)

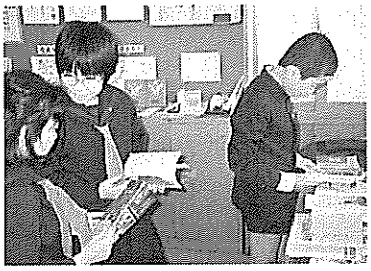


写真３(昔の藤棚文集調べ)

写真４(岡部さんとの出会い)

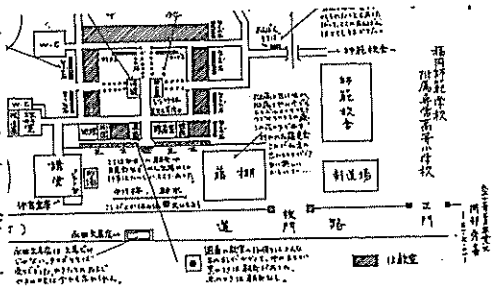
Y児：深固というのは、何事も深く固く根もとを大事に生活しなさいということを百年もの間ずっと伝えているんだなあと思いました。 H児：石碑などを見ていくと「鶴陽」とう言葉がいくつもありました。この言葉の謎を解くと学校の歴史が分かるのではないかと思います。

資料１【学校探検後のY児とH児の感想】

調べる前のはじめの方は、歴史と言ったって難しそうだし、戦争前の学校なども暗くて楽しくなさそうだったけど、岡部さんの話を聞いているうちに、昔の学校も今の学校と同じように明るくて楽しかったということが分かり、福岡小の歴史を調べてみたくなりました。

資料２【タイムスリップする活動後のY児の感想】

Y児は、百年も以上前に書かれた「深固」の額との出会いを通して、(資料１)のように附属福岡小の伝統の重みを感じ取り百年も前から伝わる「もの」について調べたいという問いをもった。また、岡部さんの古地図を使ったお話(写真４)を通して楽しかった当時の生活や藤棚の秘密に興味をもち、藤見学芸会など古くからある行事や出来事について調べていくことを考え(「古いもの・ことベスト５」)を追究課題とした。



【大正11年当時の絵地図、岡部製作】

このような問いを生み出す過程を経て、子供たちは次のような追究課題をつくっていった。

○ 私たちの福岡小学校には、どのような歴史や伝統があるのだろうか。【子供たちの追究課題】
・附属小と荒津の町(U児)・附属福岡小学校と附属小倉小学校(H児)・附属小の七不思議 ・古木調べ ・校舎の移り変わり ・卒業生調べ ・附属小古いもの・ことベスト５ (Y児) ・附属小の先生調べ ・附属小のシンボル藤棚 ・藤棚文集に見る今と昔 ・附属小の出来事調べ(O児) ・黒田如水調べ

考察①

子供たちは、写真１，２のように歴史を伝えるものを探す学校探検を意欲的に行っていった。その中で子供たちは、歴史の重みを実感したり(Y児)、「鶴陽」という言葉の謎を出発点にしたり(H児)しながら問いをもつことができた(資料１)。また、資料２のY児の感想や追究の姿にあるように、単なるもの・こと調べではなく、それにまつわる人々の生活や思いに迫る価値ある追究課題を一人一人の子供がもつことができた。具体的には、上記の12の追究課題が生まれてきた。これは、当時の子供や先生の生活や思いがよく表れている藤棚文集を提示したことや、岡部さんに当時の絵地図を使いながらエピソードを語って頂いたり一緒に学校を廻りながら当時の生活の様子を振り返ったりする活動の支援が有効に働いたためと考える。

② 追究する段階	見出す段階での追究課題をもとに、一人ひとりがより納得のいく
（主体的に問い続ける）	「応え」を求めて問い続ける。 (4～9/12)

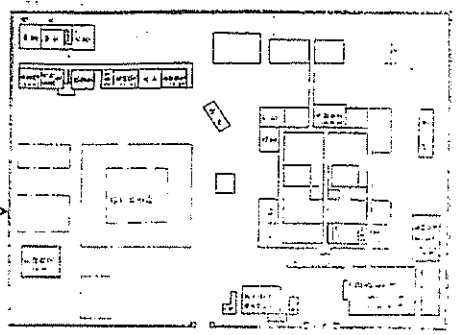
この段階は、見学や聞き取り、資料収集などの調査活動を進んで行ったり、お互いの追究を交流し合ったりすることで、附属福岡小学校への愛着を深めながら伝統の重みを実感することをねらいとしている。主体的に問い続ける姿をＹ児とＨ児、Ｕ児、Ｏ児を中心とした追究の姿から述べていく。

【Ｙ児の追究活動】

Ｙ児は、「附属小古いもの・ことベスト５」という追究課題のもと、岡部秀喜さんへの聞き取り調査（写真５）を中心に、藤見学芸会や藤棚、大銀杏にまつわる出来事について調べていった。Ｙ児は、岡部さんが作成した古地図が大変参考になった経験を生かして、様々な写真資料や絵地図資料を集めていったのであるが、昭和21年11月作成の絵地図（教育研究会要録の校舎案内図）（資料３）に強い疑問を抱き、福岡大空襲時の福岡小学校の様子について詳しく調べたいという問いの深まりを生み出していった。

写真５（岡部さんからの聞き取り）

・藤棚や大銀杏は、私が小学生の頃からずっとあります。



資料３【昭和21年の校舎絵地図】

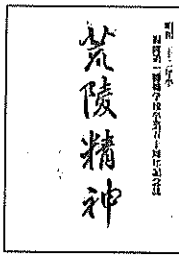
・「戦災校舎跡」という場所は今の藤棚のすぐ近くだ。

【Ｙ児の問いの深まり】

岡部さんの話では、藤や大銀杏はずっと元気に育ってきているはずだ。でも、空襲で校舎が焼けたことは間違いない。近くにあった藤棚は本当に焼けなかったのか。もしそうなら、それはなぜなのだろうか。

Ｙ児のこの問いの追究を支援するために、主体的な聞き取り調査を保障する人材バンクや文献資料の提供を行った。中心資料としては、「荒陵精神」（昭和22年卒福岡第一師範学校卒業生50周年記念誌）を活用させた。この中には、根井先生（資料４）のように福岡大空襲時の生々しい思い出を語られている先生方の回顧録が多く収められており、Ｙ児の追究を深める上で価値があった。

写真６（小金丸先生からの聞き取り）



荒陵精神

今忘れられないのは、52年前の福岡大空襲のことである。～（略）～　一面火の海と化した附属小学校。手の着けようもない。我々は本校に引火しないよう燃えていない校舎に水をかけ始めた。４斗樽を２人で運んで、バケツで汲みかける。周囲がが熱いので、服ごと水槽に入り、夢中で運び水をかけた。　・・・

資料４【根井洋先生の回顧録】

・岡部さんは、その当時の様子を楽しく分かりやすく説明してくれました。藤棚、大銀杏のことが今、目の前に浮かびそうでした。印象に残った話しは、藤見会や西公園での遊びの話、おいしい卵焼きやあんパンを売っていた売店の話などです。ぼくは、そんな附属福岡小の歴史を調べていくうちに、福岡大空襲のことを知りました。福岡大空襲では、焼夷弾が落ちてきて焼け野原になったこと、天神までが丸見えになったこと、藤棚を懸命に守ったことなど全てがぼくの心を揺さぶりました。ぼくは、附属小の歴史を調べていくうちに、この事件に出会ったという感じです。火の海の中で一生懸命水を運んだ人たちのおかげで今の藤棚があるんだなと思いました。藤棚を懸命に守った人たちの気持ちや新しい附属小をつくった人たちの努力をみんなに伝えたいです。

資料５〈課題追究後のＹ児の感想〉

Y児のように、子供たちは同じ追究課題の友達と一緒に調査活動を行っていった。例えば、H児は自分の祖父が附属小倉小に勤務していたということで、２つの学校を比較しながら福岡小の歴史について調べていった。また、U児やO児は、総合図書館で情報を収集したり、中村さんや岡部さんへの聞き取り調査をしたりして追究を深めていった。

【H児の追究活動】

《附属福岡小と小倉小》

○ 附属小倉小学校見学

〈富陵館での大崎さんとの出会い〉

（資料６）福岡小と小倉小の歴史を調べてみて、びっくりしたことがあります。それは、同じ福岡教育大学の小学校なのに、違うことがいっぱいあるということです。いろんなことを比べたことで、自分は福岡小の生徒だという気持ちをもちました。

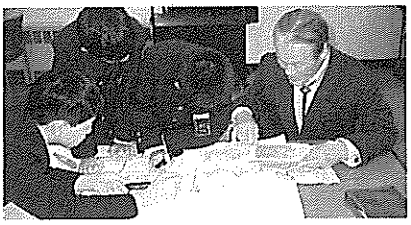
【U児の追究活動】

《附属福岡小学校と荒津の町》

○ 総合図書館での情報収集

↓ ・古地図や文献資料探し

○ 中村強輔さんからの聞き取り調査

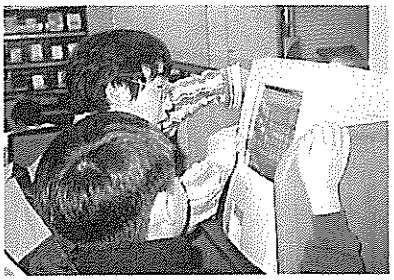


（資料７）絵地図を作っているときは気付かなかったけど、書き終わってみると今と昔では緑の大きさが違っていることに気付きました。～中略～緑の素晴らしさを感じることができる世界を自分たちで作り上げたいと思います。

【O児の追究活動】

《附属小の出来事調べ》

○ 総合図書館での情報収集



○ 岡部さんへの聞き取り活動

（資料８）～前略～でも、悲い話もありました。それは空襲のせいで附属小が焼けたことです。そういう話をもとに考えました。それは、空襲の被害などいろいろな歴史を積み重ねて今の校舎が建っているんだなということです。

【追究してきたことをお互いに紹介し合う場面】 ポスターセッション形式による交流の場の設定

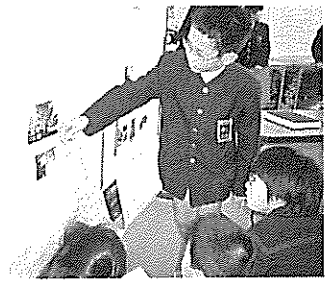


写真７〈追究してきたことを交流し合う子供たち〉

O児： 同じ藤棚のことを調べていたんだけど内容は全然違いました。燃える炎の中でみんなの協力によって守られたことを知り、藤棚を守っていきたいと思いました。

Y児： 空襲の時の様子をみんなに、伝えることができました。でも、藤棚に火はついたのか、もしそうならどうやって火を消したのかまだ納得できないので調べていきたいです。

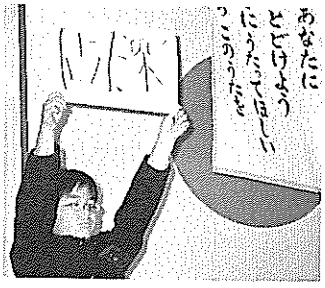
H児： ５の２のみんなに伝えることができたので全校のみんなにもお知らせしたです。

考察②

この段階における教師の役割は、子供たちの主体的な課題追究の体験を保障することである。主体的な聞き取り調査を保障する人材バンクや文献資料の提供により、Y児は追究のエネルギーを膨らませ、福岡大空襲の中で懸命に福岡小を守り、新しい福岡小を作り上げていった人たちの素晴らしさを実感することができた。（資料６）。また、見学や聞き取り調査の支援により、H児らは主体的な追究を行い、資料６～８のような自分なりの応えを見出すことができた。そして、追究してきたことをポスターセッション形式で交流し合う活動を設けることで、O児やH児のように福岡小の伝統を実感しながら今後のかかわり方を見出した子供の姿や、Y児のように自分のこだわりを強め更なる追究へと向かう子供たちの姿を引き出すことができたと考える。

③　生かす段階　　自分なりの「応え」を見出し，生活に生かす。（10～12/12）

相互交流を終えたＹ児は，福岡大空襲時の様子や火を消した人々の思いをさらに追究する中で，歴史や伝統の重みを実感し，「自分たちの学校を大切にしていこう。この素晴らしい伝統を全校のみんなに知らせよう。」という思いを強めていった。



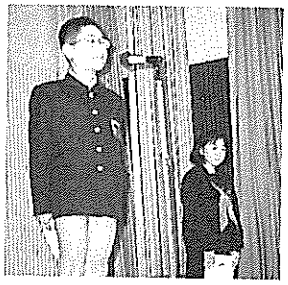


写真８（福岡小の歴史を全校に伝えるＹ児）

ぼくは，いつも藤棚や大銀杏の横を通っているけど，特に気にしていませんでした。でも，いろいろな人たちが藤棚を助けてきて，120年間も生き続けてきたから，ぼくも藤棚を守っていきたいと思うようになりました。そんなことをみんなに伝えていきたいです。

［資料８　Ｙ児の思い］

単元の終末では，伝統の実感から希望へと意識を高め，これからの附属福岡小学校を自分たちの手で創っていこうとする意欲をもつことをねらいとし，平野真敏さんとの出会いの場を設けた。

写真９（平野真敏さんとの交流）

資料９［平野さんのプロフィール］

小学校６年生時の藤棚文集に将来，音楽家になるという夢を書き表し，それを実現された先輩。数少ないビオラのソリストとして活躍中。昨年は，クロアチアの大統領が選ぶ12人の音楽家に選ばれ，国際的なカタログにも名を連ねることになった。

［平野さんとの出会いにおけるＨ児の反応］

平野さんの演奏を聴いて，言葉をなくす程，感動していた。「なりたいものはあるが，それは親が思っていること。平野さんの話を聞いて，自分がなりたいものを考え直したい。」

平野真敏さんとの出会いを通しての子供たちの感想

Ｃ１：夢というのは，たった一文字なのにいろいろな勇気を出せるようなすごい言葉です。
Ｃ２：ひとつの夢に向かっていく姿にあこがれました。
Ｃ３：夢をあきらめない人だと思います。今のぼくにはまだないけど，ぼくもそうなりたいです
Ｃ４：平野さんのように夢を実現させるぞと心や体が燃えてきた感じがしました。
Ｃ５：平野さんと出会ってたくさんのことが分かったのは，附属福岡小学校の歴史を調べていたからです。今度は，私たちが歴史をつくっていく番なので，１０年か２０年くらいたって，新しい私たちの歴史があればいいなと思いました。

考察③

「附属小の先輩調べ」グループの追究活動につなげて，平野さんとの出会いの場を設定したことで，Ｈ児やＣ２～Ｃ４のように夢や希望を膨らませる子供の思いを引き出し，過去から未来へと目を向けさせることができた。そのことにより，資料９のようにこれからの福岡小を自分たちの手で創り上げていこうとする思いや希望や夢に向かって生きていこうとする思いを引き出すことができた。これは，自分の学校への愛着を深め伝統の重みを実感している子供たちに，小学校時代の夢を実現させた先輩である（資料９）平野さんとの交流活動が有効に働いたためと考える。

８．全体考察

以上のことから，①伝統の重みの実感に支えられた自校への愛着や，希望や夢をもってこれからの福岡小を創っていこうとする自己の生き方を生み出す子供の育ちが見られたこと，②一人一人の主体的な追究活動を実現するためには，子供の生活現実から課題を掘り起こすことや，つまづきを克服するための具体的な支援や追究を深める相互交流が重要であることが明らかになった。課題としては，個の追究の実態把握の充実と一人ひとりに対応する支援の在り方の究明が挙げられる。

豊かな生活をめざす教育課程の編成

～主体的な活動を支援する個別の指導計画～

障害児教育研究部　松本良一　西原敦子
舛元俊文　坂田佳美

1．主題設定の理由

(1) 生きる力の育成から

知的障害のある子供たちの教育において「生きる力」の育成とは，従来から言われてきたことである。そこで改めて障害のある子供たちの「生きる」ということについて考えてみる。「生きる」ことには，「生命を維持する（生命）」「生き方を考え，行う（人生）」「日々の営みを行う（生活）」という３つの側面があると考える。この中でも，障害のある子供たちにとっては３つめの生活の側面が「生きる」を考える上で最も大切なことであると考える。なぜなら，具体的な生活レベルで現在の生活の充実を図ることが障害のある子供たちにとって最も意味のあることであるし，現在の充実した生活の積み重ねこそが将来の自立し，社会参加する生活を可能にするからである。

同時に教育の今日的課題として，「生きる力」の育成があげられる。中央教育課程審議会の中でも，「障害等のある子供たちの教育において，生きる力を育てるために，より一層の指導内容・指導方法の充実を図る必要がある」と述べられている。

以上のことから，「生きる力」の育成を行う上で，子供たちの生活の充実に視点をあてた教育課程の編成を行うことが必要だと考える。

(2) 生活の質的向上から

ＱＯＬ（Quality Of Life：生活の質）の考え方が時代の主流となってきている。これは障害のある人たちを，被援助者ではなく，生活の主体者として見ていこうという考え方に基づいている。ここでいう「生活の質」とは，生活の主体者として「自分がやりたいことを見つけて(要求)自分の行動を考え(判断)，その中から自分のとるべき行動を選び(選択)，実際に行動してその結果に満足感や充実感を味わう」ことだと考える。この生活の質を向上させるためには，単に満足感や充実感を味わうことができたか否かに視点を当てるのではなく，どのようなことができて満足感や充実感を味わうことができたのかに視点を当てる必要がある。そのためには，従来まで大切にされていたＡＤＬ（Activity of Daily Living：日常生活動作）の獲得に基づいたＱＯＬの向上をめざす必要がある。

このＡＤＬに基づいたＱＯＬの考え方を受けて，知的障害のある子供たちの教育においても，子供たち自らが自分の要求に基づき自分の行動を判断･選択していく中で，生活への充実感と生活の充実度を高めていけるような学習が必要であると考える。

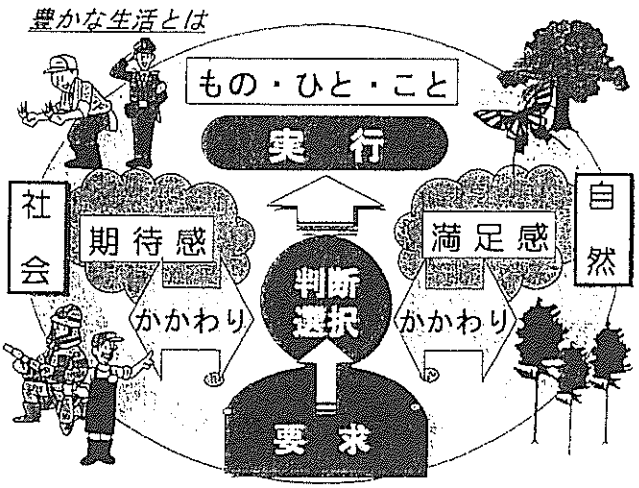
(3) これまでの教育課程編成の反省から

知的障害のある子供たちの教育課程の特色は，個に応じた指導と生活中心の２つである。教育課程の編成にあたっては，子供たちの日常生活の経験や教科の学習内容などをもとにしながら児童の実態に応じた指導内容を設定して指導にあたってきた。しかしその教育課程は，経験的な内容と教科的な内容のどちらかに偏りがちである場合が見られた。そのなかで，学習活動の場面においては個に応じる指導が行われていても，必ずしも教育課程全体が個に応じたものになり得ていない部分が見られた。また，生活中心の指導を行う中で，子供たちに何が身についたのかが明らかになっていない部分も見られた。

そこで，生活中心の教育の中で，子供たち一人一人が将来，自立し社会参加するための確かな力を身につけることができる教育課程の編成を行う必要があると考える。

2．主題についての説明

(1) 主題について



「豊かな生活」とは，子供たちが自分の身の回りのもの・ひと・ことに積極的に働きかける中で，自分の活動への満足感や充実感を味わうと共に，次の活動への期待感を抱くことである。ここでいう積極的な働きかけとは子供たちが自分の意志で自己決定を行うことである。具体的には，自分がやりたいことを見つけて(要求)自分の行動を考え(判断)，その中から自分のとるべき行動を選び(選択)，実際に行動することである。

豊かな生活をめざす上では，子供たちが友達や教師など自分の身の回りの人と協調的にかかわりながら主体的に活動するなかで自己決定を行い，生活力を身に付けることができるような教育課程を編成する必要がある。

(2) めざす子供の姿

豊かな生活を営む子供の姿を，具体的に次のように考える。

めざす子供の姿

○　学校の中で，教師や友達と協調的にかかわりながら，日々の活動へ積極的に取り組み，生活への充実感や満足感，期待感をもつ子供
○　地域社会の中で，社会事象のもつ意味や価値を知り，自分の生活向上のためにそれを利用することができる子供
○　家庭の中で，自分のことは自分で行い，家族の一員としての役割を果たすことができる子供

上述した子供の姿を具体化するために，学習場面においてめざす子供の姿を次のように考える。

学習場面でめざす子供の姿

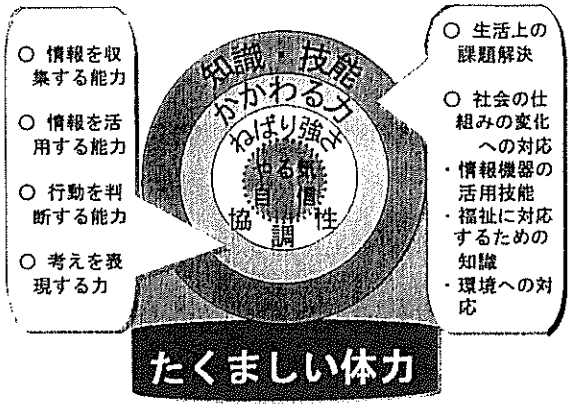
○　「おもしろそうだな，できるようになりたいな」など学習課題への興味・関心をもつ姿
○　「～したら～できそうだ，～したら～できるぞ」など課題解決の見通しをもつ姿
○　「～がわからないから せんせいに きこう」「～さんといっしょにやると たのしいな」など人と協調しながら課題解決に取り組む姿
○　「もういちど，やろう」と繰り返し課題に取り組む姿
○　「こんどは～をやろう」「～をやったらおもしろかったから，こんどは～をやろう」など自分の行為や働きかける対象を判断・選択しながら，自分の活動を自己決定する姿
○　「できた，やれた，じぶんでやれた」など自分の活動を振り返り，活動への満足感や充実感を味わう姿
○　「つぎは，～をやろう」など次の活動への期待感をもつ姿

(3) 生活力とは

子供たちに培いたい生活力とは，回りの人と協調的にかかわったり，自分が出会った生活上の課題を解決したり，変化する社会の仕組みに対応したりするなど，子供たちが将来自立し社会参加するための基礎となる資質や能力のことである。具体的には，①日々の生活を健康に過ごすためのたくましい体力，②やる気・自信に支えられたねばり強さや協調性，③生活上の課題を解決するために身の回りの事象にかかわる力，④生活上の課題解決や社会の仕組みの変化に対応するための知識・技能，などの総体である。

子供たちの豊かな生活をめざす上では，たくましい体力を基盤としながら，やる気・自信などの肯

定的な自己像を中核とする，身の回りの事象にかかわる力とそのときに駆使される知識・技能の育成が大切になると考える。具体的には身の回りの事象にかかわる力として，自分に必要な情報を収集する能力や収集した情報（知識・技能）を活用する能力，自分の行動を判断する力，自分の考えを表現する力，などの生活上の課題を解決する力である。また，そのときに駆使される知識・技能として，自分の生活を営むために必要な事柄に加えて，変化する社会の仕組みに対応するための情報機器の初歩的な活用技能，ボランティアなど福祉に対応するための知識，環境を守るための廃棄物の処理の仕方，なども含まれてくる。



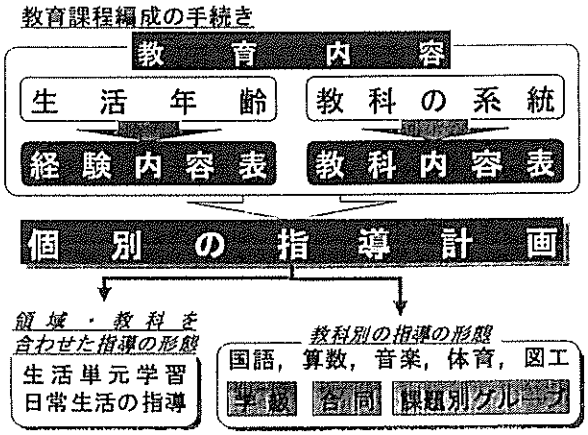
3．副主題についての説明

(1) 副主題について

「主体的な活動を支援する個別の指導計画」とは，子供たち一人一人に生活力を培うために，子供たちの内発的な動機に支えられた学習活動を展開できるような指導内容と指導方法を工夫することである。

ここでいう子供たちの内発的動機に支えられた学習活動の展開とは，子供たちが学習対象に出会ったときに，「おもしろいな」「やってみたいな」「なぜだろう」という課題意識をもち，できるだけ自分の力でその課題を解決することにより，「自分の力でやれた」と達成感・成就感，効力感を味わえるような活動を繰り返すことである。また，個別の指導計画については，子供たち一人一人の生活課題に即した教育内容から課題を設定し，領域・教科を合わせた指導，教科別の指導の中で，個に応じた指導方法を講じることである。具体的には，児童の実態を発達段階，生活経験，学習経験から考えて，重点課題を設定し，子供たち一人一人の教育的ニーズに応えることができるように，教材の開発，活動構成の工夫，個に応じた教具や教師の個別の働きかけ方の工夫という３点から指導法を工夫していくことである。

(2) 教育課程編成の手続き



① 教育内容の設定

子供たちの生活年齢に応じて経験させたい事柄から経験内容表を，教科の系統から明らかになっている身の回りのもの・ひと・こととのかかわり方から指導内容表を作成して，教育内容として設定する。

具体的には，経験内容を「家庭生活，地域社会での生活，学校生活」の３つの領域で考える。また，教科内容を「国語，算数，音楽，体育，図工，生活」という各教科毎に考える。

② 個別の指導計画の作成

個別の指導計画の作成を次のような手順で行う。

ア．子供の教育的ニーズを把握する。

イ．教育内容に教育的ニーズを照らして長期目標（１年間で達成したい目標）を設定する。

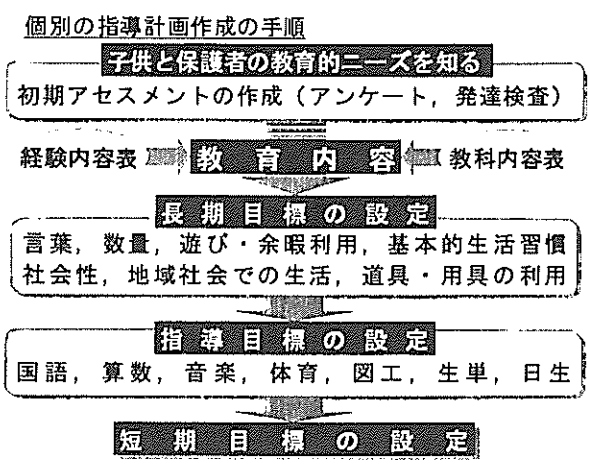
ウ．長期目標を達成するための指導目標を各指導形態の中で設定する。

エ．指導目標を達成するための短期目標（各学期で達成したい目標）を設定する。

オ．短期目標を達成するための指導内容や指導方法を講じ指導を行う。

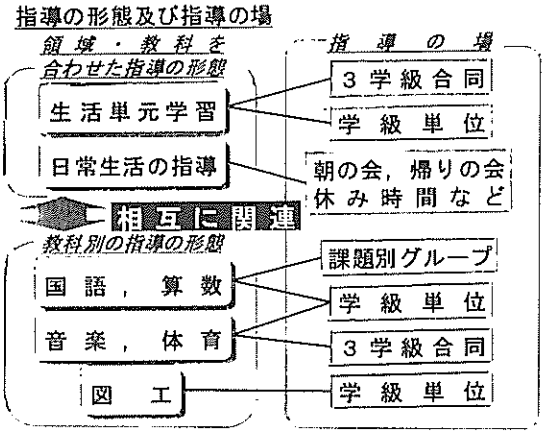
カ．短期目標や指導目標，長期目標の達成がなされたかの評価を行う。

③　指導の形態



上述したことから，指導の形態を右図のように考える。具体的には，領域・教科を合わせた指導の形態として生活単元学習と日常生活の指導を，教科別の指導として国語・算数・音楽・体育・図画工作を設定する。生活単元学習と教科別の指導の関係は，単元・題材においては互いに関連させて指導を行う場合と，それぞれ単独に指導を行う場合がある。また，生活単元学習と教科別の指導の体育と音楽については，学級単独で指導を行う形態と３学級合同で指導を行う形態の２つの場での指導を行う。さらに，国語と算数については，課題別のグループ編成による国語グループ・算数グループを位置づけ，言語，数量に関する基礎的事項の指導の徹底を行う。

日常生活の指導については特設の時間は設けないが，学級の朝の会や帰りの会，給食の時間や休み時間において継続的に指導を行う。また，養護・訓練（自立活動）についても特設の時間は設けないが，全教育活動の中で配慮的に内容を取り上げ指導を行う。



(3) 指導法の工夫

①　教材の開発

ア．子供たちの生活経験があり，興味･関心の高いもの

イ．子供たちの実態に応じることのできる多様な活動が内包されているもの

ウ．子供たちが意識しやすい解決の目的があるもの

エ．子供たちに課題解決の必要感を喚起できるもの

②　活動構成

ア．学習対象や学習方法を子供たち自身が判断・選択できること

イ．活動の繰り返しの必然性や繰り返しの中に変化があること

ウ．子供たちの働きかけが可能なもの・ひとが準備されている環境であること

具体的には，動機・熱中・発展という３段階の学習過程で構成する。

A　動機段階：学習課題を意識し，学習への動機をもつ。

B　熱中段階：課題に熱中して取り組み，課題を解決したり，解決達成した成果を実感したりする。繰り返しの活動の中で，学習対象や学習方法を知り，それを使う中で，活動の判断選択を行っていく。

C　発展段階：学習してきた成果を日常の生活に近い場面で生かしたり，日常生活に生かしたりする。

③　個に応じた教具，教師の個に応じた支援の工夫

ア．子供たちの力で操作ができるもの

イ．操作をした結果や成果が子供たちに意識できるもの

ウ．子供たちに自己評価ができるとともに，子供たち自身でフィードバックが可能なもの

エ．個に応じてモデル演示や声かけ，動作補助など

子供自らが数とかかわる算数科学習

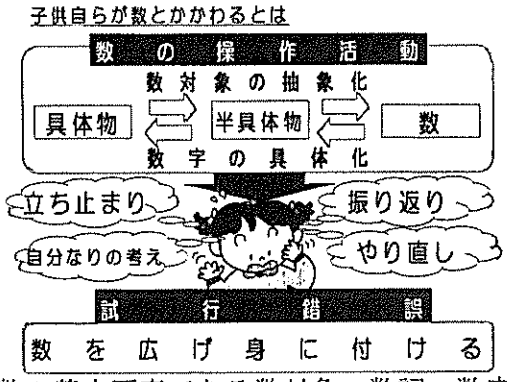
～確かめを位置づけた数遊びの活動を通して～

障害児教育研究部　坂　田　佳　美

1．主題の意味

(1) 子供自らが数とかかわるとは

子供自らが数とかかわるとは，発達に遅れのある子供たち一人一人が，自分の力を駆使して数の操作活動に取り組むなかで，立ち止まったり振り返ったりやり直したりするなど試行錯誤しながら数を広げ身に付けていくことである。



自分の力を駆使するとは，発達段階の異なる子供たち一人一人の，知識・技能，先行体験，興味・関心，追究の傾向性といった，その子そのものが学習場面に十分に生かされる状況のなかで，自分なりに課題に取り組むことである。　数の操作活動とは，具体物→半具体物→数へと具体物から様々な属性を捨象しながら数対象を抽象化したり，数→半具体物→具体物へと数字から具体物を取り出したりして，可逆的に数に取り組んでいくことである。その結果，数の基本要素である数対象－数詞－数字が相互に関連し合って数を理解しながら数概念を形成していくことができると考える。

試行錯誤しながら数を広げ身に付けていくとは，子供たちが数対象に取り組み，課題を解決していくなかで，自分なりに考え，誤りを感じて立ち止まったり，振り返ったり，やり直したりしながら活動を主体的に進めていくことで，数範囲を広げ，数への理解をより確かなものにしていくことである。

以上のように，個々の発達段階に応じた学習場面を設定し，子供自身の思考を働かせた数の操作活動に繰り返し取り組ませ，数の理解を促していくことで，子供たちは，自分の力で解決できたという自信に基づいた数を身に付けていくことができると考える。

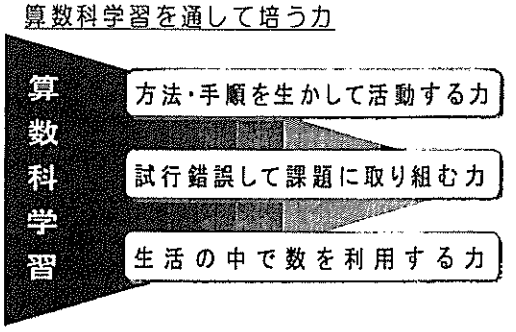
(2) めざす子供の姿

自ら数とかかわっている子供の姿を，具体的に次のように考える。

○　「おもしろそうだな。○○を数えてみよう。」と数対象に興味・関心をもつ姿
○　「こうやって数えていくと，うまくできそうだ。」と活動への見通しをもつ姿
○　「次はこれを数えてみよう。」と繰り返し数の操作活動に取り組んでいく姿
○　「あれ，おかしいな。ぴったり合わないぞ。」と間違いに気付き，操作をやり直していく姿
○　「１・２・３・４・５，５。これが５だ。」と数を広げ身に付けていく姿
○　「最後まで自分でできた。すごいぞ。」と自己への効力感を味わい，やる気・自信を高める姿

(3) 算数科学習を通して培う力

以上のような子供の姿を具現化することで，算数科学習を通して，①活動の手順や操作の方法をつかみ，次の活動に生かしていく力，②数の操作活動で，間違いに気付いて立ち止まったり振り返ったりやり直したりして，試行錯誤して課題に取り組んでいく力，③日常で必要なものの数を数える・数字を読む・順番を理解するなど，生活のなかで数を利用する力，などを培うことができると考える。

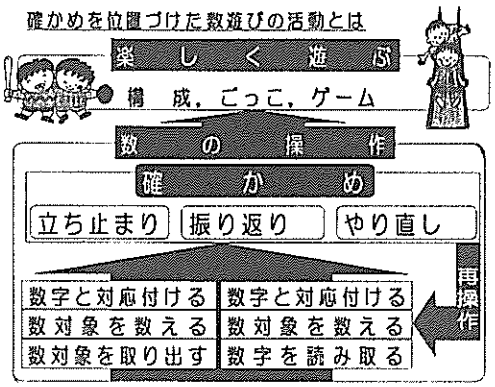


2．副主題について

確かめを位置づけた数遊びの活動とは，楽しく遊ぼうという目的を達成するために，遊びのなかで数操作に取り組んでいき，数操作の途中で正誤を確かめ，遊びに必要な数対象を正しく取り出したり数えたりしながら，遊びを成立させていくものである。

数遊びとは，数の基礎概念・数唱・数字・数を数える・順序数・数の大小，といった数に関する基礎的な学習内容を遊びの活動に配列し，子供が遊びの意識で数操作に取り組んでいくものである。子供自身の内発的動機に支えられた活動が連続して起こるような遊びの特性を生かすことで，子供たちの意欲や関心を高めながら，学習活動に繰り返し取り組ませていくことができると考える。これらの数遊びの活動は，遊びの特性から次のように分類することができると考える。

遊びの分類と特性	数遊びの内容
構成遊び(対象を作り上げる楽しさ)	数操作をしながら，遊びに必要な場を構成して遊ぶ。
ごっこ遊び(なりきって表現する楽しさ)	数操作をしながら，遊びに必要なもの取り出し見たて遊びをする。
ゲーム遊び(勝敗が決定する楽しさ)	数操作をしながら，ゲームの勝敗や得点を競って遊ぶ。



確かめを位置づけるとは，数操作の過程に，遊びを成立させるためには正確に具体物と数字が結びつかなければならない，という場を設定することである。具体的には，数対象を数字へ抽象化したり，数字から数対象を取り出したりするといった一連の数操作の最後に確かめを位置づけ，操作の正誤を判断する場を設定する。子供たちは，解決が正しければ自分の操作が適切に進んでいることを自覚し次の活動に意欲的に取り組み，間違っている場合には再操作に取り組み，活動を正しい方向に修正していき，自分の力が学習の場に発揮されていることを感じることができる。このように確かめを位置づけることによって，子供たちは，自分の数操作の正しさを感じて意欲を持続したり，試行錯誤して課題を解決したりしながら，自分の力で数を広げ身に付けていくことができると考える。これらの確かめ方は子供たちの発達段階によって次のように分類されると考える。

段　階	正誤の確かめ方	再操作の仕方	子供の姿
立ち止まりの段階	操作の過程で，具体物がピッタリとあてはめられないことに違和感を感じて立ち止まる。	教師に補助されて，モデル演示を見ながら補助の教材を使って再操作を行う。	・「ぴったりできた。」 ・「最後までできた。」 ・「遊べて楽しい。」
振り返りの段階	操作の過程で，具体物の過不足で正誤に気付き，前の操作を振り返って考える。	教師の促しにより，前の操作に戻り，補助の教材を使いながら再操作を行う。	・「自分でうまくできた。」 ・「最後まで頑張った。」 ・「自分で遊べて楽しい。」
やり直しの段階	操作の過程で，具体物の過不足や数字との不整合で正誤を判断し，やり直そうとする。	自分で前の操作に戻り，再操作を行う。	・「間違えたけどやり直した。」 ・「最後まで考えてできた。」 ・「考えて遊べて楽しい。」

3．活動づくりの具体的な方法

(1) 児童の実態のとらえ方（詳細は指導の実際と考察・児童の実態を参照）

一人一人の子供の算数科学習における実態を次のような観点で明らかにしていく。

○　学習への取り組み方・意欲・態度（日常の学習実態の観察から）

○　数の学習段階（学習内容表から）

○　操作の確かめ方の段階（立ち止まり・振り返り・やり直しの３段階から）

(2) 学習内容の設定

次のような段階から，子供の実態に応じて学習内容を設定する。１～５の各段階は，①教師と一緒に，②部分的に補助されて，③一人で，の３段階に細分化する。（ ―― は実践題材の内容 ）

		1	2	3	4	5
学習内容の段階	1対１対応	同じもの同士を対応させる。	関係のあるもの同士を対応させる。	異なるもの同士を対応させる。	1対1対応させて多いが分かる。	1対1対応させて少ないが分かる。
	数唱	３までの数詞を唱える。	５までの数詞を唱える。	10までの数詞を唱える。	50までの数詞を唱える。	100までの数詞を唱える。
	数字	１～３を読んだり書いたりする。	３～５を読んだり書いたりする。	５～10を読んだり書いたりする。	10～50を読んだり書いたりする。	100までを読んだり書いたりする。
	１つずつ数える（具体物→数字）	１～３の具体物を数える。	３～５の具体物を数える。	５～10の具体物を数える。	10～20の具体物を数える。	100までの具体物を数える。
	１つずつ数える（数字→具体物）	１～３の数字から具体物を数える。	３～５の数字から具体物を数える。	５～10の数字から具体物を数える。	10～20の数字から具体物を数える。	100までの数字から具体物を数える
	直感的に数える	１を直感的に見取って数える。	２までを直感的に見取って数える。	３までを直感的に見取って数える。	４までを直感的に見取って数える。	５までを直感的に見取って数える。
	まとまりで数える	３といくつで４・５を数える。	５といくつで６～10を数える。	10ずつまとめて20までを数える。	10ずつまとめて50までを数える。	10ずつまとめて100までを数える。
	順序数	３までで順序が何番目か分かる。	５までで順序が何番目か分かる。	10までで順序が何番目か分かる。	50までで順序が何番目か分かる。	100までで順序が何番目か分かる。
	大小比較	１～３の数の大小関係が分かる。	１～５の数の大小関係が分かる。	１～10の数の大小関係が分かる。	１～50の数の大小関係が分かる。	１～100の数の大小関係が分かる。
	１０までの数の合成	１～３の具体物を合わせる。	３～５の具体物を合わせる。	５～７の具体物を合わせる。	７～１０の具体物を合わせる。	１～10の具体物や数字を合わせる。
	１０までの数の分解	１～３の具体物を分ける。	３～５の具体物を分ける。	５～７の具体物を分ける。	７～１０の具体物を分ける。	１～10の具体物や数字を分ける。

(3) 活動構成

「であう」，「つくる」，「いかす」の３段階で構成し，確かめを数操作に位置づける。

段階	であう	つくる	いかす
活動と内容	１．数遊びの場に出会い，新しい遊びを体験しする。 ○ 遊びへの目的意識，興味・関心をもつこと	２．数遊びに繰り返し取り組む。 (1) 小さい数範囲での数遊びに取り組む。 (2) 大きい数範囲での数遊びに取り組む。 (3) 全部の数範囲での数遊びに取り組む。 **基本的な数操作（⇒：具体から抽象へ操作する子供，←：抽象から具体へ操作する子供）** 具体物を ⇒ 具体物を ⇒ 数字と 取り出す ← 数える ← 対応付ける ▶ 確かめる ○ 個に応じて数を広げ身に付けること	３．数遊びを振り返り，互いに賞賛し合う。 ○ 活動を達成した成就感や自己への効力感を味わうこと
支援	・数遊びの場の設定 ・絵話の提示	・数遊びの場の設定 ・個に応じた教材・教具・声かけ・補助 ・正誤の確かめを位置づけた数操作の設定	・遊びを振り返り活動を賞賛し合う場の設定

(4) 教材化の視点

次のような点に留意して数遊びの教材化を行い，題材を設定する。

① 子供の興味・関心に基づいた学習素材を生活や遊びのなかから取り上げる。

② 学習素材を用いて構成遊び・ごっこ遊び・ゲーム遊びなどの遊びを設定し，個に応じた学習内容を段階的に配列して遊びの活動を構成する。

③ 子供の実態に応じて具体物→半具体物→数，数→半具体物→具体物という数操作を仕組む。

④ 子供自らが操作の正誤を判断し再操作に取り組んでいける確かめを数操作に位置づける。

4．指導の実際と考察

(1) 題材名　「ドライブにいこう」（第１・２学年ふじ組）

(2) 児童の実態（抽出児）

	学習への取り組み方・意欲・態度	数の学習段階	確かめ方
A　児	活動への興味・関心はもちやすいが，活動の手順や操作の方法に見通しを持ちにくい。教師が一緒に活動することで課題を達成していく。	数唱：３－① 数字：２－② 1つずつ数える(具体物→数字)：１－③	立ち止まりの段階
C　児	活動への興味・関心をもちやすいが，活動の手順や操作方法に見通しをもちにくく，教師に部分的に補助されながら課題を達成していく。	数唱：３－② 数字：２－② 1つずつ数える(数字→具体物)：１－①	振り返りの段階
E　児	活動への興味・関心は高く，自分なりの見通しをもって課題に取り組んでいく。操作の意味をとらえ活動を確かめながら取り組んでいく。	数唱：４－③ 数字：４－③ 10までの数の合成：１－②	やり直しの段階

(3) 目　標

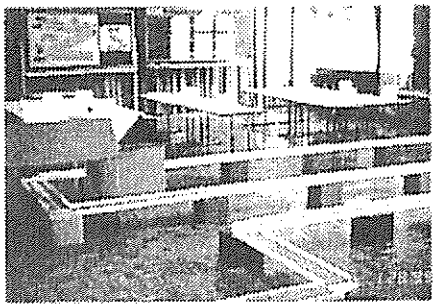
１．「ドライブにいこう」の活動に自分なりに取り組み，楽しく遊ぶことができる。

２．正誤を確かめながら数操作に取り組み，具体物を数えて数字と対応付けたり，数字から具体物を数えて取り出したり，合わせて数えて取り出したりすることができる。

(4) 題材について

①　「ドライブにいこう」について

「ドライブにいこう」とは，車を走らせる道路の穴に合う数タイルを数えて道路を構成していき，目的地まで車を走らせて遊ぶ，という構成遊びの活動である。数操作が正しく行われたかどうかを，道路を車が走るかどうかで確かめることができ，道路を構成していくという数遊びの中に数操作の確かめの場が設定される。

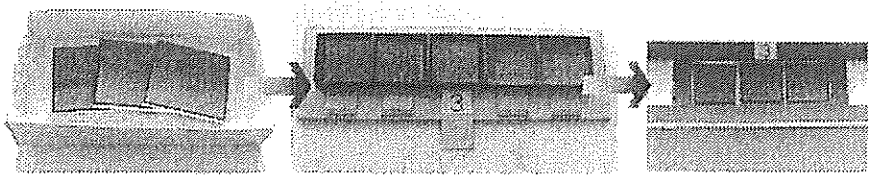


「ドライブにいこう」の場

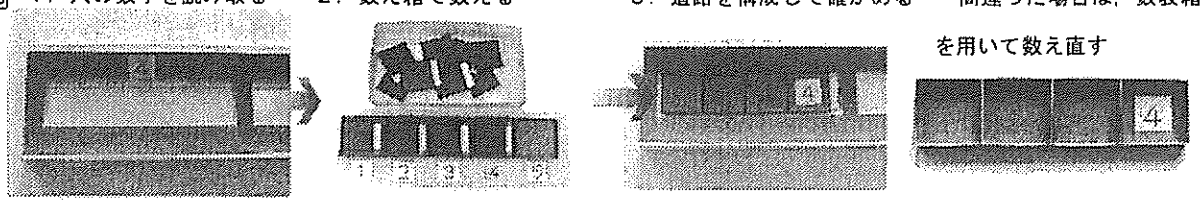
②　数操作について

具体物→数字への数操作で１つずつ数を数えるＡ児，数字→具体物への数操作で１つずつ数を数えるＢ・Ｃ児，２量を合成して数えるＤ・Ｅ児の数操作を次のように設定する。

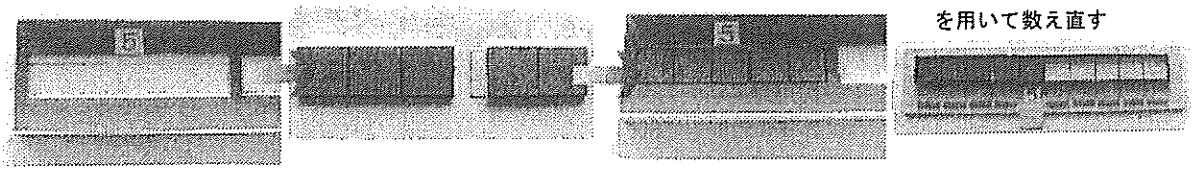
A児　１．数タイルを取り出す　２．数え箱で数える　３．道路を構成して確かめる　→間違った場合は，数え箱の数字を強調して数え直す



B・C児　１．穴の数字を読み取る　２．数え箱で数える　３．道路を構成して確かめる　→間違った場合は，数表箱を用いて数え直す



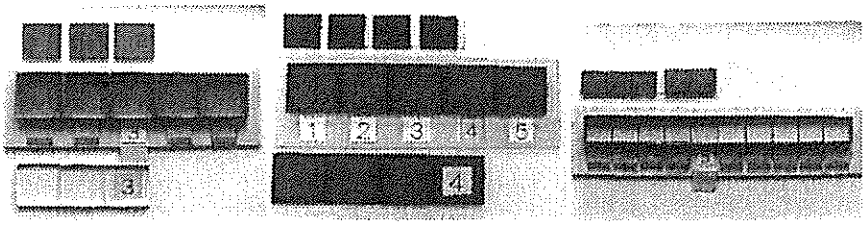
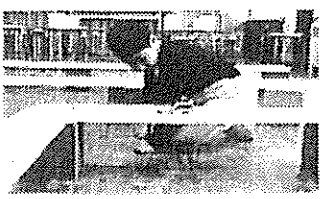
D・E児　１．穴の数字を読み取る　２．合わせて数える　３．道路を構成して確かめる　→間違った場合は，数え箱を用いて数え直す



(5) 計　画（5時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>ねらい</th><th>活　動　と　内　容</th><th>配時</th></tr>
<tr><td>であう</td><td>○　数遊びに出会い，活動への目的意識や興味・関心をもつことができる。</td><td>1．「ドライブにいこう」の絵話を読み，数遊びを体験する。
ふじ組のみんなは車に乗ってドライブに出かけました。でも道路には穴がいっぱいあいていて車が通ることができません。～○○君が見つけた穴は3の大きさでした。タイルを数えて3を作ります。「1・2・3」ぴったり穴に合いました。
○　活動への目的意識や興味・関心をもつこと

「ドライブにいこう」の絵話の提示

穴のあいた道路の提示</td><td>1</td></tr>
<tr><td>つくる</td><td>○　個に応じた数操作に取り組み，ドライブコースの道路を構成して遊ぶことができる。</td><td>2．ドライブコースの道路を構成して遊ぶ。
(1) AくんBさんの家までの道路を構成する。(小さい数)
A　児：○　1～3の数の具体物を数えて数字と対応付けること
B・C児：○　1～3の数字から具体物を取り出して数えること
D・E児：○　2量を合わせて2～5までの数を数えること
(2) Cさんの家までの道路を構成する。(大きい数)
○　3～5の数の具体物を数えて数字と対応付けること
○　3～5の数字から具体物を取り出して数えること
○　2量を合わせて5～7までの数を数えること
(3) DくんEさんの家までの道路を構成する。(全部の数)
○　1～5の数の具体物を数えて数字と対応付けること
○　1～5の数字から具体物を数えて取り出すこと
○　2量を合わせて2～7までの数を数えること
 
A・C・E児の数タイル・数え箱・数表箱</td><td>3</td></tr>
<tr><td>いかす</td><td>○　遊びに浸り達成感や成就感を味わうことができる。</td><td>3．前時までに完成した全部のドライブコースの場で遊び，活動を達成した喜びを味わう。
○　遊びを振り返り，達成感や成就感を味わうこと
 
完成したドライブコースの場</td><td>1</td></tr>
</table>

(6) 子供の反応と結果の考察

① **であう段階**（1／5時）…遊びに出会い，活動への目的意識や興味・関心をもつ。

教師の支援	子　供　の　活　動
○　絵話によるストーリーの提示 ○　穴のあいた道路のドライブコースの場の設定	「ドライブにいこう」の絵話の提示では，自分や友達の登場に喜びながら，「車だ。」「あ，穴があいてる。」「通れないね。」「作ろう。」などの言葉を発していた。そして，全ての子供たちの家をつなぐドライブコースの場で車を走らせてみて，穴のあいていない道路では車が走る様子を見て喜ぶ姿が見られた。また，車が止まることで道路の穴に気付き，残念な様子で「穴があいてる。」とつぶやく姿や，「したい。」と車をもっと走らせたいと訴える姿が見られた。 車や道路に興味・関心をもつ子供たち

考察①

絵話の提示では，お話に見入って「ドライブにいこう」の遊びを子供なりにイメージする姿が見られた。これは，子供たちがかかわる数対象や教材を絵で示し，子供の活動にストーリー性をもたせて視覚的に提示したことが有効であったからだと思われる。また，穴のあいた道路のドライブコースの場を巡り車を走らせてみたことで，道路に穴があいていて車が走れないこと〔遊びの課題〕や，道路を作って車を走らせたいという欲求〔遊びの目的意識〕をもたせることができたと考える。

② **つくる段階**（2／5～4／5時）…具体物を数えて数字と対応付けたり（A児），数字から具体物を取り出して数えたり（B・C児），合わせて数えたり（D・E児）して道路を構成する。

ア．Cさんの家までのドライブ（大きい数・3／5時間）

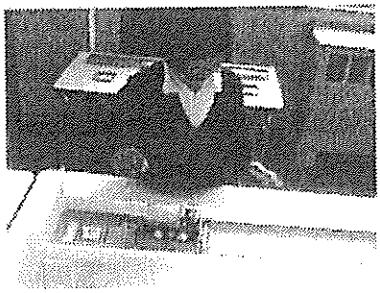
教師の支援	C児の活動	E児の活動
○　Cさんの家までのドライブの絵話の提示 ○　Cさんの家までのドライブコースの場の設定 ○　個に応じた数範囲・数え方の設定，教材の	C１　4の数字を取り，数え箱の4の数字の上に貼る。数タイルを「1, 2, 3」と1枚ずつ数え箱に入れていき3枚取り出す。3枚つないで道路に入れてみる。Tが車を走らせ穴に落ちることを指摘し，数え直すがまた3枚取り出す。 C２　Tが数表箱で数えることを促すと，4の数表箱を選び，数タイルを1枚ずつ「1, 2, 3, 4」と数えて4枚取り出す。道路に入れて車を走らせて喜ぶ。 C３　5の数字を取り，数え箱の5の数字の上に貼る。数タイルを「1, 2, 3」と1枚ずつ数え箱に入れていき3枚取り	E１　6の数字を取り，2と5，2と3，3と1を組み合わせてみるが6にならず，Tを呼ぶ。Tが数え箱に3の数タイルを入れて，6の数字のマスキングをめくると，2の数タイルを入れてみて5の数字のマスキングをめくる。次に3の数タイルを入れてみて「これでピッタリ。」と言う。 E１：数え箱で数える姿

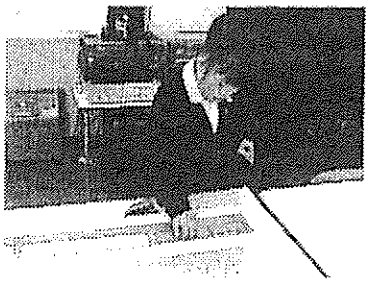
準備 ○　個に応じた指示・促し・確認の声かけ，操作の補助	出す。３枚つないで道路に入れてみる。Ｔと一緒に穴の上で車を走らせ車が進まないことに気付く。 Ｃ４　再び数え箱で数え直すが，３枚の数タイルを取り出して考えている。Ｔが数表箱で数えることを促すと，５の数表箱を選び１枚ずつ入れていき「1, 2, 3, 4, 5･･･5」と数えて５枚取り出す。 Ｃ２：数表箱で数える姿	Ｅ２　７の数字を取り，３と２，４と２，６と３，６と２，６と４を組み合わせるが合わない。数え箱に６の数タイルを入れて１の数タイルを合わせて，７の数字のマスキングをめくり「６と１で７。」と言う。 Ｅ３　６の数字を取り，４と２の数タイルを組み合わせて「1, 2, 3, 4, 5, 6」と数える。数え箱に入れて６数字のマスキングをめくり「やった。」と言う。つなぎ合わせた道路の上を車を走らせて喜ぶ。 Ｅ３：車を走らせて喜ぶ姿

考察ア

Ｃ児は，数え箱で数えた後に，道路に穴があいているので車が走らない（Ｃ１・Ｃ３）という確かめにより，間違いに気付いて再操作に取り組み，数表箱で正確に４や５を取り出すことができた（Ｃ２・Ｃ４）。また，数表箱の支援により，４や５といった３以上の数の量感を意識させ，操作の途中で３だけ取り出して考える（Ｃ４）姿が見られるようになった。Ｅ児は，自分で間違いに気付いて試行錯誤を繰り返していたが，Ｔの促しにより数え箱で再操作に取り組み正確に６を合成（Ｅ１）することができた。その後は，自分で数え箱を正誤の確認に使いながら（Ｅ２・Ｅ３）数操作に取り組んでいき，数の合成も次第に正確になっていった。

イ．Ｄくん・Ｅさんの家までのドライブ（全部の数・４／５時間）

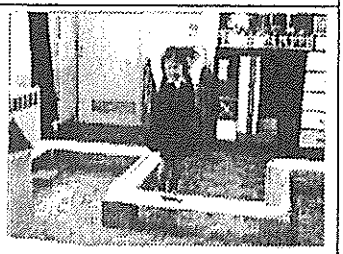
教師の支援	Ｃ児の活動	Ｅ児の活動
○　Ｄくん・Ｅさんの家までのドライブの絵話の提示 ○　Ｄくん・Ｅさんの家までのドライブコースの場の設定 ○　個に応じた数範囲・数え方の設定，教材の	Ｃ１　３の数字を取り，数え箱の３の数字の上に貼る。数タイルを４枚取り出すが「1, 2, 3」と３枚数え箱に入れていき，１枚戻して「３」と言って数字の３を指差す。３枚を道路に入れて車が通ることを確かめ，喜んで車を見ている。  Ｃ１：車を走らせて確かめる姿 Ｃ２　５の数字を取り，数え箱の５の	Ｅ１　５の数字を取り，２と２の数タイルを合わせて数えてみて考える。数え箱に入れてみてマスキングの４の数字をめくり「だからこうでしょ。４になっちゃう。」と言う。Ｔが５のマスキングをめくって「２といくつ。」と尋ねると数え箱のタイル図を見て，「３と２。」と大きな声で言う。３の数タイルを合わせて５をつくり「こうしたらぴったりだ。」と嬉しそうに言う。 Ｅ２　５の数字を取り，２と３の数タイルを合わせる。数え箱に入れてみてマスキングの数字をめくって５を確かめる。合わせた数タイルを道路に入れ

準備 ○　個に応じた指示・促し・確認の声かけ，操作の補助	数字の上に貼る。数タイルを４枚取り出して「1, 2, 3, 4…」と１枚ずつ数え箱に入れていき立ち止まって考える。１枚加えて「1, 2, 3, 4, 5…5」と数えて数字の５を指差す。５枚つないで道路に入れてみて車が走ることを確かめる。 Ｃ３　５の数字を取り，数え箱の５の数字の上に貼る。数タイルを３枚取り出して「1, 2, 3…」と数えていき，また数タイルを取り出して５まで入れていき「1, 2, 3, 4, 5」と数える。５枚つないで道路に入れて車を走らせて確かめる。	てみてピッタリ入ることを確かめる。  Ｅ２：道路を構成して確かめる姿 Ｅ３　７の数字を取り，６と１の数タイルを取り出し合わせて数えてみる。すぐに道路に入れてみてピッタリ入ることを確かめ，車を走らせる。

考察イ

Ｃ児は，数表箱を使わなくても数え箱のみで３を取り出し，道路を構成して車が走ることで正解を確かめる（Ｃ１）姿が見られるようになった。また，４まで数えて考え，もう１枚加えて５を取り出したり（Ｃ２），３まで数えてもう２枚加えて５を取り出したり（Ｃ３）するなど，抽象から具体への数操作において，数字－数詞－数対象を正しく結びつけていけるようになった。Ｅ児は，数え箱を正誤の確かめに用いながら（Ｅ２・Ｅ３），数の合成に必要な補数を数え箱のタイル図から読み取り５をつくる（Ｅ１）姿が見られた。これらの姿から，子供たちが自分の数範囲を広げ数への理解を深めていることがうかがわれる。これは，数操作の最後に確かめを位置づけたこと，再操作のための支援の教材(数え箱や数表箱)，正誤を意識させる教師の働きかけが有効に働いたためであると考える。

③　いかす段階（５／５時間）… 活動を振り返り，達成感や成就感を味わう。

教師の支援	子　供　の　活　動
○　前時までに作った全てのドライブコースの場の設定	子供たちは出来上がったドイブコースで車を走らせ，「くるま，おいで！」と目的地の家から大きな声で嬉しそうに呼びかけたり，走る車を見て「やったー！」と飛び跳ねて喜んだり，楽しそうに繰り返し車を走らせ，遊びに浸る姿が見られた。  車を走らせ喜ぶ子供の姿

５．　全体考察

「ドライブにいこう」という数遊びを設定したことで，「道路を構成して車を走らせたい」という遊びの楽しさから，子供たちの数操作への意欲を持続させることができた。また，「タイルを正しく数えないと道路が作れない」という確かめの場を設定したことで，子供たちは車を走らせたいという遊びの目的意識から，操作の正誤を確かめ，間違っては再操作に取り組みながら数操作を繰り返すことができた。その結果，子供たちは試行錯誤しながら自分の力で数にかかわりながら，表１に示したように，数を広げ身に付けることができた。今後は，さらに数遊びの題材開発を行い，子供の段階に応じて確かめが成立する条件を明らかにしていきたい。

表１　子供の変容の姿（３－(2)学習内容より）

	数　唱	数　字	1つ ずつ数える(具体-数詞)
A児	3－①⇒3－②	2－②⇒2－③	1－③⇒2－②
	数　唱	数　字	1つ ずつ数える(数字-具体)
C児	3－②⇒3－③	2－②⇒2－③	1－①⇒2－②
	数　唱	数　字	10 までの合成分解
E児	4－③⇒4－③	4－③⇒4－③	1－②⇒3－②

社会体験を豊かにする生活単元学習

～社会サービスにかかわる情報を収集・活用する活動を通して～

障害児教育研究部　　松　本　良　一

１．主題の意味

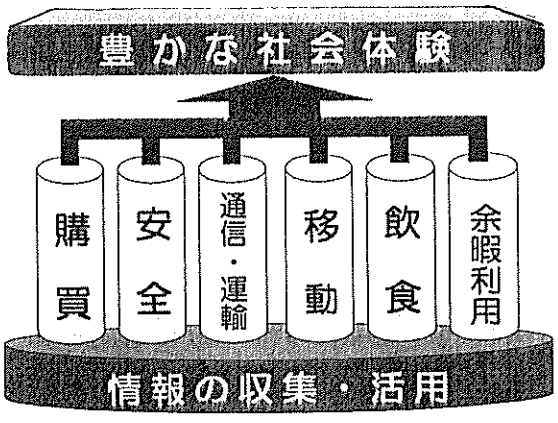
(1) 社会体験を豊かにするとは

社会体験を豊かにするとは，子供たちが生活に身近な社会サービスのもつ自分にとっての有用性に気づき，社会サービスとのかかわりを量的に広げたり質的に高めたりすることである。

ここでいう「生活に身近な社会サービス」とは，子供たちが現在及び将来の生活の中で利用することが予想されるものであり，具体的には次の６つのものを考える。

社会サービス	具体的な内容
購買にかかわるもの	自動販売機，コンビニエンスストアー，スーパーマーケット，百貨店，など
余暇利用にかかわるもの	図書館，博物館，美術館，遊園地・映画館などの遊戯施設，プール・体育館などのスポーツ施設，など
飲食にかかわるもの	食堂，ファミリーレストラン，ファーストフード店，オープンキッチン，など
移動にかかわるもの	バス，地下鉄，電車，タクシー，など
通信・運輸にかかわるもの	電話，郵便，宅配便，インターネット，など
安全にかかわるもの	病院，警察，消防署，など

これらの社会サービスとの「かかわりを量的に広げたり質的に高めたりする」とは，利用する対象や機会が増えたり，利用の仕方が上手になったりすることである。特に，利用の仕方の高まりについては，社会サービスの利用の仕方を身につけるための情報の収集・活用が大切になってくる。そこで，子供たちの社会体験を豊かにする上で，社会サービスをよりよく利用できるようになるための情報の収集・活用に視点をあてた指導を行う必要があると考える。

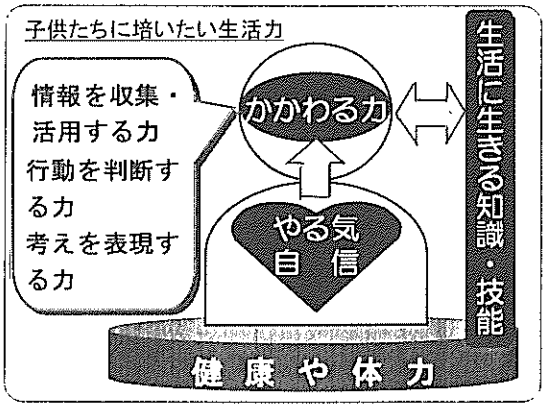


(2) めざす子供の姿

学習場面での「社会体験を豊かにする」子供の姿を，次のように考える。

○「おもしろそうだな，やってみたいな」と社会サービスへのかかわりを意識する姿
○「～したら～できるぞ」と社会サービス利用の見通しをもつ姿
○「わからないから～さんにきこう，このちずをみてみよう，～さんがいったとおりにやってみよう」と情報の収集・活用をする姿
○「できた，やれた」と社会サービスを利用した成果への満足感・充実感を味わう姿
　　→ 質的に
○「こんどは～をやろう」と次の活動への期待感をもつ姿 → 量的に

(3) 生活単元学習で培う力



上述しためざす子供の姿を具体化することで，社会体験を豊かにすることを可能にする生活力が培われると考える。ここでいう生活力とは，健康や体力を基盤とした①やる気・自信，②かかわる力，③生活に生きる知識・技能の総体である。子供たちの社会体験を豊かにする上では，特に「かかわる力」の育成が大切になると考える。具体的には，自分に必要な情報を収集する力や収集した情報（知識・技能）を活用する力，自分の行動を判断する力，自分の考えを表現する力，などの力を育成することが必要である。

2．副主題について

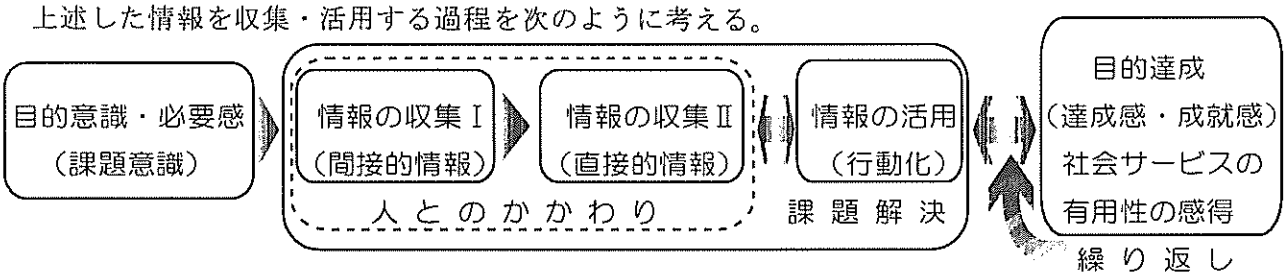
(1) 社会サービスにかかわる情報を収集・活用する活動とは

社会サービスにかかわる情報を収集・活用する活動とは，社会サービス利用の直接体験を通して目的意識と課題意識をもった子供たちが，模擬の場で繰り返し課題解決と目的達成を行うなかで，社会サービスを利用する上で必要な知識・技能を身につけていくことである。

ここでいう社会サービスを利用する上で必要な知識・技能を，次のように考える。

種　類	具　体　的　な　内　容
言　語	利用の手順や方法を示すもの（聞く，読む），位置や場所，方向，方角を示すもの（聞く，読む），住所（書く），分からないことを尋ねる（話す），など
数	時刻・時間，お金，カレンダー，電話番号，など
記　号	屋内や屋外の標示，道路標識，地図記号，など

上述した情報を収集・活用する過程を次のように考える。



子供たちは，目的意識や必要感に支えられて，主に，人に尋ねることで情報の収集Ⅰを行う。ここで収集される情報は言語による間接的な情報である。次に実際の場で情報の収集Ⅱを行う。ここで収集される情報は間接的な情報が具体的な場と結びついた直接的な情報である。この直接的な情報を収集しながら自分の行動を判断し，実際に行動していく。この行動が期待する成果をもたらさなかった場合には，再度情報の収集を行うことになる。行動の結果，期待する成果を得ることができた場合には，目的達成の達成感・成就感を味わうと同時に社会サービスのもつ自分にとっての有用性に気づくことができる。特に，情報の収集Ⅰ・Ⅱの段階においては，情報の収集源として社会サービスに従事する人とかかわることが大切になってくる。具体的には，次のような条件がある。

○　子供たちが意識できる目的があること
○　子供たちが情報を収集・活用する必然性があること
○　子供たちが見る・読む・聞く・尋ねるなど，具体的な活動を通して情報を収集できる場があること
○　子供たちの実態に応じた活用できる情報が準備されていること

(2) 活動づくりの具体的な方法

① 教材づくりについて

6つの社会サービスのなかから，学習対象を設定し，それを利用するために必要な知識・技能を明らかにする。学習対象を設定する際には，次の点に留意する。

○ 子供たちが繰り返し利用することが可能であるもの

○ 子供たちにとって空間的，または心情的に身近であるもの

○ 子供たちの興味・関心や必要性に応じているもの

○ 子供たちの発達段階や生活経験の蓄積の度合いに照らして適切であるもの

② 児童の実態の把握について（詳細は次頁を参照）

社会サービスにかかわる実態を，次のような観点から明らかにする。

○ 社会サービス利用に対する興味・関心，意欲や社会サービスに対する認識

○ 社会サービス利用に必要な知識・技能の習得状況

○ 情報の収集・活用の仕方，行動の判断の仕方，考えの表現の仕方

③ 個別の学習内容の設定について（詳細は次頁を参照）

社会サービスを利用するために必要な知識・技能とその知識・技能を獲得して使うための情報の収集・活用の仕方及び行動の決定の仕方，自分の考えの表現の仕方，などの観点から子供たち一人一人の学習内容を設定する。

④ 活動構成について

具体的な活動や体験を重視し，子供たち一人一人が目的意識と課題意識をもって活動に取り組むなかで，社会サービスとのかかわりが広がったり高まったりするような活動を構成する。そのために学習過程を「であう」「しらべる」「ひろげる」の3段階で構成し，そのなかに，直接体験の活動や模擬活動を位置づける。

ア．であう段階

社会サービスを利用する直接体験の活動を行うことで，活動への目的意識をもったり生活上の課題を意識したりすることをねらう段階

イ．しらべる段階

自分にとっての課題を明確に意識して，模擬活動を繰り返し行い，課題を解決することで社会サービスを利用するために必要な知識・技能を身につけることをねらう段階

ウ．ひろげる段階

再度社会サービスを利用する直接体験の活動を行ったり表現物をまとめたりすることで，しらべる段階で身につけた知識・技能を活用したり，社会サービス利用の範囲を広げたりすることをねらう。

	であう	しらべる	ひろげる
活動と内容	1．社会サービスを利用する直接体験をする。 ○ 活動への目的意識 ○ 社会サービスの有用性の実感	2．模擬活動を通して課題を解決する。 情報収集Ⅰ ⇒ 情報収集Ⅱ ⇔ 情報活用 ⇒ 目的達成 ※ 左記の活動を繰り返し行う。	3．社会サービス利用の表現物をまとめる。 ○ 利用の範囲を広げること ○ 利用の仕方の高まり
支援	・直接体験の場の設定（子供たちが目的意識や自分にとっての価値を実感できるような体験の設定）	・繰り返しの必然性のある模擬活動の場の設定（子供が収集・活用可能な情報のある場の設定） ・個に応じたノート	・利用の範囲を広げることのできる直接体験の場の設定 ・表現物の提示

3．指導の実際と考察（安全にかかわる社会サービスの利用）

(1) 単元名　　第５・６学年 梅組　おしえて！わたしたちの おまわりさん

(2) 単元についての考え方

①　本単元で取り扱う社会サービスについて

警察には「生活安全警察」「地域警察」「刑事警察」「交通警察」「警備警察」などの機能があるが，本単元では，「地域警察」としての機能を中心的に取り上げる。地域警察は県内５７０カ所の交番・駐在所で地域住民の治安を守ること，巡回連絡を通して地域とのかかわりを深めていること，地理案内・落とし物の取り扱い・少年の補導活動など警察の仕事の第一次的な処理の全てを担っており，子供たちにとって最も身近な機能であると考える。具体的には，「荒戸交番」のお巡りさんを取り上げる。荒戸交番は学校から最も近いところにあること，学校で何かあった場合に利用する交番であること，などの理由から子供たちにとって最も身近な交番である。この交番を地理案内で利用することを中心に，落とし物の取り扱い，防犯などにその利用の仕方を広げていく。

②　警察にかかわる児童の実態について

児童名	課　題　解　決　の　力	「お巡りさん」についての認識
B児 5年女 Bグループ	手順を把握するまでは教師の働きかけが必要。あまり手順を考えず試行錯誤的に課題解決に取り組む。人への働きかけは消極的。	お巡りさんは悪い人をつかまえる人，というテレビや大人の話からの認識をもつ。交番については知らない。
A児 6年女 Aグループ	手順を把握するまでは，教師の働きかけが必要。手順を把握すれば模倣的に課題解決に取り組む。人への働きかけは消極的。	お巡りさんを見たことはあるが，その具体的な仕事について答えることはできない。交番についても知らない。
C児 6年女 Cグループ	決められた手順に従って目的的に課題解決に取り組む。分からないことがあれば，多くの場合積極的に人に働きかけることができる。	お巡りさんは電話があって助ける人，敬礼をする人，捕まえる人，優しい人，など生活経験からの認識をもつ。

③　個別の学習内容について（表内のＡ～Ｃ児は，個別の学習内容を示す。）

本単元の具体的な学習内容は次のようなことである。①道を尋ねるという活動を通して，お巡りさんが自分たちにとって身近な存在であるとともに自分たちの安全を守ってくれる存在であることに気づくこと，②お巡りさんが与えてくれる情報を収集・活用して目的を達成すること，③お巡りさんへのかかわり方を身につけること，④お巡りさんへ感謝の気持ちや親しみをもつこと，などである。

情報の収集・活用	お巡りさんへのかかわり方
Ⅰ　左右などの方向を示す情報	Ⅰ　教師と一緒に尋ねる模倣的なかかわり方
Ⅱ　目印となる建物の前，隣などの位置を示す情報（Ａ児）	Ⅱ　部分的に教師の声かけを受けて尋ねるかかわり方（Ａ児）
Ⅲ　右へ曲がって３軒目など方向を示す情報と位置を示す情報の複合情報（Ｂ児）	Ⅲ　かかわり方の手順を見て自分で尋ねるかかわり方
Ⅳ　東西南北などの方角を示す情報	Ⅳ　自分から尋ねるかかわり方（Ｂ児）
Ⅴ　簡単な地図上での抽象的な情報（Ｃ児）	Ⅴ　必要に応じて再質問をするなど，状況に応じて自分から尋ねるかかわり方（Ｃ児）

これらの学習内容を身につけることにより，①情報の収集・活用という課題解決の力，②社会事象に積極的に働きかけようとするやる気，③分からないことを人に尋ねるときの尋ね方や信号，方向，方角についての用語などの生活に生きる知識・技能，などの生活力を培うことができると考える。以上のことは，社会体験を豊かにするとともに，地域社会とのかかわりを育むことにもつながり，子供たちの現在及び将来の豊かな生活を考える上でも意義深い。

(3) 目　標

① お巡りさんや交番の意味や働きについて知り，自分たちの生活をよりよくするために，その働きを使おうとすることができる。

② お巡りさんに話してもらったこと，自分が見たことなどを，自分の目的を達成するための情報として活用することができる。

③ お巡りさんが自分たちの生活の安全を守ってくれる存在であることを知り，お巡りさんに親しみをもつことができる。

(4) 計　画（6時間）

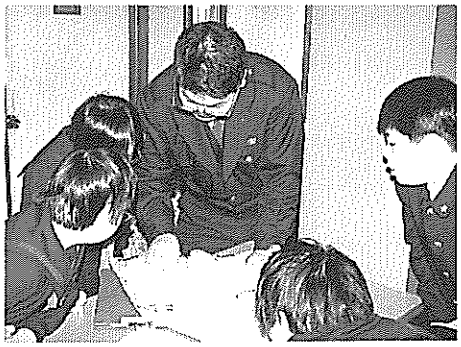
段階	ねらい	活動と内容	配時
であう	○ 活動への目的意識をもつことができる。	1．交番に見学に行ってお巡りさんのお話を聞くとともに，実際に道を訪ねて唐人町にあるD君の祖母の家を訪ねる。 ○ お巡りさんの仕事に興味・関心をもつこと ○ お巡りさんの仕事の自分にとっての価値を実感すること ○ お巡りさんに道を尋ねて目的地へ行くという，活動への目的意識をもつこと	2
しらべる	○ 目的を達成するために解決すべき課題を意識し，課題解決に取り組むなかで，解決に必要な情報を収集・活用することができる。	2．目的達成のための課題を意識して，その課題を解決する。 (1) D君の祖母の家へ行く過程をビデオで振り返ることにより，課題を意識する。 ○ お巡りさんに教えられた通りに行けなかったこと ○ 道順を示す目印となるものがあること 子供が意識する課題 お巡りさんに教えてもらって，道を行けるようになりたい。 (2) ビデオを見て，お巡りさんへの道の聞き方を「お巡りさんノート」にまとめる。 ○ お巡りさんへの道の尋ね方の手順の把握 ○ お巡りさんに教えてもらった情報の活用の仕方の把握 ・目印となる建物や信号 ・曲がり角を右や左に曲がること ・東西南北の方角 (3) 「お巡りさん」ノートにまとめたことを模擬の場で活用して繰り返し道を尋ねる。 ○ ノートにまとめたお巡りさんへの接し方の実践 ○ お巡りさんに聞いた情報の活用を実践すること	3 ① ① ①
ひろげる	○ 学習してきたことを生活に生かすことができる。	3．学習してきたことを生活に生かす。 (1) 自分の家の近くの交番をさがし，自分の行きたい場所までの道を尋ね，実際に行ってみる。 ○ 学習してきたことを生活に生かすこと (2) お世話になったお巡りさんに，お礼の手紙を書く。 ○ お巡りさんへの感謝の気持ちや親しみをもつこと	1 課外 ①

(5) 指導の実際

① であう段階の活動（1・2／6時間）

交番見学を通して,地理案内という自分たちにとって最も身近な警察の働きを体験することにより,警察のもつ自分たちにとっての意味を実感することができる。

支　援	児　童　の　反　応
○交番見学の場の設定 ・学級の友達の祖母の家に届け物をしたいが，道が分からないという状況の設定	交番に来た子供たちは，お巡りさんから，道が分からないときに道を教えてくれること，落とし物を拾ったら届けること，危険なときには助けを求めることなど，交番の仕事についての話を聞いた。その後，C児が「D児の祖母の家を教えてください」と，メモを見ながら住所と名前を尋ねた。お巡りさんから地図を見ながら目的地に行くまでの道順を，「交番の前の交差点を右に曲がって，ローソンの先の角を左に曲がった所の家です」と教えてもらった。 子供たちは教えてもらった通りに道を進もうとするが,「ローソン」「右」など断片的な情報は記憶しているが，実際に曲がり角にさしかかると，どちらに進んでいいか迷ってた。しかし，教師の「お巡りさんは，ローソンの角を右って言ってたね」という支援を受けて無事，D君の祖母の家に届け物をすることができた。



交番で道を教えてもらう子供たち

考察①

交番に行くことで，今まで交番の存在を知らなかった子供たちが，その場所やそこにお巡りさんのいることを知ることができた。また，お巡りさんの話を聞くことで，警察の仕事について知ることができた。また，教師の支援を受けながらではあるが，お巡りさんが与えてくれた情報を活用してD児の祖母の家を尋ね，届け物をするという目的を達成し喜ぶ姿が見られた。これは，交番見学を通してお巡りさんの自分にとっての価値を実感した姿であると考える。以上のような子供の姿を具体化できたのは，ア．届け物をしたいが道が分からないという状況の設定，イ．道を尋ねるために交番に行くという交番見学の場の設定，ウ．実際に道を進む際の教師の声かけ，などが有効であったと考える。

② しらべる段階の活動（3～5／6時間）

解決すべき課題を意識して模擬の場で課題解決に取り組むなかで，自分の目的を達成するための情報を収集・活用することができる。

ア．課題を意識する活動

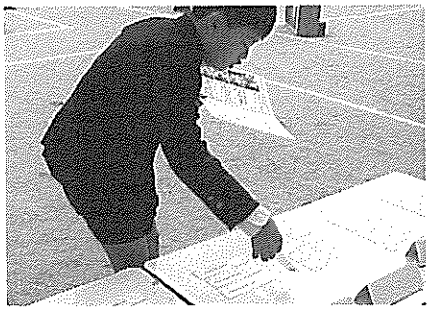
支　援	児　童　の　反　応
○D児の祖母の家を尋ねるときのビデオの提示 ・曲がり角で道に迷う姿を中心に提示	「D児の祖母の家までお巡りさんの言うとおりに行けたかな」という教師の問いかけに全員の子供が「うん，いけた」と元気に答えた。しかし，ビデオでその様子を振り返り，曲がり角でどちらに進んでいいか迷う姿や教師に道を尋ねる姿を見て，「うーん」とつぶやいたり，「上手に行けてない」とつぶやいたりした。そして，「もっと上手に行けるようになりたい」と話す姿が見られた。

考察ア

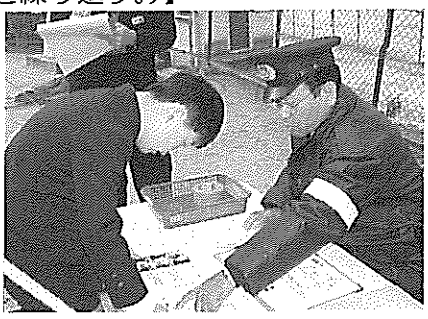
交番見学の際には，お巡りさんの与えた情報をうまく活用できなかったことを意識できていなかったものが，もっと上手に行けるようになりたいと，課題を意識する姿へと変わっていった。このように自分の課題を意識できたのは，交番見学の際には気づいていなかった部分を中心に編集したビデオによる振り返りが有効であったからだと考える。

イ．情報を収集・活用する活動

【模擬活動の手順（①～③の活動を繰り返す。）】



① 課題カードを取る

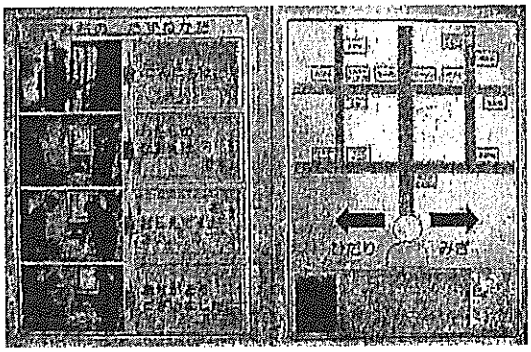


② お巡りさんに尋ねる

③ 目的地をさがして自己評価をする

【模擬活動の場と個に応じた「お巡りさんノート」】

模擬活動の場



「お巡りさんノート」（Bグループの例）

○左側はお巡りさんへの道の尋ね方
○右側は簡単な地図と課題カードをはるスペース

A児（Aグループ）	B児（Bグループ）	C児（Cグループ）
1試行目の活動（再試行1回） セブンイレブンの角を右に曲がった黄色い屋根の家 A 1.セブンイレブンの角を右に曲がり家を見つける。 2試行目の活動（再試行2回） ローソンの角を右に曲がった赤い屋根の家 A 1.ローソンを見つけて走り出し，すぐに右に曲がるが，屋根の色が分からず立ち止まる。 A 2.教師の促しで，もう一度お巡りさんに聞きにいく。 A 3.赤い屋根のお家だったねの声かけで見つける。	1試行目の活動（再試行2回） ラーメン屋の角を左に曲がって3軒目の家 B 1．ラーメン屋から右に曲がって緑の屋根の家を開け「ない」と言って，再度尋ねに行く。 B 2.自分のノートの地図を指で押さえながら家を見つけ，「あった，やった！」と言う。 2試行目（再試行1回） ローソンの角を右に曲がり，ポプラの角を左に曲がった青い屋根の家 B 3.ノートの地図を指で指しながら地理案内を聞く。 B 4.ノートの地図と照らし合わ	3試行目の活動（再試行なし） セブンイレブンの角を北に曲がって2軒目の家 C 1.お巡りさんの北という言葉で自分の地図のミスタードーナッツを指さす。 C 2.セブンイレブンの角を北に曲がるが立ち止まる。 C 3.教師の何軒目の声かけに「2軒目」と答え，2軒目を開ける。 4試行目の活動（再試行なし） セブンイレブンの角を南に曲がり，めがね屋を東に曲がったポストのポストの前の家 C 4.2回角を曲がってめがね屋

３試行目の活動（再試行２回）

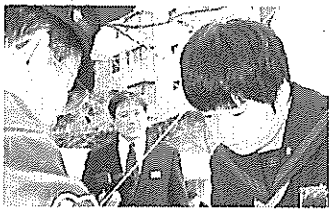
セブンイレブンの角を右に曲がったファミリーマートの隣の黄色い屋根の家

A 4.お巡りさんに左に曲がると言われるが，セブンイレブンの角を右に曲がって違う家を開ける。

A 5.教師の促しでもう一度聞きに行く。

A 6.左に曲がるが，ファミリーマートに気づいていない。

A 7.教師のファミリーマートの声かけを聞いて隣の黄色の屋根の家を開く。



真剣にお巡りさんの話を聞くA児

せながらローソンを確認して右に曲がる。ポプラの角で青い屋根を見つけて開ける。

３試行目の活動（再試行１回）

セブンイレブンの角を右に曲がって２軒目の家

B 5.セブンイレブンを行きすぎるが，ノートの地図を見ながら振り返って，セブンイレブンを見つけて右に曲がる。

B 6.５軒目の家を間違えて開けるが，教師の何軒目の声かけに，２軒目と答えて，２軒目を開けて見つける。

４試行目の活動（再試行なし）

ラーメン屋の角を左に曲がったたばこ屋の隣の３軒目の家

B 7.たばこ屋さんの隣を「いち，に，さん」と数えて，３軒目をじっと見つめて開ける。

さんまでは行けるが，そこで立ち止まる。

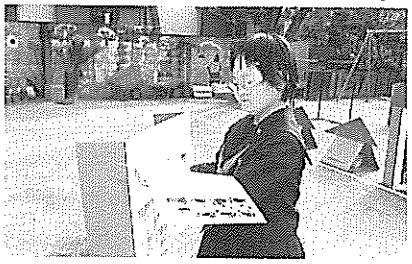
C 5.教師の何があるって言われたの声かけに「ポスト」と答え，ポストの前の家を開ける。

５試行目の活動（再試行なし）

セブンイレブンの角を南に曲がって５軒目の家。

C 6.お巡りさんの南の説明を聞く。開くときに，「お巡りさんノート」の地図を指で確認する。

C 7.セブンイレブンの角を「南だったよね」と言って曲がり，５軒目の家を一度で見つける。



ノートの地図を活用するC児

考察イ（上述の児童の反応の中の 〰 はお巡りさんが与える情報 ── は教師の個別の支援）

お巡りさんから聞いた情報（情報の収集Ⅰ）を，実際の場のなかの道の方向や目印となる建物と結び付け（情報の収集Ⅱ），自分の行動を判断し実際に家を見つける（情報の活用）姿（A 1.3.7,B 2.4.6.7, C 3.5.7）を具体化できた。また，お巡りさんからの情報の収集Ⅰが不十分であった子供たちに，教師が個別に働きかけて情報の収集Ⅰを再度行うことで目的地を見つける（情報の収集Ⅱ→活用）姿（A 2.5,B 1）や，お巡りさんから聞いた情報を自分のノート上の地図に置き換え，実際の場のなかの建物と結び付ける（情報の収集Ⅱ→活用）姿（B 1.3.4.5,C 1.6）も見られた。以上のような子供の姿から，目的を達成するために情報の収集・活用をさせる上で，ア．個に応じた情報を提供してくれるお巡りさんの存在，イ．情報の収集Ⅱが行える模擬の場の設定，ウ．簡単な地図と個に応じた方向・方角が見れる「お巡りさんノート」の活用，エ．目的達成を自己評価できる家の設定，オ．子供が行き詰まりを感じたときに教師が行う個に応じた働きかけ（再質問による情報の想起，情報の再提供）などが有効に働いたと考える。

４．全体考察

右の手紙に見られるように，お巡りさんに対して感謝の気持ちをもつ姿を具体化することができた。これは，安全にかかわるものを教材化し，情報を収集・活用する活動を仕組むことで，警察という社会サービスのもつ自分にとっての有用性に気づくことができたからだと考える。また，そのかかわり方も，目的意識の喚起から情報の収集Ⅰ→情報の収集Ⅱ→情報の活用→目的達成という一連の活動を構成することで，高まりを見ることができたと考える。

ひろげる段階でC児が書いた手紙

みんなで表現する楽しさを味わう音楽科学習

～ 音 楽 劇 の 活 動 を 通 し て ～

障害児教育研究部　西 原 敦 子

1．主題の意味

(1) みんなで表現する楽しさを味わうとは

友達とのかかわりを通してつくる歌や歌に合った動き，楽器の音を伝えたい人へ発表することに充実感を感じることである。

「みんなで」とは，

歌や音を合わせる仲間ということであり，具体的にはクラスの友達，グループからクラス全員，そしてふじ，さくら，梅組の全員という友達の広がりを意味する。

子供は，安定した人間関係を基盤にして家族，近隣の人々，友達というように他者とのかかわりを広げていく。そうした人とのかかわりの広がりの中で子供は他者との共感や思いやり，集団への参加意識などをもてるようになっていくと考える。

「みんなで表現する」とは，

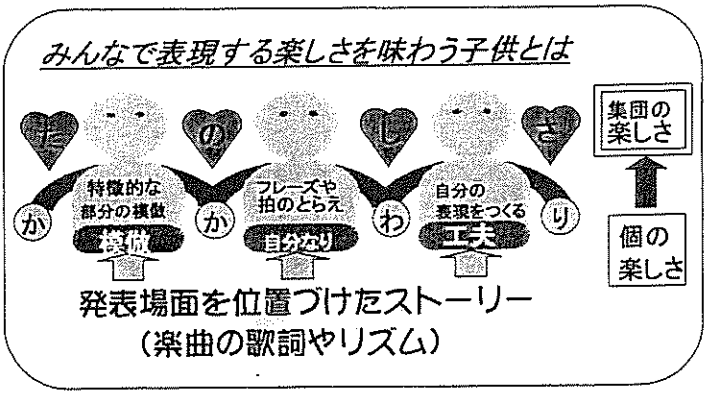
楽曲が流れる中で２人組やグループなど形態をかえながら，共に遊んだり，呼びかけや歌声を合わせたり，それぞれのパートを楽器で演奏したりすることである。

人とかかわる力は，自分の意思や感情を豊かに表現したり，相手の気持ちを感じ取ることを十分に経験することにより養われる。したがって，音楽の学習の中においても，音楽を媒介として教師や友達など人とふれ合い，互いの感情や意思を表現したり，共に楽しんだり共感し合う活動を十分に展開することが必要である。こうした活動を通して，自分の身の回りのもの・ひと・ことに対する興味・関心が生まれ，豊かな感情や表現力が養われると考える。

「楽しさを味わう」とは，

「個の楽しさ」として，声を出したり，音楽に合わせて踊ったり，楽器の音を鳴らしたりすること自体を快として感じるものに加えて，「集団の楽しさ」として友達とのかかわりからつくる歌や動き，楽器の音が友達と合った時，合わせようと表現する時に感じる快のことである。

中・高学年のさくら・梅組の子供たちが音楽にふれ，楽しさを感じている時の一人一人の様子には次のような姿が見られる。楽曲の特徴的な部分に合わせて教師の表現を見ながら模倣する子供，フレーズや拍など楽曲の全体を感じて自分なりに表現する子供，楽曲が表す情景から部分的に，または全体的に工夫して表現する子供，である。



このように，子供たちはそれぞれに表現する楽しさを感じているが，友達とのかかわりを通してつくる歌や踊り，器楽表現（合奏）を行うことにより，さらにその楽しさを広げていくことができると思われる。また，上手に歌ったり，立派な演奏をすることを「表現する」ことの最終像としてねらうのではなく，歌うことや動くこと，楽器を奏することを伝えたい人とのかかわりの中で発表表現することに充実感を感じさせることが大切であると考える。

(2) めざす子供の姿

具体的に，みんなで表現する楽しさを味わっている子供の姿を次のように考える。

◎ 教師のモデル演示や友達の表現を見ながら歌や動き，楽器の音を合わせようとする姿

◎ 楽曲を聴きながら友達と一緒に歌ったり，動きを作ったり，自分のパートを一生懸命に演奏しようとする姿

◎ 表現の見通しをもち，楽曲の歌詞やリズミカルな音を楽しみながら，感じたこと，思ったことを歌や動き，器楽で表現しようとする姿

◎ 拍感覚や速度感覚，強弱，フレーズ感覚など音楽的要素をとらえた姿

以上の姿を具体化することは，子供たちに音楽を楽しむ心情や自分から働きかける力，音楽的表現力を培うものと考える。これは，子供たちの日常生活の中において，「音楽の楽しみ」を身につけることであり，自分の生活を豊かにしていく学習として意義がある。

(3) 音楽科で培う力

① 表現への興味・関心，意欲，表現することへの自信

② 好きな友達や楽器を選び，かかわりをもって表現しようと人や場に働きかける力

③ 楽曲の拍やリズム，強弱など音楽的要素をとらえた表現力

2．副主題の意味

音楽劇の活動とは，

楽曲の歌詞が表す情景や動きをストーリーに沿いながら，イメージをもって歌ったり，歌に合った動きをつくったり，器楽表現をしたりすることである。

※これは，登場人物になりきり，表現に自由性を多く含んだ音楽劇遊び（低学年・ふじ組）の発展である。音楽劇遊びでは，内容が同質の複数の楽曲を取り扱ったので，子供自身がパネルシアターの切り絵を操作しながらストーリーを決めていくなど自由性をもっていたが，音楽劇では，内容が異質の複数の楽曲を取り扱い，学習内容が高まるような配列にしているのでストーリーは，教師が提示する。

取り扱う楽曲は，子供の実態から設定した学習内容に合うもので，複数の楽曲を選定する。

・生活に身近なもの（動物，乗り物，アニメの主人公など）が登場する，

・擬態語や擬声語，様子や動きを表す歌詞や簡単な筋がある，

・遊び方のルールがつくりやすい，呼び掛け合い（交互唱）がある，などである。

複数の楽曲の配列は，次の通りである。

・友達とのかかわりを感じるために，４対４→２対２→１対多などかかわり方が違う楽曲をつなぐ，

・拍やリズムの違いを感じるために，４拍子→３拍子→４拍子など同じ拍子の間に違う拍子の楽曲をつなぐ，などである。

提示するストーリーは，①起承転結があり，動きや歌で構成されること②相手・目的意識をもたせるために，発表場面を位置づけること③みんなで～しないとすすめなかったり，出来上がるために力を合わせるなど，友達とのかかわりを必然的に生み出す場面でつなぐこと，を条件とする。

発表場面を位置づけたストーリーに沿って，楽曲を歌ったり，踊ったり，器楽表現をしたりすることは，子供たちがみんなで表現する楽しさを味わう上で，次のような価値がある。

① 相手・目的意識を高め，楽曲の歌詞を理解した面白さを歌・踊り・発表形式の合奏で表現できる。

② ストーリーの場面を追っていく中に，音楽的要素が含まれるので子供たちの表現が確かになる。

③「発表」という形式で表現を繰り返すことにより，友達と歌や動き・音が合っていくことに楽しさを感じながら表現できる。

3．活動づくりの具体的方法

みんなで表現する楽しさを味わう姿を具体化するために，以下のような観点で実態をとらえ，内容を設定し，活動を工夫していく。

(1) 児童の実態のとらえ方及び学習内容表

観点＼段階	1	2	3	4	5
表現意欲 人へのかかわり	・しないで見ている。 ・気が向いた時だけする。 ・同じ表現の場にいる。	・教師や友達に促される時だけ一緒に表現ずる。 ・人を意識する。	・印象に残った部分を自分なりに表現する。 ・友達と表現することを喜ぶ。	・楽曲の歌詞や場から表現を部分的に工夫する。 ・友達と表現しようとする。	・楽曲の歌詞や場から表現を工夫する。 ・友達と合わせることを喜ぶ。
音楽的な力 (歌で表す力)	・範唱テープや教師の歌を聞いて声を出す。・教師の口元を見て口を開ける。	・教師と一緒に声を出したり，歌ったりする。	・一人で繰り返しのリズムや擬声語・擬態語の歌詞の部分を歌う。	・途中でとぎれることはあっても始めから終わりまで歌う。 ・歌詞を入れ替えて歌う。	・部分的に歌詞を作り替えて歌に合わせて歌う。
(動きで表す力)	・教師のなりきった身体表現を見たり，歌に合わせた簡単な動きを真似たりする。	・歌を聞きながら，教師の大きな身体の動きを真似て，手や身体を動かす。	・身近な歌詞や擬声語・擬態語の歌詞と動きをつないで単純な身体の動きであらわす。	・歌に合わせて（歌詞をよく聞いて）歌詞の表す情景を手振りや身振りであらわす。	・作り替えた歌詞に合わせて（よく聞いたり，歌ったりして）手振りや身振りであらわす。
音楽的要素 (拍感覚)	・拍を強調した歌や動きを聞いたり見たりする。	・歌い始めや終わりの部分の拍に合わせようと表現する。	・擬声語や擬態語の部分や繰り返しの歌詞の部分に合わせて表現する。	・フレーズの始めや終わりの部分の拍に合わせて表現する。	・フレーズの拍の流れにのって表現する。
(速度感覚)	・速さの違う歌を聞いたり，歌に合わせた身体表現を見たりする。	・教師と一緒に表現する中で極端な速さの違いを身体で感じて表現する。	・伴奏や歌を聞きながら身体を動かすことで速さの違いに気づき，部分的に合わせる。	・速さの違いを意識して，その伴奏に合わせて表現しようとする。	・歌詞の表す情景から様子や気持ちにふさわしい速さの変化を工夫して表現する。
(強弱)	・強さの違う歌を聞いたり，歌に合わせた身体表現を見たりする。	・教師と一緒に表現する中で極端な強弱を身体で感じて表現する。	・伴奏や歌を聞きながら，身体を動かすことで，音の強弱に気づき，部分的に合わせる。	・強弱を意識して伴奏に合わせて表現しようとする。	・歌詞の表す情景から様子や気持ちにふさわしい強弱の変化を工夫して表現する。

(2) 活動づくりの工夫点

① 発表を目的意識としてもてるように活動構成を，下表の通り３段階で構成する。

	であう	あらわす	まとめる
活動と内容	１．音楽劇のストーリーと楽曲に出会う。 ○ 楽曲や登場人物，場面を知り表現の見通しをもつこと	２．音楽劇をする。 ○ 場面をつないで友達と表現すること ・歌や動きの工夫 ・色々な楽器から好きな楽器を選択 Aグループ：模倣表現を自分なりの表現へ Bグループ：自分なりの表現を部分工夫へ Cグループ：部分工夫を全体的工夫へ	３．音楽劇の発表をする。 ○ 発表への期待感 ○ 発表練習をすること ○ 一緒に表現することの楽しさの感得 ○ 伝え合う喜びを感じること
支援	○ ストーリーを意識させるもの ・手紙や地図 ・拡大歌詞 ・範唱テープ ○ モデル演示	○ 場面の展開を知らせる地図と切り絵 ○ 一緒の表現が生み出しやすい場の設定 ○ 子供の実態に応じた楽譜の提示 Aグループ：友達の表現に注目させるようなモデル演示，興味のある絵を用いた絵譜 Bグループ：楽曲の特徴を意識できる場や言葉かけ，色別，階名付絵譜 Cグループ：表現の工夫に目が向く言葉かけ，階名付絵譜	○ クラスから全体への発表など，発表会の場の設定 ○ 伝えたい人の招待 ○ 励ましや表現を価値づける言葉かけ

② 選定する楽曲（配列）は，前述した通りである。

③ 楽曲の様子を具体化した教具・場は，歌詞のあらわす情景から友達とのかかわりが必然的に生まれるもの（例：２人乗り電車やほうき，交互に歌っていくと情景物が出来上がるなど）である。

④ 子供の実態に応じた楽譜は，個に応じて興味のある絵や色シールなどを用いて絵譜を作る。

4．指導の実際と考察

(1) 題材名　　第５・６学年 梅組　　キキのおいわいかいをしよう

(2) 本題材の考え方

本学級の子供たちの実態は，次の通りである。(表中の数字は前ページの段階と対応)

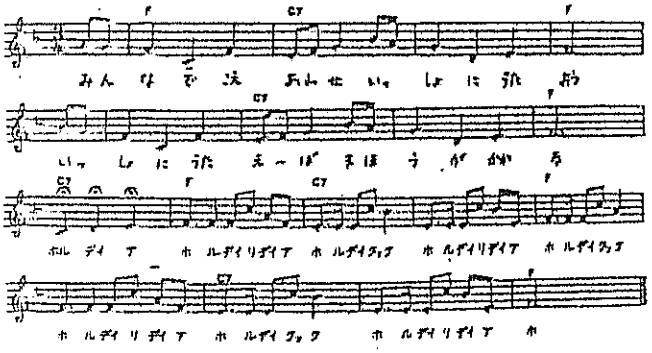
	表現意欲・人へのかかわり	音楽的な力	音楽的要素
H児 Aグループ (模倣)	・表現したい気持ちはあるができなかったり，誘いかけに応じないでいたりする。　2	・声に出して歌わない。　1 ・楽曲を聞き，教師のモデル演示を見て身体を揺らしている。　2	拍感覚：3 速度：3 階名唱で弾ける。
M児 Bグループ (自分なり)	・誘いかけに素直に応じないこともあるが，友達と一緒に表現することは好む。　3	・声に出して自分なりに歌う。3 ・友達の動きを模倣したり，自分なりのリズムで動いたりする。3	拍感覚：3 速度：3 階名がわかる。
F児 Cグループ (全体工夫)	・友達と一緒に歌ったり，踊ったりすることも楽しむようになってきた。　4	・特徴的な歌詞を覚えて歌う。4 ・楽曲に合わせて自分なりに動きをつくって踊ろうとする。　4	拍感覚：5 速度：4 階名がわかる。

本題材は，学習発表会での音楽発表に向けて，複数の楽曲をつないで音楽劇の活動をすることにより，友達と一緒に表現する楽しさを味わわせることをねらいとしている。楽曲があらわす情景から歌や歌に合った動きをつくったり，器楽発表をしたり，拍や速度感覚などの音楽的表現力も身につけたりする学習ができる。具体的な学習内容は，２，４，３拍子の拍感，速度を意識すること，交互唱を行うことである。

本題材の指導にあたっては，であう段階では，表現の見通しをもつために，キキへお祝いのビスケットと音楽を届けるストーリー（楽曲）に出会う。次にあらわす段階では，ストーリーに沿って各場面を複数の楽曲でつなぎながら表現していくために，地図や切り絵，歌詞のあらわす情景から友達とのかかわりが必然的に生まれる場を提示する。最後にまとめる段階では，合同クラスや学習発表会で本題材を発表するために，発表会の場を設定する。

取り扱う楽曲，及び配列は，学習内容である拍感，特に３拍子を感じさせるために，３拍子（まほうのうた）→２拍子（ビスケット・パンをやきましょう）→３拍子（まほうのうた）→４拍子（みんな音楽家）→４拍子（ルージュの伝言※器楽合奏曲）の順番で，ストーリーに合わせて提示する。また，交互唱の形態も一人一人の表現が明確になるために，ビスケット・パンの楽曲では４対４，２対２，一人ずつ順番，みんな音楽家では１対多など変化をつける。

＜まほうのうた＞ オーストリアのあそび歌



＜みんな音楽家＞ドイツ民謡

＜ビスケット・パンをやきましょう＞

佐倉智子作詞　　おざわたつゆき作曲

※子供の実態に合わせて，歌詞や旋律の一部を変更している。

(3) 目　標

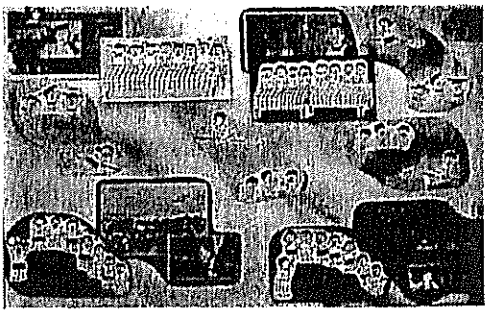
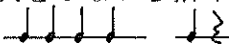
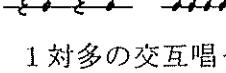
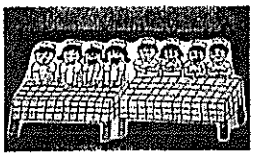
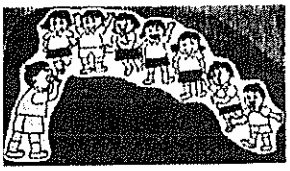
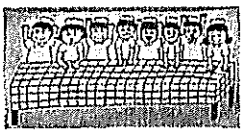
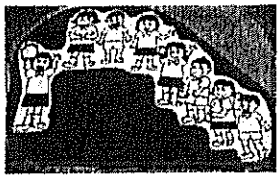
○　キキのお祝い会をするために，キキの家や森，パン屋や海などをめぐる音楽劇の活動をみんなで楽しく行うことができる。

Aグループ:自分なりに歌ったり，動いたり自分のパートを意識しながら楽曲の部分を演奏したりする。

Bグループ:拍や速度を感じて部分的に工夫しながら歌ったり，動いたり，演奏したりする。

Cグループ:速さの違いを歌や動きで工夫して表現したり，相手意識をもって演奏したりする。

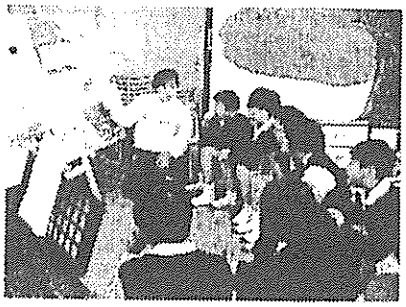
(4) 計　画（５時間）　※２時間は合同音楽

段階	活　動　と　内　容	支　　援	配時
で あう	１．キキへお祝いのビスケットと音楽を届けるというストーリーと楽曲に出会う。 (1) 手紙（ストーリー）を読んだ後，地図を見ながら楽曲を聞く。 ○ 手紙，楽曲，地図をつないでストーリーを知り，発表への相手・目的意識をもつこと (2) 拡大歌詞を見ながら歌う。 ○ 歌詞を知ったり，楽曲の拍や速度を感じること	○　キキのお母さんからの手紙，地図，楽曲，拡大歌詞の提示，歌のモデル演示 ＜提示する海が見える街への地図＞ 	1
あらわす	２．キキへお祝いするために，魔法のほうきに乗って，キキの家や森，パン屋や海をめぐる。 (1) 魔法のほうきに乗ってキキの家や森をめぐる様子を想い描きながら身体・歌唱・器楽表現をする。 ○ 表現の工夫をしながら拍や速度を感じること（  ） ○ ４対４，１対多の交互唱を行うこと ○ ジジからのメッセージ (2) 魔法のほうきに乗ってパン屋や海をめぐる様子を想い描きながら身体・歌唱・器楽表現をする。 ○ 表現の工夫をしながら拍や速度を意識すること（  ） ○ 順番に歌う，１対多の交互唱＋楽器 ○ ジジからのメッセージ	○　海が見える街への地図，切り絵の提示 ○　歌詞があらわす情景の絵や場の提示 ＜活動の様子をあらわす切り絵の提示＞ キキの家でビスケットをやく  森でウルスラに音楽を聞かせる  パン屋さんでパンをやく  海でキキに音楽を聞かせる  かかわりを促すジジからのメッセージ うめぐみのみなさんへ ～まだパンがやけていないよ。 ひとりひとりのちからをあわせてパンをやいてくれるかな。～	2 ① ① ※
まとめる	３．学習したことを合同クラス，学習発表会で発表する。 ○ 発表への期待感をもつこと ○ 友達と一緒に表現する楽しさの感得	○　ステージを使っての場面練習の設定 ○　海やキキなど，場面の情景がわかるような教具の提示 ○　保護者や交流学級児童を招待すること ○　表現を価値づける言葉かけ，拍手	2

(5) 指導の実際

① であう段階（1／5時間）

キキへお祝いのビスケットと音楽を届けるストーリーと楽曲に出会い，表現の見通しをもつ。

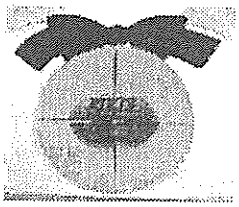
教師の支援	子供の活動
○ ストーリーを意識させるものの提示 ・お母さんからの手紙①　・地図 ・拡大歌詞・楽曲 ・範唱テープ	キキのお母さんからお手紙がきたことを知り，驚きや歓声をあげたりして喜びをあらわしている。地図の場所をあらわすキキの家や森，パン屋，海の絵を見たり，キキにお祝いのビスケットや梅組の音楽を聞かせてほしいという手紙の内容を聞いたりして「いいよ！」「みんなでキキに会いにいこう！」と話し合う姿が見られる。拡大歌詞を指さすと，歌詞を見ながらゆっくり歌う。歌詞と地図の絵を見比べる。  <手紙を喜び，地図を見る子供たち>

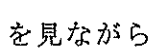
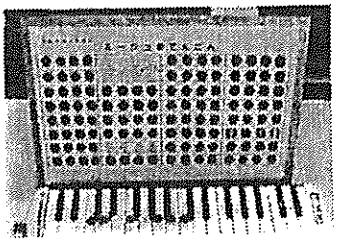
考察①

子供たちは，キキのお母さんからの手紙に驚きながらも，喜びの気持ちを声や態度にあらわし，「みんなでキキがいる海の見える街へいこう！」「お祝いのビスケットを焼いたり，音楽を聞かせたりしよう！」というみんなで表現する見通しと意欲をもつことができた。以上のような子供の姿から，子供たちが大好きな「キキ」が登場するストーリーと手紙や地図の提示が有効であったと考える。

② あらわす段階（2／5時間）

魔法のほうきに乗って，キキの家や森をめぐる様子を想い描きながら身体・歌唱・器楽表現をする。

教師の支援	M児の活動（Bグループ）	F児の活動（Cグループ）
○ 地図と切り絵，手紙②の提示 ○「みんなで力を合わせて大きなビスケットをやいてね。」というジジからのメッセージの提示 ○ 一緒の表現が生み出しやすい場・教具の提示 <2人乗りほうき> <4分割のビスケット>  <4分割のビスケット>	【地図の切り絵を操作する場面】 M1．再び手紙がきたことに驚き，うれしそうに聞いている。F児がはる切り絵をじっと見たり，指さす。 【まほうのうたの場面】 M2．最後の手拍子が合わないと魔法がかからない意味を知り，拍を強調した伴奏を聞きながら手拍子する。ほうきには，ペアの友達に声をかけられて，一緒に乗り喜んでいる。 【キキの家でビスケットをやく場面】 M3．4対4の交互唱において，写真付き拡大歌詞を見ながら「トントン」と歌う。伴奏に合わせて友達とビスケットをはっていく。 <ビスケットをはるM児>	【地図の切り絵を操作する場面】 F1．手紙②を聞いてすぐに「ビスケットをやいてあげよう！」「みんなでいこう！」とみんなに声をかけて教師が提示した切り絵を貼る。 【まほうのうたの場面】 F2．「みんなまるくなるよ！」などの声をかけ，大きな声で歌う。最後の手拍子をする時は，友達の顔と手を見ている。ほうきには，H児（Aグループ）に声をかけて一緒に乗り，空を飛ぶ動きをつくる。 <H児と一緒にほうきに乗るF児>

○ 写真付き拡大歌詞の提示 ○ ビスケットをやく場（キキの家の中）の設定 ○ ウルスラが住む森の場の設定 ○ 個の実態に応じた楽譜	【森で歌を聞かせる場面】 Ｍ４．自分が歌った後に，みんなが歌うこと（交互唱）を喜ぶ。 【ウルスラに合奏を聞かせる場面】 Ｍ５．色別で階名を示した楽譜と鍵盤ハーモニカに貼付した色別シートを見ながら，ファファファファなど４拍ずつ  のリズムで弾く。  ＜個に応じた楽譜＞	【キキの家でビスケットをやく場面】 Ｆ３．「ゆっくり，みんなで歌おう！」と速度の工夫をしながら歌や動きをつくる。 【森で歌を聞かせる場面】 Ｆ４．ピアニカを弾く動きをみんなの前でして，交互唱をする。 友達の歌は聞いていない。 【ウルスラに合奏を聞かせる場面】 Ｆ５．ウルスラの絵を示すと「ウルスラ，聞いてね！」と元気に声をかけて鍵盤ハーモニカに向かう。階名を書いた楽譜を見ながら楽譜通りに弾く。

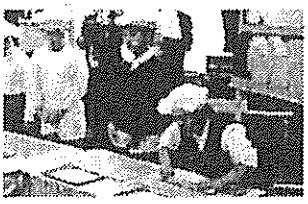
考察②

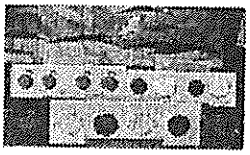
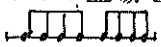
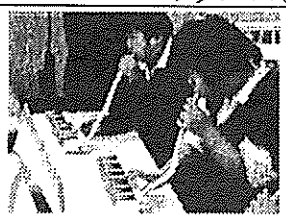
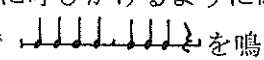
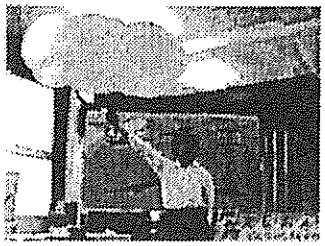
魔法のほうきに乗ってキキの家や森をめぐったり，ビスケットをやく歌を歌ったり，森の場で歌や合奏をウルスラに聞かせたりする中で，友達とかかわりながら身体・歌唱・器楽表現を行うことを喜んだり，拍や速度を感じた表現の工夫がみられた。M児においては，みんなで手拍子を合わせようとする姿（Ｍ２），交互唱の場では自分対みんなで歌うことで，歌の応答を楽しむ姿（Ｍ３）が見られた。Ｆ児においては，手拍子を合わせるために円陣になろうと声かけする姿（Ｆ１），大きなビスケットをみんなで力を合わせてやくために，「ゆっくり歌おう！」と提案し，速度の工夫をしながら歌ったり，動きをつくったりする姿（Ｆ２）が見られた。

これらの子供の姿から，拍を感じさせるような伴奏，自分のパートや交互に歌うことが意識できる写真付き拡大歌詞の提示，２人乗りほうきや，４分割ビスケットなど友達とのかかわりを生み出しやすい教具が有効であったと考える。

③　あらわす段階　（３／５時間）

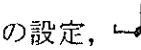
魔法のほうきに乗って，パン屋や海をめぐる様子を想い描きながら身体・歌唱・器楽表現をする。

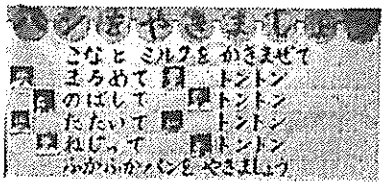
教師の支援	M児の活動（Ｂグループ）	Ｆ児の活動（Ｃグループ）
○ 地図と切り絵，手紙③ ○「一人一人の力を合わせてパンを早くやいてね。」というジジからのメッセージの提示 ○ 一人一人の表現がわかりやすい場・教具の提示 ○ パンをやく場の設定	【まほうのうたの場面】 Ｍ１．手拍子が合わないと「もう１回！」とすぐに声をかける。みんなで手拍子を合わせようと「ホ，ホ！」と大きな声で最後の部分を歌う。 【パン屋でパンをやく場面】 Ｍ２．「のばして」を聞いて「トントン」と鳴らす。３回目から拍や速度が合う。  ＜順番を意識して表現するM児＞	【パン屋でパンをやく場面】 Ｆ１．「まるめて」の歌詞に合う動きを歌いながらつくる。ジジからのメッセージを示すと「みんないそごう」と呼びかけ，速く歌おうとする。 ペアのＨ児に「トントン」と声をかける。Ｈ児もＦ児の声かけや伴奏を聞いて「トントン」と鳴らす音が合っていく。 ＜Ｆ児の促しに応じるＨ児＞

○ 写真付き拡大歌詞の提示 ○ 海，雲などの情景絵，空をとぶキキの提示 ○ 個の実態に応じた楽譜，リズム絵譜の提示  <リズム絵譜>	【海で歌・楽器を聞かせる場面】 M３．カスタネットを選び，自分のパートが写真で示された拡大歌詞を見ながら歌ったり，鳴らしたりする。 【キキに合奏を聞かせる場面】 M４．キキの登場を喜ぶ。楽譜を見ながら  のリズムをひく。  <楽譜を見ながら演奏するM児>	【海で歌・楽器を聞かせる場面】 Ｆ２．友達に呼びかけるように歌う。 マラカスで  を鳴らす。  <海でマラカスを聞かせるＦ児> 【キキに合奏を聞かせる場面】 Ｆ３．リズム絵譜を見ながら友達と動きをつくってタンブリンを鳴らす。

考察③

魔法のほうきに乗り，パン屋や海をめぐるストーリーに沿って，友達と楽しく，拍や速度を意識しながら工夫して身体・歌唱・器楽表現できたと思われる。手拍子が合ったことを喜ぶ姿（Ｍ１），「いそいでやろう！」と速度を工夫していく姿（Ｆ１），写真付き拡大歌詞や友達の促しにより，「トントン」の速度が速くなっても合う姿（Ｍ２，Ｆ１のH児）が見られた。海の場では好きな楽器を選んでリズム打ちをする姿（Ｍ３，Ｆ２），キキへ合奏を聞かせる場では，楽譜，リズム絵譜を見ながら真剣に演奏する姿（Ｍ４，Ｆ３）が見られた。特にＭ４は のリズムを意識して弾いている。

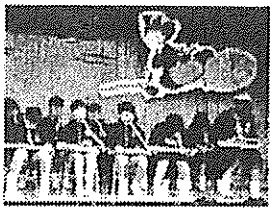
これらの子供の姿から，拍を意識して表現したのは，３拍子を間に入れた楽曲の配列の仕方，写真付き拡大歌詞の提示，速度の工夫ができたのは，「早くパンをやく」などの速さを意識させるジジからのメッセージの提示や一人一人の力を合わせて出来上がるパンや場の設定，  のリズムを意識して器楽表現できたのは，ウルスラやキキへなど繰り返し発表場面があるストーリー，個に応じた楽譜の提示が有効であったと考える。



<写真付き拡大歌詞>

④ **まとめる段階**（４，５／５時間）

学習したことを合同クラス，学習発表会で発表する。

教師の支援	子供の活動・考察
○ 学習発表会の場の設定 ○ 参観者の招待 ○ キキの提示 ○ 参観者の応援，言葉かけ	合同音楽の時間に，他クラスの友達へ学習した楽曲をストーリーに沿って紹介した。学習発表会では，キキや参観者が沢山来てくれたことを喜び，張り切って演奏した。Ｆ児は，交流学級の友達に音楽を聞いてもらえたこと，お礼の手紙をもらったことで，発表したことへの満足感を味わうことができた。  <学習発表会の様子>

５．全体考察

意欲的に表現したり，「聞かせよう」という気持ちを特殊学級内の友達だけでなく，交流学級の友達にも広げたりできたのは，相手・目的が明確で繰り返し発表場面をもつストーリーによるものである。また，拍を意識したり速度を工夫して表現したりできたのは，楽曲の選定及び配列，場面ごとに友達とかかわる必然があるメッセージや教具，個の実態に応じた楽譜が有効であった。この音楽劇の活動を通して，子供たちはみんなで表現する楽しさ＝伝え合う喜びを感じることができたと考える。

友達と運動する楽しさを味わう体育科学習

～　スポーツレクリエーションにつながるゲームづくりを通して　～

障害児教育研究部　　舛　元　俊　文

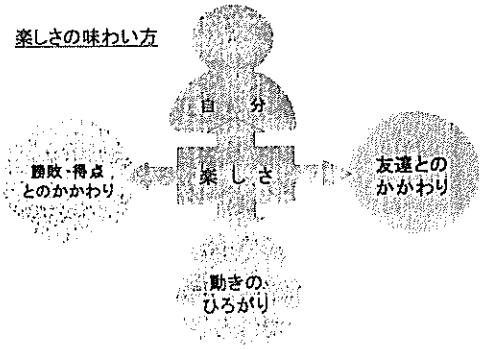
１．主題の意味

(1) 友達と運動する楽しさを味わうとは

友達と運動する楽しさを味わうとは，相手チームの友達と得点を競い合ったり，同じチームの友達と協力し合ったりする中で，動きを広げたり高めたりする心地よさを感じることである。

ここでいう運動する楽しさとは，①自分自身の技能の向上に向けられる心地よさ，②一緒に運動する友達とのかかわりにより生ずる心地よさ，③勝敗や得点に向けられる心地よさ，の３つである。

具体的には次のようなものである。



①　「ボールを上手にうつことができた」「○○ができた」など，動きの広がりや高まりに対する心地よさ

②　「○○君と一緒に運動できて楽しかった」「○○さんがパスをしてくれてよかった」などの，友達と一緒に運動できたことに対する心地よさ

③　「ゲームに勝つことができてよかった」「たくさん得点できて楽しかった」などの，勝敗や得点を意識して運動できたことへの心地よさ

以上のように動きの広がり，友達とのかかわり，きまりという３点からとらえているが，子供の興味・関心，運動技能，人とのかかわり方，きまりの理解力といった実態に応じて様々である。自分と友達とのかかわりから心地よさを感じたり，友達とのかかわりと勝敗の両方から心地よさを感じたり，自分・友達・勝敗や得点とのかかわりで心地よさを感じたりと，多様な広がり方があると考える。このような心地よさを感じることで，ゲームを楽しむ上で必要な基礎的技能や，集団参加能力，勝敗や得点方法などのきまりの理解力を育てることにつながる。そうすることで，運動に対する興味・関心を高め，これから先の生活の中に運動を取り入れ、地域や職場でのレクリエーションに参加し運動を通して人とのかかわりを広げたり，余暇の利用に運動を取り入れたりすることができると考える。

(2) 具体的なめざす子供の姿

具体的に興味・関心をもち，友達と運動する楽しさを味わう子供の姿を次のように考える。

①　道具や用具に働きかけながら，「こんどは○○ななげかたをしよう」「○○なうち方ができるようになった」と動きを広げている姿

②　「○○ちゃんいっしょにしよう」と友達を誘ったり，「うんいいよ」と友達からの誘いを受け入れたりしている姿

③　「ゴールしてうれしかった」と得点したことを喜んでいる姿

④　「ゴールをねらって○○なうち方をしよう」ときまりとのかかわりで動きを広げている姿

⑤　友達に「○○ちゃんパス」とパスをしたり，「なげて」と指示したりしている姿

⑥　「そっちをまもって」と友達に声をかけて役割分担をしたり，「向こうにうって」と方向を指さして教えたりして協力している姿

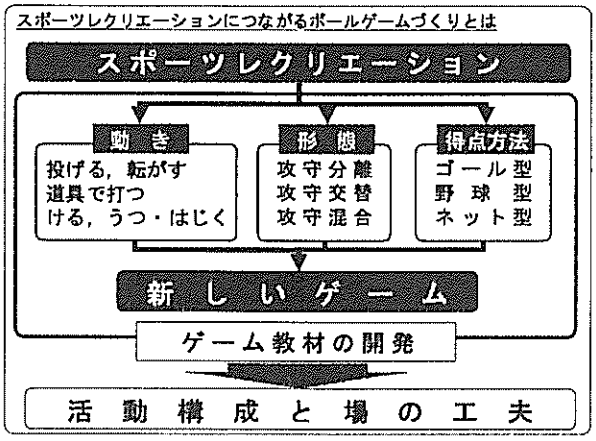
⑦　相手と対戦し，得点方法やきまりを意識し「○○ちゃんとしてかってうれしかった」と友達と競い合っている姿

(3) 体育科で培う力

以上のような姿を具体化することで、運動する楽しさを味わうことができると考える。そうすることで，繰り返しゲームに取り組むことができる。その結果，かかわる力や生活する上で必要な体力をも身につけることができ、実際の生活に生きて働く力を培っていく上で意義深いと考える。

2．副主題の意味

「スポーツレクリエーションにつながるボールゲームづくりを通して」とは，子供たちが余暇活動，地域や職場でのレクリエーションなど，現在及び将来出会うであろうスポーツレクリエーションに参加できる力を身につけることができるようにするために，子供たちの実態に応じたゲームをつくり，活動構成や，場の工夫を行っていくことである。



ここでの「ゲームづくり」とは，スポーツレクリエーションを，動き・形態・得点方法といった視点から分析し，子供の実態を考えながらスポーツレクリエーションに参加できる力が身に付くようにつくり直していくことである。

活動構成と場の工夫とは，友達と運動する楽しさを味わえるように，１時間毎に人数や得点方法を変化させ，友達と協力しながらできることが広がっていくような場の工夫を行い，繰り返し子供たちに取り組ませ，友達と運動する楽しさを味わわせていくことである。

3．　活動づくりの具体的な方途

具体的に，子供たちがスポーツレクリエーションにつながる力が身に付くような活動づくりを①児童の実態の把握，②学習内容の設定，③教材化，④活動構成といった手順で行っていく。

(1) 児童の実態の把握　（詳しくは後述の児童の実態を参照のこと）

子供のゲームに対するかかわり方の実態を次のような観点から把握する。

○　どんな運動を経験しているのか，どのような運動に興味をもっているのか。（興味・関心）

○　どんな動きができるのか。（転がす・なげる・道具でうつ・ける・うつ・はじく）

○　どのくらいの人数と遊ぶことができ，どんな形態を意識できるのか。（形態）

○　勝ち負けや得点方法などのきまりをどのくらい意識できるのか。（得点方法）

○　人に対する働きかけ方がどのくらいできるのか。（役割分担や協力）

(2) 学習内容の設定

子供たちがゲームを楽しみながら動きを広げたり人とのかかわりを広げたり，きまりの理解を高めたりすることができるように，学習内容の設定を行う。

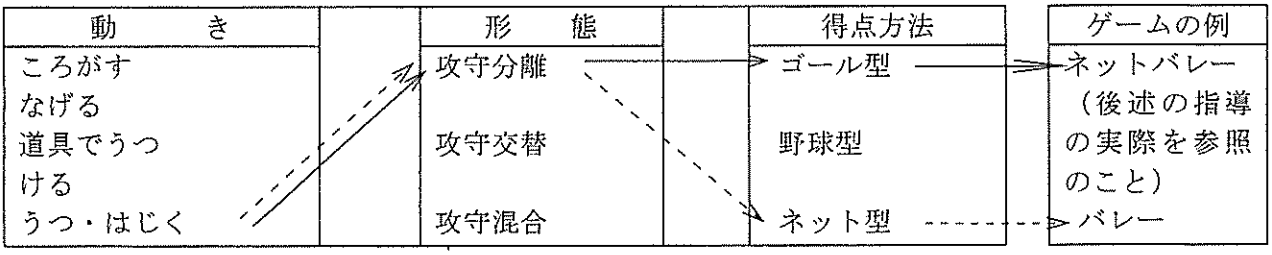
○　ゲームにかかわっていく中で，身につけさせたい動きが広がるようにすること。

○　場の変化に伴い，人とのかかわりを意識し，役割分担したり協力したりしながら活動すること。

○　手順や得点方法といったきまりを意識しながら活動すること。

(3) 教材化にあたって

教材化にあたっては，子供たちが現在及び将来出会うであろうスポーツレクリエーションを，地域や職場での余暇時間やスポーツ施設を利用するときに行うスポーツであり，統一ルールにこだわらず，プレイヤーに合わせて，道具や用具きまりを変えながら行うものとし，動き・形態・得点方法から具体的に次のように新しくつくり変えていく。



動　き：子供たちの実態を捉え，どんな動きができるのか，スポーツレクリエーションを生活のなかに取り入れていけるようにするためには，どんな動きを身につけないといけないかを明らかにし，バレーボールであれば，その基礎となるうつ・はじくという動きを身につけることができるようにつくり直していくことである。

形　態：バレーボールであれば，形態は攻守分離であり，その形態を意識できるように中央に区切りをつけたりして，分かれてゲームができるように工夫しつくり直していく。

得点方法：子供たちの実態からどんな得点方法であれば意識できるのか，勝ち負けを意識できるんかを把握し，ゴール型かネット型かを決めつくり直していく。

(4) 活動構成について

運動対象とのかかわりを広げていくことができるように，「であう」「ひろげる」「いかす」の３段階で構成する。具体的には次の通りである。

○　であう段階

ゲームに出会い，体験を通して課題を意識させたり，学習への目的意識をもたせたりして，学習への意欲を引き出すことをねらう段階。

○　ひろげる段階

ゲームを通してきまりを意識したり動きが広がるような場の変化を体験し，変化した場に応じた動きをゲームに生かす体験を繰り返し行わせる。その中で，ゲーム１として子供たちの実態に応じて形態を工夫し，各グループごとに活動し，身につけさせたい動きが引き出せる場での活動を位置づける。そのゲーム１のなかで，スポーツレクリエーションの基礎となる動きを道具や用具に働きかけて広げたり，人にかかわって広げたり，きまりを意識することで広げたりした動きを取り上げ，価値づけして意識させる。その体験をもとに，ゲーム２として，取り上げた動きを強化できるような声かけや動作援助を行いながらゲームを行い，繰り返し取り組ませて動きを広げることをねらう段階。

○　いかす段階

学習してきた人への働きかけ方を他学年の友達など対象が変化したゲームの中や，実際の生活の中で生かすことで，達成感・成就感を味わう。

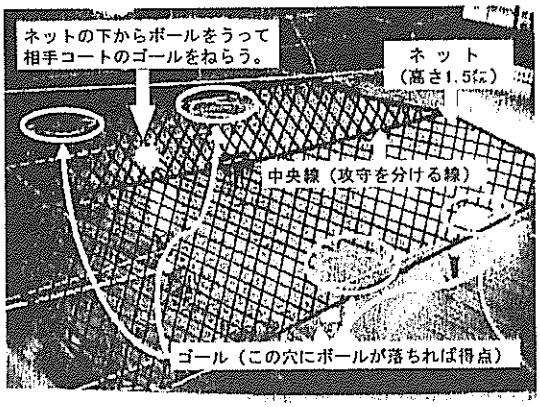
	であう段階	ひろげる段階	いかす段階
活動内容	１．新しいゲームを体験する。 ○　新しいゲームへの関心・意欲 ○　新しいゲームの体験・手順や方法などゲームのやり方の理解	２．きまりを意識し，変化した場に応じて動きを広げながら繰り返しゲームをする。 ○　場の変化に応じて動きを広げること ゲーム１ 場の変化に応じて動きを広げる活動 ⇔ 繰り返し 動きの取り出しによる強化 ⇒ ゲーム２ 友達と協力し強化した動きを生かす活動	３．学習してきたことを生かして楽しくゲームをする。 ○　学習の場で身につけた動きを生かす。 ○　生活の場で，身につけた動きを生かす。
支援	・ゲームをする場の設定 ・ゲームのやり方や，得点方法といったきまりのモデル演示や体験 ・多様な人への働きかけ方の体験	・きまりを意識し、友達と協力しながら活動できるような場の設定 ・動きを広げることができるような場の設定 ・友達と協力し，動きが広がるような場の変化 ・友達と協力して運動できるような声かけや動きのモデル演示	・他のクラスの友達や他の団体に紹介し，友達を誘うことができる合同体育の時間の設定 ・生活の場での個に応じた働きかけ

４．指導の実際と考察

(1) 題材名

第５・６学年梅組「ネットバレーボール」をしよう

(2) 本題材の考え方



① 「ネットバレーボール」については，バレー型のスポーツレクリエーションに参加できる力を身につけることができるようにするため動きをうつ・はじくにし，空中にあるボールをなかなか意識できない子供の実態から，ネットを張りボールが落ちないようにした。形態は攻守分離とし，得点方法はゴール型とし，ネットに穴をあけて意識できるようにした。ルールは２つのコートに分かれお互いが向かい合い，ネットの上をとんだり，転がったりしてくるボールをうち合いゴールに入れ合うゲームである。使用するボールは直径約 30 cmのビーチボールで，ボールをうち合っている中で，とんできたボールをうち返せずに，ゴールに入ってボールが落ちてしまったら負けでゴールに入れた方の得点になる。ゲーム時間を３分とし，時間内にたくさん点をとった方が勝ちという攻守分離型のゲームである。このゲームを行うことで，空中にあるボールなどを意識する力がつき，バレーボールやバトミントンなどの，スポーツレクリエーションの基礎となる動きが身に付くようなゲームを設定した。

② 指導内容について

	せめる動き	まもる動き	人とのかかわり	きまりの理解
Ⅰ	ボールを下から上につく。	ボールが止まってから追いかける。	教師に促されて友達の声かけを受け入れる。	教師の声かけを受けながら勝敗をうけいれる。
Ⅱ	ボールが止まってからうつ。	転がっているボールを追いかける。	教師に促されて友達に声をかけようとする。	声かけを受けて，得点方法を意識する。
Ⅲ	動いているボールをうつ。	とんでくるボールを見て追いかける。	ボールを意識した声かけをする。	自分で得点方法を意識する。
Ⅳ	ゴールを意識してねらってうつ。	ゴールを意識して守る。	ボールやゴールを意識した声かけをする。	友達に得点を意識させる声かけをする。
Ⅴ	相手やゴールを意識してうつ。	ジャンプして止めようとする。	ボールや守る場所を意識した声かけをする。	自分できまりを工夫する。

③児童の実態について

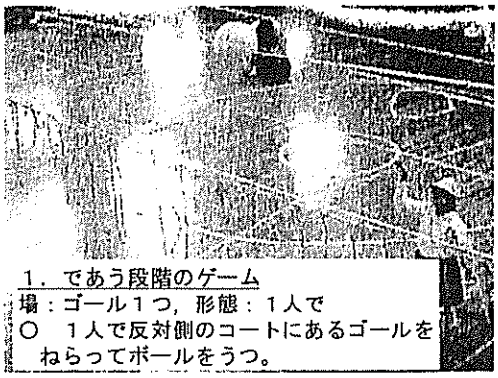
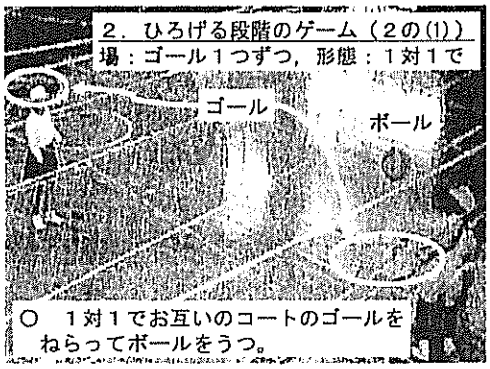
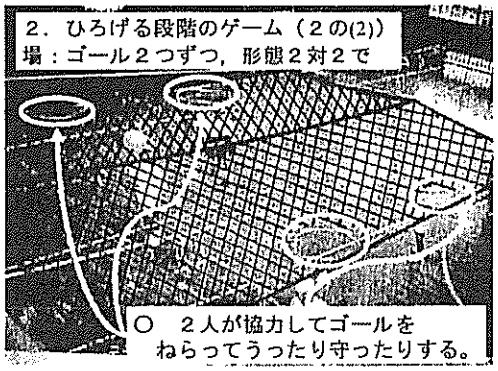
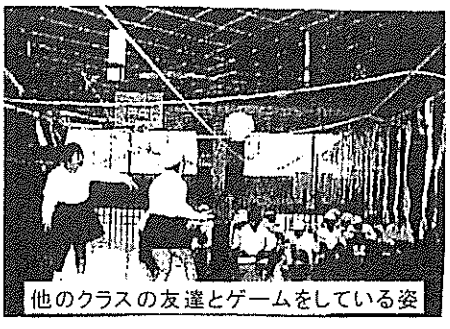
	動き	人とのかかわり	きまりの理解
A 児 A ｸﾞﾙｰﾌﾟ	ﾎﾞｰﾙが止まってから追いかけてつくようにしてうつ。友達の声かけを受けて守る場所を変えたりｺﾞｰﾙを意識したりする。（Ⅰの段階）	教師に促されて，友達を誘ったりすることができる。自分から動きについて友達に声をかけることはほとんどない。（Ⅰの段階）	教師に促されて得点や勝敗を意識することができる。（Ⅰの段階）
B 児 B ｸﾞﾙｰﾌﾟ	動いているﾎﾞｰﾙを追いかけて，うとうとしたり，とんでくるﾎﾞｰﾙを止めようと移動したり，相手のｺﾞｰﾙを意識し方向を考えてうつことができる。（Ⅱの段階）	友達を誘ったり，教師の促しを受けて，友達に，守る場所を意識するような声かけをする。（Ⅱの段階）	自分で得点や勝敗を意識することができる。（Ⅱの段階）
C 児 B ｸﾞﾙｰﾌﾟ	とんでくるﾎﾞｰﾙの方向に動いて止めようとしたり，動いているﾎﾞｰﾙをうったり，相手のｺﾞｰﾙをねらってうつことができる。（Ⅲの段階）	友達を誘ったり，友達に守る場所を指示したりしながら守ることができる。（Ⅲの段階）	自分で得点や勝敗を意識することができる。（Ⅲの段階）

(3) 目　標

○ 手順や得点方法といった，簡単なきまりを守り，ボールをついて返したり，ゴールの位置が変わるという変化した場に応じて，動きを広げながらみんなで楽しくネットバレーボールをすることができる。

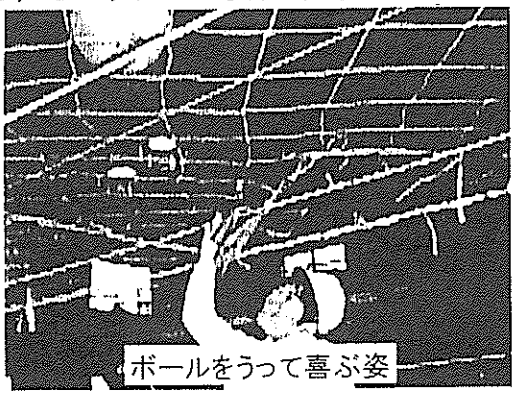
	せめの動き	まもりの動き	きまりの理解
Aｸﾞﾙｰﾌﾟ	ゴールを意識し，移動してうつことができる。	声かけを受けいれてゴールや同じチームの友達を意識して，守る場所を移動しようとすることができる。	得点方法や勝ち負けのきまりを意識することができる。
Bｸﾞﾙｰﾌﾟ	相手やゴールを意識し素早く移動してボールをうって返すことができる。	ゴールの位置や同じチームの友達を意識し，友達に声をかけながら分かれて守ろうとしたり，前後・左右に素早く移動したりすることができる。	得点方法や勝ち負けのきまりを理解することができる。

(4)計　画（５時間）

段階	学習活動と内容	配時
であう	１．ゴールが１つの場で「ネットバレーボール」を体験する。 ○　ゲームの手順や方法を知り，運動への目的意識をもつこと ※ゴールが１つの場で，１人でボールをうちながら，ゴールに入れるゲームを繰り返し行い，うち方や得点方法といったきまりを体験する。  １．であう段階のゲーム 場：ゴール１つ，形態：１人で ○　１人で反対側のコートにあるゴールをねらってボールをうつ。	１時間
ひろげる	２．場の変化に応じて動きを広げながら繰り返し「ネットバレーボール」をする。 (1) ゴールが１つの場で繰り返しネットバレーボールをする。 ○　１対１でボールをうち合い，うつ動きを広げながらゴールにボールを入れるという得点方法や相手と競いながら勝ち負けのきまりを知ること (2) ゴールが２つになるという変化した場で，２対２でゲームをする。 ○　お互いに，声を掛け合ったり，得点や勝ち負けを意識したり，友達と役割分担したりして，場に応じて動きを広げながら 繰り返しゲームをすること ※　ひろげる段階においては，ゲーム１とゲーム２といった活動構成の工夫を行い，ゲーム１では，１時間毎に変化する場でゲームを行い，変化した場に応じた動きを引き出し，その動きを取り出して価値づけを行う。その後でゲーム２を行い，ゲーム２のなかで，価値ある動きが広がるようにする。  ２．ひろげる段階のゲーム（２の(1)） 場：ゴール１つずつ，形態：１対１で ゴール ボール ○　１対１でお互いのコートのゴールをねらってボールをうつ。  ２．ひろげる段階のゲーム（２の(2)） 場：ゴール２つずつ，形態２対２で ○　２人が協力してゴールをねらってうったり守ったりする。	３時間 ① ② １時間
いかす	３．合同体育の時間に，「ネットバレーボール」をする。 ○　他の学年の友達に「ネットバレーボール」紹介し，友達を誘って自分たちが身につけた動きを生かし，教えながら楽しくゲームをすること  他のクラスの友達とゲームをしている姿 他のクラスの友達とゲームをしている姿	１時間

(5) 指導の実際

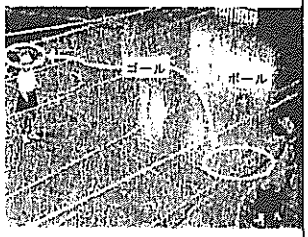
① であう段階（１／５時）ゲームにであい，学習への意欲を引き出すことをねらう段階

教師の支援	子　供　の　活　動
○ネットバレーボールの場の提示 ○直径約 30 cmのボールの準備 ○得点を意識できる透明な筒の準備 ○ボールをうつ動きのモデル演示 ○ゴールに入れるという得点方法の提示	全員の子供が，ネットの上にあるボールをうつ，ボールをゴールに入れる，ゴールに入れたら得点する，というゲームを行い，うつ動きや，得点方法などのきまりを体験した。子供たちは，ボールをついたり，はじいたり，うったりしながらボールをゴールに入れ，うったボールがとんでいくと喜んだり，ゴールにいれて喜んだりする姿が見られた。  ボールをうって喜ぶ姿

考察①

子供たちはネットバレーボールに出会い，興味を示し，楽しくボールをついたりはじいたりしながらうち，ゴールにボールを入れようとする姿が見られた。これは，子供たちが興味・関心をもって，運動に取り組もうとしている姿であると考える。このような子供の姿が具体化できたのは，子供たちが意識しにくい空中にあるボールを意識することができるようにネットを張りボールが落ちないようにするという場の工夫をし，ネットに穴をあけてゴールを作り，目で見て得点が分かるようにし，得点をとるという目的意識をもちやすくしたこと。子供たちが，ついたりはじいたりしながら打つことができるような直径約３０cmのボールを準備したことが有効に働いたと考える。

② ひろげる段階（２／５時）場の変化に応じて動きを広げながら繰り返し取り組む段階

教師の支援	A児の活動	B児の活動
○ゴールを１つずつにし，１対１でゲームができるような場の設定  ○うちかたの動作援助やモデル演示 ○うつ方向を意識でき うつ動きの動作援助	A１．ゲーム１では，下から手のひらでつき，ボールが真上にあがり，なかなか相手のコートにいかない。とんできたボールがネットの上で止まってからボールの所に移動している。 下から手のひらでうつA児 A２．ゲーム２では動作援助を受けて，少しずつ上からうとうとする。 ボールがきたよという声かけを受	B１．ゲーム１では，手を頭の上に振りかぶってうつ。ボールが上にあがらずに転がるようにして相手コートにいく。下から打ち上げるようなモデル演示を見て，ボールが少しずつ上がるようになる。 B２．うった後ボールがとんでいく方向をその場で見ている。 B３．ボールがとんできて転がっているときに，ボールの方に移動しようとする。ボールを見ながら守っている。ゲーム１の後の教師のうって下がるモデル演示を見てゲーム２では，うった後ゴールの方に移動しようとする。 B４．ボールがゴールに入ると「はいった」といいながらうれしそう

るようなゴールの位置や方向を促す声かけ	けてボールの所に移動しようとする。	に得点を入れにいく。 Ｂ５．勝敗を聞き勝ったことを喜んでいた。

考察②

１対１のゲームを行う中で，少しずつ動きを広げている姿が見られた。うつ動きについては，なかなか相手コートにいかなかったうち方から，動作援助を受けて上からうとうとする姿（Ａ１～Ａ２）や，手を振りかぶってうとうとする姿（Ｂ１）が見られた。これは動作援助を受けて，動きを広げている姿であると考える。また，とめる動きでは，うった後じっとしていた姿から声かけを受けて，移動しようとする姿（Ａ１～Ａ２）や，ゴールを意識して守ろうとする姿（Ｂ２）が見られた。これはネットに穴をあけることで広がった，ゴールを意識している姿であると考える。きまりに対しては，喜んで自分で得点をし意識する姿（Ｂ４）や勝ちを喜ぶ姿（Ｂ５）が見られた。このような子供の姿から，１対１でゲームをするという場を設定し，ゴールの穴をあけ，得点を意識できるようにし，勝ち負けを競いながら勝敗を意識できるようにしたこと，うつ動きやとめる動きを広げることができるような教師のモデル演示や動作援助を行ったこと，が有効に働き，子供たちが得点を意識し，場の変化に応じて動きを広げることができたと考える。

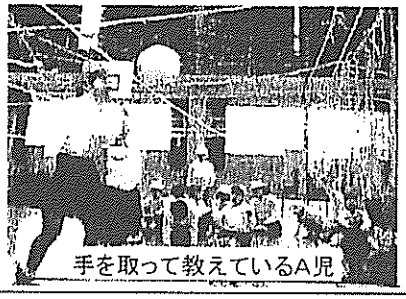
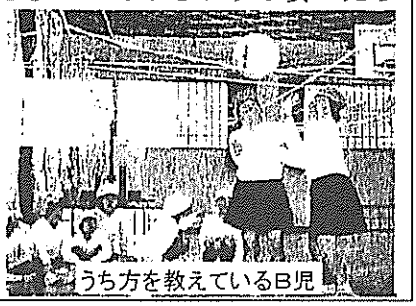
③　ひろげる段階（３～４／５時）さらに変化した場で変化に応じた動きを広げる段階

教師の支援	Ａ児の活動	Ｂ児の活動
○ゴールを２つにし，２対２で行う場の設定 ・ゴールを２つにしたこと ・１対１から２対２に変化させたこと ○２つのゴールを分担して守ることが意識できるようなモデル演示 ○友達に声をかけることが意識できるようなモデル演示 ○広がった動きの取り出し ○一緒にしたい友達を決めてゲームをする時間の設定	Ａ１．ゲーム１では，自分で手を振り上げて，相手のゴールの方を意識してうとうとする。 Ａ２．ボールが止まってからボールの方に動こうとする。 Ａ３．ゲーム２では，声かけを受けて，ボールのとんできた方に移動したり，ボールをうった後に，ゴールの方に戻って守ろうとする。 Ａ４．友達からの声かけを受けて，ゴールの方に下がって守ろうとする。 Ａ５．友達からの声かけを受けて，ボールの方に移動しようとする。 友達からの声かけを受けてうつA児 Ａ６．友達からの誘いを受け入れて一緒にゲームをする。	Ｂ１．ゲーム１では，ボールがきた方に素早く移動してうとうとする。 Ｂ２．両手を上に上げて守り，動いているボールにさわって動きをとめようとする。 Ｂ３．ゲーム２では，モデル演示を見て，２つのゴールを分担して協力して守ろうとする。 2人で分かれて守ろうとするB児 Ｂ４．友達にボールの位置を指さして教えながら，うつように声かけをする。 Ｂ５．友達にパスといいながらボールをうって渡す。 Ｂ６．一緒にゲームをしたい友達を決めて誘う。

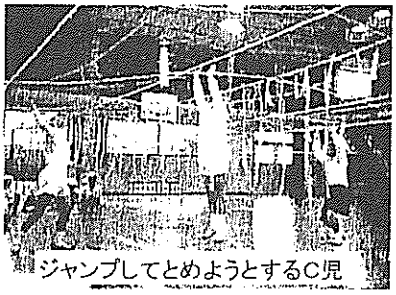
考察③

ゴールを２つにし，２対２で行うゲームの中で，うつ動きでは相手のゴールを意識しながらうつ姿（Ａ１）や，とんできたボールの方に素早く移動する姿（Ｂ１）が見られた。また，とめる動きでは，ボールが止まる前に動こうとしたり，両手をあげて守ろうとしたり，動いているボールにさわってとめようとしたりする姿（Ａ２，Ｂ２）が見られた。また，友達と役割分担して，２つのゴールを守ろうとしたり，声かけを受けてゴールの方に移動して守ろうとしたり，ボールの方向を指さして声をかけたりする姿（Ａ３・４・５，Ｂ３・４），友達にパスをする姿（Ｂ５）が見られた。これは２対２や，ゴールを２つにするといった変化に応じて，動きを広げている姿であると考える。友達の誘いを受け入れたり，一緒にする相手を誘ったりする姿（Ａ６，Ｂ６）も見られた。これは，友達とのかかわりで楽しさを味わっている姿であると考える。以上のような子供の姿からゴールを１つから２にするという場の変化を行いお互いが協力できるような場の工夫を行いお互いが守る場所を意識している姿や協力している姿をゲーム１で取りだしその動きを価値づけしゲーム２を行わせたこと，２人での守り方を意識できるようなモデル演示や声かけを随時行い，意識させたことが有効に働いたと考える。

④　**いかす段階**（５／５時）今まで身につけた動きを他の学年の友達とのゲームで生かす段階

教師の支援	子　供　の　活　動
○合同体育の時間に他のクラスの友達に，ゲームを紹介し，今まで身につけた動きを生かして一緒にゲームをする時間の設定	合同体育の時間に，他のクラスの友達にゲームを紹介し，友達を誘って一緒にゲームをする姿や，うち方などを教えてあげるような姿が見られた。  手を取って教えているA児  うち方を教えているB児

考察④


ジャンプしてとめようとするC児

子供たちは，他のクラスの子供たちを誘ったり，動作援助をしながらうち方を教えたりして活動する姿が見られた。このことから合同体育の時間に他のクラスの友達にゲームを紹介する時間を設定したこと，広がった動きをとりだし価値づけたことが有効であったと考える。また，Ｃ児はゲームを紹介する中で，ジャンプしてとめようとするバレーボールのブロックにつながる姿も見られ，バレー型の動きにつながるようなゲームをつくり，場の変化に応じて繰り返し取り組ませたことが有効に働いたと考える。

５．全体考察

【動きの変容を表す表】

	動　き　の　変　容			
A児	攻め	Ⅰ	⇒	Ⅲ
	守り	Ⅰ		Ⅱ
	人	Ⅰ		Ⅱ
	きまり	Ⅰ		Ⅲ
B児	攻め	Ⅱ		Ⅳ
	守り	Ⅱ		Ⅳ
	人	Ⅱ		Ⅳ
	きまり	Ⅱ		Ⅳ

子供たちはネットバレーに取り組む中で，とんでくるボールを意識したり，うったり守ったりする動きの高まりが，表にあるように見ることができた。このことから，次のようなことが有効であったと考える。うつという動きを広げ，人とのかかわりが広がるようなゲームをつくったこと。友達と運動する楽しさを味わえるようにするために，１対１から２対２となるような活動構成や場の工夫を行ったこと。子供の動きに対する動作援助や，モデル演示を随時行い，広がった動きをとりだし価値づけを行ったことが有効に働いたと考える。

— メ　モ —

おわりに

平成１０年１２月に新学習指導要領が告示されました。今回の改訂のポイントは，来る２００２年からの完全学校週五日制の下で，「ゆとり」ある，しかも「特色ある教育」を展開し，子供たちが自ら学び自ら考える「生きる力」を育成するということであります。そのために，授業時間の削減，教育課程の編成や運用の弾力化，「総合的な学習の時間」の新設などが示されました。その中でも，「総合的な学習の時間」の新設は，教育関係者に大きな期待と関心をもたらしています。まさに，各学校においては，「総合」という言葉が教育改善のキーワードとなっているといっても過言ではありません。しかし，「総合的学習」は「教科学習」と両輪をなし相互に補完し合ってこそ，その理念や指導の効果を発揮できるものであります。つまり，「教科」と「総合」の学習のそれぞれの特質と共存のあり方を探ることがこれからの大きな課題ではないでしょうか。

さて，本校では，学校教育が大きな変革の期にあることを踏まえ，「学校とは，生き方を創り夢を育てる場所である！」というメインスローガンを掲げ，今日の教育課題に対応すべきこれからの教育の在り方を求めて教育実践の推進を図って参りました。特に，本年度は，２００２年から新たに教育課程に導入される「総合的な学習の時間」を見据えて本校独自の総合的学習「あらつ学習」を試行してきました。そして，新しい時代の教育課程の在り方を展望して過年度から実施しています低学年「表現科」，中学年「生活環境科」，領域「人間」の新設教科・領域の学習においても，一部内容の見直しを図ったところです。つまり，「豊かな人間の育成」をめざすために，一子供と創る教科・総合的学習の展開一という研究の視点を明確にしながら，教科学習と総合的学習についての調和ある教育課程と子供主体の学習のよりよいあり方を希求するものです。また，本校では，帰国子女学級及び特殊学級を併設しています。一人一人の学習や生活への適応を図ると同時に，特性としての良さを生かすべく，個に応じたカリキュラムを作成し，その実践に取り組んでいます。

最後になりましたが，本校研究の推進に際しまして，共同研究という立場から懇切丁寧なご指導を頂きました福岡教育大学の諸先生方に深甚の謝意を表し，平成１１年度研究紀要を発刊するに当たっての挨拶といたします。

平成１１年６月

副校長　　倉吉　志米男

平成１１年度
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人

	＜大学教官＞		＜附小教官＞	
全　　体	奈須　正裕（国立教育研究所 主任研究官）		藏　源一郎（校　　長）	
	寺尾　愼一	山下　勲	倉吉志米男（副 校 長）	
			山下　浩徳（教　　頭）	
			樺島　穣（研究主任）	
国　語　科	前田　眞證	山元　悦子	伊藤　啓二	吉田　正樹
	中谷　雅彦		松藤　秀子	
社　会　科	中野　和光	小川亜弥子	猿樂　隆司	高野　誠一
算　数　科	山下　昭	飯田　慎司	加藤　英也	小森　晃
	山口　武志	清水　紀宏	柿添　泰利	塚本　斉
理　　科	中村　重太	宮脇　亮介	山下　浩徳	手島　宏樹
	田中　浩朗	森藤　義孝	野口　信介	大辻　祥二
生　活　科	寺尾　愼一		石田　耕一	
音　楽　科	平井　建二	岩崎　洋一	津本　修一	豊村　雅義
	木村　次宏			
図画工作科	吉井　宏		樺島　穣	舟倉れい子
表　現　科	吉井　宏	岩崎　洋一	樺島　穣	津本　修一
家　庭　科	柳　昌子	甲斐　純子	篠原　裕子	
体　育　科	相部　保美		笠　宏照	稲津　一徳
人　　間	林　忠幸	堺　正之	石硯　昭雄	矢野　俊次
	高田　清		堤　一浩	
総合的学習	寺尾　愼一		石田　耕一	手島　宏樹
			猿樂　隆司	高野　誠一
保　　健	照屋　博行		今村　由香	八尋　真弓
障害児教育研究部	山下　勲	昇地　勝人	舛元　俊文	坂田　佳美
	藤金　倫徳		早川　由洋	谷崎和一郎
			園田　洋一	

平成１０年度　附属福岡小学校転出教官

中原　浩（教頭・人間）	松本　良一（障害児教育・生活単元）	西原　敦子（障害児教育・音楽科）
武下　善則（障害児教育・国語科）	古賀　正広（図画工作科）	野中　慎治（特別活動）
平島　健二（国語科）	田上　麻紀（音楽科）	若浦　麻里（国語科）
杉野　紀子（養　護）		

タイトルメッセージⅡ

遙かなる呼び声に心を傾けながら

一筋の閃光を頼りに歩み出す

進みゆく今の自己を信じ

かけがえのない夢を求め願い

明日を生きる勇気と成す

真の学び舎とは

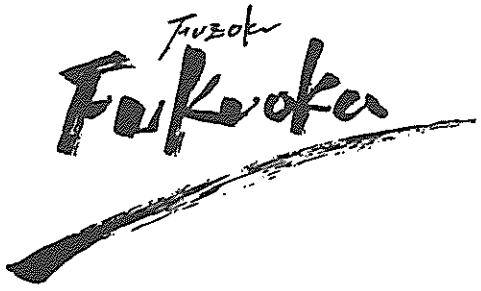
人の生き方を創り夢を育てる場所でありたい

（Y.Kabashima）

平成11年６月　印刷・発行
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
研究紀要 No.30

発行者　福岡教育大学教育学部
附属福岡小学校
〒810-0061　福岡市中央区西公園12番１号
TEL 092(741)4731㈹

印刷所　㈱ネオ・プリンティング
TEL 092(511)8941㈹


Fukuoka